



カスミサンショウウオとアズマヒキガエルの卵塊

名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物

レッドデータブック なごや2015

動物編

名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物

レッドデータブックなごや 2015

動物編

2015年4月

名古屋市

【 表紙写真 】

表：カスミサンショウウオとアズマヒキガエル（卵塊）（両生類）

千種区

（撮影 藤谷武史）

裏：カコウコモリグモ（クモ類）

港区稲永（庄内川河口） 2007 年 5 月 18 日 （撮影 緒方清人）

・ 表紙写真の解説

尾を振りメスを誘引しているカスミサンショウウオのオスと、アズマヒキガエルの卵塊。

両者が繁殖地として湿地を共有することは普通ですが、近年、名古屋市内の湿地では、個体の減少や環境の悪化が原因で両者が同じ場所で繁殖する光景が失われつつあります。

・ 修正について

平成 27 年 4 月 30 日に「レッドデータブックなごや 2015」を公表していますが、この冊子では字句等を一部修正しています。また、シロスジグモ（367 頁）は内容を差替えています。



発刊にあたって

名古屋市には、北西部の平野や、中央部の台地、東部の丘陵地など、それぞれの地域ごとに特色のある自然が残されており、そこには多様な野生生物が「互いにつながりあい」そして「バランスをとりながら」暮らしています。

しかし、長い間の人間の営みに伴う自然環境の変化などにより、以前は身近に見られた野生生物の中には、その数を減らし、絶滅のおそれが生じているものがあります。

昨年11月、名古屋で「持続可能な開発のための教育（E S D）に関するユネスコ世界会議」が開催されました。E S Dは、環境・経済・社会が調和した持続可能な社会を作るための「人づくり」を推進することを意味しています。

私たちは、環境・貧困・人権・平和・食料などさまざまな課題を抱えています。今生きている自分たちだけでなく、未来の子どもたちも安心して暮らせるまちの実現を目指し、この名古屋の豊かな自然環境や生きものを守り、次の世代に持続可能な形で引き継いでいくことは、私たちに課せられた責務でもあります。

名古屋市では、市内の野生生物の生息・生育状況について定期的に調査を行っています。平成16年(2004年)には、絶滅のおそれのある野生生物の分布状況や減少の要因などについてとりまとめた「レッドデータブックなごや2004」を発行し、平成22年(2010年)には補遺版を追加発行しました。そしてこのたび、最新の情報を反映させた改訂版として「レッドデータブックなごや2015」を作成しました。

本書を通してより多くの皆さまに名古屋に残された自然環境への理解を深めていただくとともに、多様な野生生物を守る身近な取組の輪を広げていくための一助となることを願っています。

本書の作成にあたり、ご協力、ご尽力いただきました名古屋市動植物実態調査検討会をはじめとする多くの関係者の皆さまに、厚くお礼申し上げます。

平成27年4月

名古屋市長 河村たかし

【 目 次 】

1. レッドデータブック作成の経緯及び目的	1
2. 調査の概要	3
(1) 調査体制	3
(2) 調査対象	4
(3) 調査方法	6
(4) レッドリストのカテゴリーと判定基準	8
3. 名古屋市版レッドリスト	11
4. 名古屋市の野生生物の現状	27
哺乳類	27
① 名古屋市における哺乳類の概況	27
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	29
③ レッドリスト掲載種の解説	31
凡例	31
絶滅 (E X)	32
絶滅危惧ⅠA類 (C R)	34
絶滅危惧ⅠB類 (E N)	45
絶滅危惧Ⅱ類 (V U)	47
準絶滅危惧 (N T)	49
情報不足 (D D)	51
鳥 類	55
① 名古屋市における鳥類の概況	55
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	59
③ レッドリスト掲載種の解説	60
凡例	60
絶滅危惧ⅠA類 (C R)	62
絶滅危惧ⅠB類 (E N)	64
絶滅危惧Ⅱ類 (V U)	71
準絶滅危惧 (N T)	86
情報不足 (D D)	107
は虫類	111
① 名古屋市におけるは虫類の概況	111
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	112
③ 参考文献	114
④ レッドリスト掲載種の解説	116
凡例	116
絶滅危惧Ⅱ類 (V U)	117
準絶滅危惧 (N T)	121

情報不足（DD）	122
両生類	125
① 名古屋市における両生類の概況	125
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	125
③ レッドリスト掲載種の解説	127
凡例	127
絶滅危惧ⅠA類（CR）	128
絶滅危惧ⅠB類（EN）	132
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	134
魚類	137
① 名古屋市における水域環境および魚類の概況	137
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	137
③ レッドリスト掲載種の解説	140
凡例	140
絶滅危惧ⅠA類（CR）	141
絶滅危惧ⅠB類（EN）	149
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	157
準絶滅危惧（NT）	163
情報不足（DD）	167
昆虫類	173
① 名古屋市における昆虫類の概況	173
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	176
③ レッドリスト掲載種の解説	177
凡例	177
絶滅（EX）	178
絶滅危惧ⅠA類（CR）	197
絶滅危惧ⅠB類（EN）	213
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	239
準絶滅危惧（NT）	263
情報不足（DD）	315
クモ類	335
① 名古屋市におけるクモ類の概況	335
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	336
③ レッドリスト掲載種の解説	338
凡例	338
絶滅危惧ⅠA類（CR）	339
絶滅危惧ⅠB類（EN）	345
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	348
準絶滅危惧（NT）	357

情報不足（DD）	365
カニ類	369
① 名古屋市におけるカニ類の概況	369
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	370
③ レッドリスト掲載種の解説	371
凡例	371
絶滅危惧ⅠB類（EN）	372
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	374
準絶滅危惧（NT）	378
貝類	383
① 名古屋市における貝類の概況	383
② 名古屋市における絶滅危惧種の概況	384
③ レッドリスト掲載種の解説	386
凡例	386
絶滅（EX）	387
絶滅危惧ⅠA類（CR）	391
絶滅危惧ⅠB類（EN）	418
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	426
準絶滅危惧（NT）	435
情報不足（DD）	467
【資料編】	471
1. 名古屋市の自然地理の概況	472
2. 名古屋市版レッドリストから削除された種	473
3. レッドデータブックなごや2015 動物編に関するQ&A	474
4. 文献一覧	475
5. 執筆者及び協力者	488
【索引】	491
索引（和名五十音順）	492
（1）哺乳類	492
（2）鳥類	492
（3）は虫類	493
（4）両生類	493
（5）魚類	493
（6）昆虫類	494
（7）クモ類	496
（8）カニ類	496
（9）貝類	496
索引（分類順）	498
（1）哺乳類	498

(2) 鳥 類	-----	498
(3) は虫類	-----	499
(4) 両生類	-----	499
(5) 魚 類	-----	499
(6) 昆虫類	-----	500
(7) クモ類	-----	502
(8) カニ類	-----	502
(9) 貝 類	-----	503

1. レッドデータブック作成の経緯及び目的

我が国は、昭和 40 年代に高度経済成長期を迎えて第 2 次産業が大きく発展し、人口は都市部に集中し、道路や鉄道の整備、住宅団地の建設等が盛んに行われるようになった。それとともに自然生態系が圧迫され、野生生物の生息・生育環境が改変されたり減少したりして、絶滅する種も生じるようになった。

このような現象に対応するため、国レベルで野生生物の絶滅のおそれのある種について調査が行われ、平成元年に(財)世界自然保護基金日本委員会と(財)日本自然保護協会が「我が国における保護上重要な植物種の現状」を、平成 3 年に環境庁(現環境省)が「日本の絶滅のおそれのある野生生物-脊椎動物編」及び「同-無脊椎動物編」を発行した。その後、平成 6 年に国際自然保護連合(IUCN)がより定量的な評価基準に基づく新たなカテゴリーを採択したことから、環境庁は平成 12 年以降、順次改訂版レッドデータブックを発行してきた。平成 18、19 年度には第 3 次レッドリストが、平成 24 年度には第 4 次レッドリストが公表されており、平成 26 年度からは順次レッドデータブックが出版されている。

国レベルでの情報の整備を受けて、各都道府県でも、その地域で絶滅が危惧される生物に関する情報の収集整理がなされ、地域版のレッドリストやレッドデータブックが作成されている。愛知県でも、第一次レッドリストの公表を経て、平成 13 年度にレッドデータブックがとりまとめられた。その後、第二次レッドリストの公表を経て、平成 20 年度には「レッドデータブックあいち 2009 植物編」及び「同動物編」が、平成 26 年度には「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」が公表されている。

名古屋市では、昭和 54 年から名古屋市環境影響評価指導要綱(平成 11 年から名古屋市環境影響評価条例に移行)を施行し、環境影響評価の手続きを円滑に進めるため、市内に生息・生育している動植物について調査を実施した。昭和 55 年に「名古屋市及び近隣に生息する動物に関する調査報告」と「名古屋市の植生自然度及び自然保護に関する調査報告」を、平成 5 年にその改訂版を作成している。

平成 12 年度からは、市内における動植物の生息・生育実態調査を実施し、平成 14 年 11 月に名古屋市版レッドリストを公表した。そして平成 16 年 3 月、名古屋市版レッドリストに掲載された種の分布の概要、生息地の環境、減少の要因などを個別に記述した「レッドデータブックなごや 2004 植物編」及び「同動物編」を発行した。

その後、全国的に野生生物の減少や生態系への影響が指摘されていること、野生生物の生息・生育環境に影響を及ぼす土地の改変などの様々な状況が変化していることなどから、平成 20 年度から生物調査を行い、平成 22 年 3 月に「名古屋市版レッドリスト 2010」を公表、平成 22 年 10 月に「レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-」を発行した。なお、このレッドリストから新たにカニ類や潮下帯の貝類が評価対象に追加された。

これらの見直しに続き、平成 24~26 年度の 3 ヶ年、専門家で構成する「名古屋市動植物実態調査検討会」を中心に、前回見直し後の生息・生育状況や生息・生育環境の変化等の最新の知見を収集し、検討を行うとともに、市民から意見を募集した。

そして平成 27 年 3 月に「名古屋市版レッドリスト 2015」を公表し、この度「レッドデータブックなごや 2015 植物編」及び「同動物編」を公表するものである。なお、今回から新たにコケ

植物が評価対象に追加された。

レッドリスト・レッドデータブックへの掲載は、捕獲規制等の直接的な法的効果を伴うものではないが、絶滅のおそれのある野生生物に関する理解を深めていただく基礎資料であり、各種開発事業の環境影響評価などに活用されることによって、野生動植物への配慮が適切になされることを目的としたものである。

なお、全国版レッドデータブック掲載種の中で特に保護の優先度が高い生物種は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」に基づく国内希少野生動植物種に指定され、保護が図られている。また、愛知県内に生息・生育する絶滅のおそれのある種で、特に保護を図る必要がある動植物は「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」に基づき、指定希少野生動植物種に指定されている。その他、国、あるいは各地方で文化財として重要な動植物は、「文化財保護法」等に基づく天然記念物に指定され、保護が図られている。

2. 調査の概要

(1) 調査体制

調査の実施に当たっては、平成24年度から野生動植物に関する専門の学識者を中心とした「名古屋市動植物実態調査検討会」において、調査対象動植物についての調査内容、評価等について検討を行った。

委員は担当分類群について協力者と連絡をとりながら情報を収集するとともに、検討会において調査・作業状況を報告し、意見交換を行った。

表1 名古屋市動植物実態調査検討会 委員名簿

担当分類群	委 員
維管束植物	せりざわ しゅんすけ 芹沢 俊介 (愛知教育大学名誉教授)
	とりい ちえこ 鳥居 ちゑ子 (愛知植物の会会員)
コケ植物	なりた つとむ 成田 務 (新城市鳳来寺山自然科学博物館学術委員)
哺乳類	のろ たつや 野呂 達哉 (名古屋市環境局生物多様性専門員 金城学院大学非常勤講師)
鳥 類	おがさわら あきお 小笠原 昭夫 (名古屋学芸大学短期大学部非常勤講師)
は虫類	やべ たかし 矢部 隆 (名古屋市環境局生物多様性推進参与 愛知学泉大学現代マネジメント学部教授)
両生類	ふじたに たけし 藤谷 武史 (名古屋市緑政土木局東山動物園業務技師)
魚 類	たにぐち ましのり 谷口 義則 (名城大学理工学部環境創造学科准教授)
昆虫類	たなか たきひこ 田中 多喜彦 (名古屋市高年大学鯉城学園講師)
クモ類	すが ひでふみ 須賀 瑛文 (日本蜘蛛学会会員)
カニ類	あまの いさお 天野 勲 (日本甲殻類学会会員)
貝 類	かわせ もとひろ 川瀬 基弘 (愛知みずほ大学人間科学部講師)

(2) 調査対象

① 哺乳類

哺乳類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

② 鳥 類

鳥類の種を単位とし、文献、調査記録等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び不定期または偶発的に記録される種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

③ は虫類

は虫類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。

④ 両生類

両生類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。

⑤ 魚 類

魚類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸水中（河川、池沼等）とした。また、汽水域に生息する種も対象とするため河口部も含めた。

⑥ 昆虫類

昆虫類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、干潟、河口部も含むものとした。

⑦ クモ類

クモ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、河口部も含むものとした。

⑧ カニ類

カニ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

⑨ 貝 類

貝類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、名古屋市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、名古屋市内の陸上及び陸水中とした。また、干潟、河口部も含むものとした。

(3) 調査方法

調査は、平成 24 年度から平成 26 年度にかけて、分類群毎に以下の方法により実施した。

① 哺乳類

調査対象種について、文献調査、現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

② 鳥 類

調査対象種について、文献調査等により生息状況の把握を行った。

・文献調査等

既存文献を収集し、生息場所、確認時期、個体数等の整理を行った。

複数の観察家による積年の調査資料（未公表）をできる限り収集して、市内各地の現状及び過去からの推移を詳しく知る手がかりとした。

③ は虫類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

④ 両生類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑤ 魚 類

調査対象種について、文献調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の

現状についても調査した。

⑥ 昆虫類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑦ クモ類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑧ カニ類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・文献調査

既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑨ 貝 類

調査対象種について、文献調査と現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・文献調査

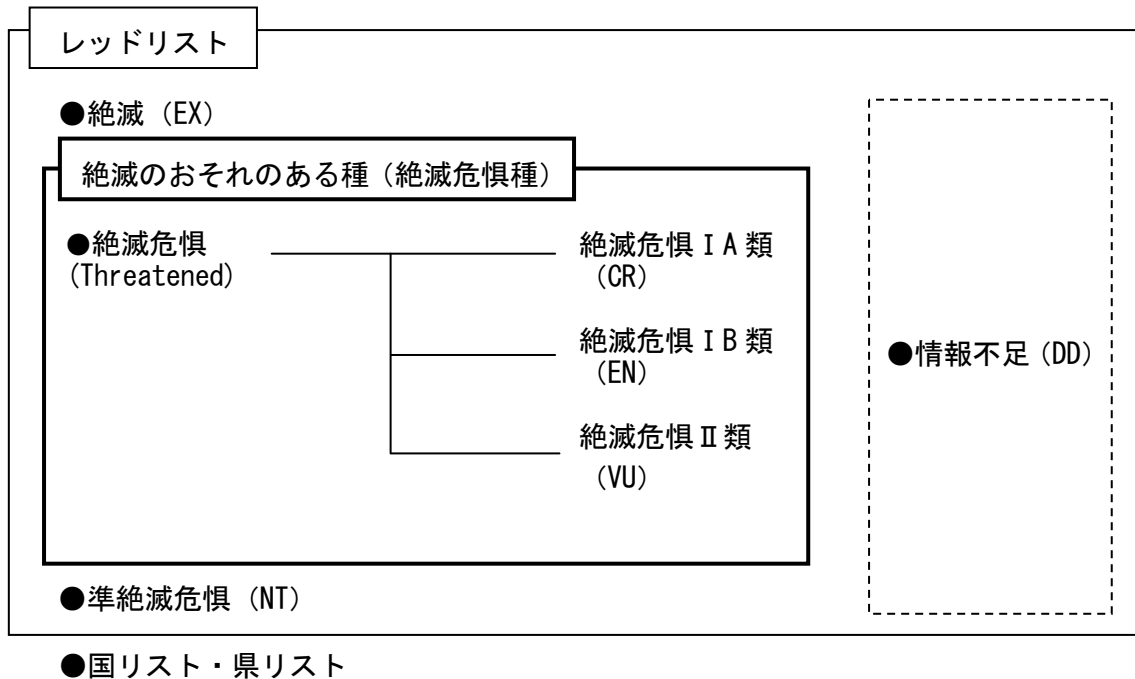
既存文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

(4) レッドリストのカテゴリーと判定基準

今回のレッドリストの見直しに用いたカテゴリーは次のとおりである。



各調査対象種の絶滅のおそれの程度について、表 2 に示す判定基準に従い、各調査対象種について収集された情報をもとに、名古屋市内の分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

「絶滅」の評価については、「過去に確実に生息・生育していた種」と判断する文献や標本の整備状況及び移動能力が分類群毎に異なることから、表 3 に示す要件により判定した。なお、カテゴリーのうち野生絶滅は、原産地や遺伝的混乱の防止体制に疑問があると思われる場合もあり、また個人的に管理されているものもすべて確認することも困難であると判断されたので、絶滅とあわせ、絶滅・野生絶滅として扱うこととした（ただし、表記上は絶滅 (EX) とした）。

表 2 動物に用いたカテゴリー（ランク）と判定基準

カテゴリー及び基本概念		定性的要件		
絶滅 Extinct (EX)	名古屋市ではすでに絶滅したと考えられる種。 野生では絶滅し、飼育下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種。	過去に名古屋市に生息していたことが確認されており、名古屋市において少なくとも本来の自然の生息地ではすでに絶滅したと考えられる種（飼育下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態では存続している種を含む）。 【確実な情報があるもの】 1 信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 2 信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。 【情報量が少ないもの】 3 過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。		
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 1 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 2 既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 3 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲圧にさらされている。 4 ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 5 それほど遠くない過去（30年～50年）の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
			絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 1 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 2 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 3 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲圧にさらされている。 4 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種。 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧Ⅰ類」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。	次に該当する種。 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 1 個体数が減少している。 2 生息条件が悪化している。 3 過度の捕獲圧による圧迫を受けている。 4 交雑可能な別種が侵入している。		
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種。	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧Ⅰ類のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。 1 どの生息地においても生息密度が低く希少である。 2 生息地が局限されている。 3 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 4 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。		
参考	国リスト	環境省レッドデータブック（2014）に掲載されているが、名古屋市において上記の要件に該当しない種。	—	
	県リスト	愛知県レッドリスト（2015）に掲載されているが、名古屋市において上記の要件に該当しない種。	—	

表 3 過去の生息種の要件

分類群	内 容
哺乳類	標本等の確実な生息記録がある種。
鳥 類	継続（経年的）確認記録がある種。ただし、迷行的に記録される種など一過性の種は除外。 なお、隣接する市町村での生息状況も加味。
は虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
両生類	標本等の確実な生息記録がある種。
魚 類	標本等の確実な生息記録がある種。
昆虫類	標本等の確実な生息記録がある種。なお、隣接する市町村での生息状況も加味。
クモ類	標本等の確実な生息記録がある種。ただし、調査記録は昭和 35 年以降。
カニ類	標本等の確実な生息記録がある種。
貝 類	標本等の確実な生息記録がある種。

3. 名古屋市版レッドリスト

名古屋市版レッドリストに掲載した種数は、表4のとおりである。

表4 名古屋市版レッドリスト掲載種数（動物）

カテゴリー 対象	絶滅 (EX)	絶滅のおそれのある種				準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	計	参考 国リス ト・県 リス ト
		絶滅 危惧 I A 類 (CR)	絶滅 危惧 I B 類 (EN)	絶滅 危惧 II 類 (VU)	小計				
哺乳類	2	11	2	2	15	2	3	22	0
鳥類	0	2	7	15	24	21	3	48	1
は虫類	0	0	0	4	4	1	3	8	0
両生類	0	5	1	2	8	0	0	8	0
魚類	0	8	8	6	22	4	6	32	0
昆虫類	19	16	26	24	66	52	19	156	2
クモ類	0	6	3	9	18	8	3	29	0
カニ類	0	0	2	4	6	4	0	10	0
貝類	4	27	8	9	44	32	3	83	0
計	25	75	57	75	207	124	40	396	3

① 名古屋市版レッドリスト（哺乳類）

目及び科の範囲と種の配列は原則として「The Wild Mammals of Japan」(SHOUKADOH Book Sellers, 2009)、「日本の哺乳類〔改訂2版〕」(東海大学出版会, 2008)に準拠した。

その他「Wilson & Reeder's Mammal Species of the World Third Edition」(<http://www.departments.bucknell.edu/biology/resources/msw3/>)を参照した。

絶滅 (EX)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	オオカミ	食肉(ネコ)	イヌ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	EX	EX	EX
2	ニホンジカ	偶蹄(ウシ)	シカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck			EX

絶滅危惧ⅠA類 (CR)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ニホンジネズミ	トガリネズミ	トガリネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck)			EN
2	キクガシラコウモリ	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)		NT	CR
3	ハタネズミ	齧歯(ネズミ)	キヌゲネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)		NT	EN
4	ニホンリス	齧歯(ネズミ)	リス	<i>Sciurus lis</i> Temminck		NT	CR
5	ムササビ	齧歯(ネズミ)	リス	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)		NT	CR
6	ニホンノウサギ	ウサギ	ウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck		NT	CR
7	アカギツネ	食肉(ネコ)	イヌ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus)			CR
8	ニホンテン	食肉(ネコ)	イタチ	<i>Martes melampus</i> (Wagner)		NT	CR
9	ニホンイタチ	食肉(ネコ)	イタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck			VU
10	ニホンアナグマ	食肉(ネコ)	イタチ	<i>Meles anakuma</i> Temminck		DD	CR
11	スナメリ	クジラ	ネズミイルカ	<i>Neophocaena phocaenoides</i> (G. Cuvier)		NT	CR

絶滅危惧ⅠB類 (EN)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ヒミズ	トガリネズミ	モグラ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck			EN
2	カヤネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)		VU	EN

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	コウベモグラ	トガリネズミ	モグラ	<i>Mogera wogura</i> (Temminck)		LP	VU
2	アカネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck)			VU

準絶滅危惧 (NT)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	タヌキ	食肉(ネコ)	イヌ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray)			NT
2	カモシカ	偶蹄(ウシ)	ウシ	<i>Capricornis crispus</i> (Temminck)			NT

情報不足 (DD)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	オヒキコウモリ	翼手(コウモリ)	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth)	VU	DD	
2	ニホンザル	霊長(サル)	オナガザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth)			DD
3	イノシシ	偶蹄(ウシ)	イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus			EX

②名古屋市版レッドリスト（鳥類）

目及び科の範囲、名称、配列については「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会，2012）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
(該当種なし)							

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	クロツラヘラサギ	ペリカン	トキ	<i>Platalea minor</i> Temminck et Schlegel	EN		CR
2	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	NT	繁殖 通過	EN NT CR

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ヨシゴイ	ペリカン	サギ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	NT	繁殖 通過	CR VU EN
2	ミゾゴイ	ペリカン	サギ	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	VU	繁殖 通過	EN NT EN
3	オオジシギ	チドリ	シギ	<i>Gallinago hardwickii</i> (Gray)	NT	繁殖 通過	CR VU VU
4	ツルシギ	チドリ	シギ	<i>Tringa erythropus</i> (Pallas)	VU	通過	EN EN
5	タマシギ	チドリ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	VU	繁殖 通過	EN VU VU
6	コノハズク	フクロウ	フクロウ	<i>Otus sunia</i> (Hodgson)		繁殖 通過	CR NT EN
7	フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas		繁殖 越冬	NT NT VU

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	トモエガモ	カモ	カモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	VU	越冬	VU VU
2	ヒクイナ	ツル	クイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	NT	繁殖 通過	VU NT VU
3	オグロシギ	チドリ	シギ	<i>Limosa limosa</i> (Linnaeus)		通過	VU VU
4	ホウロクシギ	チドリ	シギ	<i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus)	VU	通過	VU VU
5	タカブシギ	チドリ	シギ	<i>Tringa glareola</i> Linnaeus	VU	通過	EN VU
6	ウズラシギ	チドリ	シギ	<i>Calidris acuminata</i> (Horsfield)		通過	EN VU
7	ズグロカモメ	チドリ	カモメ	<i>Larus saundersi</i> (Swinhoe)	VU	越冬	EN VU
8	コアジサシ	チドリ	カモメ	<i>Sterna albifrons</i> Pallas	VU	繁殖 通過	EN NT VU
9	ハチクマ	タカ	タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	NT	繁殖 通過	VU NT VU
10	チュウヒ	タカ	タカ	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	EN	繁殖 越冬	CR VU VU
11	サシバ	タカ	タカ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU	繁殖 通過	VU NT VU
12	アオバズク	フクロウ	フクロウ	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)		繁殖 通過	EN NT VU
13	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	VU	繁殖 越冬	VU NT VU
14	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ	<i>Hirundo daurica</i> Laxmann			VU
15	コイカル	スズメ	アトリ	<i>Eophona migratoria</i> Hartert			VU

準絶滅危惧（N T）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	県2015	市2010
1	チュウサギ	ペリカン	サギ	<i>Egretta intermedia</i> (Wagler)	NT	繁殖 通過	国リスト NT
2	クイナ	ツル	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus		越冬	NT
3	カッコウ	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> Linnaeus		繁殖 通過	リスト外 NT
4	イカルチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius placidus</i> Gray et Gray		繁殖 越冬	VU NT
5	シロチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	VU	繁殖 越冬	VU NT
6	メダイチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius mongolus</i> Pallas			NT
7	セイタカシギ	チドリ	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus)	VU	繁殖 越冬	VU NT
8	ヤマシギ	チドリ	シギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus		越冬	NT
9	オオソリハシシギ	チドリ	シギ	<i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus)	VU	通過	VU
10	ダイシャクシギ	チドリ	シギ	<i>Numenius arquata</i> (Linnaeus)		越冬	VU
11	アカアシシギ	チドリ	シギ	<i>Tringa totanus</i> (Linnaeus)	VU	通過	VU
12	オバシギ	チドリ	シギ	<i>Calidris tenuirostris</i> (Horsfield)		通過	NT
13	コオバシギ	チドリ	シギ	<i>Calidris canutus</i> (Linnaeus)		通過	VU
14	ハマシギ	チドリ	シギ	<i>Calidris alpina</i> (Linnaeus)	NT	越冬	NT
15	エリマキシギ	チドリ	シギ	<i>Philomachus pugnax</i> (Linnaeus)		通過	VU
16	ミサゴ	タカ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus)	NT	繁殖 越冬	リスト外 NT
17	ツミ	タカ	タカ	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck et Schlegel)		繁殖 通過	リスト外 NT
18	ハイタカ	タカ	タカ	<i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus)	NT	越冬	国リスト NT
19	オオタカ	タカ	タカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	NT	繁殖 越冬	NT
20	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)		繁殖 越冬	NT
21	サンショウクイ	スズメ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	VU	繁殖 通過	国リスト NT

情報不足（D D）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	県2015	市2010
1	ウズラ	キジ	キジ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	VU	越冬	EN
2	シベリアオオハシシギ	チドリ	シギ	<i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth)	DD	通過	CR
3	ノジコ	スズメ	ホオジロ	<i>Emberiza sulphurata</i> Temminck et Schlegel	NT	繁殖 通過	CR NT

国リスト

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	県2015	市2010
1	ケリ	チドリ	チドリ	<i>Vanellus cinereus</i> (Blyth)	DD	繁殖 越冬	国リスト 国リスト

③名古屋市版レッドリスト（は虫類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
（該当種なし）							

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
（該当種なし）							

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
（該当種なし）							

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ニホンイシガメ	カメ	イシガメ	<i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel)	NT	NT	NT
2	ヒバカリ	有鱗	ナミヘビ	<i>Amphiesma vibakari vibakari</i> (Boie)			NT
3	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)		DD	VU
4	ヤマカガシ	有鱗	ナミヘビ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i> (Boie)		DD	NT

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	シマヘビ	有鱗	ナミヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie)			NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	クサガメ	カメ	イシガメ	<i>Mauremys reevesii</i> (Gray)			NT
2	ニホンスッポン	カメ	スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i> (Wiegmann)	DD	DD	VU
3	ニホンマムシ	有鱗	クサリヘビ	<i>Gloydus blomhoffii</i> (Boie)			

④ 名古屋市版レッドリスト（両生類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
(該当種なし)							

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	カスミサンショウウオ	有尾	サンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck et Schlegel)	VU	EN	CR
2	アカハライモリ	有尾	イモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie)	NT	DD	CR
3	ツチガエル	無尾	アカガエル	<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel)		DD	EN
4	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i> (Ito)	EN	VU	CR
5	シュレーゲルアオガエル	無尾	アオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i> (Gunther)			CR

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger			EN

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	アズマヒキガエル	無尾	ヒキガエル	<i>Bufo japonicus formosus</i> Boulenger			
2	トノサマガエル	無尾	アカガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell)	NT	国リスト	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
(該当種なし)							

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
(該当種なし)							

⑤ 名古屋市版レッドリスト（魚類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産野生生物目録-本邦産野生動物物の種の現状-（脊椎動物編）」（環境庁編,1993）に準拠した。標準和名および学名（目、科、種名）については、「日本産魚類検索 全種の同定 第3版」中坊編（2013）によった。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
（該当種なし）							

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	スナヤツメ類	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	<i>Lethenteron</i> spp.	VU	EN	CR
2	カワバタモロコ	コイ	コイ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	EN	EN	
3	ヤリタナゴ	コイ	コイ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	NT	CR	VU
4	トウカイコガタ スジシマドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Cobitis minamorii tokaiensis</i> Nakajima	EN	EN	CR
5	ホトケドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson	EN	EN	EN
6	アカザ	ナマズ	アカザ	<i>Liobagrus reini</i> Hilgendorf	VU	NT	EN
7	ドンコ	スズキ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)		EN	EN
8	トウカイヨシノボリ	スズキ	ハゼ	<i>Rhinogobius</i> sp. TO	NT	CR	

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ニホンウナギ	ウナギ	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	EN	EN	NT
2	カワムツ	コイ	コイ	<i>Candidia temminckii</i> (Temminck et Schlegel)			
3	ニシシマドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Cobitis</i> sp. BIWAE type B		VU	EN
4	カマキリ(アユカケ)	スズキ	カジカ	<i>Cottus kazika</i> Jordan et Starks	VU	EN	EN
5	ウツセミカジカ	スズキ	カジカ	<i>Cottus reini</i> Hilgendorf	EN	VU	EN
6	トビハゼ	スズキ	ハゼ	<i>Periophthalmus modestus</i> Cantor	NT	VU	
7	マサゴハゼ	スズキ	ハゼ	<i>Pseudogobius masago</i> (Tomiya)	VU	VU	
8	エドハゼ	スズキ	ハゼ	<i>Gymnogobius macronathos</i> Bleeker	VU	NT	

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ゼゼラ	コイ	コイ	<i>Biwia zezera</i> (Ishikawa)	VU	NT	VU
2	ドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> (Cantor)	DD	VU	
3	アユ	サケ	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i> (Temminck et Schlegel)			NT
4	シラウオ	サケ	シラウオ	<i>Salangichthys microdon</i> (Bleeker)		VU	
5	ミナメダカ	ダツ	メダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	VU	NT	VU
6	カワアナゴ	スズキ	カワアナゴ	<i>Eleotris oxycephala</i> Temminck et Schlegel		NT	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	タモロコ	コイ	コイ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i> (Temminck et Schlegel)			
2	ナマズ	ナマズ	ナマズ	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus			NT
3	スミウギゴリ	スズキ	ハゼ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i> (Rendahl)			
4	ウキゴリ	スズキ	ハゼ	<i>Gymnogobius urotaenia</i> (Hilgendorf)			VU

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	コイ(在来型)	コイ	コイ	<i>Cyprinus carpio</i> Linnaeus		DD	
2	ヌマムツ	コイ	コイ	<i>Candidia sieboldii</i> (Temminck et Schlegel)			
3	ウシモツゴ	コイ	コイ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	CR	CR	
4	カワヒガイ	コイ	コイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)	NT	CR	

5	サツキマス・アマゴ	サケ	サケ	<i>Oncorhynchus masou ishikawae</i> Jordan et McGregor	NT	DD	EN
6	クルマサヨリ	ダツ	サヨリ	<i>Hyporhamphus intermedius</i> (Cantor)	NT	DD	

⑥ 名古屋市版レッドリスト（昆虫類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁編，1995）を基に新しい知見を加え整理した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	コバネアオイトンボ	トンボ	アオイトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	EN	CR	EX
2	アオハダトンボ	トンボ	カワトンボ	<i>Calopteryx japonica</i> Selys	NT	国リスト	EX
3	ヒメイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Mortonagrion Hirose</i> Asahina	EN	EN	EX
4	キヒロヤマトンボ	トンボ	ヤマトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	NT	NT	CR
5	マダラナニワトンボ	トンボ	トンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	EN	EN	EX
6	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	CR	CR	CR
7	タガメ	カメムシ	コオイムシ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	VU	EN	EX
8	トゲナベバタムシ	カメムシ	ナベバタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	VU	EX	
9	カワラハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ	<i>Cicindela laetescripta</i> Motschulsky	EN	CR	EX
10	キバリマルクビゴミシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Nebria livida angulata</i> Banninger	EN	CR	CR
11	エチゴトクリゴミシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Oodes echigonus</i> Habu et Baba	NT		
12	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister chinensis</i> Motschulsky	VU	EN	EX
13	コガタノゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister tripunctatus lateralis</i> (Fabricius)	VU	EX	EX
14	マルガタゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	VU	EX	EX
15	スジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Hydaticus sator</i> Wewalka	EX	EX	EX
16	マダラシマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Hydaticus thermonectoides</i> Sharp	CR	EX	EX
17	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Zizina emelina emelina</i> (de l'Orza)	EN	EX	EX
18	オオウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Fabriciana nerippe</i> (C. Felder et R. Felder)	CR	EX	EX
19	ヒメヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	<i>Coenonympha oedippus arothius</i> Okada et Torii	EN	CR	EX

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ムカシヤンマ	トンボ	ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i> (Selys)			CR
2	オオキトンボ	トンボ	トンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	EN	CR	CR
3	コバンムシ	カメムシ	コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamatoris</i> (Scott)	EN	CR	CR
4	イトアメンボ	カメムシ	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	VU	VU	
5	カワラゴミシ	コウチュウ	カワラゴミシ	<i>Omophron aequale</i> Morawitz		NT	CR
6	フタモンマルクビゴミシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Nebria pulcherrima</i> Bates	EN	CR	CR
7	オオヒョウタンゴミシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Scarites sulcatus</i> Olivier	NT	VU	CR
8	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	<i>Canthydrus politus</i> (Sharp)	VU	NT	CR
9	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	NT	VU	CR
10	オオクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	VU	CR	CR
11	マメハンミョウ	コウチュウ	ツチハンミョウ	<i>Epicauta gorhami</i> Marseul			VU
12	ヨツボシカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Stenyrgrinum quadrinotatum</i> Bates	EN	EN	CR
13	オオシロカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Olenecamptus cretaceus cretaceus</i> Bates			CR
14	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	<i>Pelopidas jansonii</i> (Butler)		EN	CR
15	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	VU	VU	CR
16	ウラナミジャノメ	チョウ	タテハチョウ	<i>Ypthima multistriata nipponica</i> Murayama	VU	VU	CR

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus ogumai</i> Asahina	NT	VU	VU
2	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	NT	VU	VU
3	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Shaogomphus postocularis</i> (Selys)			EN
4	キヒロサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Asiagomphus pryeri</i> (Selys)	NT	NT	EN
5	エゴトンボ	トンボ	エゴトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)		VU	EN
6	キトンボ	トンボ	トンボ	<i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)		EN	EN
7	クツワムシ	バッタ	クツワムシ	<i>Mecopoda niponensis</i> (de Haan)			NT
8	ハウチワウンカ	カメムシ	グンバイウンカ	<i>Trypetimorpha japonica</i> Ishihara	VU		NT
9	アカジマアシブウンカ	カメムシ	アカジマウンカ	<i>Ommatidiotus japonicus</i> Y. Hori		NT	EN
10	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)		NT	EN
11	エサキアメンボ	カメムシ	アメンボ	<i>Limnoporus esakii</i> (Miyamoto)	NT	NT	EN
12	ホソハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ	<i>Cicindela gracilis</i> Pallas	VU	VU	EN

13	マダラコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	<i>Haliplus sharpi</i> Wehncke	VU	EN	EN
14	キボシチビコツブゲンゴロウ	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Motschulsky)	EN	NT	
15	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i> Motschulsky	EN	EN	
16	ガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	NT		VU
17	ヤマトモンシデムシ	コウチュウ	シデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	NT	VU	EN
18	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	DD	NT	EN
19	クロマダラタマムシ	コウチュウ	タマムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (E. Saunders)		VU	EN
20	ゲンジボタル	コウチュウ	ホタル	<i>Luciola cruciata</i> Motschulsky			EN
21	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル	<i>Luciola lateralis</i> Motschulsky			EN
22	マエジロツトガ	チョウ	ツトガ	<i>Pseudocatharylla infixella</i> (Walker)			
23	エンスイミズメイガ	チョウ	ツトガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu		DD	VU
24	オオチャバネヨトウ	チョウ	ヤガ	<i>Nonagria puengeleri</i> (Schawerda)	VU	NT	VU
25	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Argyronome laodice japonica</i> (Ménétrières)	VU	NT	EN
26	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Fabriciana adippe pallescens</i> (Butler)			EN

絶滅危惧Ⅱ類 (V U)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ベニイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Ceriagrion nipponicum</i> Asahina	NT	VU	EN
2	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i> (Selys)		EN	NT
3	ネアカヨシヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	NT	NT	VU
4	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	NT	EN	VU
5	タバサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus citimus tabei</i> Asahina	NT	国リスト	
6	チツゼミ	カメムシ	セミ	<i>Kosemia radiator</i> (Uhler)			VU
7	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki		NT	VU
8	ハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i> Thunberg			VU
9	クロホシコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	<i>Haliplus basinotatus latiusculus</i> Nakane	VU		
10	ルイスツブゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Laccophilus lewisius</i> Sharp	VU		
11	シマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringii</i> Clark	NT	NT	VU
12	コオナガミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp	VU	NT	VU
13	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	VU	VU	
14	ミツノエンマコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Onthophagus tricornis</i> (Wiedemann)			VU
15	ベーツヒラタカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Euplynes batesi</i> Harold			VU
16	ゴマフツトガ	チョウ	ツトガ	<i>Chilo pulveratus</i> (Wileman et South)	NT		VU
17	アヤコバナナミシヤク	チョウ	シャクガ	<i>Acasis bellaria</i> (Leech)			
18	ヌマベウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	<i>Chilodes pacificus</i> Sugi	VU		NT
19	ガマヨトウ	チョウ	ヤガ	<i>Capsula aerata</i> (Butler)	VU		NT
20	キスジウスキヨトウ	チョウ	ヤガ	<i>Capsula sparganii</i> (Esper)	VU	NT	
21	トビイロアカガネヨトウ	チョウ	ヤガ	<i>Euplexia albilineola</i> (Wileman et South)			NT
22	ミヤマセセリ	チョウ	セセリチョウ	<i>Erynnis montana montana</i> (Bremer)			VU
23	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Iratsume orsedice orsedice</i> (Butler)		NT	VU
24	イチモンジチョウ	チョウ	タテハチョウ	<i>Limenitis camilla japonica</i> Ménétrières			VU

準絶滅危惧 (N T)

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	セスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i> (Brauer)			
2	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Paracercion melanotum</i> (Selys)			NT
3	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Mortonagrion melanion</i> (Ris)	NT	NT	NT
4	サラサヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Sarasaeschna pryori</i> (Martin)			NT
5	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i> (Selys)			NT
6	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Anaciaeschna martini</i> (Selys)			NT
7	ナゴヤサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	VU	NT	NT
8	メガネサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Stylurus oculatus</i> (Asahina)	VU	NT	NT
9	トラフトンボ	トンボ	エゾトンボ	<i>Epithea marginata</i> (Selys)		NT	VU
10	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ	<i>Nannophya pygmaea</i> Rambur			NT
11	オオゴキブリ	ゴキブリ	オオゴキブリ	<i>Panesthia angustipennis spadica</i> (Shiraki)		NT	NT
12	ヒメカマキリ	カマキリ	ヒメカマキリ	<i>Acromantis japonica</i> Westwood			NT
13	ハネナシコロギス	バッタ	コロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i> (Matsumura et Shiraki)			
14	コロギス	バッタ	コロギス	<i>Prosopogryllacris japonica</i> (Matsumura et Shiraki)			NT
15	ヤマトフキバッタ	バッタ	バッタ	<i>Parapodisma setouchiensis</i> Inoue			NT
16	セグロイナゴ	バッタ	バッタ	<i>Shirakiacris shirakii</i> (Bolivar)			NT
17	ハネナガイナゴ	バッタ	バッタ	<i>Oxya japonica</i> (Thunberg)			DD
18	ナナフシモドキ	ナナフシ	ナナフシモドキ	<i>Ramulus mikado</i> (Rehn)			NT
19	トゲナナフシ	ナナフシ	トビナナフシ	<i>Neohirasea japonica</i> (de Haan)			NT

20	ハルゼミ	カメムシ	セミ	<i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)			NT
21	タイコウチ	カメムシ	タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i> Scott			NT
22	ミズカマキリ	カメムシ	タイコウチ	<i>Ranatra chinensis</i> Mayr			NT
23	シロヘリツチカメムシ	カメムシ	ツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	NT		DD
24	イグチケブカゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Peronomerus auripilis</i> Bates	NT		
25	マルチビゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Leiodytes frontalis</i> (Sharp)	NT	NT	
26	コウバツバゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Laccophilus kobensis</i> Sharp	NT		
27	キバシクロヒメゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	NT		
28	マルヒラタガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Enochrus subsignatus</i> (Harold)	NT		
29	オオミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> (Modeer)	NT	NT	NT
30	ヤマトエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	<i>Hister japonicus</i> Marseul			NT
31	ヒラタクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	<i>Serrogathus platymelus pilifer</i> (Snellen van Vollenhoven)			NT
32	コカブトムシ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Eophileurus chinensis chinensis</i> (Faldermann)			NT
33	ヒメボタル	コウチュウ	ボタル	<i>Luciola parvula</i> Kiesenwetter			NT
34	ヤマトヒメメダカカコウ ムシ	コウチュウ	カコウムシ	<i>Neohydnum hozumii</i> Nakane			DD
35	ヤマトオサムシダマシ	コウチュウ	ゴミムシダマシ	<i>Blaps japonensis</i> Marseul	NT		
36	ハイイロボクトウ	チョウ	ボクトウガ	<i>Phragmataecia castaneae</i> (Hübner)	NT	国リスト	
37	クワトゲエダシヤク	チョウ	シヤクガ	<i>Apochima excavata</i> (Dyar)	NT		
38	オナガミズアオ	チョウ	ヤママユガ	<i>Actias gnoma gnoma</i> (Butler)	NT	国リスト	
39	イボタガ	チョウ	イボタガ	<i>Brahmaea japonica</i> Butler			NT
40	ヤネホソバ	チョウ	ヒトリガ	<i>Eilema fuscodorsalis</i> (Matsumura)	NT		
41	キシタアツバ	チョウ	ヤガ	<i>Hypena claripennis</i> (Butler)	NT	国リスト	
42	フシキシタバ	チョウ	ヤガ	<i>Catocala separans</i> Leech			NT
43	コシロシタバ	チョウ	ヤガ	<i>Catocala actaea</i> Felder et Rogenhofer	NT		
44	マダラウスズミケンモン	チョウ	ヤガ	<i>Hylonycta subornata</i> (Leech)		DD	
45	ウスミモンキリガ	チョウ	ヤガ	<i>Eupsilia contracta</i> (Butler)	NT	国リスト	
46	ミスジキリガ	チョウ	ヤガ	<i>Jodia sericea</i> (Butler)	NT		
47	アトジロキリガ	チョウ	ヤガ	<i>Dioszeghyana mirabilis</i> (Sugi)			NT
48	ジャコウアゲハ	チョウ	アゲハチョウ	<i>Atrophaneura alcinous alcinous</i> (Klug)			NT
49	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	EN	国リスト	NT
50	ウラゴマダランジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Artopoetes pryori pryori</i> (Murray)			NT
51	ヒオドシチョウ	チョウ	タテハチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i> (Stichel)			NT
52	ジャノメチョウ	チョウ	タテハチョウ	<i>Minois dryas bipunctata</i> (Motschulsky)			NT

情報不足 (DD)

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	県2015	市2010
1	ハネビロエゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	VU	VU	DD
2	ホソクビツユムシ	バッタ	ツユムシ	<i>Shirakisotima japonica</i> (Matsumura et Shiraki)			
3	アリツカコオロギの一種	バッタ	アリツカコオロギ	<i>Myrmecophilus</i> sp.			DD
4	タイワントビナナフシ	ナナフシ	トビナナフシ	<i>Sipyloidea sipyulus</i> (Westwood)			DD
5	コオイムシ	カメムシ	コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i> Vuillefroy	NT	国リスト	DD
6	トダセシジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Copelatus nakamurai</i> Guéorguiev	VU	NT	DD
7	シワムネマルドロンシ	コウチュウ	マルドロンシ	<i>Georissus kurosawai</i> Nakane			DD
8	ヤマトホソガムシ	コウチュウ	ホソガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	NT	NT	DD
9	ヒメシジミガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Laccobius fragilis</i> Nakane			DD
10	コガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	DD		
11	コガタガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Hydrophilus bilineatus cashimirensis</i> Redtenbacher	VU		
12	クロエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	<i>Hister concolor</i> Lewis		DD	DD
13	マダラクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	<i>Aesalus asiaticus asiaticus</i> Lewis			DD
14	カギアシゾウムシ	コウチュウ	ゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kono)		DD	DD
15	ヤホシホソマダラ	チョウ	マダラガ	<i>Balataea octomaculata</i> (Bremer)	NT		
16	オオシモフリスズメ	チョウ	スズメガ	<i>Langia zenzeroides nawai</i> Rothschild et Jordan			
17	トウカイツマキリアツバ	チョウ	ヤガ	<i>Tamba roseopurpurea</i> Sugi			DD
18	カギモンハナオイア ツバ	チョウ	ヤガ	<i>Cidaripura signata</i> (Butler)	NT	国リスト	
19	ホソバオビキリガ	チョウ	ヤガ	<i>Dryobotodes angusta angusta</i> Sugi			

国リスト・県リスト

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	県2015	市2010
1	ノシメトンボ	トンボ	トンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys)		NT	
2	ウスバカマキリ	カマキリ	カマキリ	<i>Mantis religiosa</i> (Linnaeus)	DD		

⑦ 名古屋市版レッドリスト（クモ類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産クモ類目録 Ver. 2014R1」（谷川明男，2014：インターネット上に公表）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
(該当種なし)							

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	NT	VU	CR
2	カネコタテグモ	クモ	カネコタテグモ	<i>Antrrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)	NT	VU	CR
3	キシノウエタテグモ	クモ	トタテグモ	<i>Latouchia typica</i> (Kishida)	NT	VU	CR
4	ムツトゲイセキグモ	クモ	コガネグモ	<i>Ordgarius sexspinosus</i> (Thorell)		EN	CR
5	カコウコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Pardosa nojimai</i> Tanaka		VU	CR
6	テジロハリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa		EN	CR

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	NT	VU	EN
2	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)		VU	EN
3	ハヤテグモ	クモ	キシダグモ	<i>Perenethis fascigera</i> (Bösenberg et Strand)			EN

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand		NT	VU
2	アカイロトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand		NT	VU
3	トゲグモ	クモ	コガネグモ	<i>Gasteracantha kuhli</i> C. L. Koch		VU	
4	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	<i>Poltys illepidus</i> C. L. Koch		NT	VU
5	エビチャコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Arctosa ebicha</i> Yaginuma		EN	VU
6	クリチャササグモ	クモ	ササグモ	<i>Oxyopes licenti</i> Schenkel			VU
7	ヤギヌマフクログモ	クモ	フクログモ	<i>Clubiona yaginumai</i> Hayashi			VU
8	オビジガバチグモ	クモ	ネコグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong		VU	VU
9	オビボソカニグモ	クモ	カニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono		VU	VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	ギボシヒメグモ	クモ	ヒメグモ	<i>Chrysso albipes</i> (S. Saito)			NT
2	ビジョオニグモ	クモ	コガネグモ	<i>Araneus mitificus</i> (Simon)			NT
3	コガネグモ	クモ	コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L. Koch		NT	NT
4	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa		NT	NT
5	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)		NT	NT
6	スズミグモ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtophora ikomosanensis</i> (Bösenberg et Strand)			NT
7	ハマキフクログモ	クモ	フクログモ	<i>Clubiona japonicola</i> Bösenberg et Strand			NT
8	ヒゲナガツヤグモ	クモ	ワシグモ	<i>Micaria dives</i> (Lucas)			NT

情報不足（DD）

No.	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	チビクロドヨウグモ	クモ	アシナガグモ	<i>Meta nigridorsalis</i> Tanikawa			
2	ムロズミノグモ	クモ	スオウグモ	<i>Takeoa nishimurai</i> (Yaginuma)		DD	DD
3	シロスジグモ	クモ	カニグモ	<i>Runcinia affinis</i> Simon			DD

⑧ 名古屋市版レッドリスト（カニ類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産かに類の分類目録」（三宅，1998）に準拠した。その後の、新しい取り扱いがある場合には、それに従った。

絶滅（EX）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
（該当種なし）						

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
（該当種なし）						

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
1	ハクセンシオマネキ	十脚	スナガニ	<i>Uca (Celuca) lactea lactea</i> (De Haan)	VU	EN
2	サワガニ	十脚	サワガニ	<i>Geothelphusa dehaani</i> (White)		EN

絶滅危惧Ⅱ類（VU）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
1	アカテガニ	十脚	イワガニ	<i>Chiromantes haematocheir</i> (De Haan)		VU
2	クシテガニ	十脚	イワガニ	<i>Parasesarma plicatum</i> (Latreille)		VU
3	ユビアカベンケイガニ	十脚	イワガニ	<i>Parasesarma acis</i> Davie		
4	ウモレベンケイガニ	十脚	イワガニ	<i>Clistocoeloma sinensis</i> Shen		VU

準絶滅危惧（NT）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
1	サメハダヘイケガニ	十脚	ヘイケガニ	<i>Paradorippe granulata</i> (De Haan)		NT
2	モクズガニ	十脚	イワガニ	<i>Eriocheir japonicus</i> (De Haan)		NT
3	コメツキガニ	十脚	スナガニ	<i>Scopimera globosa</i> De Haan		NT
4	チゴガニ	十脚	スナガニ	<i>Ilyoplax pusilla</i> (De Haan)		NT

情報不足（DD）

No.	種 名	目 名	科 名	学 名	国2014	市2010
（該当種なし）						

県版ではカニ類は調査対象外となっている。

⑨ 名古屋市版レッドリスト（貝類）

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産野生生物目録 ー本邦産野生動物の種の現状ー（無脊椎動物Ⅲ）」（環境庁（編），1998）に準拠した。

絶滅（EX）

No.	区分	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	淡水	カワネジガイ	基眼 (モノアラガイ)	ヒラマキガイ	<i>Camptoceras hirasei</i> Walker	CR+EN	EX	EX
2	汽水	ハイガイ	フネガイ	フネガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	VU	EX	EX
3	汽水	イチョウシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Tellina (Serratina) capsoides</i> Lamarck	CR+EN	EX	EX
4	汽水	アゲマキ	マルスダレガイ	ナタマメガイ	<i>Sinonovacula lamarcki</i> Huber	CR+EN	EX	EX

絶滅危惧ⅠA類（CR）

No.	区分	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	汽水	イボキサゴ	古腹足 (オキナエビス)	ニシキウズ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (Lamarck)	NT	CR	CR
2	淡水	マルタニシ	盤足(ニナ)	タニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)	VU	NT	CR
3	淡水	マメタニシ	盤足(ニナ)	エゾマメタニシ	<i>Parafossarulus mauchuricus japonicus</i> (Pilsbry)	VU	DD	CR
4	汽水	サザナミツボ	盤足(ニナ)	サザナミツボ	<i>Elachisime ziczac</i> Fukuda et Ekawa	NT	EN	CR
5	汽水	ヨシダカワザンショウ	盤足(ニナ)	カワザン ショウガイ	<i>Angustassimineia yoshidayukioi</i> Kuroda	NT	VU	CR
6	汽水	ウミナナ	盤足(ニナ)	ウミナナ	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)	NT	NT	CR
7	汽水	イボウミナナ	盤足(ニナ)	ウミナナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguere)	VU	CR	CR
8	汽水	ヘナタリ	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata</i> (Gmelin)	NT	NT	CR
9	汽水	カワアイ	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis</i> (K. Martin)	VU	CR	CR
10	汽水	タクミナナ	異旋	タクミナナ	<i>Eucharilda sinensis</i> (Fischer)		CR	CR
11	汽水	イソチドリ	異旋	イソチドリガイ	<i>Amathina tricarinata</i> (Linnaeus)	CR+EN	CR	CR
12	汽水	キヌカツギ ハマシイノミガイ	基眼 (モノアラガイ)	オカミミガイ	<i>Melampus (Melampus) sincaporensis</i> Pfeiffer	VU	CR	CR
13	汽水	オカミミガイ	基眼 (モノアラガイ)	オカミミガイ	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	VU	EN	CR
14	汽水	ナラビオカミミガイ	基眼 (モノアラガイ)	オカミミガイ	<i>Auriculastra duplicata</i> (Pfeiffer)	VU	CR	
15	淡水	タガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Anodonta japonica</i> Clessin		NT	NT ※1
16	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (Martens)		CR	CR
17	汽水	マゴコロガイ	マルスダレガイ	カワホトギス	<i>Peregrinamor oshimai</i> Shoji	NT	CR	CR
18	汽水	イセシラガイ	マルスダレガイ	ツキガイ	<i>Anodontia bialata</i> (Pilsbry)	CR+EN	CR	CR
19	汽水	ヤチヨノハナガイ	マルスダレガイ	バカガイ	<i>Raeta pellicula</i> (Deshayes)	CR+EN	CR	CR
20	汽水	アオサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Psammotreta (Psendomitris) praeupta</i> (Salisbury)		CR	CR
21	汽水	ハナグモリ	マルスダレガイ	ハナグモリ	<i>Glaucanome chinensis</i> Gray	VU	CR	CR
22	淡水	マシジミ	マルスダレガイ	シジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	VU	VU	VU
23	汽水	ウラカガミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) penicilata</i> (Reeve)	CR+EN	CR	CR
24	汽水	ハマグリ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)	VU	VU	CR
25	汽水	ヒメマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Cryptomya busoensis</i> Yokoyama	VU	EN	CR
26	汽水	クシケマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Venatomya truncata</i> (Gould)	NT	EN	CR
27	汽水	ウミタケ	オオノガイ	ニオガイ	<i>Barnea (Umitakea) japonica</i> (Yokoyama)	VU	CR	CR

絶滅危惧ⅠB類（EN）

No.	区分	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	汽水	オリイレボラ	新腹足	コモロガイ	<i>Trigonostoma scalariformis</i> (Lamarck)	VU	EN	EN
2	淡水	モノアラガイ	基眼 (モノアラガイ)	モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i> Jay	NT	NT	EN
3	陸	ナミギセル	柄眼 (マイマイ)	キセルガイ	<i>Stereophaedusa japonica japonica</i> (Crosse)			EN
4	陸	ナガオカモノアラガイ	柄眼 (マイマイ)	オカ モノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	NT	NT	EN
5	陸	ヒルゲンドルフマイマイ	柄眼 (マイマイ)	オナジマイマイ	<i>Trishoplita hilgendorfi</i> (Kobelt)	NT	NT	EN
6	淡水	ヌマガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Anodonta lauta</i> Martens		NT	NT ※2
7	汽水	サビシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Macoma contabulata</i> (Deshayes)	NT	EN	EN
8	淡水	ウエジマメシジミ	マルスダレガイ	シジミ	<i>Pisidium (Odhneripisidium) uejii</i> Mori			

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

No.	区分	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	汽水	ヒロクチカノコ	アマトブネガイ	アマトブネガイ	<i>Neripteron</i> sp.	NT	VU	VU
2	淡水	オオタニシ	盤足(ニナ)	タニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (Martens)	NT	国リスト	NT
3	汽水	ワカウラツボ	盤足(ニナ)	ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fairbankia) sakaguchii</i> (Kuroda et Habe)	VU	VU	VU
4	汽水	フトヘナタリ	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A. Adams	NT	NT	VU
5	汽水	ムシロガイ	新腹足	オリイレヨウバイ	<i>Niotha livescens</i> (Philippi)	NT	VU	VU
6	汽水	ヌカルミクチキレ (未記載種)	異旋	トウガタガイ	<i>Seyella</i> sp.	NT	VU	VU
7	陸	ヒゼンキビ	柄眼 (マイマイ)	ベッコウ マイマイ	<i>Parakaliella hizenensis</i> (Pilsbry)	NT	DD	
8	陸	ビロウドマイマイ属 の一種	柄眼 (マイマイ)	ナンバン マイマイ	<i>Nipponochloritis</i> sp.			※3
9	汽水	イオスダレガイ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	<i>Paphia (Neotapes) undulata</i> (Born)		VU	VU

準絶滅危惧 (NT)

No.	区分	種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	陸	ヤマタニシ	盤足(ニナ)	ヤマタニシ	<i>Cyclophorus herklotsi</i> Martens			
2	陸	ミジンヤマタニシ	盤足(ニナ)	ヤマタニシ	<i>Nakadaella micron</i> (Pilsbry)			
3	陸	ヒダリマキゴマガイ	盤足(ニナ)	ゴマガイ	<i>Diplommantina (Sinica) pusilla</i> (Martens)			
4	汽水	カワグチツボ	盤足(ニナ)	ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fluviocingula) elegantula</i> (A. Adams)	NT	NT	NT
5	汽水	エドガワミズゴマツボ	盤足(ニナ)	ミズゴマツボ	<i>Stenothyra edogawaensis</i> (Yokoyama)	NT	NT	NT
6	汽水	クリイロ カワザンショウ	盤足(ニナ)	カワザン ショウガイ	<i>Angustassiminea castanea</i> (Westerlund)	NT	NT	NT
7	汽水	ツバカワザンショウ	盤足(ニナ)	カワザン ショウガイ	<i>Assiminea estuarina</i> Habe	NT	NT	NT
8	汽水	ヒナタムシヤドリ カワザンショウ	盤足(ニナ)	カワザンショ ウガイ	<i>Assiminea parasitologica</i> Kuroda	NT	NT	NT ※4
9	汽水	セキモリ	翼舌	イトカケガイ	<i>Papyriscala yokoyamai</i> (Suzuki et Ichikawa)	NT	NT	NT
10	汽水	クレハガイ	翼舌	イトカケガイ	<i>Papyriscala latifasciata</i> (Sowerby)	NT	NT	NT
11	汽水	カキウラクチキレモドキ	異旋	トウガタガイ	<i>Brachystomia bipyrmidata</i> (Nomura)		NT	
12	淡水	ヒラマキミズマイマイ	基眼 (モノアラガイ)	ヒラマキガイ	<i>Gyraulus chinensis</i> Dunker	DD	DD	
13	淡水	ヒラマキガイモドキ	基眼 (モノアラガイ)	ヒラマキガイ	<i>Polypylis hemisphaerula</i> (Benson)	NT	NT	
14	陸	タワラガイ	柄眼 (マイマイ)	タワラガイ (ネジレガイ)	<i>Sinoennea iwakawa</i> (Pilsbry)			
15	陸	ヒメカサキビ	柄眼 (マイマイ)	ベッコウ マイマイ	<i>Trochochlamys subcrenulata</i> (Pilsbry)	NT	NT	
16	陸	ウメラムシタラガイ	柄眼 (マイマイ)	ベッコウ マイマイ	<i>Coneuplecta (Sitalina) japonica</i> Habe	NT	NT	
17	陸	ヒラベッコウガイ	柄眼 (マイマイ)	ベッコウ マイマイ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i> (Pilsbry)	DD	DD	
18	陸	コベソマイマイ	柄眼 (マイマイ)	ナンバン マイマイ	<i>Satsuma myomphala</i> (Martens)			
19	陸	ニッポンマイマイ	柄眼 (マイマイ)	ナンバン マイマイ	<i>Satsuma japonica</i> (Pfeiffer)			
20	陸	オオケマイマイ	柄眼 (マイマイ)	オナジマイマイ	<i>Aegista vulgivaga</i> (Schmacker et Bottger)			
21	汽水	タイラギ	イガイ	ハボウキガイ	<i>Atrina pictinata</i> (Linnaeus)	NT		NT
22	汽水	ツキガイモドキ	マルスダレガイ	ツキガイ	<i>Lucinoma annulatum</i> (Reeve)		NT	NT
23	汽水	ヒメシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Macoma incongrua</i> (Martens)			NT
24	汽水	ゴイスギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Macoma tokyoensis</i> Makiyama			NT
25	汽水	ユウシオガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Moerella rutila</i> (Dunker)	NT	NT	NT
26	汽水	サクラガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> (Habe)	NT	NT	NT
27	汽水	イソシジミ	マルスダレガイ	シオサザナミ ガイ	<i>Nuttallia japonica</i> (Reeve)			
28	汽水	マテガイ	マルスダレガイ	マテガイ	<i>Solen (Solen) gordonis</i> Yokoyama		NT	
29	汽水	ウネナシトマヤガイ	マルスダレガイ	フナガタガイ	<i>Trapezium liratum</i> (Reeve)	NT	国リスト	
30	汽水	オキシジミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)			
31	汽水	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Mya (Arenoma) oonogai</i> Makiyama	NT	NT	NT
32	汽水	ソトオリガイ	ウミタケガイ モドキ	オキナガイ	<i>Laternula marilina</i> (Reeve)		NT	NT

情報不足（DD）

No.	区分種名	目名	科名	学名	国2014	県2015	市2010
1	汽水 ヒナツボ	盤足(ニナ)	シロネズミガイ	<i>Berthais egregia</i> (A. Adams)			DD
2	陸 ミジンマイマイ	柄眼 (マイマイ)	ミジンマイマイ	<i>Vallonia pulchellura</i> (Heude)			DD
3	陸 オオウエキビ	柄眼 (マイマイ)	ベッコウ マイマイ	<i>Trochochlamys fraterna</i> (Pilsbry)	DD	国リスト	

※1 県 2015 と市 2010 はタガイとヌマガイの統合評価

※2 県 2015 と市 2010 はタガイとヌマガイの統合評価

※3 *N. oscitans* ピロウドマイマイを含む評価

※4 ムシヤドリカワザンショウガイから変更

4. 名古屋市の野生生物の現状

哺乳類

① 名古屋市における哺乳類の概況

既存の名古屋市における哺乳類の生息情報については、主に「レッドデータブックなごや 2004」(名古屋市, 2004)、「レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺)」(名古屋市, 2010)、「新修名古屋市史資料編自然目録」(名古屋市, 2008)を参考とした。また、最近の情報として「東山新池かいぼり事業」(なごや環境大学, 2007)、「なごやため池生きものいきいき事業」(なごやため池生物多様性保全協議会, 2009~2011)、「都市部における生物多様性の保全と外来生物対策」(なごや生物多様性保全活動協議会, 2011~2013)で著者らが実施した哺乳類調査の結果を追加した。その他、なごや生物多様性センターに寄せられた情報や新聞記事を参考資料とした。これらについては、確認場所や日時、写真、標本が残っているなど、信頼に足ると判断された情報および名古屋市各区の環境事業所から寄せられたへい死個体の回収記録(2012~2013 年)を参考とした。

新たな現地調査は 2012~2014 年にかけて実施した。陸生の哺乳類については、フィールドサインの確認、センサーカメラによる自動撮影、各種トラップによる捕獲調査を行った。また、飛翔するコウモリ類については、エコーロケーションコールの録音とその解析による同定を試みた。

以下の哺乳類については、名古屋市で生息が確認された種のリストから除外した。

- ・海生哺乳類では、本来の生息域から離れ、死んだ状態で漂流していた種(マッコウクジラ)、または、迷入したと推測される種(シャチ、イシイルカ、カマイルカ)。
- ・家畜化された品種(イヌ、イエネコ、フェレット、カイウサギ)。
- ・野外で見つかっているが、繁殖が確認されていない外来種(アムールハリネズミ)。

これらを検討した結果、今回、名古屋市で生息が確認された哺乳類は、在来種、外来種、絶滅種を含め、8 目 19 科 30 種であった。以下、名古屋市に生息する哺乳類相の特徴を地域ごとに述べる。

東部地域(山地および丘陵地)

東部地域には樹林地が広く分布しており、その多くは現在、公園緑地や風致地区として残されている。東部地域の最北東部にある東谷山は市内最高峰(198.3m)の山地で、ニホンリスやムササビ、ニホンテン、カモシカといった森林性の強い種の主要な生息場所となっている。現時点では周辺山地との連続性が保たれているため、近隣からの個体の流入があると推測され、ニホンザルの「離れザル」や最近まで市内では確認できなかったカモシカの他、市内ではすでに絶滅したと考えられていたイノシシが最近になって確認されている。カモシカやイノシシについては子連れの子体も確認されており、すでに東谷山地域で繁殖しているものと推測される。その他、ニホンイタチについては、今回の調査で 1 個体のみが東谷山山麓の農地で確認された。外来種であり競争種でもあるシベリアイタチが市内全域に分布を広げた現在、ニホンイタチが

市内で生き残っている場所は、東谷山地域のみである可能性が高い。ニホンノウサギについても最近の記録は東谷山のみである。これまで市内での記録がほとんどないニホンテンについては、今回、東谷山の瀬戸市側でその生存が確認された。

東谷山麓のため池周辺では、エコーロケーションコールの音声解析により、キクガシラコウモリ、オヒキコウモリが確認された。また、この解析によって、上記の種とは明らかに異なるコウモリ類の生息も示唆された。東谷山から北東へ6kmほど離れた場所には、キクガシラコウモリを含めて数種類のコウモリ類がねぐらとして利用する「愛岐トンネル群（岐阜県多治見市）」が存在する。飛翔可能なコウモリ類の場合、市外のねぐらから市内へと採餌に訪れている可能性も十分に考えられる。

このように、東谷山地域は現在も周辺山地との連続性を保っており、市内の他の地域ではほとんど見られない種の生息地となっている。東谷山地域は、市内における哺乳類のホットスポットでありコアエリアとして非常に重要な位置を占めているといえるだろう。一方で、アライグマ、ハクビシン、シベリアイタチといった外来の哺乳類もすでに東谷山一帯に生息しており、今後、在来種への影響や他地域への広がりも含めて注視が必要である。

東部地域には、東谷山以外にも小幡緑地、明德公園、平和公園、東山公園、牧野ヶ池緑地、猪高緑地、相生山緑地、大高緑地といった規模の大きい緑地が多数点在する。かつては繋がりが保たれていたこれらの緑地も、現在では周辺を市街地が囲み、孤立化が著しい。そのため、東谷山地域に比較して、森林性の強い種や生息に広い面積を必要とする大型種の存続は難しいと考えられる。ただし、小型で移動能力が低いモグラ類、ネズミ類や市街地にも進出したタヌキにとっては、これらの孤立した緑地が現在の主要な生息場所となっている。また最近では、市内で分布を広げつつあるアカギツネもごくわずかだが確認されるようになった。さらに、ごくまれではあるが、ニホンザルやイノシシの目撃例、捕獲例も知られている。これらは他地域からの分散個体であると考えられ、現在、孤立した緑地での繁殖、定着はほとんど進んでいないと推測される。しかし、今後の展開によっては、これまで確認されていない場所にも定着する可能性があり、注視が必要である。その他、市東部の南側、豊明市との市境付近では、樹林に囲まれた個人の農地で、市内では31年ぶりとなるニホンアナグマの生息が確認された。この農地は愛知用水沿いにある風致地区で、比較的里山の景観が残されている地域ではあるが、すでに周辺まで宅地が迫っており、今後の存続が危ぶまれる。

外来のアライグマやハクビシン、シベリアイタチについては、すでに市東部の孤立した緑地でも確認されている。これらの外来哺乳類は、緑地内に生き残る様々な在来生物に影響を与えていると推測される。特にアライグマについては、両生類やニホンイシガメといった水辺の生物に対する食害が懸念される。また、これらの外来哺乳類は周辺の市街地にも進出し、家屋への侵入や糞尿による被害等を引き起こしている。その他、東部地域のため池や河川では外来種のヌートリアが繁殖、定着している。

中央部地域（洪積台地）

都市域の中央部地域で規模の大きい緑地が残っているのは、熱田神宮および名古屋城である。この内、熱田神宮にはタヌキと外来種のハクビシンが生息する。名古屋城とその周辺にはコウベモグラとタヌキ、外来種のヌートリアとハクビシンが生息する。特に名古屋城の外堀は、日常的な人の侵入がほとんどないため、タヌキやコウベモグラの好適な生息場所となっている。

名古屋城の水堀にはヌートリアが生息し、岸辺にトンネル状の巣を作っている。この水堀では、希少な水生植物のオニバスが20年ぶりに確認されたが、オニバスが生育している場所のすぐ近くにヌートリアが営巣しているため、オニバスへの食害が懸念される。ヌートリアについては市の中心部を流れる堀川でも生息が確認されている。

最近、新たに名古屋城とその周辺でオヒキコウモリの生息が確認された。名古屋城の石垣をねぐらとして利用している可能性もあるが、現在までねぐらは確認されていない。オヒキコウモリは長距離飛行も可能であることから、採餌のために市外から飛翔してくる可能性も残されている。

外来種については都市部を含む中央部地域においても、ヌートリアの他にアライグマ、ハクビシン、シベリアイタチが確認されている。これら3種の外来種は、周辺に緑地がほとんど見られない市街地にも進出しており、家屋や軒下、排管内といった人工物をねぐらとし、放置ゴミやペットの餌など人為的なものも含めて様々な食物を採食しているものと推測される。東部地域と同様、家屋への侵入や糞尿による被害が見られる。

西部地域（沖積平野）

西部地域は樹林地が少ないため、森林に強く依存した種を欠くが、その代わりに農地や河川敷の緑地が広がり、その一帯が哺乳類の生息場所となっている。庄内川下流域の河川敷に広がる土壌堆積地にはコウベモグラが生息し、高茎草地にはカヤネズミやアカネズミが生息する。河川敷に残されたこのような自然環境は、近年、河川の改修工事等によって、消失、分断され、縮小、孤立化する傾向にあるが、それでも、タヌキなどの中型哺乳類は頻繁に利用しており、最近ではアカギツネの進出も確認されるようになった。アカギツネが西部地域に定着しているかどうか明らかではないが、庄内川沿いを回廊として上流域から移動してきた可能性がある。

その他、西部地域でも、外来種のヌートリア、ハクビシン、シベリアイタチ、アライグマが確認されている。また、今回の目録には記載していないが、アムールハリネズミ、カイウサギ（アナウサギの家畜品種）が西部地域で見つかっている。アムールハリネズミについては1個体が拾得されたのみで繁殖は確認されていない。カイウサギについては庄内川の河川敷で繁殖も確認されているが、その後、定着はしていないようである。

名古屋港（沿岸海域）

名古屋港には海生哺乳類であるスナメリが生息している。名古屋港は大型の船舶が行き来する日本の主要な貿易港の一つであり、都市河川が流入する地域である。沿岸性が強い本種にとって、人間活動の与える影響が懸念されるが、これまで湾内でのスナメリの詳細な情報はなかった。2011年より名古屋港水族館による湾内でのスナメリ調査がはじまり、その実態が明らかにされつつある。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、レッドリストに掲載した種は、絶滅（EX）2種、絶滅危惧ⅠA類（CR）11種、絶滅危惧ⅠB類（EN）2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）2種、準絶滅危惧（NT）2種、情報不足（DD）3種の計22種である。この内、2010年補遺版と比較してランクが変更になった種を以下に示す。

前回、絶滅（EX）の扱いであったイノシシは、今回、東谷山地域を中心に生息していることが明らかとなったため、絶滅（EX）から情報不足（DD）へと変更した。家畜ブタ品種との交雑の可能性や、最近、天白区や緑区などで散発的に確認されている個体の由来など不明な点が多く、今後、DNA 分析などによって確認していく必要があるだろう。

絶滅危惧ⅠA類（CR）は、前回の8種から3種類が新たに加わり合計11種となった。この内、ニホンジネズミとハタネズミについては、前回、絶滅危惧ⅠB類（EN）の扱いであったが、この2種は最近の確認例がほとんどないこと、確認場所が非常に局所的で分布が小地域に偏在するため、小規模の開発でも生息地の消失するおそれがあることなどを理由に絶滅危惧ⅠA類（CR）に変更した。

前回、絶滅危惧Ⅱ類であったニホンイタチについては、これまで外来種であるシベリアイタチと混同されていることが多く、市内での分布状況は明らかではなかった。しかし、今回、アライグマ防除捕獲における混獲個体やへい死した個体などの分析により、市内の市街地から緑地まで広く分布する種は、ほとんどがシベリアイタチであることが明らかとなった。これに対し、ニホンイタチは東谷山地域で確認された1個体のみであった。これらのことから、市内でのニホンイタチの分布はすでに局所的で個体数も少なく、また、競争種であるシベリアイタチとの関係から、今後の個体数の回復や分布の拡大は困難であると推測され、ランクを絶滅危惧ⅠA類（CR）に変更した。

オヒキコウモリについては、これまで市内での確認例はまったくなく、名古屋市レッドリスト未記載種であったが、2011年10月に中区丸の内ですべて衰弱した個体が1個体され、さらに、2014年には名古屋城敷地内でオヒキコウモリの発するエコーロケーションコールが多数確認された。ただし、市内でのねぐらが現在まで確認されていないこと、名古屋城とその周辺以外では、東谷山地域の蛭池周辺でしか確認できていないことから、今回のレッドリストでは情報不足（DD）として記載した。

（執筆者 野呂達哉）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各哺乳類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。なお、この記載については、平成26年11月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（哺乳類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目、科、種の配列は原則として「The Wild Mammals of Japan」(SHOUKADOH Book Sellers, 2009)、「日本の哺乳類〔改訂2版〕」(東海大学出版会, 2008)に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「The Wild Mammals of Japan」(SHOUKADOH Book Sellers, 2009)に準拠した。その他、「日本の哺乳類〔改訂2版〕」(東海大学出版会, 2008)を参照した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」(愛知県, 2015)の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 1 哺乳類」(環境省, 2014)の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定された理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。また、目撃情報のみの場合は  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項について補足説明した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

オオカミ *Canis lupus* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅

【選定理由】

北海道産は 1800 年代末の毛皮取引記録以降、本州以南産は 1905 年に奈良県で捕獲されて以降、ともに生息記録がない。市内では少なくとも明治以降に生息記録はない。

【形態】

標本から測定された頭胴長は、本州産で 95~115cm、北海道産で 120~130cm、体重は不明である。ほぼ大型のイヌの大きさに近い。オオカミ生息当時のイヌよりも大型で、頭骨の額部分のへこみが少なく、裂肉歯が大きいことからイヌとは区別される。

【分布の概要】**【市内の分布】**

朝日重章(1718 年没)の「鸚鵡籠中記」(名古屋市教育委員会編, 1965~1969)には、1693 年頃に現在の太白区平針付近、1709 年頃に現在の北区味鋤、1717 年頃に市内での生息を示唆する記述が残されているが、明治以降の生息記録はない。

【県内の分布】

遺骨化石が縄文時代の伊川津貝塚(豊川市小坂井町)などから出土している(西本, 1988)。近世でも 1695 年頃の知多半島(ヤマノイヌと記述)、1709 年頃の江南市その他、犬山市、旧春日井郡、額田郡などで文献史料が残されている(名古屋市教育委員会編, 1965~1969)。

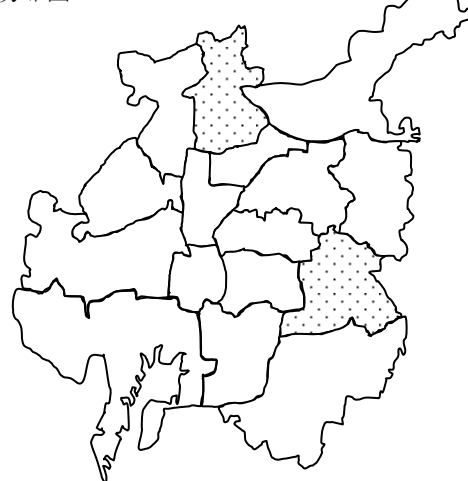
【国内の分布】

北海道産は 1800 年代末以降、本州以南産は 1905 年以降、生息記録がない(平岩, 1981)。

【世界の分布】

ユーラシア大陸や北米大陸など、主に北半球に生息する。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

家族単位で群れを作り、数十 km² の行動圏を持つ。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

北海道産は毛皮や肉を得る目的や害獣として捕獲され、さらにイヌとの共通感染症の流行や豪雪によりエゾシカなどが減少し、食物が不足したことから絶滅したと考えられている。本州以南でも同様に狩猟や害獣駆除、さらに感染症などにより絶滅したと考えられている(平岩, 1981; 千葉, 1995)。

【保全上の留意点】

絶滅種であり、生息を維持できる広範な生息地は保証されていない。

【引用文献】

- 千葉徳爾, 1995. オオカミはなぜ消えたか - 日本人と獣の話 -, 279pp. 新人物往来社, 東京.
 平岩米吉, 1981. 狼 - その生態と歴史 -, 308pp. 池田書店, 東京.
 名古屋市教育委員会(編), 1965~1969. 名古屋叢書続編 9~12 巻. 名古屋市教育委員会.
 西本豊弘, 1988. 動物遺体. 伊川津遺跡 - 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4 -, pp.269-272. 渥美町教育委員会.

【関連文献】

- Endo, H., 2009. *Canis lupus* Linnaeus, 1758. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.218-219. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 子安和弘・織田銃一, 2009. オオカミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, pp.65. 愛知県環境部自然環境課.
 名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
 織田銃一・子安和弘, 2010. オオカミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, pp.73. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室.

(執筆 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <偶蹄(ウシ)目 シカ科>

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

江戸時代には市内に生息していたことがわかっているが、最近 50 年以上にわたり野生個体が生息しているという信頼に足る情報はない。

【形態】

国内の亜種ごとに大きさは異なるが、雄で頭胴長が 90~190cm、体重が 50~130kg、雌で頭胴長が 90~150cm、体重が 25~80kg である。雄は雌よりも大きい。雄のみ毎年生えかわる角を持つ。毛色は茶から灰褐色、尻は白色で、全体に白斑が混じることが多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、名東区、千種区ではかつて鹿狩りが行われていたが、現在は生息していない。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など尾張地域東部や三河地域。

【国内の分布】

本州、四国、九州やその周辺の島嶼。

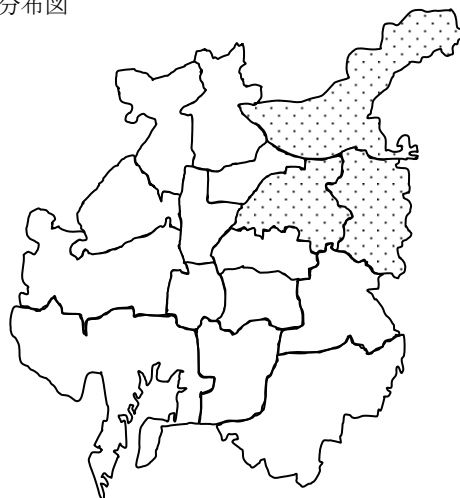
【世界の分布】

ベトナムから極東アジアにかけて広く分布。

【生息地の環境／生態的特性】

森林およびその林縁部で生息する。植物食性で草本から木本まで幅広く採食する。群れ生活を営むが、通常雌雄は別々の群れをつくる。発情期は秋で、この時期だけ雄はなわばりをつくる。多積雪の環境では生息が難しいが、近年の暖冬傾向で全国的に個体数が増加している。

市内分布図



【過去の生息状況／絶滅の要因】

古くは、平手町遺跡（北区）などから骨が出土している（渡辺ほか，2002）。イノシシやシカの骨遺物は市内ほとんどの貝塚から出土している（安達，1997）。江戸時代には、藩士による狩猟や農作物を食害から守る鹿垣の記録が残されている（名古屋市教育委員会編，1964；名古屋市教育委員会編，1966）。これらのことから、かつては市内に本種が生息していたことがわかる。

1995 年 11 月に名東区で雌成獣個体が捕獲されたが、飼育個体とされている（中日新聞 1995 年 11 月 24 日）。市周辺地域では、個体数の増加、分布の拡大が顕著で、農作物などへの被害が発生している。現在の分布は、市外東部から市内に近づいており、十分注視すべき状況といえる。

【保全上の留意点】

市内では絶滅種であるが、周辺地域では絶滅の危険を示す兆候はない。市内に侵入した場合、生態系や農作物への被害、交通事故による車両や人への被害の発生が懸念される。

【特記事項】

愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっている。

【引用文献】

安達厚三，1997. 縄文人のくらし. 新修名古屋市史第一巻（新修名古屋市史編集委員会編），pp.111. 名古屋市.
三浦慎吾，2008. ニホンジカ. 日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），pp.110-111. 東海大学出版会，秦野.
Nagata, J., 2009. *Cervus nippon* Temminck, 1838. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.296-298. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
名古屋市教育委員会（編），1964. 名古屋叢書続編第 1 巻（寛文村々覚書上），pp.257. 名古屋市教育委員会
名古屋市教育委員会（編），1966. 名古屋叢書続編第 3 巻（寛文村々覚書上），pp.445. 名古屋市教育委員会
渡辺 誠・岡田 賢・李 浩基・築瀬孝延，2002. 西志賀遺跡の自然遺物. 平手町遺跡，pp.61. 愛知県埋蔵文化財センター.

【関連文献】

愛知県環境部自然環境課，2012. 特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ），33pp. 愛知県環境部自然環境課.
名和 明，2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322. 名古屋市.
高槻成紀，2006. シカの生態誌. 480pp. 東京大学出版，東京.

（執筆者 名和 明・野呂達哉）

哺乳類 <トガリネズミ目 トガリネズミ科>

ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内での確認場所は極めて局所的で、攪乱されやすい環境にあるため、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。最近10年間の市内での確実な記録は確認できなかった。

【形態】

体毛の色は灰色。尾には全面を覆う短毛と基半部にまばらな長毛がある。頭胴長 61～84mm、尾長 39～60mm、体重 5～12.5g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉根、川）、名東区（牧野ヶ池緑地）、緑区（大高町中之瀬）。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、豊田市、新城市、豊川市、一色町佐久島、みよし市、犬山市、春日井市、瀬戸市、日進市、豊明市、名古屋市、知多市、安城市。

【国内の分布】

北海道（移入分布の可能性ある）、本州、四国、九州、隠岐諸島、佐渡島、伊豆諸島（新島）、種子島、屋久島、福岡県沖の島、トカラ列島（中之島）など。

【世界の分布】

韓国済州島（移入分布の可能性ある）。

【生息地の環境／生態的特性】

地表面や落葉層で活動し、下層植生が密に生える藪など、餌となるクモ類やジムカデ類が豊富な場所を好む。ネコが捕えるが食べることは少ない（宮尾ほか、1984）。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に確認された場所の一部は開発によって消失した（緑区大高町中之瀬）。最近、緑区との境界に近い豊明市沓掛町切山台で生息が確認されたことから、現在でも市内に生息している可能性は高い。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。

【特記事項】

愛知県のレッドリストでは、佐久島の個体群が保全のために配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）として記載されている。

【引用文献】

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一、1984. 1. ジネズミ. 愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.287-288. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋。

【関連文献】

阿部 永，2008. ニホンジネズミ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕（自然環境研究センター編），p.14. 東海大学出版会，秦野。
子安和弘・織田銃一，2009. ニホンジネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.90. 愛知県環境部自然環境課。

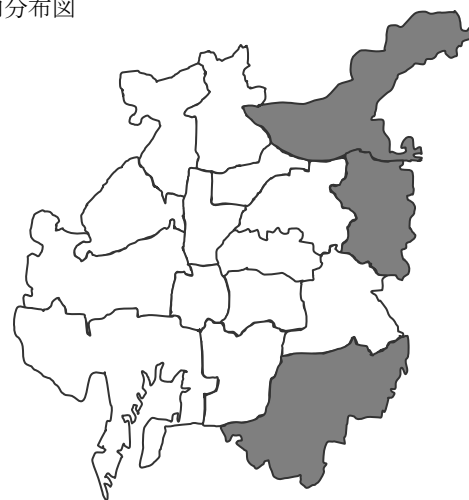
Motokawa, M., 2009. *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.22-23. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

高田靖司，2004. ジネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編，p.37. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室。



ニホンジネズミ
豊明市沓掛町切山台、2013年1月29日、野呂達哉 撮影

市内分布図



（執筆者 野呂達哉）

哺乳類 <翼手(コウモリ)目 キクガシラコウモリ科>

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では洞穴性の本種が利用できる自然の洞穴は少なく、廃坑、防空壕跡といった人工洞穴も、近年、入口が塞がれる傾向にある。本種がねぐらとして利用できる環境は減少する一方であり、回復は見込めない。

【形態】

鼻の周囲に鼻葉と呼ばれる葉状の突起を持つ。幅が広く短い翼を持ち、森林内での採餌に適している。体色は褐色。前腕長 56～65mm、頭胴長 63～82mm、尾長 28～45mm、体重 17～35g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(竜泉寺、上志段味東谷)。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、東栄町、豊田市、新城市、豊橋市、田原市、幸田町、西尾市、名古屋市、瀬戸市、犬山市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆大島、三宅島、新島、佐渡島、隠岐、対馬、壱岐島、対馬、五島、屋久島、口之島、中ノ島。

【世界の分布】

南ヨーロッパから北アフリカ、北インド、中国、韓国、日本。

【生息地の環境／生態的特性】

ねぐらは主に洞穴だが、自然の洞穴だけではなく、廃坑、防空壕跡、廃屋といった人工的環境も利用する。採餌活動は河川、平地、小丘陵、森林や草原などで行われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ねぐらがある守山区竜泉寺の防空壕跡は入口が土砂で埋まり、現在では利用されていないようである。市内での活動場所はほとんど分かっていないが、最近、東谷山地域の大村池周辺(守山区上志段味東谷)で本種のエコーロケーションコールを確認した。

【保全上の留意点】

ねぐらが見つかった場合、その保全に留意する必要がある。人の出入りの制限、またはコウモリ類が通過可能な柵(バット・ゲート)を設置することが有効である。

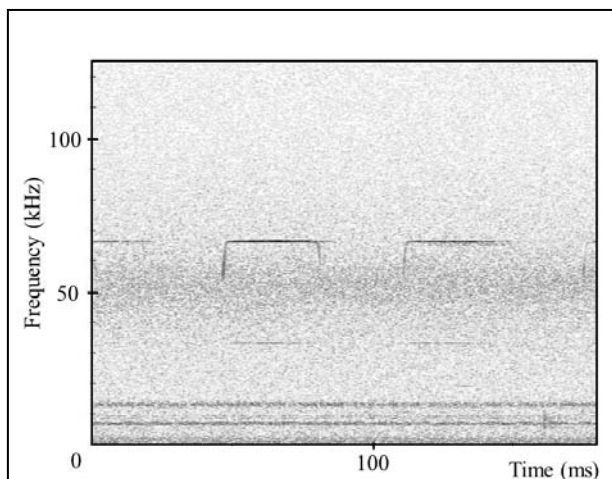
【特記事項】

市内生息域である守山区北東部と 6km ほどの距離にある愛岐トンネル群(岐阜県多治見市)では、本種の生息が多数確認されている(多治見市、平成 25 年度第 1 回文化財審議会議事録)。

【関連文献】

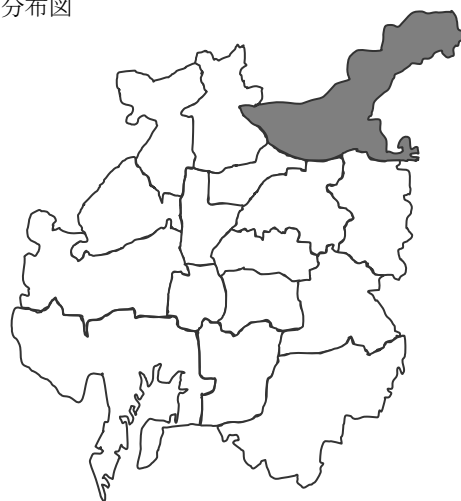
- 子安和弘・織田統一, 2009. キクガシラコウモリ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.86. 愛知県環境部自然環境課.
前田喜四雄, 2008. キクガシラコウモリ. 日本の哺乳類[改訂 2 版](自然環境研究センター編), p.30. 東海大学出版会, 秦野.
佐野 明, 2011. キクガシラコウモリ. コウモリ識別ハンドブック改訂版(コウモリの会編), pp.18-19. 文一総合出版, 東京.
高田靖司, 2004. キクガシラコウモリ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, p.27. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室.

(執筆 野呂達哉)



キクガシラコウモリのエコーロケーションコール
守山区上志段味東谷、2013 年 6 月 14 日、野呂達哉 録音

市内分布図



哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 キヌゲネズミ科>

ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市街化によって農地や河川敷周辺に残された生息地が消失、減少した。これまでに市内で確認された場所は局所的で、小地域に偏在するため、小規模の開発でも生息場所が消失するおそれがある。最近10年間の市内での記録は確認できなかった。

【形態】

背面は茶褐色、腹面は灰白色。鼻先は丸くずんぐりとした体形で尾は短い。頭胴長 95～136mm、尾長 29～50mm、後足長 16.5～20.4mm、体重 22～62g、乳頭式は2+0+2=8。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区庄内川河川敷(川、吉根、竜泉寺、幸心)と矢田川河川敷(大森)、名東区(猪高町猪子石)。

【県内の分布】

豊根村、豊田市、設楽町、田原市、みよし市、幸田町、西尾市、犬山市、名古屋市、知多市、江南市、北名古屋市、愛西市、春日井市、豊川市、稲沢市、東浦町、安城市。

【国内の分布】

本州、九州、佐渡島、能登島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

地下に入り組んだトンネルシステムを作り生活している。農地や河川敷などの草地的環境を主な生息場所としている。土壌層の豊かな草地で優占し、森林化とともに生息数が減少する(宮尾ほか, 1974)。草食性が強く、野生の草本だけではなく、農作物も採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

東日本では決して稀な種ではないが、中部以西では減少傾向にある。河川敷や農地周辺に残された生息適地が減少したため、分布は局所的である。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地のように攪乱されやすい環境に生息するため、そのような環境を残していく配慮が必要である。

【引用文献】

宮尾嶽雄・両角徹郎・両角源美, 1974. 霧ヶ峰・白樺湖高原の小哺乳類相. 哺乳動物学雑誌, 6(1): 33-38.

【関連文献】

愛知学院大学歯学部第二解剖学教室, 1985. 小哺乳類の採集記録 第1集 (1978～1984年), 67pp. 愛知学院大学歯学部第二解剖学教室.

金子之史, 1975. 日本の哺乳類(12) げっ歯目 ハタネズミ属. 哺乳類科学, 30: 3-26.

子安和弘・織田銃一, 2009. ハタネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.35.

愛知県環境部自然環境課.

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 7. ハタネズミ. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.296-297. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

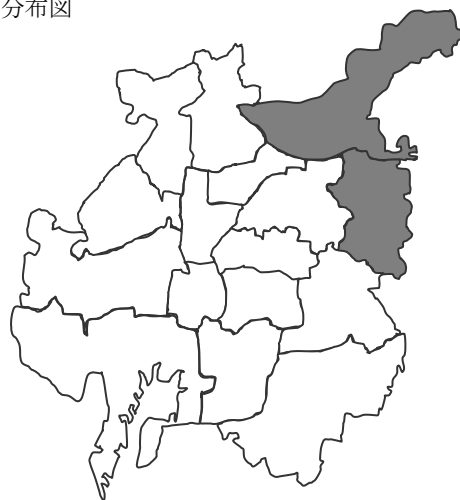
名和 明, 2008. 新修名古屋市史資料編自然目録(新修名古屋市史資料編編集委員会編), 222pp. 名古屋市.

高田靖司, 2004. ハタネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, pp.35. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室.



ハタネズミ、
豊田市樽俣町、2006年12月17日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 リス科>

ニホンリス *Sciurus lis* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では市街化にともない森林が減少し、生息地が孤立化している。さらに食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

【形態】

本種の毛色は、背面が褐色で腹面が白色。全面が灰から赤褐色のクリハリスや、背面に黒色の縞模様のあるシマリスと区別できる。体重は 250～310g、頭胴長は 160～220mm、尾長は 130～170mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区の東谷山や森林公園、小幡緑地、八竜緑地など限られた地域に生息している。

【県内の分布】

尾張東部や三河地域の山間地域に分布する。

【国内の分布】

本州・四国に分布しているが、中国地方以西の本州では生息地が限定的になっている。狩猟など生息記録のあった九州では、過去100年間にわたり生息が確認されていない。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から亜高山帯までの広葉樹林、針広混交林やマツ林などに生息する。樹上に球形の巣を作る。主に果実、堅果、花、キノコ類などを食べるが、昆虫なども採食する。春から夏にかけて年に1～2回の繁殖を行う。1回の産仔数は2～6頭である。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林が残る守山区のわずかな地域に生息しているが、その範囲は狭く、道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因となっている。

【保全上の留意点】

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。道路網の整備にはその分断を回避するか、代償となる施設（アニマルパスウェイ）が必要である。現在、著しく減少しているナラ類やマツ類の更新が可能な森づくりも必要である。

【特記事項】

かつて緑区などにも生息の情報があつたが、現在は確実な生息記録がない。ペット等が由来のクリハリスなど近縁の外来種の放逐がないように注意が必要である。

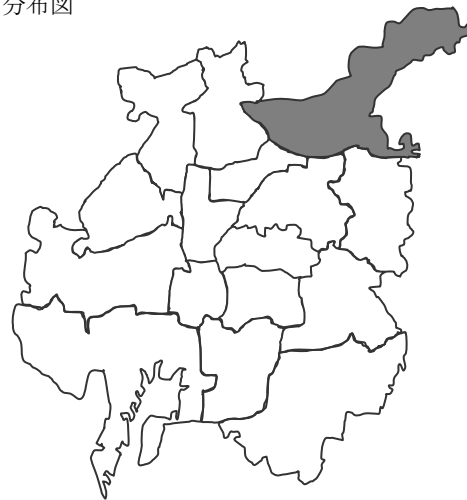
【関連文献】

環境省(編), 2014. レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-1 哺乳類, 132pp. ぎょうせい, 東京.
名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.
高田靖司, 2004. ニホンリス. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編, p.29. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室.
Tamura, N., 2009. *Sciurus lis* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.186-187. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
田村典子, 2011. リスの生態学, 211pp. 東京大学出版会, 東京.



ニホンリス
守山区東谷山、2010年8月18日、名和 明 撮影

市内分布図



(執筆者 名和 明)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 リス科>

ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では市街化にともない森林面積が縮小し、生息地が孤立化している。巣穴を作るための大径木の減少や食物となる堅果などを供給するナラ類やマツ類の枯死が続き、生息状況が悪化している。

【形態】

毛色は背面が褐色で、腹面が白色。顔面の目と耳の間から頬にかけて白色のラインがある。前後肢間に、滑空ができる飛膜を持つ。頭胴長は 27～49cm、尾長は 28～41cm、体重は 495～1250g。国内の齧歯類としては最大級である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山）。

【県内の分布】

尾張東部や三河地域の山間地域に分布。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

常緑樹林や針広混交林を主な生息地とする。植物食性で主に葉、果実や種子などを採食する。大径木の樹洞などを利用し巣穴とする。夜行性で夕刻以降に巣を出て採食する。生活のほとんどを樹上で行う。年 2 回発情し、1 回の産仔数はふつう 1～2 頭である。

【現在の生息状況／減少の要因】

大径木のわずかに残る東谷山の森林に生息しているが、その範囲は狭く道路網などにより分断されつつある。ナラ枯れやマツ枯れに起因する食物量の減少も生息状況を悪化させる要因である。県内ではスギなどの大径木が残る社寺林で見られる事が多いが、市内では連続した森林に連なる社寺林がなくなっている。

【保全上の留意点】

現在の生息地の保全はもちろんのこと、生息地の連続性を維持する必要がある。特に生息地での伐採は、たとえば本種の巣穴がない樹木でも控える必要がある。

【特記事項】

過去には優良な毛皮のため狩猟獣となっていたが、現在は非狩猟獣である。

熱田区玉の井町の玉ノ井遺跡（縄文～弥生）からは、本種の歯が出土している（新美，2003）。

【引用文献】

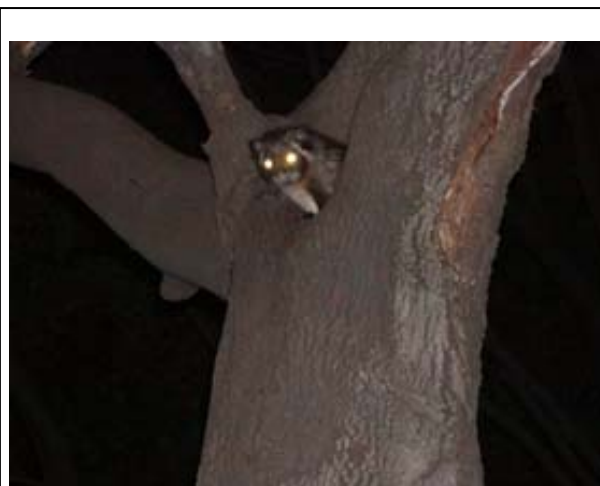
新美倫子，2003. 玉ノ井遺跡第3次調査出土の動物遺体. 埋蔵文化財調査報告 44, pp.157-158. 名古屋市教育委員会.

【関連文献】

環境省（編），2014. レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－1 哺乳類，132pp. ぎょうせい，東京.
子安和弘・織田鉄一，2009. ムササビ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.81.
愛知県環境部自然環境課.

Oshida, M., 2009. *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.192-193. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

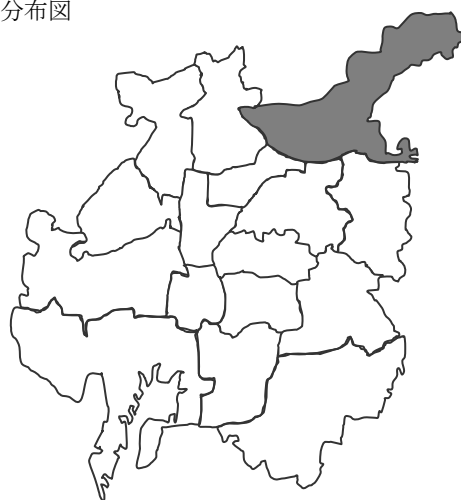
（執筆者 名和 明）



ムササビ

守山区東谷山、2003年12月30日、名和 明 撮影

市内分布図



哺乳類 <ウサギ目 ウサギ科>

ニホンノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内でも1940年代までは東部丘陵地などで普通に生息していたが、近年は個体数が急激に減少している。生息分布もきわめて限られている。2000年代に入ってから守山区（東谷山）で確認されているにすぎない。

【形態】

積雪地域では、毛色は無積雪期が茶色、積雪期は白色に変化するが、市内産は一年を通して茶色のようなものである。頭胴長は45～54cm、尾長は2～5cm、体重は2.1～2.6kg。市内には人為的に放逐されたカイウサギ（アナウサギの家畜品種）がみられることがあるが、大きさや毛色などが異なる。

【分布の概要】

【市内の分布】

最近の確実な記録は守山区（東谷山）のみである。かつては、名東区、千種区、天白区、緑区でも確認されているが、最近の生息情報はまったくない。

【県内の分布】

三河地区や市に接する春日井市や瀬戸市など尾張東部に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州およびその周辺の島嶼。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から亜高山帯、森林から草原まで様々な環境に生息する。植物食で春から夏にかけて出産し、1回で1～4頭の子を出産する。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地化や道路建設などが要因で生息地が分断され、個体数が減少した可能性がある。東部丘陵に残存している可能性もあるが、その生息地は孤立、隔離されていると推測される。

【保全上の留意点】

少なくとも現在生息する環境を保全し、分布を分断しないようにする必要がある。

【特記事項】

1940～1970年代には千種区名古屋大学周辺でウサギ狩りが行われていた。1980年代には名東区（明德池、塚ノ杵池）、守山区（中志段味、吉根、竜泉寺）、緑区（滝ノ水）、天白区（島田緑地）での生息が確認されている（高田，2002）。

【引用文献】

高田靖司，2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, 62:1-5.

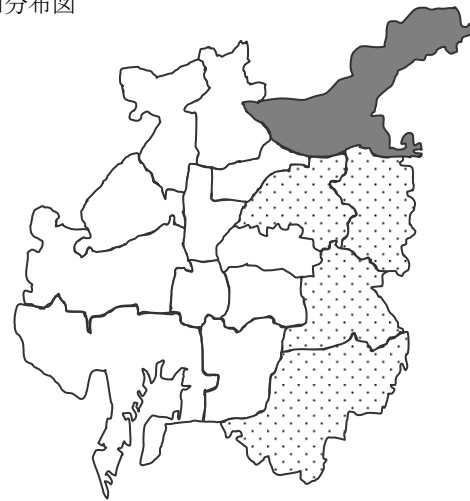
【関連文献】

石井信夫，2008. ニホンノウサギ. 日本の哺乳類 [改訂2版] (自然環境研究センター編)，p.151. 東海大学出版会，秦野.
名和 明，2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然 (新修名古屋市史資料編編集委員会編)，pp.315-322. 名古屋市.
Yamada, F., 2009. *Lepus brachyurus* Temminck. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.208-209. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
高田靖司，2004. ノウサギ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編，p.28. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.



ニホンノウサギ
守山区東谷山、2007年8月、名和 明 撮影

市内分布図



(執筆者 名和 明・野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

アカギツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内ではこれまで市北東部が分布の中心であったが、最近、東部地域の孤立した緑地や市西部でも確認されるようになった。ただし、進出した地域での繁殖、定着が進んでいるかは不明で、未だ予断を許さない状況である。

【形態】

背面は赤褐色で、顎の下から腹部にかけては白色。足先前面には黒い毛が混じる。耳は大きく先が尖る。頭胴長 60～75cm、尾長 40cm、体重 4～7kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山、上志段味、中志段味、吉根、小幡緑地本園、川東山、大森、川西など）、名東区（猪高緑地）、天白区（野並など）、緑区（鳴海町大清水）、北区（成願寺町北野など）、中川区（富田町万場など）。

【県内の分布】

東三河北部から南部にかけては全域で確認されている。尾張地域では北部から東部にかけて確認されているが、西部においては未確認の地域もある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

ユーラシアの大部分と北アメリカに分布。オーストラリアには移入個体群が生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

田畑や草地、森林、集落地域などがモザイク状に分布する多様な環境を選択的に利用する（中園，1989）。生息条件として、餌となるネズミ類や昆虫などが豊富で、巣作り、子育てのできる環境があることが重要である。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化に伴う樹林地や草地、農地の縮小によって、本種の繁殖、定着できる場所は著しく減少した。最近、東部地域の孤立した緑地や都市域の市西部に進出する個体が見つかっている（野呂，2014）。今後、都市動物化に向かうのか注目する必要がある（名和，2008）。

【保全上の留意点】

生息適地の保全とともに河川沿いの樹林地や草地、緑地帯といった生息地間の繋がりを支える環境を保全していく必要がある。

【引用文献】

中園敏之，1989. 九州におけるホンダキツネのハビタット利用パターン. 哺乳類科学, 29(1): 51-62.
名和 明，2008. キツネ. 新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），p.318. 名古屋市.
野呂達哉，2014. 名古屋市のアカギツネその後. 生きものシンフォニー12号. なごや生物多様性センター.

【関連文献】

阿部 永，2007. キツネ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p. 243. 北海道大学出版会, 札幌.
名和 明，2008. 新修名古屋市史資料編自然目録（新修名古屋市史資料編編集委員会編），222pp. 名古屋市.
野呂達哉，2013. 小幡緑地と金城学院大学で確認されたアカギツネ. 生きものシンフォニー7号. なごや生物多様性センター.
自然環境研究センター（編），2004. 第6回自然環境基礎調査 - 種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書 -, 213pp. 環境省 自然環境局生物多様性センター.

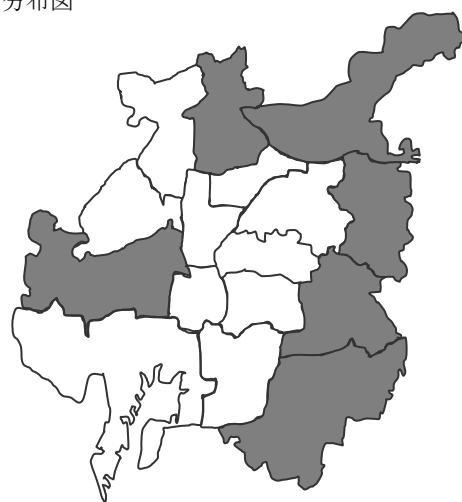
（執筆者 野呂達哉）



アカギツネ

北区成願寺町北野、2013年6月10日、野呂達哉 撮影

市内分布図



哺乳類 <食肉(ネコ)目 イタチ科>

ニホンテン *Martes melampus* (Wagner)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2013年5月に市境である東谷山の瀬戸市側で生息が確認された。行動圏が市内に達していることは確実なので、評価対象とした。生息密度は低いものと考えられ、隣接する地域からの個体の流入がない限り、市内で個体群を維持することは難しいであろう。

【形態】

体色はあざやかな黄色から褐色のものまで変異に富む。四肢は通常、黒い。頭胴長 41～49cm。尾長 17～23.3cm。体重 1.1～1.5kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山地域)。

【県内の分布】

豊根村、設楽町、東栄町、豊田市、新城市、豊川市、岡崎市、幸田町、名古屋市、瀬戸市、尾張旭市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、淡路島、対馬。佐渡島、北海道に移入。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島南部に分布するという報告がある。



ニホンテン
瀬戸市十軒町、2013年5月、
なごや市民生きもの調査員 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

本種は樹上空間を積極的に利用し(Tatara and Doi, 1994)、河畔林、境界林および林縁部への依存度が高いことが示唆されている(新井ほか, 2003)。雑食性でネズミ類などの小哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、昆虫類、果実類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

最近の市内での確認例は皆無であるが、2013年5月に東谷山の瀬戸市側(瀬戸市十軒町)で生息が確認された。確認場所は市境であるため、名古屋市内も行動圏に含まれると考えられる。この地域は落葉広葉樹と常緑広葉樹、ヒノキの植林が混在し、大径木が多く、本種の生息に好適な環境にあると推測される。本種が市内の他の緑地に分布を拡大できるか今後注視が必要である。

【保全上の留意点】

生息適地の樹林地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。

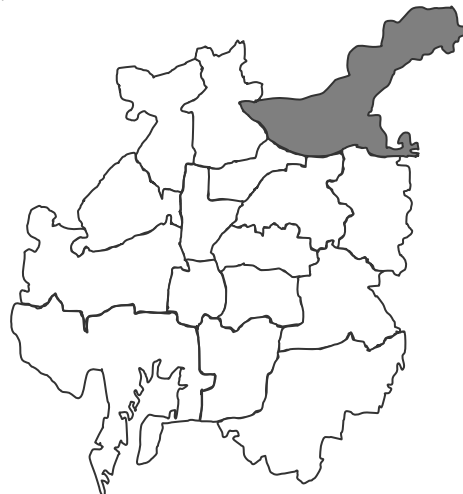
【引用文献】

荒井秋晴・足立高行・桑原佳子・吉田希代子, 2003. 久住高原におけるテン *Martes melampus* の食性. 哺乳類科学, 43: 19-28.
Tatara, M. and T. Doi, 1994. Comparative analyses on food habits of Japanese marten, Siberian weasel, and leopard cat in the Tsushima Islands, Japan. *Ecological Research*, 9: 99-107.

【関連文献】

阿部 永, 2007. テン. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, pp.246-247. 北海道大学出版会, 札幌.
子安和弘・織田銃一, 2009. テン. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.87. 愛知県環境部自然環境課.
高田靖司, 2004. テン. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編, p.32. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <食肉（ネコ）目 イタチ科>

ニホンイタチ *Mustela itatsi* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内での本種の分布はすでに局所的であるのに加え、外来種のシベリアイタチが市街地だけではなく、緑地や山地にまで分布を拡大しており、今後、市内における本種の個体数回復や分布の拡大は見込めない。

【形態】

体サイズに性的二型があり、雌は雄より小型である。頭胴長は雄 27.8～36.9cm、雌 22.9～26.5cm、尾長は雄 11.2～15.1cm、雌 9.0～10.5cm、体重は雄 270～600g、雌 110～180g。成獣の尾率は 50%を超えないとされる。ただし、尾率だけの判定ではシベリアイタチとの誤同定を引き起こす（川口，2006）。特に幼獣期には適用できない（佐々木，2011）。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（上志段味東谷、中志段味天白、中志段味沢田）。

【県内の分布】

県内全域（平地についてはシベリアイタチと置き換わっている可能性がある）。

【国内の分布】

本州、四国、九州といくつかの周辺島嶼。北海道、伊豆諸島、五島列島などに移入による分布がみられる。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

雌は一定の行動圏を持ち、雄はいくつかの雌と重なるような行動圏を持つ。水辺の環境を好み、甲殻類、昆虫類、魚類、カエル、鳥類、ネズミ類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

従来の市内における本種の生息情報はシベリアイタチとの区別が困難な例もある。計測値から確実にニホンイタチと同定できたのは、（高田，2002）が 1990 年代に中志段味で記録した 2 個体であった。著者らが 2012～2014 年に市内各所で得られたイタチ類 45 個体の標本を同定した結果、本種と同定されたのは、東谷山地域の農地で捕獲された雄 1 個体のみであった。減少の要因として、市街化で生息適地が減少したのに加え、すでに市内の山地や緑地にも進出したシベリアイタチの影響があげられる。

【保全上の留意点】

本種の生息域では、これ以上の人為的攪乱やシベリアイタチの侵入を防ぐ必要がある。

【引用文献】

- 川口 敏，2006. 香川県産 *Mustela* 属 2 種の事故死体の同定と分布. 哺乳類科学, 46(1): 35-39.
 佐々木浩，2011. シベリアイタチ 国内外来種とはなにか, 日本の外来哺乳類 - 管理戦略と生態系保全 - （山田文雄・池田透・小倉 剛編），pp.259-283. 東京大学出版会，東京.
 高田靖司，2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, 62:1-5.

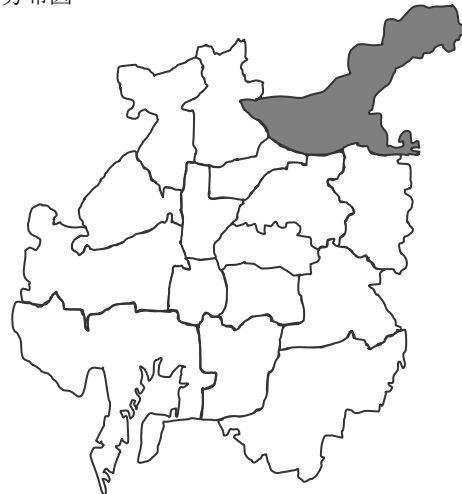
【関連文献】

- Masuda, R. and S. Watanabe, 2009. *Mustela itatsi* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.240-241. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
 米田政明，2008. イタチ. 日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.82. 東海大学出版会，秦野.



ニホンイタチ、
守山区上志段味東谷、2012 年 5 月 1 日、野呂達哉 撮影

市内分布図



（執筆者 野呂達哉）

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イタチ科>

ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

最近の市内での確実な記録は一例のみであり、生息密度は低いものと推測される。生息適地である緑地や農地の減少が著しい市内では、隣接する地域からの個体の流入がない限り、個体群を維持することは難しいと考えられる。

【形態】

体色は背面が暗黄褐色で、腹面が暗褐色。四肢は黒い。両眼周辺は暗褐色。体は頑丈で、四肢は太短く、手の爪は強大。頭胴長 44～68cm、尾長 11.6～18.0cm。体重は 4～9kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区(鳴海町大清水)。

【県内の分布】

豊根村、東栄町、設楽町、新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、田原市、知多市、犬山市、小牧市、春日井市、名古屋市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低山帯の森林、低木林に生息する。地中にトンネルを掘り、血縁の家族群で生活する。雑食性でミミズ類、昆虫類、両生類、果実類などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2013年9月、市内では31年ぶりに緑区鳴海町大清水のブドウ畑で確認された(野呂, 2014)。確認場所には樹林地や農地が残っているが、すでに周辺まで市街化が進んでいる。

【保全上の留意点】

生息適地の樹林地や農地を残していくとともに、隣接する地域との繋がりを保つための緑地帯を確保する必要がある。

【特記事項】

市内では1982年に中区千代田三丁目のマンション11階ベランダで発見された記録がある(朝日新聞名古屋版1982年1月3日)。この記録だけでは野生個体と判断できなかったため、今回の市内分布図には示さなかった。

知多半島では絶滅したとされていたが(宮尾ほか, 1984)、最近、知多市で生息が確認された(エコレコあいち Vol.7 2014年7月25日発行)。

【引用文献】

宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984, 6. アナグマ. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.309-310. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

野呂達哉, 2014. 緑区のブドウ畑で確認されたニホンアナグマ. 生きものシンフォニー13号. なごや生物多様性センター.

【関連文献】

阿部 永, 2007. アナグマ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p.251. 北海道大学出版会, 札幌.

Kaneko, Y., 2009. *Meles anakuma* Temminck, 1844. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild Mammals of Japan*, pp.258-260. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

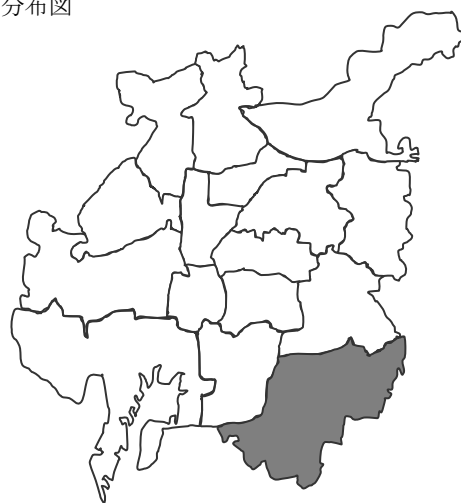
子安和弘・織田統一, 2009. アナグマ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.90. 愛知県環境部自然環境.



ニホンアナグマ

緑区鳴海町大清水、2013年9月28日、小島盛夫 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <クジラ目 ネズミイルカ科>

スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内生息域である名古屋港は、大型船舶が行き来する日本有数の貿易港であり、都市域を流れる河川が多数流入する水域である。沿岸性が強い本種にとって、これら人間活動の影響による生息環境の悪化や個体数の減少が懸念される。

【形態】

頭が丸く、くちばしや背鰭がない。成体の体色は淡い灰色。全長には地理的変異があり、瀬戸内海～響灘と伊勢湾～三河湾では200cm以上の個体もみられるが、有明海～橘湾では最大175cmと小型である。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区（名古屋港）。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾。

【国内の分布】

主に有明海～橘湾、大村湾、瀬戸内海～響灘、伊勢湾～三河湾、東京湾～仙台湾沿岸の5水域。

【世界の分布】

ペルシャ湾からパキスタン、インド、インドネシアを経て中国沿岸から日本沿岸まで。

【生息地の環境／生態的特性】

日本では沿岸の海域に生息する。50m以下の浅い水深で水面に岩の露出がない場所を生息域としている。主に魚類、頭足類、甲殻類を採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋港での目視数は海水温の低下する冬季に最も多く、夏季には少ない。名古屋港は海水温が低下する冬季において、火力発電所などの温排水の影響で小魚が集り、本種の格好の餌場になっていると推測されている（斎藤ほか、2014）。

【保全上の留意点】

多くの都市河川が流入し、商船の往来が激しい名古屋港では、本種は人間の生産活動の影響を受けやすいと考えられている（斎藤ほか、2014）。本種の生息に配慮した港の整備や啓発活動が求められる。

【特記事項】

冬季には堀川など市内の河川に餌を追って迷入する個体も見られ、浅瀬に乗り上げるなどして死亡することもある（中日新聞2011年1月31日朝刊など）。

【引用文献】

斎藤 豊・堂崎正博・祖 一誠、2014. 名古屋港に生息するスナメリの調査. 海洋と生物, 36(1): 29-35.

【関連文献】

長谷川修平・大池辰也・浅井康行・村上勝志、2014. ストランディング記録からみた伊勢湾・三河湾のスナメリについて. 海洋と生物, 36(2): 135-141.

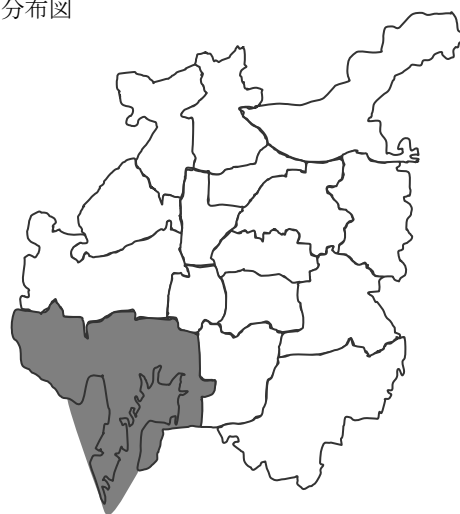
Shrakihara, M. and M.Yoshioka, 2009. *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.390-391. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.



スナメリ

三河湾、2014年5月18日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <トガリネズミ目 モグラ科>

ヒミズ *Urotrichus talpoides* Temminck

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では東部地域の緑地に分布するが、生息地は局所的で孤立が著しい。落葉層や腐葉層が豊かで湿潤な土壌環境を好むが、緑地の公園化などによって生息適地が消失または劣化した。市内での生息密度は低いと推測される。

【形態】

半地下性の小型のモグラ類で、前肢は地下性のモグラ類ほど発達していない。尾は棍棒状で太く、ブラシ状の長毛が生える。頭胴長 89～104mm、尾長 27～38mm、後足長 13.8～16mm、体重 14.5～25.5g。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山、小幡緑地本園、吉根階子田、吉根大鼓ヶ根、川東山）、名東区（明徳公園、猪高緑地）、千種区（東山公園）。

【県内の分布】

知多半島を除く県内全域の樹林地など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、淡路島、小豆島、隠岐諸島、対馬など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

半地下性で、落葉層や腐植層に網目状のトンネルを掘り生活している。樹林地の湿った土壌環境を好み、乾燥に弱い。河畔林にも生息するが、樹林地と繋がっている場所に多く、礫や砂の堆積した河川敷ではあまりみられない（野呂，2009）。ミミズ類やクモ類、ジムカデ類、昆虫類、種子などを採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内の山地では普通種であるが、市内での確認例は少なく、分布は局所的である。生息地の開発や植生の伐採等により土壌の乾燥化が進むと生息適地が減少する。確認されている緑地内でも、生息適地は少なく、生息密度は低いと考えられる。

【保全上の留意点】

生息地付近では新たな開発を避ける、落葉の踏み荒らしを防ぐ、側溝に落ちると脱出できないため、脱出用スロープ付の U 字溝を取り付けるといった配慮が必要である。

【引用文献】

野呂達哉，2009．矢作川河畔林における哺乳類の基礎調査報告．矢作川研究，13: 105-112．

【関連文献】

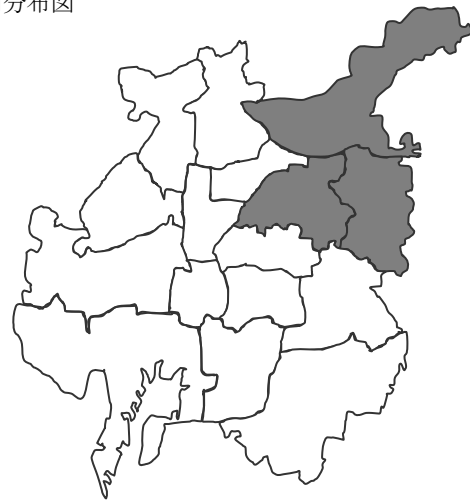
阿部 永，2008．ヒミズ．日本の哺乳類〔改訂 2 版〕（自然環境研究センター編），p.18．東海大学出版会，神奈川．
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一，1984．3．ヒミズ．愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp. 288-289．愛知県郷土資料刊行会，名古屋．
名古屋ため池生物多様性保全協議会，2010．2009 年度なごやため池生きものの生き生き事業報告書，207pp．名古屋ため池生物多様性保全協議会．
名和 明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市．
高田靖司，2004．ヒミズ．名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編，p.34．名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室．



ヒミズ

名東区明徳公園、2009 年 10 月 4 日、野呂達哉 撮影

市内分布図



（執筆者 野呂達哉）

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 ネズミ科>

カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種の生息場所である高茎草地は、市街化や河川改修に伴う整備によってその多くが消失した。現在残っている場所は極めて局所的であり、小規模の開発でも個体群消失のおそれがある。

【形態】

日本に生息するネズミ類の中では最も小型。体色は背面が赤褐色か暗褐色で腹面は白色。尾の先端の毛の一部はない。頭胴長 54～78.5mm、尾長 47～91mm、体重 5.3～14g。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区（東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、大森、瀬古、幸心、川、吉根、中志段味宮裏、下志段味真光寺、川西）名東区（明德公園、猪高緑地、牧野ヶ池緑地）、天白区（荒池緑地）、緑区（鳴海町笹塚、大高町）、北区（成願寺町北野）、西区（庄内緑地、中小田井）、中川区（富田町万場、富田町長須賀）港区（当知町草野、南陽町藤前）。

【県内の分布】

設楽町、豊田市、新城市、豊川市、豊橋市、田原市、岡崎市、安城市、幸田町、みよし市、日進市、尾張旭市、名古屋市、北名古屋市、春日井市、知多市、美浜町、南知多町、弥富市。

【国内の分布】

本州の宮城県以南、四国、九州、対馬、隠岐諸島、淡路島など。

【世界の分布】

ユーラシアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

低地の草地に多く、イネ科草本などで球状の巣を作る。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを採食する。春から秋にかけて繁殖し、1回に2～8仔を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では緑地内の湿地や河川沿い、水田周辺の草本群落で巣が確認されている。局所的で、攪乱されやすい環境に営巣しているため、小規模の開発でも影響を受けると考えられる。

【保全上の留意点】

繁殖期の草刈りは避ける。草刈りを行う場合は何度かに分け、避難できるスペースを残すといった配慮が必要である（畠，2014）。

【引用文献】

畠佐代子，2014. 草刈りとカヤネズミのくらしを両立させるには、カヤネズミの本，pp.93-95. 世界思想社，京都。

【関連文献】

阿部 永，2007. カヤネズミ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説，p.251. 北海道大学出版会，札幌。

子安和弘，2009. カヤネズミ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，p.77. 愛知県環境部自然環境課。

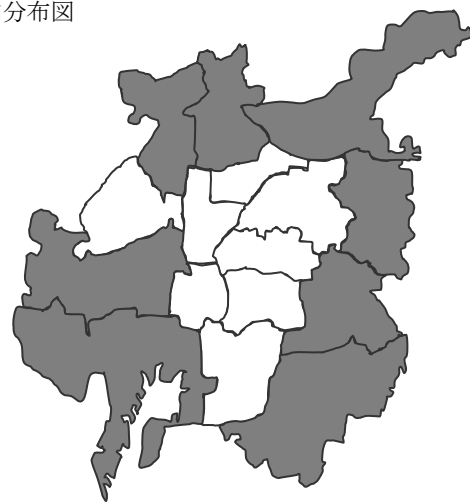
宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一，1984. 8. カヤネズミ. 愛知の動物（佐藤正孝・安藤尚編），pp.297-298. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋。

高田靖司，2004. カヤネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2004 動物編，p.36. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室。



カヤネズミ、
北区成願寺町北野、2013年3月31日、宇地原永吉 撮影

市内分布図



（執筆者 野呂達哉）

哺乳類 <トガリネズミ目 モグラ科>

コウベモグラ *Mogera wogura* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	地域個体群
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州中部以南では普通種であり、市内での分布も広範囲に及ぶが、攪乱の起こりやすい環境に生息し、さらに小個体群に分断されていることから、小規模の開発でも個体群消失に繋がるおそれがある。

【形態】

地下生活に適応し、前肢の幅が広く、尾は短い。頭胴長 125～185mm、体重 48.5～175g。体サイズの変異は大きく、山間部に比較して平地部の個体群は大型化する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山、小幡緑地本園、上志段味、中志段味、大森、川西など）、名東区（牧野ヶ池緑地、猪高緑地など）、千種区（平和公園、東山公園など）、天白区（相生山緑地、荒池緑地など）、緑区（大高緑地、鳴海町笹塚など）、北区（福德町、成願寺町など）、中区（名古屋城外堀など）、西区（庄内緑地など）、中村区（稲葉地町など）、中川区（富田町万場など）。

【県内の分布】

県内全域の森林内、農地、河川敷など。

【国内の分布】

本州中部以南、四国、九州、隠岐諸島、対馬、五島列島、種子島、屋久島など。

【世界での分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

完全な地下性で、土壌層が厚く、主食となるミミズ類が多い場所を選好する。森林内、農地、水田の畦、河川沿いに発達した土壌堆積地などを生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化や道路建設、河川の改修工事等で減少した。現在、公園緑地などに孤立して生息するが、庄内川などの河川沿いにはさらに孤立した小個体群が残存する。

【保全上の留意点】

これ以上の生息地の消失、縮小、分断化を防ぐとともに、人による生息地の踏み荒らしや車両等の侵入を防ぐ必要がある。

【特記事項】

愛知県のレッドリストでは、体サイズの大きい名古屋城の個体群が特徴的な地域個体群に指定されている。名古屋城の個体群は二の丸側と三の丸側の二つの外堀とその周辺に生息する。

【関連文献】

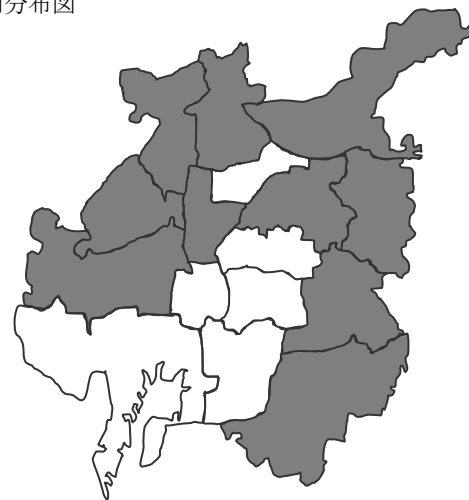
阿部 永, 2008. コウベモグラ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕(自然環境研究センター編), p.24. 東海大学出版会, 秦野.
子安和弘・織田統一, 2009. コウベモグラ(名古屋城外堀の個体群). 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編, p.90. 愛知県環境部自然環境課.
名古屋ため池生物多様性保全協議会, 2011. 平成22年度生物多様性保全推進支援事業 名古屋ため池生き物いきいき計画事業報告書, 81pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
織田統一, 2010. コウベモグラ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや 2010 - 2004 年版補遺 -, p.77. 名古屋環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 愛知県.
織田統一, 2010. 名古屋城のお堀のコウベモグラ. 生き物から見た名古屋の自然 - なごやの環境指標種 100 (改訂版) -, pp.16-17. 財団法人三菱 UFJ 環境財団, 東京.



コウベモグラ

中区名古屋城外堀、2010年3月24日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆 野呂達哉)

哺乳類 <齧歯(ネズミ)目 ネズミ科>

アカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は、樹林地や草地、河畔林、農地といった緑被をともなう多様な環境に生息するが、市内では市街化により緑被の面積が年々減少しており、生息地の消失や縮小、分断化は未だ進行中である。

【形態】

体色は背面が褐色から橙褐色で腹面は白色。頭胴長 83~140mm、尾長 69~129mm で、体重 20~72.5g。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区(東谷山、小幡緑地本園、八竜緑地、竜泉寺、吉根など)、名東区(猪高緑地、牧野ヶ池緑地、高針など)、千種区(平和公園、東山公園など)、天白区(相生山緑地、荒池緑地など)、緑区(鳴海町笹塚、大高町中之瀬など)、北区(成願寺町北野など)、西区(中小田井、庄内緑地)、中村区(岩塚町)、中川区(富田町万場、中須町)、港区(当知町、南陽町藤前)。

【県内の分布】

県内全域(尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島)で確認されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、利尻島、佐渡島、隠岐諸島、伊豆諸島、五島列島、対馬、屋久島など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から高山帯、草原から森林まで広範囲に分布している。また、樹林地や草地、河畔林、農地といった多様な環境を生息場所としている。雑食で根茎類、種子、果実、昆虫類を採食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、主に東部地域と西部地域の広い範囲に分布しており、緑地やため池、河川、農地周辺の樹林地や草地が生息場所となっている。生息地である緑被の面積は市全域で年々減少している(名古屋市, 2010)。

【保全上の留意点】

河川敷や農地周辺に残された草地は、一見荒地に見えるため、開発の手が入りやすい。しかし、このような環境も本種にとっては重要な生息場所であり、保全に配慮していく必要がある。

【引用文献】

名古屋市, 2010 年. 名古屋のみどり - 緑の現況調査報告書 - デジタルマッピング手法による緑被調査. 名古屋市緑政土木局緑地部緑化推進課.

【関連文献】

阿部 永, 2007. アカネズミ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, p.231. 北海道大学出版会, 札幌.

名古屋ため池生物多様性保全協議会編, 2010. 2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書, 207pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.

名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然(新修名古屋市史資料編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.

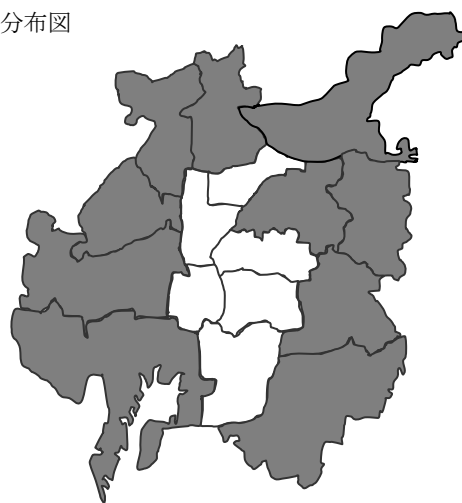
高田靖司, 2004. アカネズミ. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004 動物編, p.38. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室.



アカネズミ

千種区平和公園、2009 年 6 月 15 日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <食肉(ネコ)目 イヌ科>

タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では急激な市街化で生息地が失われ、一時は減少したと考えられるが、近年、市街地や都市域での確認例も増え、個体数は回復に向かっていると推測される。ただし、疥癬や交通事故が原因で死亡する個体も多く、未だ予断は許されない状況である。

【形態】

体毛は全体的に灰黒色に見えるが、目の周りや四肢の毛は濃い黒色。尾は太く見える。イヌやキツネに比較して四肢が短い。頭胴長 51.5～68.0cm、尾長 13～19.5cm、体重 3～5kg。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内全区。

【県内の分布】

県内全域（尾張地域、西三河地域、東三河地域、知多半島）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、佐渡島、瀬戸内諸島など。

【世界の分布】

中国から北の東アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

生息範囲は、樹林地から草地、農地、市街地、都市域と広範囲に及ぶ。夜行性で日中は泊り場で過ごす。泊り場は自然のものだけではなく、排水管などの人工物も利用する（吉野, 2010）。雑食性で種子や果実、昆虫類、ミミズ類、鳥類、両生類、爬虫類、小型哺乳類などを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

2012～2013 年の市内におけるへい死個体の回収記録から、すでに市内全区に分布することが明らかとなった。緑地や河川沿いの樹林地、草地などを泊り場や採食場所として利用しており、これらの消失や劣化が本種の減少につながると考えられる。また、疥癬や交通事故で死亡する個体も多いと推測される。

【保全上の留意点】

市内に残された緑地や河川沿いの樹林地、草地は、巣穴や泊り場、採食場所として重要な生息環境であり、これらの消失や減少を防ぐ必要がある。

【引用文献】

吉野 勲, 2010. 新宿御苑におけるタヌキの生息環境. *Animate*, 8: 33-36.

【関連文献】

阿部 永, 2007. タヌキ. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, pp.242-243. 北海道大学出版会, 札幌.

千々岩哲, 2006. 川辺林と残存林がホンDOTタヌキ (*Nyctereutes procyonoides viverrinus*) の行動圏利用に果たす役割. 矢作川研究, 10: 85-96.

名和 明, 2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然 (新修名古屋市史資料編編集委員会編), pp.315-322. 名古屋市.

自然環境研究センター (編), 2004. 第6回自然環境基礎調査一種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書一, 213pp. 環境省 自然環境局生物多様性センター.

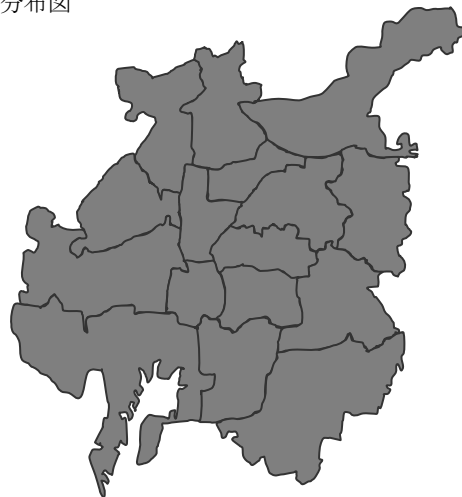
米田政明, 2008. タヌキ. 日本の哺乳類 [改訂2版] (自然環境研究センター編) p.74. 東海大学出版会, 秦野.



タヌキ

中区名古屋城外堀、2014年7月12日、酒井正二郎 撮影

市内分布図



(執筆者 野呂達哉)

哺乳類 <偶蹄（ウシ）目 ウシ科>

カモシカ *Capricornis crispus* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

わずかに生息する守山区東谷周辺での生息可能面積は小さい。生息環境の推移から見て圧迫が強まっているにもかかわらず、過去に生息していなかった本種がなぜ市内にまで分布を広げたのか、その原因を含めて生息状況を注視する必要がある。

【形態】

形態に性差はなく雌雄ともに、頭胴長は70～85cm、体重は30～45kgで13cmほどの角を持つ。市内に生息する個体の毛色は、茶褐色が多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（東谷山）。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、名古屋市、豊川市、豊田市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など。

市東部近くの愛知郡東郷町（中日新聞2013年5月21日）や、日進市米野木町（中日新聞2014年10月12日）でも目撃されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本来の生息地は低山から亜高山帯の落葉広葉樹や針葉樹林帯である。植物食性で主に樹木の葉などを採食する。ふつう、春から初夏に1頭の子を出産する。1ペアで1km²ほどのなわばりを持つ。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前には市内で生息が確認されなかったが、1997年以降、守山区と瀬戸市の市境付近で何度も目撃されている（例えば、中日新聞2003年5月22日）。その後、2006～2010年にかけて東谷山周辺で複数のカモシカの生息を確認している。なわばりを持つとされる本種では、一定面積に少数の個体しか生息できない。市周辺で分布が拡大する傾向にあるが、市内では生息可能な面積が小さく、分布を広げても道路網の発達や宅地造成などにより分断化され消滅することが予想される。

【保全上の留意点】

農作物被害や交通事故の要因となる可能性があるため、今後の動向に注意し、情報を収集する必要がある。

【特記事項】

国の特別天然記念物である。愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっており、県東部で捕獲が継続されている。

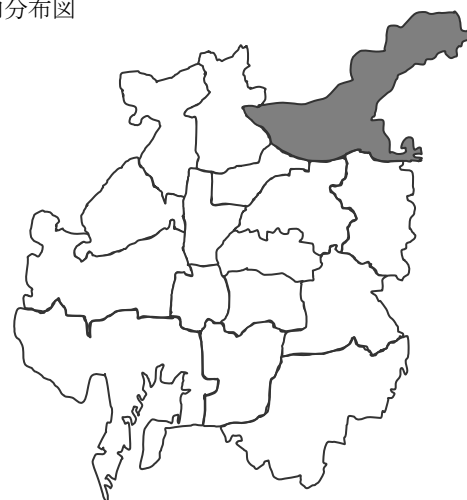
【関連文献】

愛知県環境部自然環境課，2012. 特定鳥獣保護管理計画（カモシカ），36pp. 愛知県環境部自然環境課。
三浦慎吾，2008. カモシカ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕（自然環境研究センター編），p.113. 東海大学出版会，秦野。
名和 明，2008. 哺乳類. 新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322. 名古屋市。
名和 明，2009. 名古屋市におけるカモシカの記録. マンモ・ス特別号，11: 69-75。
名和 明，2009. 森の賢者カモシカー鈴鹿山地の定点観察記一，185pp. サンライズ出版，彦根。



カモシカ
守山区東谷山、2006年9月、名和 明 撮影

市内分布図



（執筆者 名和 明・野呂達哉）

哺乳類 <翼手(コウモリ)目 オヒキコウモリ科>

オヒキコウモリ *Tadarida insignis* (Blyth)

カテゴリー

【選定理由】

市内では2011年10月に中区丸の内ではじめて確認された。その後、東谷山地域や名古屋城敷地内で本種のエコーロケーションコールを確認したが、市内でのねぐらの情報は無い。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体色は黒色。尾が長いのが特徴。前腕長 57~65mm。頭胴長 84~94mm。尾長 48~56mm、体重 30~40g。細長い翼を持ち、高速、長距離飛行に適応している。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区(丸の内、名古屋城)、守山区(上志段味東谷の蛭池周辺)。

【県内の分布】

名古屋市以外の確認例はない。

【国内の分布】

北海道(焼尻島)、埼玉県、神奈川県、三重県、京都府、兵庫県、広島県、愛媛県、高知県、熊本県、宮崎県、福岡県(沖ノ島付近)などで確認されている。

【世界の分布】

中国、台湾、韓国など。

【生息地の環境／生態的特性】

開けた空間を高速で飛行してガ類などを捕える。岩盤の割れ目や人工の建物をねぐらとした例がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城では本種が採餌時に発するエコーロケーションコールのバズ音を確認した。城のライトアップによって誘引されるガ類などを捕食していると考えられる。名古屋城の石垣隙間をねぐらとしている可能性があるが、本種は長距離飛行が可能であり、市外にねぐらを持つことも十分に考えられる。

【保全上の留意点】

名古屋城では石垣修復のための解体と積み直しが予定されており、オヒキコウモリのねぐらがいないか早急の確認が必要である。

【特記事項】

宮崎県枇榔島では乾燥した岩盤の割れ目内をねぐらとしていた(船越ほか, 1999)。また、広島市では4階建ての校舎で400頭を超えるコロニーが見つかった(畑瀬, 2000)。

【引用文献】

船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治, 1999. 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所, 個体群構成および活動について. 哺乳類科学, 39(1): 23-33.

畑瀬 淳, 2000. 広島市のオヒキコウモリ. 広島市の生物—まもりたい生命の営み—, p.158. 広島市環境局環境企画課.

【関連文献】

船越公威, 2010. 九州産食虫性コウモリ類の超音波音声による種判別の試み. 哺乳類科学, 50(2): 165-175.

前田喜四雄, 2008. オヒキコウモリ. 日本の哺乳類〔改訂2版〕(自然環境研究センター編), p.62. 東海大学出版会, 秦野.

野呂達哉, 2014. 愛知県名古屋市におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の初記録. なごやの生物多様性, 1: 65-69.

Sano, A. 2009. *Tadarida insignis* (Blyth, 1861). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.124-125. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.

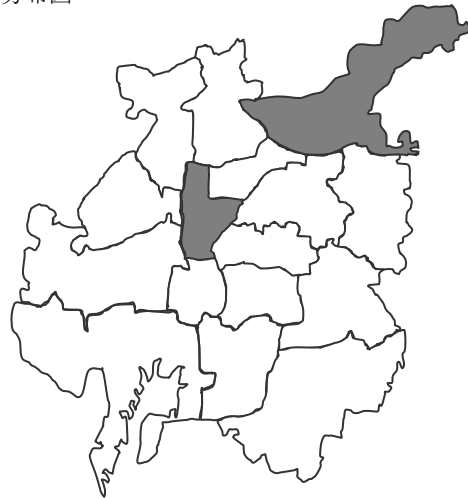
(執筆者 野呂達哉)



オヒキコウモリ

中区丸の内、2011年10月7日、野呂達哉 撮影

市内分布図



哺乳類 <霊長（サル）目 オナガザル科>

ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth)**【選定理由】**

市内ではカテゴリーを判断するに足る情報が得られていない。
市内で目撃された個体のほとんどは群れを離れて単独で行動する
離れザルである可能性が高い。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

毛色は茶褐～灰褐色。頭胴長は 48～60cm
で体重は8～16kg、尾長は7～10cmと短い。
成獣では雄が雌よりも大きいことが多い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、千種区、名東区、天白区、緑区、
昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、港区で目撃、
確認されている。分布図には目撃情報のある
区を示した。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、豊川市、豊田市、
蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村。

【国内の分布】

本州、四国、九州に生息する。

【世界の分布】

日本固有種。



ニホンザル

守山区東谷山、2004年1月10日、名和 明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

常緑・落葉広葉樹林が本来の生息地である。
10頭から場合により100頭を超える群れで、
ほぼ一定の遊動域を移動する。遊動域は
1km²未満から20km²以上まで変化する。遺
伝子の交流を担っているといわれる単独個体
（離れザル）も存在する。近年、市周辺部で
は農地や住居近くに定住する個体群も確認さ
れている。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在まで、市内で目撃された個体のほとん
どは、市外の北部や東部から市内に侵入し、
さらに他の区に移動していくと推測される。
定住していないと考えられるが、今後も一時
的に出現、遊動する可能性がある。現在、市
内には本種の群れが生息可能な適地はない。

【保全上の留意点】

県内では農業被害が発生しており、個体数
管理を実施するため「特定鳥獣保護管理計画」の対象種となっている。農作物や人的被害につな
がる可能性があるため、今後の動向に注意し、情報を収集する必要がある。

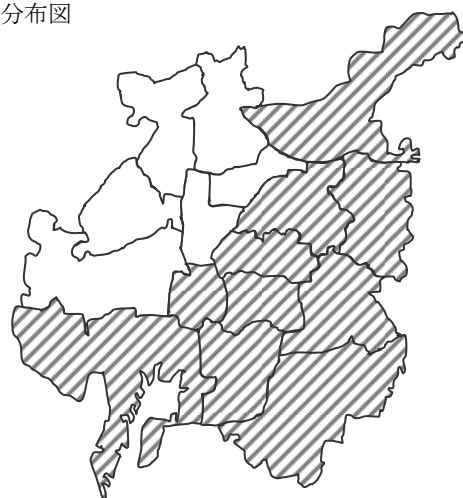
【特記事項】

2000年以前には、飼育個体が市内で捕獲された記録が2例あるのみで、野生個体の記録はない
（中日新聞1975年8月27日、毎日新聞1988年2月12日）。しかし、2000年以降、守山区、千
種区、名東区、天白区、緑区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、港区で20件以上の目撃記録が知ら
れている（中日新聞2002年5月25日ほか）。その多くは離れザルの一時的な移動と考えられる。

【関連文献】

愛知県環境部自然環境課，2012．特定鳥獣保護管理計画（ニホンザル），34pp．愛知県環境部自然環境課。
Endo, H., 2009. *Macaca fuscata* (Blyth, 1875). In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), *The Wild
Mammals of Japan*, pp.128-130. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
石井信夫，2008．ニホンザル．日本の哺乳類〔改訂2版〕（自然環境研究センター編），pp.66-67．東海大学出版会，秦野。
名和 明，2008．哺乳類．新修名古屋市史資料編自然（新修名古屋市史資料編編集委員会編），pp.315-322．名古屋市。

市内分布図



▨ : 目撃情報のみ

（執筆者 名和 明・野呂達哉）

哺乳類 <偶蹄(ウシ)目 イノシシ科>

イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

江戸時代には市内に生息していたが、2000 年前後まで市内での記録がなく、絶滅と判断されていた。最近になり守山区東谷山や天白区相生山での生息が確認された。近隣からの侵入個体が多くなっていると考えられるが、詳しい由来は不明である。

【形態】

毛色は褐色から暗黒色である。犬歯が発達しオスでは牙となる。メスで頭胴長 125cm、体重 50kg、オスで頭胴長 145cm、体重 100kg 以上になる。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区(東谷山)、天白区(相生山)。野生個体か定かではないが、西区や北区、天白区、緑区で迷走個体が目撃されている(中日新聞 2004 年 3 月 4 日など)。

【県内の分布】

豊橋市、岡崎市、瀬戸市、長久手市、豊川市、豊田市、名古屋市、蒲郡市、新城市、幸田町、設楽町、東栄町、豊根村など。

【国内の分布】

本州・四国・九州やその周辺島嶼。

【世界の分布】

北アフリカからユーラシア大陸にかけて広く分布。

【生息地の環境／生態的特性】

森林、林縁から農耕地、市街地周辺まで広く生息できる。雑食性で植物の根茎や果実、昆虫など小動物を主な食物としている。産仔数は 4~5 頭と多産である。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では絶滅と考えられてきたが、最近になり守山区東谷山や天白区相生山で生息が確認された。東谷山では繁殖している。東谷山の確認場所であるヌタ場周辺では、現在、絶滅の危険を示す兆候はない。

【保全上の留意点】

愛知県では個体数の増加、分布の拡大が顕著で、農作物などへの被害が発生している。人家近くへの出没の可能性もあり、市内へこれ以上侵入すると農作物などへの被害、交通事故による車両や人への被害などの発生が懸念される。今後の動向に注意する必要がある。

【特記事項】

愛知県では特定鳥獣保護管理計画の対象種となっている。

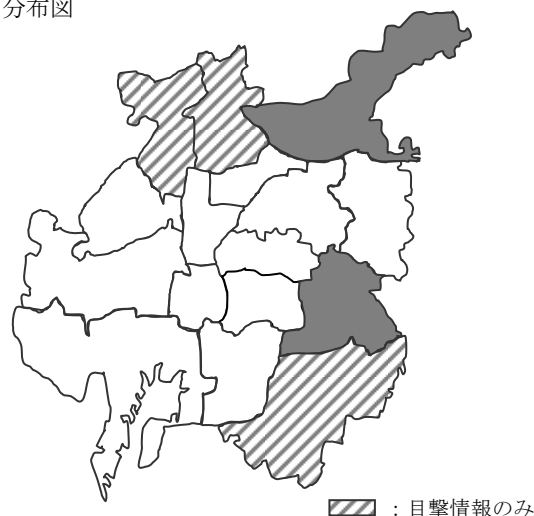
【関連文献】

愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(イノシシ), 31pp. 愛知県環境部自然環境課。
安達厚三, 1997. 縄文人のくらし. 新修名古屋市史編集委員会(編), 新修名古屋市史第一巻, p.111. 名古屋市。
Kodera, Y., 2009. *Sus scrofa* Linnaeus, 1758. In: S. D. Ohdachi, Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.), The Wild Mammals of Japan, pp.304-305. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
三浦慎吾, 2008. イノシシ. 日本の哺乳類[改訂2版](自然環境研究センター編), pp.108-109. 東海大学出版会, 秦野。
野呂達哉, 2013. なごやのイノシシ. 生きものシンフォニー8号. なごや生物多様性センター。
名和 明, 2010. 名古屋市における哺乳類の記録. マンモ・ス特別号, 12: 17-23.



イノシシ
守山区東谷山、2013 年 5 月 14 日、野呂達哉 撮影

市内分布図



(執筆者 名和 明・野呂達哉)

鳥類

① 名古屋市における鳥類の概況

名古屋市内に野生する鳥類をまとめた報告は、武内功（1959）の「名古屋地方の鳥」（中部日本自然科学調査報告第3報）に34科150種が記述されて以来、久しく出なかった。しかし、以後調査が行われなかった訳ではなく、有志による地域的な調査は続いてきた。また日本野鳥の会等が主催する探ryousei鳥会が各地で行われ、それらの成果の概略は同会愛知県支部（旧名、名古屋支部）が発行する支部報等に随時掲載されたが、市全体の鳥相調査を目的としていないため、対象地が偏る傾向は否めなかった。

一方、組織的な調査としては、「名古屋市野鳥生息状況調査」が1975年以降ほぼ5年ごとに行われ、「名古屋の野鳥」（1976, 1981, 1986, 1991, 1996, 2001, 2006, 2010）という冊子にその成果がまとめられてきた。この一連の調査は1975年の初回（5、7、9、11、12月に実施）を除き、4月から翌年3月まで毎月一回のペースで行なわれ、決められた調査員が実施したセンサスの結果を、種ごとに1～3羽、4～10羽、11～50羽、51～500羽、501～1000羽、1001羽以上の6段階に分け、記号化して記している。

もっとも、名古屋市が行なったこの生息状況調査も、「区」別の状況を調べるのが目的でないため、調査地の選定に偏りがあり、1970年代には北区、西区、中村区、中川区内に調査地が無いなど、初期には東に重く西に軽い傾向が顕著であった。しかし、その後、次第にこの偏りは改善され、各区の調査密度は平均化されつつある。

そのほか最近の新しい試みとしては、なごや生物多様性保全活動協議会が一般市民の協力を得て、市内45ヶ所で行った調整結果が「なごや丸ごと鳥さがし!!」（2012）として公表されている。

またそれらとは別に1967年以降、愛知県が日本野鳥の会名古屋支部（1982年以降は愛知県支部と改称）に委託し、県内複数地点で毎月行っている「愛知県野生鳥類生息調査」（略して「定点調査」）があり、名古屋市内では千種区平和公園（1967～）、天白区平針（1968～）、港区庄内川河口（1992～）の3地点の記録が掲載されている。また近隣地域の記録としては、愛知県弥富野鳥園から1967年以降、毎月の鳥類調査結果が、半年ごとに発行される「野鳥園だより」に公表されており、更に2012年以降中日本高速道路株式会社名古屋支店ほかが行っているサギ類の調査結果が「東名阪自動車道弥富IC・蟹江ICに飛来営巣するサギと高速道路との共生に向けた活動報告」に公表されている。

これらの調査結果から、名古屋市に野生する鳥類の分類別種数と繁殖種名をまとめると、表5のようになる。

表5 名古屋市に野生する鳥類の分類別種数と市内で繁殖記録のある種

目	科	種数 名古屋市/全国	繁殖種
キジ	キジ	3 / 5	キジ
カモ	カモ	24 / 56	マガモ、カルガモ
カイツブリ	カイツブリ	4 / 5	カイツブリ
ハト	ハト	2 / 11	キジバト
ミズナギドリ	ミズナギドリ	3 / 22	
コウノトリ	コウノトリ	1 / 2	
カツオドリ	グンカンドリ	1 / 2	
	ウ	2 / 4	カワウ
ペリカン	サギ	13 / 19	ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アマサギ、アオサギ、コサギ
	トキ	3 / 4	
ツル	クイナ	6 / 14	ヒクイナ、バン
カッコウ	カッコウ	4 / 11	
ヨタカ	ヨタカ	1 / 1	ヨタカ
アマツバメ	アマツバメ	3 / 4	
チドリ	チドリ	10 / 15	ケリ、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ
	セイタカシギ	1 / 2	
	シギ	34 / 58	イソシギ
	レンカク	1 / 1	
	タマシギ	1 / 1	タマシギ
	カモメ	17 / 45	コアジサシ
	トウゾクカモメ	2 / 4	
タカ	ミサゴ	1 / 1	
	タカ	12 / 25	ハチクマ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ
フクロウ	フクロウ	6 / 11	フクロウ、アオバズク
サイチョウ	ヤツガシラ	1 / 1	
ブッポウソウ	カワセミ	4 / 8	カワセミ
	ブッポウソウ	1 / 1	
キツツキ	キツツキ	5 / 12	コゲラ
ハヤブサ	ハヤブサ	4 / 8	
スズメ	ヤイロチョウ	1 / 2	
	サンショウクイ	1 / 2	
	コウライウグイス	1 / 1	
	カササギビタキ	1 / 2	
	モズ	4 / 8	モズ
	カラス	3 / 11	ハシボソガラス、ハシブトガラス
	キクイタダキ	1 / 1	
	ツリスガラ	1 / 1	
	シジュウカラ	4 / 7	ヤマガラ、シジュウカラ

目	科	種数 名古屋市/全国	繁殖種
スズメ	ヒバリ	1 / 6	ヒバリ
	ツバメ	4 / 8	ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ
	ヒヨドリ	1 / 2	ヒヨドリ
	ウグイス	1 / 2	ウグイス
	エナガ	1 / 1	エナガ
	ムシクイ	5 / 15	
	メジロ	1 / 3	メジロ
	センニュウ	1 / 6	
	ヨシキリ	2 / 7	オオヨシキリ、コヨシキリ
	セッカ	1 / 1	セッカ
	レンジャク	2 / 2	
	ゴジュウカラ	1 / 1	
	ミソサザイ	1 / 1	
	ムクドリ	2 / 7	ムクドリ
	カワガラス	1 / 11	
	ヒタキ	24 / 51	トラツグミ、キビタキ
	イワヒバリ	1 / 3	
	スズメ	2 / 3	スズメ
	セキレイ	6 / 10	ハクセキレイ、セグロセキレイ
	アトリ	12 / 18	カワラヒワ
	ホオジロ	9 / 27	ホオジロ
20 目 59 科 270/563 種(市内での繁殖種 : 56 種)			

注) 分類は、日本鳥類目録 改訂第7版 (日本鳥学会, 2012) に拠った。

* : 名古屋市内では記録のない鳥類 4 目 22 科 70 種を加えると、日本全国での合計は 24 目 81 科 633 種となる。

合計の20目59科270種という数字は、日本全国24目81科633種（日本鳥学会，2012）に比べて種数で42.7%となり、一見少ないように見える。他都市の近年の資料が手許に無いため比較は出来ないが、カモ科（市内）24種/（全国）56種、サギ科13種/19種、トキ科3種/4種、チドリ科10種/15種、シギ科34種/58種などは全国有数の水鳥生息地藤前干潟（庄内川河口部一帯）あつての数値なので、そのような優れた鳥類生息地を持たない他都市よりは全体として豊かな数字ではないかと推測される。

しかし、その優れた干潟も、今後安定した鳥類生息地であり続けるかどうか疑わしい。環境の“多様性”を示す種数の多さは現状では保たれていても、環境の“豊かさ”を示す個体数は多くの種で減少しているからである。以下の各論でも繰り返し述べたが、周辺の淡水湿地の相次ぐ消失を含めて、当市の水辺環境は悪化の道を辿っているのが現実なのである。

この結果をもとに名古屋市の野鳥生息状況を、東部、中央部、西部に大別して概観すると、下記ようになる。

東部地域

北端の東谷山から南端に近い大高緑地まで、林地が散在しているため、比較的樹林生の種類に富んでいる。しかしその林地は年とともに減少し、ヨタカ、アオバズク等かつては普通に見聞できた種類を含め、樹林生の種類の個体数が激減していることも事実である。

また東部にはかつて水田や畑地、ため池等、自然に近い開けた環境が存在していたが、宅地開発の波に吞まれてそれらが姿を消すにつれ、ヨシゴイ、クイナ、ヒクイナ、バン、タマシギ等水辺生の種類を見る機会も少なくなった。

中央部地域

ほとんど都市化され、名古屋城周辺、鶴舞公園、興正寺、熱田神宮等に緑地が、天白川河口近くに水鳥の生息環境が存在するが、総じて地域の自然度は低く、種類も東部・西部に比べて少ない。

西部地域

まとまった林地は少なく、かつて水田や畑であったところは大規模に宅地化されて、自然度の高い区域は近年著しく減少している。そんな中であつて西区庄内緑地は多種の陸鳥が訪れる地として注目され、庄内川・新川沿いの水辺環境は貴重な水鳥生息地として著名である。後者には多種多数のシギ・チドリ類、カモメ類、カモ類、カワウ、サギ類が生息する。その一角にある藤前干潟は、一旦は市の廃棄物最終処分場に予定されたが、水鳥生息地としての国際的価値が見直され、処分場計画は撤回されて国の特別鳥獣保護区に指定され、さらに世界の湿地を保全するラムサール条約登録地にもなった。

大都市の一角にこのような環境が保全されることは特筆に価するが、この地域が将来に亘って豊かな水鳥の生息地であり続けるためには、この限られた地域内だけでなく周辺地域も含めた自然環境の厳しい管理・保全が不可欠である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、名古屋市の RDB 掲載種とそのランクを判定するに当たり、これらの調査結果を全て入念に検討した（移動性の高い鳥類の生息状況を、名古屋市という比較的狭い地域で掌握するには、近隣地域での状況を検討することが不可欠であるため、前記の資料中、当市に近い市外各地の調査結果も判定の参考にした）。

こうして類別した結果は、絶滅危惧ⅠA類（CR）2種、絶滅危惧ⅠB類（EN）7種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）15種、準絶滅危惧（NT）21種、情報不足（DD）3種、合計48種となった。

以下の種別の頁には資料の細かな内容に配慮して記述したが、原則として添付の地図には「名古屋の野鳥」8回の調査結果をまとめ、1970年代、1980年代、1990年代、2000年代の「区」を単位とする分布状況を示した。ただし前述のように北区、西区、中村区、中川区の4区では1970年代の記録は無く、更に1970年代はこのような不十分な資料が1回分しか無いのに対して、1980年・1990年代はそれぞれ2回分、2000年代は3回分の資料が合計されている（「名古屋の野鳥」の現地調査は発行年の1年前に終了していることにより、2010年発行分の内容は2000年代に含められる）ため、この図だけから分布の推移を平等・正確に把握することはできない。またこの表示法ではその種が出現した調査地数や出現回数・期間・個体数等を明示することはできず、区内の1調査地で1回、1羽だけ記録された場合でも、その区に「記録あり」と表示されているため、個体数の減少を主眼としたカテゴリーとは必ずしも合致しない面がある。

選定された48種の中には、名古屋市では近年増加の兆しを見せているミサゴが含まれている。減少傾向の顕著でないものを絶滅危惧種等とすることには矛盾があるように思われるが、近辺での繁殖状況は全く解っていないし、この種が将来に亘って安定的に増加していく可能性は現在のところ見えていないので、県や国の情報も勘案した上、敢えてRDBの対象種に含めた。

また、カテゴリーについて、現在個体数は少ないが、市内に比較的安定して生息している種（ヨシゴイ、ズグロカモメ、チュウヒ）、以前から市内では稀で、現在特に減少が目立つ訳ではない種（オオジシギ、セイタカシギ、アカアシシギ）、及び個体数は減っているが、県レベルよりはやや危急度が低いと判断された種（オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、コオバシギ、エリマキシギ）については、県より低いカテゴリーに入れた。

これとは別に、市内での生息環境が狭い等のため、危急度が高いと判断された種（クロツラヘラサギ、ヨタカ、フクロウ、コシアカツバメ、コイカル、メダイチドリ）は、県より高いカテゴリーに入れた。

その他、ウズラシギ、タカブシギについては、絶滅危惧ⅠB類にすべきか迷う要素はあったが、現在の資料に拠る限り絶滅危惧Ⅱ類が妥当と判断した。

以下、種別の記述中の個体数は、そのほとんどを森井豊久氏（名古屋鳥類調査会会長、「名古屋の野鳥」に関する調査とまとめの責任者）の資料をお借りし、庄内川河口部を中心に、年間140回もの頻度で綿密に計数された成果から、その年最多の種別記録数を掲載した。同氏にはこれらの貴重な資料を提供願ったほか、数々の有益なご助言とご協力を頂いたことを記して、心からお礼申し上げたい。

（執筆者 小笠原昭夫）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各鳥類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、この記載は、平成27年3月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（鳥類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち2015」（愛知県、2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類」（環境省、2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。写真は記録性を重視して、名古屋市内またはごく近郊で撮られたものを選び、撮影場所と年月日を明記した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が確認された地域について、各区ごと年代別に4区分（1970年代、1980年代、1990年代、2000年代）し、市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【関連文献】

対象種の関連する文献を掲載した。文献名には以下の略号を用い、対象種の掲載頁を示した。

愛知83：愛知県、1983. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.

愛知95：愛知県、1995. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.

愛知02：愛知県、2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編, 愛知県環境部自然環境課.

愛知06：愛知県、2006. 愛知の野鳥2006. 愛知県環境部自然環境課.

愛知09：愛知県、2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編, 愛知県環境部自然環境課.

繁殖78：（財）日本野鳥の会、1980. 鳥類繁殖地図調査. （財）日本野鳥の会.

分布88：（財）日本野鳥の会、1988. 動植物分布調査報告書（鳥類）. （財）日本野鳥の会.

- HBE1: Cramp, S. et al. (ed.), 1977. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 1. Oxford University Press.
- HBE2: Cramp, S. et al. (ed.), 1980. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 2. Oxford University Press.
- HBE3: Cramp, S. et al. (ed.), 1983. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 3. Oxford University Press.
- HBE4: Cramp, S. et al. (ed.), 1985. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 4. Oxford University Press.
- HBE8: Cramp, S. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 8. Oxford University Press.
- HBW1: del Hoyo, J. et al. (ed.), 1992. Handbook of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
- HBW2: del Hoyo, J. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of the World vol. 2. Lynx Edicions.
- HBW3: del Hoyo, J. et al. (ed.), 1996. Handbook of the Birds of the World vol. 3. Lynx Edicions.
- HBW4: del Hoyo, J. et al. (ed.), 1997. Handbook of the Birds of the World vol. 4. Lynx Edicions.
- HBW5: del Hoyo, J. et al. (ed.), 1999. Handbook of the Birds of the World vol. 5. Lynx Edicions.
- HBW9: del Hoyo, J. et al. (ed.), 2004. Handbook of the Birds of the World vol. 9. Lynx Edicions.
- HBW10: del Hoyo, J. et al. (ed.), 2005. Handbook of the Birds of the World vol. 10. Lynx Edicions.
- HBW15: del Hoyo, J. et al. (ed.), 2010. Handbook of the Birds of the World vol. 15. Lynx Edicions.
- HBW16: del Hoyo, J. et al. (ed.), 2011. Handbook of the Birds of the World vol. 16. Lynx Edicions.
- CBW1: del Hoyo, J. et al. (ed.), 2014. Illustrated Checklist of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.

鳥類 <ペリカン目 トキ科>

クロツラヘラサギ *Platalea minor* Temminck et Schlegel

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

かつて九州以外では迷鳥であったが、2008～2011年に毎年続けて渡来しており、定着性も示しているため、評価対象とした。世界に1,000羽前後しかしないとされる希少種で、保全には細心の注意で臨む必要がある。

【形態】

全長 60～70cm。体は白く、しゃもじ形の嘴と脚は黒い。後頭部に冠羽があり、繁殖期には冠羽と胸が黄色になる。若鳥は翼端が黒く、冠羽が短い。首と脚を伸ばして飛ぶ。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に1～2羽が渡来している。

【県内の分布】

弥富市、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部に稀に渡来している。

【国内の分布】

毎冬、九州西部に複数渡来するほか、北海道、本州、四国、五島列島、奄美諸島、琉球諸島、南大東島にそれぞれ稀な渡来記録がある。

【世界の分布】

朝鮮半島北部、中国東部・東北部（推定）、のごく限られた地域で繁殖し、日本、中国南部、台湾、ベトナム北部などで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

7月頃、海沿いの小島の岩壁で繁殖し、越冬地では干潟、河口、湿地、水田等に生息する。浅い水中で、少し開いた嘴を振り子のように左右に振りながら、魚、貝、甲殻類、昆虫などを捕食する。ウブー、ウブーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

2008年5～8月2→1羽、2009年4～12月1羽、2010年4～9月1羽、2011年4～5月、9月1羽と庄内川河口部に渡来・生息した。過去には無かった定着性を示したので、今後2羽以上飛来する可能性もあり、逆に途絶える可能性もある。世界的な希少種だけに、十分な保全対策が望まれる。

【保全上の留意点】

大陸では食用として卵採取や、湿地の減少・環境汚染が生息を脅かしていると言われる。当地では夏期を中心に記録されているが、現在のところ繁殖は考えられないので、採食場やねぐらの安全性の確保と、河口部を中心とした地形改変防止、湿地の縮小防止に尽力する必要がある。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）でENに指定されている。

【関連文献】

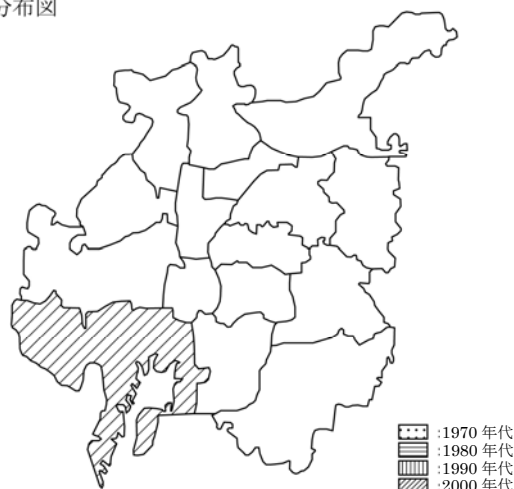
愛知 83:243, 愛知 95:139, 愛知 06:19, 分布 88:65, HBW1:505, CBW1:394.



クロツラヘラサギ

港区庄内川河口、2010年4月11日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ヨタカ目 ヨタカ科>

ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧ⅠA類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【選定理由】

かつては夏期、市内各地に渡来し、鳴き声を聞く機会も少なくなかった。特に市東部（守山区～緑区）では夏期を通じて生息する地域も稀ではなく、繁殖の記録も散見されたが、近年著しく数が減り、市内で観察される機会は極めて稀になった。

【形態】

全長 28～30cm。体は黒褐色～灰褐色の虫食い模様で、雄には外側尾羽の先端部に小さな白斑がある。翼は細長く先端が尖り気味で、尾は長め。嘴は外見上小さく扁平だが幅が広く、大きく口を開くことができる。脚は短く歩行には適さない。

【分布の概要】

【市内の分布】

夏鳥として東部に広く渡来していたが、近年著しく減少した。

【県内の分布】

夏期、平野部～低山の林に生息し繁殖しているが、近年平野部では減少している。

【国内の分布】

九州以北に夏鳥として渡来し繁殖するが、各地で減少が伝えられる。

【世界の分布】

インド～中国～ウスリー地方などで繁殖し、高緯度のものは南下して越冬する。世界では特に減少の報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から低山帯の明るい林に生息する。県内での記録は4月～10月が主だが、11月の記録もある。日没後や夜明け前に林縁や草原上を飛び回り、大口をあけて昆虫類を捕食する。林内の地上に直接卵を産んで抱卵し、育雛する。細枝を脚ゆびでつかんで止まることは稀で、通常は横枝上に平行に、腹這い姿勢で止まる。夜間キョキョキョキョキョ……ときゅうりを刻むような声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代頃までは守山区、千種区、昭和区、天白区、緑区など市東部で広く繁殖の報告があり、1979年には少なくとも市内3ヶ所で繁殖していた。その後1994年に天白区で繁殖が確認され、守山区、緑区、熱田区で生息が確認されたのを最後に、1999年には、1975年以来の一連の調査で生息の記録が消えた（2003年5月東山植物園探鳥会では1羽観察されている）。生息地である林と、餌になる昆虫の減少が主な要因と考えられる。

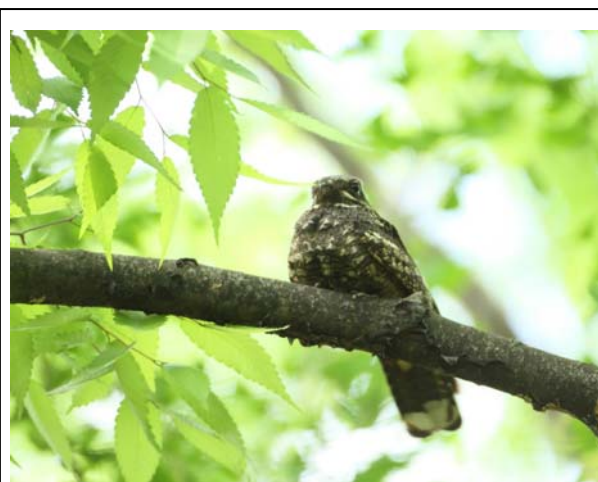
【保全上の留意点】

開発が進む都市部では難しいことだが、雑木林の保全が必要である。

【関連文献】

愛知 83:149, 愛知 95:85, 愛知 02:140, 愛知 06:86, 愛知 09:135, 繁殖 78:218, HBW5:359, CBW1:234.

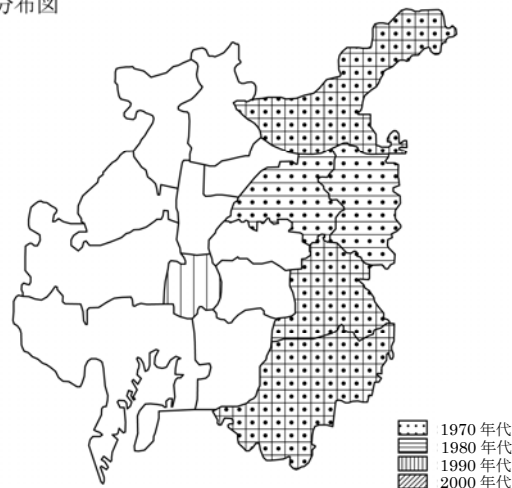
(執筆 小笠原昭夫)



ヨタカ

昭和区鶴舞公園、2010年5月9日、矢田和子 撮影

市内分布図



鳥類 <ペリカン目 サギ科>

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)**【選定理由】**

アシなどの生えた平地の水辺に普通に生息する夏鳥であったが、代表的な生息地であった庄内川、日光川河口付近でほとんど見られなくなったほか、近年市内ほぼ全域で急速に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧ⅠB類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 34～37cm。日本産では最小型のサギ。体は黄褐色で下面は上面より淡色。雌の下面には褐色の縦斑がある。頭上は雄が黒、雌が赤褐色。風切羽が黒く、飛ぶと雨覆羽の黄褐色との対比が鮮やか。幼鳥は下面が白く、黒褐色の縦斑がある。脚は黄色で、飛翔時尾端から後方にやや長く出る。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部、北部、南西部等おもに周辺部で記録されているが、1990年代後半からは南西部での記録が減少している。

【県内の分布】

鍋田干拓地、衣浦湾周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺等での記録があるが、いずれも減少の傾向にある。

【国内の分布】

主に夏鳥として渡来し、九州以北で繁殖するが近年減少が伝えられている。西日本では越冬するものもある。

【世界の分布】

アジア東部の熱帯～温帯、ミクロネシア、ニューギニア等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地のアシ原、水田、湿地の草原等に雌雄または単独で生活し、群れることは稀。通常丈の高い草の中にひそみ、開けた所に出ることはほとんど無い。魚、カエル、ザリガニ、昆虫等を捕食する。5～8月頃アシやマコモの茎の間に草の葉や茎を用いて浅い碗形の巣を作り、5～6個の卵を産んで繁殖する。外敵が近づくと首を伸ばし、嘴を上に向けて周囲にまぎれる姿勢をとる。草の上を低く直線状に飛ぶ。低い声でオーオーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

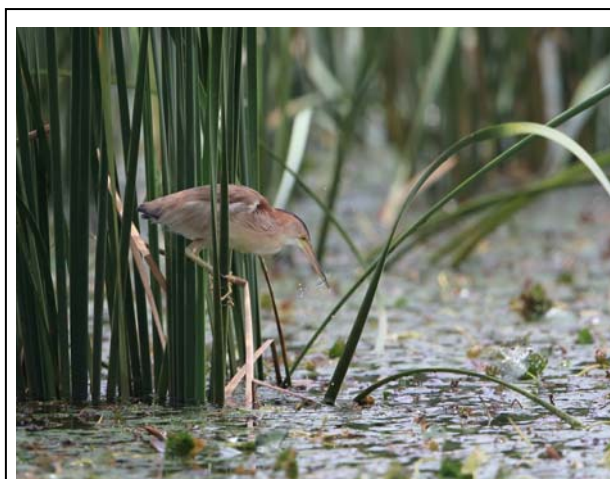
1990年代前半までは庄内川や日光川の下流部でもよく見られたが、近年減少した。名城公園や市東部のため池ではその後も記録が続く、特に緑区では毎年繁殖が確認されるほか、2001年、2002年、2003年、2004年、2005年、2006年と越冬も記録されたが、市全体としての個体数は減少している。生息環境の変化が主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

水辺の丈の高い草原が生息地であるため、近年、市内でも減少傾向にあるアシ原を保全あるいは創出することが望ましい。

【関連文献】

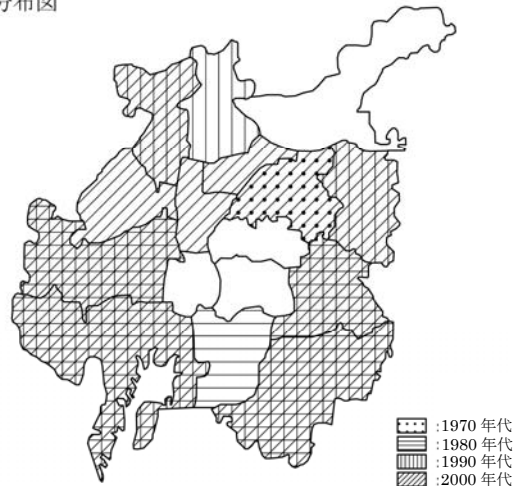
愛知 83:27, 愛知 95:18, 愛知 02:82, 愛知 06:13, 愛知 09:105, 繁殖 78:58, 分布 88:49, HBW1:426, CBW1:400.



ヨシゴイ

緑区螺貝池、2014年8月13日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <ペリカン目 サギ科>

ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* (Temminck)

カテゴリー

【選定理由】

世界でも日本だけでしか繁殖しない種で、詳しい情報はないが、個体数は漸減し 1960 年頃からは減少が加速している模様。沖縄や小笠原等離島特産の種に次いで、絶滅が懸念される。

名古屋市 2015		絶滅危惧ⅠB類
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
	通過	準絶滅危惧
環境省 2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 46～52cm。頭は茶褐色。体の上面は暗い茶褐色。下面は淡い黄褐色地に茶褐色の縦縞があり、中央に黒褐色の縦斑がある。翼の風切羽は黒く、各羽の先端は茶褐色。嘴（サギ類にしては短い）は上嘴が黒く、下嘴は黄色。脚は暗緑色。

【分布の概要】

【市内の分布】

散発的に記録され、千種区では繁殖記録もある。

【県内の分布】

夏期、山地での観察記録があり、瀬戸市での繁殖記録もあるが、情報は乏しい。

【国内の分布】

主要四島のほか松前小島（北海道）、佐渡、隠岐、伊豆諸島で夏鳥として繁殖記録があり、南西諸島等には冬鳥として渡来するが数は少ない。

【世界の分布】

日本で繁殖したものが、中国南部、台湾、フィリピン等で越冬する。日本での減少がそのまま世界での減少につながる稀少種である。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期には沢沿いの山地の森に生息し、サワガニや魚、ミミズ等を捕食する。5～7月頃、杉等の樹上に巣を作り、通常 3 個の卵を産んで繁殖する。危険を感じると体を垂直に伸ばし嘴を上に向けて静止する擬態を行う。群れることはない。夕方や早朝、ウシガエルに似た声でポォー、ポォーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

図に示した千種区（平和公園 1984 年 5 月繁殖）、熱田区（熱田神宮 1989 年 6 月 1 羽）のほか、千種区（平和公園 2005 年 5 月 1 羽）、天白区（相生山 1988 年 10 月 1 羽）、昭和区

（鶴舞公園 2001 年 5 月成鳥、若鳥各 1 羽、2002 年 5 月成鳥 1 羽）、緑区（若田橋 2005 年 10 月 1 羽）など名古屋市調査以外の記録もあるが、情報は十分でない。繁殖地が日本に限られ、世界での総個体数が 1,000 羽未満と推定されるため、国外に繁殖個体群が存在するトキやコウノトリ以上に将来が危ぶまれる。

【保全上の留意点】

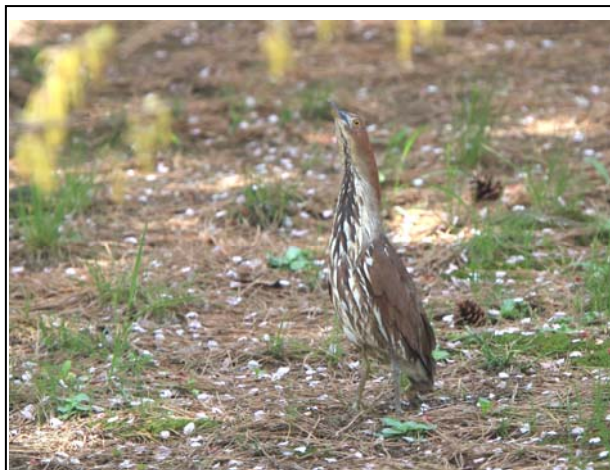
夏期、沢沿いの薄暗い森で繁殖し、渡りの際もおそらく森づたいに移動していく種類なので、そのような環境の保全が必要である。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）では、絶滅危機（EN）に指定されている。

【関連文献】

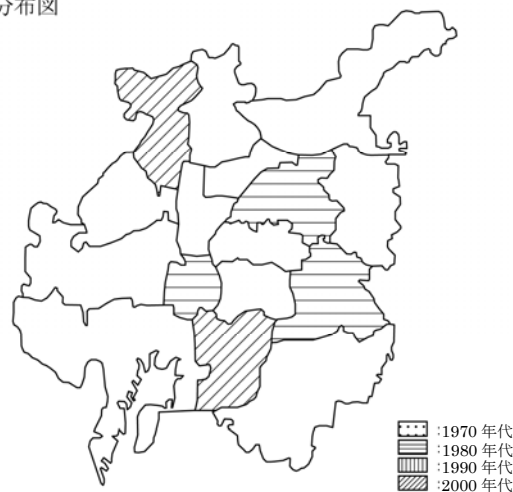
愛知 83:28, 愛知 95:18, 愛知 02:83, 愛知 06:14, 愛知 09:105, 繁殖 78:64, 分布 88:51, HBW1:420, CBW1:400.



ミゾゴイ

昭和区鶴舞公園、2010 年 4 月 11 日、矢田和子 撮影

市内分布図



（執筆 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)**【選定理由】**

北海道を中心に、世界でもごく狭い地域だけで繁殖する種であり、名古屋市は渡りの中継地に当たっているが、近年ほとんど記録が途絶えて、絶滅の危険度が高まっていると考えられる。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧ⅠB類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 28～32cm。体の上面は褐色地に多数の黒い斑紋があり、頭部は淡褐色（頭中央線、眉線、目の下の線、のど）と黒（頭側線、過眼線、頬の線）の縞模様をなす。胸、脇は淡褐色地に上胸部は黒褐色の細かな縦縞、下胸～脇には黒褐色の横縞があり、腹は白い。尾羽の先端近くに赤褐色の帯がある。嘴はまっすぐで 7～8cm と長く、淡褐色で先が黒い。脚は灰緑色。同属のタシギとの識別に注意を要する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北東部と南西部で記録されている。

【県内の分布】

春・秋の渡り期に低地で少数観察され、1982年には南設楽郡作手村で繁殖が確認された。その後の繁殖記録はない。

【国内の分布】

本州中部以北に夏鳥として渡来し繁殖する（北海道に多い）ほか、四国、九州にも稀な繁殖記録があるが、近年減少している。

【世界の分布】

サハリン南部、千島列島、ウスリー地方東南部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア東部、タスマニアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

本州では山地、北海道では低地～山地の草原へ夏鳥として渡来し繁殖する。春・秋の渡り期には低地の水田や湿地に滞在し、ミミズのほか昆虫類やイネ科の種子等を食べる。繁殖期には空を飛び回りつつズビーズビー、ズビーヤク、ズビーヤクと鳴き立て、そのあと翼をすばめ尾羽を開いて急降下しながらザーザザザザという音（尾羽が風を切る音）を出す。この独特なディスプレイから、雷シギの別名を持つ。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では 1975 年 8 月の守山区大久手池、同年 9 月の庄内川河口付近での記録以後、1990 年 9 月港区南陽町で 1 羽、2014 年 9 月庄内川河口で 1 羽など、ごく限られた記録しかない。県内での繁殖記録は途絶えたままだが、渡り期の記録も多くない。淡水湿地の減少が本種の生息域を狭めている可能性が高い。

【保全上の留意点】

市内では、専ら渡り期の滞在だが、水田等淡水湿地の保全が必要と考えられる。

【特記事項】

繁殖地が日本を中心にごく狭い区域に限られているため、日本での繁殖適地の縮小がそのまま種の衰亡につながっている可能性が高い。

【関連文献】

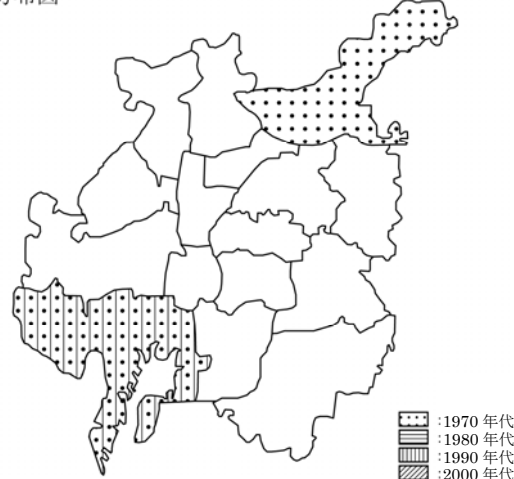
愛知 83:123, 愛知 95:70, 愛知 02:76, 愛知 06:71, 愛知 09:159, 繁殖 78:170, HBW3:492, CBW1:442.



オオジシギ

港区南陽町、2009 年 8 月 8 日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas)

カテゴリー

【選定理由】

池畔や水田等で普通に見られた種類だが、近年急速に減少してきた。県全体でも 1980 年代半ば以降の顕著な減少が報告されている。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 31～34cm。夏羽は上下面とも黒く、上面には白い小斑が密布している。目の周りには白い。冬羽の上面は淡灰褐色で下面は白く、胸側と腋に灰褐色の横縞模様があり、暗褐色の過眼線と淡色の眉線がある。

夏冬とも飛ぶと背中に白い部分が出るが、翼には目立つ模様は出ない。若鳥は成鳥の冬羽に似るがより濃色で、下面全体に灰褐色の横縞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

平野部で広く記録されているが、数は顕著に減っている。

【国内の分布】

主要四島を始め、小笠原を除くほとんどの離島で旅鳥として記録され、本州中部以西では少数が越冬する。

【世界の分布】

ユーラシア北部で繁殖し、ヨーロッパ中緯度域～アフリカ中部、アジア南部～インドネシアで越冬する。世界での個体数はほぼ安定している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口部の干潟、海に近い水田、池沼等に旅鳥として渡来するが、南下は大陸沿いが主らしく、日本では春に多い。

春の渡りは他の旅鳥たちより早く、3月上旬に渡来し始める。海水域、淡水域どちらにも生息し、昆虫類、小エビ、小貝、オタマジャクシ等を捕食する。チュイッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

おもに庄内川下流・河口付近で記録されているが、近年急速に減少しており、1972年4月庄内川河口で320羽、1975年4月県内で910羽記録されていたものが、1998年春には全国でも468羽と激減し、最近の市内では極めて稀になった。2006年以降の記録は2006年2月2羽、2009年4月1羽、2010年11月2羽、2011年10月4羽と、毎年2桁に届いていない。湿地環境の悪化がこの顕著な減少の主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

全国規模の調査を密に行い、干潟の埋め立て、水田面積の変化等環境要因との関係を解析すると同時に、自然度の高い湿地環境を保全・創出することが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:107, 愛知 95:61, 愛知 02:102, 愛知 06:61, 愛知 09:129, 分布 88:167, HBE3:517, HBW3:509, CBW1:446.

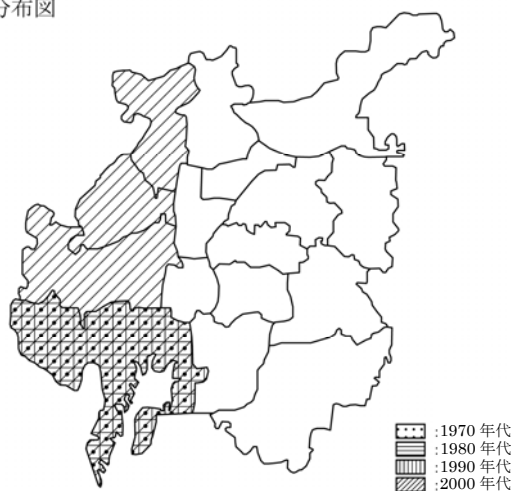
(執筆者 小笠原昭夫)



ツルシギ (冬羽)

港区藤高、2011年10月12日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 タマシギ科>

タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus)**【選定理由】**

1960年代まで市内周辺部のあちこちで観察された本種が、現在極めて稀な種になり、市内では絶滅も懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧ⅠB類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長雄約22cm、雌約26cm。先端が少し下に曲がった長い嘴を持つ。目の周囲の白、胸側の白帯と、背の前後に伸びた2本の黄色い線が目立つ。雄の方が地味な色をしており、上面は濃淡褐色の斑模様、喉～胸は灰褐色、腹は白色。雌の上面は黒褐色で細かな横縞模様があり、胸は赤褐色、腹は白色。若鳥は雄に似ている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

近年の記録は南西部だけにある。

【県内の分布】

平野部に広く留鳥として生息し、繁殖しているが、都市近郊では目立って減少している。

【国内の分布】

本州中部～南西諸島でほぼ留鳥とされるが、関東のものは冬期暖地へ移動するようである。

【世界の分布】

アジア南・東南部からオーストラリア、アフリカ、マダガスカル等で繁殖し、大きな季節移動はしない。世界での個体数に関する情報は不足している。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の水田、休耕田、蓮田、湿地等で主にミミズや昆虫類のほか草の種子等も食べている。通常草蔭に隠れているが、クイナ類よりは開けた場所で見られることが多い。4～7月頃、草むらや稲株のくぼみ等に草の茎や葉で皿形の巣を作り、3～6卵（通常は4卵）を産んで繁殖する。雌が背を丸めてウウウ、ウウウと鳴いた後、両翼を上げて雄を誘う求愛の動作は独特。雌はコーコーコー…とも鳴く。一妻多夫で抱卵・育雛は雄が行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

ここ40年間の名古屋市の調査結果では、1999年、2004年、2008年に港区で観察された記録だけ。40年以上前の組織的な調査記録はないが、過去には現在よりは多数の本種が市内に生息していた可能性が高く、近年における水田や湿地などの縮小・消滅が減少の原因と考えられる。

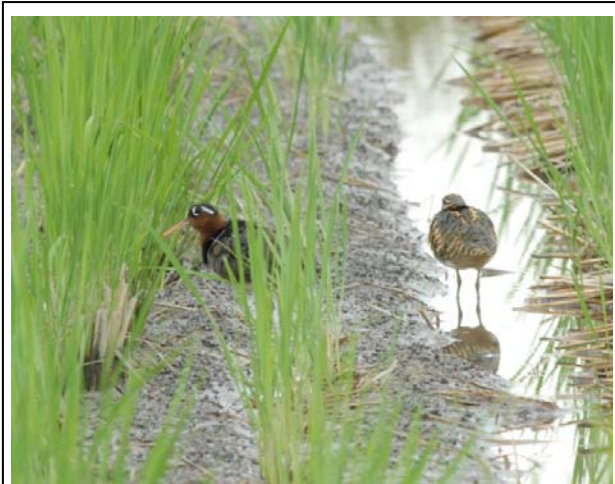
【保全上の留意点】

都市化による湿地環境の減少をくい止め、本種の生息しうる環境を計画的に育成・保全していく必要がある。

【関連文献】

愛知 83:84, 愛知 95:47, 愛知 02:99, 愛知 06:47, 愛知 09:125, 繁殖 78:150, 分布 88:143, HBE3:10, HBW3:300, CBW1:434.

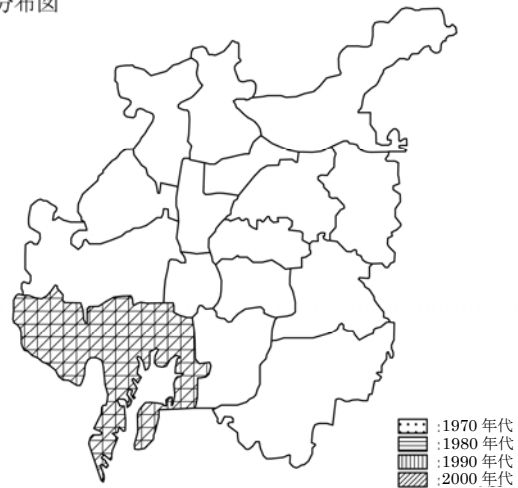
(執筆 小笠原昭夫)



タマシギ (左:雌、右:雄)

海部郡飛島村、2013年9月10日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

コノハズク *Otus sunia* (Hodgson)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県 2015	繁殖 通過 絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧 リスト外

【選定理由】

愛知県の県鳥に指定される等、かつては県内で比較的観察されやすい鳥であったが、近年県内、市内とも顕著に数が減ってきている。

【形態】

全長 19～22cm。日本産では最小のフクロウ類。体は灰褐色で上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、下面には黒褐色の縦斑がある（全体が赤褐色がかった赤色型もある）。翼の下面は灰白色で、風切羽と尾羽には黒褐色の横縞がある。頭に短い羽角があり、目は黄色。嘴は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

秋期、渡り途中のものが稀に記録される。

【県内の分布】

春・秋に平野部で散見されるほか、夏期、東三河の山地に生息し、ごく少数だが繁殖の可能性がある。

【国内の分布】

主要四島に夏鳥として渡来し繁殖するほか、佐渡、隠岐、対馬、南西諸島、伊豆諸島で渡り途中のものが記録されている。

【世界の分布】

ユーラシアの中緯度以南とアフリカで繁殖し、北部のものは南下して低緯度地域で越冬する。各地で減少しているというが、世界的に目立って減少はしていない。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、山地の深い森に生息し、夜間活動して主にミズスマシ、コガネムシ、蛾、バッタ、トビケラ等の昆虫を捕食する。5月上旬～6月中旬頃、スギ・ヒノキ等の林中の樹洞に産卵して繁殖する。日没後ブッキョッコウ（仏法僧）と聞こえる声で鳴くが、曇天時には昼間鳴くこともある。渡り期には市中の森等でも観察されるが、夜行性で秋には鳴かないので、記録は極く稀にしか得られない。人家や倉庫に飛び込んで保護されることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年10月港区白水町で1羽、1973年10月港区船見町で1羽、天白区相生山では1974年10月に1羽、1977年10月に1羽、1994年10月に1羽、2004年5月に緑区大高緑地で1羽、2014年10月に天白区相生山で2羽等と散発的に観察されているほか、ほとんど記録は無い。周辺一帯の開発が主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内に繁殖地はなく、渡り期の通過のみが記録されているが、このような森林生の種には、飛び石状にでも森が存在することが渡り続ける必要条件といえる。市内外の緑地を維持・管理することが、渡り中継地としてこの鳥の保全に不可欠である。

【特記事項】

従来、ヨーロッパ、アフリカ、アジア産のものをまとめて *O. scops* としてきたが、近年、鳴き声やDNAの違いから細分化される傾向にあり、本種も *O. sunia* となった。

【関連文献】

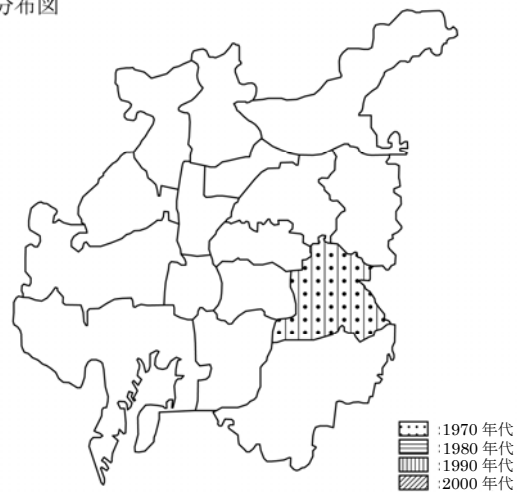
愛知 83:145, 愛知 95:83, 愛知 02:77, 愛知 06:84, 愛知 09:100, 繁殖 78:212, 分布 88:220, HBE4:454, HBW5:164, CBW1:498.



コノハズク

天白区相生山緑地、1996年11月3日、後藤弘行 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

フクロウ *Strix uralensis* Pallas**【選定理由】**

大木が残る広い森と、それに隣接する耕地さえあれば、人家周辺にも生息できる種類だが、都市化が進む中でそのような環境は減少し続け、市内では本種に接する機会は近年特に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧IB類
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		リスト外

【形態】

全長 48～52cm。上面は灰褐色で褐色や黒褐色の縦斑がある。下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色地に黒褐色の横縞がある。尾には上下面とも黒褐色の横縞がある。頭は大きく、フクロウ類独特の平たい顔盤がある。目は黒っぽい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

近年は東北部にのみ記録がある。

【県内の分布】

低地から標高 1200m ぐらいまでの山地に生息するが、数は多くない。

【国内の分布】

主要四島のほか南千島、淡路島に留鳥として生息している。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の中北部で繁殖し、目立った季節移動はしない。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

大木のある低地～山地の森に周年生息し、夜間活動して主にネズミを捕食するが、時に小～中型の鳥や大型昆虫も食べる。老木の樹洞に営巣し、3～5 月頃、2～4 個の卵を産んで繁殖する。樹上に作られたタカ類の古巣を利用することもある。ホーホー、ゴロスケホーホーと低い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の東谷山で 5、6、8 月に記録されていて繁殖の可能性があるが、近年他地域では散発的な記録もない。大型の樹洞営巣種だけに、大木のある森林の減少と、都市化に伴う採餌場（耕地、林縁部等）の縮小が本種の生息を困難にしている。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が第一だが、ここまで開発が進んでは困難なことと言わざるを得ない。せめて現存する緑地や社寺林を保全するとともに林内に巣箱を架設することで、回復を図ることができるかもしれない（尾張旭市、瀬戸市等では現在も巣箱が有効に利用されている）。

【関連文献】

愛知 83:148, 愛知 95:85, 愛知 02:139, 愛知 06:86, 愛知 09:167, 分布 88:223, HBE4:550, HBW5:203, CBW1:510.

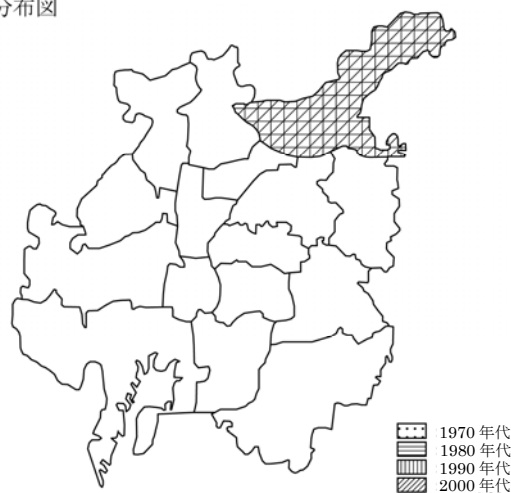
（執筆 小笠原昭夫）



フクロウ

西区庄内緑地、2007 年 11 月 22 日、矢田和子 撮影

市内分布図



鳥類 <カモ目 カモ科>

トモエガモ *Anas formosa* Georgi**【選定理由】**

世界でもアジア東部に分布が限られた稀少種で、世界的に減少しており、名古屋市周辺でもかつて記録されたような大群は見られなくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長雄約 43cm、雌約 38cm。雄の顔には緑・淡黄・黒・白の独特な巴形の模様がある。胸は紫褐色で胸側に白線がある。背は灰褐色で、白・黒・茶色からなる数枚の長い肩羽が目立つ。雌は全身褐色の濃淡模様で、嘴の基部に小さく丸い白斑がある。雄のエクリプス（繁殖期後の換羽で生じるカモ類独特の羽毛）は雌に似ている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主に西部に記録がある冬鳥。地域、年により数に変動があるが近年減少している。

【県内の分布】

東郷町愛知池で 1975 年 1 月に約 2 千羽、1976 年 2 月に約 5 千羽が記録され、木曽川下流部で 2 万羽以上記録されたことがあるが、近年の渡来数は激減している。

【国内の分布】

本州の東北地方中部以南（日本海側に多い）、四国・九州等に渡来する。

【世界の分布】

アジア東部の高緯度域で繁殖し、南下して越冬するが、狩猟や生息環境の破壊により急激に減少したとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期、河川の中・下流や湖沼、ダム湖などに生息する。他の水面採餌ガモと同じく、餌は草本の種子など植物質が主だが、水生昆虫やエビなども食べる。ココロ、またはククッと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口で 1998 年冬に 500 羽を越す群れが記録されたが、市内では 2007 年 2 月 6 羽、2007 年 12 月 50 羽、2010 年 1 月 87 羽、2011 年 1 月 8 羽、2013 年 12 月 5 羽（以上何れも藤前干潟周辺）と、少数渡来するのみの稀少種。地域、年により変動が激しい。減少の原因は明らかでない。

【保全上の留意点】

減少の原因が明らかでないため、それを食い止める方策も明示しにくい、河川、池沼など淡水域とその周辺、名古屋市では特に庄内川下流～河口部の環境保全は必要条件であると考えられる。

【関連文献】

愛知 83:42, 愛知 95:26, 愛知 02:94, 愛知 06:25, 愛知 09:118, 分布 88:80, HBE1:494, HBW1:602, CBW1:142.

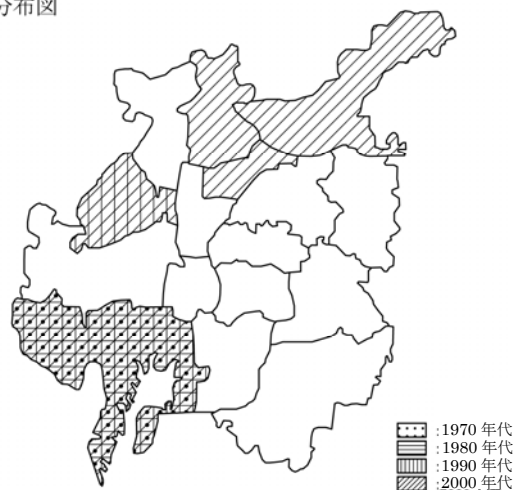
(執筆者 小笠原昭夫)



トモエガモ

港区日光川河口、2013 年 12 月 20 日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <ツル目 クイナ科>

ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus)**【選定理由】**

1960年代まで市内周辺部の各地で繁殖していたが、都市化、特に水田・池沼の消失により、著しく減少した。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 22～24cm。上面は暗緑褐色、下面は顔から腹まで暗い赤褐色で、下尾筒は黒褐色に白い横縞模様がある。尾は短め、脚は長めで赤い。飛んだとき、翼に模様は出ない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として東部の水辺に生息する。

【県内の分布】

平野部に広く生息し繁殖しているが、三河部が中心で、尾張部での記録は比較的少ない。

【国内の分布】

九州から北海道までほぼ全域に夏期渡来し繁殖しているが、北日本には少ない。対馬、伊豆諸島等では冬鳥。

【世界の分布】

アジア南部・南東部～インドネシア、フィリピン、台湾等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、河川、池沼、水田、アシ原などの淡水性の湿地に生息し、昆虫類、魚類、甲殻類のほか草の種子などを食べている。岸辺の草むらのような狭い場所でも繁殖するが、草蔭に隠れて行動するので、人目に止まる機会は多くない。6～7月頃、草むらや稲株の間に草の茎や葉で皿形の巣を作り、5～9卵を産んで繁殖する。キョッキョッキョッキョッキョ……と次第に早口になる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部のため池等に広く分布していたが、近年急速に減少した。湿地環境の減少が本種の生息域を狭めていると考えられる。

【保全上の留意点】

宅地を水田に戻すことはできないが、現在残っている水田やため池を保存し、特に草の生えた湿地環境を保全することが必要である。

【特記事項】

2004年2月、天白区の天白公園でクイナ2羽と共に越冬中の本種1羽が確認された。本州中部以東での越冬は珍しい。

【関連文献】

愛知 83:81, 愛知 95:46, 愛知 02:98, 愛知 06:45, 愛知 09:124, 繁殖 78:144, 分布 88:138, HBW3:187, CBW1:348.

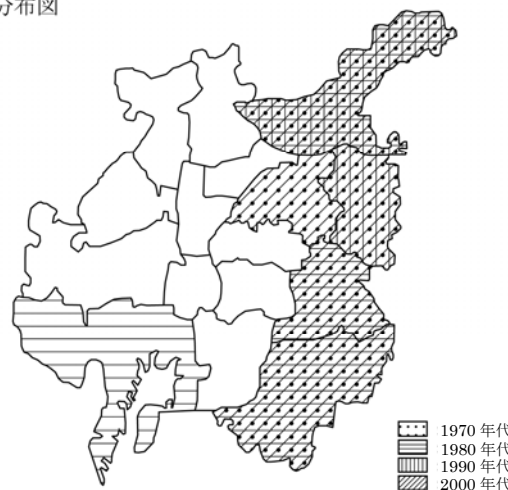
(執筆 小笠原昭夫)



ヒクイナ

緑区螺貝池、2010年6月25日、矢田和子 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)

【選定理由】

海水域、淡水域の両方で採餌する種だが、近年渡来数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	リスト外

【形態】

全長 34～42cm。雄の夏羽では頭部～胸が赤褐色で、体の上面は赤褐色と黒と白の斑、上尾筒と尾の基半部は白く先端は黒い。翼を広げると黒い風切羽に白い帯が出る。胸側～脇には黒い横斑があり腹は白い。嘴は平均9cmと長くまっすぐで、先は黒く基部は淡紅色。脚は長く黒い。雌の夏羽は雄に似るが、赤みが薄い。冬羽の上面は雄・雌とも灰褐色で淡色の羽縁があり、眉斑と喉は白く首～胸は灰褐色。若鳥は成鳥の冬羽に似るが褐色味を帯び、上面に黒褐色の小班がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

南部、ことに南西部に記録が集中している。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口部周辺、汐川干潟周辺に渡来する。

【国内の分布】

小笠原諸島、伊豆諸島、大東諸島を除くほぼ全国に旅鳥として渡来し、九州では越冬するものもある。

【世界の分布】

ユーラシア中緯度域、イギリス、アイスランドで繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ中・北部、アジア南部、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

4～5月と8～10月に海岸や河口の干潟、海に近い水田等に渡来するが、春より秋に多い。昆虫類、クモ類、貝類、ゴカイ、ミミズ、小魚等を捕食する。キッキッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

中川区、港区、南区、緑区に渡来しているが、1980年代半ば以降、個体数は、2010年の例外を除いて下記のように減少している。

1983年9月95羽、1986年10月31羽、2003年9月57羽、2010年9月106羽（この年の多さは'83年以来）2014年9月12羽。水田等淡水環境の縮小が主原因で数が減ったのではないかと考えられる。

【保全上の留意点】

近年の個体数減少の詳しい理由は不明だが、当面湿地環境の保全を図りながら、他地域とも連携して渡来及び生息状況の綿密な解析を続ける必要がある。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）で、NTに指定されている。

【関連文献】

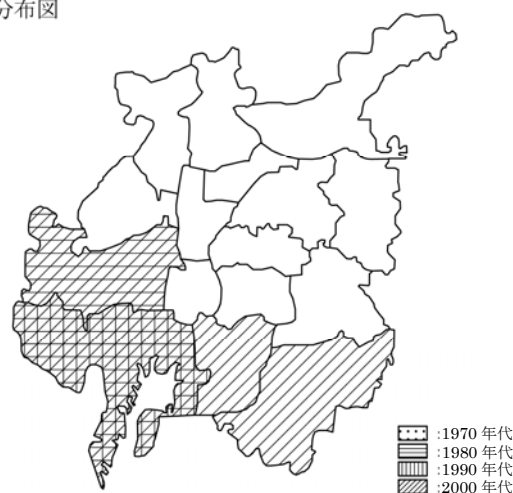
愛知 83:116, 愛知 95:66, 愛知 02:104, 愛知 06:67, 愛知 09:131, 分布 88:178, HBE3:458, HBW3:501, CBW1:436.

（執筆 小笠原昭夫）



オグロシギ
港区庄内川河口、2012年9月14日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

ハウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus)**【選定理由】**

名古屋市南西部を渡りの中継地として利用しているが、1980年代に比べ1990年代以後は明らかに減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 54～68cm。上・下面とも淡褐色地に黒褐色の斑点があり、ダイシャクシギに酷似するが、腰、下腹部、翼下面が白くない点で異なる。嘴が平均 16.5cm と非常に長く、大きく下に曲がっている特徴等ダイシャクシギと共通で、外形だけでは両種の識別はできない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

南西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来し、本州、九州の一部、琉球等に少数越冬記録がある。

【世界の分布】

中国東北部、沿海州、カムチャツカ等で繁殖し、台湾、ボルネオ南東部、セレベス、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。（繁殖・越冬地ともほとんどダイシャクシギとは重ならない）。世界的に減少していると見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

主として4～5月と8～10月頃渡来し、広い干潟でカニ、シャコ、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等を捕食する（内陸の湿地へ入ることも多く、満潮時には農地で見られることもある）。12月、1月、3月にも観察されているが、名古屋市での越冬記録はない。カーリユ、ホーイーン、クーヒー等と聞こえるよく通る声で鳴き、ダイシャクシギと聞き分けることは難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

ダイシャクシギとともに、庄内川河口～木曾川河口付近が県内でも有数の渡来地で、1980年代には毎年25～30羽（1987年5月に28羽など）が飛来していたが、1990年8月9羽、2003年5月7羽と近年は1桁になった。名古屋市だけでなく周辺を含めた広い干潟の減少と後背地の環境悪化が減少の要因であろうと推測される。

【保全上の留意点】

広い干潟の保全と沿岸部での湿地を保全・創出することが望ましい。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）でVUに指定されている。

【関連文献】

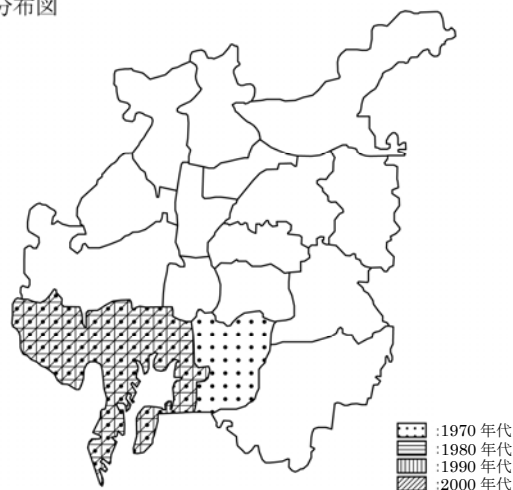
愛知 83:119, 愛知 95:67, 愛知 02:105, 愛知 06:68, 愛知 09:132, 分布 88:181, HBW3:505, CBW1:436.



ハウロクシギ

海部郡飛島村飛島干潟、2012年5月4日、森井豊久 撮影

市内分布図



（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus**【選定理由】**

かつて春・秋に普通に見られた種であるが、1980年代半ば以降著しく減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 20～23cm。夏羽の上面はほぼ黒褐色で白い斑点が散在する。上尾筒は白く、尾には白地に黒い横縞がある。下面は白く、顔～胸に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白く、上面に白帯などの目立つ模様はない。冬羽は全体にやや色が薄れてコントラストの弱い色あいになる。脚は緑がかった黄色で長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

春と秋、南西部を中心に東部、北部等にも記録がある。

【県内の分布】

平野部で広く記録され、渡り途中の春・秋のほか少数越冬もする。

【国内の分布】

北海道・南千島～南西諸島を始めほぼ全域で記録があり、本州中部以西（南）では越冬するものもある。

【世界の分布】

ユーラシア北部（極北部は含まない）で繁殖し、アフリカ、アジア南部～オーストラリアに渡って越冬する。世界での個体数はほぼ安定していると見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

春・秋に、水田、休耕田、池沼畔等淡水性湿地に渡来する。単独または小群で生活し、昆虫類、クモ類、小貝等を捕食する。ピッピッピッピッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980年代までは4～5月、8～9月に、港区、南区、緑区、天白区、名東区、守山区でよく観察されたが、近年市内では2012年4月1羽、2013年9月2羽（何れも港区藤高）などの記録が散見される程度に減少した。淡水湿地の減少が原因である可能性が高い。

【保全上の留意点】

淡水域に生息する種なので、水田、休耕田等の淡水性湿地を保全することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:112, 愛知 95:63, 愛知 02:103, 愛知 06:64, 愛知 09:130, 分布 88:173, HBE3:577, HBW3:512, CBW1:448.

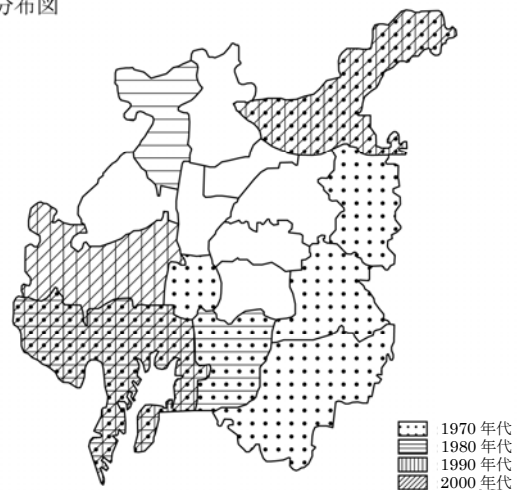
(執筆 小笠原昭夫)



タカブシギ

港区藤高、2012年4月18日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield)**【選定理由】**

原因はまだ解明されていないが、近年渡来数が顕著に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 20～23cm。夏羽では頭上は茶褐色に黒い縦斑、体の上面は褐色に黒褐色の小斑、胸は淡褐色地に黒褐色の縦斑、腹は白く脇に黒褐色の小斑がある。冬羽では茶褐色味が淡くなる。若鳥の体の上下面は成鳥より黄褐色味が強い。やや下に曲がった嘴は黒っぽく、脚は黄緑色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

南西部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口部周辺等で記録されているが、やはり数は少ない。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来するが、近年数が減っている。

【世界の分布】

シベリア極北部のごく限られた地域で繁殖し、ニューギニア、トンガ、ニューカレドニア、オーストラリア、ニュージーランド等へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの情報は無い。

【生息地の環境／生態的特性】

春・秋に水田や休耕田など、主として淡水の湿地を訪れ、昆虫類、トビムシ等のほか、草の種子等の植物質も摂る。干潟にも出るが、農地で見ることが多い。比較的多く渡来していた 1970 年代には春、雄の求愛ディスプレイが見られたこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部を中心に記録され、似た環境に生息するツルシギとともに近年激減した種の一つ。1978～82 年の県内での記録は 60～100 羽であったが、最近では数羽の記録しかない（庄内川河口部周辺での近年の観察例：

2007 年 5 月 3 羽、2010 年 8 月 1 羽、2013 年 9 月 1 羽）。減少の要因は明確でないが、生息環境（本種やツルシギの場合は特に水田、休耕田等の淡水域）の改変や質の低下が生息に重大な影響を及ぼしている可能性がある。

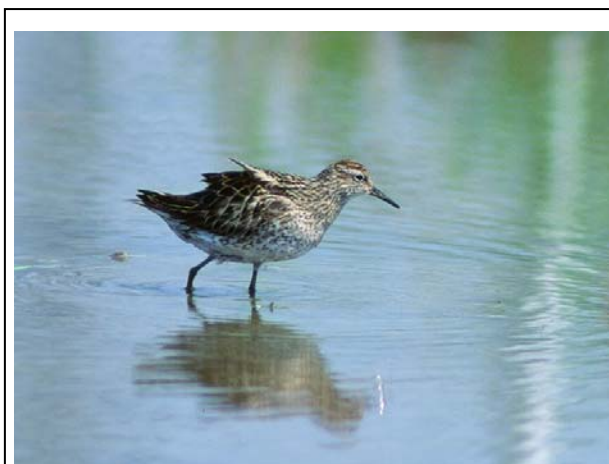
【保全上の留意点】

まず淡水環境の保全を図りながら、本種を始めとする水辺鳥類の個体数変動を詳しく解析することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:97, 愛知 95:56, 愛知 02:100, 愛知 06:56, 愛知 09:127, HBE3:336, HBW3:524, CBW1:438.

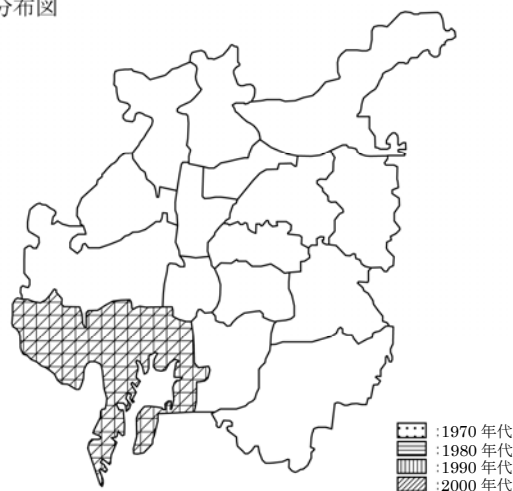
(執筆 小笠原昭夫)



ウズラシギ（夏羽）

港区南陽町、1991 年 8 月 18 日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 カモメ科>

ズグロカモメ *Larus saundersi* (Swinhoe)

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市近辺では近年漸増の傾向にあるが、繁殖地がアジア東部のごく限られた地域であるため、一旦衰亡に向かうと絶滅の危険性が高い。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 29～33cm。背と翼の上面は淡い青灰色。初列風切の前側は白く、先端に黒斑がある。胸～腹と尾は白い。嘴は短めで黒く、脚は赤い。頭部は冬羽では白く、目の後ろに黒斑があるが、夏羽では頭全体がまっ黒になる。若鳥は翼に黒斑、尾の先端には黒帯があり、脚は褐色。ユリカモメに似るが小型で、嘴の長さや色が異なるほか、翼端の黒斑の並びの模様等も異なる。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で冬期記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部と汐川干潟で 1980 年代半ばから少数が定期的に越冬している。

【国内の分布】

北海道～南西諸島、伊豆諸島に渡来しているが、九州以外では少ない。

【世界の分布】

中国東部のごく狭い地域で繁殖し、ロシア極東部、朝鮮半島、中国等で越冬する。世界での総個体数は 5 千羽以下と推測されている。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期海浜に渡来し、干潟の上を飛翔しながら、舞い降りてカニやゴカイを捕食する。ユリカモメの群中にいることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では 1985 年 2 月庄内川河口での記録以来、滞在期間、個体数とも漸増し、近年は毎冬 10 羽以上が越冬するようになった(2008 年 11 月 10 羽、2010 年 3 月 12 羽、2011 年 2 月 15 羽、2012 年 2 月 23 羽、2012 年 12 月 21 羽、2013 年 3 月 22 羽、2014 年 1 月 25 羽)。

【保全上の留意点】

上述のように、記録は近年増加しているが、繁殖地が限られた狭い区域であり、越冬地・繁殖地連繋しての保全が求められる。

【特記事項】

1984 年に中国東部で初めて繁殖が確認された。繁殖地周辺が農地やエビ養殖池として開発されつつあり、このまま進めば近い将来絶滅するとの警告も出されている。

世界のレッドリスト(IUCN2014)で VU に指定されている。

【関連文献】

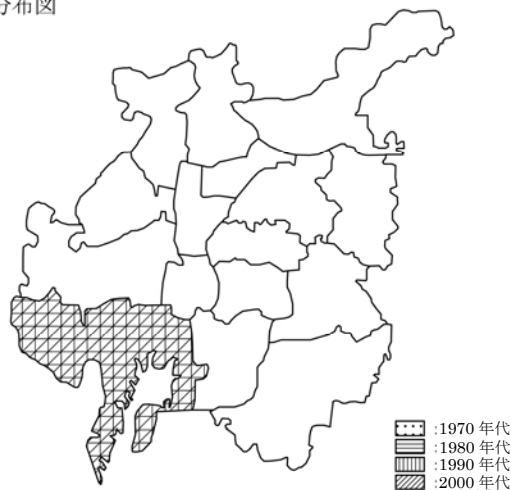
愛知 83:252, 愛知 95:75, 愛知 02:89, 愛知 09:112, 分布 88:197, HBW3:617, CBW1:456.



ズグロカモメ (冬羽)

港区庄内川河口、2013 年 4 月 21 日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 カモメ科>

コアシサシ *Sterna albifrons* Pallas

カテゴリー

【選定理由】

夏鳥として渡来し市内で繁殖もしているが、近年減少している。広い砂礫地での集団繁殖という習性は、開発が進む現況とは相容れ難い。

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 21～31cm。先の尖った長い翼と深く切れ込んだ尾が特徴。背と翼の上面は淡青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上～後頭は黒く、嘴は黄色で先端が黒く、脚は橙黄色。冬羽では頭頂が白、嘴は黒、脚は褐色に変わる。若鳥は頭頂、後頭、背、翼の上面は淡褐色と暗褐色の斑模様で翼端は黒い。額と下面は白い。

【分布の概要】

【市内の分布】

海沿いの南部地域のほか、多くの区で記録されている。

【県内の分布】

平野部に広く分布し各地で繁殖している。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島に夏鳥として渡来し、各地で繁殖しているが、総数は減少しつつある。

【世界の分布】

ユーラシア、アフリカ、東南アジア、オーストラリア東岸等で繁殖し、北方のものは南下して越冬する。世界的に現在個体数は多いが、減少の傾向にある。

【生息地の環境／生態的特性】

4月中旬～10月上旬、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。5～7月頃、水辺に近い砂礫地で集団繁殖する。犬や人などの外敵が巣に近づくと、集団で威嚇攻撃をする習性がある。飛びながらクリクリッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

渡来地は市内に広く分布している。港区稲永ふ頭では、2002年、2003年にそれぞれ約250番い（つがい）が繁殖した（近郊の弥富市では1998年7月に、巣立った幼鳥を加えて約1,600羽が記録されている）。本市での主要生息地である庄内川河口付近では、1888年に3,000羽以上が記録された後、2009年5月には500羽となり、以後2010年5月304羽、2011年5月315羽、2012年5月303羽、2013年4月419羽、2014年5月289羽と激減はしていない。しかしこの間に港区稲永町や南陽町のコロニーが水没等で大打撃を受けた後、繁殖は厳しい状況になっている。この鳥の減少は繁殖地となる砂礫地の縮小・消滅が最大の理由であるが、さらにはカラスによる卵やひなの食害が近年国内各地で深刻化している。

【保全上の留意点】

採餌場や餌となる小魚の量等は現在問題ないと考えられるが、集団営巣に適する広い砂礫地は近年急速に減少している。どこかに恒久的な営巣地を確保することが望ましい上、カラス対策も重要な課題である。

【特記事項】

首都圏では近年、ビルの屋上への誘致に成功している例もある。

【関連文献】

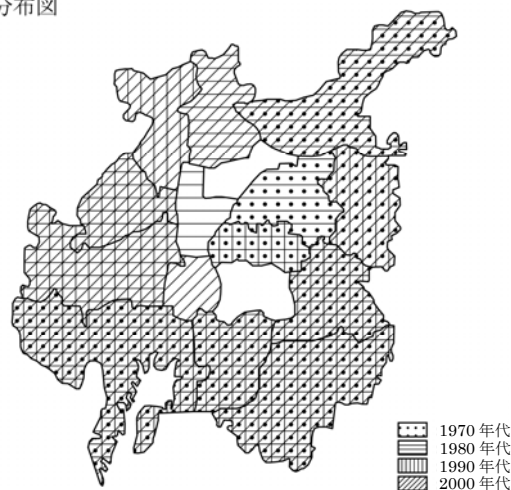
愛知 83:136, 愛知 95:78, 愛知 02:136, 愛知 06:79, 愛知 09:163, 繁殖 78:182, 分布 88:203, HB4:120, HBW3:657, CBW1:464.



コアシサシ（夏羽）

港区天白川河口、2011年5月20日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 タカ科>

ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* (Temminck)**【選定理由】**

名古屋市は主に秋（9～10月）の渡りの通過点だが、市内東部にはわずかに繁殖環境も残っている。全国的に数が減っていると考えられる種なので、保全対策を積極的に考えていく必要がある。

カテゴリー

名古屋市 2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	通過	準絶滅危惧
環境省 2014		準絶滅危惧

【形態】

全長雄約57cm、雌約61cm。トビよりやや小型で、頭部が細く見えるのが特徴。色彩は淡色型から暗色型まで変化に富む。飛翔時、雄では翼と尾に太い横縞模様が目立つが、雌や若鳥にも雄ほどには目立たない細い横縞模様がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

おもに東部で秋の渡り期に観察されるが、1994年には猪高緑地で繁殖が確認された。

【県内の分布】

秋の渡り期に各地で観察され、特に渥美半島での渡りは有名。茶臼山等での繁殖記録もある。

【国内の分布】

夏鳥として5～10月頃滞在し、主要四島および佐渡で繁殖する。

【世界の分布】

アジア中・東部の中緯度域で繁殖し、南～東南アジアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

低山、丘陵地のアカマツや広葉樹の林に生息し、樹上に営巣する。クロスズメバチやアシナガバチ類を主食とするため、採餌も林内で行うことが多いが、林縁部でカエル、ヘビなどを捕食することもある。ナラ類やアカマツの樹上に巣を作り、6月頃、通常2卵を産んで繁殖する。飛翔中、両翼を背の上で打ち合わせるような独特な求愛行動をする。鳴き声はピーウー、ピーウーと鳴くほか、ターー、ターーとコジュケイに似た声も出す。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部での記録が主だが、守山区の東谷山、小幡緑地や名東区の猪高緑地ではほぼ毎年9～10月に観察されているほか、上記のように稀な繁殖記録もある。山林の伐採などによる生息環境の悪化が全国的な本種減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

オオタカに比べて、繁殖を含む生息状況に不明の点が多い。名古屋市は主として渡りの通過点であるが、今後生息状況をより正確に把握して、繁殖環境をも保全・創出することが望まれる。

【関連文献】

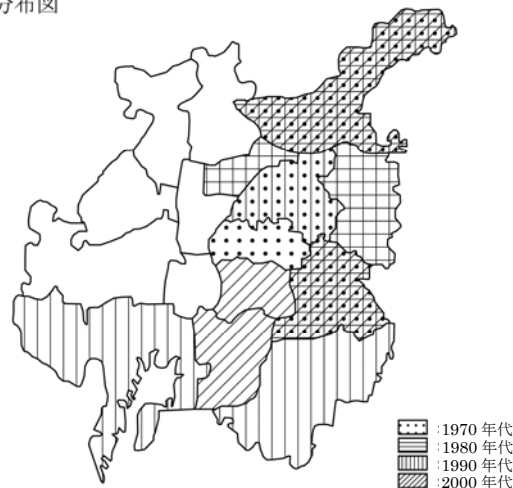
愛知 83:61, 愛知 95:35, 愛知 02:96, 愛知 06:34, 愛知 09:121, HBE2:13, HBW2:111, CBW1:520.

(執筆者 小笠原昭夫)



ハチクマ
知多郡美浜町富具崎、2014年10月7日、森井俊雄 撮影

市内分布図



鳥類 <タカ目 タカ科>

チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup

カテゴリー

名古屋市 2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
環境省 2014		絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

冬鳥として少数定着しているが、広いアシ原という特殊な環境に適応しきった種類であるため、アシ原の開発を伴う近代化の波の前に存続が危ぶまれる状況にある。日本での繁殖地は北部（北海道、南千島、青森県、秋田県）以外では石川県、伊勢湾岸北部ほか数ヶ所に限られており、繁殖分布の特殊さから見ても当地の個体群は注目に値する。

【形態】

全長雄約48cm、雌約58cm。トビよりやや小さいタカで、雄には色の変異が多く、頭～背は灰色、黒色、灰褐色等。腰が白く、中央の尾羽は灰色。下面には白地に暗褐色の縦斑があり、翼の下面は白っぽい。雌は頭部が淡褐色、体の上面は褐色、下面は茶褐色のものが多く、若鳥は上下面とも黒褐色で下面に縦縞があり、翼には横縞があるが、やはり変異が多い。滑翔時、両翼を扁平V字形に保つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に南西部で記録されている。

【県内の分布】

アシ原のある川の下流部や沿岸部に主に冬鳥として渡来するほか、伊勢湾奥部のアシ原では少数が繁殖している。

【国内の分布】

北海道、南千島、東北地方北部で夏鳥として繁殖し、本州以南や洋上の島々では主として冬鳥（石川県、滋賀県、愛知県、三重県及び四国東北部、九州東北部には少数留鳥もいる）。

【世界の分布】

アジア東部の中緯度域、ニューギニア等で繁殖し、北方産のものは温帯～熱帯へ南下して越冬する。世界での個体数に関する情報は少ないが、特に減少してはいない模様。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部のアシ原（営巣地、ねぐら）と周辺に農地（餌場）のある環境に生息し、ネズミ、小型～中型の鳥類、魚類等を捕食する。

4～7月頃、アシ原の地面にアシやスキの茎を積み重ねて巣を作り、5～7卵を産んで繁殖する。アシ原上を低く飛び、時どき停空飛翔して餌動物を狙う。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内での分布の中心は庄内川、新川、日光川の下流部～河口部一帯。2003年には庄内川河口近くで2番（つがい）が営巣していたが、河川環境の変化と、心ない人間の執拗な接近などの影響もあって、繁殖期には見られなくなり、以後の記録は下記のように非繁殖期中心となった。2004年12月4羽、2005年3月4羽、2006年2月3羽、2007年2月2羽、2013年12月4羽、2014年2月4羽。

【保全上の留意点】

かつて冬鳥であった本種が一旦繁殖種となり、再び冬鳥に戻ってしまった。アシ原の保全とともに、繁殖期の不用意な人間の接近を排除しなければならない。

【特記事項】

アジア中部以西、ヨーロッパ、アフリカに分布するヨーロッパチュウヒ（*C. aeruginosus*）を同種と見なす説もある。

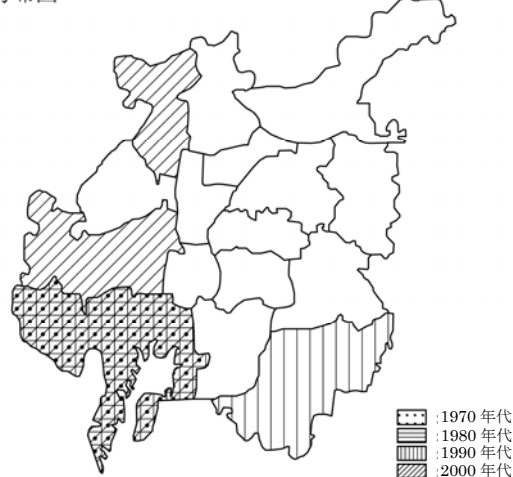
【関連文献】

愛知 83:71, 愛知 95:41, 愛知 02:86, 愛知 06:40, 愛知 09:109, 分布 88:118, HBE2:105, HBW2:137, CBW1:536.



チュウヒ
港区南陽町、2010年4月8日、森井豊久 撮影

市内分布図



（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <タカ目 タカ科>

サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)**【選定理由】**

かつては都市周辺でも普通に繁殖していたが、近年減少傾向が目立つ。水田脇の山林などに営巣し、カエルやヘビを捕食していた生活様式が、田畑の減少とともに維持されにくくなったためかと考えられる。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 47～51cm。背面は褐色。成鳥の腹面には白地に褐色の横縞（若鳥は褐色の縦縞）模様がある。ほおは灰色でその上に白い眉線がある。のどは中央が縦に黒く、左右は白い。尾は灰褐色で数本の黒帯がある。脚は黄色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主に周辺部（特に東部）で春と秋に記録されているが、数は多くない。

【県内の分布】

ほぼ全県下に記録があり、低地～低山で繁殖記録も多かったが、近年減少の傾向にある。

【国内の分布】

北海道と東北地方北部を除くほぼ全国に夏鳥として渡来し、本州、佐渡、隠岐、四国、九州、伊豆諸島では繁殖している。奄美以南では越冬するものもいる。

【世界の分布】

日本の他、中国東北部、アムール南部、ウズベキスタン、北朝鮮などで繁殖し、中国東南部、台湾、インドシナ半島、マレーシア、フィリピン、インドネシアなどへ渡って越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

3月下旬～5月頃渡来し、低地～低山地のアカマツ林や雑木林で繁殖する。林縁部や水田でカエル、ヘビ、昆虫などを捕食する。9月下旬～10月中旬頃、南方（当地方では西方）への渡りの最盛期を迎え、渥美半島での大群の渡りが有名だが、市内でも少数の移動を見ることがある。繁殖期にピックイーまたはキンミーと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市は元来通過地点だが（繁殖情報もある）、近年見る機会が漸減している。近郊の農地（特にサシバが好む谷戸）の休耕田化が進み、餌生物が少なくなったためではないかと指摘されている。

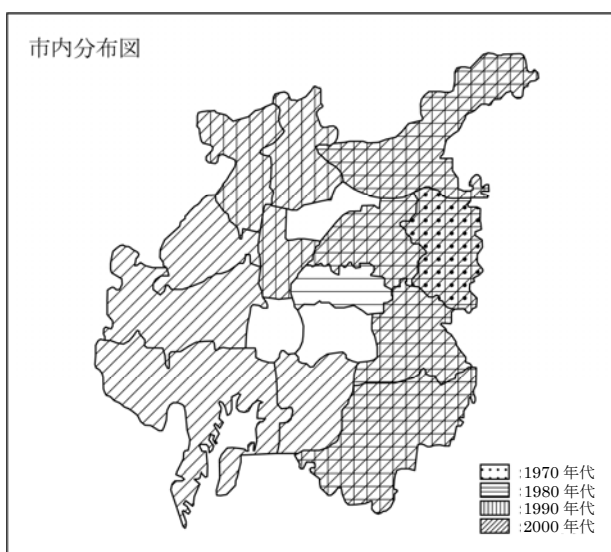
【保全上の留意点】

1970代頃、農薬の大量使用による餌生物の減少があったが、現在は上述のように、全く別の原因で、地域的に田畑の動物が減少している。日本の産業構造が以前と変わり、容易に復活できる状態ではないが、市内のごく一部にでも里山の原風景ともいえる谷戸の水田を復活させることが、本種の減少に歯止めをかける有力な手段であると考えられる。

【関連文献】

愛知 83:68, 愛知 95:39, 愛知 02:97, 愛知 06:38, 愛知 09:122, 繁殖 80:122, HBW2:167, CBW1:548.

（執筆 小笠原昭夫）



鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)**【選定理由】**

かつて市内でも寺社林等で普通に繁殖していたが、現在繁殖記録は激減している。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		リスト外

【形態】

全長 27～31cm。頭部～体の上面は黒褐色で尾には黒帯がある。体の下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白と暗褐色の横縞模様。ズクと名が付くが頭上に羽角はなく、尾は長く脚も長めで、顔に目立つ顔盤がないのでフクロウ類にしてはタカに似た体形といえる。目は黄色、嘴は黒、脚指には羽毛が無く黄色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主に初夏と秋、老木の多い地域で観察されている。

【県内の分布】

低地～山地の森で観察され、各地で繁殖もしている。

【国内の分布】

ほぼ全国に夏鳥として渡来し、離島以外のほとんどの地域で繁殖しているが、本州北部と北海道では少ない。

【世界の分布】

アジア南部～東部、東南アジアの島々で繁殖し、北のものは南へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から10月末頃にかけて低地～低山の森に渡来し、森の中や林縁部などで夜間ヤマユガ、タガメ、シオカラトンボ、トノサマバッタ、ミンミンゼミ等比較的大型の昆虫を捕食して生活する。小鳥やコウモリを捕ることもある。5～7月頃、老木の樹洞に産卵して繁殖する。巣箱を利用することもある。ホッホ、ホッホと高い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

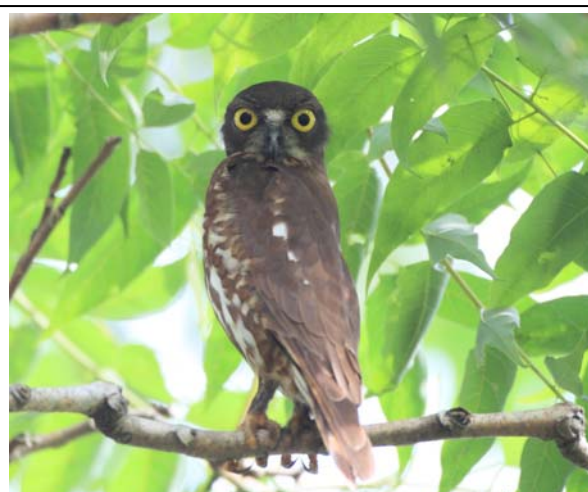
熱田神宮、名古屋城、東山公園等老木がある地域に渡来しているが、近年繁殖記録があるのは熱田区高座結御子神社（1989）、東山公園付近等数ヶ所だけで、市内各地で繁殖していた1960年代とは隔世の感がある（2003年7月南区星崎町で1羽、2004年5月庄内川河口部で1羽などの散発的な観察記録はある）。繁殖が激減した主な原因は、大木の伐採による営巣場所の消失と、主食とする大型昆虫の減少だと考えられる。本種はフクロウ科の中では比較的人家の近くや都会でも繁殖できる鳥である。

【保全上の留意点】

緑地の積極的な造成・保全を図ると共に、巣箱をかけて樹洞の不足を補うことも、有効な手段の一つと考えられる。

【関連文献】

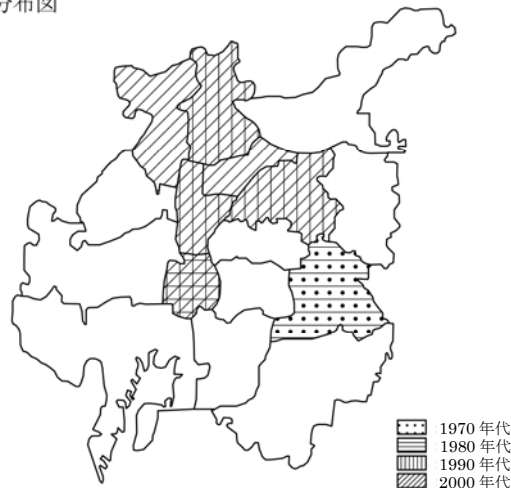
愛知 83:147, 愛知 95:84, 愛知 02:138, 愛知 06:85, 愛知 09:166, 繁殖 78:216, 分布 88:222, HBW5:233, CBW1:480.



アオバズク

千種区東山公園、2010年6月25日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ハヤブサ目 ハヤブサ科>

ハヤブサ *Falco peregrinus* Tunstall

カテゴリー

名古屋市 2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
環境省 2014		絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

市内各地で少数が観察されている。近年、市の南西部では秋・冬だけでなく繁殖期にも散見されるようになったが、まだ安定した個体群とは言い難い。

【形態】

全長雄約42cm、雌約49cm。翼端が尖っている。雌雄同色で、成鳥は上面青黒色。下面は白地に黒く細かい横縞がある。若鳥は上面暗褐色、下面は淡褐色地に暗褐色の縦縞がある。成・幼鳥とも両ほおに目の下から連なるひげ状の斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で冬期を中心に多く観察されるほか、北部でも春・秋の移動期に観察される。

【県内の分布】

海岸、池沼、河川周辺等の開けた土地に冬期の記録があり、三河湾北岸で1996年県内初繁殖が確認された。

【国内の分布】

北海道、本州、佐渡、九州等の主として海岸沿いで繁殖し、冬期の記録はほぼ全国に広がっている。

【世界の分布】

ニュージーランドと南極大陸を除くほとんど全世界に生息し、繁殖している。世界では個体数はほぼ安定と推測されている。

【生息地の環境／生態的特性】

国内では特に北海道や東北地方の沿岸部に多く、地上性天敵が近寄れない岩場で繁殖する。多くは留鳥だが、北海道東北部や本州の内陸部で繁殖するものは冬期暖地へ移動する。ヒヨドリ等中型以上の鳥を主に、ウサギやネズミを狙うこともあり、相手が鳥の場合は空中で体当たりして蹴り落とす攻撃法をとる。キッキキッとかケーケーと聞こえる鋭い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市へは旅鳥または冬鳥として渡来し、藤前干潟周辺では見る機会が多いが、近年、冬期以外にも観察されるようになった。営巣の記録はないものの、2003年5月には繁殖行動の兆しも認められた。2007年3月～4月西区牛島町ルーセントタワービルで1羽(3月30日以降は2羽)が観察された。

【保全上の留意点】

近年各地で本種がビルに営巣する例が増えてきたので、藤前干潟に近い建築物でも営巣が始まる可能性がある。その際繁殖の妨害になるような人の干渉を減らす配慮が必要である。

【特記事項】

1960年代生物濃縮によるDDTの体内蓄積が原因でアメリカ合衆国を中心にカッシュクペリカン(*Pelecanus occidentalis*)、ハクトウワシ(*Haliaeetus leucocephalus*)、ハヤブサ等での顕著な卵殻薄化が見られたが、日本ではDDTの使用量が少なかったためか、類似の現象は認められていない。

【関連文献】

愛知 83:72, 愛知 95:41, 愛知 02:87, 愛知 06:40, 愛知 09:110, 分布 88:120, HBE2:361, HBW2:274, CBW1:698.

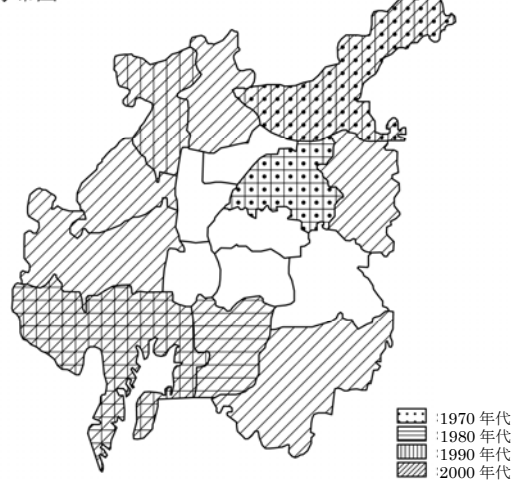
(執筆者 小笠原昭夫)



ハヤブサ

海部郡飛島村飛島干潟、2014年4月15日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <スズメ目 ツバメ科>

コシアカツバメ *Hirundo daurica* Laxmann

【選定理由】

ツバメに比べて繁殖地の分布に偏りがある種類だが、近年都市部での減少が著しい。安定して採餌・営巣できる環境を確保する必要がある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 17～20cm。上面は藍色光沢のある黒で、腰は赤褐色。目の後ろから頭側にかけても赤褐色。下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑がある。尾は中央が深く切れこんだ燕尾でツバメより長め。

【分布の概要】

【市内の分布】

記録は南西部に少なく、中心部から東部、北部へ向かってやや多くなる。

【県内の分布】

低地～山裾に渡来するが、分布には偏りがある。

【国内の分布】

主要四島のほか佐渡や隠岐、対馬へ夏鳥として渡来するが、東北地方以北では少ない。九州では越冬するものもいる。

【世界の分布】

ユーラシア南部～ウスリー地方と熱帯アフリカで繁殖し、ヨーロッパのものは熱帯アフリカへ、アジアのものは中国南部～インド方面へ渡って冬を越す。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、低地～山地の村落や市街地に渡来する。カメムシ、ハムシ、カ、ハエ等の昆虫類を空中で捕食する。羽ばたきと滑翔を交えて直線的に飛ぶが、ツバメより滑翔が多く、羽ばたきはやや緩慢。5～7月、建物の水平な庇の下面に泥で徳利形の巣を作り、4～5卵を産んで繁殖する。チュリー、チュリー、ジルジルと、声はツバメに似るが少し濁って聞こえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1960年代までは名古屋駅前や栄周辺のビルなど市内各地に営巣していたが、その後まもなく都市中心部から姿を消し、市の辺縁部でも営巣は少なくなった。最近の市内での記録は繁殖より通過時のものに偏ってきている。都会では餌や巣材の泥が得にくくなったことが、減少の主要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市街地では今後、餌も巣材も得やすくなることは予想されない。郊外で営巣場所となる水平な軒下をもつ建築物が減らないことが期待される。

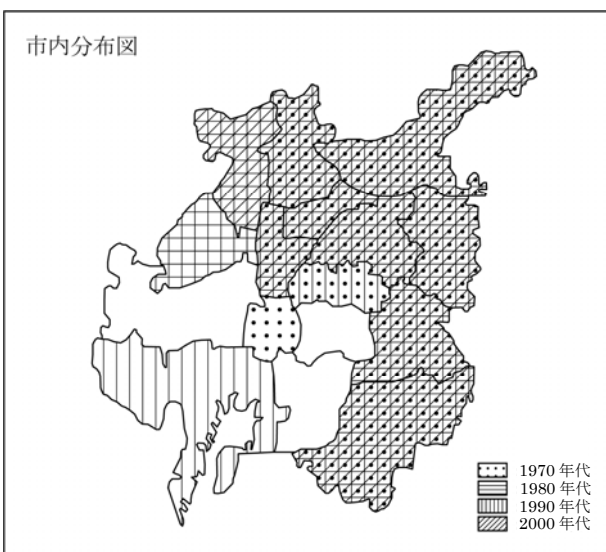
【関連文献】

愛知 83:165, 愛知 95:94, 愛知 06:94, 繁殖 78:258, 分布 88:240, HBE5:278, HBW9:677.

(執筆者 小笠原昭夫)



コシアカツバメ
名東区牧野池、2013年7月26日、矢田和子 撮影



鳥類 <スズメ目 アトリ科>

コイカル *Eophona migratoria* Hartert

カテゴリー

【選定理由】

かつて稀だった本種は市内で一度増えて、また減少している。個体数増減の原因は明らかではないが、現在の不安定な状況からは衰亡の危険性も拭いきれない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長約 18.5cm。雄は頭が黒く、首～背は灰褐色。腰は灰白色で尾は黒い。翼は青色光沢のある黒で、風切羽、初列両覆の先端が白い。胸～腹は淡褐色で脇は赤褐色。太い嘴は橙黄色だが、繁殖期には緑や基部が青黒色になる。雌は頭部・胴ともに灰褐色で、脇の赤褐色は雄より淡く、中央の尾羽は灰褐色（他の尾羽は黒い）。尾は長めで先端は凹形。近似種イカルの体は褐色味の少ない灰色で、頭の黒（雌、雄とも）がほおまで届かず、嘴は黄色。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に冬鳥として市の中心部や北部を訪れるが西区には周年生息した記録もある。

【県内の分布】

低地～低山の限られた地域に毎冬訪れる傾向がある。

【国内の分布】

北海道、伊豆諸島、小笠原諸島を除くほぼ全域に冬鳥として訪れるが、全般に数は少なく、北・東日本ではさらに少ない（熊本県、島根県には繁殖記録がある）。

【世界の分布】

揚子江沿岸、中国東北部、朝鮮半島等で繁殖し、日本以外では中国南部、台湾等で越冬する。世界での個体数増減の情報はない。

【生息地の環境／生態的特性】

主に冬鳥として渡来し、低地～山地の落葉広葉樹林に群棲して、ムク、エノキ、センダン、イヌシデ等の木の実を好んで食べる。イカルの群れに混じることもある。囀り（さえずり）はキョキーコキークーキキョーとイカルに似るが、イカルと違って声に濁りが入る。地鳴きはキュッキュッと聞こえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

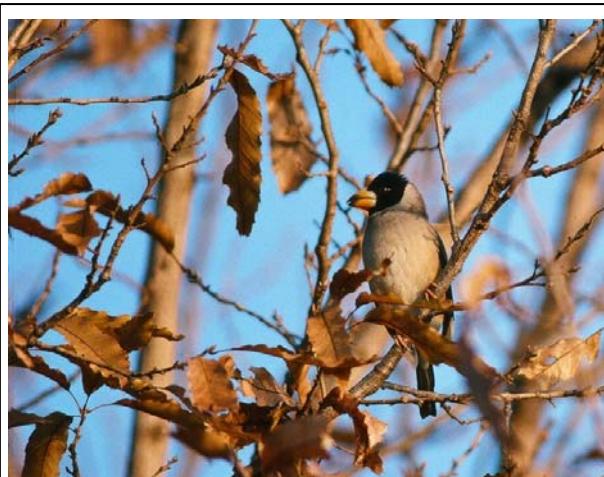
市内では主として冬期、鶴舞公園、名古屋城、庄内緑地、東谷山で記録されている。庄内緑地では1994年～1999年の間、周年観察され、春、囀り（さえずり）も聞かれたが、その後繁殖期には見られなくなり、冬期の個体数も減った。1970年頃まではほとんどいなかったものが一旦増え、現在また減っている理由は解っていない。

【保全上の留意点】

当面は増減の実態を把握し、その原因を究明することが必要である。

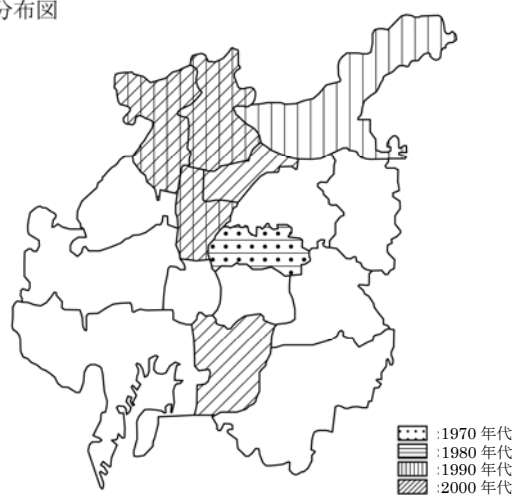
【関連文献】

愛知 83:231, 愛知 95:129, 愛知 06:133, 分布 88:321, HBE8:832, HBW15:613.



コイカル
西区庄内緑地、1994年1月4日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ペリカン目 サギ科>

チュウサギ *Egretta intermedia* (Wagler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県	繁殖
2015	通過
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

3種の白サギの中では国内で最も減少が目立つ種類とされ、さらに、市内でも比較的広く見られるが、過去30年くらいの間に個体数は減少している。

【形態】

全長 63～72cm。頭から尾まで全身白色で脚は黒い。嘴は白サギ3種中最短で、夏黒く、冬黄色（先端のみ黒い）。目先は黄色く、夏には胸と背に長い飾羽を生じる。

【分布の概要】

【市内の分布】

比較的広く記録されているが、1980年代以後減少している。

【県内の分布】

平野部で広く記録され、そのうちいくつかの地域では他のサギ類とともに繁殖している。

【国内の分布】

夏鳥として東北地方南部以南で繁殖する。関東以西では越冬するものもある。1960年代以降減少傾向が続いている。

【世界の分布】

旧世界の熱帯～温帯に広く分布する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地の水辺やそれに続く草地に生息し、魚類のほかカエル、トカゲ、ザリガニ、昆虫類等を捕食する。干潟など海へ出ることは少ない。

飛翔時、休息時には首をS字形に縮めている。4～8月頃、他のサギ類（ダイサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギに、アオサギが加わることがある）と集団で林の樹上に巣を作り、3～5個の卵を産んで繁殖する。しわがれた声でグアー（グエーとも聞こえる）と鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に守山区、名東区、天白区、緑区、南区、港区など市の周辺部で観察される。港区藤高で2010年9月に200羽観測されたのが近年の目立つ記録だが、ダイサギ・コサギと違って干潟へはほとんど出ない種類なので、内陸の淡水性湿地が減少した市内では衰退が著しい（市の西に隣接する東名阪蟹江IC、弥富ICの小規模な林へは、周辺の農地で昼間採餌した本種が1000羽以上集まって、他のサギ類とともに就棲している）。

【保全上の留意点】

他の白サギ類に比べて国内で減少が著しいとされる理由は不明だが、餌場と餌量（本種では特に淡水産の小動物）の確保、および安定して営巣が続けられる環境の確保が必要と考えられる。渡り鳥なので、保全には越冬地の生息状況も考慮する必要がある。

【関連文献】

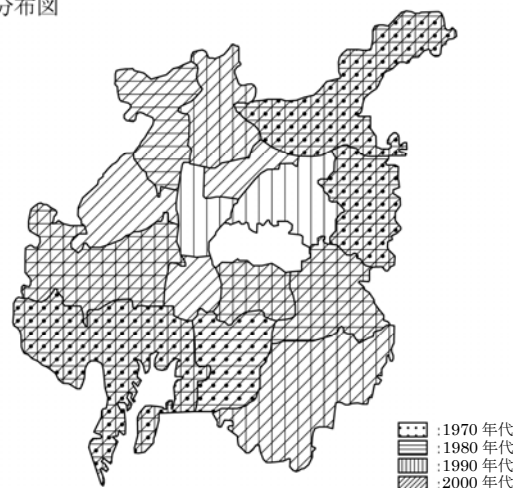
愛知 83:33, 愛知 95:21, 愛知 06:16, 繁殖 78:74, 分布 88:58, HBE1:296, HBW1:410.



チュウサギ

港区藤高、2014年4月16日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ツル目 クイナ>

クイナ *Rallus aquaticus* Linnaeus

カテゴリー

【選定理由】

かつては市内の水田や池沼の岸辺に、相当数生息していたと考えられるが、近年見る機会が稀になった。市街化に伴う水辺植生の激減は、本種の生存を厳しくしている。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 27～31cm。尾が短く脚は長い。上面は暗褐色で黒い縦斑があり、下面は顔～胸が青みを帯びた灰色、脇腹に白と黒の横斑がある。長めの嘴は春夏にはほぼ赤く、秋冬には下嘴基部が赤いほか黒褐色。脚は黄褐色。飛んだ時、翼に模様は出ない。

【分布の概要】

【市内の分布】

冬期、北部・東部・南部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

平野部に広く分布しているが、数は多くない。一般に冬鳥だが、1975年、犬山市で巣と卵が発見された。

【国内の分布】

北海道と本州北部等で少数が繁殖するほか、本州以南に冬鳥として渡来する。

【世界の分布】

ユーラシアの中緯度域とアフリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ東部以東のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

北海道では夏鳥、本州以南ではおもに冬鳥として、平地～山麓の水田、池沼、河川の岸辺等の草の生えた湿地（淡水域ばかりでなく汽水域にも）に生息する。昆虫類、甲殻類、魚類、両生類などの動物質のほか、イネ科やタデ科の草の種子等植物質も食べる。通常草蔭を歩行移動し、長く高く飛ぶことはほとんどない。6～7月頃ヨシ等の根元に草の茎や葉を積んで皿形の巣を作り、6～8卵を産んで繁殖する。キュイキュイと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の北部、東部および南部で少数記録されている。水田やため池、河川の草つきの湿地が本種の生息環境なので、それらの減少が本種の生息を制限していると考えられる。

【保全上の留意点】

生息季節の別はあるが、ヒクイナの場合と同様、湿地の保全が望まれる。コンクリート護岸は治水を妨げない範囲で最小限に止めることが望ましい。

【関連文献】

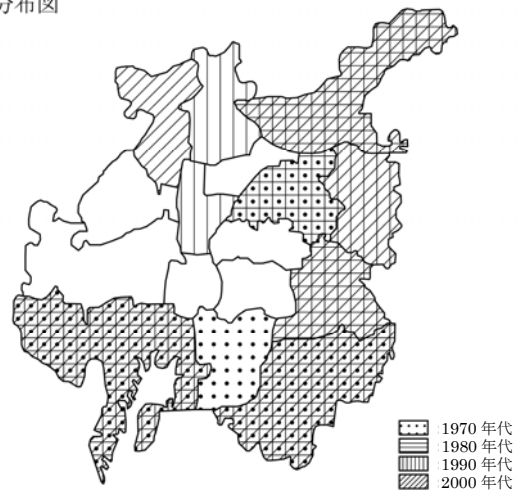
愛知 83:80, 愛知 95:45, 愛知 02:125, 愛知 06:45, 愛知 09:149, 繁殖 78:140, 分布 88:135, HBE2:537, HBW3:169, CBW1:340.

(執筆者 小笠原昭夫)



クイナ
港区戸田川、2014年3月12日、前田 崇 撮影

市内分布図



鳥類 <カッコウ目 カッコウ科>

カッコウ *Cuculus canorus* Linnaeus**【選定理由】**

地図上では特に顕著な減少傾向は認められないが、2000 年頃まであった繁殖期間中の連続滞在記録が途絶えた。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖 通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類 リスト外
	リスト外

【形態】

全長 32～37cm。頭部～上胸部と背は青灰色、長めの尾は灰黒色で横縞状に多数の白点がある。下胸部と腹は白く、灰黒色の細い横縞があり（ツツドリ、ホトトギスより細く密）、飛翔中の翼（先が尖る）下面にも横縞が見える。目は黄色。若鳥は頭部～上面茶褐色気味で後頭部に白斑があり、ほぼ全身に黒い横縞がある。雌には稀に赤色型がいる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内では 5、6 月頃東部を中心に中部、北部にも記録があり、東部では近年まで繁殖期を通しての記録もあった。

【県内の分布】

平野部から山地にかけて各地で観察され、三河山地では繁殖の記録もある。

【国内の分布】

ほぼ全域に夏鳥または旅鳥として渡来し、主要四島と南千島、佐渡、対馬では繁殖している。

【世界の分布】

極北部とインド等を除くユーラシアほぼ全域及びアフリカ北部で繁殖し、アジアのものはインド～ニューギニアで越冬する。ヨーロッパ西部では 20 世紀に入ってから減少したとされるが、世界的には特に減少の情報はない。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期には林縁部や林に接する草原に生息し、5 月下旬～8 月上旬頃モズ、オオヨシキリ等の巣に托卵して繁殖する。渡り期には公園や堤防上のサクラ並木等でおもに蛾の幼虫を捕食しながら移動していく。雄はカッコウ、カッコウと鳴き、雌はピピピピピ・・・と鳴く。飛翔中にも鳴くが、ホトトギス、ジュウイチと異なり、日没後は鳴かない。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内各地で比較的多く記録されている。記録の多くは 5～6 月または 9～10 月の渡り期のものだが、守山区と天白区では 2000 年頃まで夏期を通して生息し、繁殖の可能性を感じさせた（卵、ひなは見つかっていない）。2010 年以降、繁殖期中の記録はない。その理由は不明だが、宅地や道路の建設が生息地周辺の環境を悪化させた可能性が高い。

【保全上の留意点】

生息環境の保全が大切である。托卵性の鳥なので、仮親になりうる鳥（モズ、オオヨシキリ、ホオジロ、セグロセキレイ等）の動静にも注目する必要がある。

【関連文献】

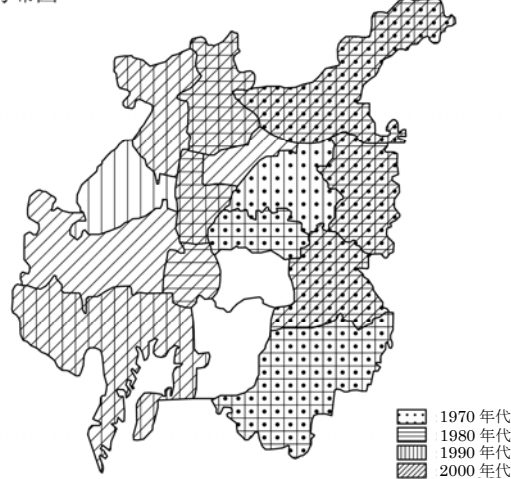
愛知 83:148, 愛知 95:81, 愛知 06:82, 繁殖 78:204, HBE4:402, HBW4:554, CBW1:332.



カッコウ

北設楽郡茶臼山、2013 年 6 月 4 日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 チドリ科>

イカルチドリ *Charadrius placidus* Gray et Gray

【選定理由】

市内に広く生息しているが個体数は減少している。生息環境の縮小の他、繁殖の成否に関しては営巣する砂礫地の保全が関与している可能性が高い。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖 絶滅危惧Ⅱ類 越冬 準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

全長19～21cm。背面は灰褐色で腹は白く、胸に黒帯がある。顔には額につながる黒く太い過眼線がある。嘴は黒く、脚は淡黄色。飛翔時、翼に淡色の線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

市の中心部を除いて広く記録されてきたが、個体数は少ない。守山区では2004年まで続いていた繁殖が、2008年以降確認されていない。

【県内の分布】

三河地方の東北部を除くほぼ全域に留鳥として生息する。

【国内の分布】

ほぼ全国に留鳥として生息し、北海道と本州北部のものは南下して越冬する。

【世界の分布】

アジア大陸東部と日本で繁殖し、大陸のものは中国南部・インドシナ半島北部へ南下して越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主として河川の上・中流域や湖畔に周年生息し、3月中旬～7月中旬に、河原の砂礫地や草の疎生する地面に産卵して繁殖する。ヒナは早成性で、孵化後まもなく歩き始める。抱卵中や孵化直後に、親鳥は接近する外敵に対して擬傷行動を示すことが多い。非繁殖期にはイネの刈跡など水辺から離れたところにも見られる。昆虫の成・幼虫を主食としている。ピョ ピョ ピョと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

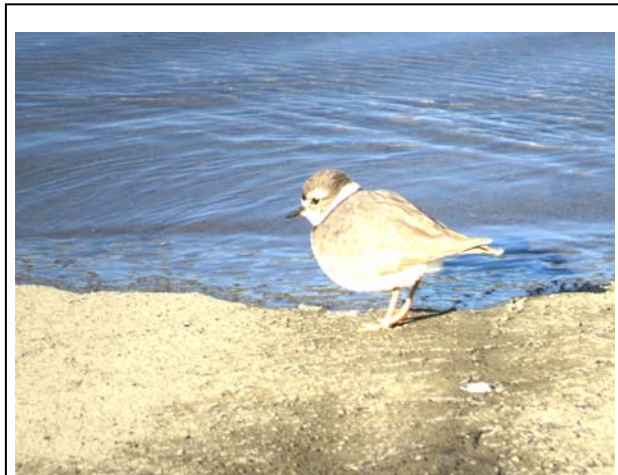
近年記録個体数が減少している。減少の主な原因は、おそらく開発や河川改修などによる生息環境の変化だと推測されるが、それとは別に、河原への頻繁な車の乗り入れによる繁殖妨害が増加しているのではないかと懸念される。

【保全上の留意点】

鳥たちの餌場やねぐらを奪う開発・土木工事のあり方を検討し、より環境保全に配慮する姿勢と方法を確立することが必要。さらに海浜のウミガメを守るのと同じ感覚で、繁殖地のある中流域の河川敷への車の乗り入れ規制を行うことも必要と考えられる。

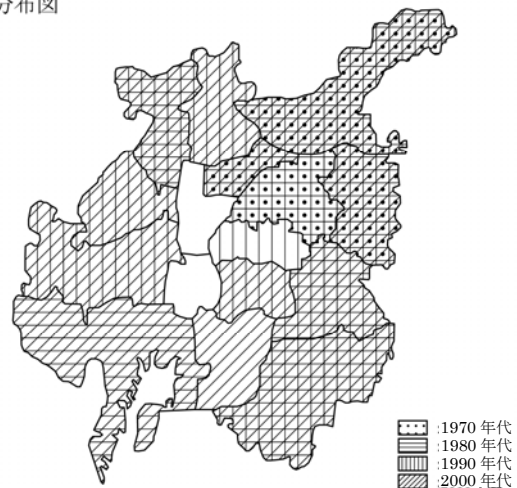
【関連文献】

愛知 83:88, 愛知 95:49, 愛知 06:49, 愛知 09:126, 繁殖 80:154, HBW3:426, CBW1:424.



イカルチドリ
港区大江川河口、2014年12月19日、芝原隆男 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 チドリ科>

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では、繁殖地としてよりは秋冬の採餌地としてより多く記録されてきた。従来数多く生息していた水辺性鳥類の中で、減少が目立つ種類の一つである。今後の急激な衰亡も懸念されるが、現在まだそれなりの数が見られることを考慮し準絶滅危惧と評価した。

【形態】

全長 17～19cm。上面は灰褐色で、下面は白色。雄の夏羽では過眼線と胸側の斑が黒く、冬羽や雌ではこれらが褐色。雄の夏羽の頭頂は橙褐色だが、これも冬羽と雌では灰褐色と地味な色合い。飛ぶと翼に白い線が出る。嘴と脚は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南部と北部の水辺に生息している。

【県内の分布】

平野部。特に海沿いに周年広く生息している。

【国内の分布】

ほぼ全国に分布し、繁殖するが、北海道、南千島では夏鳥、本州以南で留鳥。

【世界の分布】

北半球の低緯度から中緯度域で繁殖し、熱帯、亜熱帯、暖帯で越冬するものが多い。世界的に個体数が多いが、ヨーロッパやアメリカでは減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河川の下流部に生息し、昆虫類、クモ類、ゴカイ、トビムシ、小貝等、主に動物質を食べている。砂浜や河岸の砂礫地を少しくぼめて目立たぬ巣を作り、通常3卵（時に4卵）を産んで繁殖する。卵の孵化前後に外敵が近づくと、親鳥は翼を傷めたような動作（＝擬傷）をする習性がある。ピルッ、ピルッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の南部と北部に分布するが、分布の中心である庄内川河口付近で記録された数は、1975年9月2,280羽、1979年9月1,210羽、1980年9月955羽、1998年10月354羽、2000年10月110羽、2002年11月146羽、2004年11月310羽、2005年2月192羽、2007年10月155羽、2008年11月137羽、2010年1月205羽、2012年12月171羽、2014年1月98羽と顕著に減少している。市外で繁殖して秋冬に訪れるものが元来多かったが、名古屋市周辺の砂浜の減少と一時的に砂地だった造成地の状況変化により、繁殖適地が激減したことが市内での減少の原因の一つと考えられる。

【保全上の留意点】

採餌地としての干潟の保全のほか、恒久的な繁殖地としての砂礫地を保全（造成を含む）することが必要である（コアジサシについても同じことが言える）。

【関連文献】

愛知 83:87, 愛知 95:50, 愛知 06:49, 愛知 09:150, 繁殖 78:156, 分布 88:148, HBE3:153, HBW3:432, CBW1:426.

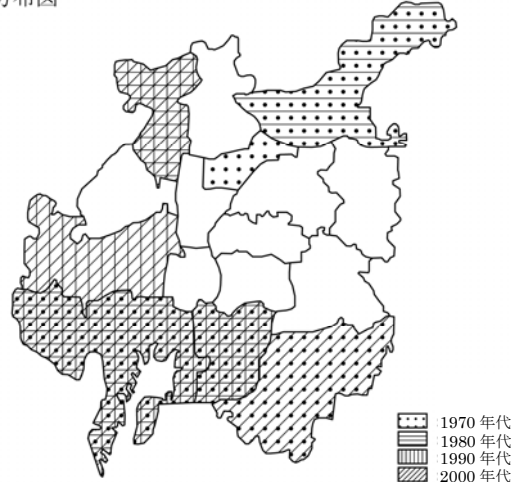
（執筆者 小笠原昭夫）



シロチドリ（冬羽）

港区日光川河口、2010年10月10日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 チドリ科>

メダイチドリ *Charadrius mongolus* Pallas**【選定理由】**

春と秋、普通に訪れる旅鳥で、激減してはいないが、往時に比べて渡来数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 18～21cm。背面は褐色で腹は白い。夏羽では過眼線が黒く、のどが白く、胸～頸側が赤褐色（雌はやや淡色）。冬羽では赤褐色が消える。若鳥は冬羽に似るが、背面に淡色の羽縁がある。嘴は黒く、脚は暗い緑褐色。飛翔時、翼に白線が出る。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として南部 3（港・南・緑）区に、旅鳥として渡来している。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、衣浦湾・三河湾沿岸部、知多半島、渥美半島などに旅鳥として渡来し、少数越冬するものがある。

【国内の分布】

ほぼ日本全土の沿岸域に旅鳥として渡来し、本州、九州、伊豆諸島、小笠原諸島、琉球諸島などでは越冬するものがある。

【世界の分布】

シベリア、カムチャツカ、中国東北部・西部などで繁殖し、アジア南部、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、アフリカ東部などの沿岸域で越冬する。世界的に特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期には高山のツンドラ・草原や、高緯度地方の低地の砂丘などに生息する。非繁殖期には海岸の干潟や砂洲に群生し、時に水田や池沼を訪れることもある。ゴカイ、二枚貝、カニ、昆虫などを捕食する。クリリリッと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1981年庄内川河口部で 89 羽、1983 年天白川河口部で 48 羽、1992 年藤前干潟で 60 羽、2005 年 5 月港区稲永ふ頭で 82 羽などが記録されたが、以後は 2007 年 4 月 19 羽、2010 年 4 月 33 羽、2013 年 4 月 6 羽、2014 年 5 月 14 羽（以上何れも庄内川河口部）と、それまでの数を超える記録はない。減少の直接原因は不明だが、他の多くのシギ・チドリ類の減少と同じく、生息環境の縮小・悪化が関係していると推測される。

【保全上の留意点】

減少の原因は明確ではないが、干潟や湿地の保全が重要と考えられる。

【関連文献】

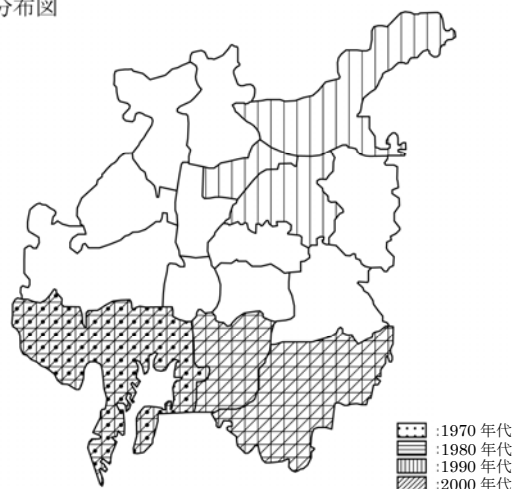
愛知 83:88, 愛知 95:50, 愛知 06:50, 分布 88:149, HBE3:166, HBW3:437, CBW1:428.



メダイチドリ（夏羽）

港区天白川河口、2011 年 4 月 30 日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 セイタカシギ科>

セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus)

カテゴリー

【選定理由】

1960 年頃までは全国的に迷鳥に類別される程の稀種だったが、その後、愛知県や首都圏に定期的に出現するようになり、1975 年以降県内および千葉県・東京都・大阪府でごく少数が繁殖している。

名古屋市 2015		準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
環境省 2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長約 32～40cm。黒い嘴はまっすぐで細長く、淡紅色の脚は非常に長い（体との比率上ここまで長い鳥は世界でもフラミンゴ以外にいない）。雄の上面は緑色光沢を帯びた黒で、下面は白い。雌の体の上面には雄より褐色味がある。頭部は頭上～後頭が黒いものから全体が白いものまで変異が多い。若鳥の上面は灰褐色、下面は白色。成鳥、若鳥とも腰と尾は白い。翼は長めで翼端は尖っている。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に少数生息する。

【県内の分布】

海部郡鍋田地区、矢作川河口部、汐川干潟周辺等（いずれも繁殖記録あり）に生息するが数は少ない。

【国内の分布】

北海道～沖縄のほか小笠原諸島、硫黄列島、大東諸島等に飛石状に記録はあるが、数は少ない。

【世界の分布】

ユーラシア、アフリカ、南・北アメリカ、オーストラリア等に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸近い水田、池沼、埋立地等に生息し、脚の長さを活かして、かなり深くまで踏みこみ、水生昆虫、小貝、小魚、オタマジャクシ等の小動物を捕食する。地面を浅くくぼめて、ヨシの茎や貝等の巣材を敷いた上に、通常 4 個産卵して繁殖する。ピュイツ、ピュイツまたはキッキキッキと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

港区庄内川河口付近で秋～春に観察されている。近くの鍋田干拓地では繁殖の記録があるが、名古屋市内には繁殖記録はない。元来数の少ない鳥で、現在特に減少はしていないが、存続の基盤が安定しているとは言えない。通常は数羽の小群で観察されるが、個体数の多い記録としては、2009 年 4 月 20 羽（港区藤高）がある。

【保全上の留意点】

名古屋市だけではなく、周辺部にかけて広い干潟の保全が必要である。

【関連文献】

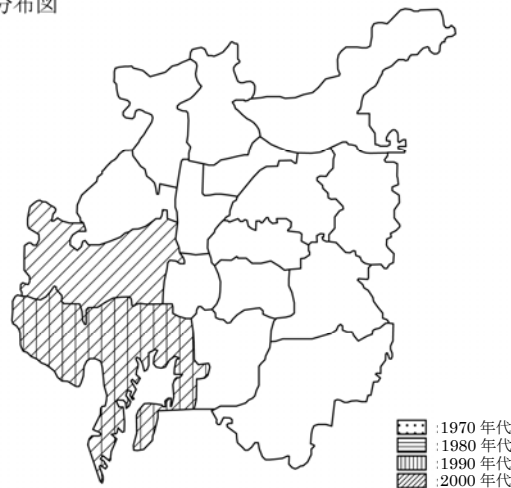
愛知 83:124, 愛知 95:70, 愛知 02:107, 愛知 06:72, 愛知 09:133, 分布 88:189, HBE4:36, HBW3:345, CBW1:422.

（執筆者 小笠原昭夫）



セイタカシギ
港区藤高、2009 年 4 月 29 日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus**【選定理由】**

夜行性で観察されにくい鳥であるが、往時に比べ近年確認例が減ってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 31～38cm。体の上面は赤褐色に黒と灰白色の細かな斑模様。頭上に赤褐色と黒の横縞がある。下面は淡褐色に黒褐色の細かな横縞模様。ハトより大きい太ったシギで、長さ約8cmのまっすぐな嘴と短い頸、脚をもつ。尾羽は基部が黒く先端部が灰色。飛ぶと翼端が丸い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北部、東部、西部等、おもに周辺部に散発的な記録がある。

【県内の分布】

平野部に記録は散在している。

【国内の分布】

本州以北、北海道、伊豆諸島で繁殖し、本州中部以南で越冬するが、繁殖密度は北海道で最も高い。

【世界の分布】

ヨーロッパからアジア東部の中高緯度域、ヒマラヤ、サハラ等で繁殖し、多くは南下してヨーロッパ南部、アフリカ北部～アジア東南部で越冬する。狩猟や生息環境の破壊により、世界各地で減少しているとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

低山の林内で繁殖するが、市内では（県内でも）繁殖の記録はない。名古屋市へは冬鳥として渡来し、夜間、林内や林縁で、土や堆肥の中からミミズをつつき出して食べるほか、昆虫類、多足類、甲殻類や植物の種子等も食べる。繁殖期の夕方、林の上を飛びながらチキッ、チキッと鳴くが、秋冬にはほとんど鳴かない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では10月～4月に記録されているが、夜行性で秋冬はほとんど鳴かないため、記録洩れもあると思われる。干潟や水田にすむ多くのシギ類と違って林内に生息する種類なので、宅地開発などで林が拓かれれば姿を消す。近年観察例は少なくなっているが、2003年秋には緑区と千種区で各1羽観察された。

【保全上の留意点】

雑木林と林縁部をより自然な姿で保全することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:121, 愛知 95:68, 愛知 02:150, 愛知 06:70, 愛知 09:161, 繁殖 78:166, 分布 88:183, HBW3:489, CBW1:442.

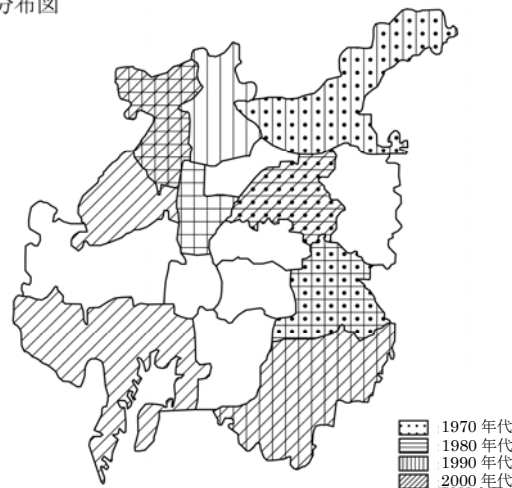
(執筆者 小笠原昭夫)



ヤマシギ

千種区平和公園、2008年10月22日、矢田和子 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus)

【選定理由】

市の南西部を渡りの中継地として利用しているが、渡来数は年を追って減少しつつある。ただし、庄内川の河口部には現在まだそれなりの数が飛来しているため、準絶滅危惧と評価した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 36～44cm。夏羽は体の上下面とも赤褐色で、背には黒い小斑が散在する。腰は白く、尾は白地に黒褐色の細い縞模様がある。冬羽の上面は灰褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は淡い灰褐色で胸や脇に褐色の斑がある。

若鳥は冬羽に似るが、上面の斑の形に特徴がある。嘴は平均 10cm と長く、わずかに上に反っており、基部は肉色で先端部は黒い。脚は長いが体形が似てやや小型のオグロシギより短い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、三河湾北部・東部の干潟に渡来する。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来し、少数は越冬する。

【世界の分布】

スカンジナビア～シベリアの極北部、アラスカ西部等で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～インド西部、東南アジア～オーストラリア、ニュージーランド等に渡って越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

4～5月と7～10月頃渡来し、主に干潟でゴカイ、貝、小エビ、トビムシ、昆虫類等を捕食する（近縁のオグロシギのように水田に入ることほとんど無い）。春・秋の渡来数もオグロシギとは逆で、本種は春に多い。ケツケツと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1979年4月、庄内川河口付近で315羽が記録され、その後も300羽を超える記録はあったが漸減して、1998年春164羽、2003年春70羽になり、近年は2012年4月38羽、2013年4月81羽、2014年4月67羽と、1980年代の1/5～1/4に減少している。大型の鳥が必要とする広く安全性の高い湿地と、満潮時に休息できる後背地が周辺部から消えつつあることが、減少の要因ではないかと推測される。

【保全上の留意点】

名古屋市だけでなく、周辺部にかけての広い干潟の保全が必要と考えられる。

【関連文献】

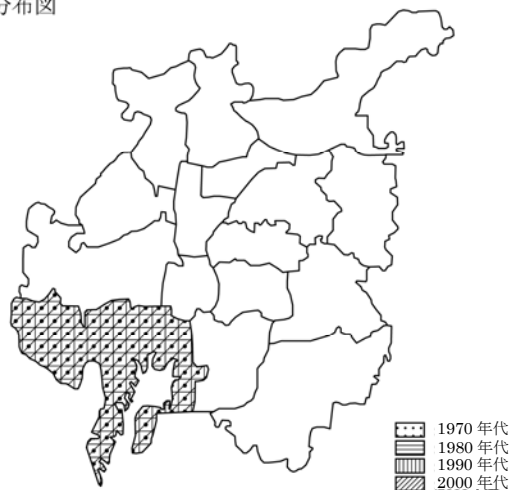
愛知 83:117, 愛知 95:66, 愛知 02:134, 愛知 06:67, 愛知 09:159, 分布 88:179, HBE3:473, HBW3:502, CBW1:436.



オオソリハシシギ（冬羽）

港区庄内川河口、2013年10月1日、森井豊久 撮影

市内分布図



（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus)

【選定理由】

名古屋市南西部を渡りの中継地、越冬地として利用しているが、近年渡来数、越冬数ともに減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	リスト外

【形態】

全長 52～66cm。上・下面とも淡褐色地に黒い斑点があるが下腹部は白い。翼の下面と腰が白く、近縁種ホウロクシギとの識別のポイントになる。尾には白地に黒褐色の細い横縞がある。嘴が平均 16cm と非常に長く、大きく下に曲っているのが、ホウロクシギとともに最大の特徴。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。

【国内の分布】

全国に旅鳥として渡来し、本州中部以西では越冬もする。

【世界の分布】

アイスランド、ヨーロッパほぼ全域～アジア中部で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～東南アジア等で越冬する。世界的には少なくともヨーロッパで減少しているとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

主として4～5月と8～9月頃渡来し、広い干潟でカニ、シヤコを主に、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等も捕食する（舌が短いためゴカイ等を吸い上げることは不得意）。越冬するものもある。カーリュー（英名 **Curlew** の語源、ホーイーンともクーヒーとも聞える。）とよく通る声で鳴くほか、ホーイ、ホーイとも鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の庄内川河口付近は県内でも有数の生息地で、1970年代には周辺を含めて20羽以上越冬していたが、1985年以降の記録は1985年12月7羽、1993年3月7羽、2003年2月9羽、2007年2月6羽、2007年2月6羽、2007年8月12羽（越夏）、2013年12月6羽、2014年3月6羽と減少している。最大型のシギで警戒性も強いいため、生息には広大な干潟を必要とする。各地での干潟の消滅・縮小が本種の渡来数を減少させていると推測される。

【保全上の留意点】

広い干潟の保全、更にはその沿岸部での湿地の保全・創出が望ましい。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）でNTに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:118, 愛知 95:67, 愛知 02:135, 愛知 06:68, 愛知 09:160, 分布 88:180, HBE3:500, HBW3:504, CBW1:436.

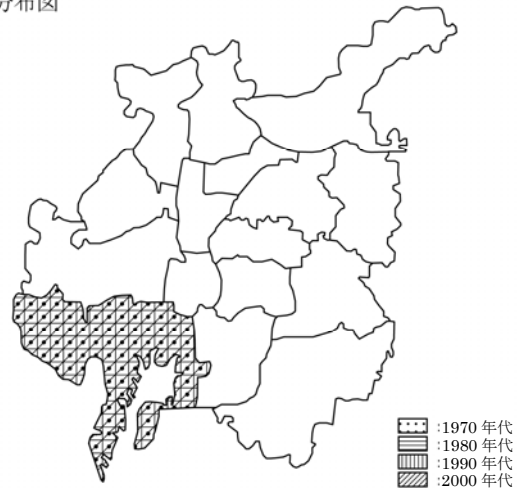
（執筆者 小笠原昭夫）



ダイシャクシギ

海部郡飛島村飛島干潟、2011年9月19日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus)**【選定理由】**

名古屋市では以前から数が少ない鳥で、近年急速に減ってきた種類ではないが、渡り中継地としての採餌環境や安全性が低下すれば、今後姿を見せなくなる恐れもある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 25～29cm。夏羽の上面は褐色地に、下面は白地に、上下面とも黒い縦斑が目立つ。翼の基半部後縁（初列風切の一部と次列風切）と腰は白く、飛翔時明瞭な識別点となる。尾には白地に暗褐色の横縞がある。冬羽の上面は灰色がかり、上下面とも黒い縦斑は消えて胸に灰褐色の縦斑が残る。嘴は先が黒く基部が赤。脚は赤い。体との比例上、嘴も脚も近似種のツルシギより短い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

南西部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口付近等で記録されているが、数は少ない。

【国内の分布】

数は多くないが広く旅鳥としての記録があり（春より秋に多い）、南西諸島では冬鳥。北海道東部では少数繁殖している。

【世界の分布】

アイスランド、イギリス、スカンジナビアからヨーロッパ、アジアの中緯度域で繁殖し、アフリカ～東南アジアへ渡って越冬する。1970年以降ヨーロッパでは減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

ツルシギと同じく、海岸や河口部の干潟、海に近い水田、湿地等に単独または数羽で渡来し、昆虫類、小ガニ、小貝、ミミズ等を捕食する。ツルシギの群れに混じることもある。ピーチョイチョイとややアオアシシギに似た声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部で記録（2010年9月2羽、2013年4月10羽、2013年9月4羽、2014年9月3羽など）があるが、いずれも数は少なく、稀な旅鳥と言える。周辺一帯での湿地環境（汽水域よりは淡水域）の減少が本種の生息に負に作用している可能性が高い。

【保全上の留意点】

本種の個体数の少なさが何に起因しているかは明確でないが、沿岸部の湿地を保全することが、今後の本種の減少を抑制する必要条件の一つだと考えられる。

【関連文献】

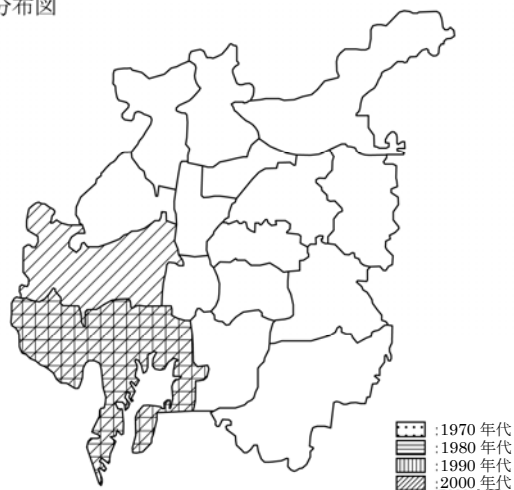
愛知 83:108, 愛知 95:61, 愛知 02:133, 愛知 06:62, 愛知 09:157, 繁殖 78:162, 分布 88:168, HBE3:525, HBW3:509, CBW1:448.



アカアシシギ

港区庄内川河口、2009年9月26日、近藤 孝 撮影

市内分布図



（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)

カテゴリー

【選定理由】

今世紀初頭までは名古屋市南東部で 100 羽以上の群れを見ることがあったが、その後そのような大群の渡来はなくなった。当市だけでなく、国内各地での減少が目立っている。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 26～28cm。夏羽では頭上から体の背面は黒っぽく、肩羽は赤褐色で、胸が黒い。冬羽では肩羽の赤褐色と胸の黒が消え、全体がやや淡色になる。若鳥は冬羽に似る。嘴と脚は黒い。飛翔時、翼に白線が出る他、腰が白く見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

南部 3 区に旅鳥をして渡来するが、南区と緑区では記録されない年もある。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部の他、渥美半島の太平洋岸や知多半島にも、旅鳥として渡来している。

【国内の分布】

北海道、南千島、本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美諸島、琉球諸島に旅鳥として渡来している。

【世界の分布】

シベリア東部で繁殖し、アジア南部、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って冬を越す。世界的に個体数は減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

5 月下旬～6 月下旬頃、亜寒帯のアルパイン・ツンドラで繁殖し、渡り途中（4～5 月、8～10 月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見られることもある。キッ キッまたはケッ ケッと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近での年間最多観測数は、2003 年 9 月 158 羽だったものが、2004 年 10 月 15 羽、2005 年 10 月 39 羽、2006 年 9 月 32 羽、2007 年 9 月 36 羽、2008 年 8 月 25 羽、2009 年 9 月 76 羽、2012 年 10 月 33 羽、2014 年 10 月 30 羽と、2 桁に減少している。繁殖地では、ヒナに昆虫（アブ・ハエの幼虫など）を与える他は、主として漿果・堅果などの植物質を食べ、渡り期・越冬期には干潟で二枚貝を中心に、巻貝・甲殻類・環形動物などを、更に水際を離れた砂礫地でヨコエビなどを食べる。中国では生息環境の縮小と渡り中継地での狩猟が、本種の生存への脅威になっているとの説があるが、わが国でも開発による生息環境の悪化が減少の主要因ではないか、と懸念される。

【保全上の留意点】

減少の原因は明確ではないが、干潟や湿地の保全がまず重要、と考えられる。

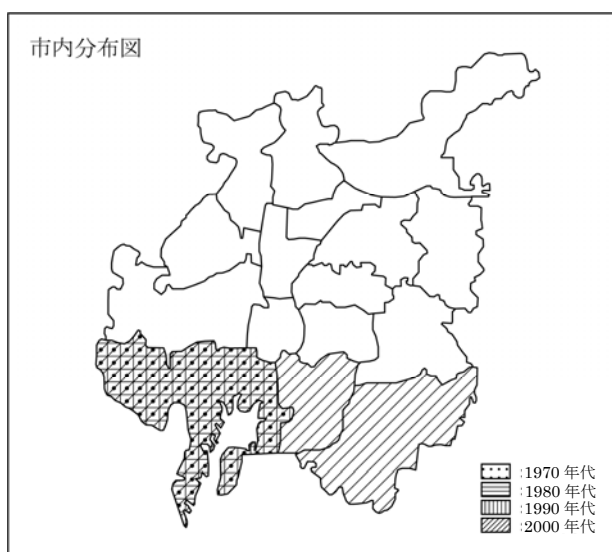
【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）で VU に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:101, 愛知 95:58, 愛知 02:129, 愛知 06:58, 愛知 09:153, HBE3:268, HBW3:519, CBW1:438.

（執筆 小笠原昭夫）



鳥類 <チドリ目 シギ科>

コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)**【選定理由】**

1970年代には伊勢湾奥部で50羽同時に記録されたこともあるが、その後渡来数が減少し、近年、市内では毎年0か一桁台の記録しかない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	リスト外

【形態】

全長23～25cm。夏羽は全体に茶色っぽく、背面には黒と白の細かな斑紋模様がある。冬羽の背面は灰黒色で各羽縁が細かく白い。冬羽の腹面は白く、頭から胸・脇にかけて灰褐色の縦紋がある。若鳥は冬羽に似る。嘴は黒く、脚は暗いオリーブ色。飛翔時、翼に細い白線が出る。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口部付近でのみ、旅鳥としてごく少数が記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部で、旅鳥として少数が記録されている。

【国内の分布】

海道、南千島、本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島で、旅鳥として少数が記録されている。

【世界の分布】

シベリア北部および東部、アラスカ、カナダ北部、グリーンランドなどの北極圏で繁殖し、南へ渡って冬を越す。越冬地はスコットランド～アルゼンチン、チリ、アフリカ西・南岸、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドと広範囲にわたる。世界的に特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

6月頃、北極圏のツンドラで繁殖し、渡り途中（4～5月、8～10月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見られることもある。他のシギ類、特にオバシギの群中にいることが多い。旅鳥だが、春には少ない。ノット聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1973年、隣接する飛島村飛島干潟で50羽の記録があるが、以後そのような多数の渡来はなく、1983年10月2羽、1988年4月1羽、2004年10月3羽、2007年5月4羽、2010年9月8羽、2014年10月2羽（何れも庄内川河口部）など、渡来記録は極く少ない。双翅目・鱗翅目・毛翅（トビケラ）目などの昆虫も食べるが、干潟では二枚貝や巻貝を多く捕食する。減少の原因は不明だが、他のシギ・チドリ類が好むゴカイや甲殻類を比較的好まないやや特殊な餌の好みが影響しているものか、詳しい調査が必要である。外国では人による貝の取り過ぎや、レクリエーションでの干潟の利用のし過ぎ、航空機の飛び過ぎなどが餌場の不安定化につながっている、と警告する声がある。

【保全上の留意点】

減少の直接原因が不明なので対策は難しいが、干潟と沿岸部の湿地の保全は不可欠と考えられる。

【関連文献】

愛知 83:100, 愛知 95:58, 愛知 02:128, 愛知 06:57, 愛知 09:152, HBE3:271, HBW3:519, CBW1:438.

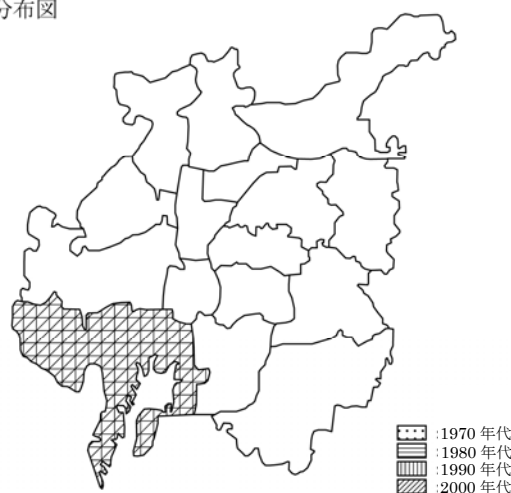
（執筆 小笠原昭夫）



コオバシギ

港区藤前、2014年8月16日、近藤 孝 撮影

市内分布図



鳥類 <チドリ目 シギ科>

ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

冬の干潟の主役。かつては庄内川河口部で1万羽を超える群れが観察され、国内最多の記録となったが、その後漸減し、2015年3月現在の総数は1,000羽に達していない。今後回復する可能性も無くはないが、保全が手遅れとならないよう対応することが緊急の課題である。

【形態】

全長 19～23cm。嘴は黒く長めで、やや下に曲がっている。足も黒い。夏羽の上面は赤褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は腹の大きな黒斑以外は白っぽい。冬羽の上面は灰褐色で下面は汚白色（黒斑は無い）。飛翔時、翼に細い白線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

秋期、主として南西部の干潟に群れて渡来し、翌春まで居残るものと、さらに暖地に渡って冬を越すものがある。

【県内の分布】

河口部に広がる干潟に、冬鳥または旅鳥として渡来するが、近年減少している。

【国内の分布】

北海道、南千島、佐渡に旅鳥、本州、四国、九州以南に冬鳥または旅鳥、琉球諸島には冬鳥として渡来する。

【世界の分布】

北半球の北部で繁殖し、温帯～熱帯に渡って越冬する。世界的に減少しているとの情報はない。

【生息地の環境／生態的特性】

主として海岸や河口の干潟に群れ、ゴカイや二枚貝、巻貝、トビムシ等の小動物を捕食する。小群で内陸の淡水環境を訪れることもある。干潟等で群飛する際は一斉に方向を転換するので、冬羽の白い腹をこちらに向けた時はきらめいて美しい。トウンネンやシロチドリと群れて採餌することもある。ジュリーと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近での年ごとの最多記録数の概略は、1987年3月に3,445羽、1992年4月に9,188羽、1993年5月に10,491羽、1994年4月に1,636羽、1997年3月に2,144羽、1998年5月に8,210羽、1999年11月に5,050羽、（2000年9月11日～12日の東海豪雨で被害が出た模様）2000年12月に3,177羽、2002年2月に2,563羽、2005年5月に2,160羽、2009年11月に2,807羽、2010年11月に3,200羽、2011年5月に2,660羽、2012年11月に1,807羽、2013年11月に1,392羽、2014年3月に1,735羽、2015年2月に874羽の如くで、1993年と比べると2015年は1割以下に減っている。その減少の要因は解明されていないが、巨大な台風や河川工事が、干潟の自然な姿を破壊した可能性が考えられる。

【保全上の留意点】

上記のように自然災害や改修工事が、干潟を代表するこの鳥の生息の障害になっている可能性があるため、工事の際には治水のほか干潟の生物多様性に留意し、さらに満潮時にシギたちが休む後背地（畑、草地等）の創出・保全にも配慮することが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:98, 愛知 95:57, 愛知 02:156, 愛知 06:56, 愛知 09:177, 分布 88:160, HBE3:356, HBW3:526, CBW1:440.

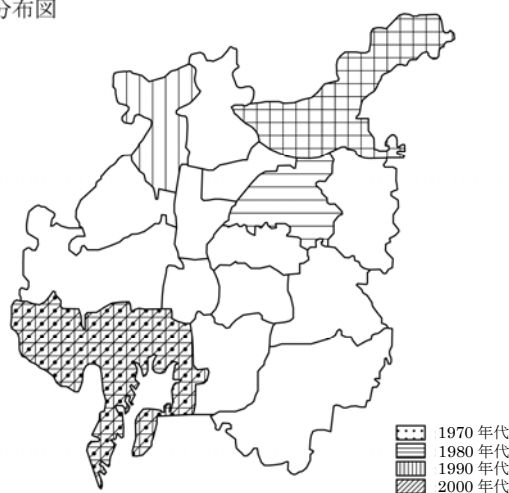
（執筆者 小笠原昭夫）



ハマシギ

海部郡飛島村下川河口、2004年3月7日、森井豊久 撮影

市内分布図



1970年代
 1980年代
 1990年代
 2000年代

鳥類 <チドリ目 シギ科>

エリマキシギ *Philomachus pugnax* (Linnaeus)

カテゴリー

【選定理由】

元来数少ない旅鳥だったが、ウズラシギやタカブシギと同じく、干潟よりは後背の水田や湿地を好む鳥だけに、そのような淡水湿地が激減している市内では、今後深刻な減少が懸念される。

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県 2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		リスト外

【形態】

全長雄 26～32cm、雌 20～25cm。雄の夏羽には頭上や首のまわりに栗色・赤褐色・暗紫色・白色・白黒の横縞模様などの派手な飾り羽があり、胸～腹は白く、胸側に暗色の斑点がある。雌の夏羽は上面と胸が淡褐色に黒斑、腹は白い。冬羽は雌雄とも上面は淡灰褐色に黒っぽい斑があり、顔、胸は淡灰褐色で腹は白い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に旅鳥として少数飛来するが、越冬することもある。

【県内の分布】

おもに伊勢湾・三河湾の沿岸部（稀に内陸部）の湿地に旅鳥として渡来し、越冬することもある。

【国内の分布】

離島も含め、ほぼ全国に旅鳥として渡来する、春より秋の記録が多い。

【世界の分布】

ユーラシア北部で繁殖し、アフリカ・インド・東南アジアへ渡って越冬する。ロシア東部やイギリスでは、近年繁殖域や繁殖個体数が拡大・増加の傾向にあるという。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖地（寒帯～亜寒帯のツンドラ、ヨーロッパでは冷温帯の湿地・湿性草原でも）では複数の雄が集まって lek と呼ばれる求愛集団を作り、首まわりの羽を拡げてダンスする。当市でも春に見られる夏羽の個体の中には、稀にその動作の片鱗を見せるものもある。渡り期を含む非繁殖期には、干潟より耕地や淡水性の湿地で、昆虫・クモ・小型甲殻類・貝・小魚等の動物を主に、草の種子や植物も食べている。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市による5年ごとの一連の調査では、毎回港区で少数が記録されている。他に2004年11月2羽、2005年2月7羽、2006年9月1羽、2007年8月1羽、2010年9月5羽、2011年9月1羽、2012年9月1羽、2013年4月2羽、2013年12月3羽、2014年4月1羽の記録など（何れも港区庄内川河口付近）がある。アジア東部は本種の分布域の東端に近いことのほか、主要な生息環境である水田・池畔など淡水湿地の著しい減少が、渡来数の少ない理由の一つかと考えられる。

【保全上の留意点】

上述のように、水田等淡水性湿地の減少が本種の生息を制限している可能性がある。時代の流れには逆れないが、市内のどこかに文化遺産としてでも水田を遺すことが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:104, 愛知 95:59, 愛知 02:131, 愛知 06:59, 愛知 09:155, HBE3:385, HBW3:530, CBW1:438.

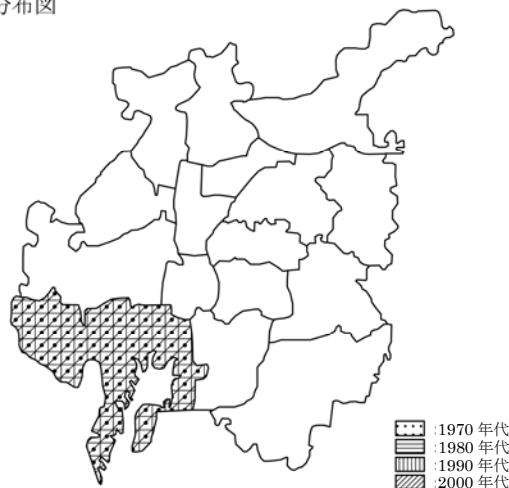
（執筆者 小笠原昭夫）



エリマキシギ（雄、夏羽）

港区南陽町、2013年5月14日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <タカ目 ミサゴ科>

ミサゴ *Pandion haliaetus* (Linnaeus)**【選定理由】**

市域の南西部では近年（特に冬期）増加の傾向にあるが、全国的には減少しており、存続の基盤は未だ安定していないと判断される。

カテゴリー

名古屋市 2015		準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	リスト外
環境省 2014		準絶滅危惧

【形態】

全長雄約55cm、雌約64cm。ほぼトビ大だが、翼は細長く尾は短め。頭は白く、過眼線が黒い。体の上面は黒褐色。下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。若鳥の上面には淡褐色のうろこ模様がある。魚食鳥として進化し、前後に2本ずつ向く脚指を持つ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

近年広く記録されている。

【県内の分布】

平野部で広く観察されるが、数は多くない。主として冬鳥・旅鳥だが、夏期の記録もある。

【国内の分布】

北海道、本州、南千島で夏鳥、本州以南では留鳥。

【世界の分布】

ユーラシア、北アメリカ、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアなどで繁殖し、北部のものは南アメリカ、南アジア、アフリカなど南へ渡って冬を越す。世界での個体数はほぼ安定していると思われている。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や湖沼に生息し、岩棚上や大木の梢に（近年は人工的な鉄塔の上でも）営巣する。春・秋の移動期には内陸で見られることもある。水面上で停空飛翔をしてねらいを定め、急降下して中・大型の魚をつかみ取る。キョッキョットかキッキットと聞こえる高い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、近年熱田区を除く全区で記録があり、その多くは通過個体だが、港区の庄内川、新川、日光川河口付近には周年生息し、1998年11月3羽、1999年10月4羽、2000年1月7羽、2002年7月6羽、2002年10月19羽、2003年10月16羽、2004年12月15羽、2006年10月15羽、2007年10月34羽、2008年10月35羽、2010年9月34羽、2011年10月38羽、2012年11月42羽、2013年12月41羽と、年を追って増加している。近隣地での繁殖の可能性も示唆される。

【保全上の留意点】

専ら魚を餌とし、特殊な進化を遂げた鳥だけに、激変する環境への適応性は高くないと思われる。現在の主生息地である庄内川河口部一帯の餌場としての保全がまず必要である。

【関連文献】

愛知 83:60, 愛知 95:35, 愛知 02:120, 愛知 06:34, 愛知 09:145, 分布 88:103, HBE2:265, HBW2:51, CBW1:518.

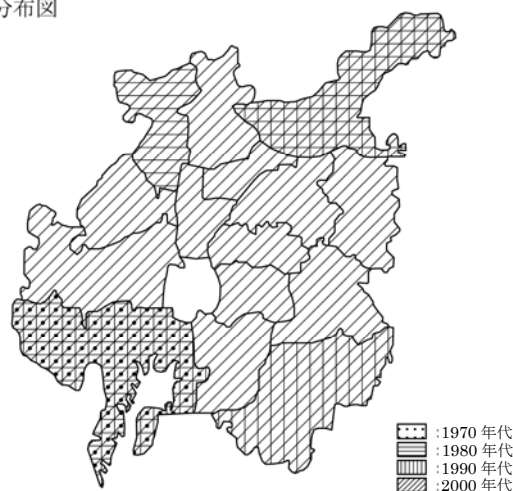
（執筆者 小笠原昭夫）



ミサゴ

海部郡飛島村、2009年9月11日、森井豊久 撮影

市内分布図



鳥類 <タカ目 タカ科>

ツミ *Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

小型ながら食物連鎖の上位に立ち、健全な生態系を指標する種の一つである。市内に少数生息し繁殖の例もあるので、生息環境の保全に努めて、更に安定した個体群にすることが望まれる。

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	通過	リスト外
環境省2014		リスト外

【形態】

全長雄約27cm、雌約30cm。日本産では最小型のタカ。成鳥の上面は暗青灰色。雄の下面は白っぽく、胸側～脇が淡い赤褐色。雌の下面は白地に黒褐色の横斑がある。若鳥は上面黒褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑（胸）と横斑（腹）がある。翼が短めで翼端が丸みを帯び、尾羽が長い点など体形はオオタカ、ハイタカに似るが、大きさの差は顕著。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主に東部、北部に記録が多い。

【県内の分布】

平野～山麓にかけて広く記録されているが、繁殖記録は作手村などの少例のみ。秋、伊良湖岬を渡る数は1シーズンに1,000羽程度。

【国内の分布】

広く分布し、繁殖地も北海道、南千島から沖縄に渡るが記録は比較的少ない。

【世界の分布】

アジア東部の中緯度域で繁殖し、その多くは東南アジアで越冬している。世界での個体数に関する情報は十分でない。

【生息地の環境／生態的特性】

低山帯の雑木林に生息し、林内や周辺の農地等で小鳥や小型の哺乳類、昆虫類等を捕食する。攻撃的な習性が強く、自分より大きい他鳥を擬攻撃する姿がよく見られる。5～8月頃、樹上に小枝を積み重ねて皿形の巣を作り、3～4卵を産んで繁殖する。キーキーキキキキと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では秋の通過と越冬例が主だが、守山区、名東区、天白区などでは繁殖例がある。2003年春、昭和区鶴舞公園でも繁殖の徴候があったが、恐らく人による妨害で不成功に終わった。

【保全上の留意点】

生息・営巣環境としての緑地の保全や街路樹の育成がまず望まれる。また前項でも触れたように、人の接近が繁殖を失敗させる可能性も低くないので、撮影目的などでの長時間に及ぶ接近は慎みたい。更に他の多くの種についても言えることだが、カラスによる繁殖障害が懸念される。近年名古屋市でも生ごみを食べるカラスが増えてきたため、本種等への影響にも注目する必要がある。

【特記事項】

近年、首都圏を中心に人家周辺で営巣する例が増えてきている。

【関連文献】

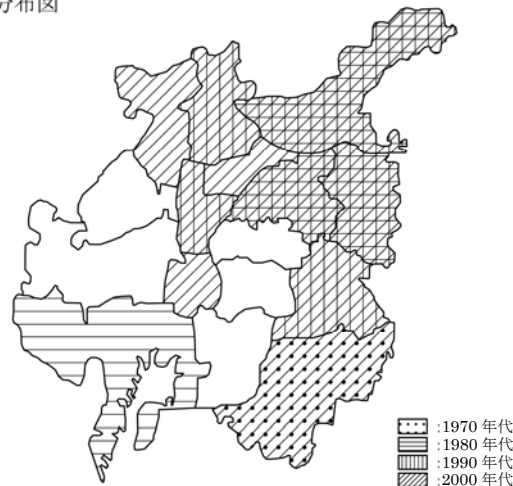
愛知 83:65, 愛知 95:38, 愛知 02:121, 愛知 06:36, 愛知 09:147, 分布 88:107, HBE2:148, HBW2:155, CBW1:542.



ツミ（雄）

名東区神丘公園、2010年7月5日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 タカ科>

ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus)**【選定理由】**

名古屋市では緑地に富む東部に記録が集中している。記録漏れもあると思われるが、現状を見る限り準絶滅危惧種から外すにはやや安定さに欠けると判断される。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

全長雄約32cm、雌約39cm。先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。雄の上面は暗青灰色で、黒い過眼線とその上に白い眉線がある（雌にも）。下面は白地に赤褐色の横斑がある。雌の上面は灰褐色で、下面は白地に褐色の横斑がある。若鳥の上面は褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑（のど）、横斑（胸・腹）がある。尾にはいずれも4本の黒っぽい帯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

近年記録地は広がっているが、個体数は少ない。東部には繁殖の記録もある。

【県内の分布】

おもに秋～春、平地から低山で広く記録されているが数は少ない。

【国内の分布】

本州以北で繁殖し、ほぼ全国で越冬する。

【世界の分布】

ユーラシアとアフリカ北西部で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。1950～60年代有機塩素系殺虫剤によって激減し、その後回復してきたとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

春夏は山地の林、秋冬は低地～低山の林に生息し、小鳥類を主に、小型哺乳類、昆虫類等も捕食する。5～6月頃、アカマツ等の樹枝上に小枝を積んで皿形の巣を作り、4～5卵を産んで繁殖する。キキキキキキと鳴く声はオオタカに似るが、ややテンボが速い。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でかなり広く記録されている。守山区、名東区、千種区、天白区、緑区の東部5区ではほぼ調査年ごとに記録され続け、天白区では繁殖の記録もある。現時点では特に著しい減少の傾向は認められない。

【保全上の留意点】

市内で（県内でも）繁殖の記録は少ないが、林にすみ、その周辺で採餌する種類であるため、緑地の保全が必要である。

【関連文献】

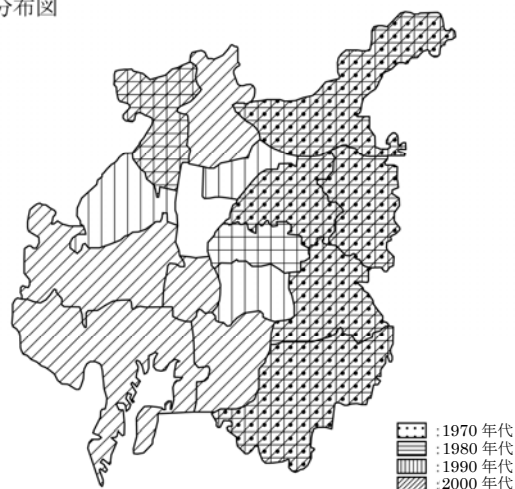
愛知 83:66, 愛知 95:38, 愛知 02:123, 愛知 06:37, 繁殖 78:118, 分布 88:109, HBE2:158, HBW2:158, CBW1:542.

（執筆者 小笠原昭夫）



ハイタカ（雌）
天白区相生山緑地、2011年2月5日、前田 崇 撮影

市内分布図



鳥類 <タカ目 タカ科>

オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus)**【選定理由】**

近年市内各地で散見されて見かけ上増加しているが、以前よりも観察網が密になったためかも知れず、本種の安定的増加を示すかどうかは断言できないので、準絶滅危惧と評価した。

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長雄約50cm、雌約56cm。ほぼカラス大のタカで、先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。成鳥の上面は暗灰色で、目から後方が黒く、白い眉線が目立つ。下面は白地に黒く細い横縞模様がある。尾には4本の黒っぽい横帯がある。若鳥は上面褐色で、下面には暗褐色の縦斑がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

ほぼ全域で観察され、近年記録は増す傾向にある。

【県内の分布】

里山を中心に広く分布し繁殖している。

【国内の分布】

本州以北で繁殖し、季節による大きな移動はしない。

【世界の分布】

北半球の温帯から亜寒帯にかけて広く繁殖し、やや南下して越冬するものもある。19世紀から20世紀にかけて世界的に減少したが、現在、減少は止まったと考えられている。

【生息地の環境／生態的特性】

営巣環境である高木を含む林と、採食環境である林縁部や農耕地とが混在する里山に生息し、中・小型の鳥やヘビ、リスなどを捕食する。より山地を好むクマタカ、イヌワシと異なり、生息環境が人の生活域と接するため、開発事業で話題になることが多い。近年記録が増えているのは、現実には数が増えたのか、発見される機会が増えただけなのか不明。マツなどの高木に営巣し、4～5月頃3～4卵を産んで繁殖する。キッキキッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

図からは読めないが、市の東部では1980年代後半からの記録が多く、繁殖の報告もある。市の中部、西部の記録はほとんどが1990年代以降のもので、しかも2ヶ月、3ヶ月と連続記録されている地域もあることから、現実には増加している可能性がある。しかし、安定して増えているかは即断できない。

【保全上の留意点】

前項記述のように、今後継続して動静を調査・分析するとともに、営巣環境の保全措置（林や大木の保全、場合によっては飛翔空間を確保するための林内整備等）を講ずる必要がある。

【特記事項】

里山の食物連鎖の頂点に位置する代表的な種類として、本種は健全な生態系の指標とされる。本種自体の保全ばかりでなく、里山の環境変化の目安としても、本種の動静に注目する必要がある。「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」により、国内希少野生動物種に指定されているが、近年指定解除への動きもある。

【関連文献】

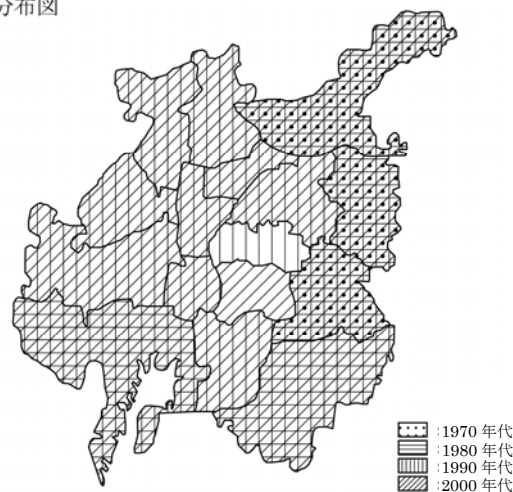
愛知 83:64, 愛知 95:37, 愛知 02:121, 愛知 06:35, 愛知 09:146, 分布 88:107, HBF2:148, HBW2:162, CBW1:544.



オオタカ（若鳥）

港区庄内川河口、2013年11月23日、近藤 孝 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield)

カテゴリー

【選定理由】

目立たない鳥のため記録は少ないが、その僅かな記録からも、名古屋市が越冬地または移動時の通過地として利用されていることが推測される。

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		リスト外

【形態】

全長 23～26cm。体は褐色で、上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、後頸に淡い灰褐色の斑がある（この斑はコノハズクにはない）。下面には黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色で、風切羽と尾には黒褐色の横縞がある。頭に羽角があり、目は赤橙色（コノハズクは黄色）。嘴は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

東部に僅かな記録がある。

【県内の分布】

低地から山地まで記録は散在するが、夜行性で鳴き声も目立たないため、情報は十分でない（三河山地での繁殖記録がある）。

【国内の分布】

主要四島のほか南千島、佐渡、隠岐、対馬、五島列島、琉球諸島、伊豆諸島に留鳥または漂鳥として繁殖しているが数は多くない。

【世界の分布】

アジア南部～東部に留鳥として生息し、世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地～山地の林に生息し、夜間活動して小鳥類、ネズミ、モグラ、カエル、カニ、昆虫類、クモ等を捕食する。5～6月頃、樹洞に4～5卵を産んで繁殖する。コノハズクのような移動性はなく、ほぼ留鳥とされるが、冬には暖地に漂行するものもある。雄はホッホッとかウオウオウと聞える声で鳴き、雌はミャーミャーと猫に似た声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録は、千種区東山公園で1985年3月、天白区相生山緑地で1979年10月・11月、1994年12月、1999年11月、南区大江川緑地で2004年11月、それぞれ1羽と乏しいが、記録洩れもあると思われ実態はつかみにくい。しかし、森林生の種だけに今も都市化が進み樹林が減少して名古屋市中で、減少傾向にあることは否定できない。

【保全上の留意点】

実態は十分把握できないが、林地の保全を第一に、巣箱の仮設も試みる価値がある。

【特記事項】

従来アジア南～南東部及び周辺のをまとめてオオコノハズク (*O. bakkamoena*) としてきたが、羽色、眼の色、鳴き声等の違いから細分化され、日本産の個体は *O. lempiji* とされた。

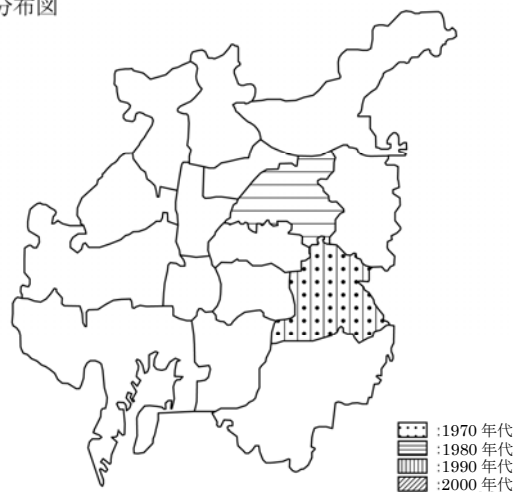
【関連文献】

愛知 83:146, 愛知 95:84, 愛知 02:152, 愛知 06:85, 愛知 09:165, 繁殖 78:214, 分布 88:221, HBW5:158, CBW1:494.



オオコノハズク
南区大江川緑地、2014年11月14日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <スズメ目 サンショウクイ科>

サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)**【選定理由】**

4月頃渡来し、9～10月頃渡去する夏鳥だが、国内各地で減少が報告され、名古屋市でも近年減少している。

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	国リスト
2015	通過	国リスト
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 19～21cm。雄は額が白く、頭頂から後頭と過眼線は黒い。背～腰は灰青色で、長めの尾羽は中央が黒く左右は白い。下面は白。翼は黒く、開くと上下面とも白い線が出る。雌は額の白が狭く、頭上～後頭は灰色。嘴と脚は黒い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

春と秋の渡り期に、主に市の東半部で見られるが、記録は秋の渡去期に多い。

【県内の分布】

夏鳥として渡来し、山地の広葉樹林で繁殖するが、1980年代以降個体数は減少している。

【国内の分布】

主要四島のほか佐渡、南西諸島で繁殖する夏鳥で、九州南部以南では越冬するものもある。個体数は各地で減少している。

【世界の分布】

中国東北部、ウスリー地方等で繁殖し、東南アジア、台湾、インドネシアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、低山の広葉樹林に渡来する。高木の梢近くで、トンボ、アブ、カメムシ、ガ、コガネムシ等の昆虫類を捕食する。巣も通常高枝上に作り、5～6月頃、4～5卵を産んで繁殖する。緩い波形を描いて飛び、ジーリジリまたはヒリヒリヒリ（名の由来）と聞こえる声で鳴く。渡去期には群れて低地の林を通過していく。

【現在の生息状況／減少の要因】

地図上の記録は多そうに見えるが、観察される機会・個体数とも近年減少している。1996年9月東山植物園 14羽、2003年8月天白区荒池 18羽、2006年9月東山植物園 16羽、2014年8月天白区相生山緑地 30羽等のまとまった数の記録は最近では珍しい。顕著な減少の原因は明らかでないが、低地～低山帯の広葉樹林の減少が原因の一つではないかと考えられる。

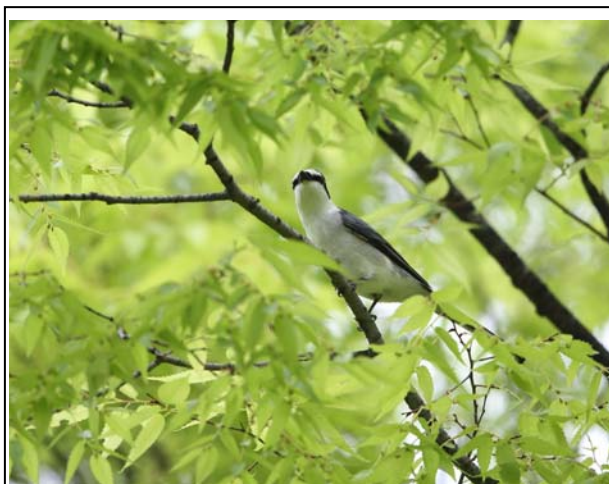
【保全上の留意点】

市内では緑地や公園の林を保全することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:172, 愛知 95:97, 愛知 02:112, 愛知 06:98, 愛知 09:168, 繁殖 78:272, 分布 88:252, HBW10:113.

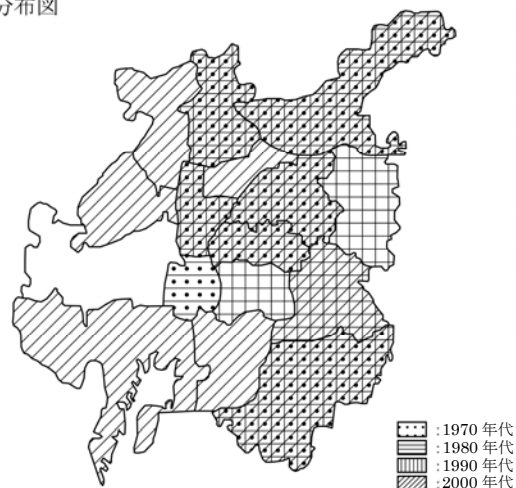
(執筆 小笠原昭夫)



サンショウクイ

昭和区鶴舞公園、2014年4月22日、矢田和子 撮影

市内分布図



鳥類 <キジ目 キジ科>

ウズラ *Coturnix japonica* Temminck et Schlegel

カテゴリー

【選定理由】

観察記録が極めて稀な上、その僅かな記録中に飼育群からの脱出個体も混入している可能性があるため、野生種の現状把握はむずかしい。環境省自然保護局の判断では近年減少しているとされる。

名古屋市2015		情報不足
愛知県 2015	越冬	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 19～22cm。上面は褐色で、白と黒の縦斑、横斑がある。下面は淡い黄褐色で、胸～脇に茶褐色と黒の縦斑がある。雄の夏羽の喉～頬は赤褐色。雌の喉、上胸には2本の黒褐色の横帯がある。開いた翼の上面は黄褐色地に黒褐色の横縞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

確実な記録は1969年4月天白区野並1羽、1974年3月千種区覚王山3羽等ごく僅かで、名古屋市の生息状況調査では一度も記録されていない。

【県内の分布】

海部郡弥富町、幡豆郡一色町、宝飯郡一宮町、北設楽郡稲武町等に散発的な記録があるだけで、特に近年は報告が少ない。

【国内の分布】

本州中部以北で夏鳥として繁殖し、本州中部以西（南）で越冬するが報告は少ない。

【世界の分布】

モンゴル東部、中国東北部、ウスリー、サハリン等で繁殖し、韓国、中国南部等に渡って越冬する。世界での個体数に関する情報は不足している。

【生息地の環境／生態的特性】

耕地、草原、河原等に生息し、草の種子のほか昆虫類、クモ類等を捕食する。5～9月頃（時に10月にも）草の根元に少量の枯草を敷いて巣を作り、7～12個（時に18個も）の卵を産んで繁殖する。通常草蔭にひそんでいて滅多に姿を見せないが、繁殖期にはジュグーイッとかジョッビググル等と聞える声で存在を知ることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録はごく僅かしかなく、特に近年の情報は少ない。草に隠れるようにして生活する鳥なので、草原が刈られたり、圃場整備が進んで草むらがなくなったりすると棲めなくなる。情報不足で現状の正しい把握ができず、近年減少している（らしい）原因も詳しくは解っていない。

【保全上の留意点】

当面は草原を維持することぐらいしか考えられないが、飼育場から抜け出た個体のことも考慮に入れて、保全策を検討していく必要がある。

【特記事項】

豊橋市を中心に多数飼育され、卵の出荷量は全国の70%を占める。ニワトリやアヒルと異なり1個体当たりの産卵数が多い以外、野生種との変異が少ないため、両者の識別は困難である。世界のレッドリスト（IUCN2014）でNTに指定されている。

【関連文献】

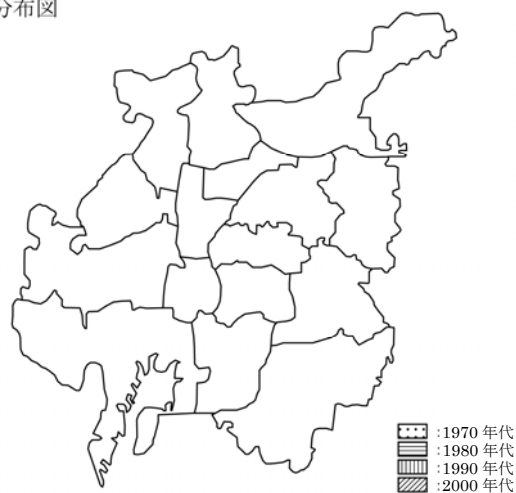
愛知 83:76, 愛知 95:43, 愛知 02:148, 愛知 06:42, 愛知 09:123, 繁殖 78:130, 分布 88:125, HBW2:509, CBW1:94.



ウズラ（雄）

弥富市鍋田干拓、1982年4月25、森井豊久 撮影

市内分布図



（執筆 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

シベリアオオハシシギ *Limnodromus semipalmatus* (Blyth)**【選定理由】**

春・秋の渡り期に干潟や沿岸部の湿地を訪れるが、渡来数が極めて少なく、安定した生息状況とは言えない。県内には湿地の埋立てによって、近年渡来が途絶えた地域もある。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県 2015	通過
環境省2014	情報不足

【形態】

全長 33～36cm。夏羽は上・下面とも赤褐色で、黒褐色の斑と白い羽縁が目立つ。冬羽の頭上は灰褐色に黒い縦斑。体の上面は黒褐色で白い羽縁がある。冬羽の下面は白く、頸や胸側に灰褐色の縦斑がある。若鳥は冬羽に似るが上・下面とも黄褐色味が強い。嘴と脚はともに長くて黒い。ややオオソリハシシギに似るが、体の大きさ、嘴の形と色、脚の長さ、静止時の後頭部が突き出たような形等で識別する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

春と秋に南西部で観察された記録があるが数は極めて少ない。

【県内の分布】

矢作川河口付近と汐川干潟に僅かな記録がある。

【国内の分布】

稀な旅鳥として主要四島と琉球諸島に渡来している。

【世界の分布】

アジア中・東部で飛石状に繁殖し、アジア東南部～オーストラリアで不連続に越冬するが、ロシアのレッドデータブックに登載されるなど、世界的にも減少の傾向にある。

【生息地の環境／生態的特性】

ごく稀な旅鳥として渡来し、干潟や沿岸部の湿地でゴカイ・貝・甲殻類・ミミズ・昆虫類等を捕食するが、詳しい生態は解っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近で1978年8月20日1羽、1986年9月7日1羽、1999年5月9～10日1羽、2009年8月1羽の記録があるだけで、県内、国内でも極めて稀にしか記録されていない。かつて毎年のように渡来していた西尾市一色町で、湿地の埋立てとともに渡来が途絶えた経緯がある。

【保全上の留意点】

世界的な稀少種で、情報が極めて乏しいが、干潟とその周辺の湿地を主な採餌地・休息地としているので、そのような環境を保全することが必要と考えられる。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）でNTに指定されている。

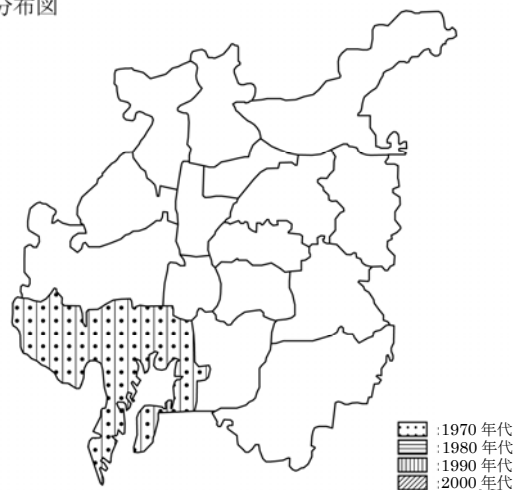
【関連文献】

愛知 83:249, 愛知 95:151, 愛知 02:148, 愛知 06:61, 愛知 09:96, HBW3:498, CBW1:440.



シベリアオオハシシギ（左から2羽目：夏羽）
港区庄内川河口、2009年8月19日、近藤 孝 撮影

市内分布図



（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <スズメ目 ホオジロ科>

ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

カテゴリー

【選定理由】

繁殖地が日本だけで、しかも繁殖が局地的という不安定な種。情報不足だが、気付いた時には減少が加速して絶滅に向かっていったということになる可能性がある。

名古屋市2015		情報不足
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 13.5～14.8cm。雄の頭部は灰緑色で、目の周囲が細く白い。目先は黒っぽく、背は灰色がかった黄緑色に黒褐色の縦縞がある。下面は褐色がかった黄色で、脇に僅かに灰緑色縦斑がある。雌は雄に似るが、頭部の色が淡く、目先が黒くない。アオジに似るが、アオジの下面は本種よりやや緑がかり、脇の縦斑が目立ち、目の周囲が白くない。

【分布の概要】

【市内の分布】

春と秋に東部での記録がある。

【県内の分布】

春と秋に平野部で観察されているほか、三河山地では繁殖記録もあるが、市内、県内とも情報は少ない。

【国内の分布】

夏、本州中部、北部の比較的限られた地域で繁殖し、西日本を旅鳥として通過する。

【世界の分布】

日本以外に繁殖地はなく、中国南東部の狭い区域、台湾、フィリピン等で越冬する。20世紀を通じて減少してきたと見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、本州中部、北部の山地の林に生息し、昆虫類、クモ類、草の種子等を食べている。5～7月頃、樹枝上に作った巣に3～5卵を産んで繁殖する。春・秋の渡り期には低地の河川敷の藪や耕地等、繁殖期より開けた所にも出る。チーチチヨチチヨチチチとアオジより早口につややかな声でさえずる。地鳴きはチッ、チッと一声ずつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の生息状況調査での、1984年10月千種区平和公園1羽、1989年5月天白区大根池1羽、同年9月平和公園1羽の3つの記録のほかは、2001年4月緑区氷上姉子神社2羽（雄雌）、同年10月千種区平和公園1羽、2014年5月同所で1羽（雄）などの散発的な記録があるだけで、極めて情報に乏しい。

【保全上の留意点】

局地的分布を示す理由等、未知の分野が多い種なので、これまでより精度の高い調査結果の蓄積が望まれる。

【特記事項】

世界のレッドリスト(IUCN2014)でVUに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:222, 愛知 95:124, 愛知 02:153, 愛知 06:126, 愛知 09:142, 繁殖 78:380, 分布 88:303, HBW16:533.

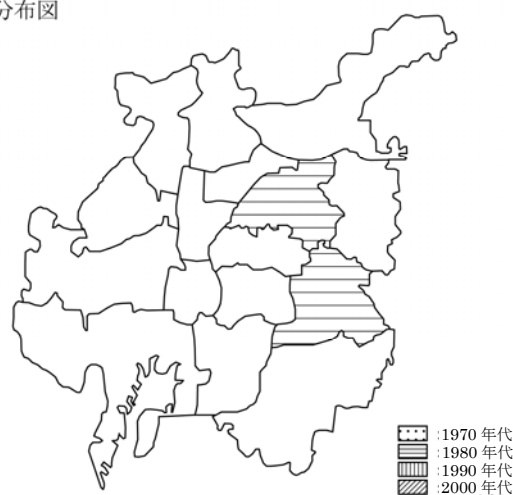
(執筆者 小笠原昭夫)



ノジコ

北設楽郡豊根村茶白山、1990年7月7日、森井豊久 撮影

市内分布図



【国リストの新規掲載種について】

今回の見直しによって新たに「国リスト」に掲載された種について、対象種が名古屋市では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. ケリ *Vanellus cinereus* (Blyth)

チドリ目 チドリ科 (国：情報不足)

市内では、ある程度の数が観察され、周辺特に西部に比較的安定した個体群が生息するので絶滅危惧の対象種とは判定しなかった。

は虫類

① 名古屋市におけるは虫類の概況

これまでに名古屋市内で繁殖、定着が確認されている在来のは虫類は2目7科12種である。外来であることが明らかなは虫類としてカメ目の17種類（種、亜種、品種）が捕獲されており、そのうちミシシippアカミミガメが定着して繁殖している。

名古屋市内に定着しているカメは、イシガメ科のクサガメ、ニホンイシガメ、スッポン科のニホンスッポン、外来種であるヌマガメ科のミシシippアカミミガメの4種である。市内のミシシippアカミミガメは、ペットとして流通され飼育されていたものの一部が野外に放逐されたものか、親となったそれらの個体の子孫である。環境への順応性が高く、原産地ほど天敵もないミシシippアカミミガメは市内の池沼や河川で急増している。しかし在来のカメの方は、次の項で種ごとに詳しく述べるように、個体数が減少傾向にある。

名古屋市におけるカメの減少のおもな原因は、次の3点にまとめられよう。

1点目は、ハビタット（habitat、生息場所）の状態の悪化である。市内では次のような開発行為、つまり

- (1) 水田や池沼などの湿地が、宅地化などで埋め立てられる
 - (2) ため池や川の水辺エコトーンがコンクリートやブロックで護岸される
 - (3) 道路や河川の堰堤、ため池の余水吐のような、カメの移動を阻害する構造物が敷設されるといった、水辺環境の人為的な改変が進んでいる。その結果、
 - (イ) 生活空間の消失
 - (ロ) 越冬場所と夏の活動場所との間の季節的移動の経路の遮断
 - (ハ) 遺伝的集団の細分化や分断化あるいは孤立化
 - (ニ) 餌資源の減少
 - (ホ) 個体の病気や怪我あるいは死亡の多発
- といった、カメの生活への障害が生じている。

2点目は、カメを捕食したり傷つけたりする外来生物の出現である。近年市内では、四肢や尾が切断される大けがを負ったり、頭部が切断されて死亡したりしたカメ、特にニホンイシガメが見つかるようになった。これは北アメリカから持ち込まれたアライグマの仕業である可能性が高く、実際にはかなり被害されている怖れがある。また大型のアメリカザリガニ、大陸型のコイ、カムルチー、ブラックバス、アリゲーターガー、ウシガエル、ミシシippアカミミガメ、ホクベイカミツキガメ、ワニガメ、シベリアイタチといった市内で見つかる外来動物は、幼体、あるいは場合によっては成体の在来ガメを捕食している可能性がある。

3点目は外来のカメによる在来のカメへの圧迫である。外来ガメによる捕食についてはすでに上述したが、その他に種間競争を通しての種の置換、および遺伝子汚染（遺伝子移入、遺伝子浸透）の被害が市内で生じている。小型～中型の水棲カメ類のいくつか、特にミシシippアカミミガメは、ニホンイシガメなど在来のカメと食物、あるいは日光浴や産卵、越冬、採餌の場所が共通しており、生態的地位（ニッチ）が似ている。そうすると競争排除の効果が働き、在来のカメが本来のハビタットから追い出されてしまい、ミシシippアカミミガメが優占するようになる。また同じ科であるカメが野外放逐されると、種間で交雑し、カメの場合繁殖能力

を持つ子孫を生み出すことがある。市内ではニホンイシガメとクサガメとの交雑個体が市内各地で確認されている。ニホンイシガメとクサガメは棲み分けるのがふつうである。にもかかわらず交雑が起こっているのは、ペットとして流通したクサガメの野外放逐によって、両種が同所的に生息する機会と場所が増えたからである。また市内では全国で初めて、台湾に分布するハナガメとニホンイシガメ、およびハナガメとクサガメの交雑個体が野外で確認されている。

市内で確認記録が残されているヘビ類は、ナミヘビ科のアオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、クサリヘビ科のニホンマムシの2科6種である。程度の差はあれ、どの種も個体数が減少傾向にある。

個体数減少の原因の第1は、食物であるカエルの減少である。1980年代以降、世界的に両生類が減少していることが知られており、名古屋市でも同様の傾向がある。毒性の強いヒキガエルを含めてカエルを専門に補食するヤマカガシ、魚食性でカエルの幼生、つまりオタマジャクシもよく食べるヒバカリ、多様な動物を補食するが、カエルへの依存度が高いシマヘビとニホンマムシについては、カエルの減少が個体数の現象の一因になっていることは間違いない。一方、小型の哺乳類や鳥類といった恒温動物を食べるアオダイショウや、爬虫類食であるシロマダラには、この危惧は当てはまらない。

第2はハビタットの環境の悪化である。市内で活発に行なわれている土地の造成や区画整理によって、ヘビたちのねぐらである地面の穴や割れ目、すき間が無くなってきている。多くのヘビにとって好適な活動場所である草むらは減少している。また市の東部の里山が間伐などの手入れをされていないために、繁茂した枝の葉が太陽光を遮り、林床の温度が低下したり日だまりが無くなって日光浴ができなくなったりして、ヘビが棲みづらくなっている。

トカゲ類では、ヤモリ科のニホンヤモリ、トカゲ科のヒガシニホントカゲ、カナヘビ科のニホンカナヘビの3科3種が分布している。カメやヘビに比べれば体がかなり小さいこれらのトカゲの内、ヒガシニホントカゲとニホンカナヘビは、草むらや灌木といった植生のある場所のほか、ちょっとした公園や住宅の庭などでもよく見られ、急激な減少や絶滅の危惧は感じられない。住家性のニホンヤモリも、最近の住宅が木造ではなくなり、多少住みづらくなったとはいえ、減少の心配は当面しなくて良いと思われる。ただし都市化の進行で緑地が減少することによる生息地の分断や個体群の細分化については、大都市である名古屋市においては警戒が必要である。

なおロシアの沿海州から北海道、本州東部に分布するヒガシニホントカゲは、従来ニホントカゲとされていたのであるが、本州西部、四国、九州に分布するニホントカゲとは系統的に異なることが最近の研究で明らかになり、新種として2012年にヒガシニホントカゲと命名された。

2004年のレッドリスト、そして2010年のレッドリスト補遺版において「情報の少ない爬虫類については、調査期間や調査者の数の規模がある程度保証された、組織的な現況調査が必要である」と指摘されていた。カメについてはなごや生物多様性保全活動協議会を始めとする団体、個人による野外調査が積極的に進められ、分布や生息の状況は、全国の他の市町村と比べてもかなりよく分かっていると言ってよい。しかしヘビ類については十分に情報収集や調査ができたとは言えず、次のレッドリスト改訂の際の課題である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

収集した情報を分析し、名古屋市に生息する爬虫類の絶滅危惧の程度を次のようにランク付けた。

絶滅危惧Ⅱ類（VU）：ニホンイシガメ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ

準絶滅危惧 (NT) : シマヘビ

情報不足 (DD) : クサガメ、ニホンスッポン、ニホンマムシ

また、2004 年版以来準絶滅危惧種であったジムグリをリスト外とした。2004 年のレッドデータブックおよび 2010 年の補遺版でのカテゴリから、かなり大きく変更している。

ニホンイシガメについては、2004 年および 2010 年に確認された状況と比べると、2014 年現在では、生息環境は悪化の一途であり、アライグマのような捕食性の外来動物やアカミミガメのような外来のカメの生息への影響は増す一方であり、おそらくニホンイシガメの生息地に人為的に持ち込まれたと推定されるクサガメによる遺伝子汚染の危険性は減っていない。分布域はそれほど減っているわけではないが、個体群密度は下がっていると推定され、繁殖も順調であるとは考えにくい。そこで、2004 年および 210 年での評価である NT から VU に危惧のランクを上げた。

ヒバカリについては、名古屋市でカエルの個体数が減っているために、この種の餌となるカエルの幼生も減り続けている。また、河川や池沼の水辺（岸）のハビタットがコンクリートやブロックで固められたり、水辺の植生が失われたりして、生活空間も減り続けている。日本列島では普通種であるはずのこの種の確認事例も、市内では大変少ない。これらの事情から、2004 年および 2010 年での評価である NT から VU に危惧のランクを上げた。

シロマダラについては、相変わらず確認事例はわずかであるものの、市内で新たに生息が確認された区があった。このヘビは爬虫類食であるが、多く捕食しているであろうヒガシニホントカゲやニホンカナヘビは市内では個体群密度が小さくなっているとは考えられず、餌環境は安定していると思われる。ただし、生活空間である里山や森林の環境は悪化が続いている。以上の状況を勘案し、2010 年にランク付けした VU から変更しなかった。

ヤマカガシは従来、田園や草地で最もふつうに見られるヘビのはずであるが、近年名古屋市内では異常なほど見られなくなった。他のヘビと同様に、急減の原因の一つはハビタットの環境の悪化であろう。しかしこの種にとって最も大きな影響は、専門に捕食している両生類の激減であると考えられる。ヒキガエルは非常に有毒で、他のヘビはこのカエルをふつう捕食しないが、ヤマカガシだけはむしろ積極的に捕食する。両生類のところでも述べられているように、市内ではアズマヒキガエルが激減している。このこともヤマカガシの激減に拍車をかけていると思われる。今回は 2010 年のランクを踏襲し、VU とした。

シマヘビもヤマカガシと同様に最もふつうに見られるはずのヘビであるが、近年名古屋市内ではほとんど見られない。原因は、食物として大きく依存しているカエルが減ったことと、ハビタットの環境の悪化であろう。ただしこのヘビは哺乳類、鳥類、爬虫類から節足動物まで多様なものを捕食するので、カエルが減ってもヤマカガシよりもその影響は少ないと期待できる。2004 年、2010 年のランクを踏襲し、NT とした。

クサガメは、2004 年と 2010 年の段階では単に確認される個体数をもとにして NT にランク付けされていた。しかしその後、市内で確認されたクサガメの一部は、分布や生息状況が不自然であることが分かってきた。クサガメにおいては、西日本や中国などの他地域で養殖された幼体がペットとして流通し、購入され飼育された個体が人為的に放される場合がある。それぞれのクサガメの個体あるいは個体群が名古屋市在来なのか、人為的に持ち込まれた外来動物なのか、今後の研究で確かめなければならない、その事情を勘案し、NT から DD にランクを移した。なお、近年遺伝子の多型の研究 (Suzuki et al., 2011) や江戸時代の文献の研究 (疋田・鈴木, 2010) から、日本列島のクサガメは江戸時代に朝鮮半島か中国から移入された外来生物であるとの考え方が提出されている。しかし、クサガメが外来生物であると結論するには、それらの研究におけるデータやその解釈の仕方はまだまだ不十分である。現段階では、クサガメが日本

列島にとっての外来生物であるかどうかの可能性は否定できないが、結論には至っていないと考えるのが、科学的に適正な態度であろう。今後研究が深められていくことを期待したい。

ニホンスッポンについては、2004年にDDであったものを、捕獲調査において他種のカメよりも捕獲地点も捕獲数も少ないことから2010年にはVUにランクを変更した。しかし今回、ランクをDDに戻した。このカメは、かつては食用として養殖するためにしばしば人為的に移動された。2013年には千種区のため池で、飼育個体の放逐である可能性が高いアルビノの個体が見つかった。このことが示唆するように、現在ではしばしばペットとして販売されているニホンスッポンが市内で野外に放逐される場合があることはほぼ間違いない。ところが、調査のために捕獲した個体がもともと市内に生息していたのか、人為的に移入されたのかは、外部形態だけでは分からないことがほとんどである。このような事情から、ニホンスッポンのランクはDDに変更した。今後の詳細なこの種の生物地理的、系統分類学的、生態学的研究が期待される。

ニホンマムシについては、これまで名古屋市内での生息の記録が無く、ランク付けの対象とされていなかった。しかし2012年に守山区で1例、初めて確認された。この状況を鑑み、今回DDに挙げた。

ジムグリについては、2004年および2010年にNTとされていたものを、リスト外にした。これまでこの種は愛知県（1996）において、分布領域が名古屋市の南東部を少し含んでいるように地図上で図示されているので、名古屋市にも分布するヘビであると扱われてきた。しかしその報告書を含めて、この種の市内での確認の報告は存在しない。そこで、市内には分布しないヘビと見なし、リストから外した。これは、本州、四国、九州に分布し、愛知県内でもいくつかの場所で生息が確認されているタカチホヘビについて、名古屋市内からの報告が存在しないために、市のレッドリストでのランク付けの対象種としないのと、同様の扱いである。

なお種の説明において、市内の分布については、「2009年度なごやため池生きものの生き生き事業報告書」「愛知県史 別編 自然」「愛知県の両生類・は虫類」「新修名古屋市史 資料編 自然 目録」「名古屋・東山新池ため池調査報告書2007」から情報を得た。またなごや生物多様性センターに寄せられた情報のうち、写真で同定が可能であったり、専門家によって確認されたりした資料を使った。カメについては「ミシシippアカミミガメ防除マニュアル—名古屋市内の活動を事例として—」も参照した。

③ 参考文献

以上の説明については、以下の文献を参照した。また、今回リストに挙げた爬虫類の種のそれぞれの解説においては、以下の文献のすべてあるいは一部を参考にした。繰り返しになるので、種の解説の部分では引用文献、参考文献の欄を設けず、ここにまとめて挙げておく。まず和文文献を著者名のあいうえお順に、次に英文文献をアルファベット順に並べる。

愛知県両生類・は虫類研究会, 1996. 愛知県の両生類・は虫類, 117pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類, 336pp. 平凡社, 東京.

千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏(編), 1996. 日本動物大百科第5巻, 189pp. 平凡社, 東京.

中村健二・上野俊一, 1953. 原色日本両生類爬虫類図, 214pp. 保育社, 東京.

- 日本カメ自然誌研究会（監），2014. ミシシippアカミミガメ防除マニュアル—名古屋市内の活動を事例として—，34pp. なごや生物多様性保全活動協議会，名古屋.
- 野呂達哉，2007. 爬虫類. 名古屋・東山新池ため池調査報告書 2007，pp.30-33. 名古屋ため池調査実行委員会，名古屋市.
- 野呂達哉・矢部隆，2009. 爬虫類. 2009 年度なごやため池生きものの生き生き事業報告書，pp.1**-1**. 名古屋ため池生物多様性保全協議会事務局，名古屋市.
- 疋田 努・鈴木 大，2010. 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入. 爬虫両棲類学会報第 2010 巻第 1 号，pp.41-46.
- 矢部 隆，2008. 名古屋の生物 動物 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然，pp.271-279. 名古屋市，名古屋.
- 矢部 隆，2008. 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然 目録，pp.271-279. 名古屋市，名古屋.
- 矢部 隆，2010. 淡水棲・陸棲カメ類. 野生動物保護の事典，pp.569-577. 朝倉書店，東京.
- 矢部 隆，2010. 愛知の自然のなりたち 愛知の生物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然，pp.162-207. 愛知県，名古屋.
- 矢部 隆，2010. 愛知の自然と人々 残したい貴重な動植物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然，pp.597-618. 愛知県，名古屋.
- Okada, Y., T. Yabe and S. Oda, 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). *Current Herpetology*, 30(1): 53-61.
- Suzuki, D., H. Ota, H. Oh and T. Hikida, 2011. Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2):237-249.

(執筆者 矢部 隆)

④ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各は虫類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（は虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右の上枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅の恐れのある野生生物- 3 爬虫類・両生類」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

は虫類 <カメ目 イシガメ科>

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1835)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

市内の池や川で分布、生息調査が行われており、比較的多くの生息地が確認されている。しかし生息場所の環境の悪化、および外来動物による捕食や生活への圧迫、近縁種の導入による遺伝子汚染により、危機的な個体群が増えており、個体数はかなり減っている。

【形態】

背甲長はオス約12cm、メス約20cm。背甲後部の縁が鋸歯状であるが、老齢個体では摩耗することが多い。背甲は黄色ないし黄土色で、黒色か黒褐色の点模様が雲状に広がる。各椎甲板の前方中央部に、黒色の斑紋を持つ個体が多い。腹甲は一面黒色だが、肛甲板の後端が橙色を呈する個体もある。前膊部と脛部の後縁および尾の背面の左右に、橙色の縦条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005年以降の調査では、熱田、昭和、千種、天白、中、中村、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵から三河地方、渥美半島、知多半島に多く分布している。濃尾平野の低地部には、保護すべき小さな孤立個体群がいくつかある。

【国内の分布】

本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。日本の固有種である。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のクサガメが、低地の止水あるいは緩やかな流れの水系に主に生息するのに対して、ニホンイシガメは丘陵地から山地にかけての地域、河川で言えば上流部を中心に棲む。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は6～7月ごろで、年2回産卵する個体が多い。1回に6～7個前後産卵する。川の水底の落ち葉などの堆積物や岩の下、川の岸辺の浸食穴、池沼の水底で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では、生息地である水辺エコトーンが劣悪になり、日光浴、産卵、採餌、越冬、季節的移動に障害が生じている。また市内ではアライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカملチーやコイなどの外来動物が、幼体や、場合によっては成体を捕食したり負傷させたりしている。生態的地位が似ている外来のミシシippiaカミイガメの増加による生活の圧迫も深刻である。

【保全上の留意点】

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。貯精、遅延受精の能力があり、クサガメなど人為的に導入された近縁な他種のカメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫を多数産み続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。本種の自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。

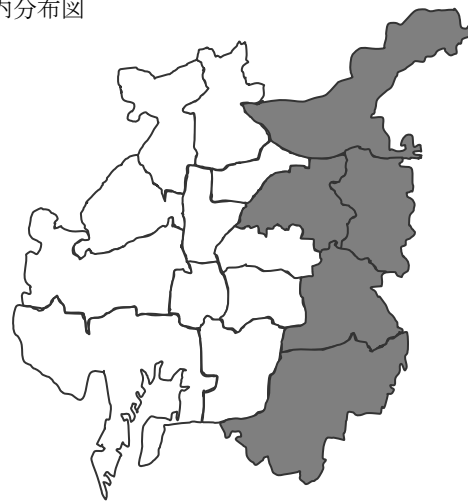
(執筆者 矢部 隆)



ニホンイシガメ

矢部 隆 撮影

市内分布図



は虫類 <有鱗目 ナミヘビ科>

ヒバカリ *Amphiesma vibakari vibakari* (Boie, 1826)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

水辺を好むヘビであるが、水辺の環境の悪化により著しく個体数を減らしている。餌である小魚やカエルの幼生が減少しており、成育や繁殖が抑えられている。また、水辺の自然の植生が失われ、生活場所が奪われて、個体数が減少している。

【形態】

小型で、全長 40～60cm である。体の背面は褐色または暗灰褐色。口角から後背方向に淡黄色の帯状の斑紋が走るが、この斑紋は頸部の背面で連結することはない。幼蛇も成蛇も模様は変わらない。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区（2009 年）、守山区の 2 ヶ所（2009 年、2012 年）で確認されている。

【県内の分布】

深い山地を除き、県内に広く分布している。

【国内の分布】

本州、四国、九州に固有な亜種である。なお、同種別亜種のダンジョヒバカリ *A. vibakari danjoense* が長崎県男女群島の男島に固有亜種として分布しており、朝鮮半島、中国北部、ロシア沿海州にはタイリクヒバカリ *A. vibakari ruthveni* が分布している。

【世界の分布】

日本固有亜種。

【生息地の環境／生態的特性】

山地から草地、水田や畑まで幅広い環境に生息している。水によく入り、小魚、カエルの幼生（オタマジャクシ）や小型の幼体を専門に食べるが、ミミズもしばしば食べる。昼行性である。5～6 月に交尾し、7～8 月に 4～10 個の卵を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

水棲動物をよく補食するヒバカリにとっては、好適な水辺環境が必須である。しかし名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりしていて、水辺エコトーンが環境が悪化しており、ヒバカリの個体数の減少の第 1 の原因となっている。また近年市内では両生類が急速に減少しており、食物が減少していることもヒバカリの減少の要因の一つである。

【保全上の留意点】

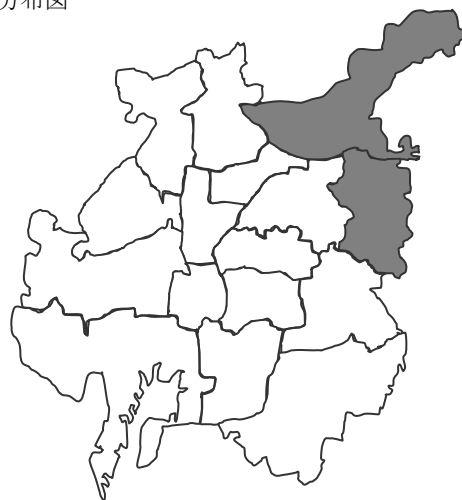
昼行性で様々なハビタットに生息する種ではあるが、シマヘビやヤマカガシよりもかなり小型なので、やや観察にくい面がある。今後注意深く種の分布生息を確認し、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。



ヒバカリ

岐阜市、2010 年 9 月 28 日、矢部 隆 撮影

市内分布図



(執筆者 矢部 隆)

は虫類 <有鱗目 ナミヘビ科>

シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内において、シロマダラの主たる生息場所である林や森の林床の環境が、急速に悪化し、それにもなって個体数が激減している可能性が高い。

【形態】

全長 30～70cm ほどの小型のヘビである。背面の地色は淡灰褐色で、胴に 40 個前後、尾に 15～20 個くらいの黒褐色の横帯がある。幼蛇には、頸部に左右 1 対の白い斑紋がある。瞳孔は縦に細長い楕円形であるが、虹彩が黒っぽいので、注意しないと瞳孔の形は分かりにくい。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているのでシロマダラと誤認されることがあるが、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区（2004 年）、千種区（2008 年）、南区の近接する 2 ヶ所（2 例とも 2014 年）で見つかっている。

【県内の分布】

丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。西三河や尾張よりも東三河において、よりしばしば目撃情報を耳にする。

【国内の分布】

本州、四国、九州の固有種。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地から山地にかけての森や林、河畔林に生息する。ガレ場など地面の乾いたところで見かけることがよくある。爬虫類食で、小型のヘビ類やトカゲ類を捕食する。夜行性である。繁殖生態はよく分かっていない。

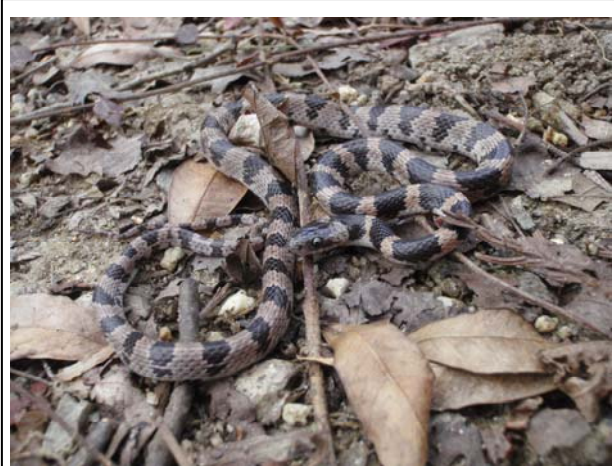
【現在の生息状況／減少の要因】

2004 年以降名古屋市内で 4 頭見つかっているが、生息状況はよく分かっていない。市内ではトカゲ類は少ないとは言えないが、ヘビ類が急減しているの、食物不足により、シロマダラの個体数が減っている可能性がある。また、林のような棲み家が減少し続けていることも、このヘビに悪影響を与えているに違いない。

【保全上の留意点】

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。

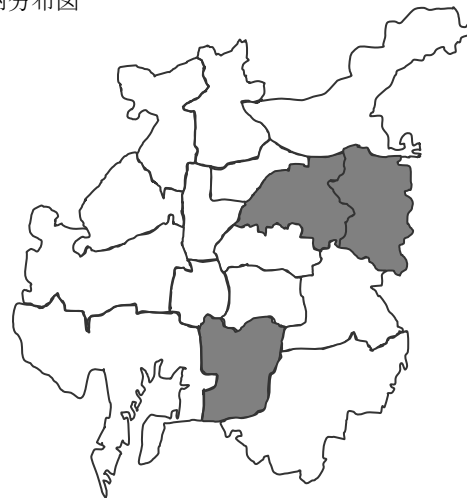
(執筆者 矢部 隆)



シロマダラ

豊田市足助町、2012 年 1 月 13 日、矢部 隆 撮影

市内分布図



は虫類 <有鱗目 ナミヘビ科>

ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie, 1826)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

アズマヒキガエルやナゴヤダルマガエルなど、専門的に捕食するカエル類の激減、およびヤマカガシの重要な生息場所である水辺や山地の植生の荒廃が、ヤマカガシに深刻な影響を与えている。

【形態】

全長 70～140cm。体の色や模様には変異が大きい。ふつうは、背面の地色は緑が飼った褐色か暗褐色で、黒斑が並び、黄色や赤色はその斑紋の間に混じる。幼体では後頭部に、口角の後ろから背面に回る黄色い横帯がある。2種の毒腺を持っている。一つは頸腺で、頸部の背面の皮膚の下に2列に並ぶ毒腺であり、強くつかまれたり噛まれたりすると、毒が染み出したり場合によっては飛散したりして、天敵を痛い目に合わせる。もう一つの毒腺はデュベルノイ腺で、ここから分泌される毒は上顎の奥の毒牙を伝って、獲物や天敵に注入される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（2009年）、名東区（2009年）、千種区（2009年）で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州に固有な種。なお、日本のヤマカガシは、これまで中国のタイリクヤマカガシや台湾のタイワンヤマカガシと同種別亜種とされていたが、2012年に独立した種とされた。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

昼行性である。主食はカエルであり、水に入ってカエルの幼生（オタマジャクシ）や魚も食べる。そのため、平地や丘陵地の水田や小川、湿地に好んで生息する。耳腺に毒があるので他のヘビは食べないヒキガエルも食べることができる。大型のカエルであるヒキガエルを捕食できる生息地に棲むヤマカガシは、大きく成長するようである。秋に交尾し、翌年の6月～8月に2～30個の卵を産む。大きなメスほど多産で、40個以上産卵することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年名古屋市では両生類が急速に減少しており、ヤマカガシにとって主食がいなくなっていることが、このヘビの激減の第1の原因であろう。名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり水生植物群落が喪失したりして、水辺エコトーンが環境が悪化しており、好適なハビタットが失われていることも、ヤマカガシの個体数の減少の主要な原因である。

【保全上の留意点】

かつてヤマカガシは、シマヘビやアオダイショウと共に平地で最もよく見られるヘビであった。そのような普通種が近年急になくなった事態を重く受け止め、ヤマカガシの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

（執筆者 矢部 隆）

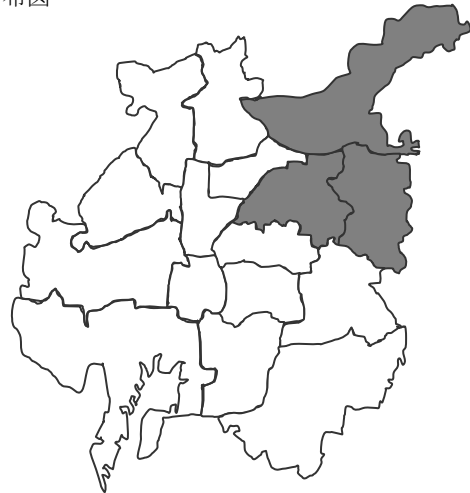


ヤマカガシ（左：成体、右下：幼体）

左：豊田市藤岡町、2009年4月19日、矢部 隆 撮影

右下：2006年6月3日、矢部 隆 撮影

市内分布図



は虫類 <有鱗目 ナミヘビ科>

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内において、シマヘビの主たる生息場所である林や森の林床の環境が急速に悪化し、それにともなって個体数が激減している。

【形態】

全長は 80～150cm。体の背面は黄褐色または褐色で、胴背に 4 本、尾背に 2 本の黒褐色の縦条がある。瞳孔は縦長の楕円形で、虹彩は赤い。特定の頻度で、カラスヘビと呼ばれる全身が真っ黒の個体が現れるが、黒色個体では虹彩も黒色である。幼蛇は成蛇とはまったく異なった色や模様である。背面の地色は赤みがかった淡褐色で、褐色の横縞が並ぶ。瞳孔が縦長の楕円形で、虹彩が赤いのは成蛇と同様である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（2009 年）、名東区（2009 年）、千種区（2009 年）、中区（2009 年）で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

昼行性である。平地から山地まで広い範囲で生息するが、ある程度開けた太陽の光が当たる環境を好む。食物の範囲は広く、食虫類やネズミ類などの哺乳類、鳥類の卵や雛、トカゲやヘビ、ヘビの卵、カメの卵といった爬虫類、カエルの成体や卵、サンショウウオといった両生類など、広範囲な脊椎動物を捕食する。ただし、最もよく食べるのはカエルの成体である。4月～6月に交尾し、夏に4～16個の卵を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内では、河川や用水、ため池などの岸がコンクリートやブロックでおおわれて移動が困難になったり、草地が喪失したりしていて、シマヘビが捕食したりねぐらとしたりするような場所がなくなっている。このような生息地の環境の悪化がシマヘビの減少を引き起こしている。ヤマカガシやヒバカリの場合ほど深刻ではないと思われるが、よく捕食しているカエルの減少も、シマヘビの減少の原因の一つであろう。

【保全上の留意点】

シマヘビは、アオダイショウやヤマカガシと共に里地で最もふつうに見られるヘビであった。そのような普通種が近年急になくなった事態を重く受け止め、市内でのシマヘビの生息の実態調査と保全に力を注ぐべきである。

(執筆者 矢部 隆)

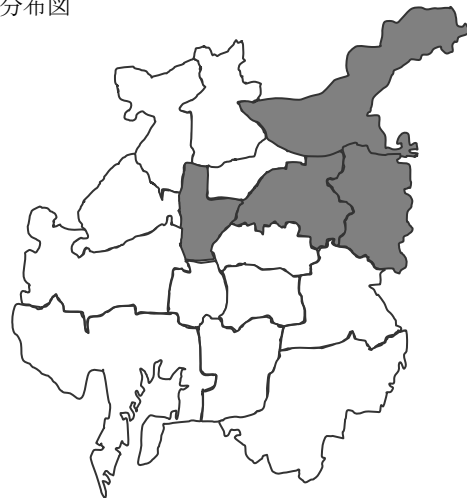


シマヘビ（左：成体、右：黒化型）

左：岡崎市、2008年5月17日、矢部 隆 撮影

右下：豊田市藤岡町、2008年5月15日、矢部 隆 撮影

市内分布図



は虫類 <カメ目 イシガメ科>

クサガメ *Mauremys reevesii* (Gray, 1831)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、愛玩動物として養殖され、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のクサガメの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

【形態】

背甲長は、オス15～20cm、メス20～25cm。背甲に3本の発達した隆条を持つ。頭部の側面や咽頭部から頸部にかけて、黒く縁取られた黄色の模様が多数ある。若齢の個体では、背甲の甲板は細く黄色に縁取られる。しかし高齢なオスではそれらの模様が消え、全身が完全に黒化する。腋下甲板と鼠蹊甲板のラスケ孔から、独特の香りがする澄んだ橙色の液を分泌する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、名東、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布し、濃尾平野に多い。ただし北部の山地には分布しない。

【国内の分布】

本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

【世界の分布】

中国東部、朝鮮半島、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

同属のニホンイシガメが丘陵地から山地にかけての領域におもに棲むのに対して、クサガメは低地の止水、あるいは流れの緩やかな川の下流域から中流域にかけての平地を中心に生息する。秋と春に求愛、交尾する。産卵期は6月下旬から8月上旬で、年2回産卵する個体が多い。1回に10個前後産卵する。池沼や河川の水底で、落ち葉などの堆積物の下に潜んだり、泥に潜ったりして越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では、ハビタットの環境の劣悪化、アライグマやウシガエル、アリゲーターガーやカマルチャーやコイなどの捕食精外来動物による負傷や死亡の増加、生態的地位が似ている外来のミシシippアカミミガメの増加による生活の圧迫により、数が減り続けている個体群が多い。

市内のクサガメの個体や個体群においては、市外から持ち込まれた外来のクサガメである可能性がある場合があるので、在来のを保護し、外来のを防除する管理を本来はすべきである。ただし外来か在来かを判別する生物学的法方は確立されておらず、今後詳細な研究を進める必要がある。

【保全上の留意点】

性染色体を持たず、孵卵温度が高いとメス、低いとオスになる。したがって産卵場所の温度環境が好ましくないと、孵化個体の性比が偏り、長期的に見て個体群が維持できなくなる。

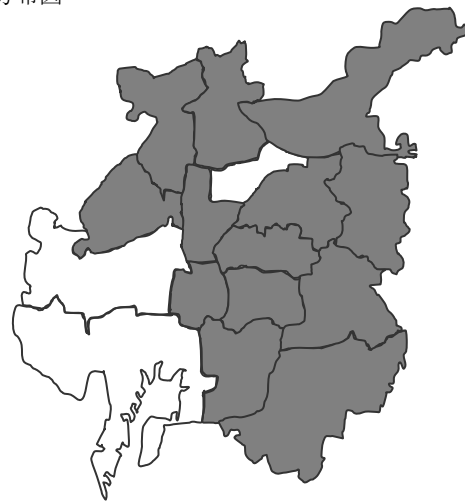
貯精、遅延受精の能力があり、在来のニホンイシガメと交尾する機会が極めてわずかであっても、繁殖能力のある子孫が多数生まれ続け、遺伝子汚染が進行する恐れがある。市内のニホンイシガメの自然分布地で、人為的に移入されたクサガメとの交雑が確認された地域からは、クサガメを防除せざるを得ないであろう。



クサガメ（右下：黒化した頭部）

矢部 隆 撮影

市内分布図



(執筆 矢部 隆)

は虫類 <カメ目 スッポン科>

ニホンスッポン *Pelodiscus sinensis* (Wiegmann, 1835)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	情報不足

【選定理由】

市内の池や川で比較的多くの生息地が確認されている。しかしこの種については、食用もしくは愛玩動物として養殖され、市外、県外あるいは国外から移入されたと考えられる場合があり、その場所のニホンスッポンの個体、あるいは個体群の由来がはっきりしない場合が多い。

【形態】

雌雄とも背甲長20～25cm、体重1～2kgであるが、まれに35cmから40cm弱、体重が7kgを超えることがある。背甲は灰褐色で、甲板がなく、後部には骨版が伸びておらず、手で曲げることができるくらい柔らかい。背甲の表面は柔らかく、短い隆条や粒上の特記がある。前趾後肢とも水かきが発達しており、指は5本であるが、爪は3本しかない。首は非常に長い。頭部は細長く、突出した吻端に鼻孔がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2005年以降の調査では、熱田、北、昭和、千種、天白、中、中村、西、瑞穂、緑、南、守山の各区で確認されている。

【県内の分布】

県内に広く分布する。ただし北部の山地には分布しない。

【国内の分布】

本州中央部以西、四国、九州に自然分布する。

【世界の分布】

中国東部、朝鮮半島、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から丘陵地にかけての池沼、河川では下流域から中流域の流れが比較的緩やかな水系に棲む。臆病で、日中は水底の砂に身を隠して、ときおり長い首を伸ばして吻端の鼻孔を水面に上げ、呼吸をする。人をはじめとする天敵に襲われないことが分かっていたり、人に馴れたりしていれば、岸に上がって日光浴をする。6月～8月に、メスの体の大きさに応じ、1回に10～40個の卵を陸地に産む。性染色体によって性が決定される。水底で越冬する。肉食性の強い雑食性で、おもに薄明薄暮に、水底の貝類やエビ類、弱ったり死んだりしている魚類、水生植物などを採餌する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上で述べたような生活様式を支えるハビタット、特に幼体成体とも、水生植物の群落や砂質の水底といった身を潜める場所が急速に失われており、個体数の減少に拍車をかけている。

【保全上の留意点】

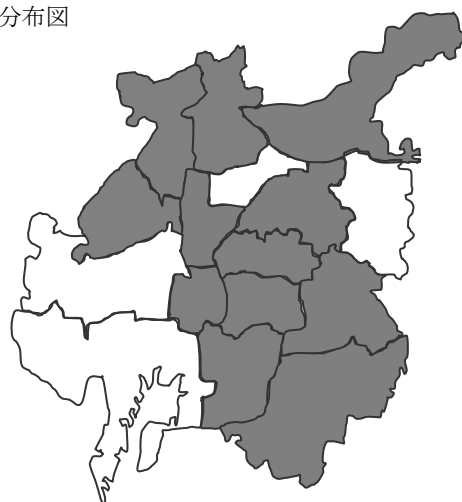
遺跡から出土した遺体などから、ニホンスッポンは本州、四国、九州の在来種であることは分かっているので、愛玩動物や食用で移入された移入個体と区別して在来のニホンスッポンを保全するようにすべきである。ただし、この種の種内変異、個体群間変異についての形態学的あるいは分子生物学的手法はまだ確立されていない。



ニホンスッポン

矢部 隆 撮影

市内分布図



(執筆者 矢部 隆)

は虫類 <有鱗目 クサリヘビ科>

ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* (Boie, 1826)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2012年に初めて名古屋市内で確認されたばかりで、市内での生息の実態が分かっていない。ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数が多いとは考えられない。

【形態】

全長 40～65cm くらいで比較的短い、胴は太めである。背面の色には変異が多いが、ふつうは地色が灰褐色あるいは暗褐色で、黒い縁取りのある黒褐色の大きな斑紋がある。この斑紋は、前後に少しずつずれた対になって背面の左右に、約 20 対並んでいる。斑紋の左右の対が背面中央で融合していることも、ふつうにある。上顎前部に 1 対の長大な毒牙を持つ。目と鼻孔の間には 1 対のピット器官があり、赤外線像を見ることができる。瞳孔は縦に細長い楕円形である。アオダイショウの幼蛇は背面の地色が淡褐色で、褐色のはしご状の横斑が並び、模様が似ているので、マムシと誤認されることがあるが、よく観察すれば斑紋のパターンは異なっているし、アオダイショウの瞳孔は円いので、区別することができる。幼蛇では、尾の先の方が目立つ黄色あるいは淡い橙色である。



ニホンマムシ

岡崎市、2007年8月29日、矢部 隆 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（2012年）で確認されている。

【県内の分布】

丘陵地や台地、山地の森や林に分布している。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する日本列島の固有種。なお同属別種のツシママムシが、長崎県対馬にこの諸島の固有種として分布している。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

森林やその周辺の田畑に多く、きれいな水のあるところを好む。基本的に夜行性であるが、冬眠前後には日光浴のため昼間に出現することがある。背中模様は林床の落ち葉の上や木漏れ日の下では見事な保護色になっている。カエルやネズミを中心として、トカゲやヘビといった爬虫類から鳥類、魚類まで小型脊椎動物を幅広く捕食する。またムカデなどの節足動物を食べることもある。8月下旬～9月に交尾し、卵胎生であるので翌年の8月～10月に5～6頭の幼蛇を産む。有毒である。

【現在の生息状況／減少の要因】

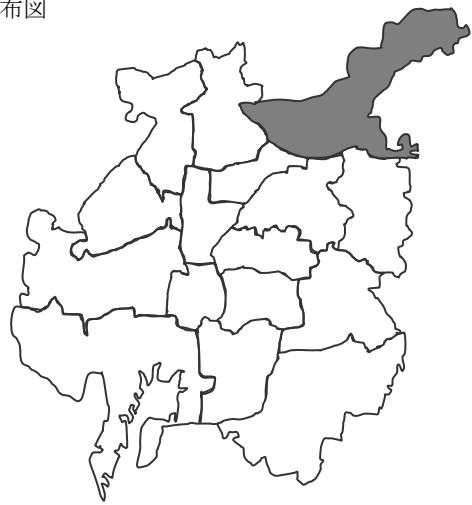
2012年に初めて名古屋市内で確認されたばかりで、市内での生息の実態は分かっていない。ただし、ニホンマムシにとって好適な生息地が市内ではそれほど見当たらず、個体数も多いとは考えられない。カエルが市内で減少していることも、ニホンマムシの生息を困難にしている。

【保全上の留意点】

夜行性で、小型なので、観察しにくいヘビである。市内ではまだ1例しか記録されていないので、今後注意深く種の分布様式や生息状況を明らかにし、市内でこの種がおかれている実態を十分に把握しなければならない。

(執筆者 矢部 隆)

市内分布図



両生類

① 名古屋市における両生類の概況

名古屋市で記録されている移入種以外の両生類は 2 目 6 科 10 種（ヤマアカガエルの生息情報があるが、信憑性が不十分なので加えていない）であるが、ほとんどの種が都市化による環境悪化が原因で生息地や個体数を減らしているといえる。中には個体群が消失してしまい、姿を消してしまった地域も存在する。

両生類は水田に依存する種類が多く、特にカエル類は水田とかなり密接に関わっている。今回の調査で、市境の市域外側にナゴヤダルマガエルやトノサマガエルが生息しているも、市域内側では生息できる環境がなく、生息確認できなかった箇所が幾つも存在した。さらに農作業の方法にも影響を受けることがしばしば起こる。ナゴヤダルマガエルとトノサマガエルは濃尾平野に同所的に生息するが、岐阜県の一部の地域における遺伝的解析の結果から、トノサマガエルとナゴヤダルマガエルの両種共に遺伝子浸透が確認されている。このことは、本来進化過程で生殖隔離がなされていたが、稲作方法の変化やその他の外的環境変化が原因で交雑が時折起こっていると考えられる。名古屋市内のナゴヤダルマガエルとトノサマガエルに関しての遺伝子浸透の研究はなされていないが、今後遺伝的研究により交雑の有無の判定も必要かと思える。

市内には東部に丘陵地が広がっており、これらの場所は両生類にとっても非常に重要な生息域である。しかし、近代化にともない丘陵地が断片化され、個体群の孤立化が起きている。その結果、個体群間での移動が不可能になり、ある個体群が絶滅したとしても他の個体群からの移動ができないため、非常に危機的な状態にある。さらに、カスミサンショウウオでは、各々の個体群で遺伝的な多様性が低下してきている。そのため、市内の個体群間での遺伝子分化が起こっていることが解ってきている。

一方今回の調査で、都市中心部である中区にニホンアカガエルが生息していたことが明らかになった。これは文化財として守られてきた名古屋城の外堀に生存していた個体が、人工的に作られたビオトープに産卵したという事例であった。しかし、ビオトープが作られる以前どの場所で世代交代が行われてきたかは記録が無い。

絶滅危惧種以外では、ニホンアマガエルとヌマガエルが生息している。ヌマガエルは水田があるところには必ずといっていいほど生息が確認され、ニホンアマガエルは、定量的なデータは無いが、市街地や住宅地などでもしばしば見かけることがあり、ちょっとした水辺があると繁殖が可能なため、すぐに絶滅することはないと思われる。しかしこれら 2 種に関しても今後の動向を見守る必要性は十分にある。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

10 種中 8 種が絶滅危惧と判断され、生息確認されている両生類の 80% が絶滅危惧種ということになった。都市部を多く含む市内ならではの結果である。今回の改訂では、ツチガエルが絶滅危惧 I B 類から絶滅危惧 I A 類に、アズマヒキガエルがリスト外から絶滅危惧 II 類に変

更された。ツチガエルは非常に局所的にしか生息が確認できていないことからランクアップされた。アズマヒキガエルに関しては市内のいたるところで産卵数が激減し、消失してしまった繁殖集団も幾つか存在する。愛知県や国ではリスト外の種であるツチガエル、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ニホンアカガエルの4種は、市内では絶滅危惧種という状況である。このことは、一般的に普通種と思われる種類も市内では絶滅が危惧されることを示している。

(執筆者 藤谷武史)

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各両生類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

【掲載種の解説（両生類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に従った。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2014）に従った。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生動物- 3 爬虫類・両生類」（環境省，2014）のカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種が名古屋市版レッドデータブック掲載種とされた理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。対象種の分布状況を現地調査及び文献調査、聞き取り調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。また、移入種と判断された区に関しては  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。DNA データバンク登録してある種についてはアクセス番号を記した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

両生類 <有尾目 サンショウウオ科>

カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* (Temminck et Schlegel, 1838)**【選定理由】**

生息地の環境の悪化により、個体数が減少している箇所が多く見られる。また、個体群が孤立化し、遺伝的交流が途絶えており、個体群内の遺伝的多様度も減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

本種は生息地域によって形態が異なる事が知られている。名古屋市の個体群では、繁殖期に観察された成体の全長が 73～112.5mm（藤谷，2000）。雌の方が大きくなる傾向にある。体色は淡い黒褐色。まれに尾の上縁に明瞭でない黄色い筋がある個体もいる。幼体時や若い個体では白い細かな斑点が入る事もある。卵嚢はバナナ状で、透明度が良くない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部の丘陵地にパッチ状に生息。

【県内の分布】

名古屋から知多半島。西三河地方。渥美半島の一部。

【国内の分布】

本州の愛知県以西。四国瀬戸内沿岸、九州北部、奄岐島、五島列島に分布。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に平野部の丘陵地に生息する。中国山地では標高 600～1000m に生息する高地型と呼ばれる個体群が知られている。産卵は水たまりや小さな池の淵、水田の用水路や浅い緩やかな流れのある流水域に産卵する。産卵期は 12～4 月で、本地域では 2 月下旬～4 月上旬。産卵数は地域によって大きく異なるが、本地域では 36～111 卵で平均約 70 卵。産卵期は長い、まとまった雨量に起因して産卵が集中する傾向にあり、産卵期間中 3～4 回ほど確認される。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の東部にある丘陵地帯に生息するが、繁殖集団の数は極めて少なく、産卵場所となる水辺の水源が不十分な場所も存在する。また、開発に伴い大量に死亡した例もあることから、今後生息地の環境保全は不可欠である。

【保全上の留意点】

生息地の分断化が起こっており遺伝的交流も行われないことから、遺伝的多様度の低下に伴う均衡劣化が懸念される。今後生息域外保全などの検討も必要だと思われる。

【特記事項】

2004 年版ではトウキョウサンショウウオとされているが、分類学上本地域個体群はカスミサンショウウオに帰属したため本種名を用いた。DNA データバンク登録：AB972540～ AB972601。

【引用文献】

藤谷武史，2000. 名古屋市東山公園におけるトウキョウサンショウウオの調査. 両生類誌，4:9-12.

【関連文献】

Ihara, S., T. Fujitani, 2005. Prey items salamander *Hynobius nebulosus* in Nagoya and its inferred position in the soil food web. *Edaphologia*, 75:7-10.

大谷勉，2009. 日本の爬虫両棲類. pp.28-29. 文一総合出版，東京.

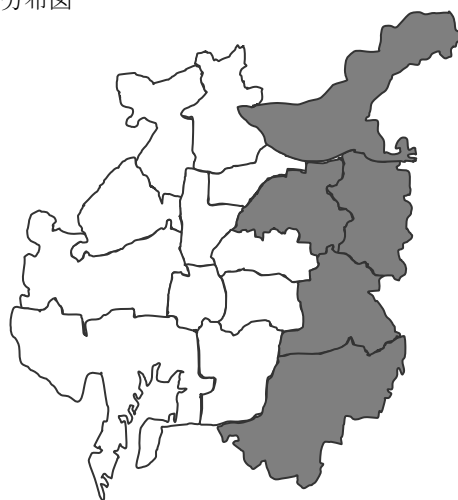
Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* from Aichi Prefecture, Japan: a biochemical survey (Amphibia, Urodela). *Comparative Biochemistry and Physiology*, 130B(2):181-189.

(執筆者 藤谷武史)



カスミサンショウウオ
千種区 2010 年 2 月 27 日 藤谷武史 撮影

市内分布図



両生類 <有尾目 イモリ科>

アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)**【選定理由】**

生息域が極めて狭く、現在の生息域も健全とはいえず、市内から消失してしまう恐れが著しく懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

全長が70～130mmで、雌の方が大きい。背面は黒色か暗褐色。腹部は赤かオレンジの斑紋や不規則な模様がある。繁殖期の雄は尾を中心に婚姻色が現れ、背面に黒い水玉模様が現れることがあり、尾が垂直方向に肥大する。遺伝的や形態的に地域変異があり、腹部の模様や大きさに違いがある。背面に赤いストライプのはいる個体も存在する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部の丘陵地の極限られた地域にのみ生息。

【県内の分布】

尾張丘陵部、三河丘陵部から山地。知多半島。県レッドリストでは、渥美種族とそれ以外を中間種族に分け、渥美種族はCRにランクされる。

【国内の分布】

本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島、大隈諸島など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

池、湿地、水田などの水中で多く見られる。山間部などの林道脇の水たまりや河川などでも観察される。繁殖期の雄は、地域で多少異なるが、尾を雌の顔の前でくねらせながら震わせ求愛する。その際、雄はソデフリンといわれるホルモンを放出し、雌を誘発させることが知られている。産卵は水中に一卵ずつ水草などに巻きつける。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部の丘陵地の極限られた場所のみ生息する。以前は東部丘陵に広く分布していた可能性がある。

【保全上の留意点】

生息する湿地の環境を維持する。生息数の少なさから、生息地保全と並行して生息域外保全の検討も必要である。

【特記事項】

遺伝的にも変異があることから、個体群としての維持は非常に重要だと思われる。

【関連文献】

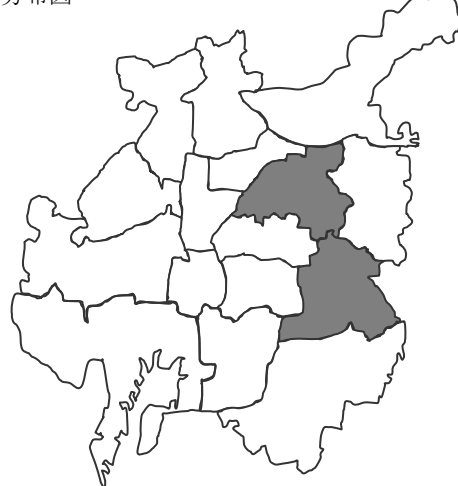
内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版 日本の両生爬虫類, pp.56-59. 平凡社, 東京.
林 光武, 1993. ダンスを踊って求愛 アカハライモリ. 両生類・爬虫類1 アシナシイモリ、サンショウウオ 週刊朝日百科動物たちの地球, (97):20-22. 朝日新聞社, 東京.

(執筆者 藤谷武史)



アカハライモリ
千種区、2014年3月2日、藤谷武史 撮影

市内分布図



両生類 <無尾目 アカガエル科>

ツチガエル *Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)**【選定理由】**

生息場所が極めて少なく、市内の生息環境も本種にとって十分とは言えない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【形態】

体表にはイボ状の突起が多く存在し、ヌメヌメしていない。頭胴長は 37～53mm で雌の方が大きい。捕獲すると悪臭を放つ。「イボガエル」とも呼ばれる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北区の一部にのみ分布。ただし中区白川公園に人為移入と思われる繁殖集団が存在する。

【県内の分布】

尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に局所的に分布するが、濃尾平野にはあまり生息しない。

【国内の分布】

本州、四国、九州、佐渡島、隠岐島、壱岐島、五島列島など。北海道西部と伊豆大島は人為移入。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地に生息し、水田、池、沼、用水路、湿地、広い河川の河原の水たまりやゆるい流れのある淵などで産卵する。繁殖期は長く、5～9月。名古屋市内では、6月頃に繁殖する。幼生は普通一度越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

北区に限られた場所に生息する。水田の減少や乾田化が原因で幼生の越冬場所が確保されないため、衰退していると思われる。

【保全上の留意点】

生息場所の水田や周りの用水路などの持続。稲作の農薬散布の軽減に留意が必要。

【特記事項】

染色体の形態が異なる4つのグループが存在し、ZW型とXY型の性決定様式が同種内で存在する。中部地方はXY型（Ogata 2002）。

【引用文献】

Ogata, M., JY. Lee, S. Kim, H. Ohtani, K. Sekiya, T. Igarashi, Y. Hasegawa, Y. Ichikawa and I. Miura, 2002. The prototype of sex chromosomes found in Korean populations of *Rana rugosa*. *Cytogenetic and Genome Research*, 99:185-193.

【関連文献】

愛知県, 1996. 愛知県の両生類・爬虫類, p.117. 愛知県.

島田知彦・坂部あい, 2014. 知多半島におけるツチガエルの生息地の一例. 豊橋市自然史博物館研報, (24):33-35.

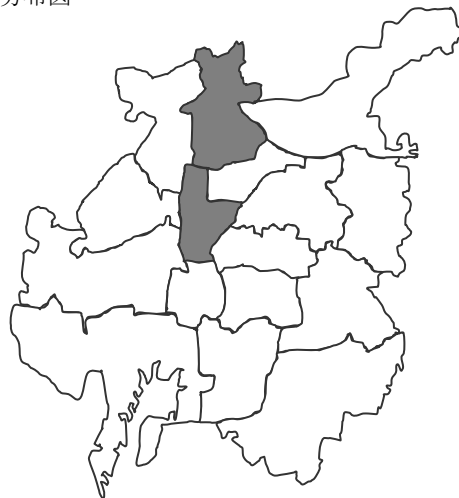
前田憲男・松井正文, 1999. ツチガエル. 改訂版日本のカエル図鑑, pp.96-99. 文一総合出版. 東京.



ツチガエル

北区、2014年10月3日、藤谷武史 撮影

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)

両生類 <無尾目 アカガエル科>

ナゴヤダルマガエル *Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

濃尾平野には全国に比べて比較的多く生息するが、市内では生息できる水田の減少が原因で、極く限られた生息地しか存在しない。“ナゴヤ”の地名を持つカエルにも関わらず、遠からず絶えてしまう恐れがある。

【形態】

頭胴長が 35～73mm で、雌の方が大きい。形態や体色はトノサマガエルと類似するが、背中に背中線を持たない個体が多いことや、後肢がトノサマガエルに比べてやや短く体が丸みを帯びてずんぐりしているのが本種の特徴。その他、黒い斑紋が丸く独立していることが多く、雌雄の体色による二型は殆ど認められない。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部の水田地帯及び北部の一部。

【県内の分布】

尾張地方、西三河地方、知多半島、渥美半島。

【国内の分布】

長野県伊那谷、東海地方、近畿地方中部、山陽地方東部、四国香川。名古屋集団と岡山集団とに大きく分かれ、遺伝的にも差が見られる。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

低地の水田の周りが本来の生息域で、その他、湿地や沼などの周りにも生息し、水辺からあまり離れることはない。産卵期間は長く、4～7月におよび、一繁殖集団でも期間が長い。雌は一年に2回産卵することがある。産卵は少数の卵を何回かに分けて行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

南部の生息地では水田地帯が広がり比較的多くの個体が存在するが、北部の生息地は水田が住宅街と混在しているため、悪影響を受けやすい。水田の減少が最大の減少理由である。

【保全上の留意点】

水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

【特記事項】

トノサマガエルとの自然交雑が懸念されている。守山区で本種が確認されたとの情報があるが、トノサマガエルの誤認の可能性が高い。

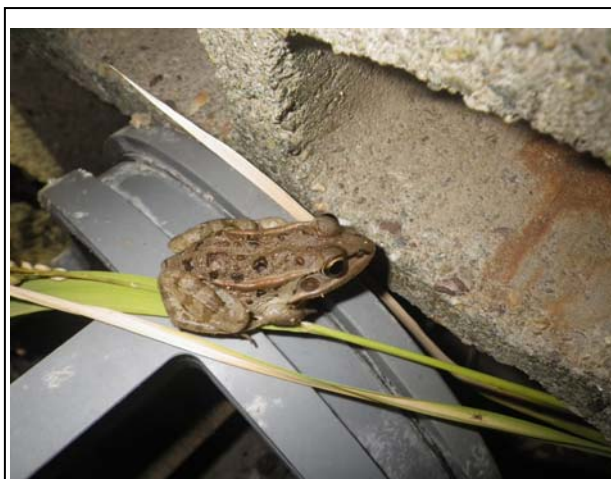
【関連文献】

長井悠佳里・土井敏男・湯浅義明・藤谷武史・伊藤邦夫・小泉雄紀・三浦郁夫, 2011. ナゴヤダルマガエルの遺伝的地域分化—とくに岡山集団とナゴヤ集団が接する境界領域について—. 爬虫両棲類学会報, 2011(1):55. 日本爬虫両棲類学会第49回大会発表要旨.

前田憲男・松井正文, 1999. ダルマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.92-95. 文一総合出版, 東京.

松井正文, 2003. 野生動物の保全遺伝学 14 両生類. 小池裕子・松井正文(編), 保全遺伝学, pp.214-226. 東京大学出版会, 東京.

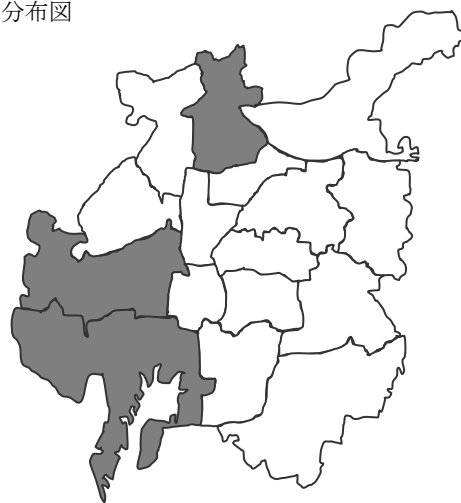
光田佳代・原直之・高木雅紀・山崎裕治・宮川修一・岩澤淳, 2011. PCRと制限酵素を利用したトノサマガエルとナゴヤダルマガエルの母親系統の簡易な判別法. 両生類誌, (21):17-22.



ナゴヤダルマガエル

北区、2014年10月3日、藤谷武史 撮影

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)

両生類 <無尾目 アオガエル科>

シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii* (Gunther, 1858)

カテゴリー

【選定理由】

市内では過去の記録が少ないが、東部に局所的に生息していたとみられる。しかし、現在では開発による影響で生息確認が皆無に等しい状況となっている。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

頭胴長は 32～53mm で、雌の方が極めて大きい。体表は平滑で、黄緑色から緑色であるが、体色変化で暗褐色にもなる。時折背面に黄色い斑点模様が現れる個体も存在する。吸盤が発達し、ニホンアマガエルと似ているが、本種は鼻から頭側面にかけて黒い条線が入らない。

【分布の概要】

【市内の分布】

東部の丘陵地のごく一部に生息。しかし、近年は確認されていない。

【県内の分布】

尾張東部、三河地方、知多半島の一部、渥美半島。

【国内の分布】

本州、四国、九州、五島列島。

【世界の分布】

日本固有種。



シュレーゲルアオガエル

岐阜県恵那郡、2007年6月26日、藤谷武史 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から低山地帯では水田周辺に、標高1600mまでの高地では主に湿地周辺に生息。産卵は4～6月が主な時期で、雄が水田の畦などに浅い窪みを作り、その中に泡状の卵塊を産卵する。雄は隠れて鳴くことが多く、繁殖期でも鳴き声が聞かれるものの、姿を確認する事は容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名東区の市境の緑地にのみ生息。しかし、ここ数年間は生息確認ができていない。本種は濃尾平野ではほとんど見ることができないが、田植え時期が遅く、産卵期に水田に水が溜まっていない状態となり、個体群維持が出来ないためと推測される。

【保全上の留意点】

生息地である水田や周りの水路の確保が重要で、且つ産卵期に合わせた水の確保。

【特記事項】

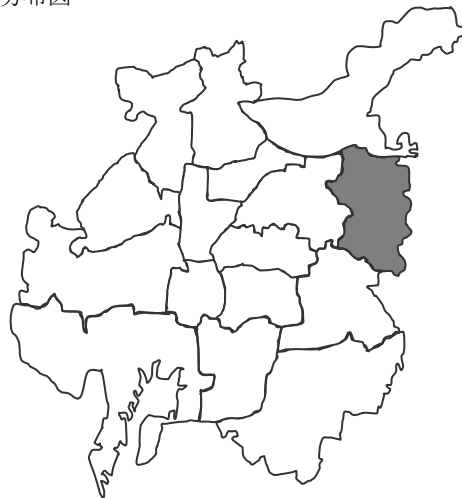
かつては、名東区の東境から長久手市にかけて生息していた。しかし近年の開発に伴い、名古屋市に隣接する長久手市内の生息地は消失した。

【関連文献】

- 愛知県, 1996. 愛知県の両生類・爬虫類, p.117. 愛知県.
大谷 勉, 2009. 日本の爬虫両棲類. pp.116-117. 文一総合出版, 東京.
島田知彦・坂部あい, 2014. 西三河平野部におけるツチガエルの分布. 豊橋自然史博物館研報, (24):7-15.
前田憲男・松井正文, 1999. シュレーゲルアオガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.158-161. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 藤谷武史)

市内分布図



両生類 <無尾目 アカガエル科>

ニホンアカガエル *Rana japonica* Boulenger, 1879**【選定理由】**

開発などによる生息地の縮小や生息地の環境悪化に伴い個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

頭胴長が 34～64mm で、雌の方が明らかに大きい。体色は赤褐色や灰褐色で、背面はほぼなめらかである。背側線は明瞭でほとんどおれ曲がらず、ヤマアカガエルと異なる。幼生は背面に一對の黒点があり、これもヤマアカガエルと異なる。雄は鳴嚢を持たない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部丘陵地の一部。中区の一部。

【県内の分布】

尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島。

【国内の分布】

本州、四国、九州、隠岐、大隈諸島。八丈島に人為分布。

【世界の分布】

日本固有種。



ニホンアカガエル
滋賀県産、藤谷武史 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に平地の水田や丘陵地に生息し、山地では少ない。繁殖期は普通1～3月、市内では2月下旬～3月上旬である。ヤマアカガエルと同所的に生息する場所もあるが、市内では本種しか確認していない。

【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵地の限られた場所のみに生息する。繁殖集団の個体数変動が激しく、生息地の環境が影響している可能性が考えられる。現在は減少傾向にあり、産卵数が激減している個体群も見受けられる。

【保全上の留意点】

丘陵地に依存しているため、丘陵地の環境保全を含めた永続的な保護が重要である。

【特記事項】

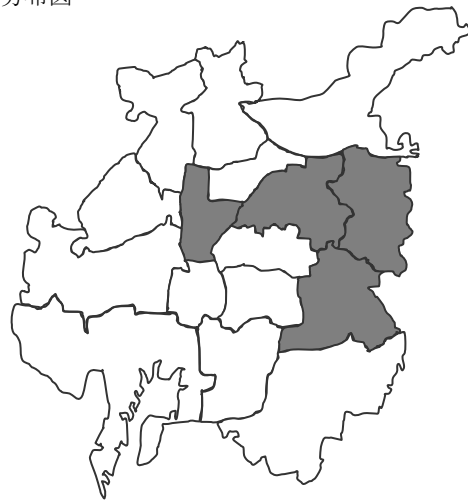
中区に生息している個体群は、丸の内中学校に作られたビオトープに 2001 年より産卵する集団。この集団は名古屋城の外堀に生息していた集団と考えられる。

【関連文献】

比婆科学教育振興会, 1996. 広島県の両生・爬虫類, p.163. 中国新聞社, 広島.
前田憲男・松井正文, 1999. ダルマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.92-95. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 藤谷武史)

市内分布図



両生類 <無尾目 ヒキガエル科>

アズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus* Boulenger, 1883**【選定理由】**

10 年ほど前までは市内でも丘陵地を中心に多く生息しており、産卵シーズンになると多くの「ガマ合戦」が見られていた。しかし近年、市内各地で産卵数が激減している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

頭胴長は 43～162mm と変異が大きい、多くの個体は 70～130mm。小さな個体は東北地方と中部地方の山岳部などで見られる。背面は茶褐色、黄褐色、赤褐色とバリエーションがあり、腹部側面には白や黒、茶褐色のまだら模様が入る。オスは繁殖期になると体表が滑らかになり、黄褐色がより強くなる傾向がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主に東部の丘陵地に生息。公園や庭先などでも見られる。中区白川公園に人為分布。

【県内の分布】

尾張東部、三河地方、知多半島、渥美半島に広く分布。

【国内の分布】

本州近畿及び山陰以北。北海道と佐渡島及び伊豆大島は人為移入。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の丘陵地や畑、公園。山地の森林や溪流沿いにも生息。繁殖期は 2～7 月だが、平野部は 2～3 月に産卵されるのが一般的。通常成体は産卵後に一か月ほど春眠する。産卵数は 1500～8000 個で、紐状の卵塊を産卵する。幼生は 30mm ほどで変態する。変態後の幼体は成長が早く、オスで一年後の秋に性成熟し、メスではその一年後に性成熟をする。市内では通常 3 月中旬頃に産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵地を中心に生息するが、近年急激に個体数が減少しており、産卵が見られなくなった場所も数か所存在する。中区の白川公園に生息する繁殖個体群は、近くで飼育繁殖した個体が逃げ出し、定着した個体群である。

【保全上の留意点】

市内の個体群が激減した理由は不明だが、今後各繁殖集団の個体群動態を観察する必要がある。生息地である丘陵地などの開発にも注意が必要である。

【特記事項】

白川公園に定着している繁殖集団は、平和公園の個体群であることが明らかとなっている。平和公園及び猪高緑地の個体群は、ここ数年産卵が確認されなくなった。

【関連文献】

松橋利光・奥山風太郎, 2002. アズマヒキガエル. 山溪ハンディ図鑑 日本のカエル+サンショウウオ, pp.28-39. 山と溪谷社, 東京

前田憲男・松井正文, 1999. アズマヒキガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.18-21. 文一総合出版, 東京.

浦野明央 石原勝敏 編, 1987. ヒキガエルの生物学. 289 p. 裳華房, 東京.

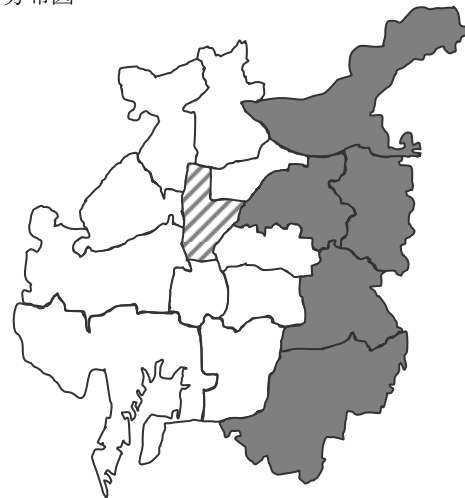
(執筆者 藤谷武史)



アズマヒキガエル

千種区、2007 年 3 月 1 日、藤谷武史 撮影

市内分布図



両生類 <無尾目 アカガエル科>

トノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)**【選定理由】**

都市化による水田の減少や、繁殖可能な湿地などの減少によって、個体群に影響が出ていると思われる。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

頭胴長が 38～94mm で、雌の方が大きくなる。背中には背中線を持ち、体色は緑や暗褐色、黒い不規則な斑紋がある。成熟した雌は、黒い斑紋が広がり、黒い部分が目立ち、繁殖期の成熟した雄は、時に鮮やかな黄褐色になり、黒い斑紋がほとんど無い個体も見受けられる。雄は一对の外鳴囊が鼓膜の下方でたまたみ込まれている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部と西部、及び北部の水田や緑地に生息。

【県内の分布】

尾張地方、三河地方、知多半島、渥美半島のほぼ全域。

【国内の分布】

本州（関東地方から仙台平野を除く）、四国、九州、五島列島。北海道は人為分布。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。

【生息地の環境／生態的特性】

生息地は平野部から低山地に及び、主に水田が大きな繁殖場所であるが、河川敷の水たまりや小さな池などでも産卵する。繁殖期は4～6月だが、一繁殖集団による繁殖ピークは非常に短く、一週間ほどでほぼ終了する。雄は繁殖期に 1.6m² ほどの縄張りを持つことが知られている。非繁殖期は水辺から離れる。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に水田に依存しているが、生息や繁殖のできる水田の減少が原因と思われる。中川区や中村区の西部では、残された水田で比較的多くの本種を確認することができる。

【保全上の留意点】

水田の開発は大きく本種の個体群に影響を及ぼすことから、稲作圃場の継続が重要。

【特記事項】

ダルマガエルとの自然交雑が懸念されている。

【関連文献】

前田憲男・松井正文, 1999. トノサマガエル. 改訂版日本カエル図鑑, pp.84-87. 文一総合出版, 東京.

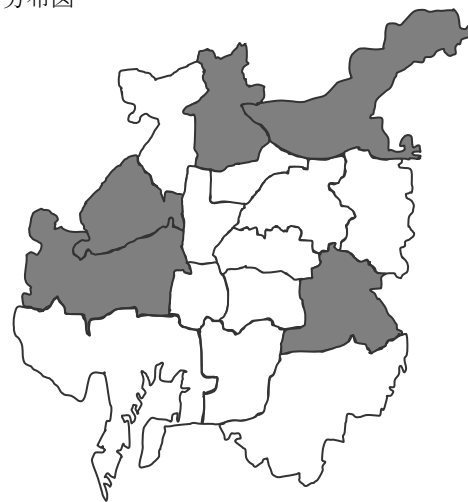
松井正文, 2003. 野生動物の保全遺伝学 14 両生類. 小池裕子・松井正文(編), 保全遺伝学, pp.214-226. 東京大学出版会, 東京.



トノサマガエル

中川区、2014年9月16日、藤谷武史 撮影

市内分布図



(執筆者 藤谷武史)

魚類

① 名古屋市における水域環境および魚類の概況

名古屋市内には庄内川、天白川、山崎川、新川、堀川を含む5水系49河川が流れている。このうち全長96kmの庄内川は岐阜県恵那市に源を発し、全流域面積(1,010 km²)も県内では矢作川に次いで大きい。本河川に名古屋市内で流入する支流も多く、特に矢田川がその代表格である。庄内川水系に合流するいくつかの支流は、瀬戸市や長久手市など比較的良好な自然が残されている地域を流れる。庄内川が名古屋市という大都市を流れながらも比較的豊かな生物相を擁する理由は、本流および支流の上流域にある自然の豊かさにあると言えるだろう。一方、庄内川に次いで規模が大きいのは天白川水系であるが、源流は名古屋市のベッドタウンとして急速に都市化が進んできた日進市にあることと、扇川、植田川をはじめとする支流の多くが名古屋市内の住宅密集地域を流れること等により、流域の自然度は高くない。しかし、天白川下流域(感潮域付近)にはニホンウナギ、ハゼ類が一定数見られる。なお、天白川の流域にはかつて今よりも多くの農業用溜め池が存在していた。これは、東部丘陵地と呼ばれる市の東部地域では河川からの用水取水が困難であったためである。しかし、かつて市内に360箇所以上あった溜め池は、2004年までに116までその数を減らした。近年、これらの溜め池の多くは農業利用頻度の減少とともに定期的な池干し等のメンテナンス機会も減り、ブルーギル、オオクチバス等の外来魚類にとって生息しやすい、水位変動の少ない安定した環境条件を整えてしまっている。

1957年に出された名古屋市環境白書によれば、名古屋市内には21魚種が確認されていた。その後、1970年代にいったん18種に減じたが、2000年代にかけて44種にまで増加した。経時的な記録が残されている13河川(庄内川、矢田川、野添川、長戸川、天神川、香流川、扇川、荒子川、他)では、現在、外来魚類を含む63種を数えることができる。増加した要因の一つに外来魚類の侵入と定着が挙げられる。累積出現魚種数がもっとも多いのは庄内川で、単独で34種に上り、これに13河川を加えた全河川にほぼ共通して出現する魚種は、ヨシノボリ類、オイカワ、タモロコ、ドジョウ、カワムツ、モツゴ、マハゼ、フナ類、カマツカである。しかし、2009年を境に、外来魚類がこれらすべての河川で認められるようになった。たとえば、10河川以上でカダヤシ、ブルーギル、オオクチバスの3種がセットで生息している。加えて、カムルチー、ナイルティラピアの定着も確認されている。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

2010年度補遺版では汽水域および河口域(干潟等)に生息する魚類について十分な文献および現地の調査を行うことができなかったため、レッドリストの対象魚種に含めなかった。しかし、川と海が会うエコトーンと呼ばれる生態系の境界は、生物多様性が高く、しかしその一方で干潟の埋め立てなどの環境悪化に拍車がかかっている場所でもある。また、汽水魚をレッドリストの対象とする先行事例も増えている。このような状況を踏まえ、2015年度版では、汽水域と干潟に生息する魚類を検討対象に含めた。さらに、生活史を通じて海と行き来すること

のない純淡水魚全般についても文献を中心に見直しをはかった。そのため、前版では1名で行った作業を汽水・淡水魚類に詳しい研究者7名で行うこととした。なお、リスト作成に先立ち、愛知県産魚類目録を作成することとした。そのため、1955年から2014年に出版された120編以上の文献の精査および現地・標本調査を行った。標本のなかには、古いものでは1925年作成のものも含まれていた。この結果、リスト化された170種以上から外来種、偶産種と考えられるものを慎重に除外し、70種程度に絞り込まれた。明確な名古屋市産魚類目録の作成は困難と判断し、これらをレッドリストの対象母集団として選定作業を行った。作業の結果、2010年度版の計19種のうち2種（イチモンジタナゴ、チチブ）がリスト外とされた一方で汽水魚9種を含む15種が新たに追加され、合計32種が選定された。リスト外とされたイチモンジタナゴは、元来名古屋市内には分布しなかったと判断したこと、チチブは市内に生息するが、個体数の減少が確認できなかったことがそれぞれの主な理由である。なお、ランクの決定には、一般市民や研究者らからパブリックコメント等を通じて寄せられた貴重な意見を参考にさせていただいたことを付記する。

新規掲載種およびランクに大きな変更が生じた魚種を中心に概略を述べる。これらのなかには、個体群サイズがきわめて小さく、生息場所が局在し、河川工事、溜め池の埋め立て、水田地帯・里地里山の消失、河口干潟の埋め立て等による生息場所の悪化や喪失、生息環境（餌生物量、産卵基質、水草などの隠れ場所等）の悪化、外来魚による捕食や競争、マニアによる乱獲等によって危機的な状況にあるものが含まれている。

絶滅危惧ⅠA類にランクされたカワバタモロコおよびトウカイヨシノボリは、近年の調査で初めて市内で生息が明らかになったものであり、両種ともに分布地点、個体数ともにきわめて限られている。絶滅危惧ⅠB類のカワムツは、精査した結果、生息が確認されている河川において個体数がさらに減少しているものと推測された。同じくⅠB類のトビハゼ、エドハゼ、マサゴハゼの3種は、いずれも県内複数の河口域・干潟域に生息するが、名古屋市内ではこれらの環境が悪化しており、個体数が減少している。また、ⅠI類からⅠB類にランクアップされたニホンウナギについては、個体数や分布に関して現在の状態と比較が可能な古いデータが存在しないため、実際には推定以上に少なくなっている可能性があり、国内の他の地域に比べても生息環境が明らかに悪い名古屋市においては、今後個体数がさらに減少していく可能性もある。そのため、予防原則的にも従来のⅡ類からⅠ類への変更が妥当と考えられた。

絶滅危惧Ⅱ類に掲載されたドジョウは、県内大部分の個体群が小さくなりつつあり、市内でも守山区等の一部の環境が比較的良好な地域を除けば確認することが難しくなっている。アユは、両側回遊魚であり、周辺個体群からの移入を鑑みれば「絶滅」は容易に起こらないと考えられるが、庄内川等においては遡上阻害や寄生虫の蔓延により十分に再生産していない可能性があり、前版の準絶滅危惧からⅡ類へとランクアップされた。汽水魚のシラウオは、産卵場所である河口域の砂底の減少、赤潮などの水質悪化で個体数が減少している。準絶滅危惧類には、タモロコ、スミウキゴリが新たに追加された。前者は、河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化により、隠れる場所ならびに産卵基質である水草や抽水植物の激減により個体数の減少が見られる。後者は、転石等の生息に必要な河床材料が減少したことにより、数を減らしている。最後に、情報不足として記載された6魚種については、いずれもカテゴリー判定に足る情報が十分に得られておらず、今後の知見の集積が望まれる。特に、コイ（在来型）については、生息の可能性がある以上、今後の遺伝的情報の蓄積を待ちつつ、交雑

のおそれのあるコイ（飼育型）の放流や河川における餌づけなどを厳しく制限する方法を検討すべきであろう。

名古屋市内に残された水辺の生息環境の多くは、様々な人為的影響により悪化の一途を辿っている。これにオオクチバスなど肉食性外来魚の定着が拍車をかけている。外来魚類は、在来魚の卵から成魚に至る成長段階すべてにおいて捕食・競争圧をかけるため、特に溜め池などの閉鎖水域および水路などの空間分化に乏しい水域において負の影響が著しい。本版に挙げた魚類のなかには比較的水質の汚濁に強い種もあり、現在は市内の各所において確認されるものの、個体数が少ないものが多く、今後、餌生物の減少、生息状況への配慮に欠けた河川改修および海浜工事等が続けば、個体数の減少が続き、将来ランクが上昇する恐れが強い。

（執筆者 谷口義則）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各魚類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（魚類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」（中坊徹次（編），2013）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名（目、科、種名）については、「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」中坊編（2013）によった。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類」（環境省，2015）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、情報不足カテゴリーの一部の種については、分布が不明であるため、地図を掲載しなかった。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

魚類 <ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科>

スナヤツメ類 *Lethenteron* spp.**【選定理由】**

本種の減少には歯止めがかかっておらず、絶滅リスクがきわめて高い。本種の主要な生息場所である湧水環境が市内では緑地の減少と共に激減しており、残された数少ない生息場所も圃場整備および水質汚染の危機にさらされている。

【形態】

体長 20cm。体側に 7 つのエラ穴が開き、目と合わせて 8 つの目（ヤツメ）があるように見える。幼生（アンモシーテス幼生）には目が無い。ウナギに似るが、口には顎が無く、2 万種以上の魚類の中でもきわめて原始的な姿を留めた化石時代の生き残りの種である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

五条川水系、矢作川水系、豊川水系など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国及び九州北部。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

幼生期は、河床や川岸に溜まった砂泥に潜り、分解された落ち葉などの有機物や藻類を食べる。生まれてから数年間のアンモシーテス幼生期を経て、変態する（成魚になる）。その後は消化管が機能を失い、まったく餌を採らず、翌春に産卵して死ぬ。一生を河川で過ごす。非寄生性である。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖場となる湧水や伏流水の消失により個体数が激減している。特に大きな河川では伏流水のあるワンドや細流が生息環境となるため、護岸工事などにより消失しやすい。本種は水質汚染に弱く、護岸工事等で淀みなどが消失したり、落ち葉等の有機物の滞留場所（緩流部）が失われると生息できなくなる。市内では著しい緑地の減少に伴う湧き水の枯渇や水温上昇により、ほぼ絶滅に近い状態にあると推測される。

【保全上の留意点】

湧水が出る農業用排水路も幼生にとって重要な生育場となる。コンクリート張りでも泥底なら可能性があるが、市内では絶滅状態に近く、緊急の保全策が必要である。

【特記事項】

スナヤツメは北方種と南方種に分けられる。愛知県内では、これまでのところ南方種しか確認されていないが、名古屋市内に生息する個体群は同定されていないため、両種を含めたスナヤツメ類とした。

【関連文献】

岩田明久, 1987. スナヤツメ. 川那部浩哉・水野信彦（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.38-40. 山と溪谷社, 東京.
中坊徹次・甲斐嘉晃, 2013. ヤツメウナギ科. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp.144-145, 1753-1755. 東海大学出版会, 神奈川.
鈴木誉士・浅香智也・中川雅博, 2006. 琵琶湖につながる護岸された農業用排水路におけるスナヤツメ *Lethenteron reissneri* 個体数の経月および経年変動. 関西自然保護機構会報, 28(1):49-57.
山崎裕治, 2005. スナヤツメー湧水にひそむ生きた化石ー. 片野修・森誠一（編）, 希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ. pp.37-48. 信山社, 東京.

カテゴリー

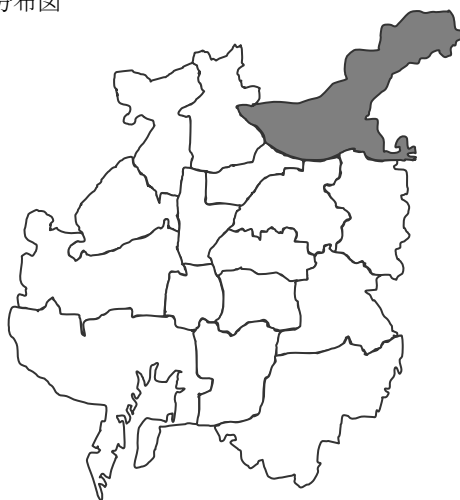
名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



スナヤツメ類

岐阜県木曽川水系、2006年5月9日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 コイ科>

カワバタモロコ *Hemigrammocyppris rasborella* Fowler**【選定理由】**

名古屋市内的における生息地はきわめて局所的であり、開発および外来魚の侵入による絶滅リスクがきわめて高い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 6cm。タモロコに似るが、口ひげは無い。また、腹縁がキール状になっている。側線は不完全で胸鰭上方までしか達しない。縦列鱗数は 30～35 枚である（細谷，2013）。体側には黒色の縦帯がある。産卵期の雄は色鮮やかな黄金色になる。雌は、雄より大型になる（前畑，2001）。

【分布の概要】**【市内の分布】**

非公表。

【県内の分布】

尾張地方（犬山市、瀬戸市、長久手町、津島市など）、三河地方（豊田市、刈谷市、岡崎市、新城市など）。

【国内の分布】

本州中部以西から九州北西部。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の浅い池沼、溜池、小川、水路などに生息し、群れを作り表層付近を遊泳する。産卵期は、5 月中旬から 7 月下旬で地域により若干差がある。付着藻類から水生小動物など幅広く食う雑食性である（前畑，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

個体数は比較的多いが、きわめて限られた地域で確認されるにすぎない。都市化にともなう河川整備、圃場整備による水田用水路の劣化や消失、水質汚濁を含む生息環境の悪化が進行したことが、減少の主たる要因である。加えて、オオクチバスなどの肉食性外来生物による捕食の影響も大きいと推測される。

【保全上の留意点】

水質改善、コンクリート護岸の回避が必要である。ワンドや浅場、抽水植物帯の確保、肉食性外来生物の捕食圧の低減も効果的である。また、施設内での系統保存を行うことが望ましい。

【特記事項】

黄金色に輝く雄の婚姻色が観賞魚として価値があり、かつ希少魚であるため、乱獲の対象となる。また、増殖目的で他地域の個体を放す、「善意の放流」が行われることもあり、遺伝子汚染が生じる危険性がある。行政、専門家、地域住民など多様な主体が連携して、本種と生息環境を保全することが緊急の課題である。豊田市や西尾市では、天然記念物に指定されている。

【引用文献】

細谷和海，2013．コイ科．中坊徹次編，日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.308-327,1813-1819．東海大学出版会，神奈川．

前畑政善，2001．カワバタモロコ．川那部浩哉・水野信彦・細谷和海編，日本の淡水魚，pp.256-257．山と溪谷社，東京．

【関連文献】

Watanabe, K. and S. Mori, 2008. Comparison of genetic population structure between two cyprinids, *Hemigrammocyppris rasborella* and *Pseudorasbora pumila* subsp., in the Ise Bay basin, central Honshu, Japan. *Ichthyological Research*, 55:309-320.



カワバタモロコ

名古屋市内、2014 年 6 月 22 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図

生息地保護のため
分布図は示さない

(執筆者 浅香智也)

魚類 <コイ目 コイ科>

ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

市内各地で個体群の著しい減少が認められる。開発による生息地の破壊、産卵母貝である二枚貝類の減少、オオクチバス等の魚食性外来魚による捕食による生息数の激減にくわえて、飼育愛好家による過剰採集も脅威である。

【形態】

体長 8cm。比較的大型個体では 10cm 以上になる。体は側扁するが、体高はあまり高くない。本種に近縁なアブラボテも含め、背鰭の条間膜に紡錘形の暗色斑紋があり、やや長い 1 対の口ひげを持つ。婚姻色の出た雄は背部が蒼褐色で、体側は銀白色。頬部と腹部が朱色になり、背鰭と臀鰭に朱色の幅広い縦帯が出て縁辺には細い黒縁が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川、天白川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。知多半島にも分布情報があるが、移入個体群である可能性がある。

【国内の分布】

北海道、南九州、沖縄を除く全国各地。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島西岸。

【生息地の環境／生態的特性】

日本産タナゴ類のなかではもっとも広く分布する。平野部の河川、用水路を主たる生息の場とするが、これらと連絡する浅い溜池、池沼などにも生息する。タナゴ類の中でも比較的流れのある場所を好み、砂礫底によく見られる。雑食性で、付着藻類・底生植物などを食べる。産卵期は 4～8 月で、雄がマツカサガイやニセマツカサガイなど二枚貝に縄張りを作り、これらの鰓に雌が産卵する。孵化した仔魚はそのまま母貝内で成長し、1 ヶ月ほどで母貝から浮出する。1 年で成熟し、寿命は 2～3 年である。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地・工業用地開発、河川改修等による生息地の破壊、二枚貝類の減少、オオクチバス等の魚食性外来魚による捕食により生息数が激減したものと推測される。名古屋市では生息地の保護対策は特に行っていない。飼育愛好家による過剰採集も脅威となっている。

【保全上の留意点】

生息場所と淡水二枚貝の保全、魚食性外来魚の侵入防止およびこれらの駆除が必要である。近縁な外来種による競争的な排除（例：霞ヶ浦のオオタナゴ）や交雑（例：愛媛県におけるアブラボテとの交雑）に注意が必要である。

【特記事項】

保全対象水域を決定し、保全策を講じる必要がある。

【関連文献】

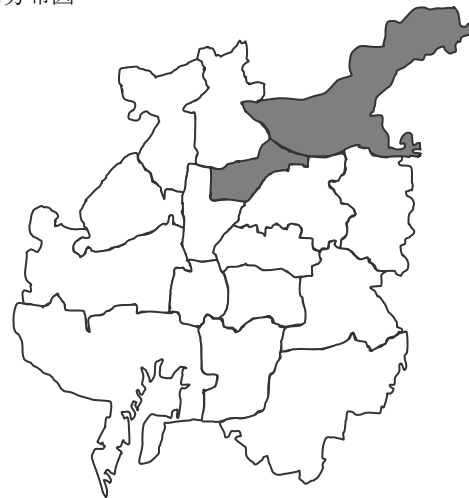
松葉成生・吉見翔太郎・井上幹生・畑 啓生, 2014. 分子系統地理が示す愛媛県松山平野におけるアブラボテの人為移入起源. 魚類学雑誌, 61:89-96.
長田芳和, 1987. ヤリタナゴ. 川那部浩哉・水野信彦（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.354-355.



ヤリタナゴ

知多半島、2008 年 12 月 7 日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



（執筆者 谷口義則）

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

トウカイコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima**【選定理由】**

過去に知られていた分布域が著しく縮小しており、市内に現存する個体数もきわめて少なく、絶滅の危険性がきわめて高いと推測される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 12cm。体は細長く、やや側扁した円筒形。スジシマドジョウ属の中では小型で、最大体長は雄で約10cm、雌で12cm、一般に7cm以下の個体が多い。他のシマドジョウ属魚類とは、体が小さく、雄の第二次特徴である胸鰭基部の骨質盤が丸く、体側に縦帯があることで識別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系の1支流など。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。

【国内の分布】

静岡県太田川から三重県宮川まで。

【世界の分布】

日本固有種。



トウカイコガタスジシマドジョウ

西尾市矢作川水系、2012年12月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

流れの緩やかな砂泥底の農業水路、河川本流等を主な生息場所としている。産卵期は5～7月で、一般に、雌雄とも1年で成熟するが、雌では2年目に成熟するものもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつての生息地の多くは、圃場整備をはじめとする農業用水路のコンクリート化、農業形態の変化にともなう乾田化や水路の水涸れにより消滅している。最近、生物に優しい農法を取り入れる試みがなされているが、生息場所の復元は難しい。

【保全上の留意点】

本種の存続には、河床に一定量の土砂（砂泥）が継続して供給され、三面コンクリート化されていないことが不可欠である。水田と農業用水路を往復できる構造を復元することも重要である。

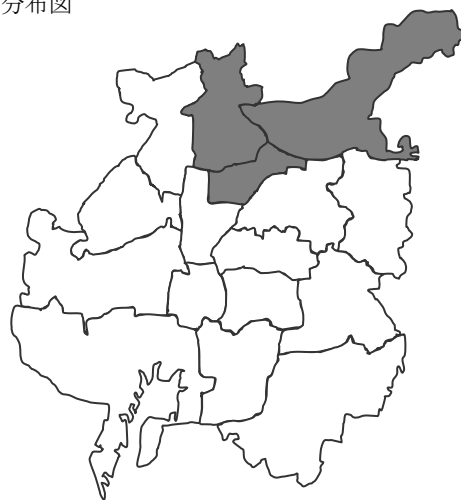
【特記事項】

スジシマドジョウ小型種東海型とされてきたが、2012年にトウカイコガタスジシマドジョウの標準和名が提唱された。他のスジシマドジョウ類についても全国的に分布域が縮小している。

【関連文献】

- 細谷和海, 1997. 日本の希少淡水魚. 長田芳和・細谷和海（編）, 日本の希少淡水魚の現状と系統保存, pp.3-21. 緑書房, 東京.
- 環境省自然環境局野生生物課, 2003. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 4 汽水・淡水魚類, pp.102-103. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- Nakajima, J., 2012. Taxonomic study of the *Cobitis striata* complex (Cypriniformes, Cobitidae) in Japan. *Zootaxa*, 3586:103-130.
- 中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治, 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.
- 斉藤憲治, 1993. スジシマドジョウ小型種と大型種の急減. 魚類学雑誌, 40:394-397.
- 斉藤憲治, 2001. スジシマドジョウ亜群. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 日本の淡水魚, pp.386-391. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



(執筆 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ホトケドジョウ *Lefua echigonia* Jordan et Richardson

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

県内各地において、湧水の枯渇、圃場整備、過度の農薬散布、宅地化により激減している。市内では水田の急減のほかに、緑地の激減による湧水箇所数および湧水量の減少に伴う湿地の喪失により本種の絶滅リスクは著しく高まっている。

【形態】

体長 8cm。体は細長く円筒形で、背鰭は腹鰭と対在するか後方にある。吻は短く、目は大きい。ひげの数は 4 対、体と鰭は茶褐色で暗色斑点が散在する。同属のナガレホトケドジョウやトウカイナガレホトケドジョウとは、体型や斑紋のパターン、生息場所の違いにより識別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系の小河川、周辺の小水路、緑地内の湿原、水田周りの水路。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川のほか、丘陵地域にある水田周辺水路、湿原、湧水起源の溜め池。

【国内の分布】

東北地方から三重県、京都府、兵庫県。

【世界の分布】

日本固有種。



ホトケドジョウ

岡崎市矢作川水系（湿地）、2010年4月10日、

鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湧水を水源とする細流、湿原や水田周りの小溝に生息する。準冷水性の底生魚で、水温が 27℃ を越えると弱る。特に、やや開けた流れの緩やかな場所の砂泥底に多い。一般に、成長は 1 年で 3~4cm、2 年で 4~7cm に達する。産卵期は 3~7 月で、水草に産卵する。仔魚は孵化後すぐに着底せず、全長約 20mm になるまで底近くを浮遊している。底生小動物を中心とする雑食性。多くが 1 年で成熟するが、個体によっては 2 年目に成熟するものもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の減少から判断して個体数も減少していることは間違いない。かつての生息地の多くは宅地化や圃場整備により消失している。

【保全上の留意点】

湧水の消失や、水田周りの小溝の U 字溝化に伴い、全国的に減少している。1970 年代に農薬生産量の増大と共に本種が減少していることから、農薬の過度散布が要因であると推測される。本種の生息地復元を目的とするビオトープの造成がなされてきた場所もある。

【特記事項】

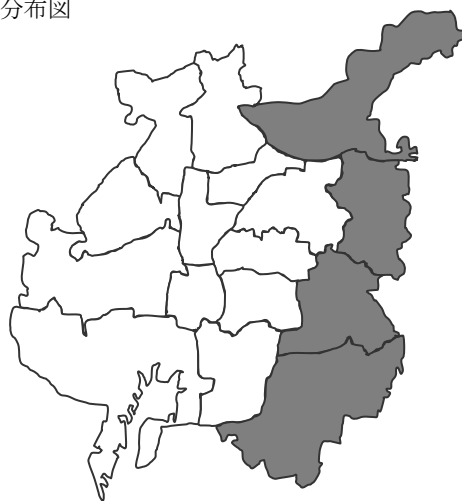
本種を指標とする水田の生物多様性保全も可能である。

【関連文献】

- 細谷和海, 2013. ドジョウ科. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.
 勝呂尚之, 2002. ホトケドジョウの初期飼育条件. *SUISANZOUHOKU*, 50(1):55-62.
 澤田幸雄, 1987. ホトケドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦編, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.400. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <ナマズ目 アカザ科>

アカザ *Liobagrus reini* Hilgendorf**【選定理由】**

本種は清流に生息し、河川の高い自然度の指標生物の1種である。愛知県内の河川における生息数も多くなく、名古屋市内においては局所的に分布するのみであり、絶滅に近いと推定される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 10cm。体は赤褐色で腹部はやや白色を帯び、細長い。頭部は縦扁し、体の後部は側偏する。鱗は無く、側線は不完全。胸鰭と背鰭の第1鰭条は肥大して硬く、鋭い棘になっている。尾鰭の後縁はやや丸い。脂鰭は尾鰭に連続する。口ひげは前鼻孔部1対、上顎に1対、下顎に2対、計4対ある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

宮城県、秋田県以南の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



アカザ

岡崎市矢作川水系、2012年4月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中・上流域の比較的水のきれいな流水域で、礫の多い河川に生息する。従来は自然環境が比較的豊かだった九州、四国、中国地方でも河川中流域から姿を消しつつあり、分布域の減少や分断化は全国に及んでいる。本種は比較的小さく、夜行性で水底を滑るように泳ぐ。昼間は比較的大きい浮き石の下に潜む。水生昆虫を捕食する。産卵期は5～6月で、石の下に生みつけられた卵塊を雄が保護する。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に調査が行われた地域では、河川の中流域の生息地が消滅している。本来、群れをなすような種ではなく、個体数はもともと多くないが、近年いっそう減少したと指摘されている。

【保全上の留意点】

河川の中・上流域の30cm以浅の平瀬や早瀬でよく見られる。隠れ場所や産卵場所として適度な大きさの礫を必要とする。しかし、河川改修（流路の直線化、床固めなど）や砂礫の採取などによって環境が破壊されてきたために、生息場所の減少は深刻である。

【特記事項】

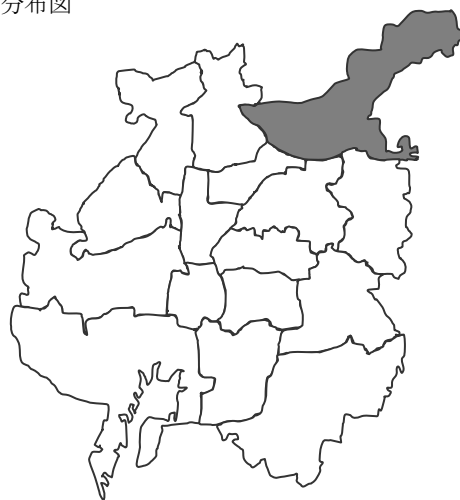
河床掘削で隠れ場所や産卵場所が消失してしまう。たとえば、河川工事で土砂が堆積すると礫間の空隙のみならず、餌生物も失われてしまう。

【関連文献】

森 誠一・名越 誠, 1987. アカザ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. p.410. 山と溪谷社, 東京.

Watanabe, K., 1994. A note on the reproductive ecology of the torrent catfish, *Liobagrus reini* (Siluriformes: Amblycipitidae). *Japanese Journal of Ichthyology*, 41:219-221.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <スズキ目 ドンコ科>

ドンコ *Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内における本種の生息域は依然限られており、現存する個体群も決して大きくないと推測され、今後実効性のある保全対策を実施しない限り、本種の絶滅リスクは小さくないと考えられる。

【形態】

体長 20cm。ハゼ類の中では大型で、頭部が大きく横幅があり、胴が短い。口は大きく、唇が厚い。うちわのような形の胸鰭が大きく発達し、腹鰭は左右に分離し、吸盤状にはなっていない。褐色の体色で、背鰭と尾鰭の基底に黒い斑紋がある。全身に大柄な暗斑がある。繁殖期の雄は全身が黒っぽくなる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系で確認されているが、個体数は少ない。

【国内の分布】

愛知県・新潟県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、韓国。



ドンコ

豊田市矢作川水系、2012年5月1日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

砂礫底のある中小規模河川の緩流部を好む。湖沼、水田周辺の用排水路にも生息する。純淡水魚であり、海との行き来はしない。大きめの礫や水草等を隠れ場所とし、強い縄張りを持つ。主に夜行性で、魚類、水生昆虫の他に、甲殻類等を捕食する。4～7月に産卵する。雄が石の下に巣を作り、誘引された雌は巣の天井に卵を産み、立ち去る。雄はその後卵を孵化するまで保護する。孵化後の仔魚は他のハゼ類と異なり、浮遊生活期を経ずに、即座に底生生活に入る。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では 1960 年代には広範囲に分布する普通種だったが、現在ではほとんど姿を見なくなってしまった。河川工事により礫河床が失われ、産卵環境が損なわれてしまったことが本種減少の最大要因であろう。

【保全上の留意点】

市内における本種の生息水域は非常に限られているものと推測される。まずは、これらの生息場所をこれ以上損なわないこと、産卵に必要な適度な大きさの礫を主体とする河床を復元することが重要である。

【特記事項】

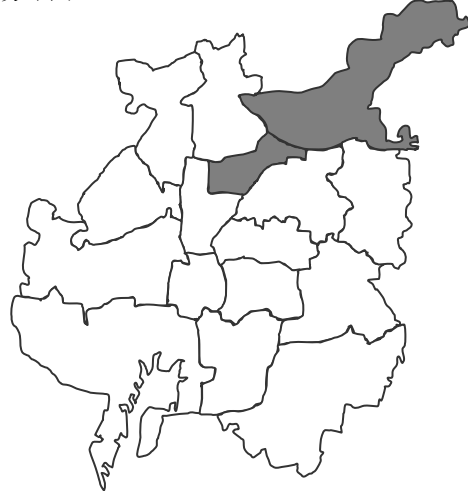
ドンコに限らず、ネット販売で入手した個体を意図的・非意図的に野外に放逐する行為が横行しているものと推測される。現に関東地方にも本種の分布が拡大しており、問題視されている。

【関連文献】

- 岩田明久, 2001. ドンコ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, pp.558-560. 山と溪谷社, 東京.
- 向井貴彦・西田睦, 2003. 日本産ドンコにおけるミトコンドリア DNA の系統と関東地方への人為移植の分子証拠. 魚類学雑誌, 50(1):71-76.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 ハゼ科>

トウカイヨシノボリ *Rhinogobius* sp. TO

【選定理由】

名古屋市における生息地は非常に限られており、いずれの個体群も、開発による生息地の消滅、外来魚による捕食、近縁種の侵入による交雑といったリスクにさらされている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 4cm。小型のハゼ科魚類で、前鰓蓋管が無いことで他の日本産ヨシノボリ属魚類と区別される。体色は褐色でやや不定型な斑紋があり、雄の喉部は橙色になる。成熟した雄の第1背鰭は伸張しない（鈴木・坂本，2005）。

【分布の概要】

【市内の分布】

非公表。

【県内の分布】

犬山市、長久手市、日進市、岡崎市、豊田市、刈谷市、西尾市、豊川市。

【国内の分布】

伊勢湾周辺地域のみ。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に丘陵地に作られた溜め池に生息する。繁殖期は 4～6 月頃と推定される。仔稚魚は流れの無い場所で浮遊生活を送り、海に降ることはない（Tsunagawa et al., 2010）。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は濃尾平野から岡崎平野を中心に分布し、豊川市の溜め池を分布東限としていたが、豊川市の生息地は 2000 年代に埋め立てられて消失した。また、オオクチバスの生息する溜め池では激減もしくは絶滅するため、オオクチバスの放流によって多くの生息地が失われたと考えられる。形態と mtDNA の比較から、侵入した近縁種（他地域産のトウヨシノボリ、シマヒレヨシノボリ、ビワヨシノボリ）と雑種化して絶滅したと考えられる地点が犬山市、名古屋市、豊田市に見られることから、アユやコイ、ヘラブナの放流に混じって侵入したヨシノボリ類との交雑も減少要因になっている。名古屋市内にも生息地があるために、都市化しても生き残ると誤解されている可能性がある。しかし、いずれの生息地も孤立しており、周辺は宅地開発が進み、オオクチバスや近畿地方から侵入したヨシノボリ類の生息地が周辺に広がるため、現在残された生息地は危機的状況にさらされている。

【保全上の留意点】

溜池の埋立てによる生息地全体の改変は避ける。その上で、捕食性外来魚（オオクチバス・ブルーギル）、交雑可能な近縁種（トウヨシノボリ等）の侵入を避けるため、そうした外来種の混入する可能性のあるアユ、コイ、フナなどの放流を防止する必要がある。

【特記事項】

2005 年に現在の新称が付けられた。東海地方の里山環境を特徴づける淡水魚である。

【引用文献】

鈴木寿之・坂本勝一，2005．岐阜県と愛知県で採集されたトウカイヨシノボリ（新称）．日本生物地理学会会報，60:13-20.
Tsunagawa, T., T. Suzuki and T. Arai, 2010. Otolith Sr: Ca ratios of freshwater goby *Rhinogobius* sp. TO indicating absence of sea migrating traits. *Ichthyological Research*, 57:319-322.

【関連文献】

向井貴彦・平嶋健太郎・古橋 芽・古田莉奈・淀 太我・中西尚文，2012．三重県鈴鹿市南部のため池群におけるヨシノボリ類の分布と種間交雑．日本生物地理学会会報，67:15-24.

鈴木寿之・向井貴彦，2010．シマヒレヨシノボリとトウカイヨシノボリ：池沼性ヨシノボリ類の特徴と生息状況．魚類学雑誌，57:176-179.

（執筆者 向井貴彦）



トウカイヨシノボリ

名古屋市、2012 年 11 月 15 日、古橋 芽 撮影

市内分布図



生息地保護のため
分布図は示さない

魚類 <ウナギ目 ウナギ科>

ニホンウナギ *Anguilla japonica* Temminck et Schlegel

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

市内の分布地点は少なくないが、個体数の減少が著しいと考えられる。降河回遊魚である本種の移動の妨げとなる河川横断工作物が多数の河川に構築され、幼魚に必要な下流域の砂地環境およびコンクリート護岸化による成魚の隠れ場が減少している。

【形態】

体長 1m。成魚の背中側は黒く、腹側は白や黄色。レプトケファルス幼生（海を浮遊移動しやすい扁平な葉状形）期を経て変態し、円筒形の稚魚シラスウナギ（無色透明、体長 5cm 程度）となる。産卵のために降河する成魚個体は、背側と鰭が黒化し、腹面は銀白色を呈する。県内には移入種であるヨーロッパウナギも生息するが、外見から両種を識別することは困難とされている。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系および天白川水系など。

【県内の分布】

県内全域。矢作川水系に多い。

【国内の分布】

北海道から琉球列島にいたる全国各地。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ベトナム、台湾、フィリピン。

【生息地の環境／生態的特性】

成魚は河川中・下流、河口のほか溜め池、海（内湾）にも生息する。降海した成魚はマリアナ諸島沖で産卵、2～3 日で孵化し、幼生は河口に到達後、遡河して小動物を捕食して成長し、5年から10数年ほどで成熟する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の河川における個体数密度は市外の河川の平均値のおよそ半分程度である。仔魚は海からなんとか遡上するものの、河川工事によって餌となる小魚やエビ類、隠れ場となる土砂や石の隙間などが減っている。幼魚は下流部の砂地で、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の影に潜むが、これらの環境が著しく損なわれている。

【保全上の留意点】

食物ピラミッドの頂点に立つ捕食者のニホンウナギが生息できる川を再生していくことができれば、他の多くの淡水生物にとっても居心地の良い川が復元されることにつながる。

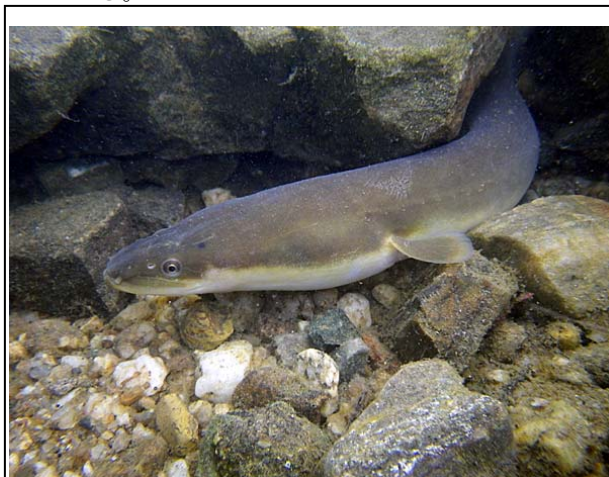
【特記事項】

幼魚は下流部の砂地に、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の陰に潜んでいる。

【関連文献】

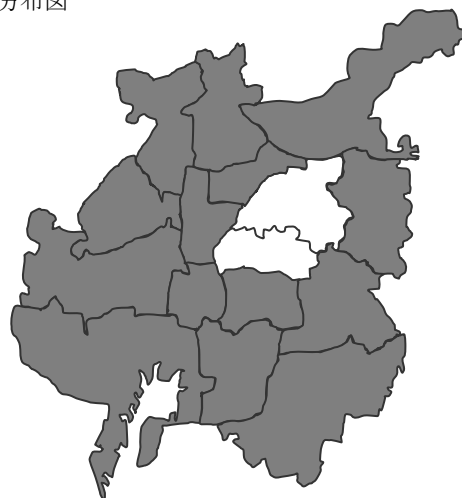
広正 義, 1975. 魚類. 庄内川の水生生物, pp.125-139. 建設省庄内川工事事務所, 愛知.
多部田修, 2002. ウナギ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚（第3版）, pp.47-49. 山と溪谷社, 東京.
荒尾一樹, 2008. 庄内川で採集された魚類. 豊橋市自然史博物館研報, (18):25-27.

（執筆者 谷口義則）



ニホンウナギ
西尾市矢作川水系、2012年6月28日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <コイ目 コイ科>

カワムツ *Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

県内全域でみれば普通種であるが、本来比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息する。かつては市内の主たる河川の上流部に豊富に生息していたと推察されるが、現在では確認される生息地点、生息数ともにきわめて限られている。

【形態】

体長 20cm。主鰭条数が臀鰭 10 条、側線鱗数 43～51 枚、側線上部鱗数 10～11 枚。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭・腹鰭の前縁も黄色～オレンジ色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現すが、近縁なヌマムツと異なり、鰓蓋には出現しない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川支流。

【県内の分布】

五条川、矢作川水系、豊川水系、他。

【国内の分布】

東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

河川上流から中流などに生息する。流れの緩やかな淵に多く生息している。オイカワよりも上流部に生息する。河床に大きい礫が多く、河畔林によるうっ閉度が高い場所を好む。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。繁殖期に雄間に順位関係が現れ、雌をめぐる競争がある (Katano, 1994)。産卵期は5月中旬～8月下旬頃で砂礫を好む。野生個体の体長頻度分布から寿命は3年程度であると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来、河川上流部で夏季の水温が比較的低く保たれ、水質の良い場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化が個体数減少の原因であると考えられる。河畔林から供給される餌となる陸生動物の減少も主たる要因である。産卵に必要な河床材料となる土砂の減少も拍車をかけている。

【保全上の留意点】

不用意な河川改修を慎むこと。河畔林の修復、復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物を確保すること。夏季の水温上昇を抑制することも重要である。

【特記事項】

本種は雑魚の代名詞であり、どこにでも見られた魚がいつの間にか激減していたことを示す好例であろう。

【引用文献】

Katano, O. 1994. Aggressive interactions between the dark chub, *Zacco temminckii*, and the pale chub, *Z. platypus*, in relation to their feeding behaviour. *Japanese Journal of Ichthyology*, 40:441-449.

【関連文献】

片野 修, 2002. カワムツ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 第三版, pp.239-243. 山と溪谷社, 東京.

細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, p.318. 東海大学出版会, 神奈川.

Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki, 2003. *Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae). *Ichthyological Research*, 50:1-8.

カテゴリー

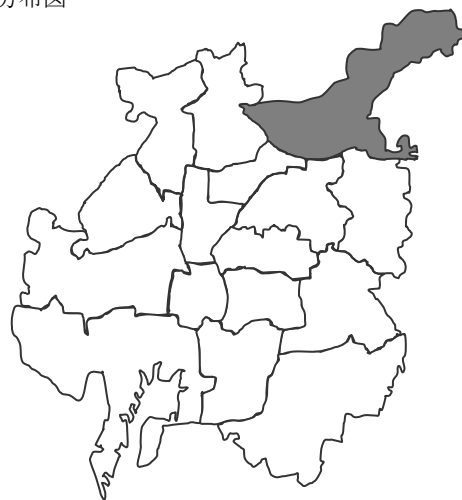
名古屋市2015	絶滅危惧 I B 類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



カワムツ

豊田市、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ニシシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type B

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

県内には矢作川水系をはじめ、本種の生息する河川は多い。しかし、市内では、河川の直線化、コンクリート護岸化等による緩流部の喪失、砂礫底の減少、移動を妨げる落差工の構築、産卵適地となる細流の消失により生息数が著しく減少している。

【形態】

体長 15cm。口ひげは 6 本。体側の斑紋は点列のものが多く、直線状の斑紋をもつ個体もある。雄の二次性徴として胸鰭基部の骨質板が細長くくちばし状になり、この点でスジシマドジョウ類との識別が可能である。尾鰭基部の斑紋なども区別点となる。また、雄の胸鰭は雌よりも長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。

【国内の分布】

東海、北陸、山陰地方。

【世界の分布】

日本固有種。



ニシシマドジョウ

三重県津市、2005 年 9 月 30 日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中・下流部の砂質底に普通に見ることができるが、水の澄んだ池等にも見られる。河川では、特に平瀬から淵の砂底を好む。砂によく潜り、砂中で越冬する。砂を吸い込み、含まれる底生藻類やその半分解物、小型の水生昆虫等をこし取るように食べる。仔稚魚は浅い砂泥底の場所にすみ、原生動物や藻類などを食べる。産卵期は 4～6 月で、砂礫底に生える水生植物の根や茎に 1 個ずつ産着される。卵の直径は約 2mm で、卵黄は白色、卵膜は薄く粘着性がある。受精後 2～3 日でふ化する。ふ化後 2 日で全長 5mm 程度となり、外鰓が長く伸びる。体長 6cm 以上で成熟する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川の直線化による緩流部の喪失による砂底あるいは砂礫底の減少、水質悪化、本流から産卵のために遡上できる細流の消失等により生息適地が奪われ減少している。

【保全上の留意点】

本種の生息に必要な砂礫の河床を保全する必要がある。河川工事においては、事後に砂礫が河床に滞留するよう緩流部を設けること、産卵時期の上流への移動を可能にするよう落差工等無くすることが重要である。

【特記事項】

2012 年にシマドジョウ類は細分され、中部地方の種にはニシシマドジョウの和名が提唱された。

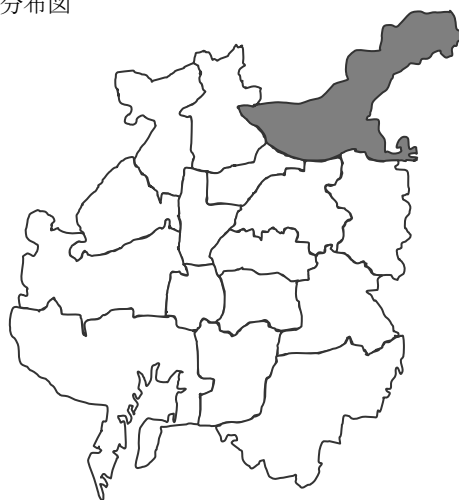
【関連文献】

君塚芳輝, 1989. シマドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 日本の淡水魚, pp.392-393, 山と溪谷社, 東京.

中島 淳・洲澤 謙・清水孝昭・斉藤憲治, 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 カジカ科>

カマキリ（アユカケ） *Cottus kazika* Jordan et Starks

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

海と川を行き来する降河回遊魚である本種は、県下全域でも減少しているが、市内の河川においては、特に横断構造物（落差工、堰堤等）の影響により、仮に魚道が付いていても遡上が困難であり、個体数が著しく減少していると推定される。

【形態】

体長20cm。灰褐色で黒い帯が4本、背鰭の後方と尾鰭近くにある。鰓蓋の上方に4本の棘があり、アユなどの魚を引っかけて捕らえるという伝説がアユカケの名の由来である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川、天白川水系。

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



カマキリ（アユカケ）

名古屋市区庄内川、2007年5月20日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

親魚は秋に川を降り、河口域や沿岸域で産卵する。ふ化した稚魚は海で成長し、初夏に河川を遡上する。稚魚は水生昆虫を主体に食べるが、成長すると魚食性が強まる。夜行性で、昼間は礫の間隙などに潜み、夜になると浅い瀬や淵に出てくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は河川の遡上能力が低いことから、落差工（堰）や階段式魚道の落差が非常に小さくてもこれを越えて上流に行くことが困難である。

【保全上の留意点】

市内の主要な河川には横断構造物（落差工）が多数あることから、生息域が縮小しているものと推定され、魚道の設置等の早急な整備が望まれる。

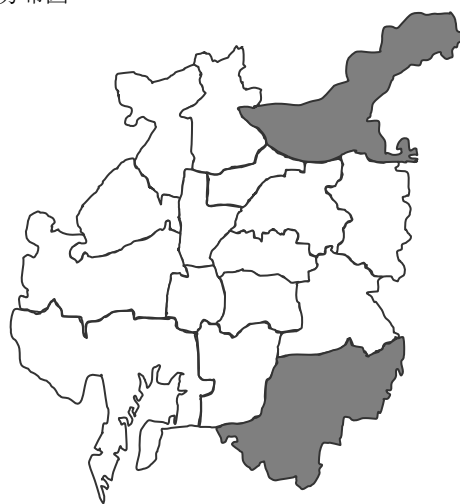
【特記事項】

福井県、熊本県では天然記念物に指定されている。

【関連文献】

後藤 晃, 1987. アユカケ. 川那部浩哉・水野信彦（編）, 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚, p.655. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <スズキ目 カジカ科>

ウツセミカジカ *Cottus reinii* Hilgendorf

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

生息条件が悪化しており、全国的にもきわめて危険な状態にあり、絶滅が危惧されている。市内では河川の直線化およびコンクリート護岸化に起因する土砂堆積量の激減および隠れ場所の消失等により、生息個体数が著しく減少していると推定される。

【形態】

体長 15cm。体色は淡褐色から暗褐色まで様々で、体側に暗色斑紋が4～5個ある。カマキリなど他のカジカ科魚類と比較して、鰓蓋にある棘が1本、胸鰭の軟条数が13～17軟条、眼から前鰓蓋骨棘へ向かって2本の暗色帯があること、腹鰭には顕著な斑紋がないことなどが特徴である。本種は近縁種のカジカと混同されることが多いが、カジカに比べて尾柄部分が細長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系、天白川水系など。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川で広範囲だが少数が確認されている。

【国内の分布】

北海道南部の日本海側、本州、四国および九州西部。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は肉食性で、水生昆虫や魚類を主な餌とする。一般的に卵径 1.8～2.4mm、一腹卵数は 600～1500 個程度とされる。指標種とされることも多く、カジカ類を復元する活動が行われている地域もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

ウツセミカジカは、河川工事に伴う人工構造物や堰堤の影響で上下移動に制約を受けている。本種は水質の悪化にも弱い。砂礫底を回復するための復元工事も必要である。今後、市内および県内における生息状況を明らかにする必要があるが、本種は形態による明確な分類が困難で、分子生物学的手法を取り入れる必要もある。

【保全上の留意点】

元々は市内の広範囲に分布していたものと推測される。下流域の堰堤による海からの遡上阻害を軽減し、生息水域の河床環境を復元する等を行う必要がある。産卵環境の復元も鍵となる。

【関連文献】

後藤 晃, 1987. ウツセミカジカ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.668. 山と溪谷社, 東京.
木村清志・岡田 誠・山下剛司他, 1999. 長良川河口域に出現する魚卵・仔稚魚. 三重大学生物資源学部紀要, 23:37-62.

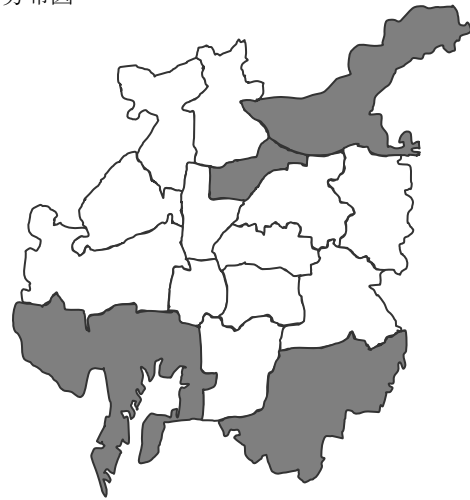
(執筆者 谷口義則)



ウツセミカジカ

岡崎市矢作川水系、2012年4月29日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <スズキ目 ハゼ科>

トビハゼ *Periophthalmus modestus* Cantor**【選定理由】**

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長約8cm。頭と体は円筒形で、後方はやや側扁する。眼は上方に突出し、両眼の間隔は狭い。第1背鰭は丸い。腹鰭は吸盤状で、後縁はくぼむ。胸鰭基部の筋肉は発達し、これを腕のように使って泥干潟上を這い回る。体側に小さな黒色点が散在する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口、藤前干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟。

【国内の分布】

東京湾から沖縄島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、台湾。



トビハゼ

三重県木曽岬町、2010年4月18日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の湾奥や河川の河口域の泥底が発達した干潟に生息する。日中の干出時に泥干潟上で活動し、索餌や求愛行動を行う。陸上では主に皮膚を用いて空気呼吸を行う。尾部を使って泥面や水面を飛び跳ねて移動する。潮が満ちてくると水から逃げるように岸際の石や杭、湿生植物などに這い上がって休息し、干潮を待つ。産卵期は6～8月。雄は泥中に産卵巣をつくり、求愛ジャンプで雌を呼ぶ。11～3月の休止期には終日、泥底に掘った巣穴で過ごし、餌も食べない(岩田, 2001)。名古屋市内でも泥質の河口干潟で採集されている(荒尾ほか, 2007)。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内における分布は局地的である。コンクリート護岸化に伴う岸辺の転石帯や植物帯の消失は生息場所・休息場所の減少の要因となっている。

【保全上の留意点】

名古屋港に流入する河川の河口域の泥干潟に広く分布していたと考えられるが、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事、河川改修による生息環境悪化に伴って生息地が減少した。生息場所となる泥干潟の保全、休息場所となる岸辺の転石帯やヨシなどの植物帯の保全が必要である。

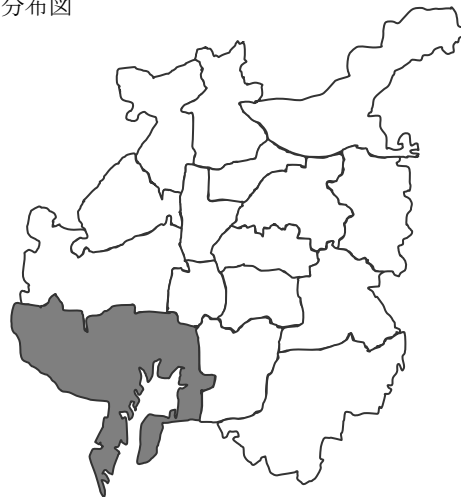
【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹, 2007. 愛知県の河口域魚類. 豊橋市自然史博研報, (17):29-40.
 岩田勝哉, 2001. トビハゼ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, pp.642-643. 山と溪谷社, 東京.

【関連文献】

鈴木寿之, 2010. トビハゼ. 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類, p.53. 環境省自然環境局野生生物課, 東京.

市内分布図



(執筆 荒尾一樹)

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

マサゴハゼ *Pseudogobius masago* (Tomiyama)

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3cm。体は細長く、体高は低い。吻端は丸く突出し、上唇をわずかに被う。尾鰭後縁は丸い。尾鰭基部にくさび形の黒色斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

日光川、庄内川の河口干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。

【国内の分布】

宮城県から沖縄島。

【世界の分布】

日本、鮮半島、台湾。



マサゴハゼ

三重県津市、2004年12月11日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する。名古屋市内でも泥質の河口干潟、それに連なる前浜干潟を流れる水路や浅い水たまりで採集されている（荒尾ほか，2007）。産卵期は九州西岸で5～6月（道津，2014）、三重県揖斐川で6～8月（伊藤・向井，2007）と考えられている。産卵はアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内で行うと示唆されている（伊藤・向井，2007）。7～9月には成魚が生息する河口汽水域で着底した稚魚がみられる（道津，2014）。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内における分布は局地的である。干潟の埋め立てや護岸工事、河川改修、土砂流入、水質汚染、底質汚濁などにより生息地が減少している。

【保全上の留意点】

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅させる原因となる。護岸工事や河川改修を行う際には、水質汚染、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、汽水域の保全、小型甲殻類の保全も重要である。

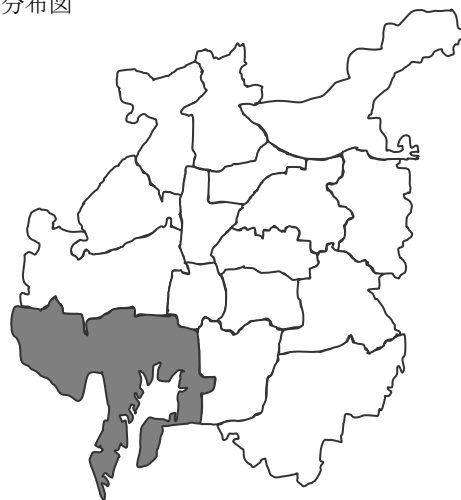
【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17):29-40.
道津喜衛，2014．マサゴハゼ．沖山宗雄編，日本産 稚魚図鑑 第二版，p.1301．東海大学出版会，神奈川．
伊藤 亮・向井貴彦，2007．三重県揖斐川下流域におけるマサゴハゼの生活史．南紀生物，49(2):103-107．

【関連文献】

鈴木寿之，2010．マサゴハゼ．環境省自然環境局野生生物課（編），改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類，p.48．環境省自然環境局野生生物課，東京．

市内分布図



（執筆 荒尾一樹）

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

エドハゼ *Gymnogobius macrognathos* Bleeker

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市内的における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響により生息地が大幅に減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 5cm。頭は縦扁、体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁を大きく越え、上顎より下顎がやや突出する。生時の頭と体は褐色で、腹部は白色。体側には下部を除き、数本の不明瞭な暗色斑がある。背鰭と尾鰭上部の鰭条に斑点がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

日光川河口、藤前干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。

【国内の分布】

宮城県から宮崎県にかけての太平洋、瀬戸内海、兵庫県から佐賀県にかけての日本海、有明海。

【世界の分布】

日本、ロシア沿岸州、渤海、黄海。



エドハゼ

愛知県西尾市、2012年1月20日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河口干潟や前浜干潟、塩水湿地に生息する。砂泥底に掘られたニホンスナモグリやアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内に生息する。名古屋市内でもアナジャコのものと思われる生息孔がみられる砂泥底で採集されている（荒尾ほか、2007）。産卵も小型甲殻類の生息孔内で行うと考えられている（鈴木、2003）。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内の分布は局地的である。生息地では釣り餌用にアナジャコなどの小型甲殻類が採集されている。ポンプを使った小型甲殻類の採集は生息孔をも破壊することになり、生息に与える悪影響は大きい。

【保全上の留意点】

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅させる原因となる。本種は還元層が形成されていない砂泥底に生息するため（鈴木、2003）、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、生息・産卵に必要な小型甲殻類の保全も重要である。

【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹、2007. 愛知県の河口域魚類。豊橋市自然史博研報、(17):29-40.

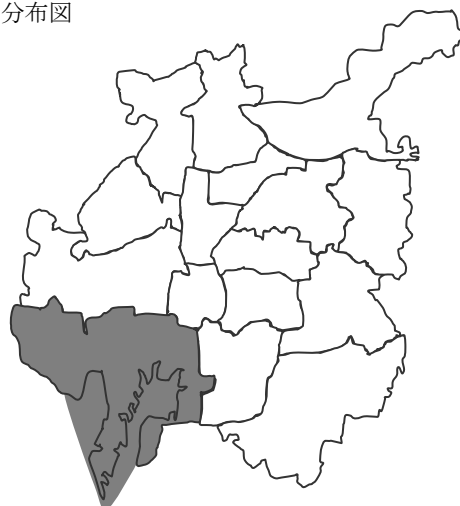
鈴木寿之、2003. 環境省自然保護局野生生物課（編）、エドハゼ。改訂・絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 4 汽水・淡水魚類、pp.136-137. 自然環境研究センター、東京。

【関連文献】

Stevenson, D. E., 2002. Systematics and distribution of fishes of the Asian goby genera *Chaenogobius* and *Gymnogobius* (Osteichthyes: Perciformes: Gobiidae), with the description of a new species. *Species Diversity*, 7:251-312.

鈴木寿之・増田 修、1993. 兵庫県で再発見されたキセルハゼと分布上興味あるハゼ科魚類4種。伊豆海洋公園通信、4(11):2-6.

市内分布図



(執筆者 荒尾一樹)

魚類 <コイ目 コイ科>

ゼゼラ *Biwia zezera* (Ishikawa)

カテゴリー

【選定理由】

生息に適する砂および泥底の淀み、産卵基質となる水生植物根、仔稚魚の生育に必要な河原の一時的水域等の環境が激減しており、個体群が減少傾向にある。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 10cm。細長く、前部がやや縦扁し後部が側扁する灰白色の体色の底生魚。体側には完全な側線を持ち、瞳と同大程度の円形の暗色斑が縦に並ぶ。口は小さく、吻端の下方に開き、吻は全体的に短く丸い。口ひげは無く、唇はなめらか。眼は高い位置にある。雄は紫黒色の婚姻色が全身に現れ、胸鰭前縁に追い星が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

木曽川、庄内川、矢作川水系など。

【国内の分布】

琵琶湖・淀川水系および濃尾平野の水系、山陽地方および九州北部に自然分布する。北陸、関東地方および新潟県にも移殖による分布が見られる。

【世界の分布】

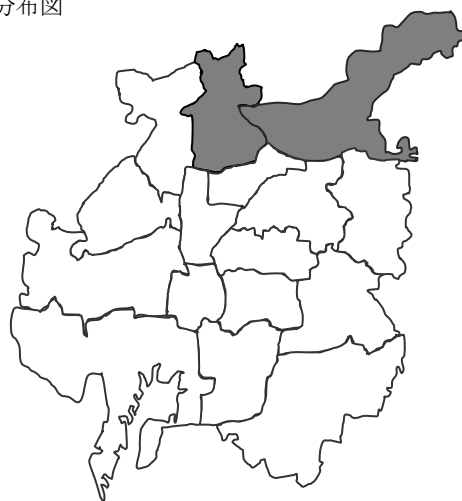
日本固有種。



ゼゼラ

西尾市矢作川水系、2009年4月12日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域、平野部の湖沼の流れの少ない淀みにある砂および泥底を主に生活の場とする。口が小さい本種は、底生藻類、小型の底生動物プランクトン、沈殿した有機物などを摂食する。4～7月に産卵し、川岸の水生植物根に粘着卵を固着させる。卵塊を雄親が保護する。雌雄ともに1歳で成熟し産卵後死ぬ。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川水系に生息するが、個体群サイズは小さく、環境悪化や破壊により減少傾向にあると見られる。

【特記事項】

琵琶湖水系からの個体の移入による遺伝的攪乱が生じている可能性がある。

【関連文献】

細谷和海, 2002. ゼゼラ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 (第3版), p.317. 山と溪谷社, 東京.
堀川まりな・向井貴彦, 2007. 濃尾平野におけるゼゼラのミトコンドリア DNA 二型の分布. 日本生物地理学会会報, 62:29-34.

(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor)**【選定理由】**

水路のコンクリート護岸化を含む農業形態の変化などにより、大部分の個体群で個体数が減少している。外来種のカラドジョウによる競争や置き換わりなどの影響も懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	情報不足

【形態】

体長 20cm。雌は雄よりも大きくなる。体形は細長い円筒形。口には上顎に 3 対、下顎に 2 対の計 5 対 10 本のひげがある。体色は灰褐色で、背面に不明瞭な斑紋を持つ。腹面は淡色で斑紋がない。尾鰭と背鰭に褐色の小斑が散在し、尾鰭基部上角に小さな黒色斑がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白川水系、庄内川水系など。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

北海道から沖縄県。

【世界の分布】

日本、ロシア、中国、朝鮮半島、台湾、ベトナム北部、ミャンマー。



ドジョウ (幼魚)

碧南市 (農業用水路)、2007 年 8 月 11 日 鳥居亮一 撮影

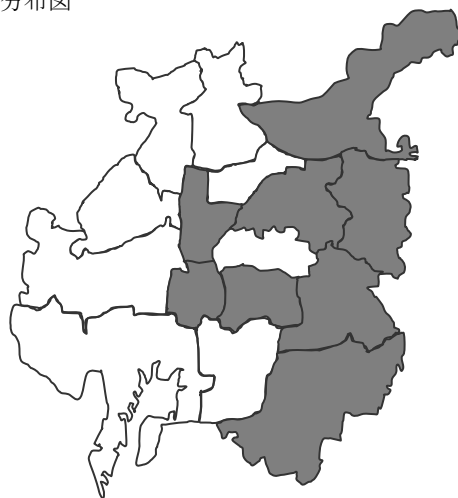
【生息地の環境／生態的特性】

平野部を中心に、河川緩流域やワンド、水路、浅い池沼の泥底または砂泥底、水田、湿地に生息する。冬季には水が無い湿った土中で越冬する個体もある。雑食性で、主にユスリカ幼虫などの水生昆虫を捕食する。産卵期は 4～8 月。夜間、雄が雌に巻き付き、産卵・放精し、卵は泥上にばらまかれる。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の平野部に広く生息していたが、都市化、河川改修、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化、乾田化や転作に伴う水路の干上がり、農薬散布により激減。落差工など構造物による繁殖に伴う移動の阻害も大きく影響していると考えられる。また、名古屋市内においては、外来種のカラドジョウの分布域が広がっており、競争や置き換わりなどの影響が懸念される。

市内分布図

**【保全上の留意点】**

水田地帯における水路の干上がり防止策ならびに河川と水路、水田の水域のつながりを復元させ、生息・繁殖に伴う移動を妨げない対策が必要である。また、釣具店やペットショップ等でカラドジョウや他地域産のドジョウ類が販売されており、それらの野外への放流防止が課題である。

【関連文献】

細谷和海, 2013. ドジョウ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.
 斉藤憲治, 1989. ドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.382-385. 山と溪谷社. 東京.
 清水孝昭, 2014. ドジョウ: 資源利用と攪乱. シリーズ・日本の希少魚類の現状と課題. 魚類学雑誌, 61(1):36-40.
 谷口義則, 2012. カラドジョウ. STOP! 移入種 守ろう! あいちの生態系～愛知県移入種対策ハンドブック～, p.81. 愛知県環境部自然環境課, 愛知.

(執筆者 鳥居亮一)

魚類 <サケ目 アユ科>

アユ *Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋港周辺および伊勢湾の海洋環境の悪化、遡上河川の水質汚濁、河川横断構造物による稚魚の遡上阻害等により、市内における本種の出現河川数は少なく、回復の糸口はつかめていない。

【形態】

体長30cm。ただし、10cmほどで成熟する個体群や地域もある。背側は青みがかったオリーブ色で腹側は銀白色で、背鰭が黒く、特に縄張りを持つ個体では胸鰭後方に大きな黄色の楕円形斑が一つ現れる。脂鰭の先端が鮮やかな橙色。唇は厚いが、柔らかい。秋に性成熟すると体全体に橙色と黒の婚姻色が現れる。雄では追星の出現が著しく、体の表面がざらざらになる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川の両水系をはじめとする主要河川。

【国内の分布】

北海道から鹿児島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、ベトナム北部。

【生息地の環境／生態的特性】

アユは川魚であるが、仔稚魚は海洋生活を送るため、両側回遊魚と呼ばれる。成熟したアユは秋に河川下流域に降り、砂や小礫の多い瀬で産卵する。ふ化した仔魚は卵黄嚢を吸収しながら数日のうちに海に流下し、越冬しながら動物プランクトンを利用して成長する。翌年4～5月頃に5～10cm程度になり、遡河する。この時期、小型水生昆虫や陸生昆虫も捕食するが、付着藻類（珪藻類）を主食とするようになる。藻類が多い場所を中心に縄張りを作り、他個体の侵入から激しく防衛する。産卵を終えたアユは1年間の短い一生を終える。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の個体数は、特に仔稚魚期を過ごす海洋環境（水温、溶存酸素濃度、餌となる動物プランクトン量など）の状態によって著しく左右されるようである。市内では、庄内川や山崎川に遡上するアユが話題になるが、遡上数は多くない。くわえて、取水堰、落差工などの河川横断構造物による仔魚の降河、稚魚の遡上の阻害も本種の個体数に影響を及ぼす。

【保全上の留意点】

伊勢湾、名古屋港周辺の海洋環境の改善が重要な鍵を握る。河川内のすべての構造物（堰堤等）には十分な流量をもつ魚道を設置する必要がある。

【特記事項】

都市河川にアユを復活させるためには、生活排水流入などによる水質の改善も重要課題である。

【関連文献】

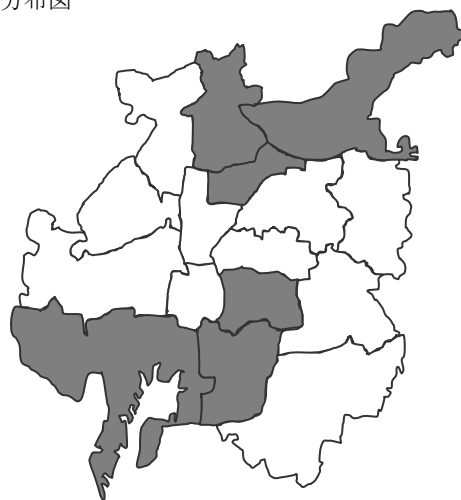
- 井口恵一郎, 1994. アユ—両側回遊から陸封へ. 後藤・塚本・前川編, 川と海を回遊する淡水魚—生活史と進化, pp.128-140. 東海大学出版会, 東京.
- 西田睦, 2002. アユ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 (第3版), pp.66-79. 山と溪谷社, 東京.



アユ

田原市、2009年10月25日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <サケ目 シラウオ科>

シラウオ *Salangichthys microdon* (Bleeker)**【選定理由】**

汽水域の水質悪化、河口干潟の埋め立てや浚渫といった開発により、個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 8cm。脂鱗があり、体は細長い。体の大部分に鱗が無い（雌：無鱗、雄：臀鰭基底のみに 16～18 枚の鱗がある）。吻が長く口蓋骨歯があり、下顎は上顎より前に出る。下顎歯数 16～25。胸鰭の条数は 13～19 で、胸鰭は大きく胸鰭基底上端は目に達する（細谷，2013）。生時の体色は透明で、小黑点が咽から排泄口にかけての腹面に 2 列ある。また、小黑点が、両顎の先端、鰓孔の後縁、尾鰭の鰭条、胸鰭第 1 鰭条に沿ってある。死後は白色になる（宮内・千田，2001）。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川。

【県内の分布】

境川、矢作川、豊川などの河口。油ヶ淵。

【国内の分布】

北海道から九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、サハリン。

【生息地の環境／生態的特性】

生まれて 1 年以内に（産卵して）死ぬ「年魚」である。主に汽水域に生息し、産卵期の 2～5 月に河川に遡上し、砂底で 1 回産卵する。遡上期には、雌雄の離合集散が非常に顕著で、10～15 日の短期間で行われている（堀田・田村，1954）。動物プランクトンやイサザアミなどを食べる（宮内・千田，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

産卵場所である河口域の砂底の減少や、赤潮や青潮などの水質悪化で、個体数が減少している。また、集中豪雨などの自然災害による影響も大きい。

【保全上の留意点】

産卵環境として砂底を好むことから、産卵期前後に河川干潟の埋め立てや浚渫などの攪乱を避けることや、砂底を泥底に変化させない工夫が必要である。また、生息地の水質を改善する必要がある。

【特記事項】

シラウオは名前のよく似ているシロウオと混同されるが、シロウオはスズキ目ハゼ科の魚類である。愛知県ではシロウオは確認されていない。

【関連文献】

宮内康子・千田哲資，2001. シラウオ. 川那部浩哉・水野信彦（編），山溪カラー名鑑改訂版 日本の淡水魚，pp.82-83. 山と溪谷社，東京。

堀田秀行・田村正，1954. シラウオ (*Salangichthys microdon* Bleeker) の生態について. 北海道大学水産学部研究彙報，5(1):41-46.

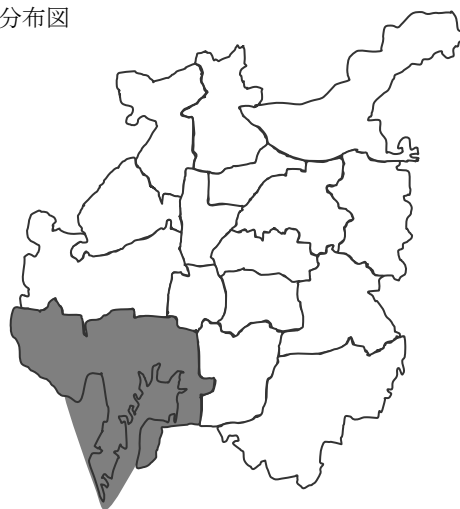
細谷和海，2013. シラウオ科. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，p.361. 東海大学出版会，神奈川。



シラウオ

矢作川，2014 年 2 月 4 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



（執筆者 浅香智也）

魚類 <ダツ目 メダカ科>

ミナミメダカ *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

元来全国に生息していた普通種である本種は、市内でも目に見えて減少してきた。水田周辺の自然破壊による生息数の減少に歯止めがかからない状態である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 40mm。頭部が縦に扁平し、体の後部は側扁している。側線は無く、全身がやや大きい円形の鱗に覆われる。背鰭は体の後方にある。頭部から背面中央に黒褐色の線がある。カダヤシに似るが、尾鰭が角ばっている点で見分けられる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内のほぼ全水系、溜め池など。

【県内の分布】

県内全域。

【国内の分布】

本州から琉球列島。北海道にも移植されている。

【世界の分布】

日本固有種。



ミナミメダカ

西尾市矢作川水系、2012年6月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

群れを作り、水田や溜め池周辺の細流に生息する。海水が多少入る場所でも生息（繁殖）できる。餌として、珪藻、動物プランクトン、微小な陸生動物（トビムシ）などを利用する。4～9月に繁殖する。巣は作らないが、産卵後繁殖ペアは縄張りを形成し、侵入個体に対して防衛する。雌は1腹20卵程度を産むが、体外に放出した受精卵を体に付けたまま泳ぎ、その後水草などに固着させる。産卵後は保護しない。自然条件下の寿命はおおよそ1～2年。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では中小の河川、細流、溜め池などに広範囲に生息する。川幅 2m 程度の小規模な水路に限って言えば、平成 20 年度に調査をした 120 か所中 21 か所で本種の生息を確認した。本来、水田と連絡のある用排水路に多く生息し、水田をも主要な生息場所とする。しかし、農薬の影響に加えて、市内の水田面積の減少（現在市全域の 2%程度に過ぎない）、圃場整備（排水路の底面・側面のコンクリート張りを含む）による水草等の産卵基質の消失が本種の減少に拍車をかけてきた。

【保全上の留意点】

水田周辺の水路内の水の枯渇が問題である。冬季湛水（冬水田んぼ）も有効だが、同時に水路と水田を簡易な魚道で連絡するなどの工夫を要する。底面がコンクリートでも泥が堆積している排水路は本種の生息場所として機能する。

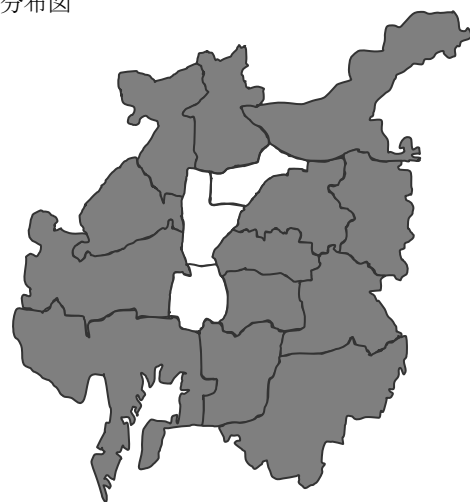
【関連文献】

宮崎智博・谷口義則、2009. 都市近郊農業排水路におけるカダヤシとメダカの個体群密度と微生物環境。野生生物保護, 12(1):13-20.

佐原雄二、2002. メダカ. 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚（第3版）, pp.428-431. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 カワアナゴ科>

カワアナゴ *Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel**【選定理由】**

市内河川における分布の詳細は十分に解明されていないものの、現時点では分布が局所的で、生息数も少ないと推定される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 25cm。アナゴとは名ばかりで、ハゼの仲間であり、体形も一般的なハゼ類に類似する。多くのハゼ類と異なり、腹鰭は2つあり吸盤状になっていない。個体間で体色変異が大きく、また同一個体でも状況によって変化することがある。通常の色は灰色、もしくは暗色で、背面が明色になる。明色時には頭部下面に小白色斑が見られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川。

【国内の分布】

栃木県以南の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、中国。



カワアナゴ

西尾市矢作川水系、2013年7月20日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

夏季に産卵するとされているが、繁殖生態を含む生活史全般について詳しくはわかっていない。仔魚は沿岸域で浮遊生活期を過ごし、体長20mm前後に成長して河川を遡上する。昼間は石やヨシの根塊等の間に潜み、夜間に甲殻類や小型の魚類を捕食する。下流域の砂礫底に生息し、昼間は流木や石の下、植物の陰などに隠れている。

【現在の生息状況／減少の要因】

天白川水系、庄内川水系、山崎川において生息が確認されている。

【保全上の留意点】

上記河川群における産卵場所や稚魚の育成場等を含む生活史全般について解明したうえで、個体群保全に必要な対策を講じていく必要がある。

【特記事項】

河川下流域に特徴的なヨシ帯や転石等、身を隠すことの出来る物理環境と豊富な餌生物を保全していくことも重要である。

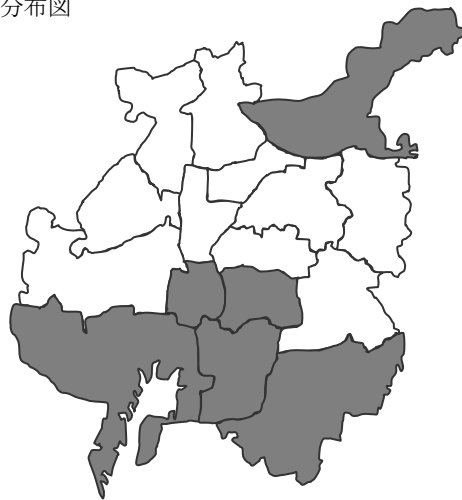
【関連文献】

安藤重敏, 1999. 鳥取県産カワアナゴの採集と飼育の記録. 郷土と博物館, 44(2):1-5.

岩田明久, 1987. カワアナゴ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.553. 山と溪谷社, 東京.

松尾敏生・高濱秀樹, 2001. 飼育条件下で観察されたカワアナゴの求愛産卵行動. 魚類学雑誌, 48(1):53-57.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 コイ科>

タモロコ *Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内ではいくつかの主要な水系の中・下流域ならびに水路において生息が見られるが、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化や河川改修、肉食性外来魚による捕食などにより、生息環境が悪化している。

【形態】

体長 7cm。体形はやや太い紡錘形。モツゴに似るが、吻は丸く、1 対の口ひげがある。体色は灰白色で、背面は緑がかかる。体側中央には 1 本の太い縦条が、側線より下の体側には 2〜3 本の暗色線が走る。移入個体として県内に分布する琵琶湖の固有種であるホンモロコに似るが、体形はずんぐりし、口ひげはより長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白川水系、庄内川水系など。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国。東北地方や九州の一部に移植。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に平野部の河川中・下流の緩流域や水路、池などに生息する。動物食にかたよった雑食性で、主にユスリカ幼虫、イトミミズ、水草などのほか、動物プランクトンを食べる。産卵期は 4〜7 月。卵は沈性粘着卵で、水草の根元等に産み付ける。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化による、隠れ場所ならびに産卵基質である水草等の激減。水質悪化も影響を与えている。また、本種の生息水域の多くにはオオクチバス、ブルーギルなどの肉食性外来魚の定着が見られ、卵から成魚まで各成長段階すべてにおける捕食圧が大きく影響し、生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

水草等を含む、身を隠すことのできる多様な物理的環境ならびに産卵に適した環境の保全、肉食性外来魚の駆除を進めることが重要である。

【特記事項】

県内には、タモロコに近縁で形態が酷似する琵琶湖の固有種であるホンモロコが分布しており、本種の生息地への侵入など、今後の動向に注意を要する。

【関連文献】

細谷和海, 1989. タモロコ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.298-299. 山と溪谷社, 東京.
細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.

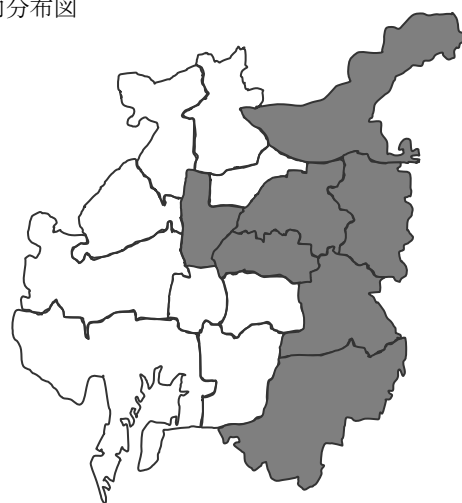
(執筆者 鳥居亮一)



タモロコ

西尾市矢作川水系、2012 年 4 月 27 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <ナマズ目 ナマズ科>

ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

水質汚濁に比較的強いものの、河川工事によるコンクリート護岸化、大粒径の河床材料の消失、繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数が減少しているものと推測される。

【形態】

体長 60cm。大きく扁平な頭部、幅広い口、長い口ひげを持つ。鱗が無く、体表は粘液で覆われる。目は小さく背側寄りで、腹側からは見えない。体色や斑紋は個体間で変異が大きい。下顎が上顎よりもわずかに長く突き出す。背鰭は小さいが、尻鰭の基底が長く、尾鰭と連続する。

【分布の概要】

【市内の分布】

ほぼ全域。

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系のほか、数多くの中小規模河川。

【国内の分布】

北海道から九州。

【世界の分布】

日本、中国大陸東部、朝鮮半島、台湾。



ナマズ

碧南市（農業用水路）、2007年8月11日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の緩流部、湖沼、水田の用排水路などに生息する。基本的に夜行性で、昼間は水底の岩や水草の物陰に潜む。食物連鎖の上位に位置する捕食者で、主に口ひげで索餌し、ドジョウ、カエルなどの小型魚類・両生類、甲殻類、水生昆虫などを捕食する。冬季は泥の中や岩の間に隠れ、ほとんど動かない。繁殖期は5～6月で、浅い水域に集まり、雄が雌の体に巻きつくという独特の繁殖行動の後、水草や水底に産卵する。雄は2年、雌は3年程度で性成熟に達する。

【現在の生息状況／減少の要因】

水質汚濁に比較的強いが、河川工事によるコンクリート護岸化により繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数は減少しているものと推測される。

【保全上の留意点】

河川工事による大粒径の河床材料を取り除くと本種の隠れ場所が消失する。環境配慮型の河川工事を行う場合は、人頭大の礫の投入（捨て石工法など）が奏功する場合がある。

【特記事項】

ナマズはブルーギル等の外来魚を捕食することが知られるため、本種を増やすことにより外来魚個体群をある程度抑制できる可能性もある。

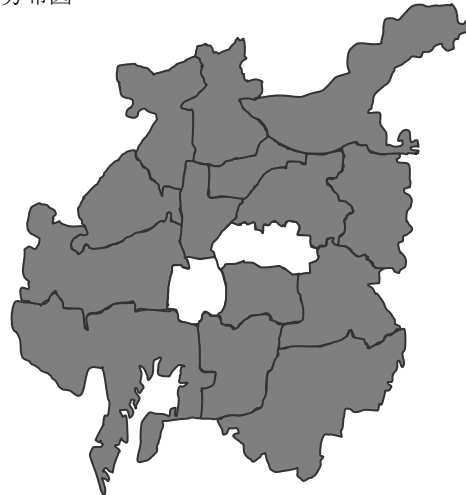
【関連文献】

片野 修・中村智幸・山本祥一郎・阿部信一郎、2004. 長野県浦野川における魚類の種組成と食物関係. 日本水産学会誌, 70(6):902-909.

片野 修・坂野博之・V. Boris, 2008. 設置型魚類自動捕獲器のブルーギルに対する捕獲効果. 日本水産学会誌, 74(1):14-19.

小早川みどり, 1989. ナマズ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚, pp.412-415. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

スミウキゴリ *Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl)

カテゴリー

【選定理由】

両側回遊魚である本種の移動を妨げる堰などの河川横断障害物の設置や、河川のコンクリート護岸化による生息場所・産卵場所の減少などにより個体数が減少していると推察される。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長15cm。体側には7～8本の横帯がある。側線上に黒色の縦列斑は無い。産卵期には雌雄ともに腹鰭と臀鰭が黒ずみ、雌の腹部は黄色みを増す（石野，2001）。同属のウキゴリ、シマウキゴリに似るが、第1背鰭後部に黒色斑がない、尾鰭基底の黒色斑はくさび形であることから区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

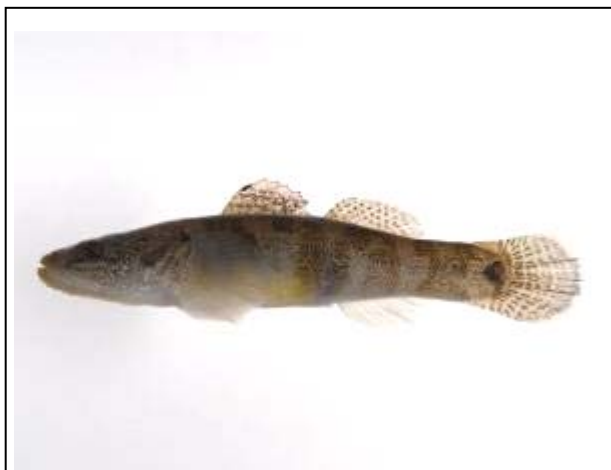
県内全域。

【国内の分布】

北海道から屋久島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島。



スミウキゴリ

名古屋市天白川水系、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域～河口域、汽水域の河岸の植物帯や礫底に生息する。礫の下面に卵を産み付ける。ウキゴリやシマウキゴリに比べて下流で産卵する（石野，2001）。孵化仔魚は河川を流下する。浮遊期仔稚魚は初春から初夏にかけて浅海域に出現し、その後河川を遡上する（原田，2014）。

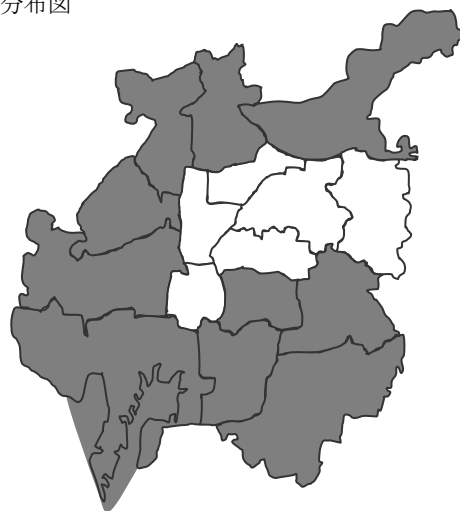
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では5月頃に河川を遡上する多数の個体が採集されている（荒尾，2008）。成魚はウキゴリの成魚とともに採集されることも多い。堰などの河川横断障害物は本種の移動を妨げ、河川のコンクリート護岸化は生息場所・産卵場所の減少の要因となっている。

【保全上の留意点】

堰に設置される魚道はアユなどの産業重要種を対象に設計されることが多く、ハゼ科魚類も遡上可能な魚道の設置が望まれる。また、河川のコンクリート護岸化が必要な場合は生息場所となる河岸植物帯や礫底の保全が必要である。

市内分布図



【引用文献】

- 荒尾一樹，2008. 庄内川で採集された魚類. 豊橋市自然史博研報，(18):25-27.
 原田滋雄，2014. スミウキゴリ. 沖山宗雄（編），日本産稚魚図鑑 第二版，p.1271. 東海大学出版会，神奈川.
 石野健吾，2001. スミウキゴリ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版，pp.622-623. 山と溪谷社，東京.

【関連文献】

- 明 仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏，2013. ハゼ亜目. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.1347-1608,2109-2211. 東海大学出版会，神奈川.
 荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007. 愛知県の河口域魚類. 豊橋市自然史博研報，(17):29-40.

（執筆者 荒尾一樹）

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

ウキゴリ *Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では出現頻度の低い魚種であり、減少傾向にあると考えられる。市内で見られる本種の多くは陸封された個体群であると考えられることから、よりいっそう河川環境への依存度が高いにもかかわらず、保全に有効な手立てが講じられていない。

【形態】

体長13cm。ハゼ類のなかでは大型の部類である。体は円筒形だが頭部は縦扁し、逆に尾部は側扁する。体色は半透明の黄褐色で、全身に黒褐色の斑点がある。第一背鰭の後半部と尾鰭の付け根に明瞭な黒斑点が一つずつあり、第二背鰭と尾鰭は白黒の縞模様となる。なお、近縁なスミウキゴリには第一背鰭に黒斑が無い点でウキゴリおよびシマウキゴリ両種と区別できる。また、シマウキゴリは第一背鰭後半部に黒斑があるが、ウキゴリほど大きくない。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

北海道、本州、九州の河川。

【世界の分布】

日本、サハリン、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

幼魚期を海で過ごす個体が多いが、河川に陸封化されるものもあり、中流、下流域、汽水域で見られる。水底から離れて中層を漂うように泳ぐこともあるため、ウキゴリが命名されている（ゴリはハゼ類の地方名）。口が大きく、食性は肉食性で、昆虫、甲殻類、小魚などの小動物を捕食する。産卵期は春で、雄が川底の石の下に産卵室を造り、雌は産卵室の天井に産卵する。雄は巣に残りふ化まで卵を保護する。仔魚は湖沼や海に降り、翌年成長した若魚が春から夏にかけて群れをなして川を遡上する。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来は、緩流部と転石などが多い河川に見られるが、市内ではコンクリート護岸された河川にも生息している。しかし、緑地の減少、夏季の水温上昇、土砂流入量の減少、緩流部と水草域の減少等により生息数が減少している。

【保全上の留意点】

繁殖環境の保全、すなわち適切な河床材料の供給が重要である。そのため、環境配慮型の河川工事を行う際には、土砂が堆積しやすいように緩流部を設けることが重要である。

【特記事項】

捕食者である本種にとって、餌となる小型の水生動物の生息条件を整えることも重要である。

【関連文献】

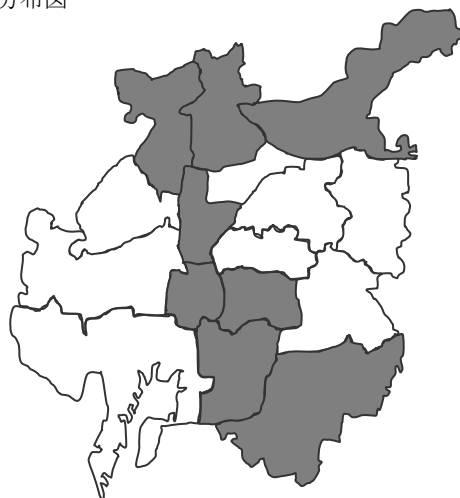
石野健吾, 1987. ウキゴリ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.618-620. 山と溪谷社, 東京.
鶴田哲也・小池亮人・武島弘彦他, 2010. 明・暗条件下におけるオイカワ, ウグイおよびスミウキゴリのアユ仔魚捕食. 魚類学雑誌, 57(1):51-55.



ウキゴリ

名古屋市天白川水系、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 コイ科>

コイ（在来型） *Cyprinus carpio* Linnaeus**【選定理由】**

主に養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争により減少したものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	ランク外

【形態】

体長 60～100cm。外見は、やや側扁した紡錘形で吻部がとがり、口ひげが 2 対ある。また、背鰭棘状軟条が 4 本、分枝軟条数が 19～21 本で背鰭基底が長い。コイ（在来型）は、コイ（飼育型）に比べると体高が低く、赤みが強い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

不明（情報不足）。

【県内の分布】

不明（情報不足）。

【国内の分布】

滋賀県琵琶湖北部地域のみ（松崎，2013）。他の地域は不明。

【世界の分布】

コイ（在来型）は日本固有（亜）種。コイ（飼育型）はユーラシア大陸に自然分布し、世界各地に産業目的で移殖されてきた。



コイ（在来型）

琵琶湖、2010 年 4 月 1 日、
神奈川県立生命の星・地球博物館

瀬能 宏 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

緩やかな流れの河川中・下流部や湖、池沼に生息する。雑食性で、貝類、水生昆虫、ミミズ類等の底生動物や、藻類、水草等の植物を摂餌する。産卵期は 4～7 月で水草などに卵を産みつける。

【現在の生息状況／減少の要因】

コイ（在来型）の詳しい生息状況は不明である。朝日遺跡（名古屋市西区～清須市）から、コイ（在来型）の咽頭歯と見られる骨が確認されている（山崎・宮腰，2005）。このため、かつては名古屋市周辺にもコイ（在来型）が生息していたと考えられる。しかし、現在の生息状況は不明である。コイ（在来型）が減少した原因は、養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争と推測される。また、コイ（在来型）が好むとされる大きく深い河川や池沼等の生息場の消失も減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

コイ（在来型）の生息状況を調べ、効果的な保全対策の基礎となる生態学的知見の蓄積が必要である。

【特記事項】

近年、我が国に生息するいわゆる「コイ」は、コイ（在来型）とコイ（飼育型）という遺伝的に異なる 2 系統に分けられた（松崎，2013）。コイ（在来型）は、かつてコイ（野生型）と呼ばれていたが、ユーラシア大陸原産のコイ（飼育型）と遺伝的に異なり、日本在来であることが判明したため、現在の名称となった。瀬能（2009）は *Cyprinus melanotus* の学名を提案しているが、未だ幅広く認知されていない。

【引用文献】

- 松崎慎一郎，2013. 池沼におけるコイの水質や生物群集に与える生態的影響. 日本魚類学会自然保護委員会（編），見えない脅威「国内外来魚」，pp.39-50. 東海大学出版会，神奈川。
 瀬能 宏，2009. 日本産コイ（コイ目コイ科）のルーツ解明と保全へのシナリオ. 科学研究費補助金成果報告書。
 山崎 健・宮腰健司，2005. 朝日遺跡出土の魚類遺存体. 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要，(6): 34-45. (財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター，愛知。

【関連文献】

- 細谷和海，2001. コイ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑改訂版 日本の淡水魚. pp.334-338. 山と溪谷社，東京。
 馬淵浩司・瀬能 宏・武島弘彦・中井克樹・西田 睦，2010. 琵琶湖におけるコイの日本在来 mtDNA ハプロタイプの分布. 魚類学雑誌，57: 1-12.

（執筆者 浅香智也）

魚類 <コイ目 コイ科>

ヌマムツ *Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

本種は比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息し、かつては市内の主たる河川の上流部に多く生息していた可能性があるが、現在分布状況が不明であり、情報が不足している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 20cm。主鰭条数は臀鰭 9 条、側線鱗数 53～60 枚、側線上部鱗数 12～13 枚(細谷, 2013)。側線は完全で口ひげはない。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄で著しい。産卵期に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭、腹鰭の前縁もオレンジ色～赤色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現し、近縁なカワムツと異なり、鰓蓋にも出現する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川支流、香流川。

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系、他。

【国内の分布】

東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の流れの緩やかな河川に生息している。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。産卵期は 5 月中旬～8 月下旬頃とされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

詳しい分布域や個体数は明らかになっていない。過度の河川改修によって減少したものと推察される。夏季の水温が比較的低く保たれている場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化も個体数減少の一因と考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な河川改修を慎み、河畔林の修復・復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物、夏季の好適な水温条件を整えることが重要である。

【関連文献】

細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, p.318. 東海大学出版会, 神奈川.

Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki, 2003. *Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae). *Ichthyological Research*, 50:1-8.

(執筆者 谷口義則)



魚類 <コイ目 コイ科>

ウシモツゴ *Pseudorasbora pugnax*

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

1950年代に名古屋市内で生息が確認されていた。2000年代に入り、かつての生息記録がある他の自治体で再発見されている例もあることから、今後、詳細な調査が必要と考えられる。愛知県指定希少野生動植物種である。

【形態】

体長50mm。大型個体は体長80mmを超える。雄は雌に比べ大きい。体は円筒形だが、近縁種のモツゴに比べると体高や尾柄が高く、ずんぐりした印象を受ける。側線鱗は不完全で1枚から5枚。縦帯はあるが、モツゴやシナイモツゴと比べ、不明瞭で、それを欠く個体も多い。繁殖期に雄は黒くなる。追星も出るが、モツゴに比べるとかなり小さい。

【分布の概要】

【市内の分布】

1959年に旧鳴海町（現緑区）で記録がある。そのほか名古屋市の市境である豊明市の勅使ヶ池、若王子池でも記録があり、かつては緑区の扇川や天白川周辺に生息していたものと思われる。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市（野生絶滅）、日進市、西尾市（野生絶滅）、小牧市（絶滅）、春日井市（絶滅）、犬山市（野生絶滅）。

【国内の分布】

三重県、岐阜県、愛知県。

【世界の分布】

日本固有亜種。

【生息地の環境／生態的特性】

現在確認されている他の自治体の生息地は、湧水を水源とする山間の溜め池に限定されている。カワバタモロコ、トウカイヨシノボリ、ミナミメダカ以外の魚類がほとんど生息しない場所で発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

溜め池の埋め立てや護岸の改修、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚の侵入により減少したと思われる。モツゴと共存していた例（岐阜県養老町）もあるが、小牧市や春日井市ではモツゴが侵入して2年ほどで本亜種が確認できなくなった。飼育愛好家の過剰採集も脅威である。

【保全上の留意点】

肉食性外来魚とモツゴの侵入に注意する。産卵基質として比較的大きな沈石を好むため、池内にこのような沈石が多くあることも重要条件である。岐阜県で復元放流が成功している。1963年にウシモツゴという和名が提案される以前は、シナイモツゴ、シナイモロコとされていた。

【関連文献】

鹿野雄一・北村淳一・河村功一. 2010. 絶滅危惧種ウシモツゴの繁殖生態と保全策、および近縁種モツゴとの比較. 魚類学雑誌, 57(1):43-50.

Kawase, S. and K. Hosoya, 2015. *Pseudorasbora pugnax*, a new species of minnow from Japan, and redescription of *P. pumila* (Teleostei: Cyprinidae). Ichthyol. Explor. Freshwaters, 25: 289-298.

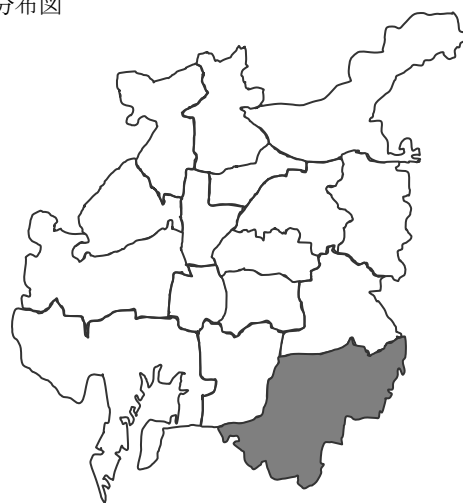
小林久雄・川口和美・広瀬利彦・大脇英男, 1959. 名古屋市外東部及び北部の淡水魚類. 名古屋・尾張北部の自然, pp.18-20.



ウシモツゴ

愛知県碧南市 2003年2月25日、碧南海浜水族館 撮影

市内分布図



(執筆者 大仲知樹)

魚類 <コイ目 コイ科>

カワヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

河川やそれに続く用水路のコンクリート護岸化による生息場所の減少や産卵母貝の減少などにより分布域が縮小し、個体数が減少していると推察されるが、市内での生息情報は少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 12cm。体は細長く、吻は短く丸い。体側全体に不規則な雲状斑がある。同属のビワヒガイに似るが、尾柄高は頭長の49%以上であることから区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系。

【県内の分布】

木曽川・庄内川・矢作川・豊川水系など。

【国内の分布】

濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山口県を除く山陽地方、九州北西部、長崎県壱岐島。

【世界の分布】

日本固有亜種。



カワヒガイ

三重県松阪市、2007年3月6日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中～下流の緩流域とそれに続く用水路に生息する。砂底～砂礫底の中～底層を遊泳する。5～7月に二枚貝の外套腔内に産卵する（細谷，2013）。雑食性で水生昆虫や小型巻貝、付着藻類などを食べる（細谷，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の生息情報は少ない。庄内川水系で採集されているが、個体数も少なく、市外の上流域から出水などにより流下した個体が偶発的に採集された可能性も考えられる。河川や用水路のコンクリート護岸化は生息場所を減少させ、産卵母貝の減少要因ともなっている。

【保全上の留意点】

河川や水路等における砂底～砂礫底の緩流域やワンドの保全が必要である。また、産卵母貝の保全も重要である。

【特記事項】

愛知県内ではビワヒガイの移入も確認されており、競争や交雑の恐れもある。

【引用文献】

細谷和海，2001. カワヒガイ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版，pp.310-311. 山と溪谷社，東京。

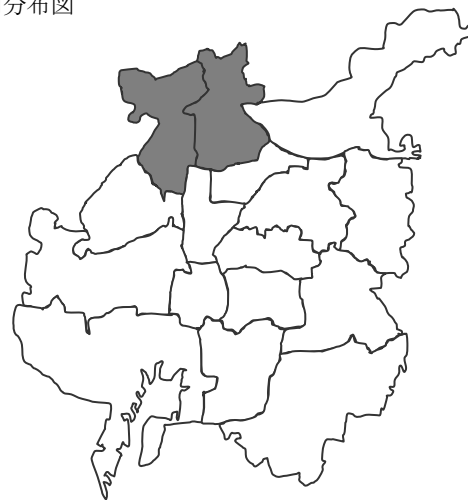
細谷和海，2013. コイ科. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.308-327,1813-1819. 東海大学出版会，秦野。

【関連文献】

駒田格知，2010. カワヒガイ. 愛知県環境調査センター編，p.213. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータあいち 2009 -動物編-，愛知県環境部自然環境課，愛知。

前畑政善，2010. カワヒガイ. 環境省自然環境局野生生物課（編），p.50. 改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類，環境省自然環境局野生生物課，東京。

市内分布図



（執筆者 荒尾一樹）

魚類 <サケ目 サケ科>

サツキマス・アマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつては庄内川水系に遡上したが、水質の悪化、ダムや堰堤等の横断構造物設置により生息域が分断され、降海、遡上が困難となり、安定的な個体群は存在しないものと推定される。

【形態】

体長 40cm (サツキマス)。成魚の体側は銀白色でパーマークは消失するが、朱点が残る。降海途中の若い個体(シラメ)は背鰭の先端が黒化し、体側が銀白色で鱗が剥がれやすい銀化状態となる。降海するとパーマーク(楕円形の斑紋)が消失して全体が銀白色となる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、ほか。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。ただし、水産放流個体を含む。

【国内の分布】

本州、四国、九州の太平洋岸および瀬戸内海に注ぐ河川。

【世界の分布】

日本、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

生まれてから1年目の春に降海するものが多い。11月～翌年3月にかけて降海するが、完全に降らず河川下流域に留まる個体もいる。降海後は伊勢湾および近海で甲殻類や小魚などを食べ、翌年の春に40cm程度に育ち河川を遡上し、その秋にアマゴと混じって10～11月に産卵して死ぬ。ふ化した仔魚は産卵床内で過ごし、3～5月に浮出する。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事による上流域におけるアマゴの生息環境が悪化している。さらに、流域に設けられた魚道の十分に機能しない各種のダムや堰堤によって、海とのつながりが断ち切られている。県内では、種苗放流による遺伝子汚染、ニジマス、ブラウントラウトなどの近縁な外来サケ科魚類の放流による競争・捕食の影響も懸念される。

【保全上の留意点】

降海する前の河川生活期は、年間を通じて水温が20℃以下の主に渓流域に生息するため、河川水温の上昇を防ぐ必要がある。水生や陸生の昆虫等を餌にするため、これらの餌となる付着藻類や河畔林が欠かせない。

【関連文献】

愛媛県, 2003. 愛媛県レッドデータブック, 447pp. 愛媛県自然保護課。
加藤文男, 1973. 伊勢湾へ降海するアマゴ (*Oncorhynchus rhodurus*) の生態について. 魚類学雑誌, 20(4):225-234.
中野 繁・谷口義則, 1996. 淡水性サケ科魚類における種間競争と異種共存機構. 魚類学雑誌, 43(2):59-78.

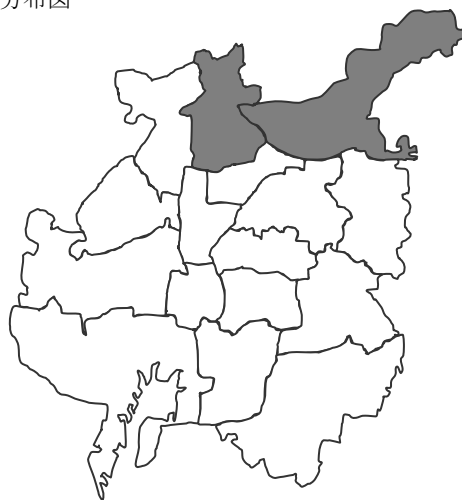
(執筆者 谷口義則)



アマゴ

設楽町豊川水系、2011年9月27日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



魚類 <ダツ目 サヨリ科>

クルマサヨリ *Hyporhamphus intermedius* (Cantor)

カテゴリー

【選定理由】

生息環境の悪化等により、近年は激減しているものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 15cm。体は細長い円筒形で近縁種のサヨリに似る。体色は、背部が銀青色で、体側、腹部は銀白色である。下顎は長く突出し、その先端の下面が黒色であることでサヨリ（下顎下面の色は朱紅色）と識別可能である。汽水性の魚で、サヨリほど海域と河川を広範囲に回遊することはない。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川。

【県内の分布】

木曽川の感潮域、油ヶ淵（碧南市）。

【国内の分布】

青森県から九州北部まで。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。



クルマサヨリ

愛知県清須市西枇杷島町、2014年8月15日、間野静雄・好峯侑・淀太我 採集・撮影（標本番号 FRLM 49147）

【生息地の環境／生態的特性】

河川の汽水域から下流域に生息し、表層付近で浮遊性の動植物を食べる。繁殖期は春～夏で、水草や抽水植物帯に纏絡糸のついた粘着性の卵を付着させる。ふ化後、動物プランクトンなどを摂食しながら急速に成長し、翌年の産卵期には成熟して繁殖に参加する。寿命は1年と考えられている。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生態から類推する限り、河口や汽水湖を中心に分布していたと考えられる。生息環境の水質悪化、河川水や流下する土砂の減少等による下流域の環境変化、埋め立てや護岸工事による抽水植物帯の消失、河口堰等による河川の分断は、成魚だけでなく卵や稚幼魚の生育場の喪失にもつながっている。

【保全上の留意点】

産卵場となる抽水植物帯の保全や創出、汽水湖など閉鎖的環境においては水質改善が必要である。また、河川改修や人工構造物の設置を検討する際には、本種の生活史や他の地域における減少事例を十分に調査した上で計画を立てることが重要である。遊泳性が強く飼育には広いスペースが必要であることから、生息域外保全は困難である。

【特記事項】

碧南海浜水族館には、1937年に油ヶ淵（碧南市）で採集された個体が当時の標本ラベルとともに保管されている（増田ほか、1996）。現時点では、県内における最も古い標本記録であると考えられる。

【引用文献】

増田元保・寺川 裕・島 達也、1996. 碧南市立西端小学校所蔵 油ヶ淵産魚介類標本. 碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館年報, 9: 25-32.

【関連文献】

藍澤正宏・土居内龍、2013. サヨリ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.651-654, 1927-1928. 東海大学出版会, 神奈川.

松井誠一、日本産サヨリ科魚類 2 種の生活史と増殖に関する研究 (1999～2001 年度). 科学研究費助成事業・研究実績報告書.

瀬能 宏、2001. クルメサヨリ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 第三版, p.424. 山と溪谷社, 東京.

（執筆者 地村佳純）

昆虫類

① 名古屋市における昆虫類の概況

名古屋市の市域は、木曾・長良・揖斐の木曾三川により形成された、濃尾平野の中央部やや東寄りに位置し、沖積平野と丘陵地からなるが、最高点は守山区東谷山（とうごくさん）の標高 198.3m に過ぎない。本来なら照葉樹林が発達する地域であるが、長い間の人の営為により生態系は攪乱され、極相に近い植生は東谷山の一部に残っているに過ぎない。市の東部には、1960 年頃まで田畑と二次林からなる里山的な景観が広がっていたが、市街化の波に押され、今日そのような景観は、守山区や名東区・天白区の一部に残るのみとなっている。市の西南部は海拔ゼロメートル地帯で、広く水田と畑が残っていたが、現在ではここも都市化が進んでいる。

生態系がどちらかといえば貧相に見える市域であるが、よく調べてみると、注目すべき昆虫が、狭い範囲に現在も幾つも命脈を保っていることが分かる。開発の波にさらされ、よりシビアな条件で生きているだけに、生息地の保全など、生態的価値の大きさによってはただちに対処すべき事例が出てくる。子どもたちにとって身近な学習のフィールドとして、保全したい自然を的確に把握しその重要性を指摘するためには、残された自然の継続的な調査とその公表が必要である。レッドリストにも県レベルよりも地域に密着した、より逼迫した意味合いが生じてくる。

現在、昆虫相の観点から名古屋市内で特に注目すべき自然として、守山区上志段味の東谷山一帯、千種区平和公園南部と東山公園・守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地公園、東部丘陵地などに散在する塚ノ杵池や大根池・猫ヶ洞池などのため池、熱田神宮などの寺社の鎮守の森、名古屋城周辺、そして庄内川の河川敷と河口のヨシ原などをあげることができる。この中で東谷山については、2010 年 4 月に、愛知県の自然環境保全地域に指定され、野生動植物保護地区を定めて湿地や照葉樹林などが保護されている。

名古屋市のレッドデータブックは 2004 年に初版が刊行され、2010 年に内容を補完した補遺版が刊行された。その際には、ため池と周辺環境の調査や、庄内川河口ヨシ原の調査結果が加味されたが、今回 2015 年版では、熱田神宮社叢の調査と、東谷山の自然環境保全地域の調査結果を加味することができた。熱田神宮調査におけるオオゴキブリの現認、東谷山におけるオオシモフリスズメやアヤコバネナミシヤクの名古屋市初記録などの成果があり、東谷山では愛知県未記録のコウチュウやガも発見されている。東谷山のシイ・カシ類の多い極相林は更に調査を継続する予定である。

名古屋市の地史については、2004 年版に概略が述べられているが、特に古東海湖に由来するシラタマホシクサやシデコブシなどの「東海丘陵要素」をはぐくむ、湧水に涵養された貧栄養の小湿地には、現在でも見るべき生物が多い。しかし市内に散在するこれらの小湿地は、植生の遷移が進み、ササの進入も著しく乾燥化の一途をたどっている。水脈の確保やササ刈り・上木切りなど、保全のための人為が与えられなければ、小湿地は早晚消滅の運命にあるであろう。

名古屋市では、このような湿地と周辺の環境に依存しているハッチョウトンボ、アカジマアシブトウンカ、ハウチワウンカ、ウラナミジャノメ、ウラギンスジヒョウモンなどの生存はま

さに風前の灯といえる。これら湿地に生息する種の多くが、環境省の絶滅危惧種に選定されている種である。

かつて市内に生息していたヒメヒカゲやコバネアオイトトンボは既に絶滅し、ヒメタイコウチも確実な生息地が減少している。また市内の湿地の昆虫の調査はすべての目（もく）について十分とはいえず、重要な種が人知れず消えていくこともありうる。そういった意味で、1996年6月に名古屋市のビオトープ公園第1号としてスタートした天白区島田湿地や、それに続く守山区八竜湿地のようにフェンスで囲い、時期を決めて一般公開するような徹底した保全は、重要な行政施策といえる。

湿地とその周辺には、ハンノキ林を伴うことが多い。ハンノキ林にも特有の昆虫が生息するが、特に2012年の環境省のレッドリスト改訂で、新たにガ類のオナガミズアオとウスミミモンキリガが準絶滅危惧に選定された。里山のハンノキ林のある環境が全国的に減少しているからであろう。両種とも狭食性で、名古屋市内でもハンノキ林のある環境に限って見られる。緑地のため池周辺に多いハンノキ林は、公園整備などで不注意に伐採しないように、特に注意が必要である。

ため池の昆虫については、2009年に名古屋城のお堀を含む、市内10ヶ所のため池について、名古屋市環境局と市民団体の協働で、名古屋昆虫同好会の支援を受け市民調査員を募り、年3回の調査が行われ、それぞれのため池の概況が明らかになった、ベニイトンボの分布拡大や、エサキアメンボの名古屋市初記録などの成果が得られたが、タガメや大型ゲンゴロウ類の絶滅、タイコウチなど大型の水生カメムシの減少などマイナスデータも得られている。

地域別にみると、守山区東谷山ではウラクロシジミ、クロヒカゲ、ウスグロクチバ、トウカイツマキリアツバなどが、現在市内でこの周辺だけに生息していて、コウチュウやカメムシにも他では見られない種がいる。近年山麓の湿地の細流で自然状態のゲンジボタルが確認された。ギフチョウやミヤマセセリは名古屋市では絶滅寸前であり、東谷山ではたとえ姿を見たとしても、瀬戸市側からの移動個体の可能性がある。ミヤマセセリは猪高緑地でもわずかに現認できる。

千種区平和公園南部と東山公園周辺は、市の中心部に近いが自然の残された緑地であり、2006年より「なごや環境大学」の事業の一環として始まった、名古屋の棲息生物調査実行委員会による児童や市民対象の夜間採集体験で、集光性昆虫のデータが得られ公表されている。ガ類では全国的な希少種マダラウスズミケンモンや湿地性で環境省の絶滅危惧に選定されているガマヨトウなどの重要な記録が出ている。守山区小幡緑地・名東区猪高緑地などの緑地も、それぞれ市民団体による保全・調査活動がなされ興味深い種の現況が得られる。アベマキやコナラ主体の雑木林にはコシロシタバが局所的に多く、近年フシキキシタバも見られる。名東区猪高緑地にある塚ノ杵池では、ハイイロボクトウやクロフキオオメイガなどの湿地性種が多い。

熱田神宮社叢には、オオゴキブリなど極相に近い古い森に生息する種が残っている。名古屋城周辺では堀の石塁にウマノスズクサが多く、市内での発生が不安定なジャコウアゲハの安定した供給地となっている。以前と変わらずエノキやサクラの古木にヤマトタマムシがかなり発生し、ヒラタクワガタやコカブトムシも比較的近年の記録がある。また堀の一部にヒメボタルが毎年発生をしているのは周知の通りである。

庄内川河口のヨシ原では、ガ類ではハイイロボクトウ、ヌマベウスキョトウなどの、環境省のレッドリストに選定されている種が生息する。河口付近には汽水域に産し、幼虫は水中生活

しフジマツモ科やコノハノリ科の藻を食べることが知られるエンスイミズメイガが多産する。

以上はこの地域の在来の昆虫相の中での注目種であるが、近年の温暖化現象による南方系の種の北上・東進や、海外から移入された帰化種の多発により、新たな競争が生じて今日的な昆虫相が形成されつつある。

名古屋市は、以前は年平均気温 14℃ ラインにあるとされ、1950 年代までは大体その位の平均気温であつたが、名古屋気象台測定の平成元年から平成 10 年までの 10 年間の年平均気温の平均値では、年 15.9℃ であり、平均気温が 1950 年代以前より 2℃ 近く上昇している。今世紀に入るより少し前から、南方系の昆虫の北上が目立ち始め、以前は関西以西に分布し名古屋市ではほとんど見られなかったツマグロヒョウモン、クロコノマチョウ、ナガサキアゲハ、ハマオモトヨトウ、ニジオビベニアツバ、タイワンクツワムシなどが市内で定着している。市街地でクマゼミが増加しニイニイゼミが減少していることも、表土の変化とともに温暖化が競合関係に影響している可能性がある。

帰化した外来種では、戦後早く帰化したアオマツムシなどはどこでも見られ、初秋には街路樹の樹上でリーリーと甲高い声で鳴いている。緑地の樹上でよく見かけるヨコズナサシガメも近年よく見かける。外来昆虫の中には天敵が少なく大発生して人間に様々な害を及ぼすものもある。

日本生態学会が外来の動植物の中から「日本の侵略的外来種ワースト 100」を定めているが、昆虫類は 22 種を占める。その中で名古屋市に発生が認められる主な種には次のようなものがある。

チャバネゴキブリ、オンシツコナジラミ、ヤノネカイガラムシ、マメハモグリバエ、イエシロアリ、イネミズゾウムシ、アルファルフアタコゾウムシ、ヒロヘリアオイラガ、アメリカシロヒトリ

これらの中には在来種と競合し影響をあたえるものもいるであろう。また、天敵の多寡は、昆虫の発生に直接的な影響をもっている。近年、名古屋市内のオオミノガのミノムシが少なくなっている。これは 1990 年代に中国より侵入した天敵オオミノガヤドリバエに寄生されたためである。

また近年、名古屋市東部に残る雑木林にコナラなどの成木のナラ枯れ現象が多発した結果、愛知県でほとんど採集例のない、ルイスホソカタムシやタイショウオオキノコなどが発生している。

チョウ目では、人為的な放蝶による発生と思われるものに、2003 年に守山区庄内川堤防で発見された、韓国産と思われるホソオチョウと、2010 年に名東区猪高緑地で発見された、中国産と思われるアカボシゴマダラがある。アカボシゴマダラは 2012 年には鶴舞公園でも発見されている。本来の生態系を破壊する心無い行為である。また、故意ではない移入と見られるものに、2012 年に名東区牧野ヶ池緑地で発見され、猪高緑地でも記録されたホシミスジと、2013 年に西区の新川堤防で発見されたムシヤクロツバメシジミがある。ホシミスジは、おそらく食樹のユキヤナギやコデマリ等に付いて日進市に 2010 年以前に移入された個体群が、隣接する名東区に広がったと考えられる。

このようにある地域の昆虫相は、恒久的なものではなく、様々な要因によりダイナミックに変化しているので、各分野での継続的な調査が必須である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

名古屋市で過去に記録された昆虫類は平成 26 年（2014 年）現在、3,708 種である。その中から今回の改訂で絶滅 19 種（+5）、絶滅危惧ⅠA類 16 種（-2）、絶滅危惧ⅠB類 26 種（+9）、絶滅危惧Ⅱ類 24 種（+4）、準絶滅危惧 52 種（+15）、情報不足 19 種（+3）を選定した。選定した種類数の合計は 156 種（+34）で、名古屋市産の昆虫の約 4.2%であった。種類数のあとの括弧内の数字は「レッドデータブックなごや 2010」からの増減である。またランクの上下したものもある。今回の名古屋市レッドリストの改訂では、全体で+11 とレッドリスト掲載種がかなり増加している。増加の理由で最大のものは、2012 年の環境省のレッドリスト第 4 次改訂で、昆虫は全国で 564 種から 868 種へと 1.5 倍強もレッドリスト掲載種が増加したことによる。今回の環境省の改訂の特徴として、従来の小笠原や南西諸島のような島嶼や高山帯、洞窟のような特殊な環境にすむ昆虫に加えて、身近な里山やため池などに生息する種に焦点が当てられ、多くの種が追加された。それらの大部分は、名古屋市においても同様に減少傾向にあるので、基本的に環境省のリストアップした種で過去にあげられていない種は、名古屋市のリストに新たに選定した。これによって全国的な比較がより容易となる。

レッドリスト掲載種の選定には統一した観点が必要である。今回の選定に当たっては、専門研究者や同好者の意見をまとめ、名古屋市の現在の自然の実態を正確に表すように努めた。また、名古屋市のレッドリスト改訂のために 5 名の専門家調査員により 2 年間、焦点を絞った多くの現地調査が行われ、絶滅種は確実に絶滅と判定され、また旧版で絶滅危惧とされたものの幾つかは、新たに産地が発見されたり、採集条件によっては少なくないなどの新知見が出たりして、ランクを下げた。

名古屋市には、市内で最初に発見され、名古屋市が模式産地となり、市の標本が完模式標本（ホロタイプ）となっている昆虫が次の 9 種ある。

キイロヤマトンボ、ナゴヤサナエ、アカジマアシブトウンカ、ヒメシジミガムシ、シワムネマルドロムシ、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ヒメカバナミシャク

このうち、オオサワタマキノコ、ヒメアサギナガタマムシ、ヒメカバナミシャク以外の種は、幾つかの県でレッドリストに挙げられていて、水域の環境をよく表す種で、市内でも減少している種なので名古屋市のレッドリストにあげている。

研究が不十分な目（もく）や調査が不十分な目は、今回は除外した。またクツワムシ、タイコウチ、オオクワガタ、ガムシのような一般に良く知られた種や身近に生息している種、市民が関心を持っている種で、減少が明らかな種はなるべくとりあげた。

過去に記録があっても、実際に市域に発生したかどうか疑わしい種は除外した。例えば戦前にオオムラサキの記録があるが、市外からの飛来種の可能性があり、掲載しなかった。

名古屋市の絶滅危惧種を概観すると、多くがため池や湿地などの水域に関係するものであることが分かる。また草地環境に生息するものも比較的多く、堤防や原野などの草地環境の消滅がシルビアシジミを絶滅させ、草原性のチョウ目やバタ目・コウチュウ目を減少させている。1960 年代に市東部で大発生したドクガ駆除の為に東部丘陵に農薬の空中散布がなされたが、その後のマツ枯れ対策の農薬散布とともにやむを得ない措置とはいえ、大きな影響を受けた昆虫は多いであろう。市内での保全への対策や留意点は、焦点が定まりつつあるように思われる。

（執筆者 田中多喜彦）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各クモ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁編，1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅱ）」（環境庁（編），1995）に準拠した。

公表されてから年数の経過もあり、その後の新しい取り扱いがある場合にはそれに準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 －日本の絶滅のおそれのある野生生物－ 5 昆虫類」（環境省，2015）の全国でのカテゴリーも併記した。

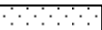
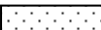
【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。また、トンボ目に関しては、1999 年以前の記録のある区域を  、2000 年以降も記録のある区域を  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については、【過去の生息状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生息状況、絶滅の主な要因について文献に基づき記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

昆虫類 <トンボ目 アオイトトンボ科>

コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys

カテゴリー

【選定理由】

もともと産地は局地的で個体数も多くなかった。愛知県下では1980年代から記録が絶えている。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫は体長40mm内外。金属緑色の同属4種の中では最も小型。本属はイトトンボ類の中では大型で体も太く頑丈である。本種は同属他種との区別がやや困難であるが、尾部下付属器で識別するのが一番良い。

幼虫の尾鰭の先端は丸みがあり、不鮮明な斑紋を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、天白区で局地的に記録されている。

【県内の分布】

平地、丘陵に広く分布したが局地的である。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア沿海州。

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵地の抽水植物に富む水質の良い古い池沼に生息する。生息場所が局限される理由として、同属他種に比べ産卵管が脆弱なため産卵可能な抽水植物に限られることによるとする見方もある。成虫の出現期は6～11月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

愛知県下では1980年代以降確実な記録はない。市内ではより早期に姿を消している。全国的にも減少が著しい。

もともと僅かしかない生息可能な池沼の潰廃や改修等による環境変化、池沼周辺の環境悪化が減少要因である。

【保全上の留意点】

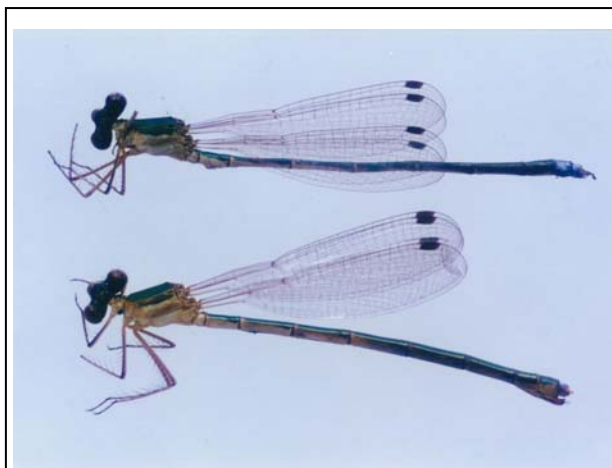
生息地の発見は不能と断じてよい。一般論としては、本種の限られた生息可能な池沼の現状保全が必要である。

【特記事項】

未熟の同属他種を本種と誤認する例、写真のみの提示による不確実な報告例を見るので注意を要する。

【関連文献】

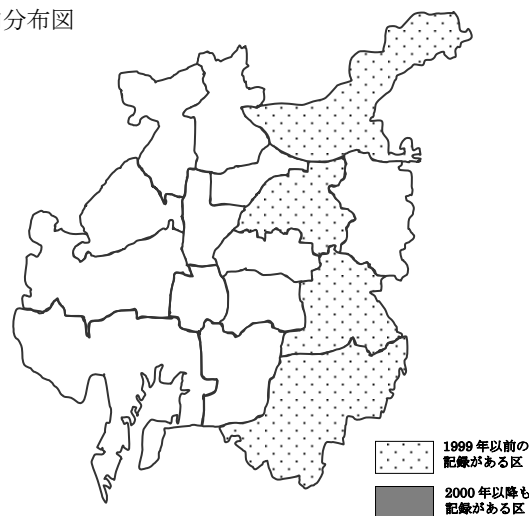
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



コバネアオイトトンボ 上雄 下雌

千種区東山公園付近、1951年10月6日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 カワトンボ科>

アオハダトンボ *Calopteryx japonica* Selys**【選定理由】**

1960年代以降市内では確実な生息の記録がない。生息可能な河川環境がなく絶滅したと見られる。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長 57mm 内外。雄の体色は金属緑色。翅は雄では青藍色に輝き美しい。雌ではやや透き通り白色の偽縁紋を有する。

幼虫は 3 本の尾鰓が長く、普通種ハグロトンボの幼虫に酷似する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、北区、昭和区、守山区。

【県内の分布】

主として西三河以東の丘陵、低山地に分布する。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、ロシアシベリア。



アオハダトンボ 雌
守山区竜泉寺、1951年5月26日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から低山地にかけての流水面にエビモなどの水生植物の葉が浮かび岸に抽水植物が生育する清澄な中小河川や時に矢作川のような大河の緩流部に生息する。

局所的に産するが、産地では群をなして生殖活動を行う。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内でもかつては清流であった山崎川や千種区内の水路、北区の庄内川畔などに生息していた。現在では市内で本種が生息可能な流水域は皆無である。

市街地やその近傍における清澄であった流水の顕著な水質悪化と、河川の人工排水路化により生息困難となり絶滅した。

【保全上の留意点】

市内では絶滅しているが、一般的には清澄な水質と植生豊かな流路の保全が必要である。

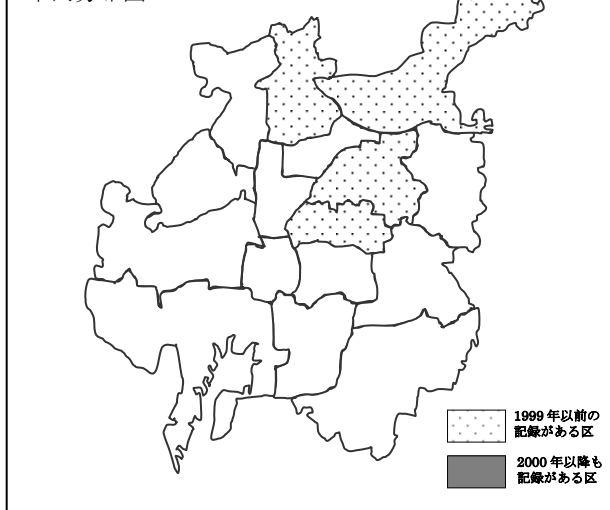
【特記事項】

多産する近似種ハグロトンボとは、雄の翅が青藍色に輝くこと、雌では目立つ白色の偽縁紋を有することで容易に区別できる。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei* Asahina

カテゴリー

【選定理由】

極めて特殊な環境にしか生息しないため産地は局限される。
市内生息地は消滅し絶滅。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫の体長 28mm 内外。雄の胸部は黒色の地に黄緑斑紋を有する。若い雌の胸部は橙色で、成熟すると汚褐色になる。雄胸部前面の4個の黄緑色の円紋は目立ち本種の特徴である。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区と南区の近接した場所で記録された。

【県内の分布】

愛西市（旧立田村）に分布し、刈谷市で近年記録された。飛鳥村では消滅した。

【国内の分布】

本州の東北地方南部以南、九州北東部に極めて局地的に分布する。

【世界の分布】

台湾、中国。



ヒヌマイトトンボ 雄

愛知県愛西市葛木町（旧立田村）、1985年7月21日、

高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流の汽水域のヨシ原の中の湿地状態に限って生息する。成虫はヨシ群落内に潜み、余り外部に出ず体躯も小型細身で見付けにくい。年1化で成虫の出現期は6～8月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内唯一の堀川下流左岸の狭隘な産地は埋立てにより消滅し、本種は絶滅した。刈谷市の新産地は環境の変化により生息が確認できなくなっている。

汽水域で伏流水などのきれいな水で涵養された湿地という極めて特異な環境は、河川堤防の改修や堰の造成を始めとする環境変化で容易に失われ本種は生息できなくなる。

【保全上の留意点】

本市では絶滅したが、一般的には河川の汽水域のヨシ原中の湿地の保全が必要である。

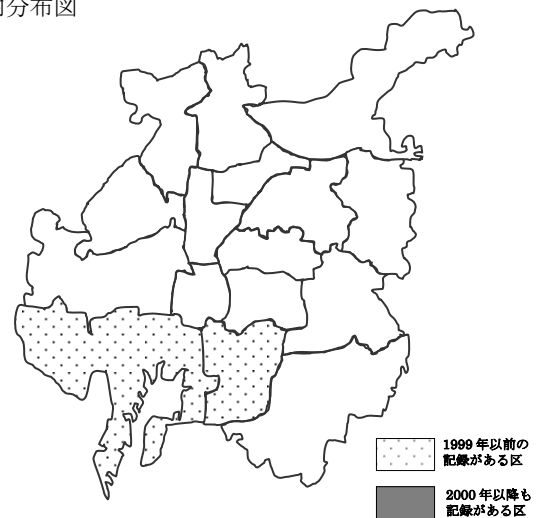
【特記事項】

刈谷市の新産地は 2008 年に発見された。河川汽水域の丹念な調査により県内でも他の産地が見つかる可能性はないとは言えない。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
清水典之・鵜殿清文・鵜殿 茂, 1972. 名古屋市南区のトンボ 5 種の新産地と種類追加. 佳香蝶, 24(93):73.
鵜殿清文, 2009. 愛知県でヒヌマイトトンボの新産地を発見. 佳香蝶, 61(237):7.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤマトンボ科>

キイロヤマトンボ *Macromia daimoji* Okumura**【選定理由】**

かつては市域の庄内川水系に生息していたが、河川の汚濁と水辺環境の悪化により姿を消してから久しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は78mm内外。大型種。体は細身の黒色で鮮やかな黄斑を有する。普通種のコヤマトンボに似るが、腹部第3節の黄斑が背側と腹側に分断されることにより区別される。

幼虫は大型扁平で肢が長い。その先端の爪が明らかに長いことでコヤマトンボ幼虫と区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

主に三河の丘陵地、低山地に局所的に分布する。

【国内の分布】

茨城県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシア、東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵、低山地の清冽な中河川の砂泥底に生息する。矢作川のような大河からも羽化する。若い個体は発生河川近くの開けた場所の中空を飛翔する。産地は局所的である。成虫の出現期は6～9月上旬である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内では砂泥底の清流という河川環境はなくなり、絶滅と考えられる。近隣からの飛来も殆ど期待できない。中河川の水質悪化と人工化が著しい尾張平野では生息は望み得ないが、三河では矢作川水系、豊川水系の流域から何ヶ所か生息地が知られている。

砂泥底の浅い緩やかな清流という幼虫のやや特殊な生息環境の衰失が絶滅の要因である。

【保全上の留意点】

市内では絶滅と見られるが、一般的には中河川の中、下流域の砂泥底の清流という環境の維持が必要である。

【特記事項】

本種は故松井一郎氏により現守山区で採集された個体により1949年新種記載された。

【関連文献】

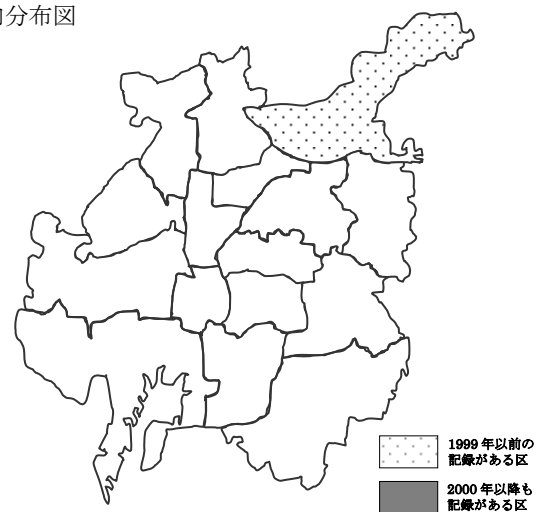
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



キイロヤマトンボ 雌

愛知県豊田市香嵐溪、1986年6月14日、鶴殿清文 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

マダラナニワトンボ *Sympetrum maculatum* Oguma

カテゴリー

【選定理由】

もともと局地的に分布する本種は、近年全国的に急減してきた。市内では絶滅した。近隣からの供給も期待できない。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫は体長33mm内外の小型種。アカトンボでありながら体は赤くならず黒化して、雄は黄から暗緑斑、雌は黄斑を有し翅の基部が橙黄色を呈する。

幼虫は小型で腹部側棘が長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、天白区。

【県内の分布】

尾張東部丘陵を主とし、三河の刈谷市、作手村でも記録されている。

【国内の分布】

東北の日本海側秋田県以西、中部・関西を中心に広島県まで記録されている。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵のアカマツを主とする二次林内、林縁に所在する池沼を主な生息場所とする。遠浅で岸には或る程度の空間があり、日当たりよく水生植物が繁茂し、汀線には丈の低い湿生植物が生育し、湿地状をなす条件の池沼を好む。中部、関西では池に、東北では湿地に生息する。

産卵は浅い水面又は岸の植生上か裸地に連結飛翔しながら卵を落下させる。晩秋全く干上がった池底へも産卵する。或る程度の移動分散力が認められる。成虫出現期は7～11月である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内では千種区赤坂町のような街に近い所でも生息していたが、1970年代前半頃までに主として市街化により姿を消した。隣接する長久手市丘陵の安定した産地でも1990年代に見られなくなった。近年県内での産地は犬山市、豊田市西端丘陵の2ヶ所しか知られていない。全国的に衰退が著しく、近年生息するとされるのは東北から関西までの8県20ヶ所足らずに過ぎない。

生育に適する池沼の消滅、植生遷移などの生息環境変化などが減少要因である。

【保全上の留意点】

本市では絶滅しているし、保全対象となる良好な生息適地も見当たらない。一般的には本種が残存する生息地の現状維持が必要である。草刈りによる湿地草本の高茎化防止は有効とされている。

【特記事項】

本種は既に100年以上前、尾張藩士吉田平九郎（雀巢庵、1895年没）により現千種区で発見されている。

【関連文献】

安藤 尚, 2009. アカトンボ愛知と岐阜の記録. pp.96-99. 自刊.

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

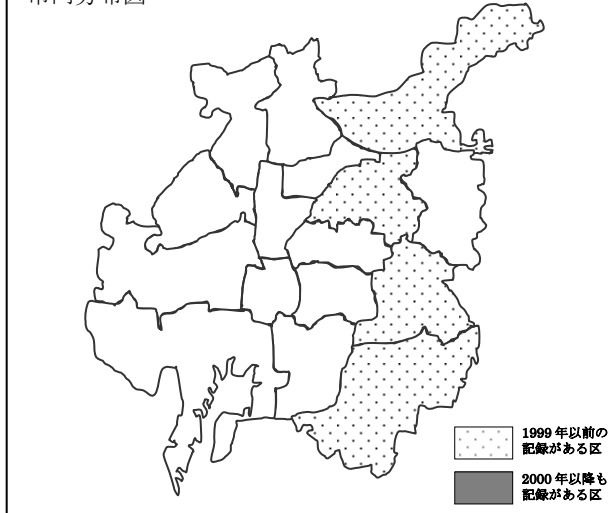
二橋 亮, 2013. マダラナニワトンボ部会 2012年度活動報告. *Pterobosca*, (18B):38.



マダラナニワトンボ 雄

守山区竜泉寺、1958年8月10日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

ベッコウトンボ *Libellula angelina* Selys

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

市内での最終記録は1991年、愛知県のそれは2004年で以来長期にわたり発見されず、近県からの飛来定着の可能性も先ずない。

【形態】

成虫の体長は42mm内外。未熟雄と雌は黄褐色であるが、成熟雄は濃黒褐色になる。ずんぐりした体躯。前後翅の基部、結節部、縁紋付近に黒褐色斑と前縁に沿う淡橙黄色条を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、西区、中川区、港区、名東区、天白区。

【県内の分布】

尾張、三河の平野部から丘陵にかけて局地的であるが広く分布した。

【国内の分布】

静岡県、山口県、福岡県、大分県、鹿児島県。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



ベッコウトンボ 雌
名東区猪高町上社猪高緑地、1987年5月21日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

海岸近くのヨシ原を含む低地から丘陵地に所在する池沼に生息する。共通する環境は、透視度50cm以上の比較的良好な水質と泥底であること、水深の浅い部分がある程度の面積を有し、そこには生長過程の丈の低い疎なヨシ、ヒメガマ、マコモ等の抽水植物群落が存在すること、池の周りに草地を伴うことなどである。

成虫の出現期は4月下旬から5月一杯の短期間。移動分散力は標準的には300m～2km、長い場合は8～10km程度と推定される。マーキングにより確認された最長距離は17kmである。一時的な定着はこのような移動分散に起因するとみられる。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

名古屋における最終飛来と推定されるのは千種区茶屋ヶ坂公園の1991年、一時的定着地からの最後の発生は名東区猪高緑地の1988年である。愛知県では知多半島常滑市での2004年の生息が最後である。1980年代末の本市や日進市における一時的定着の飛来源と推定された同半島方面の多産地での発生もなくなり、本市への供給も全く期待できなくなった。全国的にみても、本州2県、九州3県内で局地的に残存するのみである。

もともと数少ない生息適地たる池沼の消滅が主因であろうが、全国的に絶滅がほぼ同時進行した原因は定かではない。

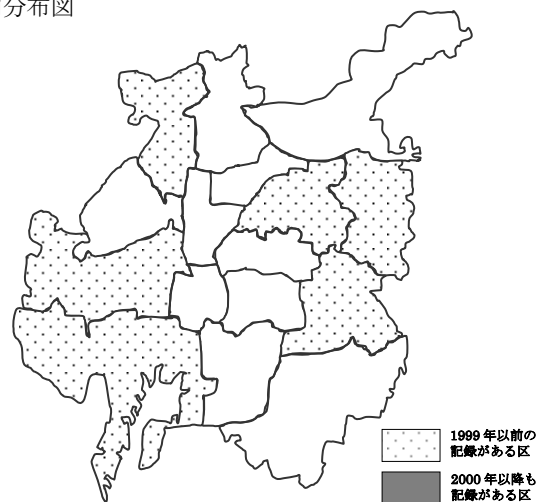
【保全上の留意点】

市では絶滅しているが、一般的には生息に適する限られた条件の池沼の法的強制力も伴う保全が望まれる。また、アメリカザリガニの幼虫捕食圧も看過し得ない原因と見られている。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1997. ため池の衰退を反映するベッコウトンボの滅亡. ため池の自然, (26):1-6.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <カメムシ目 コオイムシ科>

タガメ *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy)

カテゴリー

【選定理由】

各地で普通に見られたが、水田における農薬使用で個体数が激減した。さらに、ため池などの生息水域が埋め立てられ、生息地そのものが消滅し、都市化が進む平野部から姿を消した。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 48～65mm と本州産水生半翅類では最大の種である。体色は、灰褐色～褐色をしており、前脚は強大な捕獲脚となっている。

【分布の概要】

【市内の分布】

かつてはどこにでも見られた普通種であったため、正式な記録が残されていない。

【県内の分布】

新城市、豊川市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、尾張旭市、春日井市、犬山市など。

【国内の分布】

北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州、サハリン）、中国、朝鮮半島、台湾。



タガメ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主として抽水植物の豊富なため池などに生息し、水田地帯の水路や休耕田で泥が堆積した水たまりなどでも見られる。

雌は水面上の植物体などに産卵し、雄は孵化するまで卵塊を保護する。しばしば灯火に飛来する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

平野部から丘陵地にかけて普通に見られた種であるが、名古屋市付近では絶滅して久しい。近年は、西三河および東三河地域の丘陵帯で確認されている。

水田では農薬の使用、池沼では水質の悪化や埋め立てによって減少した。最近では、ペット業者による乱獲も心配される。

【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

【特記事項】

従来 *Lethocerus* 属に所属させられていたが、タガメ亜科の分類学的研究により、*Kirkaldyia* 属に所属変更された。

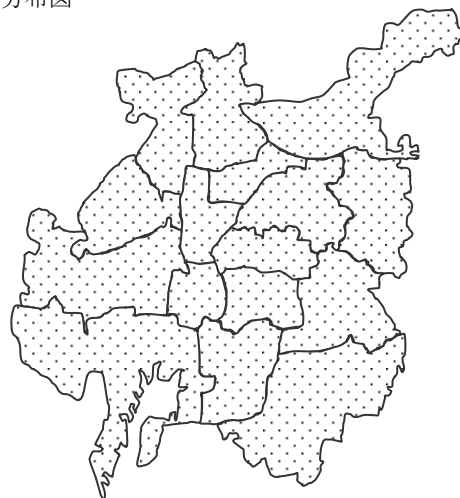
【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫 (上), pp.123-162. 愛知県.

Perez Goodwyn, P. J., 2006. Taxonomic revision of the subfamily Lethocerinae Lauck & Menke (Heteroptera: Belostomatidae). *Stuttgarter Beiträge zur Naturkunde Serie A (Biologie)*, 695:1-71.

矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 ナベバタムシ科>

トゲナベバタムシ *Aphelocheirus nawae* Nawa**【選定理由】**

全国的にも生息地が限定され、主に平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修などで激減した。県内では 1940 年代の古い記録しか存在せず、市内では昭和区山崎川における記録しかない。

【形態】

体長 9～10mm の扁平な体型で、前胸背と腹節の側縁は、顕著に後方に突出する。通常は短翅型であるが、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区石川橋付近（山崎川）が唯一。

【県内の分布】

西尾市八面、春日井市勝川橋付近（庄内川）のみである。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、カザフスタン、朝鮮半島。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



トゲナベバタムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の河川で、底質が砂や細かい礫の早瀬に生息する。

プラストロン呼吸により、終生水中で生活する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

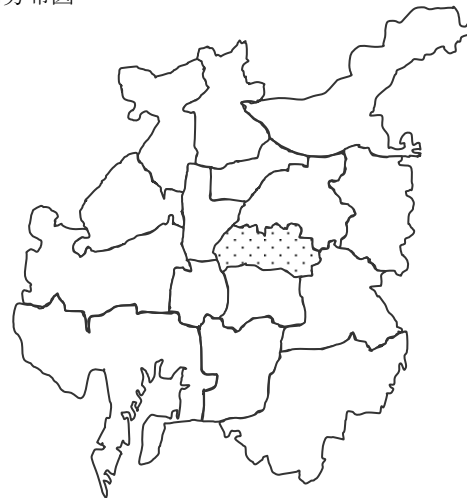
かつて山崎川に多産したとされるが、生息地はコンクリート護岸の単調な都市河川と化し、1940 年代の報告を最後に、県内から発見されていない。

主として平野部の河川に生息するため、水質悪化や河川改修の影響を受け、激減したものである。

【保全上の留意点】

現在残された自然状況に近い平野部の河川環境をそのまま維持し、自然状態での回復・復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナベバタムシの標本について. 豊橋市自然史博研報, (16):55-57.

(執筆 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

カワラハンミョウ *Cicindela laetescripta* Motschulsky**【選定理由】**

河川や海岸の砂地を生息地とする種であることから、生息環境の消滅により全国的に減少している。名古屋市内では守山区庄内川河川敷に生息していた。比較的目立つ種でありながら、40年以上にわたって生息情報が途絶えており、また生息環境も残されていないことから、絶滅したものと考えられる。

【形態】

暗緑色で、上翅には白紋があり、互いの白紋は外縁に沿って融合する。白紋の発達程度は、個体、地域によって変異が多い。

体長は14～17mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区竜泉寺下の庄内川河川敷で採集されたという記録がある（穂積，1955）。

【県内の分布】

他に尾西市～八開村にかけての木曽川河川敷、内海海岸、伊良湖岬から記録があるが、いずれも現在生息確認ができなくなっている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア南東部。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類



カワラハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

河川、海岸の砂浜に生息する。

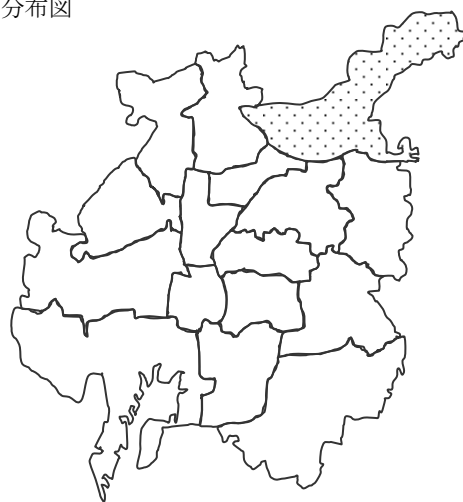
【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内で採集記録が残されている竜泉寺下付近の庄内川河川敷はかつて良好な砂地が広範囲に存在しており、1950年代には少ないながら生息していた。しかしその後長く生息に関する情報がなく、同地の環境も悪化した。市内に本種が生息しうるような環境は他に残されていないため、絶滅したと考えられる。絶滅の要因としては、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化による生息地の消滅があげられる。

【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2001．穂積先生のコレクション．穂積俊文博記念論文集，pp.365-368．
穂積俊文，1955．東海甲虫誌（1）．佳香蝶，7(26):24-26．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

キベリマルクビゴミムシ *Nebria livida angulata* Banninger

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

平野部を中心に分布する種で、市内からは守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集された記録があるが、いずれも古いもので、近年その生息が確認できなくなっている。

【形態】

頭部は黒色、前胸背は前後縁部を除いて黄褐色、上翅は黒色で縁部が黄褐色で縁取られる。同属のカワチマルクビゴミムシに似るが、上翅の第3間室に剛毛孔点があり、複眼の間に1対の赤紋がある。

体長は13～16.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺、天白区八事付近で採集記録がある。

【県内の分布】

他に春日井市高蔵寺の庄内川河川敷で知られるが現在は見るできない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア東部、中国。基準亜種はヨーロッパからアルタイあたりまで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部に多い種で、河川敷などに生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内からの記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。

減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

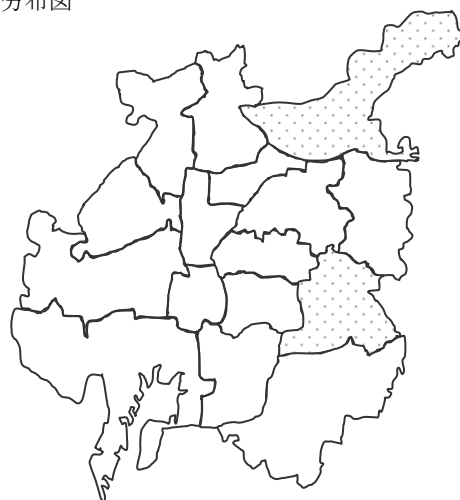
【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。



キベリマルクビゴミムシ

市内分布図



【関連文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌 (9). 佳香蝶, 12(41):17-23.

穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

エチゴトックリゴミムシ *Oodes echigonus* Habu et Baba

カテゴリー

【選定理由】

沿岸部の水辺に生息するが、過去に採集された場所は環境が変わり、絶滅したと考えられる。

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 14.0～15.2mm。体型は上翅が方形に近く、特に雌において著しい。前胸背板の陥没は認められない。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区（穂積，1961）。

【県内の分布】

名古屋市。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本固有種。



エチゴトックリゴミムシ 雌
港区、1942年4月24日、長谷川道明 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

分布は、内陸部よりも沿岸部に偏り、生息環境は日陰の閉鎖的な水域を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

穂積により港区からオオトックリゴミムシと記録された個体は、再検討（長谷川ほか，2014）により、エチゴトックリゴミムシであることが判明した。しかし、その当時採集された場所は、環境が変わり生息は不可能であると考えられる。

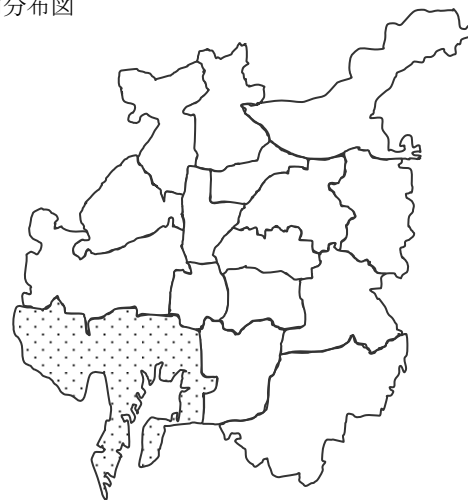
【保全上の留意点】

市内のため池などの止水環境を埋め立てず残し、護岸の一部でも土にしておく事が重要である。

【特記事項】

オオトックリゴミムシに類似するが、下唇中央歯の先端が陥入しないこと、前胸腹板突起が縁取られることによって区別できる。トックリゴミムシ類は良好な水辺環境の指標として有用な存在であり、全国的に減少が指摘されている。

市内分布図



【引用文献】

穂積俊文，1961. 東海甲虫誌（10）. 佳香蝶，13(46):61-82.
長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希，2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博研報: (25):21-24

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.29,p.160. 保育社，大阪.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.
佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

ゲンゴロウ *Cybister chinensis* Motschulsky

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも1950年代までは各地にみられ、標本も残されている。しかし40年以上にわたって生息情報はなく、生息環境もほとんど残されていない。また、県内に数えるほどしか残されていない生息地からも遠く離れており、自力で分布を回復できる可能性は極めて低いことから市内では絶滅したと考えられる。

【形態】

扁平な卵型。背面は緑がかった黒色で、側縁は黄色に縁取られる。脚、腹部は黄色。体長は34～42mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区茶屋ヶ坂、港区土古町の記録があるが、いずれも1960年以前のものである。

【県内の分布】

少なくとも1950年代までは、広く分布していたものと推測されるが、現在は三河地方に数カ所の生息地が残るのみ。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、シベリア。

【生息地の環境／生態的特性】

ヒルムシロ、オモダカなどの水草の多い池や沼に生息し、かつては水田でも見られた。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

大型で目立つ種でありながら40年以上にわたって生息情報がなく、市内では絶滅したものと考えられる。

絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が考えられる。

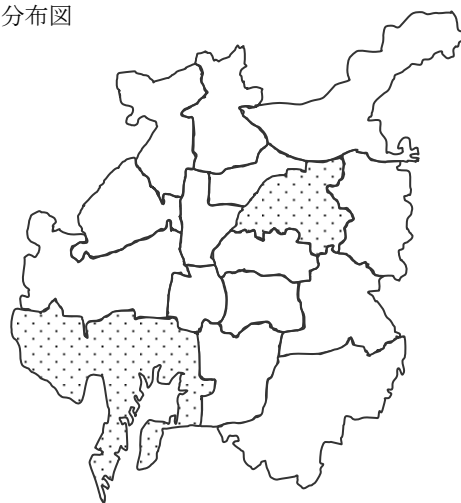
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



ゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2001. 穂積先生のコレクション. 穂積俊文博士記念論文集, pp.365-368.
穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(31):1-10.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus lateralis* (Fabricius)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて人里で普通にみられた種でありながら、高度経済成長期を境に全国的に急速に減少した。市内でも少なくとも1950年代までは各地で見ることができ、標本も残されている。しかし県内を含む中部地方全域を見渡しても近年の生息情報はない。

【形態】

ゲンゴロウとよく似るが、一回り小型で、腹面は暗赤褐色となる。

体長は24～29mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町、守山区の記録があるが、いずれも1970年以前のものである。少なくとも1960年代までは、市内に広く分布していた。

【県内の分布】

平野部～低山地の温暖な地域を中心に分布していたものと推測されるが、低温に弱い南方系の種であるため、はたして県内で越冬していたかについては疑問がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。

【世界の分布】

アジア、アフリカ、オーストラリアにかけて広く分布する種で、7亜種に分類されている。このうち台湾、朝鮮半島、中国に日本産と同じ亜種が分布するとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地の水生植物の生えた池、沼、水田など生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

東海地方では絶滅したと考えられるが、九州では分布の拡大が確認され、数年前では三重県でも見つかった。

沿岸域を中心に東南アジア～アフリカに広く分布する南方系の種であるため、今後再侵入の可能性もある。

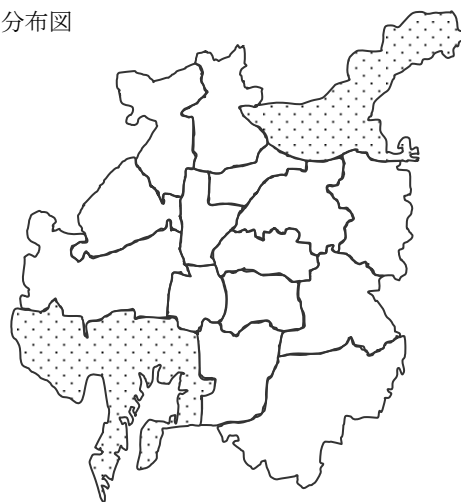
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



コガタノゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(31):1-10.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

平野部を中心に分布する中型のゲンゴロウで、かつては比較的普通種であったが、高度経済成長期あたりを境に全国的に減少している。名古屋市内からも記録があり、標本も残されていることからかつて生息していたことは間違いないが、長らく生息情報が途絶えている。

【形態】

卵形、前胸背は黄褐色で、前後縁に黒帯がある。上翅は、黄色地に黒色の細かい網目模様がある。

体長は12～14.5mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）、守山区（長谷川，2002，採集年は1959年）の記録がある。

【県内の分布】

豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

近隣地域では、三重県内にまだ生存している。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国など。

【生息地の環境／生態的特性】

平地や丘陵地の水田、湿地、池、沼などに生息する。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内の記録は、1960年以前のもので、現在は絶滅している可能性が高い。絶滅の要因としては、生息地である池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活汚水などによる水質の悪化が考えられる。

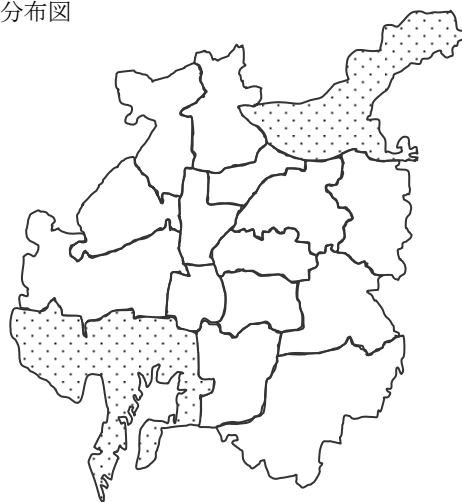
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



マルガタゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第3報）．佳香蝶，9(31):1-10．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi* Wewalka

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅

【選定理由】

かつては比較的普通にみられた種であったとされるが、おそらく高度経済成長期を境に急速に減少し、現在では全国的に生息情報が得られなくなっている。名古屋市内では、1950年代以前には、しばしば採集され記録、標本も残っているが、1960年代以降の生息情報がない。

【形態】

体型は長めの卵型。黒色で、頭部前半部と前胸側部は黄色、上翅の両側には2条の黄色の縦条があり、中央後方で融合する。

体長は12～14.5mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）、守山区（穂積・佐藤，1957；長谷川，2002）の記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市、安城市の記録がある。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州、トカラ列島（中之島）。

【世界の分布】

台湾、中国、フィリピン、東南アジアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

水草の繁茂した池や沼。かつては水田にも生息していた。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

市内に残る最も新しい記録ならびに標本が1959年に守山区で採集されたものである。この年、同地では7月から8月にかけて採集された6個体の標本が残されている。それ以降の採集記録など生息情報に関する記録は途絶えている。この守山区での記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできないが、1959年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。また、県全体をみわたしても本種の生息情報はなく、市内では絶滅したと判断せざるを得ない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。また、東南アジアに広く分布する南方系の種であることから、特に沿岸部において生息可能な池・沼が消失したことが、本種の分布拡散、回復を阻害している可能性がある。

【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

【関連文献】

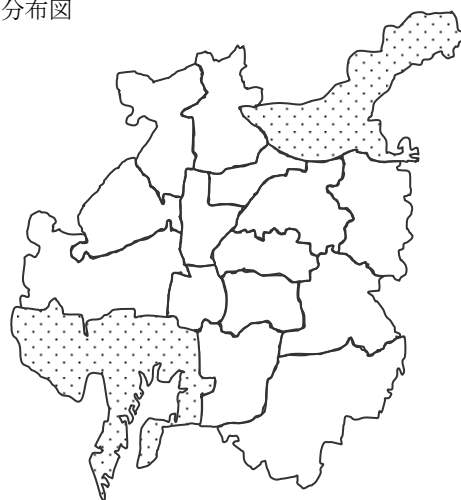
長谷川道明，2002. 豊橋市自然史博物館森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類，豊橋自然史博物館研報，(12):49-53.

穂積俊文・佐藤正孝，1957. 東海甲虫誌（第3報）. 佳香蝶，9(31):1-10.



スジゲンゴロウ

市内分布図



（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マダラシマゲンゴロウ *Hydaticus thermonectoides* Sharp

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

全国的にも生息域が限定された種で、現在までに知られる生息地のほとんどは愛知県と近畿地方に偏っている。市内からも記録があり、標本も現存しているが、50年以上にわたって生息に関する情報が得られず、また生息環境も残されていない。

【形態】

卵型。淡い黄褐色で、現在でも普通に生息するコシマゲンゴロウに似るが、背面の模様はスジ状にならず、中央下方付近に黒帯状の紋が出現する。

体長は9～10mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区（長谷川，2002，採集年は1959年）の記録がある。

【県内の分布】

もともと稀な種で、美浜町（佐藤，1971）が知られるのみである。

【国内の分布】

本州にのみ分布する。基準産地は長野県であるが、その後の記録は、愛知県及び近畿地方に限られている。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

水がきれいで、冷たい貧栄養な止水域が生息環境と考えられている。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

守山区の記録は、灯火に飛来したもので、生息していた水域を特定することはできない。ただし、採集された1959年当時と現在では採集地周辺の環境は激変しており、現在も生息環境が残されている可能性は極めて低い。もともと生息水域が限定される少ない種であったことに加え、池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での絶滅の原因であると考えられる。

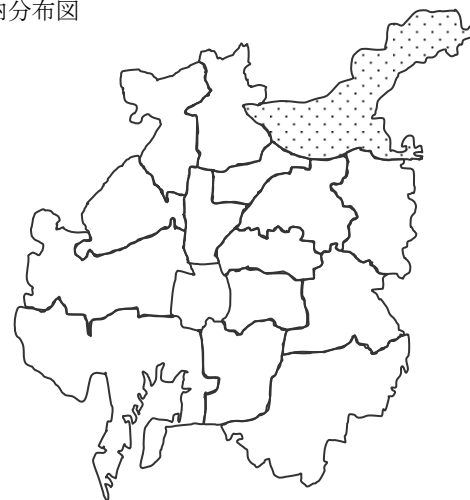
【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



マダラシマゲンゴロウ

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

佐藤正孝，1971．知多半島の水生甲虫類．日本昆虫学会東海支部報，24:2-3．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

シルビアシジミ *Zizina emelina emelina* (de l'Orza)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧IB類

【選定理由】

名古屋市内では西区新福寺町の庄内川堤防から1951年に記録されたが、その後の確認報告がない。愛知県下では多産した木曽川堤防でも1963年を最後に記録がなく、河川の補強改修工事等による何らかの生態系の変化により、県下の本種は絶滅したと考えられる。

【形態】

開張 22～28mm。ヤマトシジミに似るが、前翅裏面の中室には黒斑がない。雄の翅表は青藍色で、より紫色を帯びる。雌の翅表は全体に暗褐色で、一部に青藍色が現れることがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

1951年6月24日に、西区新福寺町の庄内川堤防で1雄1雌が採集されているのみ。

【県内の分布】

木曽川、矢作川等の堤防が主産地。他に知多半島、瀬戸市、三河川合などの記録が散発的にあるが、40年以上前の古い記録である。

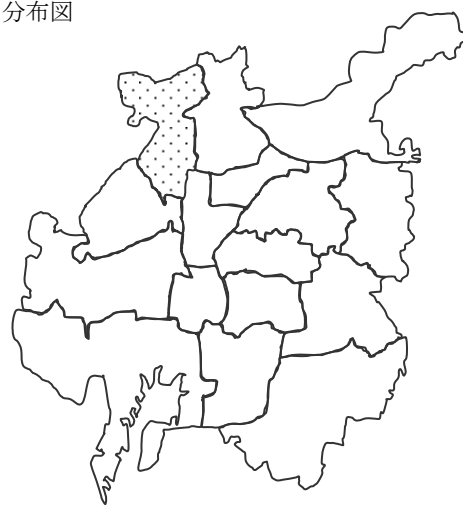
【国内の分布】

関東地方以南の本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島南部より台湾、中国、西はインド、南はマレー半島、東はニューギニア島からフィジーまで、広域に分布する。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川敷、田畑の周囲等の明るい草地に生息し、4月から11月まで、年5～6回発生する。幼虫はマメ科のミヤコグサを主食草とするが、他県ではシロツメクサで発生した地域もある。愛知県下でコマツナギを食草としている例も報告されている。九州南部以南ではヤハズソウ・メドハギなど各種のマメ科の草本や低木を食べている。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

この地域の個体群の食草がミヤコグサに限定されると仮定すれば、ミヤコグサ群落のあった堤防や河川敷が従来の採草地としての利用が廃れ、環境の多様性を失った結果、ミヤコグサ群落が激減したことが絶滅の主因といえる。今日、30以上の府県で本種が絶滅または絶滅危惧種にあげられているが、本土域における本種の急激な減少の要因には、尚不明な点が多い。

【保全上の留意点】

旧来の河川敷の生態系を維持するには、草刈りには極力機械を使用せず、計画的にトラ刈りにするのも一つの方法であろう。ミヤコグサ群落が再生すれば、本種が復活する可能性は少ないながらある。なお近縁の帰化種セイヨウミヤコグサが市内でも港区などで見られるようになり、他県で発生例も知られているので、今後注意する必要がある。

【引用文献】

各務晃司, 1952. シルビヤシジミ名古屋市内に産する. 佳香蝶, 4(18):45.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
安藤 尚, 2003. 愛知県木曽川堤防最後(?)のシルビアシジミ. 佳香蝶, 55(216):74.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.31,p.141. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑, 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* (C. Felder et R. Felder)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

本種はかつて、本州以南の山地草原や低地の河川敷等の草地に広く分布していたが、1960年代以降全国的に急減し、今日確実な産地は中国地方と九州にわずかに知られるのみとなった。名古屋市内では北区の矢田川河原の古い記録があるのみである。

【形態】

開張 60～80mm。雌は雄より大型で日本産ヒョウモンチョウ類の中では最大、特に温暖地の個体は大型。裏面後翅の外縁の銀白色斑の内側の縁取りは、ウラギンヒョウモンでは単純な山型であるが、本種では中央の凹んだ山型でMの字のように見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

1937年頃北区の矢田川堤防に多産した。

【県内の分布】

上記以外には名古屋市近郊(平手, 1937)、南知多(神谷, 1956)の文献記録があるだけである。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

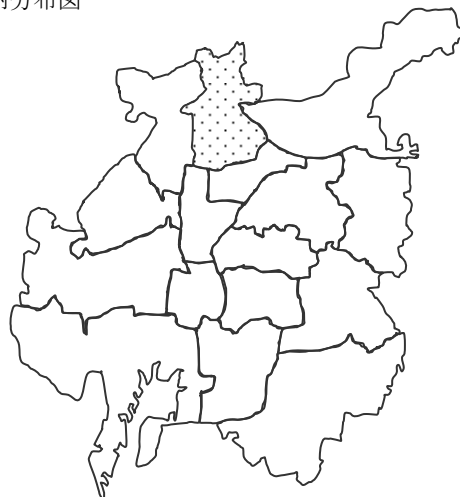
【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布し、東アジア型分布の代表種の一つである。

【生息地の環境／生態的特性】

低地では河川敷や堤防などの明るい草原が生息地となる。快活に飛び、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。幼虫の主食草はスミレ科のスミレで、タチツボスミレなどの有茎種はほとんど食べないという。低地では6月に発生し交尾、7月中旬頃に夏眠、秋に再び活動し産卵する。

市内分布図



【過去の生息状況／絶滅の要因】

1937年の記録(加藤, 1942)では、「大曾根付近の矢田川堤防に多産、半径百米位の範囲で一日数十頭採集」という状況であった。かつて多産した本種が、1950年代には市内でも県下でも絶滅したと考えられる。絶滅の原因は定かではないが、食草群落の減少を主因とした生息環境の悪化であろう。

大型で群棲する傾向にある本種は、安定した発生を続けるには、単位面積当たり他種より多量のスミレを必要とする。戦前は刈草等の需要もあり、田畑や堤防の草刈り、里山の手入れが行き届き、スミレ群落が均質に維持されてきた。今日、確実に発生が見られるのは、山口県の秋吉台、阿蘇外輪山、九州の自衛隊演習場内などに過ぎないが、これらの生息地は定期的な草刈りや火入れ等で、一定の広さの草地環境が維持され、本種が生息できる環境が保たれていると考えられる。

【保全上の留意点】

全国的な減少・絶滅の原因が必ずしも明らかでなく、積極的な保全対策は困難である。しかしスミレ類を食草とする草原性のヒョウモンチョウ類の多くが、やはり全国的に減少しているので、残された良好な草地環境の維持・保全への配慮が望まれる。

【引用文献】

- 平手雅二, 1937. 名古屋市近郊の蝶目録. 昆虫研究, 1(1):10-12.
 加藤一三, 1942. 学林, (117):61-66.
 神谷一男, 1956. 南知多・渥美・蒲郡地方に産する昆虫類. 三河湾自然公園調査報告書, pp.50-61. 愛知県.
 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.

【関連文献】

- 福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ). 保育社, 大阪.
 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.46, p.217. 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* Okada et Torii

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

名古屋市では、この地方に多い丘陵の湧水湿地に限って見られた。開発により湿地が減少し、産地が孤立化するとともに、遠距離の移動性を欠くため、生息地間の遺伝子交流も困難になり、種個体群の衰弱が著しく、1990年ごろに絶滅した。

【形態】

開張 32～38mm。雄の翅表は暗褐色、雌はやや淡い褐色で斑紋等はない。翅の裏面は明るい橙褐色で、その外縁に沿ってはっきりした黒い眼状紋が、前・後翅とも数個ずつある。眼状紋の中心には小さい白点があり、眼状紋の周囲には黄色の環をもちよく目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

1960年代まで守山区、名東区、天白区、千種区、昭和区、緑区の湿地に生息したが、1980年代末には、守山区を最後に絶滅した。

【県内の分布】

ほぼ庄内川と矢作川の間の丘陵地や山間の湿地にかつては多産し、岡崎市周辺や豊橋市（葦毛）、新城市（作手）などにも知られていたが、大部分絶滅し、今日では保護されている葦毛や作手の湿原を除いて見ることはできない。

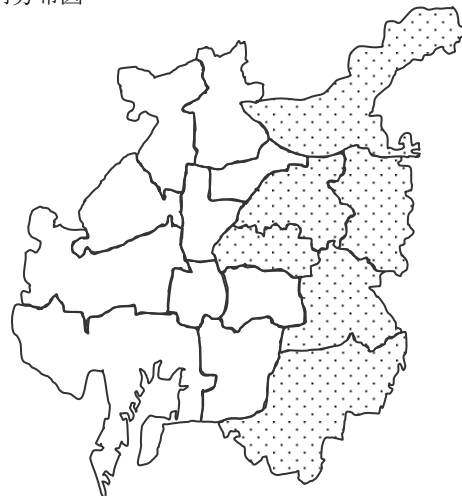
【国内の分布】

本州の特産で、中部地方以西の本州。長野・群馬県の山地草原、東海地方と近畿・中国地方の湿地や草原に局地的に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島・中国からヨーロッパ中部にかけてユーラシア北部に広く分布する。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

名古屋市とその周辺の生息地は、シデコブシやシラタマホシクサなど東海丘陵要素と呼ばれる植物の生える、比較的小規模の明るい湧水湿地であった。湿地のイネ科・カヤツリグサ科の草本の葉に止まっていて、晴天時にゆるく飛翔し、時にヒメジョオンなどの花で吸蜜した。年1回の発生で、6月上旬から7月上旬にかけてみられた。幼虫はショウジョウスゲ、ヒメカンスゲ等のカヤツリグサ科を主食草とし、越冬態は3齢幼虫である。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

本種の生息地は、大部分が都市部に近い丘陵の湿地で、開発の好適地であり、短期間に宅地・工場・廃棄物処分場等となり、それに伴う区画整理・道路建設等により水脈が絶えて、壊滅的な打撃を受け消滅した。残された湿地も遷移が進み、周辺の林からササの侵入や樹木の被覆による日照低下などで、生息環境が悪化した。

本種の場合、小湿地に発生する全個体を採集することは容易であったことから、減少時の乱獲が、絶滅に拍車をかけたことは確実であり、チョウ愛好者は反省しなければならない。

【保全上の留意点】

尾張地方では絶滅し、積極的な保全対策は困難である。湧水湿地は特異な生態系を有し、他の目（もく）では未知の種が発見される可能性もあるので、特に市内に残存する湿地は、進入するササを刈るなど人為により遷移を遅らせるとともに、水脈を保存し、周辺の環境も含め永く保全したい。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
 山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
 愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.65, p.296. 保育社, 大阪.
 福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅳ). 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 ムカシヤンマ科>

ムカシヤンマ *Tanypteryx pryeri* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

守山区で記録されてきたが、個体数も生息可能な湿地も極めて稀である。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長70mm内外。太めの体躯で黒色地に黄斑を有する。複眼は離れかつ小さい。翅の緑斑が長い。

幼虫は頑丈でごつごつした感じ。腹部背面に毛束が2列に並ぶのが特徴で大型である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵以東から三河の丘陵、低山地、山地に分布する。

【国内の分布】

本州、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫の生息地は一般には山地の日当りのよいコケが生え水がしたり落ちる崖とされているが、尾張東部丘陵では東海丘陵要素のシデコブシ、準要素のミズギボウシなどが生育する湿地林内の谷底湿地、斜面湿地が主たる生息場所である。

若齢幼虫は湿地の落葉、落枝下の平な部分に、中令・成熟幼虫は湿地のへりの斜面に穴をうがって棲む。水中でなく湿泥中が生活の場であることが特徴で、羽化までに2～3年から数年を要すると見られる。

成虫の動作は緩慢で、白シャツや帽子に止まったりする。成虫の出現期は5～6月である。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区だけから若干の採集例が知られる。かつては竜泉寺辺りでも得られたが、現存するのは上志段味東谷の東谷山南麓付近だけである。

この他非常に珍しい事例として、2006年に中区名古屋城付近で1頭の飛来が記録されている。市近傍では尾張東部丘陵の一角である瀬戸市海上の森に多産する。

もともと稀であるが、守山区では生息場所が著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

守山区上志段味方面の数少ない湿地の現状保全が重要である。

【特記事項】

本種の移動分散能力は、成虫の緩慢な行動から低いと見られているが、上記事例はその考え方を改めなければならない可能性を示唆するものである。

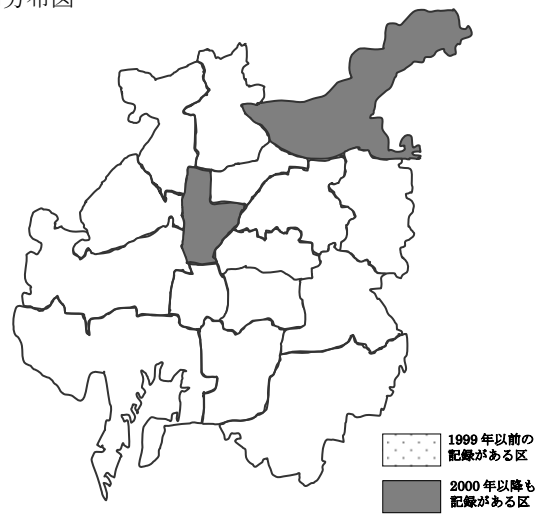
【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2002. 愛知万博会場予定地におけるムカシヤンマの生息環境と羽化生態. 月刊むし, (377):36-41.
横地鋭典, 2013. 名古屋市中区三の丸周辺の2006～2007年のチョウ等の記録. 佳香蝶, 65(255):43-47.



ムカシヤンマ 雄
守山区上志段味東谷、2013年6月5日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

オオキトンボ *Sympetrum uniforme* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

やや特異な産卵場所を好むもともと多くない種であり、限られた産卵適地の衰退により、著しく減少した。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

成虫体長は49mm内外。本邦最大のアカトンボ。体は斑紋がなく橙黄色一色で翅は前後翅共淡橙色を呈し美しい。

幼虫はアカトンボの中で最大で背棘を第9節にも有することが特徴。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、熱田区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張、三河平野部に分布した。東三河山地の記録もある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



オオキトンボ 雌

千種区東山、1950年7月9日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

開けた遠浅の大きな池で、池畔に草原を伴い、汀線内外に水生植物や丈の低い湿性植物が存在するような場所を好んで産卵する。

雄は汀線に沿って巡回し縄張りを形成する。移動分散性が強いと考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと生息地が限られ個体数も少なかった。市内での単独個体の終見は1973年である。県内での最後の安定的発生地は日進市の機織池であったが1988年を最後に没姿した。全国的にも激減しており産地は少ない。実質絶滅であるが、移動分散性が強いと考えられるので飛来の可能性が無くはない。

環境選択性が強いいため、数少ない適地の消滅が減少要因である。

【保全上の留意点】

産卵に適する環境を有する池沼の保全。例え現在は不在でも、生息可能な環境を有する池は飛来に備え現状を維持しておくことが必要である。

【特記事項】

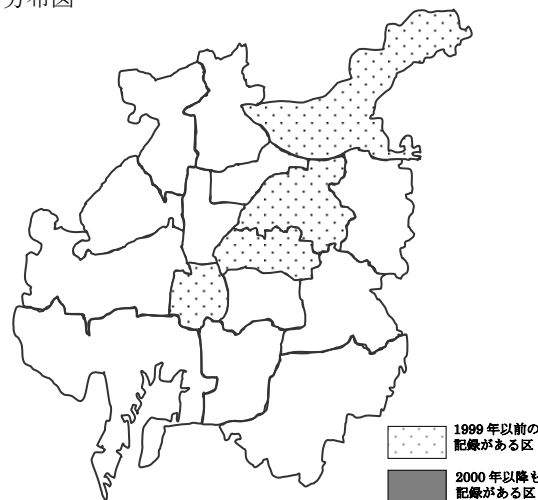
世間ではショウジョウトンボの雌や未熟雄が本種と誤認されることがあるので注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1987. 名古屋市名東区及び日進町のため池の注目すべきトンボ2種. ため池の自然, (5):3.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 コバンムシ科>

コバンムシ *Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

全国的にも産地が限定され、主として沿岸部の低地に生息するため、開発の影響を受けやすい。市内では水草が豊富であった古い時代の記録があるのみで、水質の悪化などで確認されなくなった。

【形態】

体長は11～13mm。体型は扁平な小判型をしており、生時は緑がかった光沢があるが、死後は黄変する。

前脚は鎌状を呈し、捕獲脚となっており、腿節は非常に太い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区名古屋城、港区土古町の2ヶ所。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺のみであったが、近年の調査で新たな産地が見つかった。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



コバンムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

生息地は極めて局所的で、ヒシ、ヒルムシロなど、特に浮葉植物が繁茂するため池に生息する。

ヒシの浮囊など水草の組織内に産卵するとされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城濠では、水質の悪化によってかつて生育していたヒシなどの浮葉植物が消滅し、近年の調査でも見つからない。港区土古町は、本種を始め、現在ではほとんど見られなくなった貴重な水生昆虫類が得られていた産地であったが、住宅地と化した。既知産地での再発見は、絶望視せざるをえない。

水質悪化のほか、産卵基質となる浮葉植物の消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

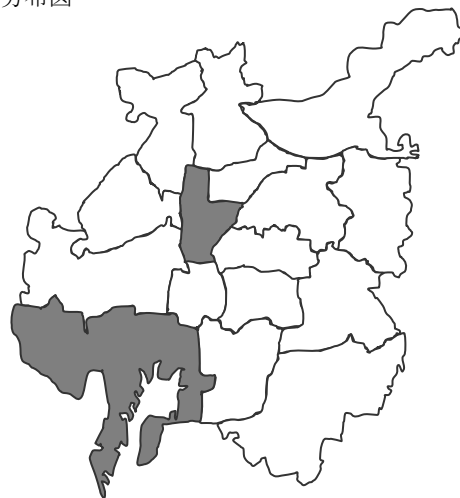
特に平野部から丘陵地に残されたため池では、浮葉植物を保護し、水質悪化を防ぎ、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込まないよう留意する必要がある。

【関連文献】

広 正義ほか, 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書. 59pp. 名古屋城管理事務所.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

(執筆 矢崎充彦)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 イトアメンボ科>

イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott)**【選定理由】**

かつてはため池や河川などに普通に見られたとされるが、1960年代にはすでに稀な種となっており、現在確実な産地は全国的にもごくわずかである。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長は 11～14mm とイトアメンボ科では非常に大型である。体は細長く、触角第 2 節と第 4 節がほぼ同じ長さである。

雄の腹部第 7 節腹面には長毛を密生し、雌の腹部第 7 節腹面には後縁に微小な突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区、中川区の記録があるが、再検討が必要。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、春日井市、犬山市などの記録があるが、ほぼすべて誤同定と考えられる。

【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、トカラ列島（中之島、宝島）、奄美大島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

生息地は極めて局所的で、まばらに草本類が生育する休耕田など、開放的な水面が広がる環境で見られる。

灯火に飛来することがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の記録は皆無である。従来の記録もほぼすべてが誤同定と考えられ、県内における生息の可能性は低い。

水質悪化のほか、ため池や低湿地の埋め立てなどによる生息地の消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

主として低地に生息するため、平野部のため池や湿地、休耕田などの環境維持と水源となる周辺の後背林を保全する必要がある。

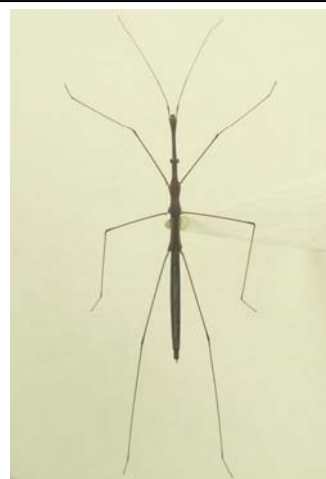
【特記事項】

県内からいくつかの記録があるが、ほぼすべてがヒメイトアメンボ *H. procera* Horváth の誤認と判断される。

【関連文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234):165-200.

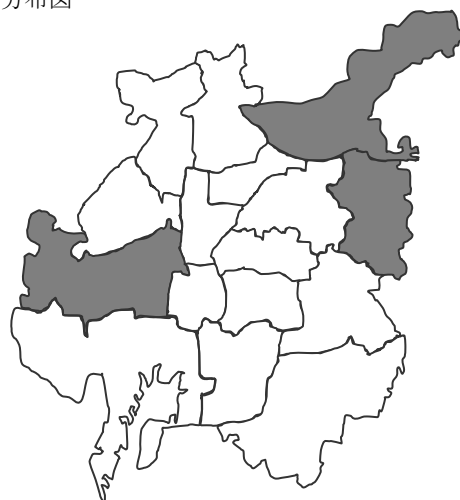
(執筆者 矢崎充彦)



イトアメンボ

矢崎充彦 撮影

市内分布図



昆虫類 <コウチュウ目 カワラゴミムシ科>

カワラゴミムシ *Omophron aequale* Morawitz**【選定理由】**

汚れない河川の砂地に生息する種で、かつては市内にも生息していたが、河川の汚れ、河川敷の改修により生息地が壊滅状態にあり、市内から絶滅する危険性が極めて高い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体型は円形で、鮮やかなオレンジ色、頭部は広く緑色を帯びた金属色。前胸中央部に長円形、上翅にはやや複雑な3条の緑色を帯びた金属色の紋がある。

体長は5.5～6.5mm

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区吉根、竜泉寺、瑞穂区雁道、東区の矢田川で記録がある。

【県内の分布】

旧弥富町、旧足助町、旧旭町で記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、ロシア沿海州、中国。



カワラゴミムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川や湖などの砂地に生息する。県内での生息地は、河川の中流域から下流域（庄内川、矢田川、矢作川）、河口部（弥富市）であるが、上流域のごく狭い砂地にも生息する。

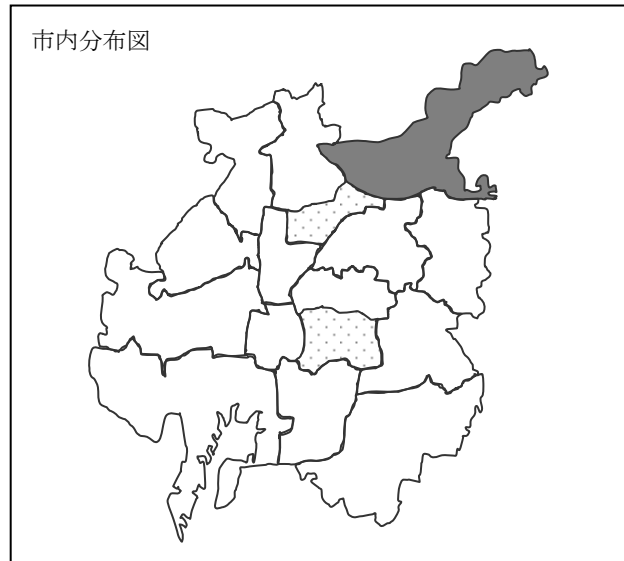
【現在の生息状況／減少の要因】

市内からの記録は、いずれも古いもので、河路（1981）の守山区吉根から記録が最後である。かつて生息確認がされていた矢田川などに現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。減少の要因としては、河川の汚れ、改修によって生息環境である砂地が消失したことが大きいと推定される。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。現在最も生息の可能性が高い守山区内の庄内川においては特に河川敷環境の保全が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

河路圭吾, 1981. 庄内川で採集したカワラゴミムシ. 佳香蝶, 33(126):31.

【関連文献】

穂積俊文, 1955. 尾張地方の甲虫相. 新昆虫, 8(11):36-38.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

フタモンマルクビゴミムシ *Nebria pulcherrima* Bates

カテゴリー

【選定理由】

河川の中下流域の礫と砂が混じるような環境に生息する種で、市内では庄内川に確実に生息していた。しかし 1975 年に採集されたという情報を最後に生息情報が途絶えてしまっている。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

赤褐色で上翅中央下部に一对の特徴的な大きな黒紋がある。前胸は心臓形で側縁は基方で強く湾曲し、上翅の第3間室には背面に剛毛孔点がない。

体長は 11～12.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺付近の庄内川河川敷で採集記録があるほか、西区の庄内川河川敷でも採集されたという情報が寄せられている。

【県内の分布】

この外に記録は知られていない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾。



フタモンマルクビゴミムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷に生息する。礫と砂が混じるような環境を好む。

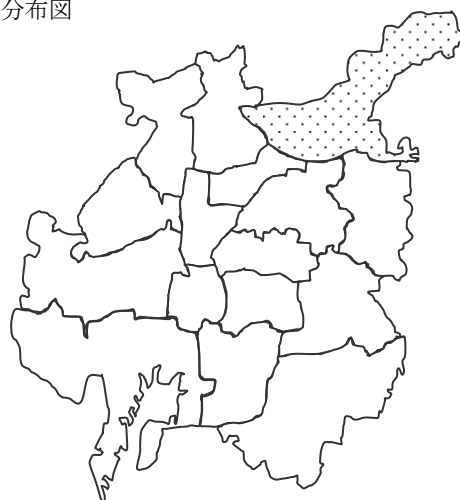
【現在の生息状況／減少の要因】

市内からの記録は、いずれも古いものである。現在は河川改修により、生息環境は悪化しているが、庄内川には砂礫環境も残されている。しかし、生息は不明である。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が最小限必要である。また同時に生活史の解明など本種についての詳細な調査研究を進め、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

市内分布図



【関連文献】

長谷川道明, 2001. 穂積先生のコレクション. 穂積俊文博記念論文集, pp.365-368.
穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌 (9). 佳香蝶, 12(41):17-23.
穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus* Olivier**【選定理由】**

守山区吉根から記録があり、かつては市内の庄内川の河川敷に生息していた。しかしその後生息情報がなく、また生息環境も悪化しているため、絶滅の危険性が高い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

細長く大きな黒色の甲虫で、大あごがクワガタムシのように発達している。前脚はちょうどモグラやケラの前脚のように発達し、地中に潜るのに適応した形態をしている。前頸節の外縁には2本の棘がある。

体長は28～38mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

1975年に発刊された「庄内川の昆虫」の中で、「10年ほど前に吉根橋で死体をみたことがある」という記述がある（穂積，1975）。

【県内の分布】

木曽川河川敷、渥美半島沿岸部の砂浜に生息している。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

河川、海岸などの砂浜に生息し、砂中に深い坑道を掘る。

【現在の生息状況／減少の要因】

吉根橋周辺から勝川橋あたりには本種の生息が可能な良好な砂浜があったことから、少なくとも1960年代までは本種が生息していたと思われる。しかし40年にわたって生息に関する情報が途絶え、現在では同地の環境も、砂防堤などの設置による砂地の減少、河川敷の公園、緑地化により生息環境の悪化が進んでいる。

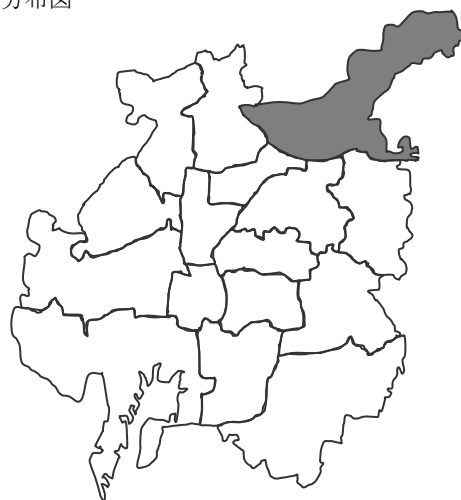
【保全上の留意点】

生息環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。



オオヒョウタンゴミムシ

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文ほか，1975．庄内川の昆虫，40pp,12pls．建設省庄内川工事事務所刊．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科>

ムツボシツヤコツブゲンゴロウ *Canthydrus politus* (Sharp)**【選定理由】**

水草の繁った良好な自然環境に生息する種であるが、生息場所の消失とともに姿を消し、長らく市内からの生息情報が途絶えている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体型は逆卵形。背面は黄～オレンジ色で強い光沢があり、上翅の肩から下方に1紋、その内方に中央前まで広がる1紋、中央後ろ会合部に横長の1紋があるが、変化がある。体面下は赤黄色。

体長は2.4～2.6mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区土古町（穂積・佐藤，1957）。

【県内の分布】

他に知多市、美浜町、豊橋市で記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ムツボシツヤコツブゲンゴロウ

【生息地の環境／生態的特性】

水草の茂る池、沼に生息する。

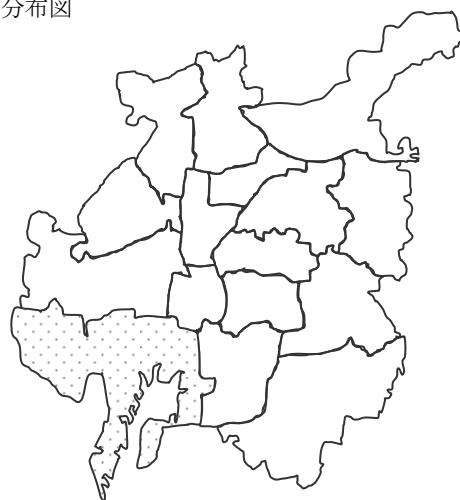
【現在の生息状況／減少の要因】

市内の記録は、いずれも古いもので、かつて生息確認がされていた場所に現在も生息する可能性は極めて低いと思われる。しかし、県下にはまだ生息している地域も残されていることから、再発見の可能性がないわけではない。池、沼の埋め立てや護岸整備による生息地の消滅及び農薬、生活污水などによる水質の悪化が市内での減少の原因であると考えられる。

【保全上の留意点】

各種水域の自然環境を整えて、自然状態での回復、復元を待つ必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文・佐藤正孝，1957．東海甲虫誌（第3報）．佳香蝶，9(31):1-10．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aubé

カテゴリー

【選定理由】

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池もなくなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息地も極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長20～25mm。体は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。体下面は暗赤褐色で、腹部第3～4節の両端に黄褐小粒を具える。上翅には3点刻裂があり、翅端近くに小さな黄褐紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区茶屋ヶ坂（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）。

【県内の分布】

豊田市、設楽町。

かつては平野部の水域に多く見られたが、現在では山間部に残された僅かな池にのみ生息する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

水生植物の生えた池沼、水田などかなり広い水域に適応している。幼虫は5～8月に見られ、成虫は8～9月に出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

平野部での自然度の高い池の亡失、水田の圃場整備によって非常に少なくなった。

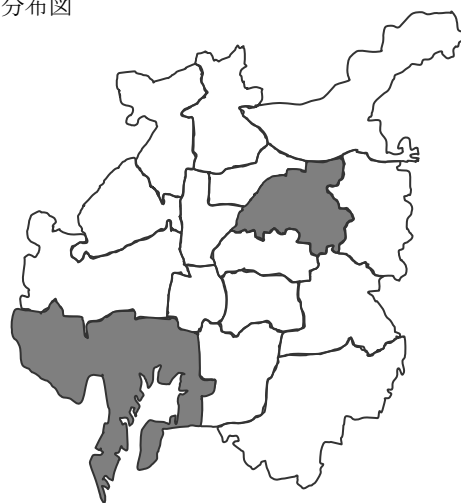
【保全上の留意点】

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水域環境を作ることが望まれる。



クロゲンゴロウ
豊田市上切町、1999年4月18日、戸田尚希 撮影

市内分布図



【引用文献】

- 蟹江昇・長谷川道明，2001．甲虫類-東海地方を例に-．ため池の自然-生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック，東京．
 佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231，愛知県農地林務部自然保護課．
 愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 -レッドデータブックあいち 2009- 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

オオクワガタ *Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

平野部から低山地に生息する日本最大のクワガタムシであり、各地で減少傾向が甚だしい。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が増加しており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

【形態】

体長 25～65mm。雄では大あごを含めると 70mm を超える個体もいる。黒色でよく発達した大あごは中央より前方に斜め上方へ向く内歯を持つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺（長谷川，1998）、昭和区八事（佐藤ほか，1990）、千種区東山（佐藤ほか，1990）。

【県内の分布】

瀬戸市、春日井市、小牧市、津島市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島、タイ、インド。



【生息地の環境／生態的特性】

平野部の河畔林や低山地の雑木林などに生息する。成虫は夜行性で 6～9 月に活動し、コナラやヤナギの樹液に集まる。幼虫はアベマキ、ポプラ、エノキなど広葉樹の枯れ木の白色腐朽した部分を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山の減少や河畔の整備により、本種が棲める様な太い大木が減ったことが、最大の原因であろう。

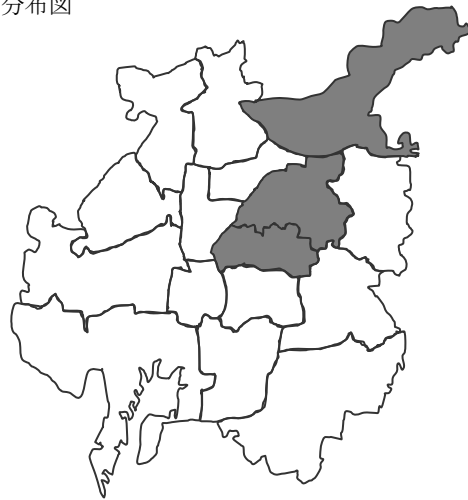
【保全上の留意点】

河畔林の整備や雑木林の開発と共に、飼育ブームに伴う放虫や逃亡が危惧される。

【特記事項】

ペット業者などによる過度の採集を防止する必要がある。

市内分布図



【引用文献】

長谷川道明，1998．昆虫類Ⅰ 豊橋市自然史博物館所蔵クワガタムシ科標本目録．豊橋市自然史博物館資料集（6）．
佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ツチハンミョウ科>

マメハンミョウ *Epicauta gorhami* Marseul**【選定理由】**

かつては、マメ類の害虫として知られた種であるが、幼虫が寄生するイナゴ類の数が減少し、近年発見が困難になった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

艶のない黒色で、頭部は赤色。この地方に産するものは、前胸背正中線上、上翅両縁、会合部、中央に灰白色の縦条が現れる。

体長は12～18mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内に残されている採集記録は、港区寛政町（穂積, 1957）が知られるに過ぎない。

記録はないが、戦後しばらくは中区でも普通に見られた。

【県内の分布】

残されている記録は他に旧一宮町、春日井市、小牧市からあるのみ。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



マメハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫が寄生するイナゴ類が生息する草地、河川敷など。

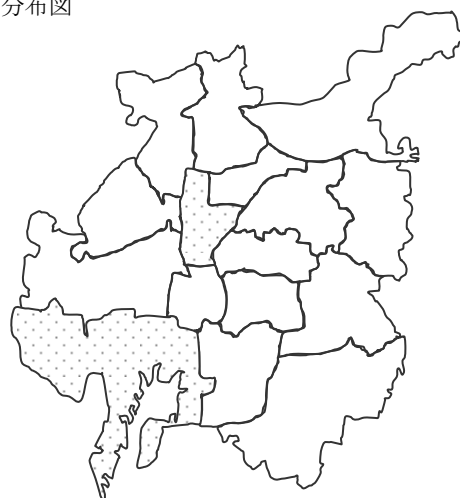
【現在の生息状況／減少の要因】

かつてマメ類の害虫として著名であったが、現在発見は困難な状況にある。減少の要因としては、農薬の普及と、自然環境の変化よりも耕作地に害虫として繁殖し、ヒトへの依存度が高かったことも急に減少した要因として考えられる。

【保全上の留意点】

本種の野生状態での生息地となりうる河川敷の草地の環境を確保することが必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文, 1957. 東海甲虫誌 (第5報). 佳香蝶, 9(33):3-8.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

ヨツボシカミキリ *Stenygrinum quadrinotatum* Bates

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

1970年代までは平地から低山地にかけて普通の種で、灯火に誘引されて室内にもよく飛来したが、1980年代になって減少傾向が指摘されるようになり、少なくとも20年以上市内から生息情報が途絶えている。

【形態】

黄褐色～赤褐色で、上翅中央に4つの顕著な明色の紋がある。

体長は8.5～13.5mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

東区山口町、守山区志段味で採集記録がある。1950年代には、中区でも灯火に飛来した。

【県内の分布】

奥三河から尾張まで記録がある。

【国内の分布】

沖縄県を除くほぼ日本全土。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島～インドシナにかけて分布する。



ヨツボシカミキリ

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地の広葉樹林（おそらくコナラやアベマキなどの雑木林）に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内での採集記録は、いずれも古いもので、1980年代以降の公表された情報はない。1990年以降の記録は、県下では旧旭町から知られるのみ。

減少の要因としては、燃料としての需要がなくなったため、重要な繁殖の場であった薪が無くなったこと、平行して薪の生産地である雑木林が消失、荒廃したことが考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されている里山の雑木林の管理、保全。

なぜ急激に少なくなったかよく判らないので、減少の要因と保護の方法について模索する必要がある。

【引用文献】

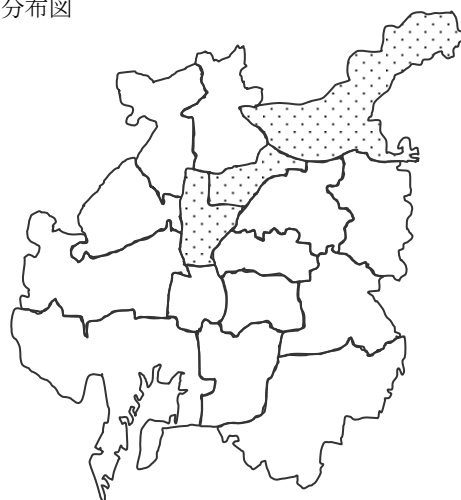
湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知の昆虫 (上), pp.389-433. 愛知県自然保護課.

【関連文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1972. 東海甲虫誌 (第18報), 佳香蝶, 24(92):37-56.

市内分布図



(執筆者 長谷川道明)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

オオシロカミキリ *Olenecamptus cretaceus cretaceus* Bates

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

ケヤキやムクノキの大木に依存する珍しい種で、愛知県下からこれまで知られる生息地は、豊根村分地、豊橋市豊橋公園、名古屋市熱田神宮など数ヶ所に過ぎない。熱田神宮は尾張地方唯一の生息地であるが、都市中心部に孤立した環境で、面積は狭く、他の生息地とは孤立している。さらに、近年は乾燥化によって樹林内の環境は必ずしも安心できるものではない。

【形態】

橙黄色～赤褐色で、表面は白色の鱗毛に覆われている。側面は複眼の後方から前胸上翅にかけて地色が露出し、橙黄色の帯が縦走する。上翅には側面の縦帯に接したやや角ばった円紋が各3対、中央後方には独立した一対の小円紋がある。触角と脚は橙黄色～赤褐色。体長は16～23mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区（熱田神宮）、東区東新町で記録がある。正式な記録にはなっていないが、中区の神社でも戦後しばらくは毎年採集されていた。

【県内の分布】

他に豊根村、豊橋市など数ヶ所で確認されているに過ぎない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾。台湾産は別亜種とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

ケヤキ、ムクノキなど寄主植物の大木を有する森林に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

東区東新町の記録は1950年代のもので、現在も生息環境が残されている可能性は低い。熱田神宮は調査の機会が限られるため、1971年に記録されて以来情報がないが、生息環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

【保全上の留意点】

現在の生息地である熱田神宮の森の保護保全。幼虫は、ケヤキ類の枯れ枝につくため、枯れた下枝や林内に落ちた枯れ枝などを除去しない。また林内の乾燥を少しでも防ぎ、森内の生物多様性を確保するためにも、落ち葉や枯れ木、枯れ枝は放置しておく必要がある。

【関連文献】

佐藤正孝, 1978. 熱田神宮林の昆虫類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書, pp.93-110.

成瀬善一朗, 1957. オオシロカミキリ東区で採集. *Napi News*, (22):8.

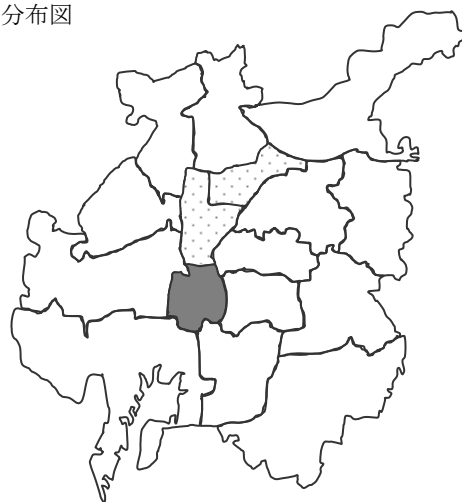
深田雅之, 1971. 名古屋市内で採集したオオシロカミキリ. 月刊むし, (7):36.

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知の昆虫(上), pp.389-433. 愛知県自然保護課.



オオシロカミキリ

市内分布図



(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <チョウ目 セセリチョウ科>

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市とその近郊では、疎林の間のススキ草原や、丘陵間の小湿地の周りに見られたが、近年本種の生息に適した環境が開発等により激減し、本種の姿を見ることができなくなっている。

【形態】

開張32～36mm。雄雌の色彩斑紋はほとんど同じだが雌はやや大型。雄の前翅表面には斜走する弱い性標がある。後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつ。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園、天白区八事裏山、名東区猪高、守山区上志段味などに記録がある。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山地まで広く分布するが、局地的で近年産出量は少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、最新の学研日本産蝶類標準図鑑では「まれ」とある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部。



ミヤマチャバネセセリ

田中多喜彦 採集・撮影

【生息地の環境／生態的特性】

温帯性のセセリチョウで、丘陵や山地の渓谷沿いや林縁の比較的小規模な明るい草地に多く、愛知県では丘陵の小湿地の周辺の草地で見ることが多い。幼虫はススキやチガヤを主食草とし、高茎イネ科草本群落を好む。蛹で越冬し、成虫は4月中旬～5月と7月下旬～8月の年2回出現し、ツツジ類、アザミ類、ヒメジョオンなど各種の花に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980年頃までは、市内でも東部丘陵に散見され住宅の庭にも飛来し、まれな種ではなかった。減少の原因は、目下のところ不明であり、より詳細な全国的な調査が望まれる。

【保全上の留意点】

全国的に減少傾向にあることが分かったのは最近のことである。食草は普遍的な種であり、他の原因による何らかの生態的な脆弱性があると思われる。当面、極力残された湿地を含む草地環境を保全するとともに、遊興施設等での広範囲な農薬散布には十分な配慮が望ましい。

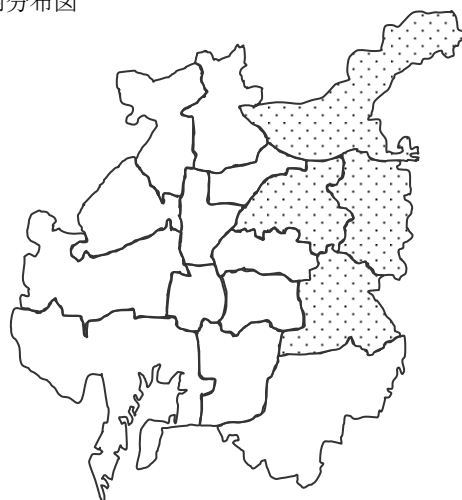
【引用文献】

大曾根剛, 1975. 名古屋市内におけるミヤマチャバネセセリとアサマイチモンジの記録. 佳香蝶, 27(103):40.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.71, p.323. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 アゲハチョウ科>

ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市の都心部に近い産地は開発等により絶滅し、唯一残された産地である守山区東部の丘陵地も、生息に好適な明るい雑木林が減少し、食草のカンアオイ類とともに生息環境が悪化している。

【形態】

開張 56～62mm。雌はやや大きく前胸背に赤褐色毛がある。前・後翅とも黄と黒の目立つ縦縞模様がある。後翅尾状突起の基部に赤い斑紋がある。交尾した後の雌には腹部に交尾付属物がつく。

【分布の概要】

【市内の分布】

1950年代に千種区、昭和区、守山区で発生地が確認されていた。最近、守山区で再び記録されたが、ほとんど市内での記録はない。

【県内の分布】

尾張東部の丘陵地から三河山地にかけて分布していて、標高 400m 以下の山地に多い。

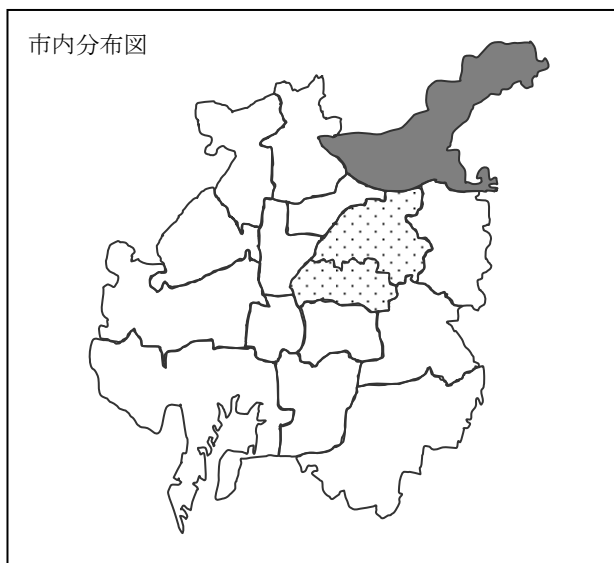
【国内の分布】

本州の特産種。北限は秋田県由利本庄市、西は山口県まで分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

明るい落葉広葉樹を主とした雑木林の林縁や林間の開けた場所でみられる。年 1 回、3 月下旬から発生し、ソメイヨシノの開花期と本種の発生期がほぼ一致する。雄は山頂占有性がある。晴天時に活動し、名古屋市近郊ではショウジョウバカマ、スミレ類、ツツジ類、サクラ類の花で吸蜜する。幼虫の食草は、名古屋市周辺ではヒメカンアオイとスズカカンアオイであり、蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

都心部に近い千種区と昭和区の丘陵地の個体群は絶滅したが、守山区と瀬戸市、尾張旭市との境界付近で 1998 年の記録がある。東谷山では瀬戸市側からの飛来も考えられる。

開発による雑木林の消失・孤立化が減少の主因であるが、雑木林の放置により遷移が進行し、照葉樹が繁茂した結果、林床の照度低下がカンアオイ類の生育に悪影響を及ぼしていること、都市周辺の緑地では剪定や下草刈りなどの過度な管理、害虫駆除目的の薬剤散布等も減少に拍車をかけていると思われる。なお、本種に関しては、チョウ愛好者による採集圧も無視できない。

【保全上の留意点】

里山的な、適度に管理された雑木林環境の維持継続が第一と考えられる。また衛生・樹木害虫駆除目的の薬剤散布を、必要以上にかつ広域に行わないことも大切である。

【引用文献】

- 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
 石塚三郎, 1999. 名古屋市守山区におけるギフチョウの採集記録. 佳香蝶, 51(197):11-12.
 山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
 愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.1,p.4. 保育社, 大阪.
 福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 保育社, 大阪.
 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では守山区竜泉寺周辺に生息地があったが、著しく減少している。西南日本に分布する種で、本州の太平洋側は神奈川県小田原市以南、日本海側は福井県南部以西に分布しているが、分布の北の境界に近い地域では、個体数の減少や生息地の消滅が近年明らかになってきている。

【形態】

開張38～42mm。翅表は全体に暗褐色で、前翅端と後翅端に小さい眼状紋がある。翅の裏面には細かいさざ波状の紋があり、前翅面に1個、後翅に3個の黄色の環で縁取られている大きい眼状紋が目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜泉寺、大森に記録がある。大森の八竜湿地では1985年まで記録がある。

【県内の分布】

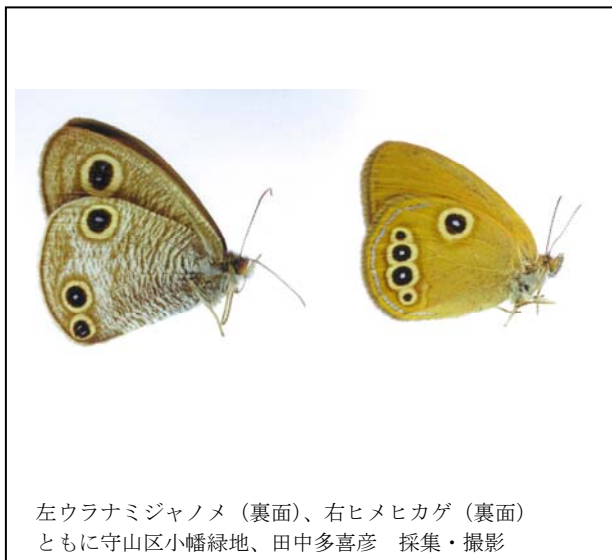
犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ、低標高地に局地的に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。



【生息地の環境／生態的特性】

生息地の多くは、ヒメヒカゲの生息地である湿原やその周辺の低木の生える疎林である。湿地への執着はヒメヒカゲほど強くはなく、田畑周辺の草地にも発生することがある。

名古屋市では6月～7月に第1化がみられ、9月に第2化が少数発生する。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては守山区の湿地周辺に比較的多く見られたが、最近では湿地を含む周辺の植生の遷移が進み、本種も減少している。

田畑への農薬散布の余波を被ったこと、ドクガの駆除や松枯れ防止のための広域的な薬剤空散の影響もあるであろう。

【保全上の留意点】

名古屋市に残された、かつての発生地の湿地及び周辺の草地環境が、今後も継続的に維持されるならば、再発見される可能性も少ないながらある。害虫防除のための薬剤散布は、最小限とすることが必要である。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.59, p.270. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

オグマサナエ *Trigomphus ogumai* Asahina

カテゴリー

【選定理由】

平地から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵では減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫の体長は50mm内外、邦産本属4種のうち最も大きい。黒色地に未熟時は黄色成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は1本。

幼虫は腹端第10節が筒状を呈する本属3種のうち、本種が最も長く、第9節も細長で全体として腹部が細長い印象が一番強い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録された。

【県内の分布】

尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

【国内の分布】

石川県、長野県、愛知県以西の本州、四国の一部、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも必要条件ではないが、泥底で汀に多少なりとも平坦な地面が続くか、低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では通常4月第2週頃始まる。未熟成虫は周辺の林内空地や樹上で過ごす。成虫出現期は4～5月、主に池畔で見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては平野から丘陵地、低山地まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940年代末には名古屋城で、1950～1960年代には千種区東山公園でも見られ、1970年代には天白区、現名東区に産し、名東区の最終と思われる記録は1986年である。守山区東縁の丘陵では2014年現在極く限られた一、二の池に生息しているがこれは隣接する尾張旭市の森林公園の広大な二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修による水位上昇の抑制、周辺林の保全が必要である。

【特記事項】

本種幼虫は名古屋のトンボ研究の先覚である故松井一郎氏、故山本悠紀夫氏により発見された。

【関連文献】

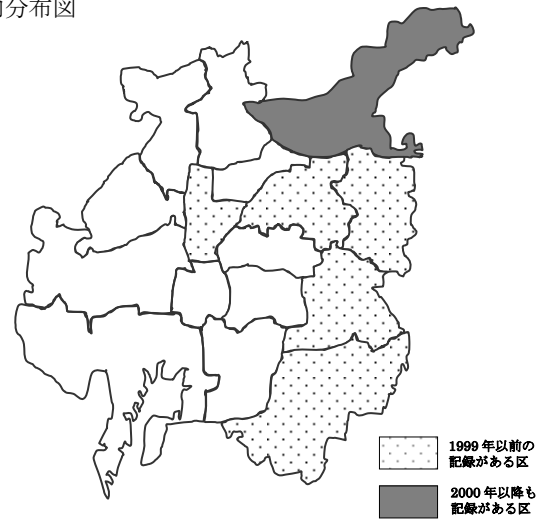
- 安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 安藤 尚, 2008. 愛知と岐阜のトンボ分布資料(10). 佳香蝶, 60(記念号):23-36.
 高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.

(執筆者 高崎保郎)



オグマサナエ 雄
守山区下志段味、2014年4月27日、高崎保郎 撮影

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

平野から丘陵にかけて最も普通のサナエトンボであったが、平野では絶滅状態、丘陵でも減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫の体長は47mm内外。黒色地に未熟時黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は2本であることが、オグマサナエと見分け易い識別点。

幼虫はオグマサナエに比較し腹部第9節は幅広く、円筒状の第10節はやや短いことで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張から三河の平地、丘陵に分布するが、平地では絶滅状態である。

【国内の分布】

福井県、静岡県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵、低山地の池沼に生息する。水生植物の存在は必ずしも生息条件ではないが、泥底で汀には多少なりとも平坦な地面が続くか低い岸であることが必要である。

羽化は水面の浮遊物上か汀の地面や低い杭上などで行われる。羽化はこの地方では常にオグマサナエの羽化の一週間遅れで始まる。未熟成虫は周辺の林内の空き地や樹上で過ごす。成虫出現期は4～6月上旬。主に池畔で見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては平野から丘陵、低山地に広く産したが、現在では平地では絶滅状態、丘陵でも産地は減少している。1940年代末には名古屋城で、1950年から60年代には千種区東山公園などでも見られ、1970年代には天白区、緑区、現名東区に産した。守山区東縁の丘陵では2014年現在一つの池に生息している。オグマサナエと同様隣接する二次林帯に負うところが大きい。本市東部に接する尾張東部丘陵（瀬戸市、長久手市、日進市）では現在も比較的普通に見られる。

開発が著しい平野部での生息池沼の水質悪化や周辺を含む自然環境の悪化が減少の主要因である。全国的にも地域により減少している。

【保全上の留意点】

本市では絶滅状態であるが、一般的には岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保持と環境保全、改修等による水位上昇の抑制、周辺林の保存が必要である。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
安藤 尚, 2008. 愛知と岐阜のトンボ分布資料(10). 佳香蝶, 60(記念号):23-36.
高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.

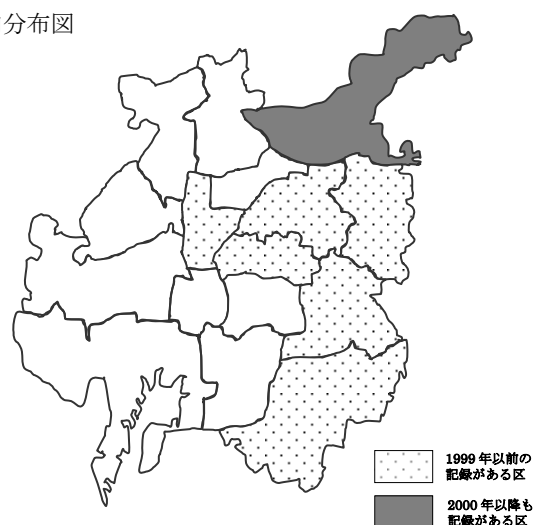
(執筆者 高崎保郎)



フタスジサナエ 雄

守山区下志段味、2014年4月27日、高崎保郎 撮影

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

ホンサナエ *Shaogomphus postocularis* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

平野の緩流を主な発生源としているため、特に尾張平野では激しい開発の影響を受け絶滅状態になっている。

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長51mm内外、体形が太短い中型のサナエトンボ。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色の斑紋を有する。

幼虫はサナエトンボとしては中型。やや細長い紡錘状。触角は細長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、西区、中村区、昭和区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

現在は主として三河の丘陵、低山地に分布する。稀に尾張部で偶発的発見例がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、極東ロシア。



ホンサナエ 雄成虫 守山区竜泉寺、1951年5月3日、幼虫 守山区中志段味、2013年4月15日、いずれも高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平野や丘陵の泥底中小河川を主たる発生源とし、庄内川、矢作川などからも発生する。琵琶湖のような波のある大湖にも生息する。

成熟成虫は河床の石やコンクリート河岸に静止し縄張を張り、時々水面を敏速に飛翔する。丘陵の灌木帯にも飛来する。成虫の出現期は4月下旬～5月。

【現在の生息状況／減少の要因】

三河の矢作川水系、豊川水系では現在でも比較的普通に産する所があるので県のレッドリストの対象になっていないが、かつては東山公園や守山区竜泉寺などにも普通であった。尾張部では典型的な絶滅種である。稀に尾張平野の低地や瀬戸市内尾張東部丘陵で発見されることがあるが、木曽川や庄内川又はその支流からの飛来であろう。現在幼虫の生息が確認されているのは守山区の庄内川畔だけである。

都市化の影響を強く受ける市近郊田園地帯や隣接丘陵地を主生息地としたため著しく減少した。

【保全上の留意点】

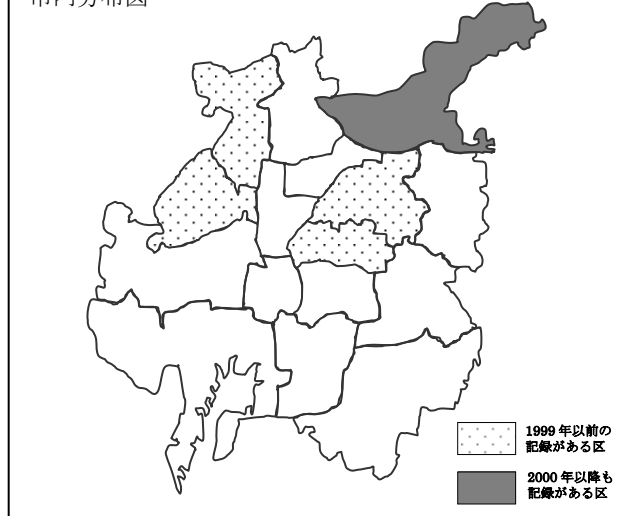
市内では既に絶滅状態であるが、一般的には水田地帯、隣接丘陵地の小流の水質、自然的な河川環境の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys)

カテゴリー

【選定理由】

かつては平地から丘陵地にかけての緩流に広く生息していた普通種であったが、分布域、個体数の減少が著しい。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長65mm内外、やや大型のサナエトンボ。黒地に未熟時黄斑、成熟時灰緑色斑を有する。近似種ヤマサナエに比べ概して胸側2本の黒条は細い。雌の産卵弁が下方に突出するのが特徴。ヤマサナエ雌は突出しない。

幼虫の腹部後半はヤマサナエより細身。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、昭和区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

尾張東部丘陵から三河の丘陵、低山地にかけて分布する。

【国内の分布】

新潟、関東以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵の砂泥底の緩やかな小・中河川に生息する。泥が多く植物質の薄い堆積があるような所を好む。時に低山地の川の砂防堰堤にせき止められた広い池状止水域や、大河川の汀の緩流部に生息する。

雌は浅い砂泥底に打水又は打泥産卵する。雄は近くの地面に静止し雌の飛来を待つ。成虫の出現期は5～6月。

【現在の生息状況／減少の要因】

開発の影響を強く受ける平地や平地に接する丘陵に所在する中・小河川に幼虫が生息するため本種は著しく減少した。開発による影響が比較的少ない丘陵から低山地の小河川や林縁の細流を生息の場とする近似種ヤマサナエの方が現在でも比較的普通に見られ、混棲地では往時とはその多寡が逆転した。かつて市内の名古屋城や東山公園でも普通に見られたが、現在市内で生息するのは守山区の庄内川畔付近に限られると思われる。県内でも稀になった。

平地の中小緩流の喪失、河川環境や水質の悪化が減少要因である。

【保全上の留意点】

市内では生息地が限られたが、一般的には平地、平地に接する丘陵の中小河川の水質や河川自然度保全が必要である。

【関連文献】

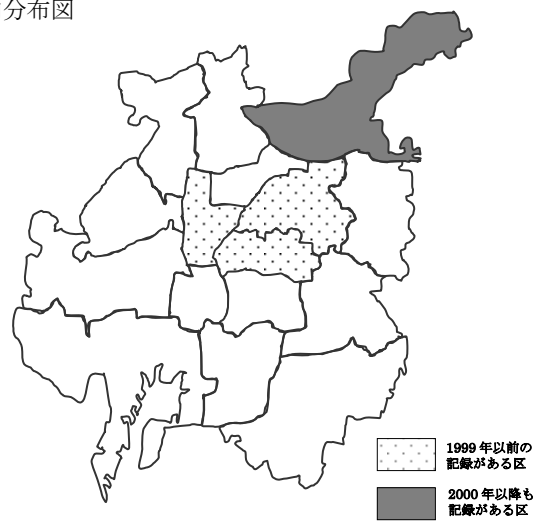
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)



キイロサナエ 雄成虫 千種区東山公園、1951年5月30日、
幼虫 守山区上志段味、2013年4月29日、
いずれも高崎保郎 採集

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler)

カテゴリー

【選定理由】

市内での記録は極く僅かしかない。幼虫の生息に適する湿地も限られる。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長60mm内外、金属緑色の中型種、同属他種に似るが、尾部付属器、腹部黄斑の有無などにより識別できる。

幼虫は肢が長く、同属他種に酷似するが、背棘の形状の微妙な差異などで識別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、守山区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

丘陵地から山地にかけて局所的に分布する。

【国内の分布】

北海道全域、本州、四国、九州の一部。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



エゾトンボ 雌
千種区田代町、2010年9月18日、安藤泰樹 採集、
横地鋭典 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵から山地にかけての明るい大小の湿地に生息する。7月頃の羽化期から秋にかけて雄は湿地や水田上、林間の空地や路上を地上1~2mの高さでゆっくり行きつ戻りつする。幼虫期は1~3年程度と見られる。この地方では少ないが稀に比較的多数見ることもある。成虫の出現期は7~9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

県全体でも現在では確認されている産地は少なく、名古屋市での記録は数例以下である。比較的近年では守山区大森八竜湿地（2000年）と千種区田代町の平和公園（2010年）での記録があり、数少ない市内の湿地に極く稀ではあるが現在のところ残存していると見られる。隣接する長久手市では多くはないが安定的に発生している。

都市周辺にあつては、丘陵地形の開発による湿地の消失、1990年代に入ってからのも水傾向の気象の影響、山地にあつてはダム改修の水位上昇による池上部の湿地の縮小、消滅などによる生息地の減少が主な減少要因であろう。

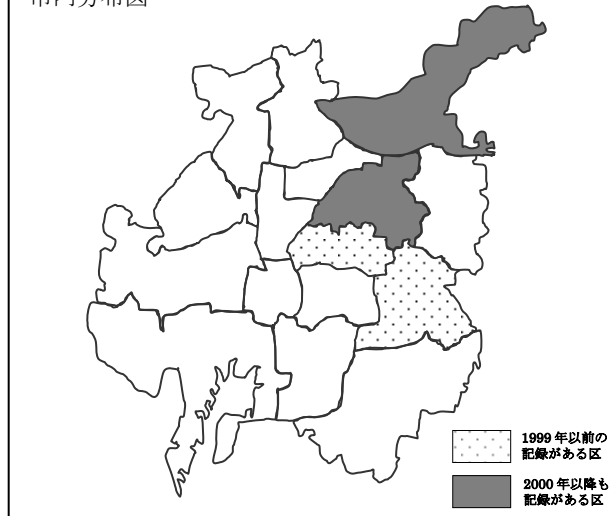
【保全上の留意点】

集水域である周辺の林も含む湿地の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
安藤泰樹, 2011. 名古屋市千種区のエゾトンボの記録. 佳香蝶, 63(247):79.

市内分布図



(執筆 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

キトンボ *Sympetrum croceolum* (Selys)**【選定理由】**

発生源が限られもともと個体数は多くなかったが、近年は市内で見ることがなくなった。県内でも著しく減少した。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長は42mm内外。体に斑紋はなく橙黄色一色で、翅は前後翅共基部と前縁が鮮やかな橙黄色を呈し、アカトンボでは最も美しい。

幼虫は背棘を第9節に有することが特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、西区、中村区、中区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

現在は主として丘陵から低山地にかけて局所的に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア。



キトンボ 雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1986年10月18日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地、低山地に所在する水生植物が豊富で樹林を伴う池沼で見られるが、散発的で個体数も少なく多産地以外ではたまたま飛来したという印象が強い。安定的多個体の発生源は、水が清澈で遠浅の岸にタヌキモ類が繁茂するような産卵に適する環境を有する池である。

岸に沿って沈水植物が存在する水面上空を連結して飛び産卵する。成虫出現期は6～11月であるが、羽化は秋まで続き多産地にあつては翌年1月初・中旬積雪上に静止する個体を見、かなり耐寒性を有する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては名古屋城水堀や南区の池など平地でも見られた。現在市内では発見できないが、飛来の可能性もなくはない。隣接する尾張東部丘陵で極く稀に飛来個体を見ることがあり、どこかに発生源が存在するのであろうが、県全体でも近年安定的な発生地は知られていない。平地から低山地にかけての産卵に適する池が減ったことが減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内では絶滅状態であるが、一般的には水生植物が豊富で産卵の適地となる池沼の保全が必要である。

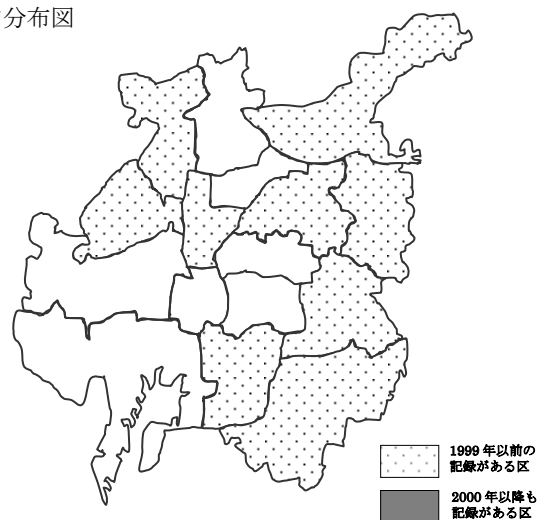
【特記事項】

近傍では1980年代末まで、瀬戸市海上の森篠田砂防地に多産した。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



1999年以前の
記録がある区
2000年以降も
記録がある区

(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <バッタ目 クツワムシ科>

クツワムシ *Mecopoda niponensis* (de Haan)**【選定理由】**

‘鳴く虫’の代表的種類。林縁のマント群落や河川敷のクズの繁茂するような草地に見られる。こうした環境は開発や整備のため減少しつつあり本種の存続が懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

有翅。雌腹端の産卵器は直刀状で 27～31mm ほど。愛知県内産直翅類の内では最大級の種類。体色は緑色のものと褐色のものがある。雄の翅は幅広く短め、雌では幅は狭く長め。

体長（翅端まで）は雄 49～55mm、雌 51～67mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

瑞穂区、中区。

【県内の分布】

知多半島、渥美半島を含め広く分布する。岡崎市、西尾市、犬山市、瀬戸市、豊田市（足助町、猿投町、笹戸町など）南知多町、武豊町、美浜町、渥美町、作手村（豊根地区）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）など。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林林縁のマント群落や河川敷・堤防のり面などのクズが繁茂するような草地などに見られる。夜間は草上に出て“ガチャガチャ……”と大きな声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の一つは瑞穂区山崎川。この場所はコンクリートブロックで護岸されてしまったため、本種の最近の生息は確認できていない。中区の記録は、人為的な移動を含め、全くの偶産と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷や堤防のり面などの草本の過度の刈り込みを控え、クズやその他の丈の高い草も適度に刈り残すこと。また、広葉樹林のマント群落の刈り込みを控え、適度に残すこと。

【特記事項】

天白区天白川河川敷には、別種タイワンクツワムシが生息している。

この種も河川敷の草刈りにより生息数が減少傾向にあるため、保護対策を考慮する必要があるかもしれない。

【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目 (2). 愛知県の昆虫 (下), pp.5-20. 愛知県.

日浦 勇, 1993. クツワムシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.65. 保育社, 大阪.

水野利彦, 2008. 新修 名古屋市史 資料編 自然 目録, p.99. 名古屋市.

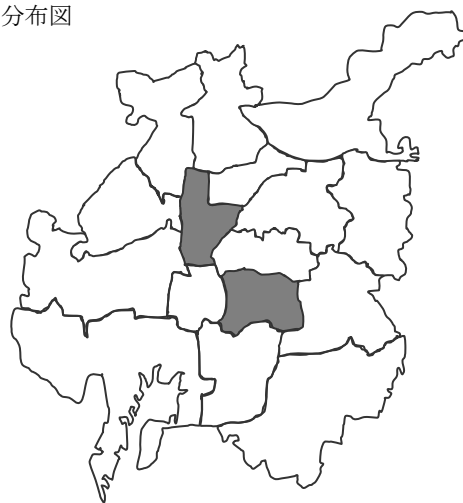
日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.130, p.440. 北海道大学出版会, 北海道.



クツワムシ

知多郡美浜町、1999年10月、岡田正哉 撮影

市内分布図



(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 グンバイウンカ科>

ハウチワウンカ *Trypetimorpha japonica* Ishihara**【選定理由】**

全国的にも産地が限定され、特に低地の湿地環境に生息するため、開発などで生息環境が減少している。
市内では守山区東谷山における古い記録しか存在しない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長約 3mm の非常に小型のグンバイウンカの一つである。

後脚脛節の側棘は 2 本。前翅中央部が黒色で、そこから外縁に向かって放射状に黒色帯が見られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山から唯一の記録がある。

【県内の分布】

豊田市、みよし市、大府市、春日井市、日進市など。

【国内の分布】

本州（関東以西）、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。



ハウチワウンカ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ススキ・チガヤなどが点在して生育する湿地帯に生息する。草本類が繁茂する湿地よりも、砂礫地が広がる比較的明るい環境で見られる。

成虫は 8 月～9 月にかけて出現し、長翅型と短翅型が知られるが、長翅型は稀である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の生息情報はほとんど得られていない。東谷山麓の湿地は宅地造成などで大部分消失したとされ、生息環境は悪化している。東谷山における最近の調査でも発見できていない。

主として平野部の湿地環境に生息するため、宅地造成などで生息地そのものが消滅した。

【保全上の留意点】

特に平野部における湿地環境の保全および水源地である後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

【特記事項】

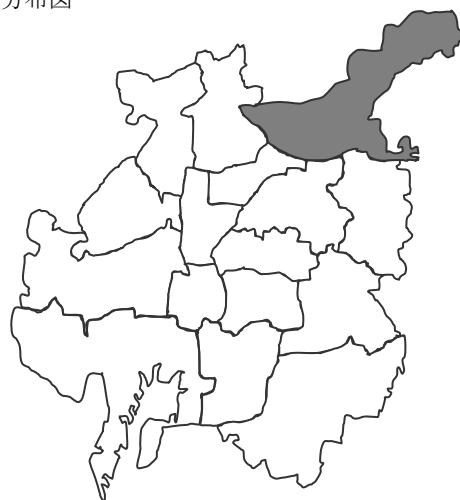
最近の調査で、県内では新たな産地が見つかった。

【関連文献】

堀 義宏, 1989. 都市環境下の昆虫相について (1) 名古屋市の類吻類. 名古屋市衛生研究所報, 35:118-123.
堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の類吻亜目. 愛知県の昆虫 (上), pp.105-122. 愛知県.

(執筆者 矢崎充彦)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 アカジマウンカ科>

アカジマアシブトウナカ *Ommatidiotus japonicus* Y. Hori

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

これまで生息が確認された産地は、シラタマホシクサなど湿性植物が生育する都市近郊の低湿地である。植生遷移、埋め立てなどによって生息地そのものが消滅する危険が極めて大きい。

名古屋市がタイプ産地となっており、学術的にも重要である。

【形態】

体長は翅端まで、雄は約 4.2mm、雌は約 5.2mm。体色は灰緑色で、背面は頭頂から小楯板の先端まで赤色の条線がある

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区から唯一の記録がある。

【県内の分布】

新城市、豊田市、みよし市。

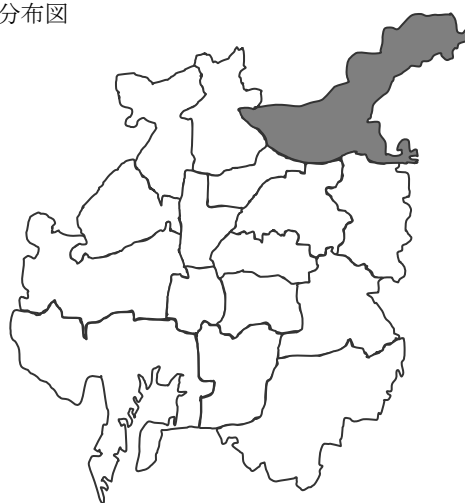
【国内の分布】

本州（東海地方）。

【世界の分布】

日本固有種。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

名古屋市東部丘陵帯に点在するシラタマホシクサなどが生育する湿地に限って生息する。

成虫は6月～9月にかけて得られるが、元々得難い種で、詳しい生態は不明である。

【現在の生息状況／減少の要因】

東谷山における近年の調査では確認されていない。県内でも最近の生息情報は得られておらず、既知産地のいくつかも消滅した。

湿地に生息するため、宅地造成などの埋め立てにより、生息地そのものが消滅した。

【関連文献】

Hori, Y., 1977. A new species of the genus *Ommatidiotus* (Homoptera, Issidae) from Japan. *Annotations Zoologicae Japonenses*, 50(2):127-130.

堀 義宏, 1982. 愛知県の半翅目. 昆虫と自然, 17(12):22-25.

堀 義宏, 1989. 都市環境下の昆虫相について (1) 名古屋市の頰吻類. 名古屋市衛生研究所報, (35):118-123.

堀 義宏・佐藤正孝, 1984. 半翅類. 愛知の動物, pp.99-107. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫, 1990. 愛知県の頰吻亜目. 愛知県の昆虫 (上), pp.105-122. 愛知県.

(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 アメンボ科>

オオアメンボ *Aquarius elongatus* (Uhler)**【選定理由】**

平野部から山地にかけて、ため池や河川上流域の緩流部に生息している。最近特に、平野部での生息確認ができにくくなった種の一つである。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長20～27mmで、本州産アメンボ類では、最大種である。通常、雄の方が雌よりも大型で、雄の大型個体では、中脚が顕著に長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、熱田区。東部丘陵帯を中心に広く分布していたと考えられるが、正式な記録がほとんど残っていない。

【県内の分布】

新城市、豊田市、岡崎市、西尾市、瀬戸市、春日井市、日進市、犬山市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、韓国（済州島）、台湾。



オオアメンボ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹林に囲まれた比較的水深の深い大きなため池などに生息し、やや薄暗い場所を好む。

夏以降になると、ため池から移動し、河川上流域の緩流部で見られる場合がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に丘陵地から山地にかけて、樹林に囲まれた比較的大きなため池に生息し、谷筋の砂防堰堤の水たまりや河川上流部の緩流部などで見られることもある。

平野部での減少の大きな要因としては、ため池の改修や埋め立て、水質の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

現在残されたため池の環境を維持すること。広い解放水面が必要であるため、スイレンやホテイアオイなど観賞用水草を軽々しく投入しないよう留意する必要がある。

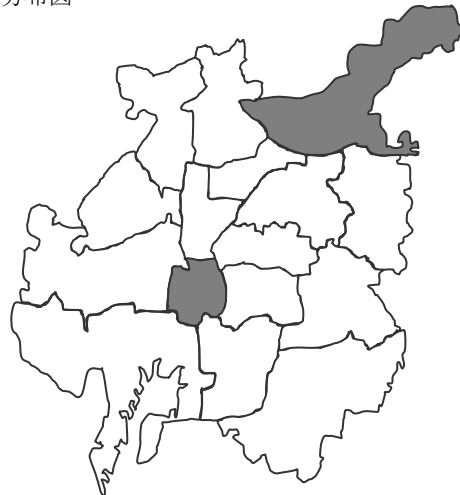
【特記事項】

吉富・長谷川（1997）では、かつて千種区東山公園に生息していたという情報が述べられているが、正式な記録は残されていない。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7):35-39.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 アメンボ科>

エサキアメンボ *Limnporus esakii* (Miyamoto)**【選定理由】**

全国的にも生息地が限定され、ため池環境の悪化により、生息適地が年々少なくなっていると考えられる。
市内ではごく最近になって生息地が明らかになった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 8~10mm の小型で細身のアメンボである。体色は暗赤褐色~赤褐色で、体側に銀白色の毛による縦帯をもつ。
触角は第4節が最も長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区（名古屋城濠）、名東区（塚ノ杵池）の2ヶ所。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、田原市、豊田市、安城市、春日井市、日進市、一宮市、東浦町、常滑市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。



エサキアメンボ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地にかけて、ヨシやガマなど抽水植物が繁茂するため池に生息する。

抽水植物帯の中に生息し、開けた水面上にはほとんど出てこない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城の濠では抽水植物が減少傾向にあり、生息環境の悪化が見られたが、2014年の調査では、多くの個体を確認できた。塚ノ杵池は安定した産地と考えられるが、オオクチバス（ブラックバス）などの外来種が入り込んでおり、注意が必要である。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

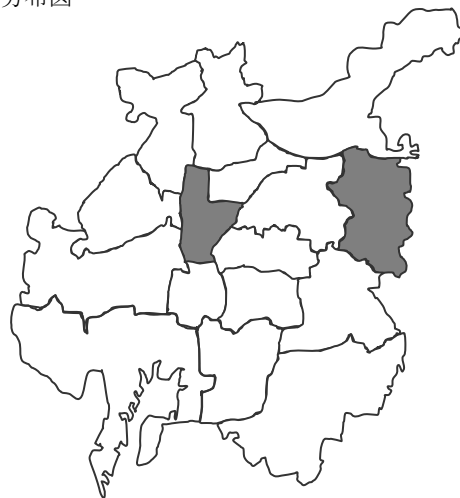
【保全上の留意点】

生活排水の流入などによる水質悪化を防ぎ、現存する抽水植物帯を保全する。特に抽水植物帯は本種の生息に必須の条件であるため、ため池の改修作業などではこれが失われないよう十分に注意する必要がある。

【引用文献】

矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

ホソハンミョウ *Cicindela gracilis* Pallas**【選定理由】**

もともと多い種ではない上に、主要な生息地が耕作地や河川敷であるため、人為的な影響を受けやすい。かつては尾張地方の平野部各地に生息していたと考えられるが、都市化や河川整備による生息地の消失のため、現在では発見が困難になっている。

【形態】

後翅が退化して肩が丸まった細型の種。光沢のない黒色で、上翅後半部側部に2対の黄色の紋がある。また上翅後方に赤色の紋をもつ型もある。

体長は10～12mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区小幡、庄内川勝川橋、中村区日比野町（河路，1986）。

【県内の分布】

尾張地方の平野部のみ知られる。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、シベリア。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



ホソハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

桑畑、果樹園などの耕作地や、河川敷の草地と裸地が混在するような環境に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

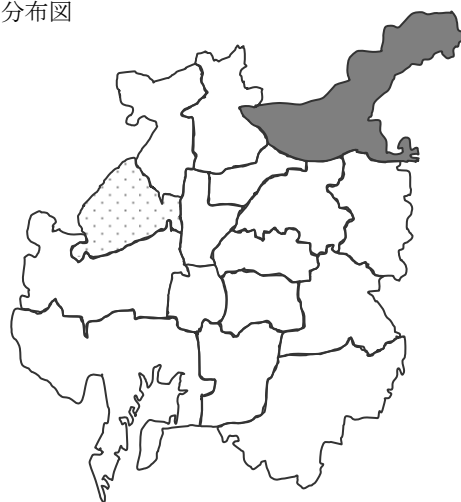
守山区内の庄内川河川敷では1980年代までは生息情報がある。庄内川河川敷には、わずかながら生息可能な環境が残っているので、現在も生息している可能性は高いが、個体数はかなり少ないものと推測される。

減少の要因としては、宅地造成、耕作地の消失、河川改修などによって生息環境が失われたこと、生息地であった耕作地での農薬使用などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在の生息地である河川敷をむやみに開発しないこと。また、生息地周辺では、農薬の使用を制限するなどの配慮が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

河路掛吾，1986. ホソハンミョウの記録. 佳香蝶，38(148):60.

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コガシラミズムシ科>

マダラコガシラミズムシ *Halplus sharpi* Wehncke**【選定理由】**

平野部から丘陵地にかけて生息したと推測されるが、平野部の多様な水域の減少で生息地が激減したと考えられ、近年の生息情報を持たない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.3～3.8mm。上翅の黒紋は明瞭で、基部には横紋がある。側方の円紋および中央紋より斜め前方の紋が明瞭である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区福田川（名古屋市環境保全局，1996）。

【県内の分布】

1961年に安城市から記録されている。現在は、豊明市、豊橋市で生息が確認されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平野部の止水域に生息し、成長は5月～8月にかけて見られる。

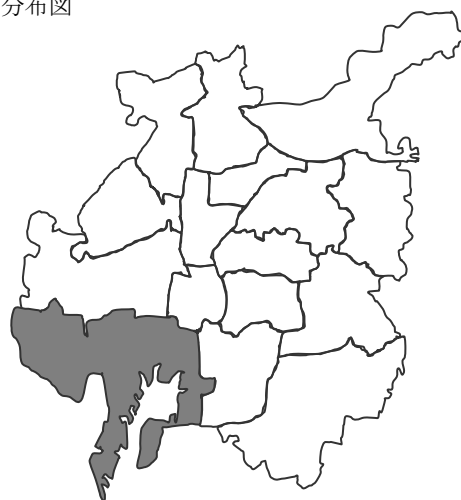
【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の減少、圃場整備などにより生息地が減少、また農薬散布や生活污水により環境を受けたと考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然環境に近い池や水辺環境を保全することが、将来的な回復の可能性を残すことになると思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

名古屋市環境保全局，1996．平成8年版 名古屋市環境白書（資料編）．名古屋市．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.293．同県環境部自然保護課．

神谷一男，1961．東海地方の珍しい昆虫．名古屋鉄道刊，名古屋．

中根猛彦，1985．日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討．北九州の昆虫，32(2):61-67．

佐藤正孝，1984．日本産水棲甲虫の分類学的覚え書き，Ⅰ．甲虫ニュース，(65):1-4．

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），愛知県，pp.200-477．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科>

キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky)**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧IB類

【形態】

体長3.0～3.4mm。体型はやや長い逆卵形。背面は微細印刻を持ち強い光沢がある。頭部、前胸は淡赤褐色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区（池竹，2012）。

【県内の分布】

日進市（戸田ほか，2013）、長久手町（戸田ほか，2013）、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、タイ、ミャンマー、ベトナム、インド。



キボシチビコツブゲンゴロウ

天白区、2011年9月26日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、ヨシやガマなどの抽水植物が豊富な池に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、発見された溜池は、池干しが行われた後、開放水面が減少し簡単には本種の確認ができない状態にある。安易な池干しは、本種などの昆虫の極端な減少を招く。

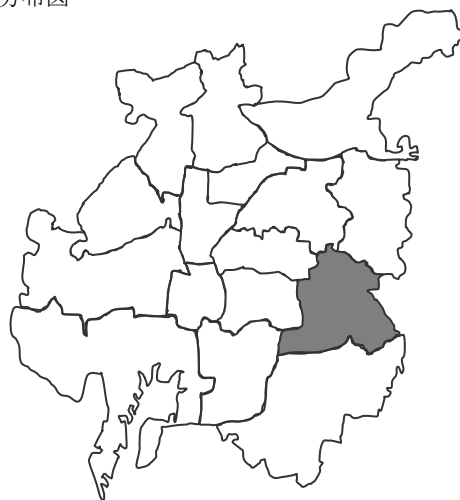
【保全上の留意点】

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

佐藤（1984）によって1962年と1963年に知多半島の Gonodo-ike から得られた個体が日本初記録として報告された。その後の記録が無かったが、愛知県からは48年ぶりに名古屋市中で確認された（池竹，2012）。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県.
池竹弘旭，2012. キボシチビコツブゲンゴロウを愛知県名古屋市中で採集. ホシザキグリーン財団研究報告，(15):10.
戸田尚希・蟹江 昇，2013. 愛知県から採集された甲虫II. 佳香蝶，65(256):53-56. 名古屋昆虫同好会.

【関連文献】

佐藤正孝，1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書I. 甲虫ニュース，(65):1-4.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑II，pl.33,p.182. 保育社，大阪.
森 正人・北山 昭，2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版，東京.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

コミズスマシ *Gyrinus curtus* Motschulsky

カテゴリー

【選定理由】

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 4.9～5.6mm。成虫は水面の上下を同時に見られるように複眼が分かれ、脚は扁平で水面を高速で泳ぎ回れるようになっている。比較的小型。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区（佐藤，1990）。

【県内の分布】

豊田市（足助町）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、千島。

【世界の分布】

サハリン。



【生息地の環境／生態的特性】

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

【保全上の留意点】

市内のため池では、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

ミズスマシと似ているが、体長は少し小さい。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.37, pp.202-203．保育社，大阪．

新修名古屋市史資料編集委員会（編），2008．昆虫類．新修名古屋市史資料編 自然，pp.102-156．名古屋市．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

ガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平野から山間部まで普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生育に適した水域が開発によって失われ、生息地が極端に少なくなった。近年極端に数を減らしている種である。

【形態】

体長 33～44mm。後胸突起は腹部第2節に達する、腹部は無毛。

【分布の概要】

【市内の分布】

中村区中村公園（森・吉田，2006，採集は1954年）。

【県内の分布】

弥富市鍋田干拓、犬山市池野、春日井市、尾張旭市森林公園、豊根村三沢、豊川市一宮町日吉原、岡崎市秦梨、安城市池浦町。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾。



ガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来した。

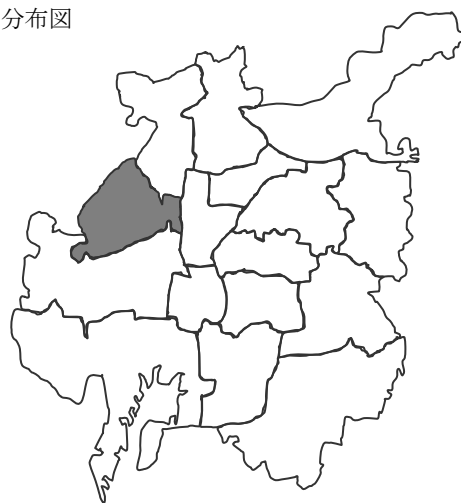
【現在の生息状況／減少の要因】

水田の放棄、ため池の消失、汚水の流入などによって減少したと思われる。近年の減少は著しい。

【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

市内分布図



【引用文献】

森 功一・吉田拓朗，2006．名古屋市内で採れた甲虫の古い記録．佳香蝶，58(225):21-23．

【関連文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp. 204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

上野俊一・黒沢吉彦・佐藤正孝（編），1985．原色日本甲虫図鑑（II），p. 215．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 シデムシ科>

ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold**【選定理由】**

平野部に生息する代表的なシデムシとして知られていた種であるが、小動物の死骸を埋葬して産卵する習性のため、良好な自然環境が必要であり、減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

黒色で、各上翅には2帯の鮮やかな赤色の帯状紋がある。帯状紋は、会合線に達することなく、中に黒点を含まない。後脚頸節は強く湾曲する。

体長は14～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区で記録がある。

【県内の分布】

尾張地方～西三河平野部で記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾。



ヤマトモンシデムシ

【生息地の環境／生態的特性】

平野部に生息し、小動物の死体に集まる。

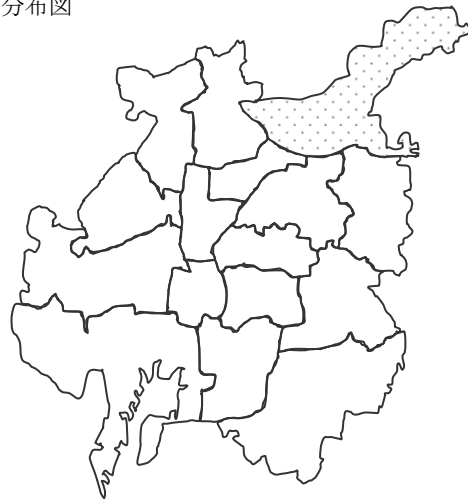
【現在の生息状況／減少の要因】

最近の生息情報はほとんど得られていない。残されている記録、標本はいずれも1950年代のものである。減少の要因としては、都市化とともに生息環境が失われたこと。野生動物の減少や衛生環境の改善により、餌である動物の死体等がなくなったことが考えられる。

【保全上の留意点】

減少の背景に衛生環境の改善による影響も少なからず考えられるので、保全対策は簡単ではない。河川敷など比較的自然環境が残された地域を維持することが必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.

穂積俊文, 1956. 東海甲虫誌 (2). 佳香蝶, 8(28):1-8.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

アカマダラハナムグリ *Poecilophilides rusticola* (Burmeister)**【選定理由】**

幼虫は、猛禽類やサギ類などの巣材の中で成育し、成虫は樹液に集まる。よって猛禽類の減少が、本種の減少に深く関与している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	情報不足

【形態】

背面は全体に赤褐色で小黑点が散在する。腹面は赤褐色の中胸突起を除いて黒色。生きている時は鮮やかなオレンジ色をしているが、死ぬと暗赤色になってしまう。前脚頸節には2個の外歯がある。

体長は14～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区八事と東区で古い記録(穂積, 1958)がある。

【県内の分布】

三河地方の丘陵地に記録が多い。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

済州島、朝鮮半島、シベリア東部、中国、モンゴル。



アカマダラハナムグリ

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の雑木林に生息する。

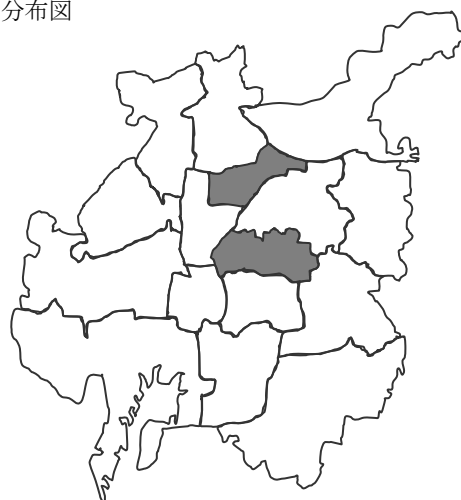
【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の記録は1950年代のもので、少なくとも近年同好会誌などに掲載された採集報告はない。豊田市、長久手市では生息している。

【保全上の留意点】

猛禽類の営巣する里山などを保全する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

穂積俊文, 1958. 東海甲虫誌 (第6報). 佳香蝶, 10(34):1-14.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 タマムシ科>

クロマダラタマムシ *Nipponobuprestis querceti* (E. Saunders)**【選定理由】**

エノキなどの大木に見られるが個体数は少ない。生息地は平野部に偏る傾向があるが、平野部に残存する大木は少なく、都市化や乾燥化に伴い生息できる環境は縮小している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長17～28mm。黒色で、赤銅あるいは青緑色の光沢を帯び、上翅には多数の黄白色の小円紋を持つ。近似のアオマダラタマムシとは、体色の他、上翅の陥凹紋を欠くことなどで区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区、名古屋城（長谷川，2002，採集は1950年採集）。

【県内の分布】

稲沢市（穂積，1965）、岡崎市（大平，1985）、豊橋市（穂積，1990）。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国中部。



クロマダラタマムシ

岡崎市矢作町、1998年7月26日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平野部及び丘陵部のエノキ等の大径木のある雑木林に生息。成虫は5～7月に出現し、樹幹部に見られ、幼虫はウロの周囲や枯死部で見つかることが多い。

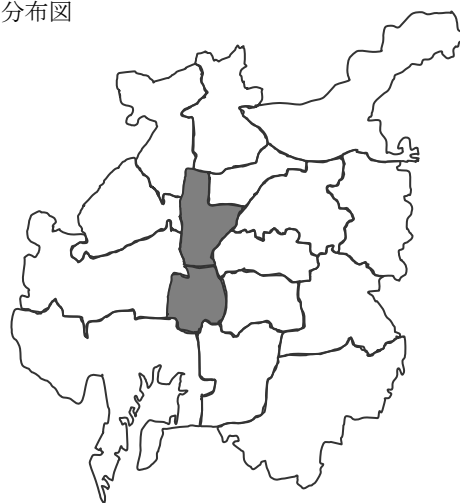
【現在の生息状況／減少の要因】

近年の記録は聞かれないが、私信によると熱田神宮から採集例がある。

【保全上の留意点】

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務と思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

- 長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵 森部一男コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．
 穂積俊文，1965．船越俊平氏の標本箱より．ナビニュース，55:550．
 穂積俊文，1990．愛知県の甲虫類（Ⅱ）．愛知県の昆虫（上），pp.232-308．愛知県農地林務部自然保護課．
 大平仁夫，1985．岡崎市の昆虫類．岡崎市史，自然，pp.1024-1096．

【関連文献】

- 愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.298．同県環境部自然保護課．
 蟹江昇・戸田尚樹，2008．愛知県のタマムシ．佳香蝶，60(234):207-230．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ゲンジボタル *Luciola cruciata* Motschulsky**【選定理由】**

清流に生息する種で、戦前には瑞穂区の石川橋周辺（山崎川）にも生息していた。河川の汚れや河川改修などによって減少した他、「保護」の名の下で行われる放流事業や他個体群の移入による遺伝子汚染の脅威も拡大している。

【形態】

黒色。前胸背は赤色で、十字の黒紋がある。
体長は10～16mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

戦前までは市内各地に見られた。現在見られる生息地には少なからず人の手が加わっており、どこまで自然個体群と判断していいのか難しい。市内での自然分布域は、守山区に1ヶ所だけ残存している。

【県内の分布】

丘陵地～山地にかけて広く分布する。

【国内の分布】

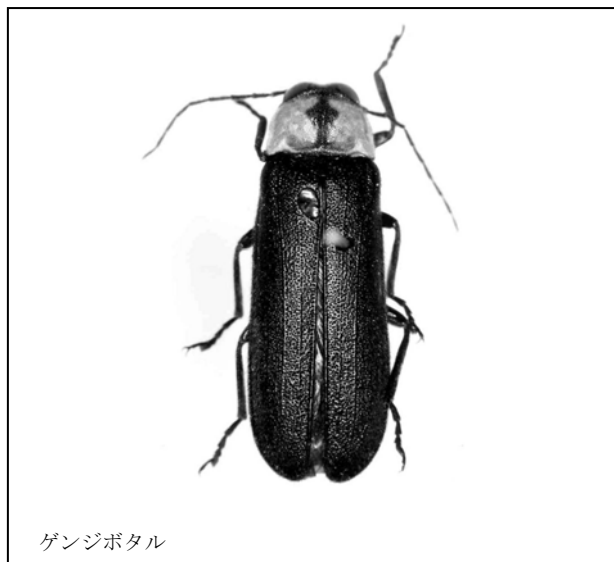
本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ゲンジボタル

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫の餌であるカワニナ類が生息する清流に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

放流事業が盛んに行われているため、天然の個体群の生息状況については、把握しにくくなっているが、守山区には自然個体群と思われるものが生息している。減少の要因としては、河川の汚れや改修による生息地の消失が主要因として考えられる。また目には見えないが、放流事業による遺伝子汚染がかなり進行していると見るべきであろう。

【保全上の留意点】

ホタル保護の名目の下、各地で放流事業が盛んに行われているが、安易な放流は、生態系の攪乱や遺伝子汚染を招き、わずかに生き残った自然個体群を絶滅させかねない危険な行為であることを認識する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる, 24pp. 名古屋市.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ヘイケボタル *Luciola lateralis* Motschulsky**【選定理由】**

水田や池、湿地などに生息するホタルで、かつては市内各地に生息していたと考えられるが、非常に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

ゲンジボタルに似るが小型で前胸背中央の黒条は十字にならない。

体長は7～10mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

確実な採集記録として残されているのは千種区東山のみであるが、少なくとも戦前は各地に生息していたものと思われる。

【県内の分布】

平地から山地にかけて広く記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、シベリア。



ヘイケボタル

【生息地の環境／生態的特性】

水田、湿地、池などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市街化によって水田は宅地になり、ため池は埋め立てられ、生息できる場がほとんど失われた。また、畦をコンクリートで固める農業の構造改善による蛹化場所の亡失や農業による水質悪化とともに水田は、ホタルの生息できる場所ではなくなった。

人間生活の影響で、ごく普通であった種が激減した例のひとつである。

【保全上の留意点】

生息環境としての水辺環境の回復が第一の条件である。その後に自然での定着を待つことが本来の方法である。しかし、生息域の分断から、市内での回復は見込めないと思われるので、一時的には近隣からの移入も必要であろう。

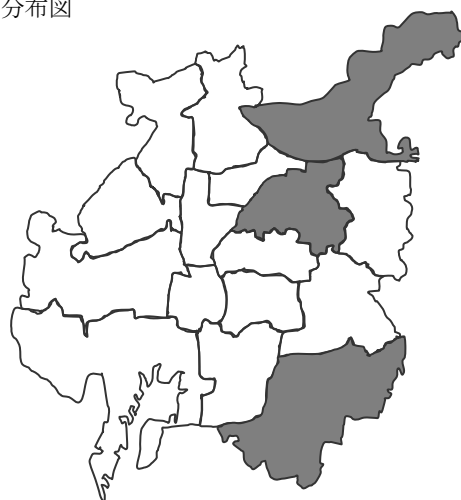
【引用文献】

高橋敬, 1975. 甲虫雑記 (1), 名古屋市東山の甲虫. 佳香蝶, 27(101):9-10.

【関連文献】

名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる. 24pp. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

マエジロツトガ *Pseudocatharylla infixella* (Walker)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

全国的に既知産地が局限されている。愛知県では名古屋市の庄内川河口に産するほか、旧弥富町鍋田でも記録されている。汽水域に近い河口付近のヨシ群落を生息地とするため、環境の改変により容易に産地が消滅する恐れがある。

【形態】

開張雄 17~20mm、雌 23~28mm。年2化で、1化目の個体は翅の地色は淡黒褐色、2化目の個体は全体に銀白色、前縁部側に顕著な白帯~淡褐色帯を現す。1・2化とも雄雌で翅型と大きさが異なり、雌は大型で前翅が長く翅頂は突出する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区南陽町七島新田流作場~珍寿野の、庄内川河口付近のヨシ原に限定して生息する。

【県内の分布】

上記の他に旧弥富町鍋田に記録がある。

【国内の分布】

千葉県、神奈川県、三重県、徳島県、佐賀県の河口部から記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。



マエジロツトガ

港区南陽町流作場、2009年9月20日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低湿地性の蛾で、いずれの産地も河川の河口のヨシ原から記録されている。昼間はヨシの桿上に静止しているが、夜間灯火に飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部のヨシ原のうち河口から約1kmまでに多い。環境は大雨による出水・水没、港湾の浚渫等から必ずしも安定した状況ではない。ゴミの漂着も著しく、生息環境は悪化している。成虫は水銀灯に誘引され、分布が攪乱される恐れがある。

【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

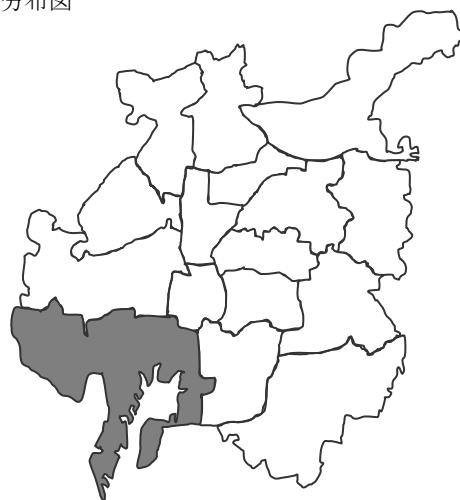
【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.
田中多喜彦, 2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか(編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I~IV. 学習研究社, 東京.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

エンスイミズメイガ *Eristena argentata* Yoshiyasu

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

和名の「塩水」が示すように、河口など海水が混じる汽水域に生息する珍しいガであり、名古屋市内では、港区の庄内川・新川河口に生息するが、環境の悪化で生息地が狭められている。

【形態】

開張12～16mm、小型のミズメイガで、翅は細長く、前後翅とも地色は橙色。白色～銀白色で黒に縁取られた縦線が、前後翅とも翅底から翅頂付近に向かって走り、前翅には同様な横線も見られる。後翅外縁に明瞭な2黒紋をもつ。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川・新川河口の、港区南陽町七島新田珍寿野に多産することが2009年に分かった。

【県内の分布】

旧弥富町鍋田の標本がパラタイプとなっていて、鍋田が唯一の既知産地。

【国内の分布】

中部地方以西に分布し、愛知県、三重県、愛媛県、熊本県、対馬、奄美大島から記録がある。現状では日本の特産種である。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫はミズメイガの名が示すように、気管の入り込んだエラで呼吸をする水中生活者である。幼虫は食草である汽水域の藻をつづて巣をつくり、中に隠れて生活するという特異な生態をもつ。寄主植物としては、タニコケモドキ（フジマツモ科）、ホソアヤギヌ（コノハノリ科）が知られている。

成虫は5月から10月にかけて見られ、本州では年3化。発生地を遠く離れることはなく、昼間は汽水域のヨシに静止している。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川・新川河口は著名な藤前干潟が拡がり、環境保全への一定の配慮がなされている。しかしヨシ原に多量のゴミが流れつくなど、水質環境は良好とはいえない。

2009年の調査では庄内川河口に塩生藻類が生育していたが、面積は広くなかった。

【保全上の留意点】

新川は上流の漁協への航路となっている。将来、庄内川河口の砂泥地も含め、過度の川底の浚渫（しゅんせつ）などが行われると、簡単に生息地が破壊されてしまう。河口付近の環境の改変には、生態的見地からも十分な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，(143):283-287.
田中多喜彦，2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶，63(247):63-67.

【関連文献】

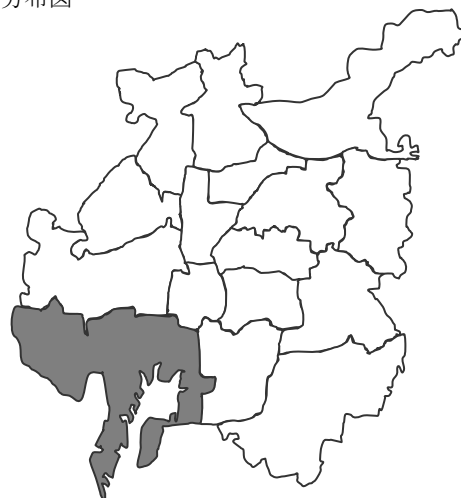
Yoshiyasu, H., 1988. A New Estuarine and an Unrecorded Species of the Nymphulinae (Lepidoptera, Pyralidae). *Kontyu*, 56(1):35-44.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



エンスイミズメイガ

港区南陽町珍寿野，2009年8月18日、田中多喜彦 採集

市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

低地・丘陵地のため池や河川敷などに生育する、ガマなどの大型の挺水植物を食草とする低湿地の蛾であるが、今日埋め立てや河川改修などにより、本種の生息環境は全国的に悪化の一途をたどり、レッドリストにあげる県が多い。

【形態】

開張 35～52mm。雌は雄に比べ大型で、腹部はきわめて長い。前翅は全面濃赤褐色で、外横線はわずかに黒点列が現れる。中室下縁に沿って黒色条があり、中室端に白点をもつ。後翅は淡い黄白色で、外縁部が暗化する個体もある。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区中平（2003）が唯一の記録。

【県内の分布】

田原市蔵王山（1981）の記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布するが、湿性環境に産し、産地は局限される。

【世界の分布】

中国（黒龍江省）、ロシア南東部。



オオチャバネヨトウ

天白区中平、2003年6月30日、福住和也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ・ガマなどの群生する沼沢地が本種の住みかであるが、都市部のこのような環境は十分な調査がなされずに埋め立てられる場合も多い。年1化で7～8月に出現。一般に灯火採集では雄が得がたいという。

大型の湿性単子葉植物の茎に入り込んで食害するシンクイムシ（borer）で、ガマの茎の中から幼虫が発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

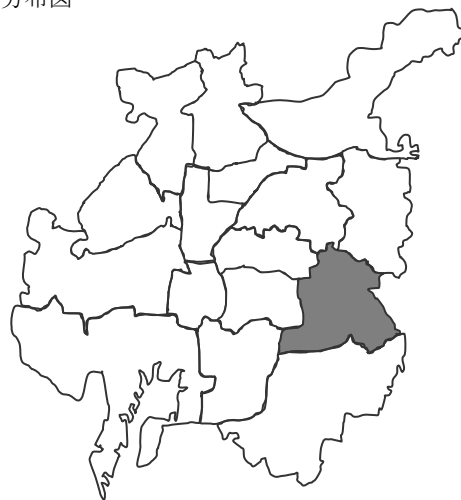
市街地である天白区中平の記録は、おそらく近くの天白区島田の大根池あたりで発生した個体が飛来したものであろう。成虫に移動性のある可能性がある。

減少の要因は、湿性環境の喪失である。

【保全上の留意点】

現存する湿性環境をできるだけ保存したい。特に公園緑地内にあるため池や小河川などの湿性環境は、過度な整備や池畔の改修などを避け、多機能的な自然を温存したい。

市内分布図



【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.
小木広行，1982. オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫. 誘蛾灯，87:11-13.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

（執筆 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

明るい湿性草原に多いヒョウモンチョウ類の1種であるが、近年、県内の草地で観察される個体数が減少し、名古屋市市内でも同様に観察されることが少なくなっている。

【形態】

開張 58～66mm。雌は大型で翅型は丸味をおび、前縁の前翅端近くに三角形の白紋がある。雄には前翅の表面の後縁近くに翅脈に沿って2本の黒色発香鱗条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区、北区、守山区で確認されている。

【県内の分布】

丘陵地から山地まで、また半島部に至るまで広範囲に記録されている。

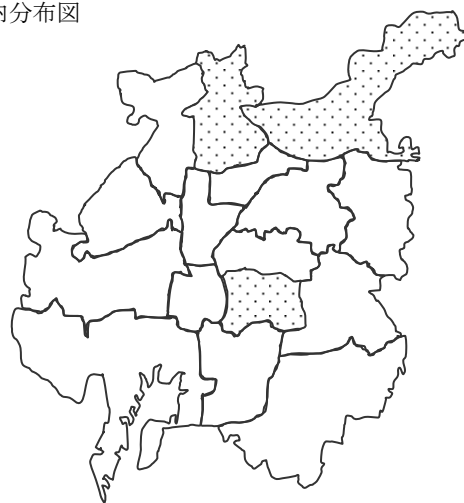
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮、中国からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

林縁や湿地周辺の草地に生息し、愛知県では「湿地のヒョウモンチョウ」といわれるほど、ヒメヒカゲを産したような湿性草原に多い。年1化で6月に現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消し、秋に活動を再開しアザミ類、ヒヨドリバナ等の花に吸蜜に訪れる。県下での自然状態での食草は不明であるが、タチツボスミレ、フモトスミレなど各種のスミレ類を食べるという。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、名古屋市市内を始め周辺の尾張平野、知多半島などの低地での観察例が著しく少なくなり、以前比較的多くみられた三河の低山地から奥三河の山地でも個体数が減少している。自然状態での食草の好みなど、生態の主要部分の多くが不明なため、減少の理由は明らかではない。

【保全上の留意点】

全国的な本種の減少により、環境省は2012年のレッドリスト第4次改訂で、本種を準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップしている。今日、草原性のチョウが全国的に減少傾向にあるが、本種の場合は生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。

しかし市内に残存する湿地や湿性草原は、他にも多くのレッドリスト掲載種が生息するなど、生態的価値が高いので、周辺の二次林環境も含めた永続的な保全が必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.464-475. 同 目録, pp.194-202. 名古屋市.
愛知県, 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.44, p.209. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe pallescens* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

代表的な草原性のヒョウモンの一つで、北海道から九州にかけて広く分布しているが、山地草原に多く、平地～低山地ではむしろ少ない種である。近年全国的に個体数の減少がみられ、名古屋市内でも減少している。

【形態】

開張 58～68mm。雌は雄より大型で翅形は幅広く、地色は濃色。後翅裏面の銀白紋は大きく明瞭、亜外縁の銀白斑紋列の形は山型。雄の前翅の表面には2本の発香鱗条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区、千種区平和公園、守山区小幡、庄内川畔で古い記録がある。平和公園南部では2005年にも1雌が採集された。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山地まで広く記録されている。近年、個体数の減少が著しい。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

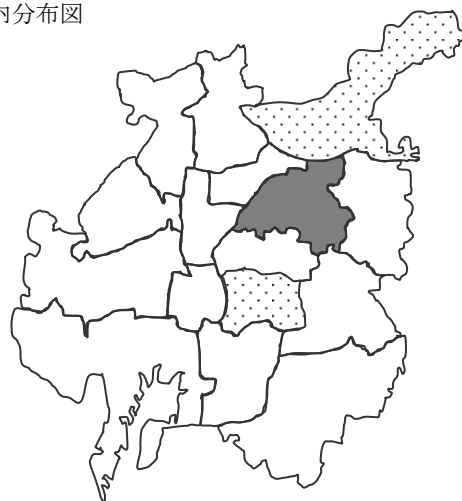
【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

広々とした明るい草原を好み、アザミ類など草花の多く咲いている山地の草原では、群棲することがある。年に1回発生し、平地では6月上旬から現れ、盛夏には夏眠のため一時姿を消すが、秋に再び現れる。幼虫はタチツボスミレ等のスミレ類を食草としている。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

近年尾張平野と丘陵地で本種を観察した報告がほとんどなく、愛知県内でかつて多産した山間盆地の周囲にある草原でも、花を訪れる個体が著しく減少している。近年の減少の要因は、正確にはわからないが、草原性ヒョウモンチョウ類の減少傾向の中で、本種は最も顕著な例である。

【保全上の留意点】

ウラギンズジヒョウモンと同様、自然状態での食草の好みや周年経過など、生態の主要部分が必ずしも明らかでなく、保全対策が難しい。しかし市内に残存する自然の草地環境は貴重であり、生態的価値が高いため、できる限り永続的な保全が必要であろう。極力農薬の散布等の化学的汚染をしないように配慮したい。

【特記事項】

本種は、DNAの知見や翅形、発香鱗条の形状、交尾器の形状等から、系統の異なる複数の別種が含まれていることが示されている（新川・石川，2005）。中部地方ではサトウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモンが混じっている可能性がある。名古屋市内に産するものは、前者の可能性が高いが、市内産の古い標本が過去に図示されていないので、本書では学研日本産蝶類標準図鑑（白水，2006）に従い、ウラギンヒョウモンとして表示する。

【引用文献】

白水 隆，2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京.
新川 勉・石川 統，2005. 分子系統によるウラギンヒョウモン3種と形態. 昆虫と自然，40(13):4-7. ニューサイエンス社.

【関連文献】

愛知県，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2009 -動物編-. 愛知県環境部自然環境課.
川副昭人・若林守男，1976. 原色日本蝶類図鑑，pl.46,p.217. 保育社，大阪.
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか，1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
中島悦雄，2005. 名古屋市千種区でウラギンヒョウモンを採集. 佳香蝶，58(225):24.
福田晴夫ほか，1983. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）. 保育社，大阪.
山田芳郎，2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.464-475. 同 目録，pp.194-202. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* Asahina

カテゴリー

【選定理由】

平地から丘陵地にかけて局地的ながら広く産したが、生息地の消滅や環境悪化により産地が減少した。近年に限れば、多少増加傾向があるが、過去の状態には及ばない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長38mm内外。雄は全体赤色、雌は赤みがかった黄色、無斑。体は太くイトトンボとしては大型である。目立つし識別容易なので指標種に適する。

幼虫は体が太く頭部が大きい。尾鰭は幅広く丸味がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、中区、熱田区、中川区、港区、緑区、名東区、天白区に記録がある。

【県内の分布】

平野、丘陵に分布する。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。



ベニイトトンボ 雄

千種区星ヶ丘山手、2013年7月10日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水郷の側溝緩流、平地丘陵の浮葉植物と適度な密度の抽水植物が存在する池沼に好んで生息する。湿生植物が密生する開水面が乏しい環境や廃田、新設人工池にも生息することがある。山地には分布しない。

依存する池沼の環境に限られる傾向があるためか、産地は局地的であるが、移動分散力に富むと推定される調査データがある。成虫の出現期は6～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

1940年代から2000年代初頭の間に、県全体では63ヶ所の生息地が記録された。調査の進展による新産地の増加に並行し、生息地である池沼の潰廃や環境悪化による消滅も進行し、2003年に残存する生息地は市内推定0ヶ所、県全体で10ヶ所に激減した。生息地の潰廃、環境悪化が減少の要因である。ところがその後名古屋市東部と尾張東部丘陵地帯を中心に生息地が増加に転じ、2012年までに市内で生息が確認された場所は5ヶ所になった。但し一時的定着の場所もある。

【保全上の留意点】

現生息地の良好な環境を保全すると共に、移動分散による飛来を受け入れられる水生植物に富む良好な池の保全にも留意する。

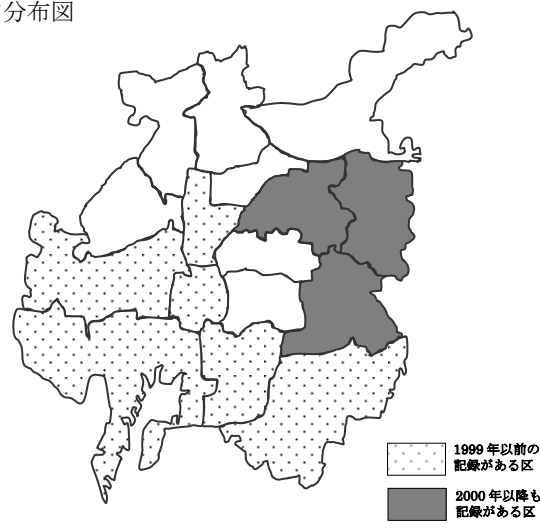
【特記事項】

上記増加状況に基づき、ランクを絶滅危惧Ⅱ類に引き下げた。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2003. 愛知県のベニイトトンボ (第2報). ため池の自然, (38):1-8.
高崎保郎, 2012. 愛知県のベニイトトンボ (第3報). ため池の自然, (52):13-17.

市内分布図



(執筆 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

オオイトトンボ *Paracercion sieboldii* (Selys)**【選定理由】**

かつては平地、主として丘陵の池沼に普通のイトトンボの一種であったが、減少が著しく近年市内での記録がない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長33mm内外、雄は水色と黒、雌は黄緑色に黒の色調。眼後斑が大きく洋なし型をしている点で他の同属3種と区別できる。

幼虫は同属他種との区別がむづかしい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録された。

【県内の分布】

平野から主として丘陵地、山地にも分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島に分布する。



オオイトトンボ 雄

愛知県長久手市阿畑、1985年5月28日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地から山地にかけての水生植物が豊富な池沼に生息する。関東以北では平地にも普通であるが、この地方での主たる生息地は丘陵から山地にかけてである。水面に浮かぶ植物質に、時に水中まで潜り産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内にとどまらず愛知県全域での生息地の減少が著しい。安定的生息地は丘陵、山地の一部に限られるようになった。同属の4種の中では、生息水域の水質や環境の影響を最も受け易いと考えられる。西日本広域に減少傾向が見られるが、その要因は明らかでない。

【保全上の留意点】

市内では残存の可能性は低い、一般的には水生植物豊かな池沼の保全、ため池の人工的改変の阻止が必要である。

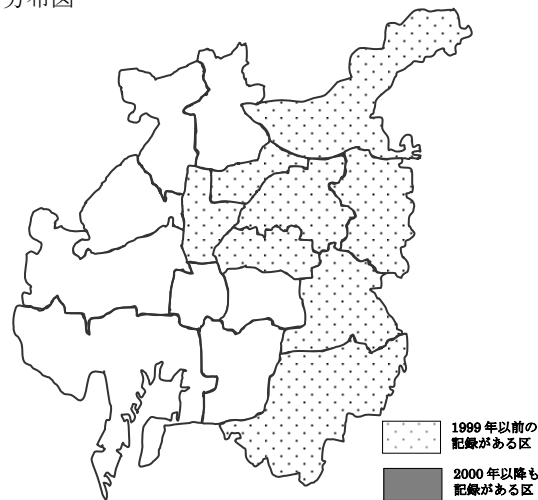
【特記事項】

同属のムスジイトトンボに最も似るので同定に注意を要する。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys**【選定理由】**

樹林内外の限られた湿地や矮小な水溜りを発生場所とするものとも稀な種で、かかる生息地の消滅が著しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長80mm内外。体は太目で黒色地に黄緑斑を有する。特に未熟時翅の基部が顕著に褐色を呈するのが名前の由来である。

幼虫は腹部5～9節の側棘が顕著なこと、8～9節にヤンマ科では本種だけ背棘を有することが特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平野から丘陵地にかけて分布する。

【国内の分布】

宮城、新潟以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵地の明るい湿地や、林縁、林内の小湿地、小池、水溜りに生息する。

成虫は昼間、林縁や林内で行動するのを見ることがあるが、黄昏時水田、湿地上を他の黄昏飛翔性ヤンマと共に飛翔し、多産地では群飛する。餌として巣を張っているクモを狩ることもある。成虫出現期は6～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

マルタンヤンマと同様、その生態から確実な生息の把握は困難である。1970年代までは市内各区の公園、社寺林、林地などに生息していた。比較的近年まで記録があった守山区吉根大鼓ヶ根(2005)や天白区黒石(2010)の生息地は宅地造成で失われた。現在では東部各区に残存する規模が大きい緑地内の水系に拠っていると考えられる。県全体でも稀である。

幼虫の生息水域を含む緑地の開発による消滅が減少の主要因である。

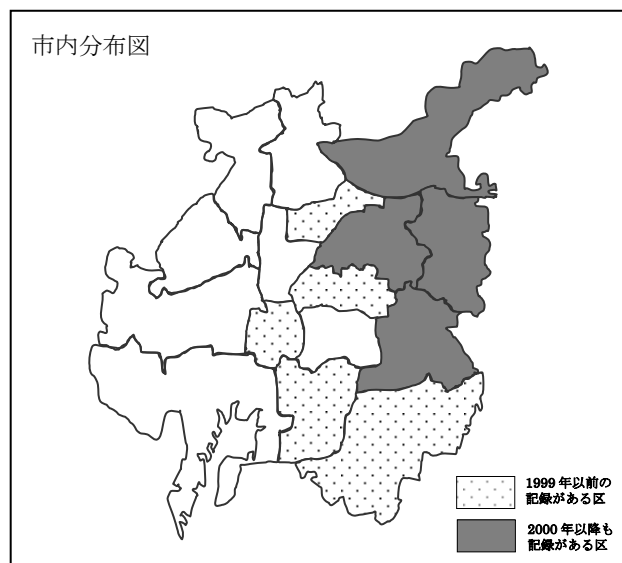
【保全上の留意点】

市内に残存する生息可能な水域が存在する緑地の保全が重要である。

【関連文献】

- 安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
 安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
 鶴殿清文・鶴殿 茂・清水典元, 1974. 黄昏活動性ヤンマ3種. 佳香蝶, 26(100):95-98.
 山内博美・北原誠治, 1992. 名古屋市内でネアカヨシヤンマを採集. 月刊むし, (256):36.
 高崎保郎, 2004. 名古屋市内におけるネアカヨシヤンマの2003年の記録. 佳香蝶, 56(218):31.
 松沢孝晋, 2011. 名古屋市天白区平針の里山のトンボ相と里山の消失. 佳香蝶, 63(248):93-98.

(執筆者 高崎保郎)



昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* Selys**【選定理由】**

生息適地の喪失や水辺の環境悪化を主因とする減少が著しい。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長72mm内外、太めの体躯で鮮やかな緑色に黒条がある。雌は翅が黄色がかかることが多い。

幼虫は頭部が角張った逆三角形で、目が突出した印象を受けるのが特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北区、中村区、中区、昭和区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区で記録されている。

【県内の分布】

平野から丘陵にかけて分布する。

【国内の分布】

北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。



アオヤンマ 雌
中区錦一丁目、1969年6月22日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は主として平地のヨシ、ガマなどの高茎抽水植物が繁茂する池沼に生息する。成虫はヨシ帯の間を縫うように、或いはその上空を比較的緩慢に飛ぶ。かつては県南西部の水郷地帯に多産した。

かなり移動分散力があるようで、市街地を1.5km移動した例もある。比較的近年の名東区の記録も飛来である。成虫の出現期は5～8月。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代には名古屋城堀にも定着していた程であったが、都市化の影響を受けやすい平地の池沼や、人工化が進む水田地帯の側溝などを主たる生息場所としていたため減少が著しく、現在市内で確実な生息は確認できないが飛来は考えられる。国リストでも2012年改訂で収録されるに至った。

高茎抽水植物が豊富な良好な池沼、水田耕作地帯の減少や、生息環境の悪化が減少の主要因である。

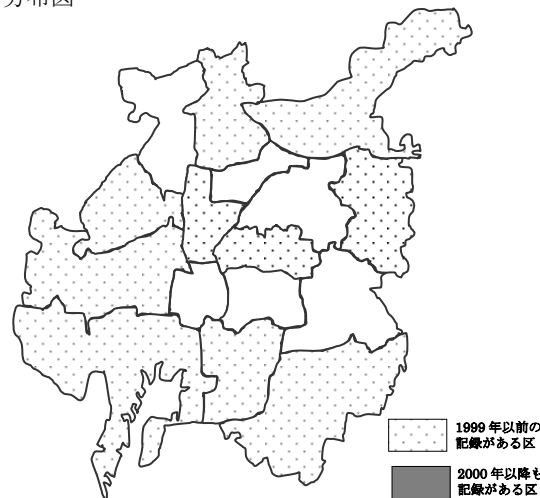
【保全上の留意点】

市内では残存の可能性は低いが、一般的には抽水植物に富む池沼や水郷地帯の保全が必要である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1969. アオヤンマを市街地で採る. 佳香蝶, 21(80):203.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

タバサナエ *Trigomphus citimus tabei* Asahina

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

自然環境の悪化の影響を平地程受けない低山地に近い所にも生息する傾向があることから、絶滅の危険性が同属他種より少ないと見られて来たが、市内の残存生息が2013年以降確認されなくなったことにより選定した。

【形態】

成虫の体長45mm内外。黒色地に未熟時は黄色、成熟すると灰緑色斑を有する。胸側の黒条は1本。前肩の細い黄色（灰緑色）条を欠くことで、これがあるオグマサナエと区別できる。副性器は大きく丸味があることも特徴。

幼虫の腹端第10節が長く筒状であることが本属の特徴であるが、本種だけは短く筒状を呈しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、西区、中村区、昭和区、守山区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張、三河の平地では絶滅状態で、丘陵から低山帯にかけては、局地的に多産する所もある。東三河山地でも稀な記録がある。

【国内の分布】

福井県、静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

原名亜種タイリクタバサナエが朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地、低山地の池沼、緩流に生息する。近似種オグマサナエ、フタスジサナエよりも多少標高が高い所に生息する傾向があるが、前記2種と混棲することも多い。羽化は水面の浮遊物上や汀の地面で行われる。成虫の出現期は4～6月上旬。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内ではかつて平野から丘陵、低山帯まで広く産したが、現在では平地では絶滅状態である。都市から離れた丘陵では局地的に多産する所もある。名古屋市内では、1940、1950年代には7区で記録され、守山区竜泉寺（現在の小幡緑地本園辺りを指す）には多産したが、2010年代初頭では同区下志段味での若干の記録があるのみである。市東部に接する丘陵地帯の長久手市、日進市、東郷町方面では以前から記録がない。

開発、改修が著しい平野部での生息池沼の水質悪化、水田側溝の人工化、周辺を含む自然環境の悪化、産地自体の消滅が減少の主要因である。

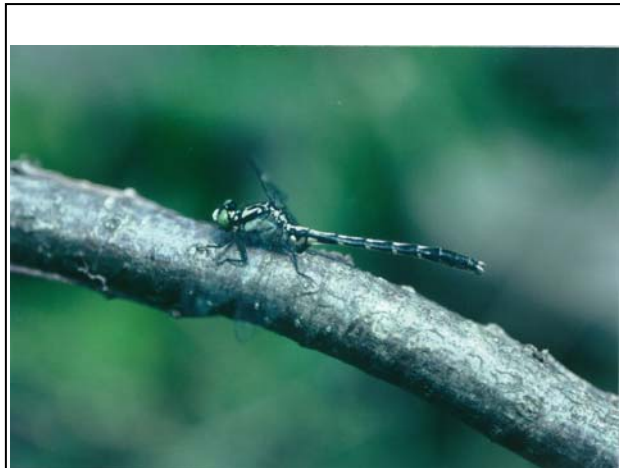
【保全上の留意点】

本市では近年絶滅状態であるが、一般的には、岸に多少なりとも平らな陸地部分がある泥底の池沼の水質保全と環境保全、水田地帯の小緩流の自然状態の保持などが必要である。

【関連文献】

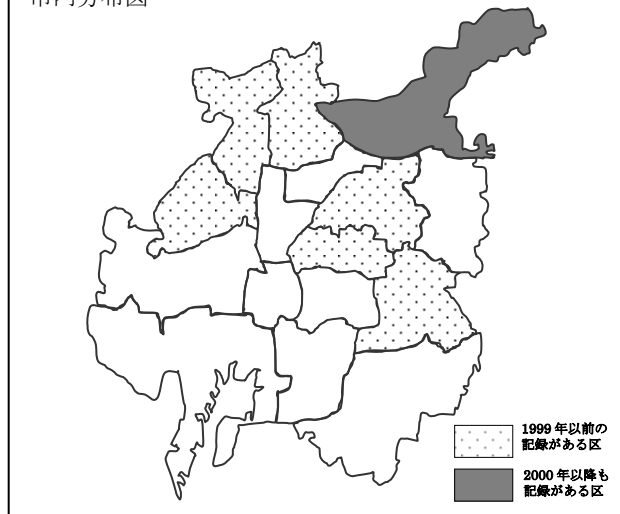
安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫（上）, pp.9-78. 愛知県.

(執筆者 高崎保郎)



タバサナエ 雄
守山区下志段味吉田、2005年5月8日、安藤 尚 撮影

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 セミ科>

チッチゼミ *Kosemia radiator* (Uhler)**【選定理由】**

主として平地から丘陵地のマツ林や低灌木帯に生息するため、宅地造成など開発の影響を受けやすい。以前と比べかなり個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は18～24mm と小型のセミで、体色は黒みが強く、銀灰色の鱗毛が密生する。
中胸背には、一対の黄褐色三角紋を有する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

【県内の分布】

豊根村、新城市、豊橋市、豊田市、岡崎市、瀬戸市、春日井市、小牧市、日進市など。

【国内の分布】

北海道（渡島半島）、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地から丘陵地にかけて、主としてマツ類の多い樹林帯に生息する。

雌はマツ林の林床に生育するツツジ類の生枝中に産卵する。秋季に個体数が多くなる。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

【保全上の留意点】

丘陵地帯のマツ林の環境維持に努めるとともに、間伐等で下草を手入れする場合は、産卵木となるツツジ類を残すよう留意する必要がある。

【特記事項】

従来 *Cicadetta* 属に所属させられていたが、東アジア地域におけるチッチゼミ類の分類学的研究により、*Kosemia* 属に所属変更された。

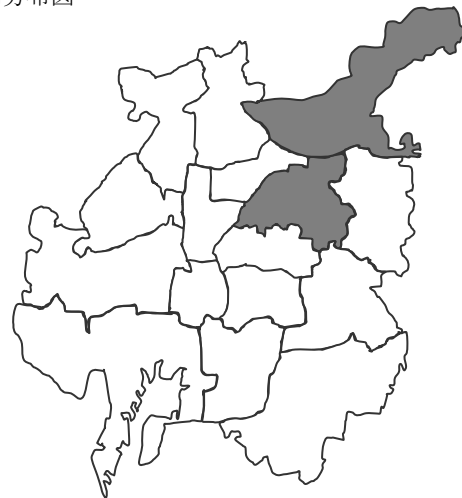
【関連文献】

林 正美, 1992. 日本産セミの分布調査報告 (4). 日本セミの会会報, 11(1-2):1-32.

林 正美・税所康正, 2011. 日本産セミ科図鑑. 221pp. 誠文堂新光社, 東京.

新修名古屋市史資料編集委員会(編), 2008. 第8節昆虫類 5 カメムシ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.161-165. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* Esaki**【選定理由】**

東海地方の湿地を代表する種として知られ、県内では比較的産地・個体数とも多いが、全国的には生息地が限定され、特に都市近郊では、開発による埋め立てなどで生息地が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は18～22mm。体型は長卵形を呈する。体色は暗褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。

呼吸管は非常に短い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内東部に広く分布するが、守山区からの記録が多い。

【県内の分布】

平地から低山地にかけて、県内ほぼ全域（東三河北東部を除く）。

【国内の分布】

本州（東海地方、奈良、和歌山、兵庫）、四国（香川）。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。



ヒメタイコウチ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湧水湿地、流入のあるため池の縁、休耕田、水田地帯の素堀の水路など、常に湿り気のある湿地帯に生息する。

成虫で越冬後、5月頃産卵し、新成虫が8月～9月頃出現する。後翅が退化し、飛翔できない。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では様々な湿地環境に生息し、河川敷でも見られる場合がある。市内では守山区に比較的多くの産地が残されているが、それ以外は局地的である。

都市近郊における湿地は、宅地造成などで多くが埋め立てられ、ほとんどの場合、生息地そのものが消滅した。

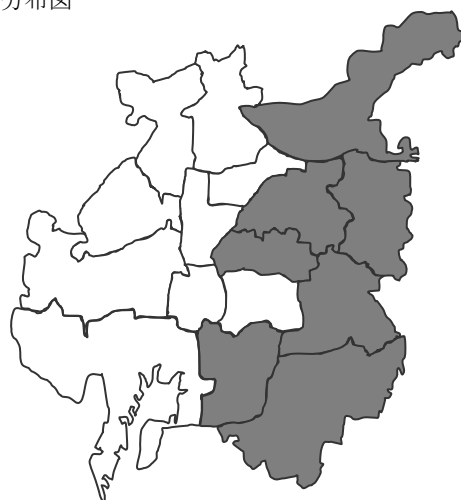
【保全上の留意点】

湿地環境の保全および水源地である周辺の後背林を維持し、乾燥化を防ぐ必要がある。

【引用文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫(上), pp.123-162. 愛知県.
長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也, 2005. ヒメタイコウチの分布, 付関連文献目録. 豊橋市自然史博研報, (15):15-27.
堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について(2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ハンミョウ科>

ハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* Thunberg**【選定理由】**

平地から山地に普通の種であるが、市内では生息環境の消失とともに減少しているものと思われ、発見が困難になっている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

赤～緑色の金属色をもつ美しい種で、色彩には変異があるが、本州に間違えるような似た種はいない。上唇は、前方へ突出し中央が縦に強く隆起、前縁に5つの歯をそなえる。

体長は18～20mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区東山（高橋, 1975）、庄内川（穂積ほか, 1975）、天白区。

【県内の分布】

山間部から平野部にかけて広く分布している。

【国内の分布】

本州、四国、九州、種子島、屋久島。沖縄には別亜種が分布する。

【世界の分布】

基準亜種は、中国、朝鮮半島。



ハンミョウ

【生息地の環境／生態的特性】

林間の裸地や、林道、石の多い河川敷などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

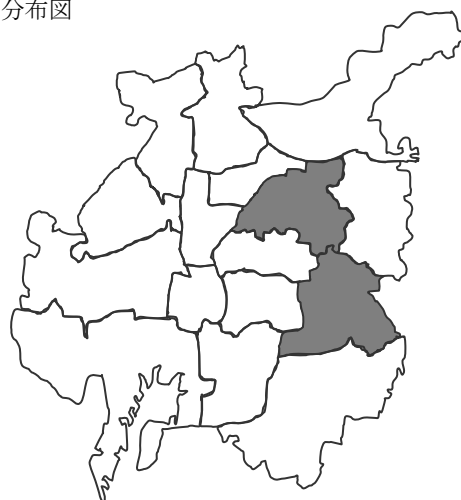
市内での生息状況については、引き続き調査が必要であるが、守山区、名東区、天白区、緑区などの郊外には生息している可能性が高い。

減少の要因としては、生息環境の減少、農薬や除草剤等の使用が考えられる。

【保全上の留意点】

緑地や林道など、本種の生息地となりうる地域での舗装は最小限にとどめるとともに、こうした地域での農薬、除草剤の散布に注意する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

高橋 敬, 1975. 甲虫雑記 (1), 名古屋市東山の甲虫. 佳香蝶, 27(101):9-10.
穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 コガシラミズムシ科>

クロホシコガシラミズムシ *Haliphus basinotatus latiusculus* Nakane

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.5mm 前後。ヒメコガシラミズムシに似るが、上翅基部の黒斑は明瞭であることで区別できる（中根，1985）。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区東山（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊田市、瀬戸市、田原市。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

日本固有種。



クロホシコガシラミズムシ

豊田市上高町、2012年6月30日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

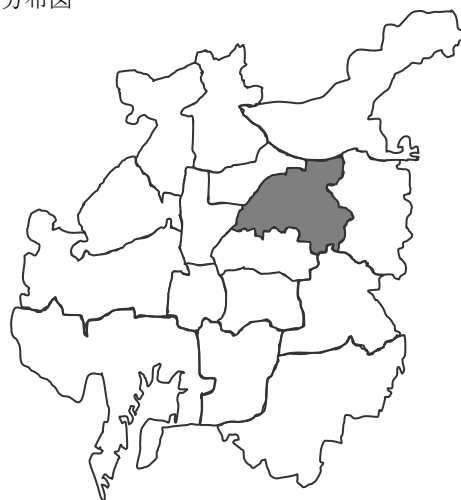
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種類類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

多くの池では、ルイスツブゲンゴロウと共に見つかる。

市内分布図



【引用文献】

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.
中根猛彦，1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆蟲，32(2):61-67.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33, pp.180-181. 保育社，大阪.
佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp. 204-231. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

ルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisius* Sharp**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3.9～4.7mm。体型は逆卵形で幅広く、背面は淡黄褐色から黄褐色。微細網状印刻が密に有り、やや強い光沢が有る。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区、中区、北区、名東区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

豊田市、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ルイスツブゲンゴロウ

豊田市上高町、2012年6月30日 戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

全国的にも減少傾向であり、局地的に分布することから発見されにくく、近年の記録は見当たらず、急激に減少していると考えられる。

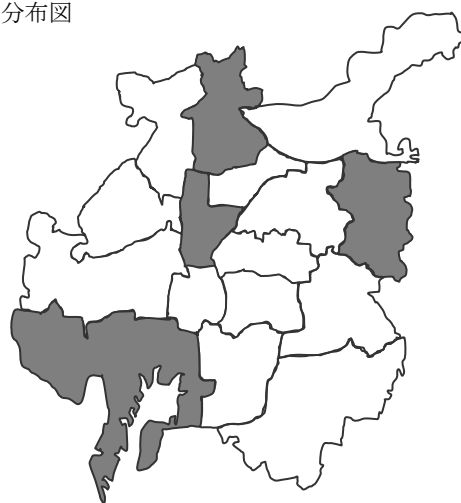
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

多くの池ではクロホシコガシラミズムシと共に見つかる。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.34,p.190．保育社，大阪．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

シマゲンゴロウ *Hydaticus bowringii* Clark

カテゴリー

【選定理由】

平野部では普通に見られた種であるが、水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 13～14mm。体は卵形でよく膨張し、光沢がある。頭・前胸背は淡黄褐色で、それらの後縁中央は黒色。上翅は黒色で、中央と側縁部近くに淡黄縦状があり後方で合一し、基部に円紋がある。体下面は黄～赤褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根（蟹江・長谷川，2001）、港区土古町（蟹江・長谷川，2001）、千種区東山公園。

【県内の分布】

豊田市ほか、平野部の池を主体に広く分布していたが、現在では丘陵部に残された池や水田に生息しているにすぎない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、トカラ列島。

【世界の分布】

中国、台湾、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

各種の池、水田などの比較的いろいろな水域に生息していた。夏期にはよく灯火へも飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

平野部からは姿を消し、丘陵地でも水田の放棄、池の消失、汚水の流入などによって減少していると思われる。

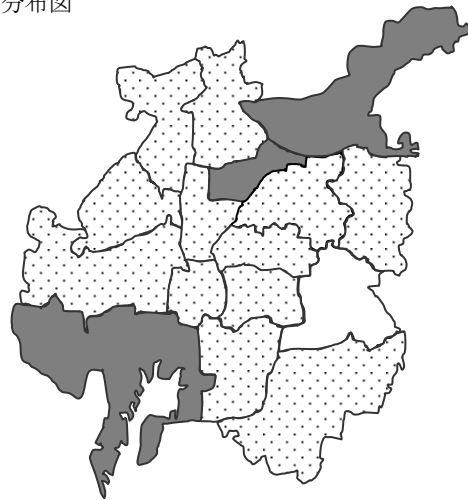
【保全上の留意点】

残っている自然度の高い池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。



シマゲンゴロウ
豊田市川下町、1995年9月4日、戸田尚希 撮影

市内分布図



【引用文献】

蟹江 昇・長谷川道明，2001．甲虫類-東海地方を例に-．ため池の自然-生き物たちと風景，pp.15-164．信山社サイテック．

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生動物 -レッドデータブックあいち 2009- 動物編，p.298．同県環境部自然保護課．

森 正人・北山 昭，1993．日本のゲンゴロウ，p.143．文一総合出版，東京．

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

コオナガミズスマシ *Orectochilus punctipennis* Sharp

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

河川の中流域に生息するミズスマシで、かつて市内にも生息していたが、河川の汚濁などで県内では絶滅状態にあった。最近になって庄内川などで再発見されたが、県内での生息地は限られている。

【形態】

長楕円形で、やや金属光沢を帯びた黒色。脚は赤褐色。上翅の点刻は密で、会合部は、雄ではほぼ直角で先が丸まり、雌ではやや斜めで会合端が少し後方に張り出す。

体長は 5.5～6mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区庄内川に生息する。また市内からは昭和区山崎川石川橋での古い記録がある。

【県内の分布】

庄内川、豊川の中流域から知られている。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。



コオナガミズスマシ

【生息地の環境／生態的特性】

大きな河川の中流域で、岸辺が水で覆われているような環境に生息する。夜間活動性。

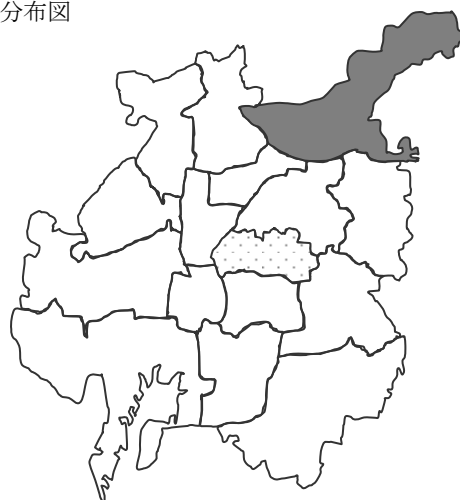
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では守山区の庄内川にまだ生息しているが、危険な状況にある。減少の要因としては、河川改修による生息環境の消失、汚水の流入による河川の汚濁があげられる。

【保全上の留意点】

現在残る生息地周辺での自然河岸の保全と、水質の保全が必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(32):1-7.

吉富博之, 1994. 愛知県産甲虫類分布資料 (1). 佳香蝶, 46(178):21-22.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

ミズスマシ *Gyriuns japonicus* Sharp**【選定理由】**

かつて北海道から九州にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 6.0～7.0mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区、庄内川、東山公園（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊田市、設楽町、瀬戸市、犬山市（佐藤，1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、千島。



ミズスマシ

豊田市足助町、1993年11月1日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある水域に生息する。

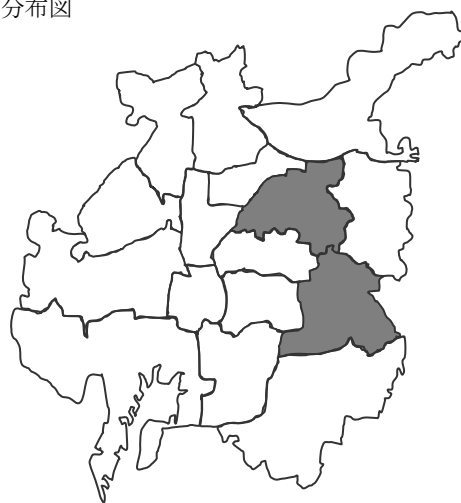
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.37, pp.202-203．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

ミツノエンマコガネ *Onthophagus tricornis* (Wiedemann)**【選定理由】**

名古屋市では河川敷に生息している。東海豪雨による洪水で極端に減少したが、現在少しずつではあるが回復傾向にある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長12～18mm。体は黒色で光沢はにぶい。頭部前縁中央は歯状に突出、中央部と両端に角状の隆起がある。前胸背中央前縁にたい角状突起がある。上翅間室は平坦で微細な鮫肌状となる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中村区、西区、北区の河川敷で見られる。

【県内の分布】

豊田市、田原市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾、インドシナ半島、ミャンマー、インド、マレー半島、ジャワ。



ミツノエンマコガネ

【生息地の環境／生態的特性】

海浜から河川中流域にかけての、自然植生が残された河川敷が主たる生息地である。糞虫といわれる仲間であるが、この種は腐敗した魚類や野菜くずに集まる習性がある。

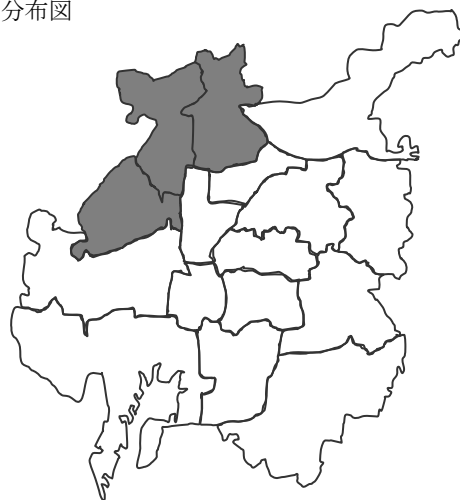
【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川の河川敷沿いに少ないが、生息を確認できる。

【保全上の留意点】

河川敷と治水を考慮すれば、現在の環境を維持することが最低の選択となろう。

市内分布図

**【関連文献】**

伊藤芳教, 1992. ミツノエンマコガネの外部形態による雌雄の区別法について. 月刊むし, 262:23-24.

名城大学附属高校自然科学クラブ, 1992. 名古屋市中村区内のミツノエンマコガネの個体数について. 佳香蝶, 44(172):63.

清水清市, 1990. 愛知県尾張平野部のミツノエンマコガネ. 月刊むし, 230:40.

(執筆 佐藤正孝執、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>

ベーツヒラタカミキリ *Euplynes batesi* Harold**【選定理由】**

シイの大木に依存する種で、自然度の高い常緑林の指標ともなる種である。本種が生息できるような樹林は市内には限られ、またその環境は年々悪化している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

赤褐色で扁平なカミキリムシ。雄では大あごが発達する。
体長は36～34mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区の熱田神宮（井野川，1973）。

【県内の分布】

豊橋市、豊川市、刈谷市など温暖な地域に分布する。

【国内の分布】

本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、種子島、屋久島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国南西部、ベトナム、ラオス。



ベーツヒラタカミキリ

【生息地の環境／生態的特性】

シイなどの大木が存在する森林に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

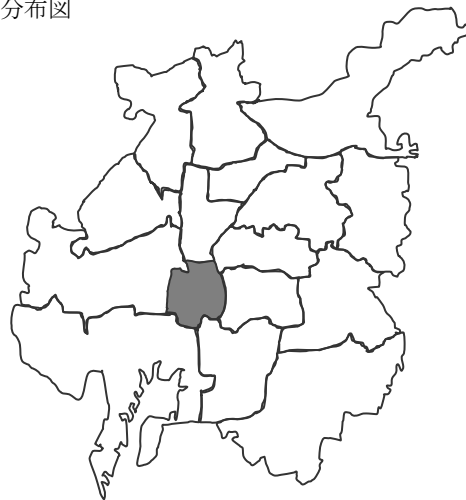
熱田神宮の環境は保護されているので、現在も生息している可能性が高い。しかし、熱田神宮は都市部に孤立した自然で、他の生息地とは遠く離れていること、樹林内の乾燥化など生物にとっての環境は必ずしも将来にわたって安心できるものではない。

減少の原因としては、本種の生息できる大木を含む森林の消失と、乾燥化による環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

熱田神宮をはじめ、寺社林など大木の残る林の保全が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

井野川重則，1973．熱田神宮にてベーツヒラタカミキリを採集．佳香蝶，25(96):55．

（執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 ツトガ科>

ゴマフツトガ *Chilo pulveratus* (Wileman et South)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

河川敷や沼沢地、そして山間の小湿地が生息場所と考えられる。湿地性の蛾で、全国的に産地は限定され、個体数も少ない。都市周辺では自然な湿性環境は狭められ、生息条件が悪化している。

【形態】

開張17～19mm。前翅は淡灰褐色に暗灰色鱗を散布し、弱い中横線がある。横脈上に2つの小点、細い垂外縁線があり、外縁には黒点列がある。前翅翅頂は鋭くとがる。

【分布の概要】

【市内の分布】

1991年の千種区星が丘元町が唯一の記録。

【県内の分布】

上記の他岡崎市青柳町、旧弥富町鍋田、南知多町岩屋、音羽町宮路山に単発的な記録がある。近年日進市で複数個体が採集されている。

【国内の分布】

群馬県を最北とし、神奈川県、静岡県（伊豆半島）、愛知・岐阜・三重の東海三県、高知県、長崎県、沖縄島に記録があるが少ない。

【世界の分布】

台湾に分布、台湾が原産地である。

【生息地の環境／生態的特性】

全国的な分布状況から「低湿地」の蛾といわれているが、必ずしも低平な広い面積の湿地だけでなく、山間の小湿地等にも生息する「好湿地性」の蛾と考えられる。

7月上・中旬に比較的短期間発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の採集地の近傍には、大規模な緑地である東山公園と平和公園があり、おそらくその中の小湿地で発生したものであろう。

都市近郊の湿性環境は、宅地造成や埋め立て、河川改修等により減少し、本種の生息条件は悪化している。

【保全上の留意点】

現存する湿性環境の生態系をよく調査し、開発・改修の際に十全な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，(143):283-287.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

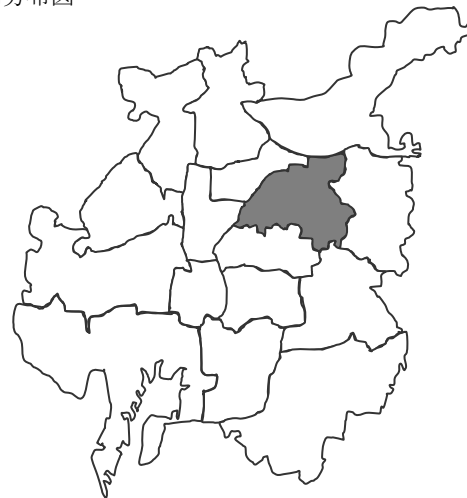
井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



ゴマフツトガ

千種区星が丘元町、1991年7月9日 田中多喜彦 採集

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シャクガ科>

アヤコバネナミシャク *Acasis bellaria* (Leech)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

最新の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に分布するが、局地的で非常にまれ」とある。愛知県では平地～丘陵の植生の比較的安定した自然林に産し、極相林周辺で採集されることが多い。都市周辺ではそのような良好な自然環境が減少している。

【形態】

開張 18mm 内外。前翅の中・外横帯は灰褐色、両帯の間は灰色で、黒色の横脈点が目立ち、後縁部に大きな白紋がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山の照葉樹林に生息する。近年名東区明徳公園でも採集された。

【県内の分布】

蒲郡市相楽山、豊田市猿投山に古い記録がある。近年日進市御嶽山でも複数個体が採集されている。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布するが非常にまれ。

【世界の分布】

ロシア南東部。



アヤコバネナミシャク

守山区東谷山、2013年4月29日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

極相林周辺で採集されることが多く、本種が生息することは、植生が長期にわたり安定している指標ともなりうる。

若い二次林ではほとんど採集されない。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区東谷山北斜面の生息地は、愛知県の自然環境保全地域として環境が保全され、動植物保護地区として採集が禁じられている。

しかし他の市内の自然林の多くは、開発により減少し分断されているので、孤立化し本種の生存は危ぶまれる。

【保全上の留意点】

名古屋市に残された自然林や鎮守の森の生態的価値を再認識して、一定範囲をできる限り将来にわたって温存することが望ましい。また公園緑地の整備のための伐採や農薬散布には十分な配慮が望まれる。

【関連文献】

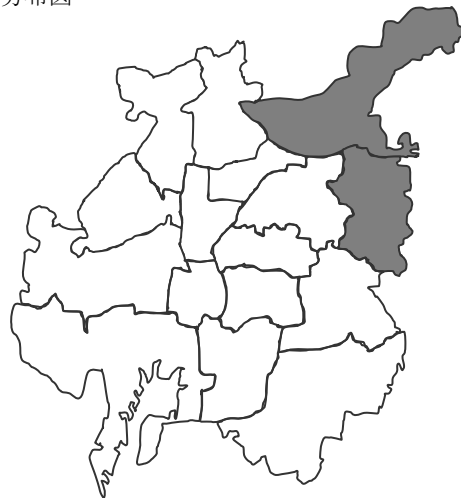
井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ヌマベウスキョトウ *Chilodes pacificus* Sugi

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市内では港区の庄内川河口のヨシ原で発見されたが、市内では、丘陵地のため池や河川などの小規模なヨシ群落には見出されていない。生息範囲が狭く、改修などで容易に絶滅する恐れがある。

【形態】

開張17～19mm。小型のヤガで触角は微毛状、前翅、頭部及び胸背は淡い灰褐色を呈する。前翅は幅狭く翅頂は突出するが、全体として長楕円形の特異な翅型を示す。翅脈は外縁部で暗色を呈し、中室内に1黒点がある。後翅は淡い灰色で前翅より淡色。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口の港区南陽町七島新田流作場～珍寿野のヨシ原から2009年に記録された。

【県内の分布】

旧弥富町鍋田、蟹江町鍋蓋新田に記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州（青森、秋田、群馬、茨城、埼玉、石川、愛知、三重の各県）に記録がある。

【世界の分布】

現状では日本の固有種である。

【生息地の環境／生態的特性】

1982年に新種記載に用いられたホロタイプの産地は茨城県菅生沼、パラタイプは群馬県板倉町や秋田県金浦町など典型的な低湿地のヨシ原であり、本種は低湿地を代表する蛾の一つである。

生態や食草は未知であるが、庄内川河口の広大なヨシの単一群落で夜間採集をすると多数飛来するので、おそらくヨシにつくものと思われる。5月から9月にかけて発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の市内の生息地である、庄内川河口のヨシ原の環境は、比較的安定している。

過去には、市内の他の河川の河口のヨシ原にも生息していた可能性があるが、すべてコンクリート護岸による単なる水路と化し、本種の生息環境は消滅した。

【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。ヨシの純群落は汽水域を含め特異な生態系であり、希少な生物が多く生息している。護岸改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
間野隆裕，1989. 木曽川河口の湿地の蛾. 蛾類通信，143:283-287.
田中多喜彦，2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶，63(247):63-67.

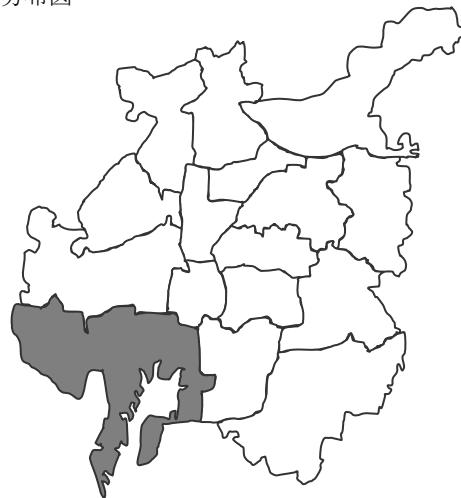
【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.



ヌマベウスキョトウ、
港区南陽町七島新田、2009年8月18日、田中多喜彦 採集

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

ガマヨトウ *Capsula aerata* (Butler)

カテゴリー

【選定理由】

ガマを主な食草とする本種は、ガマの群生するような沼地や河川敷の湿地に限って発生する。このような湿地は低地では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

開張 17～19mm。前翅は黄褐色ないし橙褐色を呈し、個体差はあるが同属他種（キスジウスキョトウなど）より色彩は濃色である。中室下縁に沿い羽底から外縁に至る暗色条は明瞭である。中室付近は橙色をおび、環・腎状紋は通常判然としないか弱い黒点となる。雌の産卵管は強壯。後翅も同属他種に比べ全体に濃色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区平和公園で2008年に記録された。

【県内の分布】

西尾市若松町、美和町篠田、豊田市古瀬間町に記録がある。

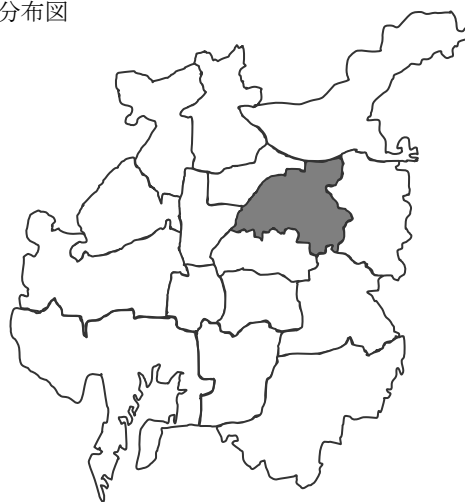
【国内の分布】

北海道の十勝・釧路地方、東北各県、関東の群馬・栃木・千葉・神奈川の諸県、中部の新潟・富山・石川・静岡・愛知・岐阜の諸県、三重県、滋賀県、京都府に記録がある。

【世界の分布】

ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は現状では日本の特産種であるが、分布はやや北に偏り、ほぼ東海地方以北に産し、京都府と滋賀県にわずかに記録がある低湿地の蛾である。

幼虫はガマのような大型の湿性単子葉植物を食害するシンクイムシ (borer) である。年1化で7～8月に出現する。

本種の生息するヨシ・マコモ・ガマの生育する低湿地は環境改変の影響を受けやすく、全国的に多くの都道府県がガマヨトウや、同様な生態的特性をもつオオチャバネヨトウをレッドデータブックに掲載している。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された平和公園南部の湿地は、丘陵の狭間の休耕田に、生育したヨシ原にガマをまじえる比較的小面積の湿地である。現在は緑地公園として保全されている。

かつては市内の各所に、本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりほとんど残されていない。そのため産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて生存条件が悪化している。

【保全上の留意点】

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査をした上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

キスジウスキョトウ *Capsula sparganii* (Esper)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

ガマを主な食草とする本種は、ガマ属やミクリ属の群生するような沼沢地の湿地に限って発生する。このような湿地は、都市周辺では埋め立てや河川改修等により狭められ、生息条件は年々悪化している。ガマヨトウとともに湿地環境の指標種としてレッドリストに抽出している県が多い。

【形態】

開張 29～44mm。雌は一般に大型。ガマヨトウに似るが、前翅地色は淡灰褐色でやや黄色味を帯び、ガマヨトウのように強く橙褐色を帯びることはない。腎状紋の下端は上に関く黒色の半環となる。雌の産卵管は強壯、第8節腹面に尾方へ向かう一対の突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区大森の八竜緑地で記録されている。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、日進市、豊田市、旧田原町蔵王山などから記録されている。

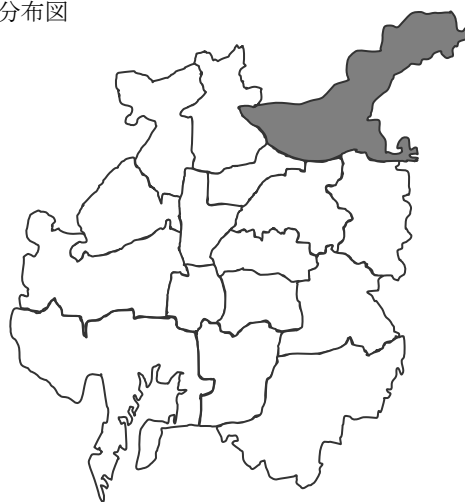
【国内の分布】

日本全国に産する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国（黒龍江省）、モンゴル、シベリアからヨーロッパにわたり分布。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

食草であるガマ属などの生育する沼沢地や湿地に限って生息する。海岸近くの低層湿地から内陸盆地まで、垂直分布は比較的幅広く、年1化で成虫は7～9月に出現する。幼虫はガマやミクリの茎中に棲み、その中で越冬するという。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された守山区大森の八竜緑地は、湿地部分が名古屋市のビオトープ公園としてフェンスで囲われ、日時を限って公開されている。また周辺の自然林は緑地として保全されている。しかし周辺は宅地開発され、発生地は孤立化し遺伝子交流も少なく、長期にわたる生存がおびやかされている。

かつては市内の各所に本種の生息に適した低湿地があったと思われるが、今日では開発や埋め立てによりわずかしが残されていない。

【保全上の留意点】

都市近郊の低湿地が生息地であるため、都市開発や河川改修などの影響を受けやすい。開発する場合は、生態系について十分な事前調査した上で、完全な人工的環境にせず多機能型の自然とするなど、できるだけ自然を温存する配慮が望まれる。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
 小木広行，1982. オオチャバネヨトウとキスジウスキョトウの幼虫. 誘蛾灯，87:11-13.
 田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
 杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京
 岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

トビイロアカガネヨトウ *Euplexia albilineola* (Wileman et South)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

湿地環境で得られることが多い。全国的に既知産地が少なく、個体数も少ないいわゆる希少種である。本種の記録された守山区の里山的環境は土地開発により減少し、生息環境が悪化している。

【形態】

開張30mm内外。前翅は暗い紫褐色、横線は紫白色で明瞭。環・腎状紋態の輪郭は白色で鮮明である。後翅は外半は淡褐色で内半は淡黄褐色、外横線と横脈点があられる。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区中志段味（1992）の記録がある。

【県内の分布】

上記の他に旧稲武町井山、旧設楽町裏谷、豊田市自然観察の森の記録があるが、まれな種である。近年日進市の湿地で記録されている。

【国内の分布】

模式産地の奈良県吉野の他、福井県鳩ヶ湯、兵庫県氷ノ山、広島県豊平町、香川県高松市、福岡県北九州市から記録されるが産地は局限される。近年大阪府や福島県でも記録されている。

【生息地の環境／生態的特性】

平地にも山地にも記録がある。産出量は少なく、香川県高松市のように追加記録が出ず、県のレッドリストにあげられた産地もある。

成虫は秋季 10～11 月に、湿性環境で採集されることが多く、湿地との結びつきが強い。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された守山区中志段味一帯は、以前は里山的景観の二次林が残り、ネスジシャチホコやオオヤママイマイが記録された。小湿地も散在していたが、その後、土地造成が急速に進み、生息環境は悪化している。

【保全上の留意点】

市東部に残る里山的環境は、コナラやアベマキの雑木林と小湿地、ハンノキ林や細流を含み、尾張丘陵の動植物相のモデルであり、そのまま生きた博物館として一定区画を残せば理想的である。特に都市近郊に現存する小湿地は、遷移がすすみ消滅しやすいので、侵入するササ刈りや上木切りなど、人の手を加えてでもできる限り保全することが望ましい。

【関連文献】

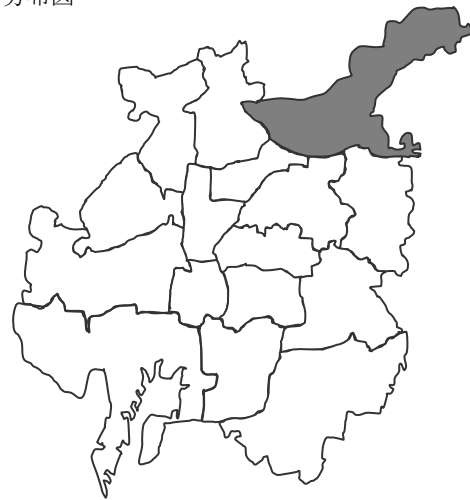
井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)



トビイロアカガネヨトウ
守山区中志段味、1992年10月3日、水野利彦 採集

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 セセリチョウ科>

ミヤマセセリ *Erynnis montana montana* (Bremer)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつては市東部丘陵の各所に早春、本種の姿が認められたが、生息場所である丘陵地のコナラやアベマキの雑木林が、土地開発等により減少し産地が孤立化し、生息条件が急速に悪化した結果、今日では市東部の数地点に認められるに過ぎない。

【形態】

開張 36～40mm。翅の地色は茶褐色で、後翅亜外縁から外縁にかけ黄色の小点列がある。前翅の翅表には紫灰褐色鱗粉を散布するが、雌では密度が高く、中央部で灰白帯のようになる。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に市東部丘陵（瑞穂区、千種区、名東区、天白区、緑区、守山区）で1970年代まで記録があるが、1980年代以降に急に減少した。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河地方の丘陵・山地にかけて広く分布するが、尾張地方の平野部では、ほとんど確認されていない。

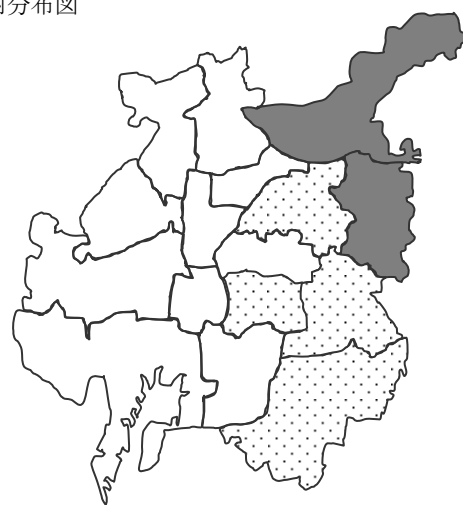
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

年1化で3月下旬から現れ、4月上・中旬に最も多くなる。雑木林やその周辺にみられ、地表や枯れ葉の上に翅を開いて止まる。タンポポ類など各種の花で吸蜜する。母蝶はコナラやアベマキ等の新芽に産卵し、幼虫はこれらの食樹の葉を食べ、秋に終齢幼虫に達して落葉とともに地表へ落下、地上の落葉層で幼虫で越冬後早春に蛹化、次いで羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1960年代には、平和公園・東山公園より東部の丘陵地では、春の風物詩として各所に多産したが、2000年以後は、名東区猪高緑地と守山区東谷山周辺のみに発生している。

主な生息場所であるコナラやアベマキのある二次林が工場・宅地造成、道路建設等により減少し、産卵に適した林縁の勢いの良い萌芽が減少したこと、林床の落葉層が薄くなって好適な越冬場所がなくなったこと、ドクガ駆除やマツ枯れ対策等で薬剤を空散したことなどが、本種の減少の要因と考えられる。産地が孤立化し遺伝子交流もなく、個体群の弱体化が起きている可能性もある。

関東地方でも、大都市周辺で本種の減少が著しく、東京都では絶滅としている。

【保全上の留意点】

現存するコナラやアベマキを主要樹種とする二次林を極力保全する。このような雑木林は多くの場合公園緑地となっているので、過剰な管理たとえば外来園芸樹種との植え替え、下枝切り、落葉除去などをしない。害虫防除のための農薬散布は必要最小限とするなど、配慮事項は多い。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.67, p.305. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

ウラクロシジミ *Iratsume orsedice orsedice* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

愛知県では尾張丘陵から三河山地にかけて分布する、マンサクを食樹とする比較的珍しい山地性のシジミチョウである。名古屋市内のマンサクの野生は限られ、さらに成木で近年葉枯れ病のため枯死する木が多く、生息条件が悪化している。

【形態】

開張32～35mm。裏面の色彩斑紋は独特で雄雌ほとんど差はないが、翅表は全く異なる。雄は銀白色で外縁部が細く黒褐色のほか斑紋を欠き、雌は外縁部は広く黒褐色で、翅長の三分の二程度まで灰白鱗をもつので、一見して区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根と東谷山頂上の記録がある。

【県内の分布】

犬山市、春日井市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地にかけ分布は広い。

【国内の分布】

北海道渡島半島南端部以南、本州、四国、九州。四国、九州では高地帯に生息。

【世界の分布】

台湾、中国西部。



ウラクロシジミ

田中多喜彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

全国的に山地性の種であるが、名古屋市近郊では犬山市奥入鹿、春日井市廻間町、瀬戸市定光寺、名古屋市守山区などの海拔100～300m程度の低山地でも生息している。5月下旬に羽化し6月上旬が最盛期となり、夕刻樹上をキラキラと銀白色の翅を輝かせて飛ぶ。

【現在の生息状況／減少の要因】

1990年代に入って、名古屋市近郊のマンサクは葉枯れ病のため茶褐色に変色するものが目立ち、数年のうちに樹勢が衰え成木の多くが枯死してしまった。現在は残った木や若木によって、ウラクロシジミはようやく命脈をつないでいる状態である。

守山区吉根にわずかに自生していたマンサクも、大規模な造成によって雑木林自体が縮小し、本種の生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

市内に残されたマンサクの自生しているような身近な里山の二次林の生態的価値を認識して、現存する二次林をできる限り緑地として温存すること。また公園整備のための雑木の間伐や下枝切り、農薬散布などには十全な配慮が望まれる。

【引用文献】

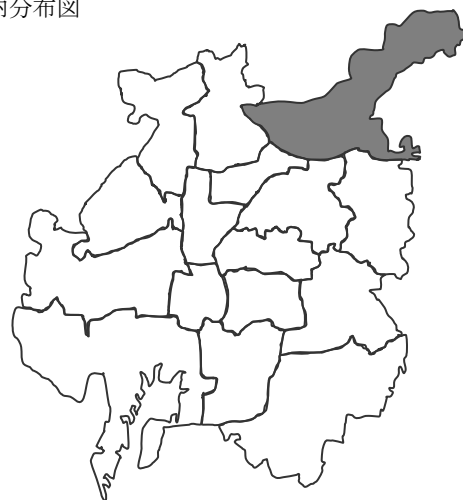
- 高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋史資料編 自然. 名古屋市.
山田芳郎, 2008. 名古屋でウラクロシジミを採集. 佳香蝶, 58(227):54.
大曾根剛, 2008. 名古屋市守山区吉根のウラゴマダランジミの衰亡. 佳香蝶, 60(234):73-76.
(この中に同地で大曾根によるマンサクよりウラクロシジミ2卵採集1987年1月1日の記録がある)

【関連文献】

- 川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.22, p.78. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

イチモンジチョウ *Limenitis camilla japonica* Ménétrières

カテゴリー

【選定理由】

食草を同じくするアサマイチモンジは、市内で安定した発生を続けているが、本種は名古屋市内で過去に確実な記録があるものの、現在注意してもほとんどその姿をみることができない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 52～62mm。雌はやや大型。和名のイチモンジとは黒地の前後翅を貫く一文字様の白帯にもとづく。雌は一般に大型で翅形は丸味を帯びる。雌は前翅中室内に不明瞭な白斑をあらわすが、アサマイチモンジほど常に明瞭ではない。アサマイチモンジでは前翅第3室の白斑（白帯の一部をなす）は大きく明瞭であるが、本種では白斑はその前後の白斑に比べて著しく小さく、時には消失する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区東山公園の古い記録と、平和公園（1973年）の目撃記録があるのみである。

【県内の分布】

アサマイチモンジに比べ、やや山地に多い。美浜町野間の記録があるが例外的。

【国内の分布】

日本全国に産するが、西南部の暖地では一般に山地に多く、平地にはまれ。

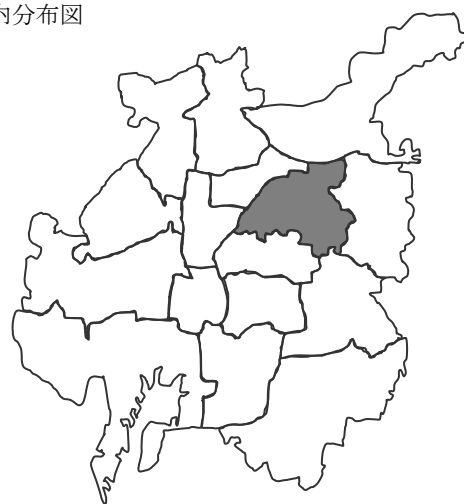
【世界の分布】

朝鮮半島、中国からヨーロッパに至るユーラシア北部の広域分布種。

【生息地の環境／生態的特性】

近縁種のアサマイチモンジがより陽性で明るく開けた環境を好むのに対して、本種は森林周辺や溪谷に多い。木曽川堤防では、アサマイチモンジのみが見られる。食樹は両種とも主にスイカズラで、ハコネウツギも食べる。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

旧版のレッドデータブックなごや 2004 では、アサマイチモンジが準絶滅危惧に選定されていたが、新修名古屋市長資料編自然（2009年刊）のための8年間の継続調査で、市内ではアサマイチモンジは多くないが確実に発生し、絶滅の危機が迫っているのはイチモンジチョウであることが明らかになった。名古屋市の東に隣接する日進市でも、2010年以降の詳しい調査で、アサマイチモンジは各所にかかなり多く産するが、イチモンジチョウは見られないことが判明した。

長野県軽井沢では、アサマイチモンジはより開けた河原や明るい林縁に見られ、イチモンジチョウは溪谷沿いの路傍でよく見られ住み分けているという。環境への耐性に差異があるかもしれない。九州でも減少が指摘されているが、近年温暖地でイチモンジチョウに衰微傾向があるとしても、その要因について明確に調べられたことはない。

【保全上の留意点】

市内では、イチモンジチョウもアサマイチモンジも、比較的大規模な緑地公園に多く自生する、ツル性のスイカズラを主な食樹としていると思われる。公園整備等で林縁と草地の間を覆っているマント群落を除去してしまうと、スイカズラも除去されてしまう。過剰な整備や伐採をしないこと、また害虫駆除のための農薬散布には十分な配慮が望ましい。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎，2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋市長資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男，1976. 原色日本蝶類図鑑，pl.48,p.226. 保育社，大阪.
福田晴夫ほか，1983. 原色日本蝶類生態図鑑（Ⅱ）. 保育社，大阪.
白水 隆，2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京.

（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

セスジイトトンボ *Paracercion hieroglyphicum* (Brauer)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつては平地池沼に最も普通の種であったが、市内では極く一部の緩流、池しか安定的産地は無くなった。最普通種の激減は市内全域の自然環境の悪化を意味し、その象徴として取り上げた。

【形態】

成虫は32mm内外。雄は青色の地に、雌は黄緑色の地に黒斑を有する。肩の黒条に淡色の筋が明らかに走り、これが名前の由来になっている。

幼虫の尾鰭の形状、斑紋は同属他種に似て区別は困難である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、北区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、中川区、港区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平地、丘陵に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシア。



セスジイトトンボ 雄

天白区天白町平針、2013年5月16日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵地の浮葉・沈水植物が豊富な池や溪流に生息する。条件が良ければ多産するが、若干の飛来とも考えられる個体しか見られない池もある。出現期は5月末から10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、安定的産地は守山区志段味の庄内川水系の緩流部、天白区大堤池など極く一部に限られる。天白区の荒池、名東区の塚ノ杵池で比較的近年の記録は有るが、極く少数個体で飛来の可能性もある。塚ノ杵池ではその後発見されていない。全国的にも減少傾向にある。隣接する長久手市では絶滅した。

生息地の開発による消滅、水質と池沼自然度の悪化、生息地の減少に伴う生息地間の距離の増大による交流の断絶等諸々の減少要因が考えられる。

【保全上の留意点】

本種が残存する生息場所では水生植物の保全が重要である。長久手市の杵ヶ池では住民苦情により水草を一掃し、本種を絶滅に至らしめた。

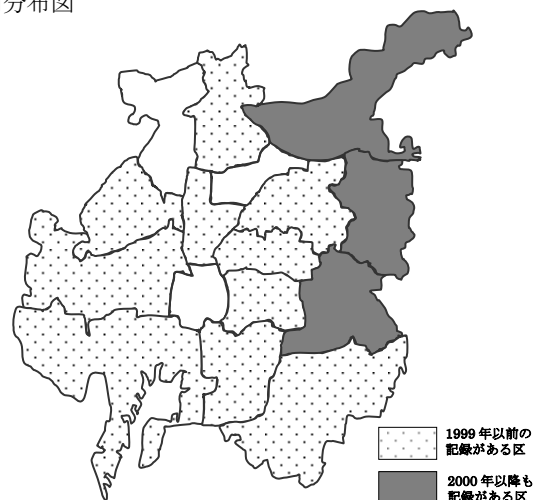
【特記事項】

本種を始め池沼性普通種イトトンボは全面的な減少が著しく、多くの池沼で残存するのは、比較的悪環境に対する適応性が強いと見られるクロイトトンボだけとなった。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2013. 塚ノ杵池水抜き後のトンボ. ため池の自然, (54):19-20.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

ムスジイトトンボ *Paracercion melanotum* (Selys)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

平地池沼に普遍的な数種のイトトンボの中では、生息する池沼に限られる傾向があること、定着に不安定な面があることなど、やや異質なところがあり、かつ、近年かなり減少している。

【形態】

成虫の体長35mm内外。雄は鮮やかな青色地に黒斑、雌は黄緑色で前胸後縁がえぐられることが特徴。

幼虫の尾鰭はやや幅広で先端は丸味がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中村区、中区、中川区、港区、南区、天白区で記録がある。

【県内の分布】

局在的であるが平野に広く分布する。

【国内の分布】

宮城県以西の本州、四国、九州、南西諸島に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム。



ムスジイトトンボ 雄

千種区星ヶ丘山手、2008年8月1日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地の池沼を主とするが、寺院の小池、コンクリート貯水槽のような植生が貧弱な水域からも発生する。沿海部に多いことも特徴的。突然消え、突然現れる不安定な面がある。このため移動分散性は比較的強いと考えられる。混棲する同属のセスジイトトンボを生息地から駆逐する力がある。成虫の出現期は5～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でも時に新産地の発見もあるが、既産地の多くから姿を消している。隣接する長久手市の平地、丘陵でも減少している。1950年代には名古屋城堀にも多産し、中区東別院にも産した程であった。比較的近年の記録があるのは千種区星ヶ丘山手、天白区天白町平針所在の池位であるが、その生息状況は必ずしも安定的なものではない。

生息する池の水質汚濁と環境の変化、外部からの供給交流の衰退などが減少の要因と見られる。

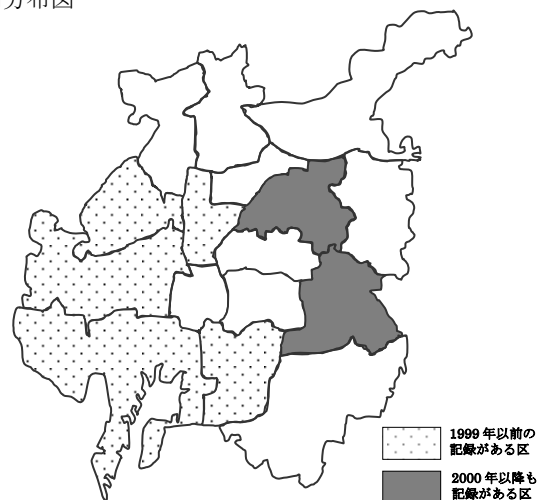
【保全上の留意点】

多数の産地で多産していた頃なら、自然度の低い水域でも生息し得たと思われるが、産地が減った現在では、基本的には植生豊かな自然度の高い池沼の確保が必要であろう。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1968. 愛知県のムスジイトトンボ. 佳香蝶, 20(60):101-104.
高崎保郎, 2009. 名古屋城及び周囲の動植物誌. ため池の自然, (47):8-18.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 イトトンボ科>

モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris)

カテゴリー

【選定理由】

湿地の開発による喪失、湿性植物の伸長等による湿地の状態の変化により、特に平野や平野に接する丘陵部で著しく減少した。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

成虫は体長27mm内外の華奢なイトトンボ。雄は黄緑色で腹端のオレンジ色が目立つ。雌は未熟時はオレンジ色であるが成熟すると緑色に変わり腹部背面に黒条が現れる。

幼虫の尾鰭は柳葉状で先端は尖り無斑である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、緑区、名東区、天白区と港区の1ヶ所で記録がある。

【県内の分布】

平野や丘陵から山地にかけて、局所的ではあるが広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。北海道は絶滅と見られる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、極東ロシア。

【生息地の環境／生態的特性】

平地、丘陵、低山地の湿地や池畔の湿地状部、時として廃田や山峡の水田でも見られる。生息できる湿地は水深が浅く、湿生植物の丈が低い状態の時に限られ、湿地の状態に変化はなくても草丈が高くなっただけで消滅する。

イトトンボの中では小型脆弱で発生場所に固執すると見られているが、市街地の公園や学校ビオトープに飛来した例も観察されており、かなり移動分散力を有するのではないかとと思われる。成虫は6～7月に出現する。

【現在の生息状況／減少の要因】

比較的近年市東部の丘陵地帯と南西部の低地1ヶ所で記録があった。隣接する尾張東部丘陵でも減少しており、長久手市では1ヶ所の産地しか現存しない。

主として平野や隣接丘陵の湿地の喪失や、湿地が存在しても植生の状態の変化により生息可能でなくなることにより減少した。

【保全上の留意点】

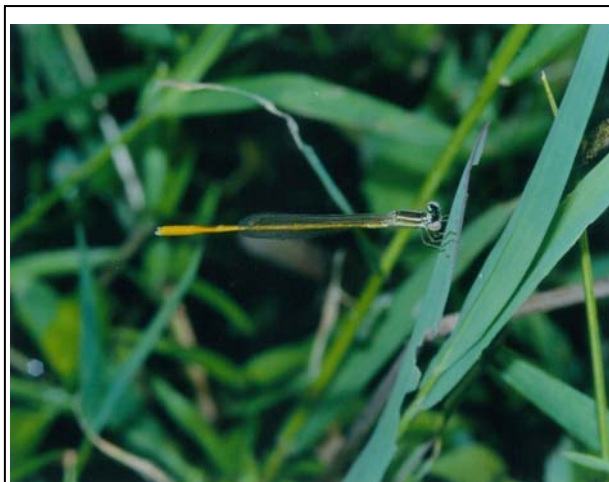
湿生植物が適度に生育する浅い湿地の保持が必要である。

【特記事項】

和名、学名のモートンはイギリスのトンボ研究者 K. Morton に由来する。

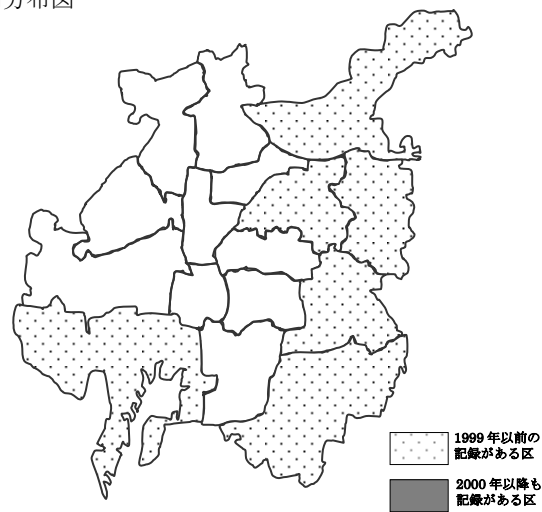
【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49):12-18.



モートンイトトンボ 雄
愛知県長久手市東山、1995年6月24日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

サラサヤンマ *Sarasaeschna pryeri* (Martin)**【選定理由】**

樹林中の小湿地や水溜りの存在の指標となる種である。市域では母体となる東部の丘陵の樹林の減少が著しく、存続が危ぶまれる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫の体長62mm内外。黒色の地に黄緑色斑を点在する。ヤンマとしては細身で小型。

幼虫はヤンマとしては小型で、頭部は角張り、腹部の側棘や凹凸が顕著で全体としてゴツゴツした印象が特徴。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

丘陵地から低山地に広く分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

済州島。



サラサヤンマ 雄
名東区猪高町上社猪高緑地、1987年5月30日、
高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵から低山地にかけて広く分布する。幼虫は落葉樹林の林内、林縁の小湿地や水溜り、時に明るい湿地に生息する。雄は林内の空間や池沼・湿地の縁で縄張を形成し、低くホバリングや往復飛行を繰り返す。条件の良い縄張場所には次々と雄が飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でも東部の丘陵地帯の樹林内に小規模な湿地や水溜りが存在する場所では、現在も安定的に生息している。例えばまとまった二次林が現在も残存する名東区猪高緑地、千種区平和公園、天白区島田緑地、守山区の東端丘陵地などである。

平地に接する丘陵地の開発破壊が続き、小水域を涵養する二次林の衰失が減少要因である。

【保全上の留意点】

発生源である小水域を内在する或る程度まとまった丘陵地の二次林や、独立又は池畔の湿地の保全が必要である。

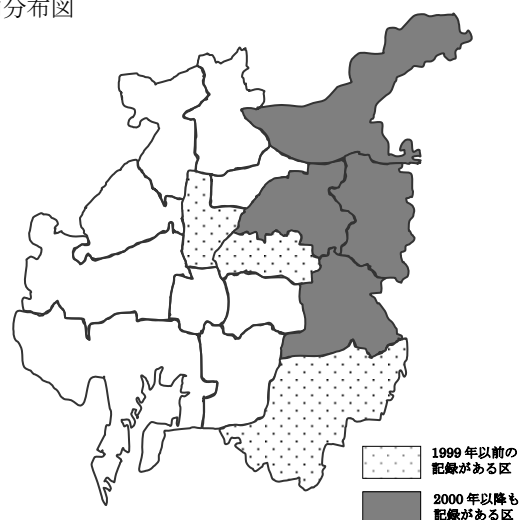
【特記事項】

中区栄の地上や地下街での目撃、採集記録があり、かなりの移動分散力を発揮することもあることが伺われる。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
高崎保郎, 1994. 名古屋市中心部地下街でサラサヤンマを採集. 月刊むし, (286):12.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

コシボソヤンマ *Boyeria maclachlani* (Selys)**【選定理由】**

もともと本市では稀で、近隣の平野部では絶滅状態。東部丘陵地帯からの供給も期待し難い。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長85mm内外。黒褐色の地に黄斑を有する。腹部第3節が強くくびれる（細まる）ことが特徴で名の由来である。

幼虫は頭部後角に顕著な突起があり、腹部第4～9節の側棘が発達し、全体にトゲトゲしい印象と、触れると腹部を大きくそらし擬死行動をとるのが特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、守山区で記録されている。

【県内の分布】

かつては平地でも産したが、現在は丘陵から低山地に局所的に産する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。



コシボソヤンマ 雄
千種区東山、1954年8月14日、高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地の中小河川、丘陵、低山地の林間の小流に局所的に産する。幼虫は流下し終令幼虫は下流に多い。成虫は樹陰を好むが開けた川の岸に沿って飛翔すること多い。樹陰の流れの朽木等に産卵する。産卵は夜間も行われる。成虫の出現期は6～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

多くの所では1950年代初期までは、平地の水路や中小河川でも見られたが、現在では丘陵から低山地の清流に局在する。三河地方には比較的広く分布する。瀬戸市南西部の丘陵地では多産する所もあり、守山区には生息の可能性もある。

特に平地中小河川の水質と改修による環境の悪化、川自体の消滅により、平地、平地に接する丘陵では著しく減少又は絶滅した。

【保全上の留意点】

平地、平地に接する丘陵地の中小河川の水質汚濁の防止と産卵適所となる水辺環境の保全が必要である。

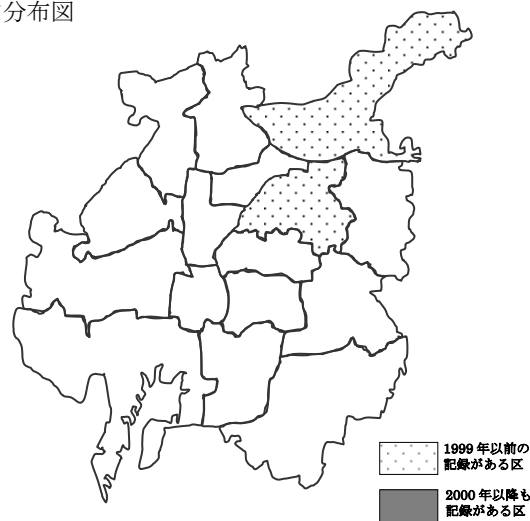
【特記事項】

やや生息の有無が把握しにくい種である。

【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫（上），pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



（執筆者 高崎保郎）

昆虫類 <トンボ目 ヤンマ科>

マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* (Selys)**【選定理由】**

かつては市街地でもよく見られたが、生息できる止水域の減少により明らかに衰退した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

成虫は体長75mm内外。雄は濃褐色地にすこぶる美しいコバルトブルーの複眼と胸斑を有する。雌は濃褐色地に黄緑斑を有し、成熟すると翅は濃い褐色になり高飛していても判別し易い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、熱田区、南区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平地から丘陵地に広く分布する。

【国内の分布】

宮城県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、インド。



マルタンヤンマ 雄
南区呼続四丁目呼続公園、1971年8月1日、
清水典之 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地から丘陵地にかけての水生植物が豊富な池沼や、林内、林縁の水溜りのような小池に生息する。

成虫は昼間は林内に潜み、夜明けや夕方薄暮時に池沼、水田や空き地を高飛、或いは低空を敏速に飛翔する。成虫出現期は6～10月。

【現在の生息状況／減少の要因】

成虫は昼間は殆ど行動しないので見付け難いこと、高飛又は敏速に飛翔するので採集し難いこと、発生源の小水域が発見しにくいことなどから、広く分布する割には確実な生息の把握は困難である。近年では守山区、名東区、天白区など市東部寄りの丘陵地形に所在する緑地で成虫又は幼虫が知られている。

生息水域を含む緑地や良好な池の宅地開発等や環境整備による消滅が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

市内に残存する生息可能水域のある緑地の保全が重要である。

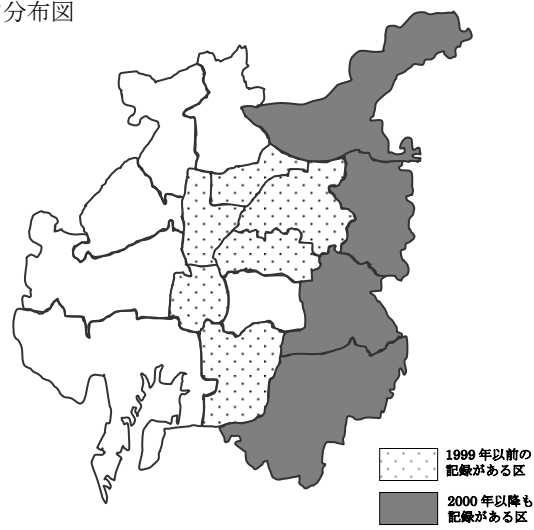
【特記事項】

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認し易い。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
鵜殿清文・鵜殿 茂・清水典之, 1974. 黄昏活動性のヤンマ3種. 佳香蝶, 26(100):95-98.
なごや生物多様性保全活動協議会, 2013. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書. P.260. 名古屋.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

ナゴヤサナエ *Stylurus nagoyanus* (Asahina)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、大・中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。名古屋を基産地とする。

【形態】

成虫は体長62mm内外。黒地に黄斑を有し、腹部第7～9節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種メガネサナエに酷似するが、やや小型であること、腹部第4～7節の黄斑が環状に腹部側面に続くことで区別できる。

幼虫は細長い。メガネサナエに酷似するが腹部第9節がやや太短いことで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、東区、北区、西区、中村区、中区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張平野を中心に尾張に接する西三河の一部で記録されている。

【国内の分布】

宮城県、山形県以西の本州、四国、九州に局地的に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平野の大・中河川の下流域に生息する。往時はその支流にも生息していたと考えられる。少数ではあるが愛知用水を流下し、下流の調整池で羽化することもある。幼虫期は複数年で砂泥底の深みに棲み、盛夏の候に泳いで深みから岸に達し羽化する。

成虫は極めて強い移動分散性を有し、市街地でしばしば発見される。名古屋市でも発見される区が多いのはそのためである。成虫は8～9月を中心に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県で確実に産卵、羽化が認められているのは木曽川であり、そこから導水している愛知用水水路とその調整池では僅かながら羽化が確認されている。緑区の記録はその一例である。瑞穂区天白川では、かつては定着していたと思われる。本種は強い移動分散性を有することにより、市内でも中区、東区始め広範囲に間々飛来採集例がある。近年では西区の庄内川畔で定着を思わせる観察例がある。

大・中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内での定着ははっきりしないが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、自然状態が良好な水辺と水辺林の保持が必要である。

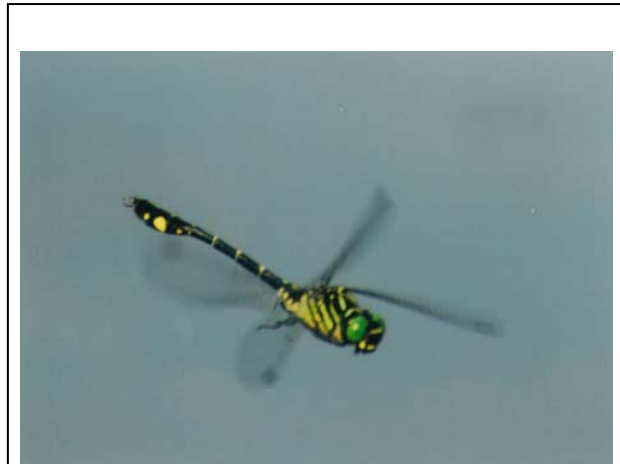
【関連文献】

相田正人, 1989-1990. 濃尾平野のナゴヤサナエ (1)～(7). 月刊むし, (221)-(226).

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.9-78. 愛知県.

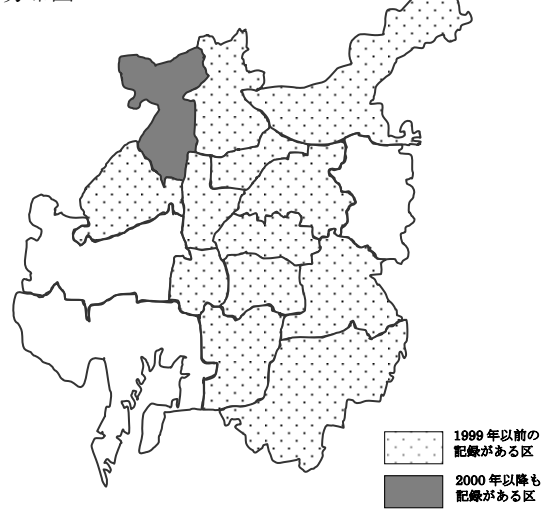
鵜殿清文, 1994. 愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加. 佳香蝶, 46(179):38.



ナゴヤサナエ 雄

西区堀越町、2013年8月18日、清水典之 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 サナエトンボ科>

メガネサナエ *Stylurus oculatus* (Asahina)**【選定理由】**

市内で発見される個体の発生源は必ずしも明らかでないが、中河川の水質、水辺環境の悪化により減少した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

成虫は体長65mm内外。黒字に黄斑を有し、腹部第7～9節が著しく広がった中型のサナエトンボ。近似種ナゴヤサナエに酷似するが、やや大型であること、腹部第4～7節の黄斑が塊状で腹部上面に止まり腹部下方に筋状に続かないことで区別できる。

幼虫はナゴヤサナエに酷似するが、腹部第9～10節がより細長く全体的に細長い印象が強いことで区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中村区、瑞穂区、南区、守山区、緑区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

尾張平野を中心に、西三河の矢作川水系で記録されている。

【国内の分布】

本州の青森県から近畿まで局地的に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平野或いは丘陵を主として中河川の中・下流域、時に大河川の砂泥底に生息する。ナゴヤサナエが主として大河川に拠るのとは異なる。大河川から取水する用水（例：愛知用水）の下流や調整池に流下し、そこでかなりの量が羽化することもある。波のある大湖（例：琵琶湖・諏訪湖）からも発生する。

成虫は7～8月を中心に比較的長期にわたり羽化し、成熟成虫は8～9月に多い。未熟成虫はかなり移動分散することがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では愛知用水とその調整池で羽化と成虫が、矢作川水系で産卵と成虫が記録されている。1990年代初頭には緑区内の愛知用水で多数が羽化した。かつては市内や市周辺の丘陵地帯の中河川に定着していたと考えられ、例えば瑞穂区内天白川では比較的多数の成虫が認められた。現在市内に確実な発生源が存在する可能性は低い、飛来の可能性はあろう。

中河川の水質悪化、河川改修等による水辺環境の劣化、河川周辺の緑被率の低下が減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内での定着は不明であるが、一般的には大・中河川の水質汚濁防止、良好な水辺と水辺林の保全である。

【特記事項】

本種は成虫よりも幼虫又は羽化殻による方が生息確認し易い。

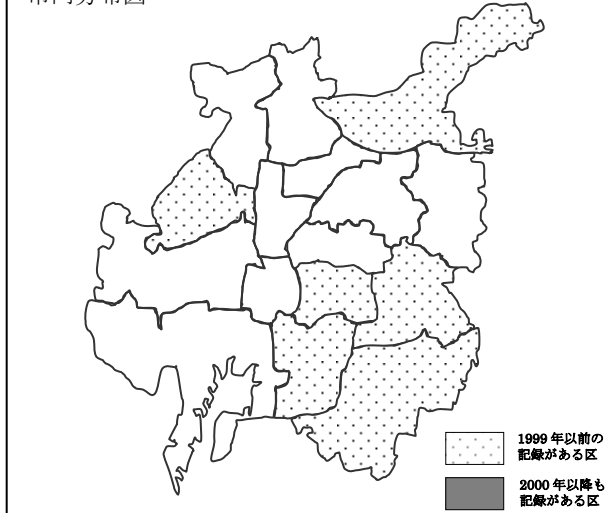
【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.
鶴殿清文, 1994. 愛知県のメガネサナエおよびナゴヤサナエの産地追加. 佳香蝶, 46(179):38.



メガネサナエ 雄
瑞穂区弥富町天白川、1970年9月6日、高崎保郎 採集

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

トラフトンボ *Epithea marginata* (Selys)**【選定理由】**

平野の植生豊かな池沼に生息するが、そのような場所の消滅、環境悪化により減少した。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は53mm内外。狭義のエゾトンボ科に属するが、体は金属緑色でなく黒地に橙褐色斑を有する。雌の前後翅前縁に黒褐色帯を有する。

幼虫はややゴツゴツした感じで肢が長い。背棘は2～9節にある。側棘は顕著でない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、東区、中区、昭和区、南区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

平野、丘陵に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



トラフトンボ 雌
名東区猪高町高針牧野ヶ池緑地、2013年5月9日、
高崎保郎 採集

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は平地、丘陵の浮葉、沈水植物が豊富な池沼に生息する。未熟成虫は林間空地の上空をゆっくり旋回飛行する。成熟雄は岸に沿って巡回飛行する。雌は卵塊を腹端につくり、接水放卵すると卵塊はゼラチン様紐状になり沈水植物にからみつく。出現期は4月下旬～5月。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては中区の市街地路上でも飛行するのが見られたが、水生植物に富む良好な池沼の消失や環境悪化により減少した。現在市内市街地でも或る程度自然状態の良い天白区天白公園大根池、同区大堤池、千種区平和公園猫ヶ洞池、名東区牧野ヶ池緑地牧野池では引き続き生息している。市内の樹林を伴う水生植物が豊富な池を精査すれば、産地は増える可能性はある。隣接する長久手市でも安定的に発生している。

植生豊かな池沼と林地の消失が減少要因である。

【保全上の留意点】

枕水・浮葉植物が生育する池の水質と周辺林地の保全。分布する公園の池では外来魚、鯉等の捕食性魚類の排除。

【特記事項】

2010年の補遺版では絶滅危惧Ⅱ類に引き上げられたが、その後の生息状況に鑑み準絶滅危惧に戻した。

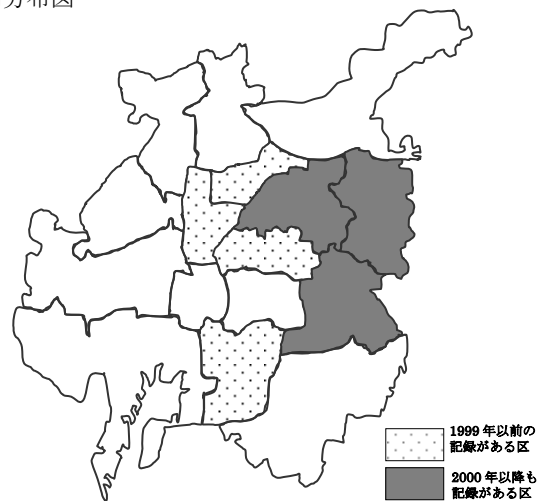
【関連文献】

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人、1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

なごや生物多様性保全活動協議会, 2013. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書. P.260. 名古屋.

(執筆者 高崎保郎)

市内分布図



昆虫類 <トンボ目 トンボ科>

ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* Rambur

カテゴリー

【選定理由】

種としてはむしろ普通種で、明るい湿地依存の指標としての意義が大きい。然し市内に限っていえば、本種の残存している湿地は極く僅かでその存続が危ぶまれる。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は19mm内外。雄は成熟すると真赤になる。雌は黄色、茶色、黒色の斑模様。極く稀に黒化傾向を示す個体が発見される。

幼虫は終令で9mm前後の極く小型で太短い体形。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、昭和区、守山区、緑区、名東区、天白区で記録されている。

【県内の分布】

県内全域の主に丘陵から低山地にかけて分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア、オセアニアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から低山地にかけ広く分布するが、市周辺では尾張東部丘陵地帯特有の地層により生じた湧水湿地（低湿地）群に多産する。平らな大きい湿地、池頭流入部の湿地、斜面崩壊型湿地やその下部に生じた湿地、初期の廃田などいろいろな形の湿地に生息するが、水深が極く浅く、水域に生ずる湿性植物の丈が低く、日当たりが良いことが条件である。

成虫は常に湿地上や周囲の草むらで見られることから、発生場所から遠く離れないと一般に解説されることが多いが、かなりの移動分散力を有し、最大1.5km程移動したことがマーキングにより確認されている。成虫の出現期は5月下旬～9月上旬。

【現在の生息状況／減少の要因】

市東部に隣接する尾張東部丘陵地帯西端に位置する長久手市や瀬戸市海上の森などには多産するが、市内で自然状態で残存するのは、守山区上志段味東谷の一、二の湿地位になったと見られる。同区大森八竜湿地は近年姿を消していたが、2013年少数が再確認されている。人為管理下では千種区名古屋大学博物館野外観察園、天白区島田緑地などで見られる。これらは自然由来の個体である。名東区明徳公園の湿地は無為に埋め立てられ、同区猪高緑地では水田放棄や植生遷移により本種は消滅した。

造成による湿地の消滅と、高茎草本の繁茂等環境変化などによる、生息可能な湿地自体の衰失が減少の主要因である。

【保全上の留意点】

湿地本体とそれを涵養する周辺林地の保全である。生息可能な状態を維持するためのある程度の人為管理も場合により必要であろう。

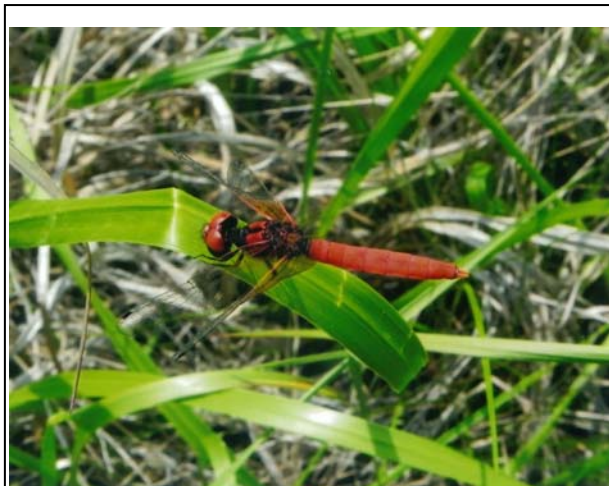
【特記事項】

千種区東山植物園に造成された斜面湿地で見られる本種は、出自不明の移入由来であり、真の東山公園産ではない。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

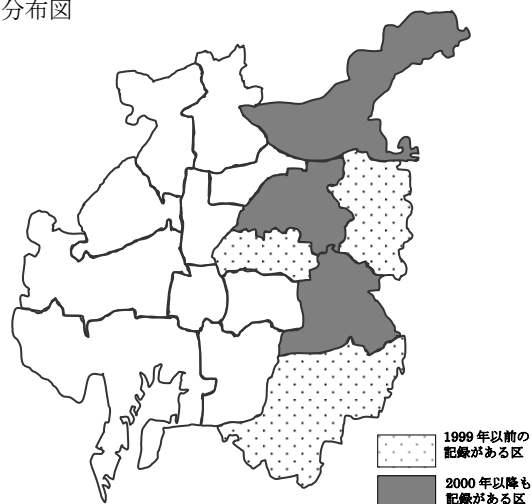
安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.



ハッチョウトンボ 雄

守山区上志段味東谷、2013年6月5日、高崎保郎 撮影

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <ゴキブリ目 オオゴキブリ科>

オオゴキブリ *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

主として、平野部の遷移の進んだ照葉樹林の太い朽ち木中に生息している。朽ち木の木質部を食い、ほぼ一生を朽ち木の中で過ごす。そのため、移動力が弱く分布域の拡大が困難であるため、開発による生息環境の変化や消失が個体数の減少につながる可能性が高い。

【形態】

体長は40～45mmで、体は太く厚く、体色は光沢のある漆黒色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区熱田神宮と千種区東山公園に記録がある。

【県内の分布】

全体に分布しているが、三河地方を中心に多く、河川に沿って内陸部に広がっている。

【国内の分布】

照葉樹林が分布する本州（関東以西）、四国、九州のほか、佐渡島、隠岐島、対馬、屋久島から沖縄県に分布する。八重山諸島には亜種ヤエヤマオオゴキブリが分布する。

【世界の分布】

台湾、中国。



オオゴキブリ

熱田区熱田神宮、2013年12月8日、水野利彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

市内に残された照葉樹林内の林床にある太い朽ち木に生息している。胎生である。朽ち木中に坑道を作って成虫と幼虫が群生している。

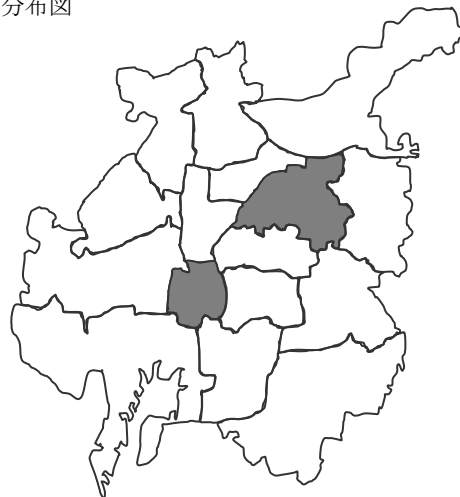
【現在の生息状況／減少の要因】

熱田神宮の神域では生息を確認しているが、かつて記録された千種区の東山公園・平和公園ではもう見られなくなった。施設の建設や林床の乾燥などが原因と考えられる。県内では温暖化の影響か、森林育成の結果かは不明であるが、分布域が拡大している。

【保全上の留意点】

現在残されている照葉樹林を保存し、太く湿潤な朽ち木の残る林床の環境を維持することが必要である。森林育成も有効な手段の一つと考えられる。

市内分布図



【関連文献】

- 朝比奈正二郎, 1988. 日本産ゴキブリ分類ノート, X VII. オオゴキブリ族の種類. 衛生動物, 39(1):53-62.
 佐藤正孝, 1978. 熱田神宮林の昆虫類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書, pp.93-110.
 日浦勇ほか, 1977. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.52.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10.

(執筆者 佐藤正孝、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カマキリ目 ヒメカマキリ科>

ヒメカマキリ *Acromantis japonica* Westwood

カテゴリー

名古屋市長2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

樹上性。開発などによる雑木林の減少と共に生息環境は悪化しつつある。

本種は環境変化に対して適応性が低いためか、住宅地や公園など人間の生活環境に近い生息地の記録は少ない。今後、ますます雑木林が減少していくと生息数の減少が懸念される。

【形態】

小型種。有翅。他のカマキリ類からは、前脚脛節の外縁刺が横向きに伏して相互に密着していること、後脚腿節には葉片状の付属物があることなどから区別できる。

体長（翅端まで）雄、雌とも25～32mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区。

【県内の分布】

知多半島を含む平地～山地に広く分布する。豊根村、旧額田町、豊田市（木瀬町、足助町、旭町など）、瀬戸市、春日井市、犬山市、南知多町、美浜町など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

台湾。



ヒメカマキリ
守山区東谷山、1989年10月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林やそのマント群落に見られる。成虫の走光性は比較的強く、店頭の灯火や自販機のアかりなどにもよく飛来する。その際上位の捕食者（ヤモリやカエルなど）に二次的に捕食されることがある。本種保護の際の考慮すべき点の一つと思われる。

卵（卵鞘）は樹幹のほか、林床の石や倒木の下側などに産みつけられることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の守山区東谷山はその中腹～山頂にかけ雑木林が残されており、この状況が続く限り本種の存続は可能であろう。

【保全上の留意点】

生息環境である雑木林を残すこと。林床の過度の清掃・整備は産卵場所を奪うことにもなるので適当に控えること。産地周辺の夜間の道路照明は、昆虫が光源の存在を感じにくいLEDを使用することが望ましい。

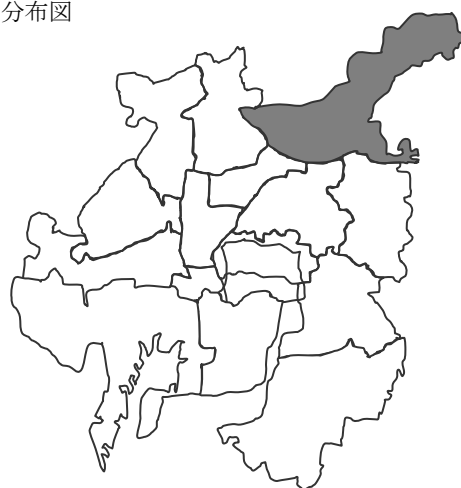
【特記事項】

近似種サツマヒメカマキリとの区別点が明確になり、本種は夏から秋に出現し卵越冬することの他、頭部や後腿節の突起の形状、前翅の翅脈の違いが指摘されている。名古屋市には両種が生息する可能性がある。

【関連文献】

- 岡田正哉, 2000. カマキリのすべて. トンボ出版, 大阪.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のカマキリ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.82-83. 愛知県.
 日浦 勇, 1993. ヒメカマキリ科. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.48. 保育社, 大阪.
 吉鶴靖則, 2012. 豊田市のヒナカマキリの2つの記録とサツマヒメカマキリの記録について. 佳香蝶, 64(251)57-60.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 コロギス科>

ハネナシコロギス *Nippancistroger testaceus* (Matsumura et Shiraki)**【選定理由】**

本種は雑木林に生息する昆虫類の中での上位捕食者。市内での雑木林の減少に伴い本種の生息環境は狭められつつあり、生息地によっては個体数も減少に向かっている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。ずんぐりした体型。全体にツヤのある黒褐色で頭・胸部背面と脚は黄褐色。まれに黒褐色部がほとんど消失した個体もある。雌の腹端には7~8mmのナギナタ状の産卵器がある。

体長(腹部まで)は雄、雌とも13~18mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区、千種区、天白区、守山区。

【県内の分布】

渥美半島、知多半島を含め各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、常滑市、蒲郡市、田原市(渥美町)、知多市、美浜町、南知多町、設楽町、豊田市(稲武町、藤岡町、小原町、足助町、旭町、下山町、御作町など)旧作手村(作手地区、豊根地区)など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林に生息する捕食性の種類。樹上性。昼間は各種植物の葉を綴った巣に潜み、夜間に活動する。複数の幼虫が個々に巣を形成し、集まって生活することがある。行動は敏捷で鱗翅類の幼虫をはじめとする小型の昆虫類を捕食する。樹液や果実などにも来る。

【現在の生息状況／減少の要因】

昭和区(八事)の生息地は宅地開発が進み樹林が減少しつつあり環境は悪化している。守山区(東谷山)は生息地の山の中腹~山頂にかけては雑木林が十分に残されており、この状態が維持されるかぎり本種の存続は可能であろう。

【保全上の留意点】

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草の過度の刈り込みや樹木の過度な間引き・枝打ちは控えること。

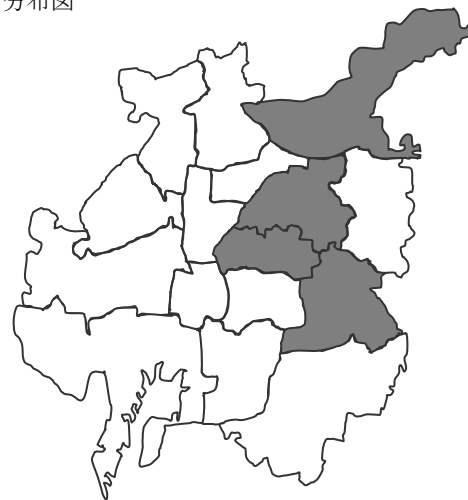
【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目(2). 愛知県の昆虫(下), pp.5-20. 愛知県.
日浦 勇, 1993. ハネナシコロギス. 原色日本昆虫図鑑(下), p.58. 保育社, 大阪.
日本直翅学会(編), 2006. バッタ・コロギ・キリギリス大図鑑, p.10, pp.359-360. 北海道大学出版会, 北海道.



ハネナシコロギス
豊田市猿投山鈴ヶ滝、1982年6月、岡田正哉 撮影

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 コロギス科>

コロギス *Prosopogryllacris japonica* (Matsumura et Shiraki)**【選定理由】**

本種は雑木林に生息する大型捕食性昆虫として、市内ではハネナシコロギスを凌ぐ最上位の昆虫である。食物連鎖上位の昆虫であるが、個体数は少なく雑木林の環境変化の影響を受けやすい。

【形態】

有翅。頭は大きく体はズングリとしており一種の威圧感がある。体と脚は淡緑色で、畳んだ翅の背面は褐色。雌の腹端には 20～25mm の刀状の産卵器がある。

体長(翅端まで)は雄、雌とも 27～33mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、守山区。

【県内の分布】

渥美半島、知多半島を含む各地に広く分布する。犬山市、瀬戸市、蒲郡市、豊田市（足助町、稲武町、旭町、藤岡町、小原町）、岡崎市、田原市（渥美町）、設楽町、美浜町など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



コロギス

豊田市猿投山、1985年7月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林に生息。昆虫の内ではカマキリ類と並ぶ上位捕食者の内の1種。近似種のハネナシコロギスよりは大型だが個体数は少ない。大型であるため、環境の変化に敏感であると思われる。夜行性であり、昼間は適当な植物の葉を綴って造った‘巣’に隠れている。主に昆虫類を捕食するが、果実や樹液なども食する。脅すと翅を広げて威嚇してくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の生息地は松坂町と東谷山である。松坂町は小幡緑地に隣接。同緑地の一部には豊かな雑木林が残されている。東谷山もその中腹～山頂にかけては、県有林として良好な雑木林が見られる。両所とも過度の整備が行われない限り本種の存続は問題ないであろう。

千種区の生息地は平和公園。雑木林は豊かであるが、最近一部に広い芝地が造成され本種にとっては生息地が分断されることになった。しかしこれ以上の伐採・造成がない限り本種の存続は可能であろう。千種区東山公園でも生息が確認されている。

【保全上の留意点】

雑木林の保存と共に本種の餌となる各種昆虫類も繁殖できるよう、下草などは適当に残し、林床や林縁の過度の整備・清掃は控えること。また、本種に限らず、雑木林は道や芝地などで寸断することなく、樹上性の種類が自由に渡り歩けるよう配慮すること。

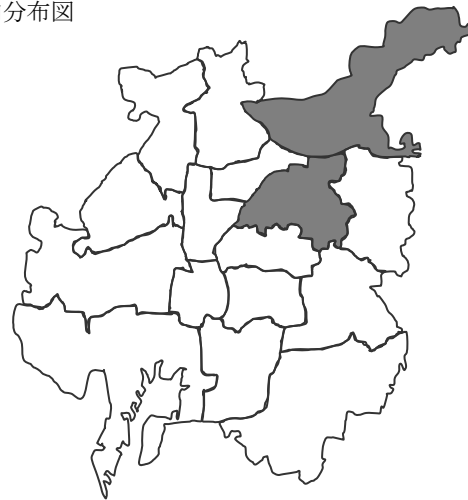
【関連文献】

岡田正哉, 1991. 愛知県の直翅目 (2). 愛知県の昆虫 (下), pp.5-20. 愛知県.

日浦 勇, 1993. コロギス. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.58. 保育社, 大阪.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コロギ・キリギリス大図鑑, p.5, p.358. 北海道大学出版会, 北海道.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

ヤマトフキバッタ *Parapodisma setouchiensis* Inoue**【選定理由】**

翅が短く飛べないため生息地間の交流は多少とも乏しいと思われる。県内に点々と分布するが翅の長さなどに地域差が見られる。市内の分布は限られており、個体数も少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

中型種。短翅。翅頂は雄 7～8mm、雌 11～12mm。全体に草緑色。翅は褐色で、腹部背面で左右が接する。翅の長さなどは生息地により差がある。後脚下内側は赤紅色。

体長（腹端まで）は、雄 24～27mm、雌 32～36mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

知多半島を含む平地～山地に分布する。豊田市（稲武町、足助町、旭町、下山町、小原町）、瀬戸市、南知多町・美浜町など。

【国内の分布】

本州、伊豆諸島など。

【世界の分布】

韓国（済州島）、中国？。



ヤマトフキバッタ

守山区東谷山、1994年8月3日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹林性。広葉樹林周縁やそのマント群落に見られる。地中や倒木に産卵するが、湿った立枯木にも産卵することがある。

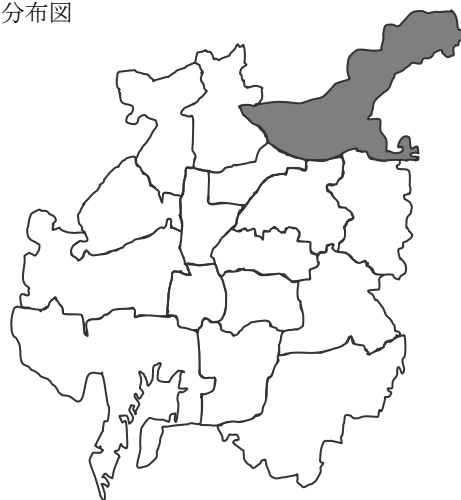
【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山。山麓の用水路工事や公園化などはあるが、本種の発見された中腹～山頂部の生息環境は残されている。一応本種の存続は可能であろう。ただし現在の生息密度は低い。

【保全上の留意点】

現在ある広葉樹林を残すこと。クズのような大型の葉の上で休んでいることが多いのでこうした植物も適度に残すこと。

市内分布図

**【関連文献】**

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.

Tominaga, O., S. Y. Storozhenko and Y. Kano, 1996. Two new species and a new subspecies of the genus *Parapodisma* (Orthoptera, Acrididae) from Japan. *Tettigonia*, 1(1):1-23.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, pp.248-249, p.522. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

セグロイナゴ *Shirakiacris shirakii* (Bolivar)**【選定理由】**

草地性。湿地や河川周辺の湿った草地に生息する。こうした環境は排水工事などにより造成地とされやすく、湿地そのものの存続と共に本種の生息が懸念される。分布域は広いが、全国的にも個体数が少ない希少種である。

【形態】

有翅。前胸背面は濃いチョコレート色で淡色条に縁どられる。後脚脛節の中央付近から跗節にかけては赤紅色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

おもに三河平野部～尾張地方に見られる。岡崎市、犬山市、日進市、長久手市、春日井市、瀬戸市、武豊町、南知多町（日間賀島）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）などに分布する。

【世界の分布】

ロシア沿海州南部、中国東部～東北部、台湾、カシミール、パキスタン。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



セグロイナゴ

守山区東谷山、1986年8月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湿地周辺や河川沿いの湿った草地に生息。排水工事等による人為的な乾燥化と共に、最近各地の湿地で自然的な乾燥も進んでいるようで全体的には環境悪化の傾向にある。

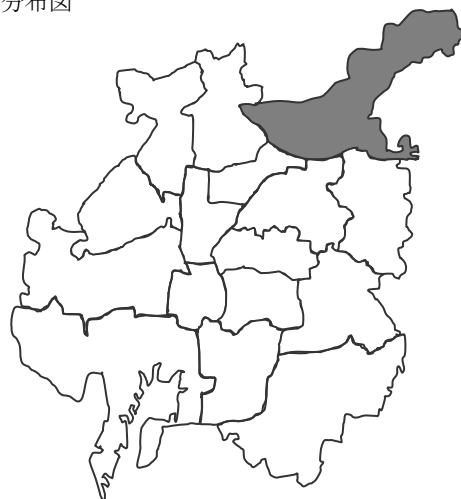
【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。ここは近くの用水路の整備工事や宅地開発のため乾燥化が進み環境は悪化した。本種の生息が懸念される。

【保全上の留意点】

湿地そのものの保護と同時に、その湿地への水源・水脈を断たないように注意すること。

市内分布図

**【関連文献】**

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.
日浦 勇, 1993. セグロイナゴ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.80. 保育社, 大阪.
日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.270, p.531. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 バッタ科>

ハネナガイナゴ *Oxya japonica* (Thunberg)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

稲作の害虫として知られる。1950年代の農薬の大量使用で本種は近似種のコバネイナゴと共に壊滅的打撃を受けたという。その後の農薬の規制でコバネイナゴの勢力は回復したが、本種は回復が遅れているという。その原因や今後の動向に興味もたれる。

【形態】

有翅。全体に緑色だが背面が淡色あるいは褐色～赤褐色のものもいる。複眼から後方にかけて暗褐色条が明瞭。翅は後脚腿節より長い。なお近似種コバネイナゴにも同程度に長い翅を持つ個体があり、同定には両種の翅の長さだけではなく、外部生殖器の構造の比較も必要である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区。

【県内の分布】

三河～尾張地方に点々と分布する。また伊勢湾内の島にも生息している。豊田市、犬山市、豊橋市、南知多町（篠島）、一色町（佐久島）など。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島など。

【世界の分布】

韓国、台湾、中国、東南アジア？。

【生息地の環境／生態的特性】

湿地や水田、また河川沿いのよく湿った草地に見られる。生息地での個体密度は比較的高い。驚くとよく飛ぶ。灯火にも集まる。多くの場合コバネイナゴと混棲する。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は守山区東谷山山麓の湿地。この湿地は宅地造成のため広い範囲が消失した。残った草地も乾燥化が進み生息環境は悪化した。

【保全上の留意点】

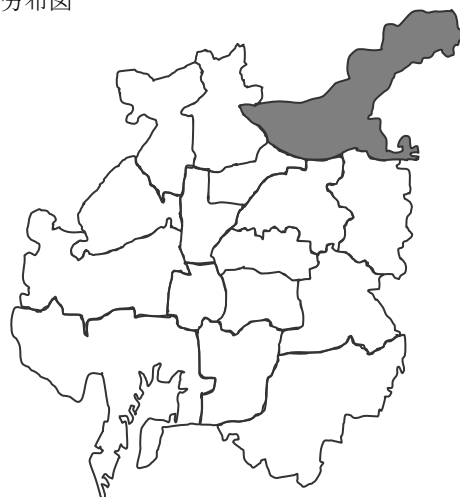
既知産地周辺の湿地・草地はこれ以上の開発・整備を控えること。水脈を確保し乾燥化を防ぐこと。



ハネナガイナゴ

守山区東谷山、1986年8月、岡田正哉 撮影

市内分布図



【関連文献】

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.
 日浦 勇, 1993. ハネナガイナゴ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.81. 保育社, 大阪.
 福原檜男, 1982. 水田に見られる直翅目害虫の見分け方 (1). 植物防疫, 36(11):34-38.
 日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.265, p.529. 北海道大学出版会, 北海道.

(執筆者 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 ナナフシモドキ科>

ナナフシモドキ *Ramulus mikado* (Rehn)**【選定理由】**

樹上性。市内の雑木林が急速に失われつつあり、本種の生息地も減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。単為生殖。触角は短く前脚腿節の半分ほど。体は細い枝状。全体に黒褐色～灰褐色あるいは緑色。複眼間には黒色条がありその両端には角状の突起がある。

体長雌 74～100mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、熱田区、守山区。

【県内の分布】

平地から山地に広く分布する。豊根村、稲武町、豊田市（旭町、足助町、藤岡町）、岡崎市（額田町）、作手村、犬山市、瀬戸市、長久手市、豊橋市、小牧市。

【国内の分布】

本州、四国、九州（対馬を含む）など。

【世界の分布】

韓国、中国。



ナナフシモドキ

瀬戸市大松、1991年8月1日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

樹上性。広葉樹林とその周縁で見られる。局所的に生息密度の高い所がある。食性は広いが、主にサクラ類のほか、カシ・コナラ類を好む。社寺林など比較的小規模な樹林でも生息できる。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の千種区月ヶ丘（住宅地にある）、熱田区熱田神宮は孤立した生息地となっている。本種は無翅で移動能力は乏しく、他所から自発的な移入は望めない。このような分断された生息地での存続は困難と思われる。千種区東山公園での生息も確認された。今回の調査で、守山区東谷山麓（2013.6.3）における本種の生息が確認された。

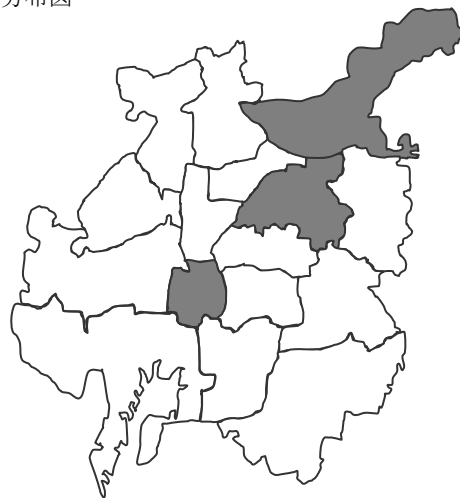
【保全上の留意点】

樹林の伐採を最小限に止めて、マント群落や低木を残すこと。また、更なる土地造成を控えること。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1993. ナナフシモドキ名古屋で採集される. 佳香蝶, 45(176):58.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪.
 日浦 勇, 1993. ナナフシモドキ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.54. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆者 岡田正哉, 加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 トビナナフシ科>

トゲナナフシ *Neohirasea japonica* (de Haan)**【選定理由】**

広葉樹林林床やその周辺の下草の多い湿った環境を好む。市内でのこうした環境は開発や過度の整備のため乾燥化が進み、本種の生存が困難になりつつある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。単為生殖。触角は前脚より長い。体は太い棒状で全体に淡黄褐色～黒褐色で稀に白化の強い個体もある。全身に鋭い刺状突起がある。

体長は雌 57～75mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市、長久手市、東栄町。

【国内の分布】

本州、四国、九州、伊豆諸島、奄美大島、沖縄本島など。

【世界の分布】

台湾北部、中国。



トゲナナフシ

守山区大森、1989年11月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

地上徘徊性。広葉樹林林床やその周縁の下草の多い日陰気味の湿潤な環境を好む。若令の幼虫ほど1ヶ所あたりの生息密度が高い傾向にある。秋期にはひなたに出ている個体がよく見られるようになる。

食性は広く 59 種類以上の広葉樹や草が食植物として知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地の守山区大森周辺は、開発が進み生息環境は狭められつつある。ただし一部には湿潤な雑木林が残されており、また近くには神社や寺の林も残されているので、少なくとも当分の間は本種の存続は可能であろう。

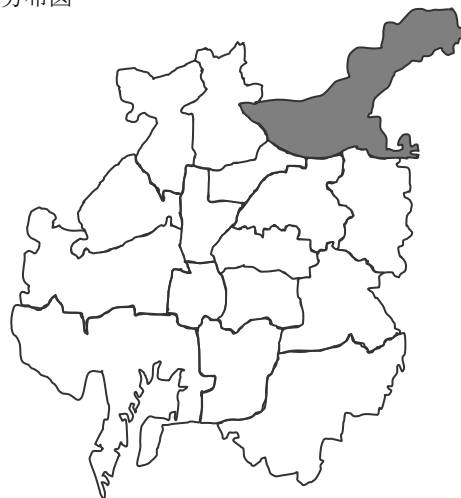
【保全上の留意点】

広葉樹林とその周縁の湿潤なマント群落や草地を保持すること。過度の草刈りや整備は林床やマント群落の乾燥化を進ませるので注意が必要。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1990. トゲナナフシ名古屋市に産す. 佳香蝶, 41(161):59.
 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪市.
 日浦 勇, 1993. トゲナナフシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.55. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10, 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉, 加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 セミ科>

ハルゼミ *Terpnosia vacua* (Olivier)**【選定理由】**

主として平地から丘陵地のマツ林に発生することから、宅地造成により生息地が減少し、それとともに個体数も少なくなっている。また、マツ枯れによる影響も見られる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は雄で26～31mm、雌で22～26mmと雄の方がやや大型である。

体色は黒みが強く、灰白色の鱗毛が密生する。雄の腹部は袋状に細長い、雌では短く、産卵管が突出する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

主として東部丘陵帯であるが、正式な記録は非常に少ない。

【県内の分布】

県内ほぼ全域。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国。



ハルゼミ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主として平地から丘陵地にかけて、マツ林に限って生息する。

県内のセミ類ではもっとも早く、4月下旬頃から出現し、6月上旬頃まで見られる。1頭が鳴き始めると、他の個体も同調して合唱する習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

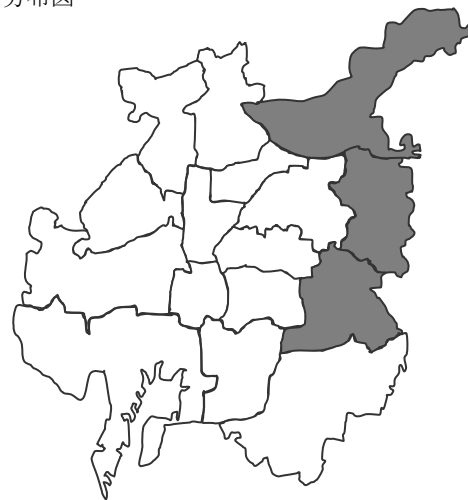
市内東部の丘陵帯が主な生息地であったが、以前と比べかなり減少している。

宅地造成など樹林地の伐採による生息地の消失が大きな減少要因である。

【保全上の留意点】

現存するマツ林の環境維持と、マツ枯れで荒廃した樹林で、マツ類の植樹を進め植生回復に努めることが必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

林 正美, 1990. 日本産セミの分布調査報告 (2). 日本セミの会会報, 9(1-3):1-45.

新修名古屋市史資料編集委員会編, 2008. 第8節昆虫類 5カメムシ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.161-165. 名古屋市.

(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

タイコウチ *Laccotrephes japonensis* Scott**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は30～38mm、体色は濃褐色で、前脚が鎌状を呈し、腿節基部付近に棘を有する。
呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区に記録がある。

【県内の分布】

全域に分布するが、西三河・尾張地方における記録が多い。

【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美大島、徳之島、沖縄島。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島、台湾、マレーシア。



タイコウチ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどに生息するが、河川の淀みにも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

【現在の生息状況／減少の要因】

正式な記録は非常に少なく、近年の確実な生息情報は得られていない。県内でも最近見られる機会が減っている。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

【保全上の留意点】

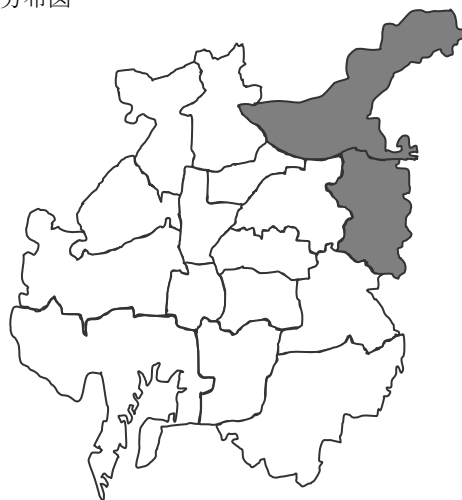
ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <カメムシ目 タイコウチ科>

ミズカマキリ *Ranatra chinensis* Mayr**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長は40～45mm、体は細長く前脚が鎌状を呈し、腿節中央付近に棘を有する。
呼吸管が長く、体長と同じくらいの長さがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区に記録がある。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州）、中国、朝鮮半島。



ミズカマキリ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の豊富なため池、休耕田などの浅い水たまりなどでよく見られるが、増水後の河川敷に形成された一時的な水たまりでも見られる。

鎌状を呈した前脚でヤゴやオタマジャクシなどを捕らえ、体液を吸う。

【現在の生息状況／減少の要因】

タイコウチと同様、平野部では近年確認されることが少なくなっている。市内でも最近の確実な記録が見られない。

ため池の改修や埋め立て、水質悪化などによる生息環境悪化で減少している。

【保全上の留意点】

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

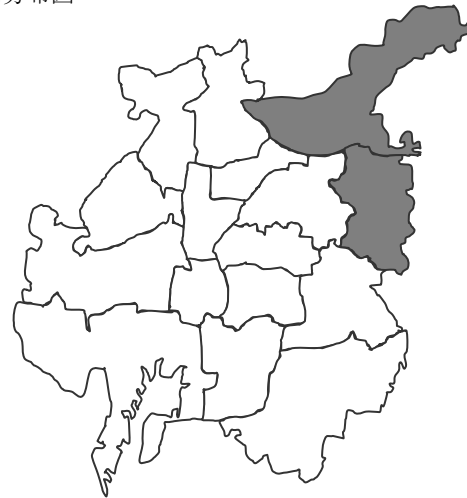
現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

堀 義宏・横井寛昭, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2) 名古屋市の異翅目. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.

(執筆者 矢崎充彦)

市内分布図



昆虫類 <カメムシ目 ツチカメムシ科>

シロヘリツチカメムシ *Canthophorus niveimarginatus* Scott

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

全国的にも産地が限定され、草原環境の減少により、個体数が少なくなっていると考えられる。

市内では名古屋城で確認された古い記録しか存在しなかったが、近年守山区、北区で確認された。ただし分布は局所的である。

【形態】

体長は6～8mmの中型のツチカメムシである。体背面は密に点刻されるが、前胸背中央より前方に平滑部がある。

体色は光沢のある藍色で、側縁が狭く白色を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

中区名古屋城が唯一の記録であったが、近年の調査で、守山区、北区で確認されている。

【県内の分布】

豊田市、日進市、豊明市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

ロシア、カザフスタン、モンゴル、中国、朝鮮半島、インド、ベトナム。



シロヘリツチカメムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

定期的な草刈りで適度に維持管理された河川敷の堤防、農業用ため池の堰堤付近などに生息する。

チガヤやススキなどイネ科植物に半寄生するカナビキソウが寄主植物として知られ、雌成虫が卵塊を保護する習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川・矢田川の河川敷に生息することが確認されたが、分布は局地的。

河川改修、宅地造成などによる草原環境の消失で、本種の生息に適した草地環境が減少している。

【保全上の留意点】

寄主植物であるカナビキソウは、一般に日当たりの良い草地に生育する植物であるため、定期的に草刈りを実施し、明るい草原環境を維持する必要がある。

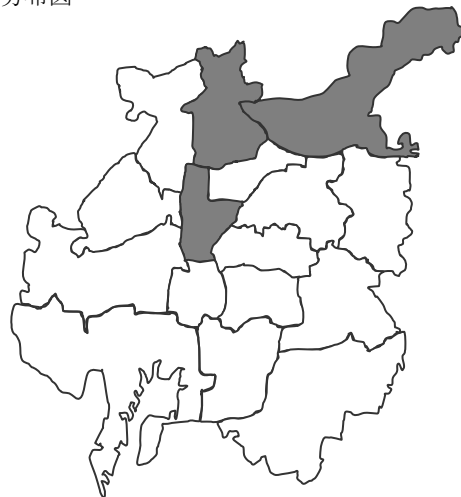
【特記事項】

ツチカメムシ科の種は、死後に脂が出やすく、このため近縁種であるミツボシツチカメムシ *Adomerus triguttulus* (Motschulsky) と誤認されることが非常に多い（ミツボシツチカメムシの小楯板や前翅の白紋が無いように見えるため）。豊田市から多数の記録があるが、矢作川の記録以外はすべて誤同定である。

【引用文献】

荻野欣三・友松和義，1954．名古屋附近のカメムシ目録．36pp．東海生物研究会．

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 オサムシ科>

イグチケブカゴミムシ *Peronomerus auripilis* Bates

カテゴリー

【選定理由】

河川敷や池沼では護岸が進み、湿地状の草地が極端に減っている。このような環境に生息する本種は、近年急速に個体数を減らしている。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 9.0～9.5mm。背面は金色の細毛に覆われ、前胸背板は強く点刻され後角は小刺状。上翅の金属光沢は強く、条溝は深く強い点刻状で、間室は横しわ状に点刻される。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

愛西市、犬山市、岡崎市、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



【生息地の環境／生態的特性】

平地の河川敷や湿地、湿度の高い草地や休耕田に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2010年に行われた守山区の湿地調査では発見できなかった。

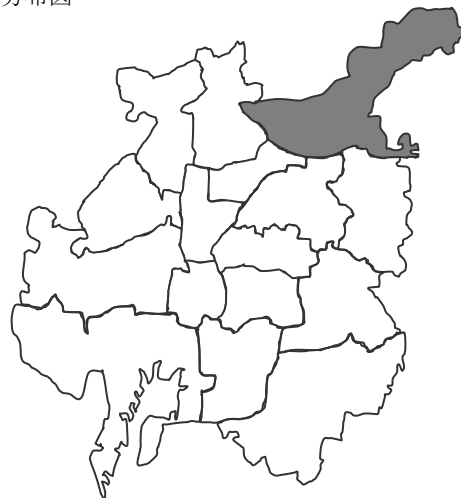
【保全上の留意点】

本種の生息する湿地は流出入水量の変化や植物の遷移により消失しやすい環境である。氾濫原を残すなど、湿地自体を壊さないことが必要である。

【特記事項】

似た環境には、他に同属のクロケブカゴミムシも生息する。

市内分布図



【引用文献】

岩崎 博・蟹江 昇，1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫（上），pp.309-338. 愛知県.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.28,p.155. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

マルチビゲンゴロウ *Leiodytes frontalis* (Sharp)

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

1.5～2.0mm。体型は短卵形で強く膨隆し、特に腹側で顕著。背面は黄赤褐色で強い光沢がある。触覚は基部 3～4 節が黄褐色で先端に向かい暗色になる。上翅は不規則で不明瞭な暗色紋を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

日進市、瀬戸市（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



マルチビゲンゴロウ

守山区、2012年6月9日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

池、沼、放棄水田などの浅瀬に生息する。生息池での個体数は多い。

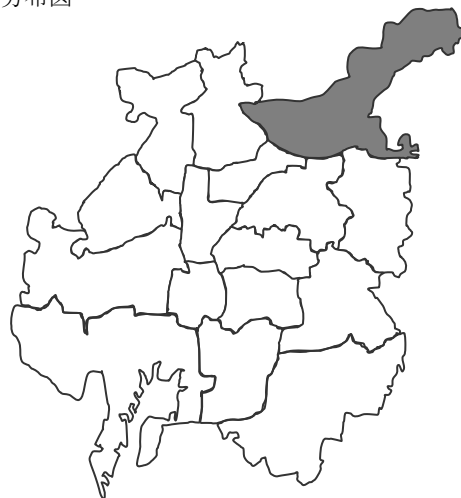
【現在の生息状況／減少の要因】

守山区では、ため池の浅瀬に生息しており安定しているが、池干しや池の改修などが行われれば危険である。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.33,p.186．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

コウベツブゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* Sharp

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

3.4～3.8mm。体型は卵形で背面は密な網状刻印がある。頭部、前胸背板は黄土色。上翅は淡褐色から茶褐色で緑がかかるものもある。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区、守山区（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

弥富市、美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

中国。



コウベツブゲンゴロウ

弥富市上野町、2009年6月19日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、放棄水田などに生息する。産地はやや局所的であるが、庄内川河川敷からは纏まって得られたことがある（森・北山，2002）という。

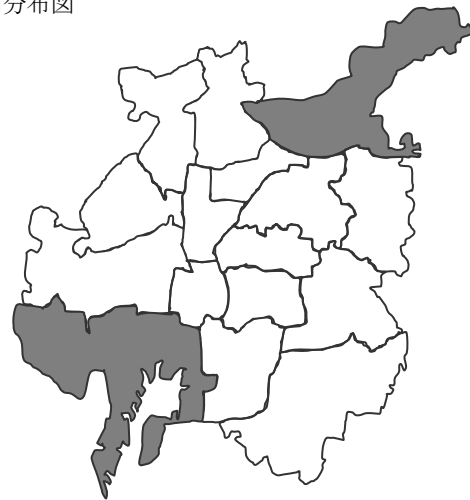
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でもほぼ見ることは難しい。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.34.p.190，保育社，大阪．
森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

キベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* Sharp**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

8.0～10.0mm。体型は長楕円形で、全体に弱い金属光沢を帯びた黒褐色。前胸背板の両側は幅広く黄褐色。上翅も肩部から後方へ徐々に広がる黄褐色の帯紋がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区、港区（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

美浜町（佐藤，1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

朝鮮、中国など。



キベリクロヒメゲンゴロウ

岐阜県恵那市岩村町、2009年4月29日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシなどが生えている比較的大きな池沼や河川敷にできた池などに生息している。やや局地的。

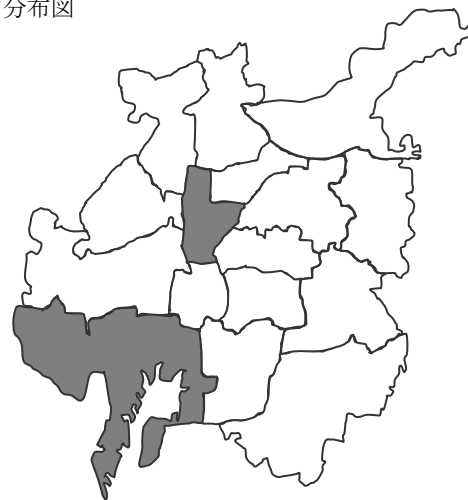
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。市内でも激減している。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.35,p.194．保育社，大阪．

森 正人・北山 昭，2002．改訂版 図説 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

マルヒラタガムシ *Enochrus subsignatus* (Harold)

カテゴリー

【選定理由】

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

4.8～5.0mm。体型は長楕円形で、黄褐色。上翅は密に点刻され、不鮮明な縦の紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、西区、港区、東区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

小牧市（佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

台湾、中国。



マルヒラタガムシ
港区、2011年9月28日、池竹弘旭 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。局地的な分布をする種である。

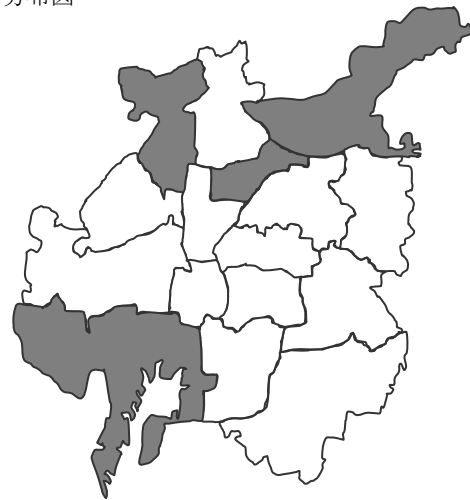
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.39,p.214．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ミズスマシ科>

オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (Modeer)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつて北海道から琉球にかけて普通に見られた種であるが、近年水田が減り小さなため池も無くなり、その他生息に適した水域が開発によって失われ、生息域が極端に少なくなった。

【形態】

7.0～12.0mm。体型は長卵形で黒色。背面はにぶい光沢がある。上翅側縁後方に顕著な突起がある。前胸背板と上翅の側縁は黄褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区、守山区、北区、中村区、庄内川（すべて吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊田市、犬山市、田原市、佐久島。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

サハリン、シベリア、朝鮮半島、中国大陸、ベトナム。



オオミズスマシ

長久手市前熊、1993年9月1日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ある程度の水深があるため池などの場所で、開放水面のある止水域に生息する。

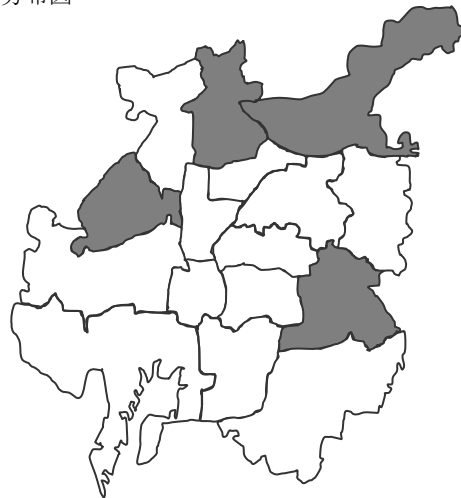
【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。ここ数年、市内での記録は見当たらない。

【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（I）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県．
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝，1985．原色日本甲虫図鑑Ⅱ，pl.37,p.201．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 エンマムシ科>

ヤマトエンマムシ *Hister japonicus* Marseul**【選定理由】**

大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 8.9～11.5mm。上翅の第1～2背条は完全で、第3背条は二分され、第4～5背条は翅端にあり、第6背条は欠如する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山（森・吉鶴・田中，2008）。

【県内の分布】

豊田市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬、伊豆諸島、隠岐。

【世界の分布】

アムール、中国、韓国、ベトナム。



ヤマトエンマムシ

愛知県長久手市、2006年9月25日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

牛糞に集まる。

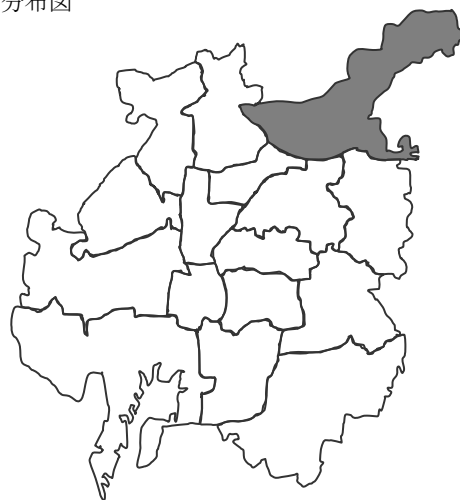
【現在の生息状況／減少の要因】

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。生息環境の減少に影響されているものと思われる。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。

市内分布図

**【引用事項】**

森雄一・吉鶴清則・田中雄一，2008．コウチュウ目．新修名古屋市史資料編 自然，pp.373-410．同目録，pp.102-156．名古屋市．

【関連文献】

大原昌宏，1996．日本産エンマムシ上科概説Ⅳ．甲虫ニュース：7-10．

佐藤正孝ほか，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

上野俊一ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.227．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

ヒラタクワガタ *Serrognathus platymelus pilifer* (Snellen van Vollenhoven)**【選定理由】**

平野部から低山地に生息する大型のクワガタムシである、各地で減少傾向にある。近年の飼育ブームにより本種の外国産を含む多くの飼育個体が野外に放たれており、放虫や逃走個体による遺伝子汚染の恐れも高まっている。

【形態】

体長 20～50mm。大あご 4～23mm。黒色でわずかに紫褐色をおびる。大あごは強力で、先端で急に内側に湾曲する。内歯は第1歯のみが顕著。先端に内方へ向く不明瞭な小歯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

西区、中村区、熱田区、南区、千種区、天白区、守山区（以上、佐藤，1990）。

【県内の分布】

岡崎市、豊橋市、蒲郡市、安城市、新城市、豊川市、豊田市、西尾市、みよし市（以上、佐藤，1990）。

【国内の分布】

本州（東北南部以南）、四国、九州。

【世界の分布】

インドネシア、マレーシア、台湾、中国、ベトナムなど東南アジアに広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

都市部でも、昔からの大径木が残っている林には生息していることがある。一般にウロを好み、数年に渡る寿命をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

里山的環境の消失により、急激に減少しているものと思われる。

【保全上の留意点】

大径木が寺社林や河畔林に多い為、現存する発生木並びに周辺環境の保全が急務であろう。

【特記事項】

地方変異が著しく、日本産は現在 12 亜種に分けられている。飼育放虫や逃走などにより、遺伝子攪乱が心配な種である。

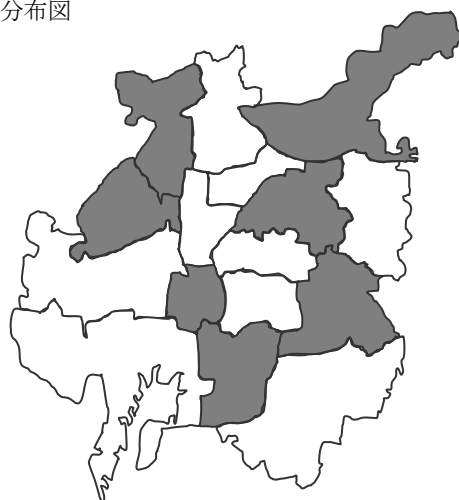
カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ヒラタクワガタ
守山区、1999年8月29日、戸田尚希 撮影

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990．愛知県の甲虫類（Ⅰ）．愛知県の昆虫（上），pp.204-231．愛知県農地林務部自然保護課．

【関連文献】

上野俊一ほか，1985．原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.343．保育社，大阪．

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 コガネムシ科>

コカブトムシ *Eophileurus chinensis chinensis* (Faldermann)

カテゴリー

【選定理由】

良好な林を背景とした肥沃な腐葉土に生息する。それらが減少すると共に本種は著しく少なくなっている。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 18～24mm。黒色でやや光沢がある。雄では頭部に短い角があり、前胸背中央に円形のくぼみがある。雌の角は短く、前胸のくぼみは狭く縦に長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

熱田区（佐藤，1978）、天白区。

【県内の分布】

三河地方の平野部を中心として少なからず見られる。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。琉球列島産は別亜種である。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾に分布しているが、亜種は異なる。



コカブトムシ

【生息地の環境／生態的特性】

照葉樹林を中心として、大きな木を有する林で、樹洞の中に溜まった腐植質の中で幼虫が生育する。

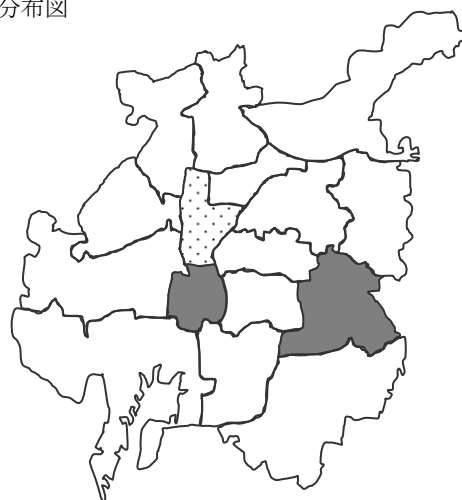
【現在の生息状況／減少の要因】

市街化による照葉樹林の衰退と共に生息できる環境が少なくなった。しかし、辛うじて残された公園、社寺林などに細々と生息している。

【保全上の留意点】

大きな木の保全と、それらの背景となっている照葉樹林の育成を見守ることが必要である。

市内分布図



【引用文献】

佐藤正孝，1978．熱田神宮林の昆虫類．熱田神宮林苑保護委員会調査報告書，pp.93-110．

【関連文献】

高崎保郎，2001．「名古屋北部の蝶類（中野栄三）」と穂積先生．穂積俊文博士記念論文集，pp.358-362．

長谷川道明，2002．豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類．豊橋市自然史博研報，(12):49-53．

（執筆者 佐藤正孝、加筆 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホタル科>

ヒメボタル *Luciola parvula* Kiesenwetter**【選定理由】**

自然度の高い林～草地に発生する陸生のホタルで、市内には広く分布し、名古屋城の外堀の発生地は有名である。しかし生息環境の悪化などによって、生息地も個体数も少なくなっている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体は黒色、胸部は淡赤色で前方に大きな黒紋を有する。体長は9mm位。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区、千種区、天白区など。

【県内の分布】

平野部から丘陵地にかけて分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州の海岸近くから山地にかけて分布する。

【世界の分布】

日本固有種。



ヒメボタル

天白区相生山緑地、2001年6月3日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

雑木林とそれに連なる湿度のある林床と草地があることが好条件ではあるが、その変形でも問題はない。名古屋城では石垣と草地の組み合わせで、餌となるオカチョウジガイの生息できる場所が確保されている。

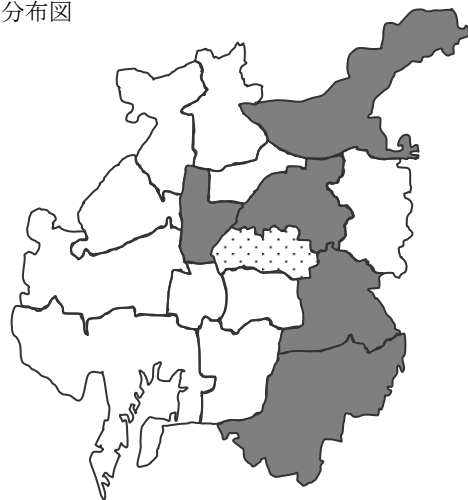
【現在の生息状況／減少の要因】

ほとんどの生息地が失われた中、名古屋城は公園域として生息地は保全されている。天白区は、公園の整備により減少傾向にある。

【保全上の留意点】

雑木林の保全と農薬散布に留意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

- 安藤 尚, 1977. 名古屋市のヒメボタル. 佳香蝶, 29(111):29-31.
 安藤 尚, 1982. 尾張平野のヒメボタル. 佳香蝶, 34(130):34.
 竹内重信, 1985. 名古屋城外堀, ヒメボタル. 86pp. エフエー出版, 名古屋.
 名古屋市環境保全局, 1994. なごやのほたる. 24pp. 名古屋市.

(執筆者 佐藤正孝、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 カッコウムシ科>

ヤマトヒメメダカカッコウムシ *Neohydnius hozumii* Nakane**【選定理由】**

河川敷や沼地、河口部の芦原より得られている。この様な所は河川やため池の改修により整備が進みやすく、本種の生息地も減少していくと思われる。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 5.5mm 内外。頭部は横皺と点刻を密に具える。触角第 9 節はやや幅広く、第 10 節と球悍をつくる。前胸背板は滑らかな正中部を除き、不規則に皺状に点刻され、側瘤の上に斜めの窪みがある。上翅の斑紋には変化があり、前胸の黒いものもある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中川区庄内川 (Nakane, 1981)、守山区。

【県内の分布】

知多市 (穂積, 1990)。

【国内の分布】

本州。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川敷や河口部、沼地などの芦原に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川敷や沼地などの芦原は、整備が進み本種の生息には向かなくなりつつある。

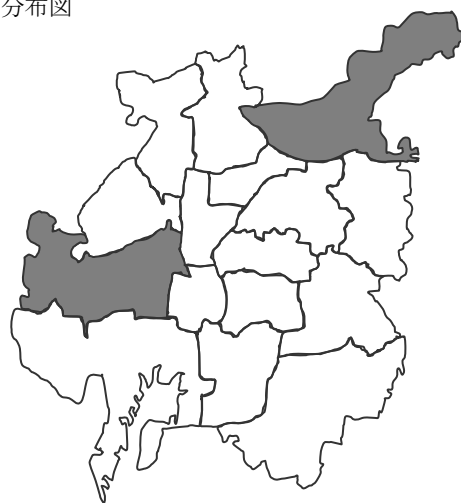
【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

【特記事項】

庄内川等の市内で採れた個体が、新種の記載に使われた。

市内分布図

**【引用文献】**

Nakane, T., 1981. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXIII. *Fragmenta Coleopterologica*, (29/32):125-130.

穂積俊文, 1990. 愛知県の甲虫類 (II). 愛知県の昆虫 (上), pp.232-308. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

黒沢良彦ほか, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III), p.154. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ゴミムシダマシ科>

ヤマトオサムシダマシ *Blaps japonensis* Marseul

カテゴリー

【選定理由】

農家の近代化が進み、家畜も集約され飼育されることから、納屋などで糞束を保管することがなくなり、生息地が減った事により見るができなくなった。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

22.0mm 前後。全体に黒色で細かい点刻に覆われる。触角先端4節は数珠玉状で、赤褐色の短軟毛に覆われる。上翅端部は急に細くなりやや上反する。

【分布の概要】

【市内の分布】

緑区（吉鶴ほか，2008）。

【県内の分布】

豊橋市、新城市、蒲郡市、岡崎市、春日井市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国大陸北部。



ヤマトオサムシダマシ

豊橋市北島町、1994年10月31日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

昔ながらの農家の軒下や納屋の、乾燥した糞くずなどの下にいる。

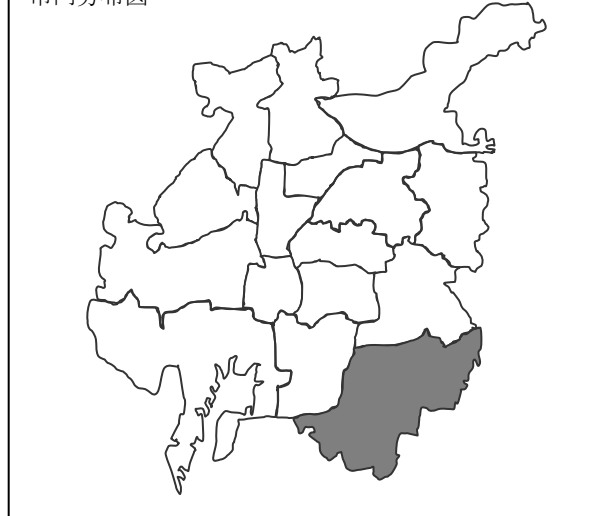
【現在の生息状況／減少の要因】

市内の農家は、そのほとんどが移転や廃業で姿を消し、生息環境自体を見ることは難しくなっている。

【特記事項】

古くからの貿易港の周囲に多いことから、その昔、食料と共に大陸から侵入したとされる。

市内分布図



【引用文献】

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一，2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録，pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之（編），1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅲ. 保育社，大阪.
穂積俊文，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅱ）. 愛知県の昆虫（上），pp.232-308. 愛知県.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 ボクトウガ科>

ハイイロボクトウ *Phragmataecia castaneae* (Hübner)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

幼虫の食草であるヨシの生えている湿地に生息するが、近年全国的にこのような湿地が土地開発等により減少し、生息地が狭められている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

【形態】

開張 30mm～40mm。前後翅ともやや褐色を帯びた灰色で、脈間に暗灰色鱗を散布する。雌の腹部は長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区塚ノ杵池、天白区荒池、港区南陽町庄内川河口などから記録がある。

【県内の分布】

尾張部・三河部の平地から丘陵にかけての低湿地に、広く産地が点在する。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島からヨーロッパまでのユーラシア、アフリカに広域に分布する。



ハイイロボクトウ

港区当知町草野、2009年7月11日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ群落のある河口や河川敷、ため池などに限って見られる。年1化で、成虫は名古屋市では5月下旬から7月に出現し、夜間灯火によく飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名東区塚ノ杵池の産地は猪高緑地として整備され、港区南陽町の庄内川河口のヨシ原は現在のところ安定している。しかし市内のヨシ原は、土地開発や埋め立てにより激減して産地が孤立化し、遺伝子交流が困難となっていて、生息環境が悪化している。

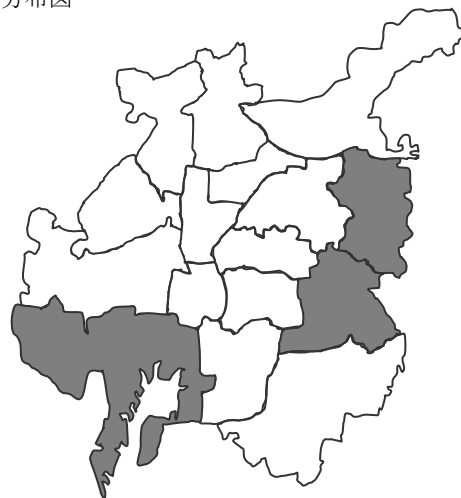
【保全上の留意点】

庄内川の河口部には、大都市としては珍しく広大なヨシ原が残っている。名古屋市内に残るヨシ原は特異な生態系をもち、希少な生物が多く生息している。安易なヨシの刈り取りをしないこと、改修工事の際は、生態系への影響を極力減らすなど、十全な配慮が望まれる。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京。
 杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京。
 岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京。
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県。
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市。
 田中多喜彦、2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シヤクガ科>

クワトゲエダシャク *Apochima excavata* (Dyar)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

クワを主食樹とする本種は、かつては著名なクワの害虫であったが、養蚕業の衰退によるクワ園の激減により全国的に減少している。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に抽出している。

【形態】

開張雄 40～45mm、雌 50～55mm。近縁のオカモトトゲエダシャクに似るが、全体に赤みが弱く、前翅の内横線は中央部で強く外曲し、外横線は中央付近から下縁までの間ゆるやかに内曲する。後翅の外横線はより細い。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区八事、守山区、名東区八前、名東区明德公園などで採集されている。

【県内の分布】

犬山市、豊田市、岡崎市、西尾市、田原市などの記録があるが、近年の記録は少ない。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布。1990年以降は福島、群馬、埼玉・、長野・岐阜・愛知の各県から少数の個体が報告されているに過ぎない。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

早春の蛾で、年1回2月下旬～3月に出現する。成虫は静止する時、前翅を頭の方へ後翅を腹部に沿って折りたたみ、独特の姿勢をとる。

【現在の生息状況／減少の要因】

名東区八前では2014年春に灯火に2頭同時に飛来したが、近くの香流川の河川敷に自生のクワの若木が多く、おそらくここで発生していると考えられる。明德公園もクワの若木が多く、幼虫が見出されている。

過去にリンゴやサクラから幼虫が発見されたが、本種の全国的な急減はクワ園の減少と同調しているので、バラ科の樹木を仮に二次的に食べたとしても、主食樹とは考え難い。

【保全上の留意点】

現状では市内にクワ畑は存在しない。荒地や河川敷などに比較的多い、逸出または自生の若木のクワに発生することが多いので、これらを安易に伐採しないことが望まれる。

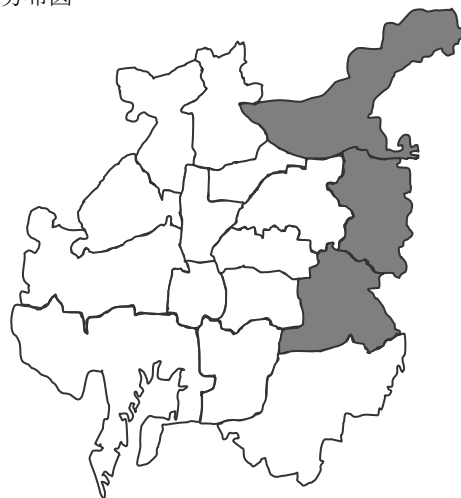
【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 西原かよ子, 2006. クワトゲエダシャクの幼虫と新食草. 誘蛾灯, 184:41-43.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)



市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤママユガ科>

オナガミズアオ *Actias gnoma gnoma* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

大型で尾錠突起の目立つ美しい蛾であるが、近縁のオオミズアオとよく似ていて、同定に注意が必要である。オオミズアオがいろいろな樹木を食べる広食性であるのに対して、本種はハンノキ属 (*Alnus*) を食べる狭食性であり、平地のハンノキ林が今日減少しているため、やや局地的な分布となっている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張雄 80mm～90mm、雌 90mm～100mm。近縁のオオミズアオに似るが、やや小型、雄の翅頂はとがり、外横線は直線的で波状に屈曲しない。後翅の横脈紋は大きく円形に近い。年2化で、春型と夏型が出る。夏型はより白っぽく外横線がやや目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区志段味、千種区平和公園、緑区水底下池で採集されている。

【県内の分布】

県下全域に広く分布する。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。



オナガミズアオ

日進市、2012年5月、田中多喜彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

5月～9月に出現する。平地にも山地にも記録があり、ハンノキ林のある雑木林に生息する。老熟幼虫は樹から降り、落葉の中で繭をつくり蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

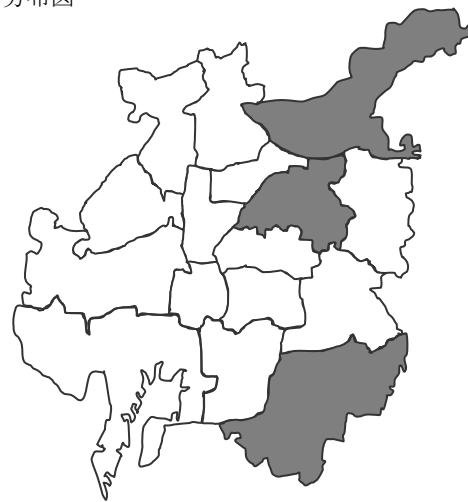
記録された守山区志段味、千種区平和公園南部は里山的景観がわずかに残り、いずれもハンノキ林が近くにある。

本種の減少は、ハンノキ林を含む低湿地が埋め立てや土地開発により減少し、分断されたことによる。

【保全上の留意点】

市東部丘陵にわずかに残るハンノキ林を含む里山的環境は、極力残すこと。過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

市内分布図



【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京.
 杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京.
 岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 イボタガ科>

イボタガ *Brahmaea japonica* Butler**【選定理由】**

大型の日本固有種で、かつては都心部にも生息していたが、近年まったく見られなくなり、郊外でも個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 90mm～95mm。前翅頂は丸みを持ち、地色は多少緑色を帯びた黄褐色。前後翅とも黒褐色の波状線を密布する。前翅の内横線と外横線の間は、翅脈に沿い黒褐色の小円紋を連ねる。雌は前翅の丸みがやや強い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区五軒家町(1975)の古い記録のほか、近年守山区東谷山で複数個体が採集された。

【県内の分布】

県下全域に分布は広い。設楽町裏谷など1000m級の奥三河山地でも得られている。

【国内の分布】

北海道から屋久島まで、全国に分布する。

【世界の分布】

現状では日本の固有種である。



イボタガ
守山区東谷山、2014年4月3日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

平地にも山地にも記録があるが、近年全国的に都市部では減少傾向にあるという。

成虫は年1回3月下旬から4月に出現する。幼虫の食樹はモクセイ科のイボタ・ネズミモチ・キンモクセイ・ヒイラギ・トネリコなどであり、庭園樹として植栽されるものが多い。

1960年頃に都心部の名古屋城内で、特異な形態の幼虫を見た記憶がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市部では雑木林が整備され都市公園化され、イボタやネズミモチが伐採されている。害虫駆除のための薬剤散布等により、本種の継続的な生息が困難な状況になっている。

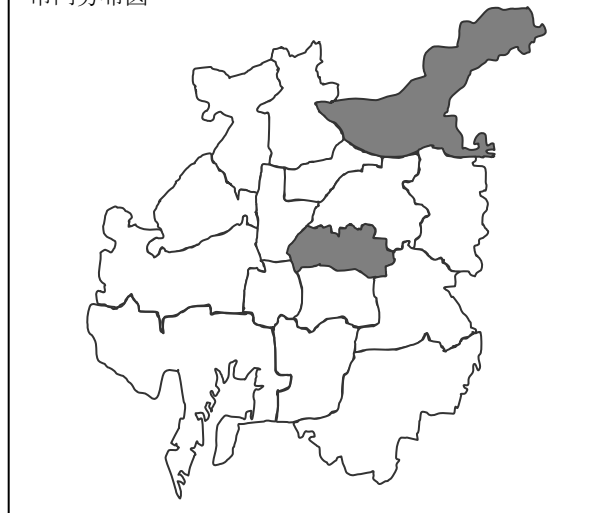
【保全上の留意点】

市内に残存する、イボタが自生するような自然林を極力残すこと、過度な伐採や、害虫防除のための薬剤散布を極力避けることが必要である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヒトリガ科>

ヤネホソバ *Eilema fuscodorsalis* (Matsumura)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつては人家のカヤ葺き屋根などに発生し、幼虫のケムシの毒刺毛で刺されることから人的被害が多かったが、人家の多くが近代建築となり、発生に好適な環境が減少したため各地で激減している。

そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張 22mm～32mm。雌は雄より大型。夏生は小型で翅は橙黄色～淡黄色。春生と秋に出現する個体はやや大きく、前縁部を除く前翅と後翅の前半は灰色を帯びる。前翅の外縁は同属他種より多少丸味をもつ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区の庄内川河口で 2009 年に記録された。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、旧美和町篠田、豊田市青木町、西尾市米津町などで記録がある。

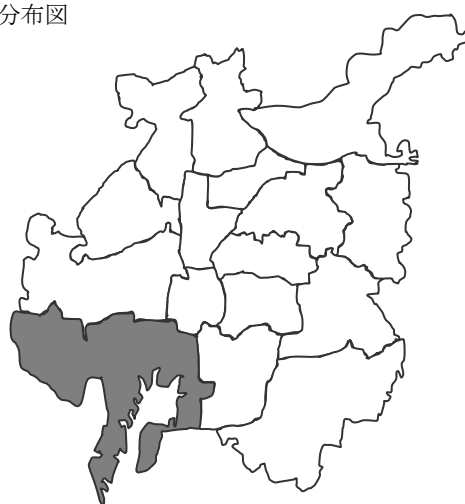
【国内の分布】

東北地方南部以南の本州、四国、九州と奄美大島、西表島。

【世界の分布】

中国。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

幼虫はケムシで体色は地表によく似る。カヤやワラ葺きの屋根、板屋根、屋根瓦、板塀などに生えたコケや地衣類を食べ、大発生すると糸をたらし、人家内に垂下してくる。幼虫の刺毛により皮膚炎を起こす。

幼虫は「ヤネムシ」、「イタヤムシ」、「白皓坊（ジコウボウ）」などと呼ぶ地方がある。本来天然材の屋根によく発生したが、近年は壁や樋の隙間、ベランダ等のコケに発生する例がある。

成虫はふつう年3化、4月下旬～5月中旬、7月、8月下旬～9月中旬に出現する。

【現在の生息状況／減少の要因】

元来平地や里山の人家付近に生息していた種であり、生活様式の近代化に伴って、屋根や板塀などのコケや地衣類の生じる場所が減少したため、生息環境を奪われ、減少している。

【保全上の留意点】

本種は環境省選定の準絶滅危惧種であるが、人家に多発すると人に危害を与える衛生害虫でもあるので、害虫駆除と種の保存という背反する課題を持っている。人家以外にも石垣や古木の樹幹のコケ類からも幼虫が発見されるので、このような環境はできるだけ保全するよう努めるしかない。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.
 田中多喜彦, 2011. 名古屋市庄内川河口の蛾類. 佳香蝶, 63(247):63-67.

(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

キシタアツバ *Hypena claripennis* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平地から低山地の里山的な環境に生息する蛾で、幼虫はイラクサ科のヤブマオを食べる。元来それほど発生量が多い蛾ではないが、近年このような人里的環境が減少し、本種も見られなくなった。

そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張 30mm 内外。前翅は基部から外横線まで黄褐色を帯び、前縁部と外半部は紫灰色を帯びる。後翅は淡黄色、外縁の暗色部は細く近似種に比べ発達しない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

瑞穂区雁道、昭和区檀溪通の古い記録があり、近年守山区東谷山、名東区明德公園でも発見された。

【県内の分布】

県下の平地～低山地に記録されている。

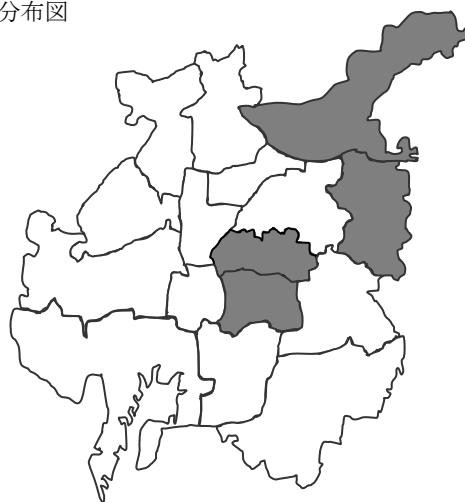
【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

本種は森林環境には見出されず、むしろ人里的な明るい環境を好むが、全国的に産出は局地的である。成虫は 4 月～9 月に出現する。

幼虫はイラクサ科のヤブマオなど *Boehmeria* 属を食べ、前蛹で越冬することが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に記録された瑞穂区や昭和区の産地は都市開発が著しく、ヤブマオなどイラクサの仲間は既になく、本種の発生は見られない。東谷山と明德公園の記録は 2010 年代のものであり、現認可能な発生地と思われる。

都市部のイラクサは、以前は堤防や未整備の空き地に自生していたが、機械による除草が徹底し都市部ではほとんど見られなくなった。ヤブマオの生える明るい雑木林も都市部では激減している。キシタアツバとほぼ同じ食草で発生するアカタテハ(蝶)が、市街地で減少していることと同様に、キシタアツバも都市周辺では生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

残存する里山的環境における雑木林の保全が第一と考えられる。保全する緑地では、林内の衛生・森林害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限に、かつ広い面積の薬剤散布は極力避ける。また下草刈りや剪定を必要以上に行わないようにしたい。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか(編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.

田中 著・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

フシキキシタバ *Catocala separans* Leech

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種はコナラやアベマキを主要な構成樹種とする、低地や丘陵の雑木林に局地的に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している。

【形態】

開張 50～60mm。前翅の色彩斑紋は個体差があり、黒味の強い個体もかなり白化した個体もある。基部は広く黒色を帯び、内横線は著しく太く明瞭、その外方はとくに前半で白味を帯びる。中央部は紫灰色を帯び外縁は黒褐色である。後翅の地色は濃く、他種よりいくぶん橙色を帯びて見える。後翅の中央の黒帯と外縁黒帯はつながらず、翅頂に黄斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園、緑区水広下池で記録され、2013年には名東区八前でも記録された。

【県内の分布】

蒲郡市柏原のほか豊田市各所（大内町、松嶺町、芳友町、古瀬間町等）で記録された。近年日進市でもかなり多くの個体が採集されている。

【国内の分布】

本州、四国、対馬。

【世界の分布】

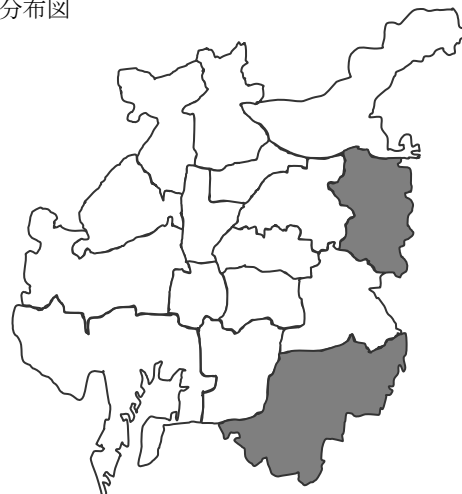
朝鮮、中国、ロシア南東部。

【生息地の環境／生態的特性】

コナラやアベマキの多い雑木林に生息する。名古屋市内では、丘陵緑地の雑木林に、カタカラ類としてコシロシタバ・マメキシタバ・アサマキシタバ・オニベニシタバなどが見られたが、2009年にはじめて本種が市内2箇所

で記録された。食樹はクヌギが知られ、年1化で6月から8月にかけて見られ、コナラやアベマキの樹液に集まる。当地では自然植生としてのクヌギはなく、近縁のアベマキが主食樹であろう。

市内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

近年、市内の平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、樹液を豊富に出すようなコナラやアベマキの大径木が、次々に枯死している。本種などの平地産カタカラ類の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。

【保全上の留意点】

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中 蕃・間野隆裕・蟹江 昇ほか, 2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書 (昆虫編抜粋). 豊田市.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

コシロシタバ *Catocala actaea* Felder et Rogenhofer

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種はクヌギやアベマキを混ざる暖温帯落葉広葉樹林の代表的な蛾であるが、開発により多くの雑木林が消滅し、都市周辺では減少の一途をたどっている。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張50～60mm。前翅は一様に暗色化し、斑紋は明瞭でないが、亜腎状紋は白く明瞭。後翅は黒く大きな白斑があり、縁毛は白い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区平和公園、千種区新池町などの他、近年名東区明徳公園、名東区猪高緑地、名東区塚ノ杵池、天白区相生山緑地、守山区東谷山に記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市、豊田市、岡崎市、旧宝飯郡一ノ宮町など低地・丘陵地の二次林に記録が多い。

【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮、中国、ロシア南東部。

**【生息地の環境／生態的特性】**

クヌギやアベマキを混ざる暖温帯二次林の指標種となる蛾で、7～9月に出現する。発生地では多くの個体が昼間はアベマキなどの樹幹に静止していて、近づくと逃げるが、すぐ近くの樹幹に止まる。幼虫は樹皮に擬態する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては尾張丘陵の各所に雑木林が多くあり、コシロシタバの生息に好適な条件があったと思われるが、今日都市部では市街地に島のように残された緑地に、ようやく命脈を保っている。

【保全上の留意点】

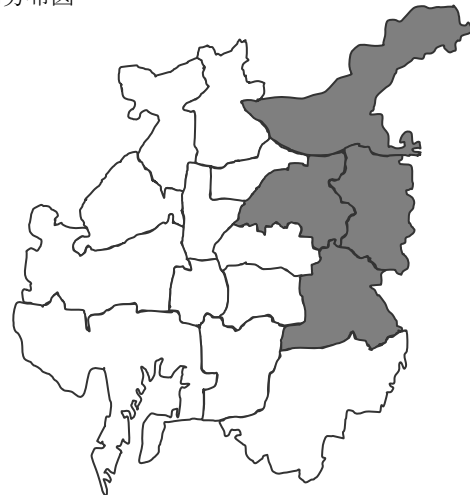
現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市公園としての緑地の場合、往々にして過剰な整備、例えば自然林を伐採し園芸樹種を植えたり、過度の下枝刈りや除草などによる森林環境の単調化が、生物相に大きな影響を与えている例が多い。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京。
 杉 繁郎（編）、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京。
 岸田泰則ほか（編）、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社、東京。
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下）、pp.96-416. 愛知県。
 田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然、pp.422-464. 名古屋市。

（執筆者 田中多喜彦）

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

マダラウスズミケンモン *Hylonycta subornata* (Leech)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

産出は非常に局地的で個体数も少ない、いわゆる希少種である。いままでに確認された記録から見ると、クヌギやアベマキを食樹とする低地～丘陵地の暖温帯二次林の蛾と思われる。このような環境は全国的に開発により減少し、生息条件が悪化している。

【形態】

開張 41～46mm。前翅地色は暗灰褐色、環状紋は大きく、黒環を有し内部に暗色の核がある。前翅全体に白色鱗片を混ざる。後翅は灰黄色、暗色の横線のほか外縁部に暗色部を有する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

2010 年以降に天白区八事裏山、千種区平和公園、名東区明德公園から記録された。

【県内の分布】

1970 年の小原村永太郎（現豊田市）の記録があるのみである。

【国内の分布】

本州（栃木県から兵庫県まで）と九州（宮崎県）に記録があるが、産地は少なくまれ。

【世界の分布】

朝鮮半島。

**【生息地の環境／生態的特性】**

低地～丘陵地のクヌギやアベマキのある雑木林に生息する。千種区平和公園でアベマキから幼虫が確認されている。年 2 化で成虫は 4～5 月と 8～9 月に出現する。秋 10 月に見られる幼虫は蛹で越冬し、春に羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内で記録された 3 地点は、現状では公園緑地区画内にあり、環境は保全されている。しかし本種は、平地・丘陵地の二次林の蛾であり、かつては連続的に生息していたものが、開発により分断され、遺伝子交流も困難になっていて、生存基盤は脆弱である。

【保全上の留意点】

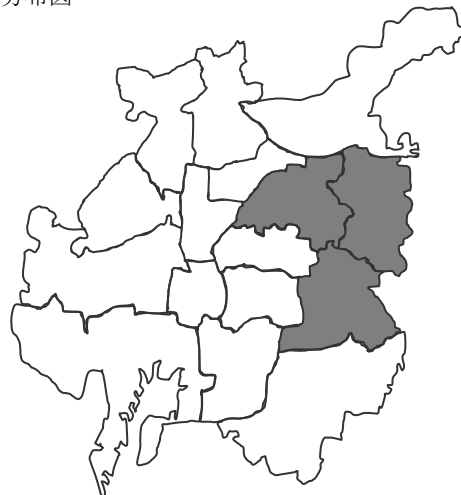
緑地の雑木林の適切な管理・保全が必要である。過剰な整備、例えば園芸樹種に替えたり、過度の下枝刈りや落葉除去等をしない。害虫駆除目的の薬剤散布は必要最小限とし、広範囲の薬剤散布を行わないことも大切である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦, 2011. 名古屋市東部の丘陵 2 箇所 で 9 月に採集されたマダラウスズミケンモン. 佳香蝶, 64(249):11.

(執筆者 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ウスミモンキリガ *Eupsilia contracta* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

ハンノキ林に固有の種で、比較的産地は局限される。近年里山のハンノキ林が開発等で減少しているため、特に関東地方でレッドリストに抽出する県が多い。環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【形態】

開張40～45mm。前翅はやや細長く、地色は褐色～黄褐色。内横線と外横線は淡色で明瞭、環・腎状紋も淡色で縁取られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区平和公園のハンノキ林から記録され、同地で2013年にも発生を確認している。

【県内の分布】

犬山市、豊田市から記録され、近年日進市の天白川上流部に豊産することが知られた。

【国内の分布】

全国に分布するが局地的。

【世界の分布】

朝鮮半島とロシア南東部。



ウスミモンキリガ

千種区平和公園、2013年2月14日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

食樹のハンノキは、池畔や湿地などに自生し、狭食性であるため、本種を確認するためにはハンノキ林を探索する必要がある。

近距離なら灯火に飛来するが、一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。

年1化で10月に羽化、越冬し4月まで見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

ハンノキの群生する湿地は、都市部では多くが土地造成で埋め立てられ激減している。名古屋市内では、緑地として保全された場所に、本種はようやく命脈を保っている状況である。

【保全上の留意点】

現存するため池の池畔や湿地などに自生する、ハンノキ林の保全が必要である。ハンノキ林は他にもオナガミズアオやミドリシジミなどのよく知られた昆虫が発生し、固有の生態系をもっているため、そのまま生態的な生きた博物館として、一定区画を残せば理想的である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社、東京.

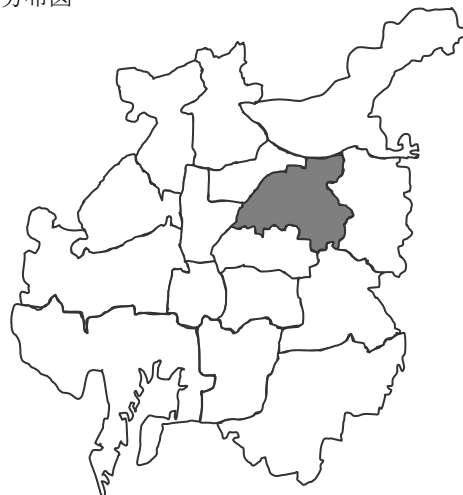
杉 繁郎 (編)、1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社、東京.

岸田泰則ほか (編)、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社、東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ミスジキリガ *Jodia sericea* (Butler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

コナラやアベマキを主要な構成樹種とし、カシ類を交える低地や丘陵の雑木林に生息するが、都市近郊では開発により雑木林が失われたり、小規模化、孤立化したりして生息条件が悪化している

【形態】

開張 32～35mm。前翅は明るい橙赤色、3本の横線は褐色でやや不明瞭。環・腎状紋は淡色で縁取られるが不明瞭。後翅は白色で僅かに橙赤色を帯びる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区平和公園（南部）で、2001年12月14日に1雄が記録されている（福住和也）。

【県内の分布】

犬山市富士、小原村永太郎（現豊田市）、豊田市猿投山、同六所山から記録されている。

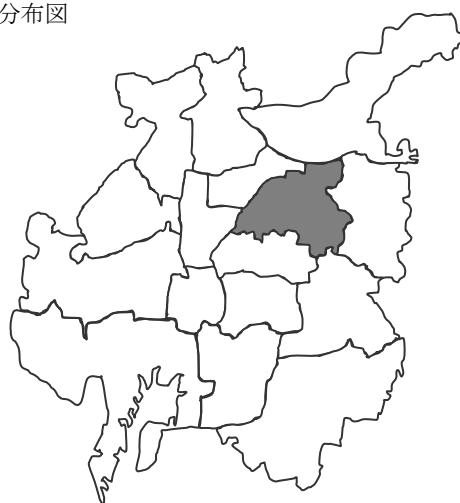
【国内の分布】

全国に分布するが、産出はやや局所的。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、ロシア南東部。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

平地～低山地の二次林の蛾で、幼虫はクヌギ、アラカシ、カシワから得られている。

成虫は一般に灯火採集では得がたく、糖蜜採集で得られる。年1化で10～11月に羽化、越冬し4月まで見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は元来、産出量が少なく、産地も比較的限定されている種である。都市部の雑木林は、開発により分断・縮小され生存条件は悪化している。近年市内では平和公園や猪高緑地などの大規模緑地で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの伝播が早く、本種等アベマキやコナラなどのコナラ属 *Quercus* に依存すると思われる種の生息条件が悪化し、憂慮される事態となっている。

環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。

【保全上の留意点】

現存する雑木林の適切な管理・保全が必要である。特に都市部の緑地公園では自然林を伐採し園芸樹種を植えたりしないこと。また、過度の下枝刈りや除草、害虫駆除目的の薬剤散布等には十分な配慮が必要である。

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.

杉 繁郎 (編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.

岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.

田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

アトジロキリガ *Dioszeghyana mirabilis* (Sugi)**【選定理由】**

愛知県では都市近郊の丘陵の、カシ類をまじえた二次林から記録されているが、このような環境は公園としての整備や土地開発のための改変を受け易く、生息条件が安定していない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張 30～33mm。前翅は淡い茶褐色ないし紫灰色、暗色鱗を密布する。腎状紋は常に暗色に染められる。後翅はほとんど白色で、外縁部が少し淡褐色を帯びる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山に記録がある。

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、春日井市等の愛岐丘陵に記録があり、産地は局限される。

【国内の分布】

北海道、東北、関東から東海地方までと九州の鹿児島県に記録があるが局地的でまれ。

【世界の分布】

朝鮮、ロシア南東部。



アトジロキリガ

守山区東谷山、2003年4月13日、福住和也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

名古屋市内で唯一の産地東谷山は、シイ、カシ類の古木の茂る照葉樹林を残し、コナラ、アベマキなどの生育する二次林が混交する、市内では特別に樹相の豊かなところである。

岐阜県では岐阜市金華山で発見され、近年高山市野麦峠や飛騨市宮川町などの山間地で記録されている。年1回春4月中・下旬に出現し、幼虫はカシ、サクラで飼育が可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県下では東谷山、定光寺、古虎溪（岐阜県）などの観光地を含む愛知・岐阜県境の愛岐丘陵に限って分布しているが個体数は少ない。分布が局限される要因が定かでなく、分析が困難である。

【保全上の留意点】

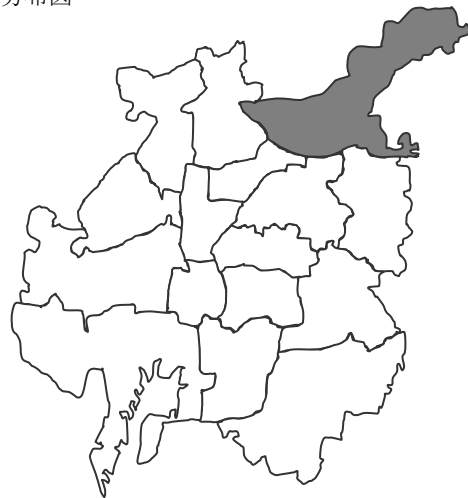
東谷山の27.7haほどが、2010年4月1日に愛知県の自然環境保全地域に指定され開発が制限された。しかしこの周辺の二次林の調査は不十分であり、広い範囲で生態系を温存したい。ナラ枯れ対策等で農薬を使うときには生態系への十分な配慮が必要である。

【関連文献】

- 井上 寛・杉 繁郎ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
 岡田正哉, 1966. アトジロキリガの幼虫. 蛾類通信, 41:371-372.
 岸田泰則ほか (編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社, 東京.
 田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか, 1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.96-416. 愛知県.
 田中多喜彦, 2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.422-464. 名古屋市.

(執筆者 田中多喜彦)

市内分布図



昆虫類 <チョウ目 アゲハチョウ科>

ジャコウアゲハ *Atrophaneura alcinous alcinous* (Klug)

カテゴリー

【選定理由】

黒色のアゲハの中では飛翔が最も緩慢で、食草のウマノスズクサのある路傍や草地をゆるやかに飛ぶ。食草の自生する土手や堤防では、機械による草刈りがあまり頻繁に行われると、ウマノスズクサを絶滅状態にしてしまう懸念がある。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張は春型 80mm 内外、夏型 90～110mm。尾状突起が長く、雄の翅の地色は絹糸状の光沢のある黒色で、後翅の垂外縁に弦月状の赤色斑が特に裏面に顕著に現れる。雌の翅の地色は黄灰色で、後翅垂外縁の黒色部に弦月状の黄色斑が表裏とも明瞭に現れる。体の側面にも赤～黄色毛がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内のほぼ全域で記録されているが、守山区の矢田川堤防と中区名古屋城の堀を除いて、安定した生息地は見られない。

【県内の分布】

県内全域に分布しているが、食草の分布が限られるので、比較的局地的な分布を示す。

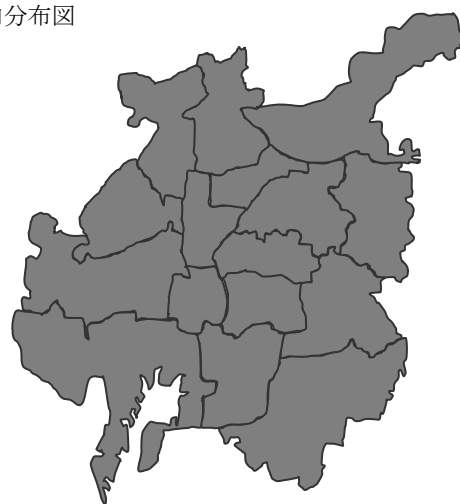
【国内の分布】

秋田県、岩手県以南の本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾、中国。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から年3～4回発生する。食草の近くの草地や林縁、竹林の周囲などを、あまり羽ばたかずゆっくりと飛翔し、ツツジ類、アザミ類などの花で吸蜜する。幼虫は名古屋市内では草地に生えるウマノスズクサ、猿投山などの山間部では樹林下に生えるオオバウマノスズクサを食草とする。成虫はかなり放浪性があり、食草のない市街地に姿をみせることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

土手や堤防、鉄道線路沿いなど、ウマノスズクサの生育地が比較的限られており、それに合わせて本種も集中的に生息している。堤防に繁茂するものは、草刈り機で刈られてしまい時期が悪いと絶滅状態になってしまう。また、多数発生すると多くの幼虫が食草を茎まで食い尽くし、自ら一時的な絶滅状態に陥ることもある。近年守山区の矢田川堤防のウマノスズクサ群落の一部に、放蝶と思われる移入種ホソオチョウが局地的に多発し、食草が同じなので競合している場合がある。

【保全上の留意点】

本種の維持存続のためにウマノスズクサを刈り取らないことが必要である。名古屋城の堀の石垣にはウマノスズクサが多く、刈り取らないので比較的安定した発生を繰り返している。市内でビオトープなどで、フェンスに食草を植栽すれば、侵入した個体によって発生する可能性が高い。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.3,p.12. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 シロチョウ科>

ツマグロキチョウ *Eurema laeta betheseba* (Janson)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	絶滅危惧IB類

【選定理由】

河川敷などに生えるカワラケツメイを食草とする極めて狭食性のチョウで、全国的に減少していて、現在 30 近くの県が本種をレッドリストに抽出している。名古屋市とその周辺では、近年カワラケツメイにごく近縁のアレチケツメイが、帰化植物として造成地に侵入し、その群落到本種の発生が多く見られるので、全国レベルほど逼迫していない。しかしアレチケツメイも高茎雑草やクズの被覆には弱く、本種の安定した発生環境には程遠いと考えられる。

【形態】

開張は夏型 34～36mm、秋型 37～40mm。夏型は小型。雄の地色は黄色、雌は全体に黒色鱗粉があらく散布され淡い灰黄色。秋型は雄雌で大差なく、翅頂はとがり、後翅に褐色条がある。前翅端は常に黒色を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、名東区、熱田区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

県下全域に分布は広い。

【国内の分布】

本州（福島県以南）、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国から西はインドまで、南はオーストラリアにかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

千種区平和公園では、1970 年頃ススキ原の路傍に生えるカワラケツメイに発生していた。今世紀に入り、守山区や名東区の宅地造成地に帰化植物のアレチケツメイが群生するようになり、これに本種が多発したことがある。

年数回の発生、6 月以降夏季に発生する個体（夏型）は雄雌とも食草群落の近くを離れないが、9 月中旬以降の秋型はかなり移動性があり、市街地でも飛翔を見る。成虫越冬した雌は春に食草の芽生えに産卵する。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区や名東区の宅地開発に伴うアレチケツメイの群落は、過去 10 年の間に他の高茎雑草に被覆され減少した。ツマグロキチョウの発生も減少してきている。本種の存続には食草群落の維持が必須条件であり、群落の移動と共に、常に彷徨する運命にある蝶である。

【保全上の留意点】

アレチケツメイやカワラケツメイは、今後も造成地や河川の堤防、河川敷等に残存して行くであろう。河川敷等の一定区画を、ビオトープとして河原の自然状態を温存することも考えられる。

堤防のコンクリート化、除草機による徹底した除草、広範囲の農薬散布は本種の生存を脅かす。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫（下），pp.21-95. 愛知県.
須賀瑛文ほか、2007. 帰化植物アレチケツメイ（*Chamaecrista nictitans*）の新たな分布地. 岐阜県植物研究会誌，23:89-91.
山田芳郎，2008. チョウ目（チョウ類）. 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

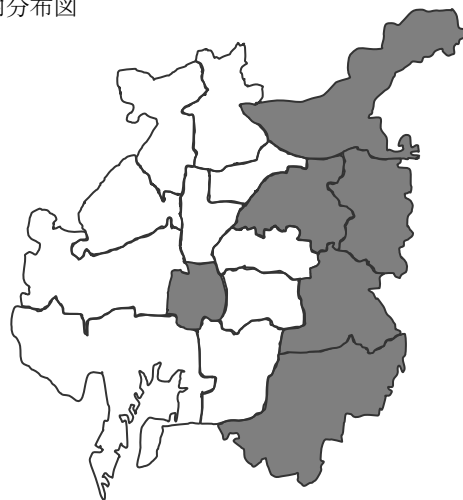
【関連文献】

川副昭人・若林守男，1976. 原色日本蝶類図鑑，pl.14,p.45. 保育社，大阪.
福田晴夫ほか，1982. 原色日本蝶類生態図鑑（I）. 保育社，大阪.
白水 隆，2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社，東京.



ツマグロキチョウ（左夏型雄、右秋型雄）
名古屋市、田中多喜彦 採集

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 シジミチョウ科>

ウラゴマダラシジミ *Artopotes pryeri pryeri* (Murray)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内では守山区の雑木林に局所的に生息する。発生地は主に落葉広葉樹林内の低木層や林縁部である。これらの環境は森林の放置によって林内の中・低木密度が上がり、日照量が低下し生息環境が悪化している。また、開発により雑木林が減少している。

【形態】

開張 36～46mm。雌はやや大型で丸味をおびる。翅の裏面の斑紋は雄雌ほとんど同じで、白色地に亜外縁部に黒点列がある。翅の表面は、外縁に幅広く黒帯があり、内側は青紫色。雌は青色部外側の白色部が増大する傾向がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内では 1978 年に守山区で記録されたが、守山区の各所で 2000 年以降もかなり採集されている。市東部丘陵地にはまだ生息地が存在する可能性がある。

【県内の分布】

犬山市、瀬戸市などの尾張丘陵から三河山地まで広く分布している。

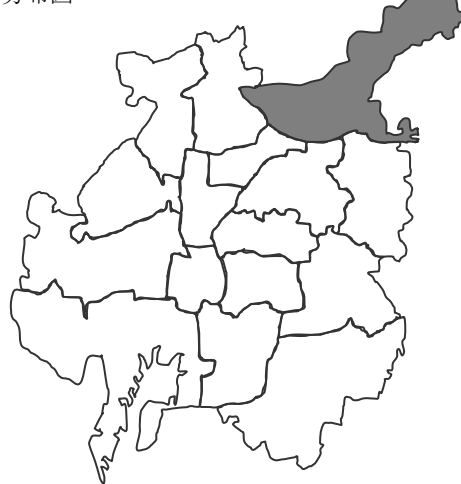
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。九州では山地性となる。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主な生息地は雑木林内の低木層や林縁で、食樹イボタノキの豊富な場所である。溪畔林、湿地内の低木層等に発生することが多い。年 1 回、5 月中・下旬から羽化が始まり 6 月中みられる。ミドリシジミ亜族としては訪花性が強く、イボタノキ、クリなどの花で吸蜜する。雄は午後 1 時ごろから飛び始め、夕方には活発に飛翔し、移動距離は広汎に及ぶ。雌はあまり活発ではないが日中食樹の周辺をゆるやかに飛翔し、イボタノキに産卵する。1 回の産卵数は 4～10 個のことが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区のみで確認されており、局所的であるが、個体数は少なくなかった。隣接する尾張旭市森林公園や瀬戸市の個体群との遺伝子交流もあると思われる。しかし、守山区は現在、宅地造成、道路建設が各所で行われていて雑木林が分断され、公園緑地化のための過剰管理、小規模な雑木林の放任による鬱閉など、生息環境が悪化しているため、生息数が減少している。

【保全上の留意点】

産地の一つ守山区東谷山は、2010 年に愛知県の自然環境保全地域に指定され、環境が保全されているが、守山区の中・西部に点在する雑木林の産地も、可能な限り環境を保全したい。防犯等のための下枝刈りや低木の除去、害虫防除のための広域農薬散布などには配慮が必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.21, p.76. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅲ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ヒオドシチョウ *Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

1970年代には市西部を含め市内各地で記録されているが、今日では東谷山や猪高緑地など、市東部丘陵の数箇所を除いて見ることができない。全国的に大都市周辺での減少傾向が指摘されている。

【形態】

開張66～76mm。雌はやや大型。翅の表面は橙赤色で、外縁に青色の縁取りがある。翅の裏面は基半部が黒褐色で、その外側は茶褐色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、名東区、熱田区、中村区、中川区、東区、昭和区、瑞穂区、天白区、緑区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

平野部から山地まで県下全域に分布は広い。

【国内の分布】

全国。低地から高山帯まで生息域は広い。

【世界の分布】

朝鮮半島、台湾（高地）、中国からヒマラヤを経てヨーロッパ南東部まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

食樹のエノキのある雑木林の林縁に生活する。年1回5月下旬から6月上旬に羽化。しばらく周辺で活動するが、夏季には姿を消す。翌春まで休眠するものとみられる。

休眠前は敏速に飛翔し、アベマキやヤナギ等の樹液を好み、腐果や獣糞にも集まる。時にクリやネズミモチの花で吸蜜する。越冬後はサクラ類、タンポポ類等で吸蜜する。

幼虫は群棲し、エノキの若木を丸裸にすることがある。ヤナギ類にもつく。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市部では、エノキの生える雑木林が減少していることが直接の原因であり、成虫の好む樹液や腐果などの食餌の減少等、好適な生息環境が失われたことも要因であろう。

エノキにつく幼虫群集は、毛虫の群れとして嫌われ、薬剤で駆除されることが多く、都市部での減少に拍車をかけていると思われる。

【保全上の留意点】

現存する緑地公園には現在でも発生地があるので、極力生息環境を維持することが望ましい。河畔林内のエノキ、ヤナギ類も利用されるので、河川敷の改修にも配慮が必要である。緑地における衛生・森林害虫駆除のための農薬散布にはとくに配慮が必要である。

【引用文献】

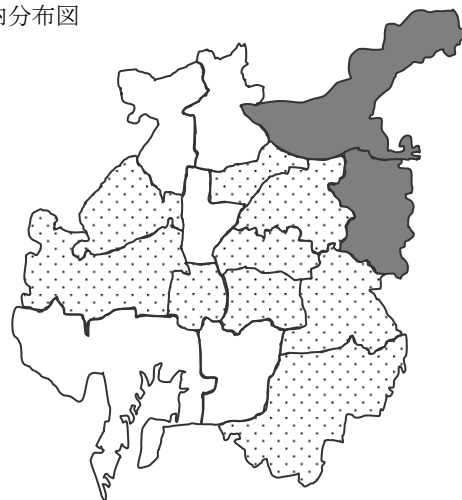
高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫 (下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目 (チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.52, p.241. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.



市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 タテハチョウ科>

ジャノメチョウ *Minois dryas bipunctata* (Motschulsky)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

ススキ草原を標徴するチョウで、戦前の名古屋市内では、鉄道の線路脇の草地などにも生息し、1970年代までは、市東部丘陵の草原に見られた。今日では開発により草原が激減し、千種区東山公園周辺と守山区東谷山周辺に生息が現認できるに過ぎない。

全国的に、特に都市周辺では減少し、東京都では絶滅としている。

【形態】

開張56～66mm。雌は大型。雄は翅の地色が黒褐色で眼状紋は小型、雌は黄褐色で雄より淡色、眼状紋も大型でよく目立つ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

北区(1937年)、昭和区、千種区、天白区、守山区などに記録がある。

【県内の分布】

尾張平野部、知多半島から三河山間部まで分布は広いが、平野部で減少傾向が著しい。

【国内の分布】

全国。草原に限られ局地的。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパまで、ユーラシア北部に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平地の河川敷や堤防の草原、山間地の田畑周辺の草原に多く生息する。年1回7～8月頃出現し、草上をゆるやかに飛翔し、アザミ類、ヒメジョオン等の花で吸蜜する。母蝶は食草に産卵せず、地上に放卵する。幼虫はススキ、ノガリヤス等のイネ科、ショウジョウスゲ等のカヤツリグサ科を食草としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

東山公園周辺では、ようやく目撃できる程度に減少した。東谷山南麓では愛知用水の土手が発生源となっていて、発生は比較的安定している。減少の要因は、市内での草地環境の減少・分断に伴う、生息条件の悪化である。

【保全上の留意点】

本種のような草原性の昆虫は、近年全国的に減少傾向が指摘されている。種の保全には、ススキ草原のような日本の旧来型の草地を、適地に大切に育成し維持することが必要である。

【引用文献】

高橋 昭・葛谷 健・阿江 茂ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫(下), pp.21-95. 愛知県.
山田芳郎, 2008. チョウ目(チョウ類). 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.

【関連文献】

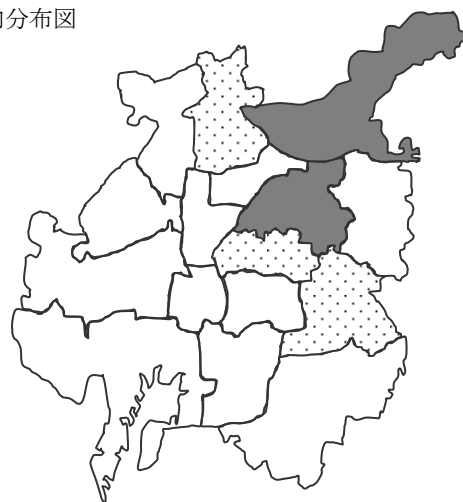
川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, pl.61, p.279. 保育社, 大阪.
福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(IV). 保育社, 大阪.
白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京.



ジャノメチョウ

田中多喜彦 撮影

市内分布図



(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <トンボ目 エゾトンボ科>

ハネビロエゾトンボ *Somatochlora clavata* Oguma**【選定理由】**

1980年代守山区での1成虫採集例が公にされた記録である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

成虫の体長61mm内外。金属緑色の中型種。エゾトンボに似るが雄は副性器、尾部付属器、雌は腹部の黄斑を欠くこと、産卵弁の形状等で区別できる。

幼虫は肢が長く環状斑が目立つ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

成虫は1983年守山区上志段味東谷山南麓で1雄が採集されただけである。同所で過去に複数の幼虫採集記録がある。

【県内の分布】

主に尾張東部丘陵の他東三河にも分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に点在的に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島。



ハネビロエゾトンボ 雄

愛知県長久手市一ノ井、1991年9月23日、高崎保郎 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

幼虫は丘陵林内の清冽な細流や湿地脇の流れに生息する。水中に落葉が留まったやや流れが緩い部分を好む。盛夏干上がるような小流でも雨水により流れが回復すると直後に複数の若令幼虫が見られ耐乾燥性に富むように見受けられる。未熟雄は林内の空間や路上を飛翔するが、エゾトンボも同所的に見られるので採集確認の要がある。成熟雄は林内細流上を採雌飛翔する。

幼虫の大きさは同時に4段階程見られ、幼虫期間は3～4年と考えられる。成虫の出現期は7～9月。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の分布も局所的で個体数も多くない。隣接する丘陵地の長久手市では安定した3ヶ所の生息地がある。市内で唯一1成虫が記録された東谷山南麓では、一時流れで複数の幼虫が認められたこともあり生息していたことは確かであるが、現在では本種の生息ははっきりしない。精査の続行を要する。

【保全上の留意点】

市内では本種の現存は不明であるが、一般的には幼虫の生息に適する緩やかな細流を擁する適度に鬱閉されない二次林の保全である。

【特記事項】

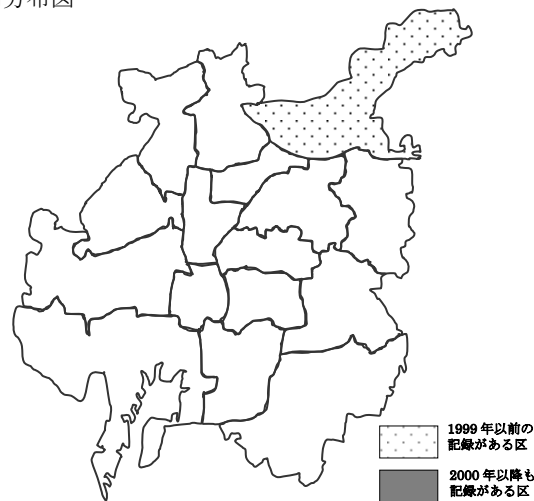
エゾトンボ科（狭義）の幼虫では唯一流れに生息する。

【関連文献】

安藤 尚, 2008. トンボ目. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.350-361. 同 目録, pp.94-98. 名古屋市.

安藤 尚・山本悠紀夫・高崎保郎・相田正人, 1990. 愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上), pp.9-78. 愛知県.

市内分布図



(執筆者 高崎保郎)

昆虫類 <バッタ目 ツユムシ科>

ホソクビツユムシ *Shirakisotima japonica* (Matsumura et Shiraki)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は、山地性の種で、一般に標高 1,000m 以上の山地帯に生息し、7月下旬以降に羽化する。今回の調査で、標高 70m の丘陵地で 6 月上旬に終令幼虫が発見された。本種としては、過去に記録されていない分布域と発生期の特異な個体群と考えられる。

【形態】

翅端までの体長は、雄雌共に 19mm～26mm である。体色は緑色で、前胸背や脚部は茶褐色である。前胸背の茶褐色部が、中央部で細くなっていることが和名の由来であると思われる。また、長い黒褐色の触角の所々に、黄白色部が規則的に見られることも本種の特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

現在の記録は守山区東谷山南側の湿地内だけで、他地域からは未記録である。

【県内の分布】

名古屋市以外では、豊田市稲武町から長野県県境の標高 1,000m 付近に広く分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州、佐渡島、屋久島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の生息地は、東谷山の湿地で、常に湧水があり湿地の半分以上が水に覆われた状態である。本種の幼虫は、湿地内の灌木上に生息している。一般に本種は、山地帯の樹林のマント群落や周辺の草原に生息しており、湿地との関係はないと思われる。東谷山周辺には、本種を含めて県内山間部に分布する種が残存していることがある。この事実は、過去の広い分布域が人間によって分断された事を示していると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市猿投山からも、少数の記録はあるが詳細な生息環境は不詳である。現状では、東谷山が最も標高が低く早い出現期の産地である。また、狭小で孤立した産地であるため、個体数も少ないと思われる。

【保全上の留意点】

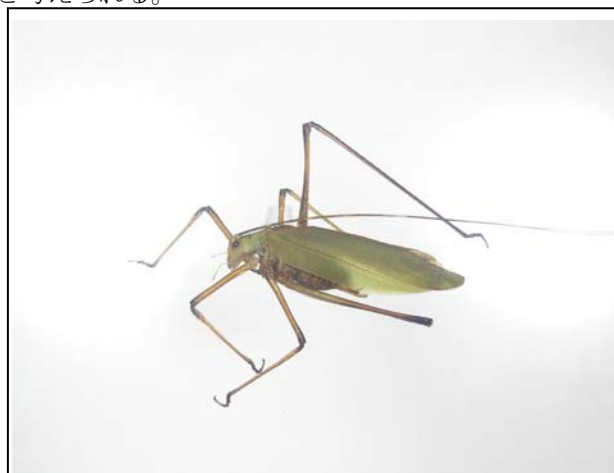
狭小で孤立した産地であるため、現在の環境を変更することなく、かつ、周囲の環境の保全にも努め、個体数の減少がないよう保護するべきである。

【特記事項】

今回の調査では確認できなかったが、山地帯では年一化とされているものの、このような低標高地では年二化の可能性も考えられる。

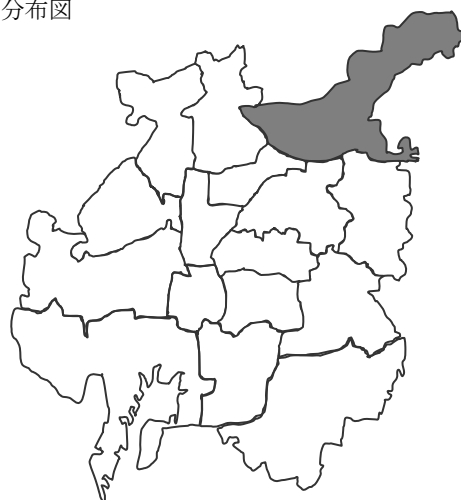
【関連文献】

日本直翅学会（編）、2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.139,p.446-447. 北海道大学出版会, 北海道.



ホソクビツユムシ
守山区東谷山、水野利彦 撮影

市内分布図



(執筆者 水野利彦)

昆虫類 <バッタ目 アリツカコオロギ科>

アリツカコオロギの一種 *Myrmecophilus* sp.**【選定理由】**

アリ類の巣に寄宿する特異な習性の種類。最近市内に生息することが確認されたが、これ以外の記録は無く、さらに調査が必要である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

無翅。体は球形状。褐色。後脚と尾毛は体に比べ目だって大きい。

体長（腹端まで）は2～3mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区（名古屋城）で確認された。

【県内の分布】

記録された生息地は少ない。犬山市、瀬戸市、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国などに。

【世界の分布】

不明。



アリツカコオロギの一種

豊田市宮前町、1997年2月13日、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

ムネアカオオアリやヤマアリ類などの巣の中に棲む。寄宿するアリの群れと一緒に居ることもあるし、アリと離れた凹所などに1頭だけ居ることもある。アリの体を舐めることがあるというが、互いの関係はまだよく解っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城内の調査時に、樹林の林床の朽ち木下のアリの巣内に、1頭ずつ2回目撃できたのみである。

【保全上の留意点】

寄宿先のアリ類の巣を脅かさないこと。アリの種類によっては倒木や朽ち木の中や下側に営巣するため、林床や林縁のこうした環境を奪わないよう過度の清掃や整備は控えること。

【特記事項】

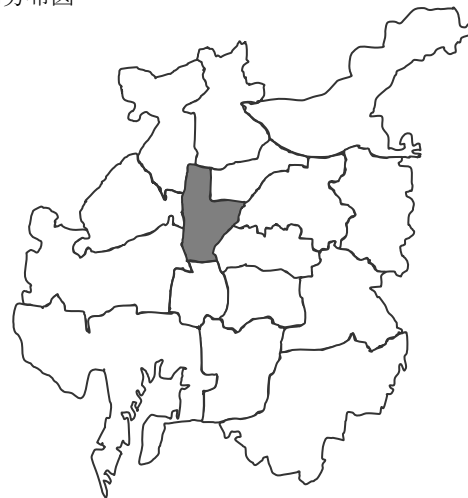
最近の研究により、本種には複数の近似種がいることがわかった。本種の同定には、体表の微毛と共生するアリの確認が必要である。

【関連文献】

岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目 (1). 愛知県の昆虫 (上), pp.87-93. 愛知県.

日本直翅学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑, p.213, p.490. 北海道大学出版会, 北海道.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <ナナフシ目 トビナナフシ科>

タイワントビナナフシ *Sipyloidea sipylus* (Westwood)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

大型のナナフシの一種であるが 1995 年にはじめて名古屋市で発見された。このような顕著な種類がこれまで見つかっていなかったのは不思議である。

はたして以前から生息していたものか、それとも下記のようになんらかの人為的な理由でたまたま定着したものか原因を見極める必要がある。今後の消長を追跡したい。

【形態】

有翅。単為生殖。触角は前脚より長い。体は細長い小枝状。全体に黄褐色～赤褐色で個体により全身に小黑点が明瞭。名古屋市産は淡い黄褐色のものが多い。

体長は雌 71～82mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、中区（名城公園）。

【県内の分布】

豊川市、豊田市。

【国内の分布】

本州、九州、南西諸島などに分布する。

【世界の分布】

台湾、中国、アッサム、ミャンマー、ジャワ、オーストラリアなど。



タイワントビナナフシ

千種区東山公園、1999 年 7 月、岡田正哉 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

林縁のマント群落やそれに続く丈の高い草地などに見られる。道路沿いのススキの茂みにも見られることがある。

産卵は粘着方式で食植物に産み付けることがある。それが植栽される場合‘人為的’に遠方まで運ばれ、そこで孵化することも考えられる。市内で発見された本種の生息が自然的なものか、あるいは街路樹や公園内の植栽植物などに紛れて侵入した偶発的なものか多少の疑念がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

既知産地は千種区東山公園と平和公園、中区の名城公園。

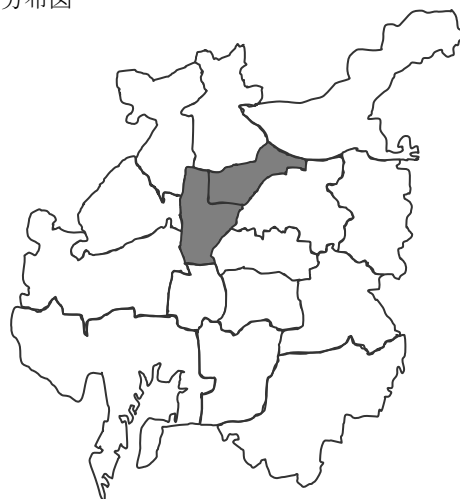
【保全上の留意点】

林縁のマント群落や散策路沿いのススキの茂みなどを過度に刈り込まないこと。食植物であるフジ、ヌルデ、キク、ノイバラ、キイチゴなどを適度に残すこと。

【関連文献】

- 岡田正哉, 1990. 愛知県のナナフシ目. 愛知県の昆虫 (上), pp.95-96. 愛知県.
 岡田正哉, 1996. 名古屋市で採集されたタイワントビナナフシ. 佳香蝶, 48(185):68.
 岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版, 大阪.
 岡田正哉, 2003. 名古屋市のタイワントビナナフシは健在. 佳香蝶, 55(214):30.
 日浦 勇, 1993. タイワントビナナフシ. 原色日本昆虫図鑑 (下), p.55. 保育社, 大阪.
 市川顕彦, 2014. 日本産直翅類のカタログ Ver. 10. 日本直翅学会, 大阪.

市内分布図



(執筆 岡田正哉、加筆 水野利彦)

昆虫類 <カメムシ目 コオイムシ科>

コオイムシ *Appasus japonicus* Vuillefroy**【選定理由】**

県内に広く分布するが、ため池の埋め立てなど止水環境の悪化により、特に平野部では個体数が減少していると考えられる。
市内における正式な記録も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長は17～20mmで、体型は偏平な卵形を呈する。体色は黄褐色～褐色で、前脚は鎌状の捕獲脚となっている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

比較的広く生息していたとされるが、正式な記録はほとんど残っていない。近年の調査で、守山区、昭和区などで確認されている。

【県内の分布】

新城市、豊橋市、豊川市、豊田市、瀬戸市、春日井市、日進市、東海市、常滑市など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。



コオイムシ

矢崎充彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

水草の多いため池、水田地帯の素堀の水路、湿地や休耕田の浅い水たまり、河川のワンドなど比較的様々な環境に生息する。

雌が雄の前翅背面上に卵塊を産み付ける習性がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内における生息地は、産地・個体数とも比較的多いが、市内では水草の豊富なため池などに限られる。

平野部では、水質の悪化のほか、特にため池や湿地などの埋め立てによる生息地そのものの消失が減少要因となっている。

【保全上の留意点】

ヤゴやオタマジャクシなど他の水生動物を餌とする捕食者であるため、これら水生動物が豊富に生息する環境を維持する必要がある。

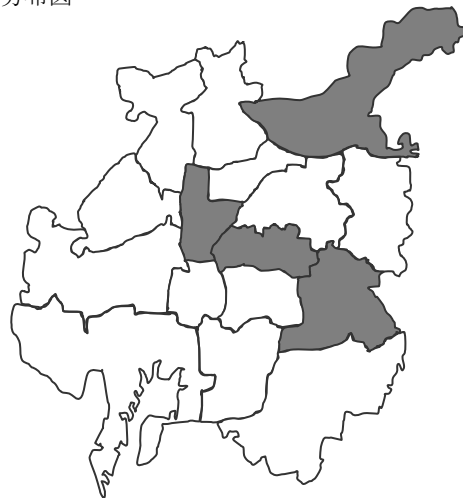
現存するため池の水質悪化を防ぐと共に、水生動物の天敵であるオオクチバス（ブラックバス）などの外来種を駆除することも重要である。

【引用文献】

広正義ほか, 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書. 59pp. 名古屋城管理事務所.

矢崎充彦, 2010. 名古屋市で得られた分布上特記すべき半翅類. 佳香蝶, 62(243):51-55.

市内分布図



(執筆者 矢崎充彦)

昆虫類 <コウチュウ目 ゲンゴロウ科>

トダセスジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* Guéorguiev

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

全国的にも生息域が限定される。名古屋市では1990年に守山区庄内川の河川敷で発見され、その後数年間継続して生息が確認されたが、現在では生息確認ができなくなっている。

【形態】

扁平な長楕円形。頭部～前胸背は褐色から暗褐色、上翅は黒色で、基部と翅端部は黄色、さらに両側と第3間室は黄色で基部と翅端部をつなぐ黄色の縦条を形成する。上翅には7条溝と1亜外縁溝がある。

体長は3.9～4.6mm。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区の庄内川河川敷で確認されている。

【県内の分布】

上記の記録である庄内川河川敷が知られるのみである。

【国内の分布】

本州に分布するが、これまでに確認された生息地は、栃木県、埼玉県、東京都、千葉県、茨城県、愛知県の1都5県のみ。

【世界の分布】

日本固有種。



トダセスジゲンゴロウ

【生息地の環境／生態的特性】

これまでに確認された生息環境はいずれも河川敷にできた水溜りで、湧き水をとまなっていることが多い。生息する水域は一時的で不安定な場所が多く、渇水時に消滅してしまうと、その後確認できなくなる場合が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区庄内川河川敷の生息地では、数年間継続して生息が確認されたが、生息地である水溜りが消滅してからは確認されていない。本種は、生息環境が不安定な水域であることを考慮すると、生息には常に湧き水による水溜りがどこかに存在し、ある程度広範囲におよぶ氾濫原をもつ河川敷が必要であることが予想される。しかし現在の市内の河川敷は主に公園、緑地として整備されており、そのような場所が失われている。

市内分布図



【保全上の留意点】

河川敷、河川の氾濫原は、都市部では数少ない自然環境を残している。河川の整備にあたっては、こうした場所に多くの生物が生息していることを考慮にいて、極力温存するように配慮する必要がある。また、四輪駆動車、モトクロスバイクなどの河川敷への乗り入れは、河川敷に生息する生物の保護の観点から慎むべきである。

【引用文献】

河路掛吾, 1991. 愛知県におけるトダセスジゲンゴロウの記録. 月刊むし, (246): 36.

(執筆者 長谷川道明、加筆 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 マルドロムシ科>

シワムネマルドロムシ *Georissus kurosawai* Nakane**【選定理由】**

砂粒大の甲虫で、水辺の砂の中に棲むと思われる。近年は河川の整備により、生息環境自体が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 1.6mm。頭部前半の顆粒を欠き、前胸背板の顆粒は明瞭でない。上翅には浅い粗大な点刻列があり、間室には顆粒を欠く。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区名古屋大学内で 1948 年 6 月に採れた個体が新種の記載に使われた。

【県内の分布】

上記のみ。

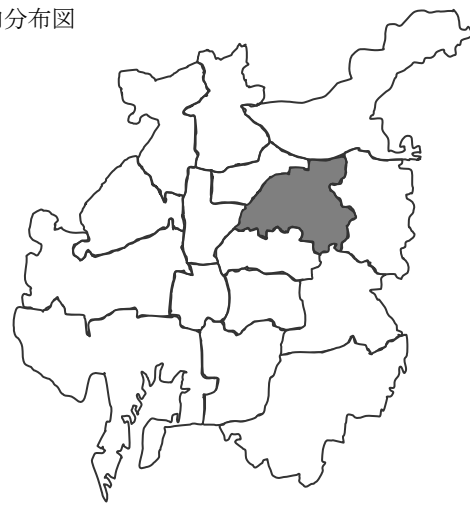
【国内の分布】

北海道、本州。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

河川などの水辺の砂の中から見つかるが、灯火にも飛来することがある。同じグループの種は、水辺の落葉下から見つかった例もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

千種区名古屋大学の鏡池に生息していたと想定されている（佐藤，1982）が、現在この池は環境が悪化し見る事ができない。

【保全上の留意点】

河川敷内の遊水地の設置や、残っている自然の砂地などを保全し、多様性に富んだ水辺環境を作ることが望まれる。

【引用文献】

佐藤正孝，1982. 愛知県から記録された甲虫類. 昆虫と自然, 17(12):8-9.

【関連文献】

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.206. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ホソガムシ科>

ヤマトホソガムシ *Hydrochus japonicus* Sharp**【選定理由】**

富栄養化した池に普通に見られ、用水路にも生息していた。
都市化によりため池などが著しく少なくなったことによる。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長は 2.6～3.1mm。黒褐色で、肢は黄褐色。背面は緑ないし藍色の金属光沢を有する。全体に強い点刻があり、前胸背のくぼみは顕著。上翅の第3、7、9間室が明瞭に隆起する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部丘陵地の残された池に僅かに生息している。

【県内の分布】

平野部の池、沼に見られるが少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、東南アジア。



ヤマトホソガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

池、沼などに生息するが、富栄養化した水域に多いとはいうものの、汚濁水の流入する水質では生活できない。

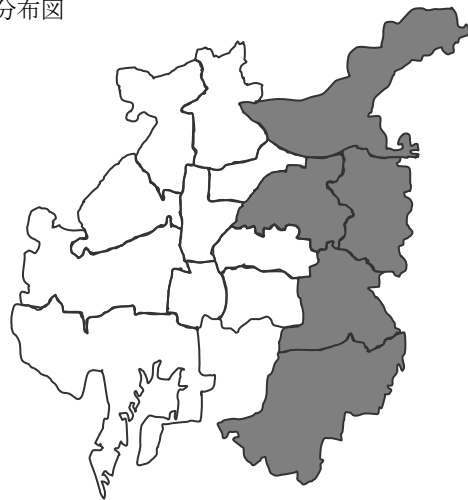
【現在の生息状況／減少の要因】

池の分断化、孤立化している現状であるところへ、汚水の流入によってこの種を始めとする様々な種が生息できなくなっている。

【保全上の留意点】

現在ある池の保全と植物豊かな水辺環境の整備が必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(32):1-7.

(執筆 佐藤正孝)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

ヒメシジミガムシ *Laccobius fragilis* Nakane**【選定理由】**

河川の流水につながる様な水溜りが主な生息地であるが、この様な環境は昨今の河川整備により減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長2.3～2.9mm。上翅には10点刻列をそなえ、間室の点刻は密で点刻列のそれとほぼ同じ。近似のコモンシジミガムシとは、上翅亜外縁の点刻が無いことで分けられる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区松河橋（Nakane, 1966）。

【県内の分布】

豊田市、弥富市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

現状では国外から未知。



ヒメシジミガムシ

【生息地の環境／生態的特性】

河川敷等の流水につながる様な水溜りに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川整備が進み、河川敷の様な更新地の水域を好む種には、大変厳しい状況になってきている。

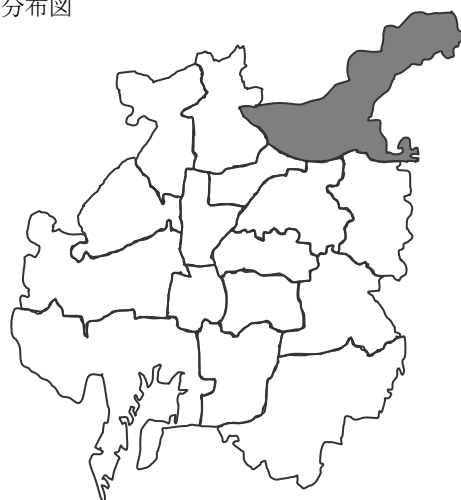
【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。

【特記事項】

守山区松河橋付近の庄内川で1957年に採集された個体が、新種の記載に使われた。

市内分布図

**【引用文献】**

Nakane, T., 1966. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXIII. *Fragmenta Coleopterologica*, (13/15):51-59.

【関連文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県の農地林務部自然保護課.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II), p.214. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

コガムシ *Hydrochara affinis* (Sharp)**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	情報不足

【形態】

16.0～18.0mm。体型は長卵形で、表面には光沢がある。後胸棘突起は先端が尖るがやや鈍り、後基節間で終わる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、北区、港区、庄内川（以上すべて吉鶴ほか、2008）、天白区。

【県内の分布】

愛西市、安城市、稲沢市、犬山市、岡崎市、春日井市、蒲郡市、刈谷市、小牧市、新城市、田原市、津島市、知立市、豊田市、日進市、東浦町、弥富市。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、モンゴル。



コガムシ

守山区中志段味、2010年7月18日、戸田尚希 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。流れのよどんだ小河川でも見つかる。また街灯などの光にも寄ってくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年ではため池の改修等により全国的に激減している。

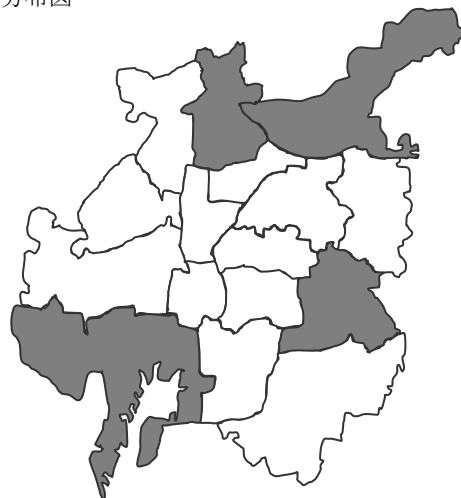
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

東部丘陵には、よく似たエゾコガムシが生息している。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県.
吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一, 2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.102-156. 名古屋市.
戸田尚希, 2010. 愛知県と岐阜県におけるエゾコガムシの記録. 佳香蝶, 62(241):12. 名古屋昆虫同好会.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl.39,p.216. 保育社, 大阪.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 ガムシ科>

コガタガムシ *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* Redtenbacher**【選定理由】**

近年水田が減りため池も護岸改修が進んでいる。また移入外来魚やアメリカザリガニなどの影響で、その他生息に適した水域が失われ、生息域が極端に少なくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

23.0～28.0mm。体型は長卵形で、表面には光沢がある。後胸棘突起は長く、腹部第4節に達する。腹部細毛に覆われる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

緑区、西区（すべて吉鶴ほか、2008）。

【県内の分布】

名古屋市、弥富市。

【国内の分布】

本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

台湾、中国大陆、朝鮮半島、東南アジア、カシミール、インド、スリランカ。



コガタガムシ

弥富市富浜町、2009年6月14日、池田都志也 採集

【生息地の環境／生態的特性】

低地の池、沼、湿地、放棄水田などに生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

気候的なものか、単発的に見つかることがあるが、現在、継続発生は見られない。

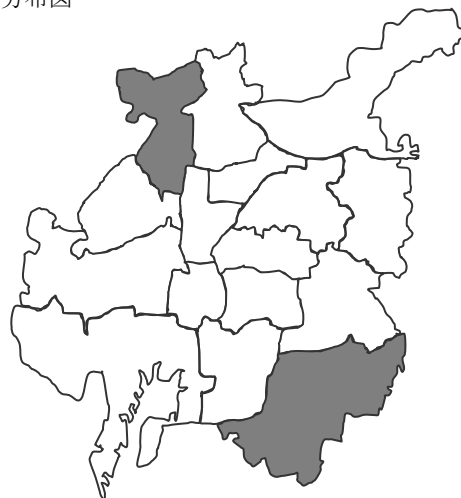
【保全上の留意点】

市内のため池は、流入する水質の悪化や、移入種魚類の放流を食い止めるべきである。

【特記事項】

南方系の種で、琉球ではふつうに見られる。

市内分布図

**【引用文献】**

吉鶴靖則・森 勇一・田中雄一、2008. コウチュウ目. 新修名古屋市史資料編 自然 目録, pp.102-156. 名古屋市.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑Ⅱ, pl.39, p.215. 保育社, 大阪.

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫 (上), pp.204-231. 愛知県.

(執筆者 戸田尚希)

昆虫類 <コウチュウ目 エンマムシ科>

クロエンマムシ *Hister concolor* Lewis**【選定理由】**

近年の記録は途絶えており、大型のエンマムシ類のうち特に平野部に生息する種は、牧場の閉鎖や衛生環境の整備に伴い生息が困難になってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 6.8～9.0mm。黒色で光沢がある。上翅の第1～3背条は完全、第4～6背条は基半部を欠く。前尾節板はやや密に、尾節板はやや密に、尾節板はきわめて密に粗大点刻を装う。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区（佐藤，1990）。

【県内の分布】

旧長久手町、豊田市。

【国内の分布】

北海道、本州。

【世界の分布】

千島列島、中国。

**【生息地の環境／生態的特性】**

やや新しい牛糞などに集まる。

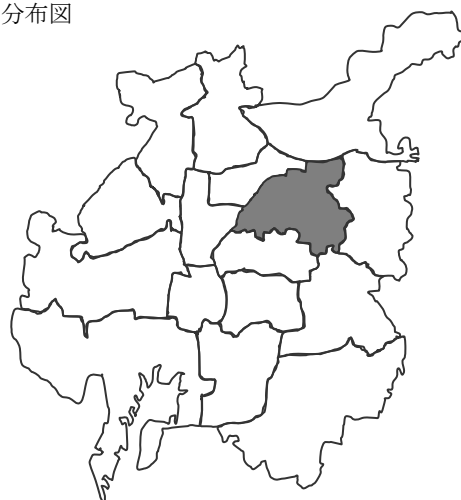
【現在の生息状況／減少の要因】

本種を含め大型のエンマムシ類は、近年いずれも発見が困難になってきている。平野部の衛生環境の整備が、生息環境に影響しているものと思われる。

【保全上の留意点】

ウジ類を捕食するエンマムシ類の減少の背景には、野生動物の減少や衛生環境の整備が、生息環境に影響していると思われる。

市内分布図

**【引用文献】**

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（I）. 愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝（編），1985. 原色日本甲虫図鑑（II），p.227. 保育社，大阪.

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.396. 同県環境部自然環境課.

大原昌宏，1996. 日本産エンマムシ上科概説IV. 甲虫ニュース，(116):7-10.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 クワガタムシ科>

マダラクワガタ *Aesalus asiaticus asiaticus* Lewis**【選定理由】**

良好に湿潤した自然環境において腐朽材を好み生息する本種は、林の乾燥化がすすみ、生息の場が極度に減少してきている。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 4～6mm。体の点刻は大きく円形。毛は鱗片状または棍棒状。大あごは短く、細い毛があり、雄には上方へ大きく湾曲した突起がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区名城公園（大塚，1992）。

【県内の分布】

豊田市、豊根村、設楽町（以上佐藤，1990）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬。

【世界の分布】

現状では国外からは未知。



マダラクワガタ

豊田市稲武町、2007年4月8日、戸田尚希 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は秋に羽化し、そのまま越冬し、翌春より初夏にかけて出現する。幼虫は赤色腐朽した枯木を食べ生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

林の乾燥化により、赤色腐朽した材が減少もしくは乾燥してしまい、幼虫の生育が阻害されているのではないと思われる。

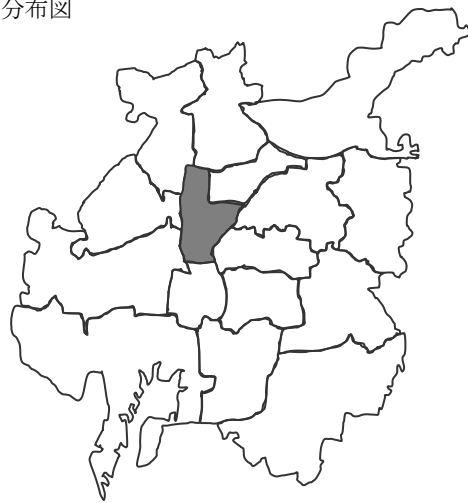
【保全上の留意点】

枯木は処分せず、邪魔にならない場所で腐朽させることが、本種の様な材に依存する甲虫類の保全には欠かせない。

【特記事項】

屋久島には別亜種が生息する。

市内分布図

**【引用文献】**

大塚篤，1992. 名城公園付近の甲虫 18 種. 佳香蝶，44(169):9-10.

佐藤正孝，1990. 愛知県の甲虫類（Ⅰ），愛知県の昆虫（上），pp.204-231. 愛知県農地林務部自然保護課.

【関連文献】

上野俊一ほか，1985. 原色日本甲虫図鑑（Ⅱ），p.334. 保育社，大阪.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <コウチュウ目 ゾウムシ科>

カギアシゾウムシ *Bagous bipunctatus* (Kono)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【選定理由】

カギアシゾウムシ類はいずれも全国的に少ない種で散発的に採集されるにすぎない。その生態については水辺環境に生息する事くらいしか解っていない。水辺環境の悪化は急速に進行しており、生態も分からないいううちに姿を消してしまう事も懸念される。

【形態】

著しい特徴は、後脛節が湾曲しカギ状になっていることである。カギアシゾウムシの他にきわめて近似の数種が隣接する市地域に分布することから、同定には注意が必要である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

名東区猪高緑地（村上，1986）。

【県内の分布】

岡崎市、豊田市、常滑市、弥富市。

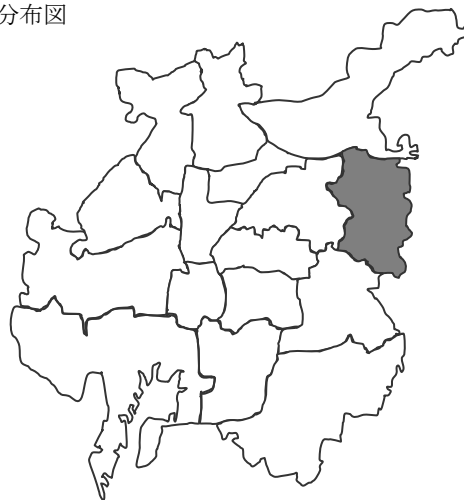
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島。

市内分布図

**【生息地の環境／生態的特性】**

カギアシゾウムシは灯火やスィーピングにより、田畑の周囲で散発的に捕らえられているが、ホストはため池の水草類や岸辺の植物などが推定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

採集例が少なすぎて減少しているかどうか全く解らないが、水辺の環境が悪化している現状では、絶滅の危険性はかなり高いと思われる。

【保全上の留意点】

現状ではまったく偶然に得られるのみであるため基礎的な情報がないが、水辺環境の悪化を止め水域を保全することが望まれる。

【引用文献】

村上哲生，1986. 猪高緑地内の池の魚類と底棲生物. ため池の自然（名古屋ため池の自然研究会会誌），(4):7-8.

【関連文献】

愛知県環境調査センター（編），2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブックあいち 2009― 動物編，p.396. 同県環境部自然環境課.

（執筆者 戸田尚希）

昆虫類 <チョウ目 マダラガ科>

ヤホシホソマダラ *Balataea octomaculata* (Bremer)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

昼飛性の蛾で、明るい草原を飛び花に集まる。本州では湿性草原でよく採集される。今日、草地環境が全国的に減少していて、本種の見られなくなった場所も多い。そのため環境省は、2012年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定している。名古屋市では古い記録があるのみで分布の実態がつかめていない。

【形態】

開張 16～21mm。触角は雄では両櫛歯状、雌では糸状。東海地方の草地にはよく似たキスジホソマダラが同時に産するので、同定には注意が必要である。前翅は暗褐色で、黄色斑はキスジホソマダラに比べ短く明瞭。後翅は半透明で透明部が広く外縁の黒色部は細い。

【分布の概要】

【市内の分布】

1972年6月に天白区平針で、有田豊氏により同時に11雄が記録されたのが唯一の記録。

【県内の分布】

近縁のキスジホソマダラは各所で得られているが、本種は上記の記録のみである。

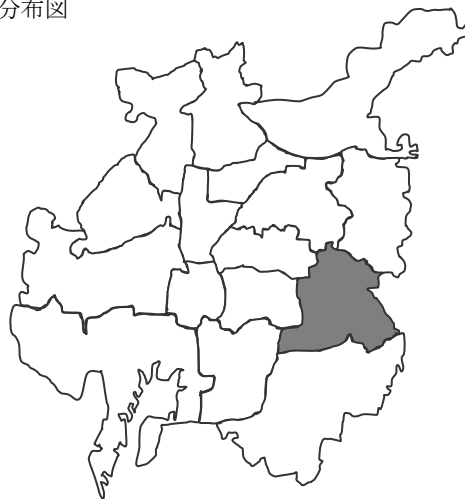
【国内の分布】

全国に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島南部、中国北部、ロシア南東部。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

年1～2化。成虫は6月と8～9月に出現し、昼間活動しハルジョオン・ヨメナなどの花に吸蜜する。明るい草地を好み、本州では特にハッチョウトンボの産するような湿地を好むという。幼虫はササ類やヌマガヤなどイネ科を食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年の古い天白区平針の記録以外になく、現在の生息状況は不明である。岐阜県では2009年に、中津川市苗木・瑞浪市日吉町の2箇所からはじめて記録された。減少の要因は明らかでないが、本種が湿地に生息するとすれば、埋め立て等による湿地の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市周辺の湿地の昼間の積極的な調査が必要である。

【保全上の留意点】

現存する湿地環境の生態系をよく調査し、保全の措置をとる。上部の水脈を保持するとともに、周辺の開発・改修には十全な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫(下), pp.96-416. 愛知県. 笠井初志ほか、2013. 岐阜県蛾類採集記録(2013年編纂). 岐阜県昆虫分布研究会.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京.
杉 繁郎(編), 1987. 日本産蛾類生態図鑑, p.226, pl.109. 講談社, 東京.
岸田泰則ほか(編), 2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社, 東京.

(執筆者 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 スズメガ科>

オオシモフリスズメ *Langia zenzeroides nawai* Rothschild et Jordan

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

日本最大のスズメガであるが、産地は比較的局地的である。東海地方以西の人里的環境に生息する。名古屋市内では2014年に1頭記録されたのみであり、分布実態を把握するには情報不足である。

【形態】

開張 140～160mm。雌は雄よりやや大きい。口吻は退化してごく短い。前翅頂は鋭くとがり、外縁は鋸歯状。胴は太く胸部から腹部にかけ毛状鱗が密生し、肩板に黒条がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山南麓で、2014年春に1雌が採集された。

【県内の分布】

尾張丘陵から三河山間部にかけて広く分布する。近年減少傾向にある。

【国内の分布】

本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島南部、台湾、中国南部、インドシナ半島北部からネパール。

【生息地の環境／生態的特性】

年1化で成虫は春3月下旬～4月に出現する。食樹がサクラ類、ウメ、アンズ、スモモ、モモなどのバラ科の栽培種のため、低山地の人里近くに発生する。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区東谷山はサクラの古木があり、近くに果樹園もあり生息環境は整っている。既知産地の瀬戸市定光寺とは山続きであり、同一個体群に属すると思われる。

減少要因としては、生息地が開発されやすい里山であることのほか、水銀灯などの灯火による分布の攪乱もあるであろう。水銀灯に飛来した本種が、フクロウ類の餌になっているのを目撃したことがある。

【保全上の留意点】

市東部にわずかに残る里山的環境は、サクラや梅林、コナラやアベマキの二次林や小湿地と小流など、名古屋市の動植物相をはぐくむモデルとして、そのまま生態的な生きた博物館として一定区画を残せば理想的である。

【引用文献】

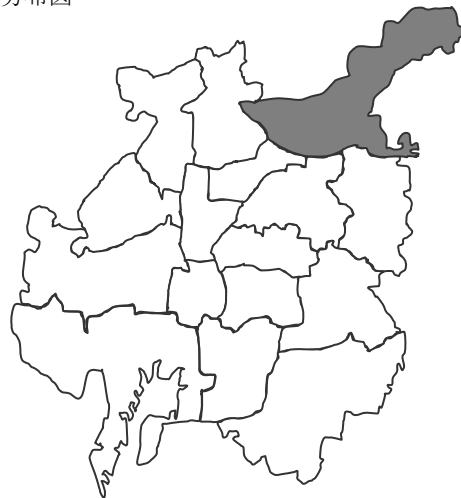
田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社，東京.



市内分布図



(執筆 田中多喜彦)

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

トウカイツマキリアツバ *Tamba roseopurpurea* Sugi

カテゴリー

【選定理由】

岐阜県でアラカシから幼虫が採集されていて、和名のように東海地方のカシ類の多い照葉樹林を標徴する蛾の一つと考えられるが、市内では安定した照葉樹林が少なくなっている。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

開張26～33mm。地色は淡黄褐色、前・後翅とも淡い紫紅色を帯びる。各横線は淡色で明瞭、紫褐色に縁取られる。腎状紋は大きく淡色の環をなし、その中に2個の小暗色点がある。前翅の内横線は直線状で斜走する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山で2006年に記録された。

【県内の分布】

設楽町、新城市、旭町、足助町、額田町、音羽町、豊田市などで採集されている。

【国内の分布】

東海地方以西の本州と四国（高知県）、九州（大分・宮崎県）に記録がある。

【世界の分布】

現状では日本固有種である。



トウカイツマキリアツバ
守山区東谷山、2006年11月10日、田中多喜彦 採集

【生息地の環境／生態的特性】

東海地方の照葉樹林やカシ類を交えた雑木林に生息する。6月から9月にかけて採集されているが、名古屋市東谷山では11月中旬に比較的新鮮な個体が採集されている。化性或発生の周年経過はよく分かっていない。

愛知県では、豊田市では近年新しい産地が多く見つかっている。しかし全国的にみると局地的でまれな種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

産地である東谷山の照葉樹林は、2010年に愛知県の自然環境保全地域に指定された。

都市近郊では、本種の生息するカシ類を含む雑木林が、開発で減少している。

【保全上の留意点】

緑地にナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の照葉樹林は、可能な限り保存することが望ましい。

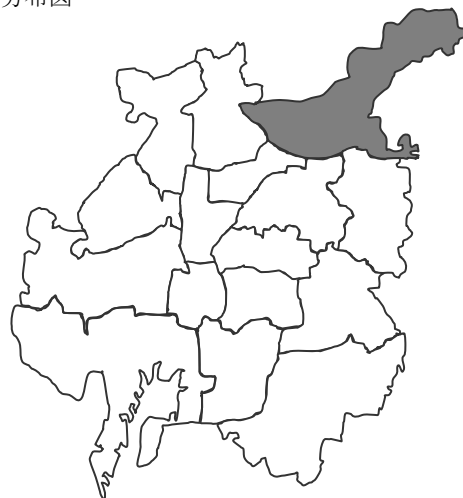
【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中蕃・間野隆裕・蟹江 昇ほか、2005. 豊田市自然環境基礎調査報告書（昆虫編抜粋）. 豊田市.
田中多喜彦、2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編）、2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑 I～IV. 学習研究社，東京.

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

カギモンハナオイアツバ *Cidaripura signata* (Butler)

カテゴリー

【選定理由】

平地から低山地の明るい草地に生息する蛾で、草地環境の衰退に伴い本種も減少傾向にあることから、環境省は、2012 年の第4次レッドリストにおいて、新たに本種を準絶滅危惧に選定した。名古屋市では近年記録されたのみで、分布の実態がつかめていない。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

開張 28～33mm。前翅は淡黄褐色で、淡色の横線は明瞭、外横線と亜外縁線の内側は前縁近くで濃色、横脈紋は濃くかぎ状にL字型に屈曲しよく目立つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園で2009年8月15日に1雄が採集されている（白谷美代子・白谷由紀子）。

【県内の分布】

岡崎市、豊田市などの平地・低山地で記録されている。

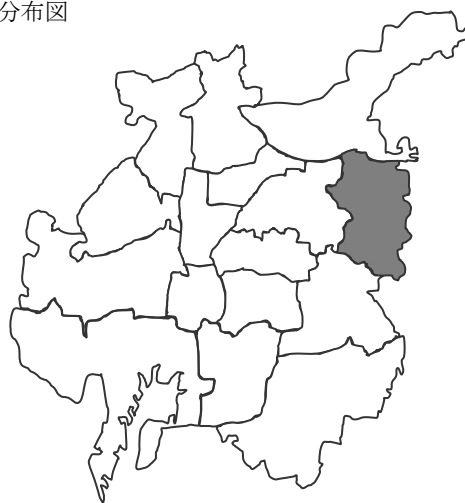
【国内の分布】

本州、四国、九州、屋久島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

明るい雑木林の林縁草地や河川敷などで発生するが、産出量は少ない。群馬県渡良瀬遊水地のような湿性草原のほか、水田周辺の草原、関西では湧水湿地からも発見されている。

5月から10月にかけて年2回発生する。幼虫の寄主植物は未知である。

【現在の生息状況／減少の要因】

明徳公園以外に記録がなく、市全体での現在の生息状況は不明である。全国的な減少の要因は必ずしも明らかでないが、本種が湿性環境に生息するとすれば、埋め立て等による湿地や湿性草原の減少が理由となる。いずれにせよ名古屋市の湿地とその周辺の継続的調査が必要である。

同様な湿性草原に生息する種にアカマエアツバがあり、2010年の補遺版では情報不足に抽出したが、カギモンハナオイアツバが、今回環境省の準絶滅危惧に選定されたので、入れ替えた。

【保全上の留意点】

湿地やため池、河川敷など水系環境は、一見平凡に見えても保護されるべき珍しい種類が生息している場合もあるので、十全な調査を実施するとともに、極力残された自然を生かした造成計画を立てる。また、農薬等の散布には十分な配慮が必要である。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.

【関連文献】

井上 寛・杉 繁郎ほか、1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.

杉 繁郎（編），1987. 日本産蛾類生態図鑑，p.226,pl.109. 講談社，東京.

岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京.

（執筆者 田中多喜彦）

昆虫類 <チョウ目 ヤガ科>

ホソバオビキリガ *Dryobotodes angusta angusta* Sugi

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

全国的に産地が局限され個体数も少ない、いわゆる希少種であるが、過去の採集例から、平地や盆地などの雑木林（二次林）に生息していると思われる。このような都市近郊の二次林は開発の波にさらされ、本種の産地も、人知れず減少の一途をたどっていると思われる。

【形態】

開張30～34mm。前翅は同属他種より幅狭く、灰黒褐色。内・外横線とも二重で、外横線は鋸歯状。環状紋は斜傾する小楕円形で黒色環を有し中心は淡色、腎状紋も淡色で環を持たず外側の輪郭はぼやける。後翅は淡黒褐色で、より濃色の外横線と横脈紋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

名東区明徳公園で2010年11月20日に1雌が採集されている（白谷美代子・白谷由紀子）。

【県内の分布】

日進市岩崎町御嶽山で記録されている。

【国内の分布】

全国に分布するがまれな種。兵庫県黒田庄町（ホロタイプ）の他、岩手県岩泉町、香川県高松市、小豆島、福岡県福岡市、大牟田市などに記録がある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国の一部。

【生息地の環境／生態的特性】

暖温帯落葉樹林の蛾と思われ、比較的植生の安定した二次林に発生する。幼虫期を含め生態が明らかでないが、成虫は年1回晩秋11月から12月にかけて出現し、成虫越冬しない。

灯火に飛来し、糖蜜にも来る。

【現在の生息状況／減少の要因】

産地である名東区明徳公園は、市の緑地としての公園整備がなされている。

最新の学研の日本産蛾類標準図鑑では、「全国的に産出は非常に局所的で得がたい種」とある。元々平地産で産出量が少ない上に、都市近郊の雑木林の開発による消滅が、減少に拍車をかけている。

東海三県では今回が初記録と思われる。

【保全上の留意点】

緑地に松枯れのほか、近年ナラ枯れ被害が急速に進行しているが、安易に広面積に害虫駆除の薬剤散布を行わないことが望ましい。現存する名古屋市内の二次林環境は、可能な限り現状を維持し、保全することが望ましい。

【引用文献】

田中 蕃・間野隆裕・田中多喜彦・有田 豊ほか、1991. 愛知県のガ類. 愛知県の昆虫（下），pp.96-416. 愛知県.
田中多喜彦，2008. チョウ目ガ類. 新修名古屋市史資料編 自然，pp.422-464. 名古屋市.

【関連文献】

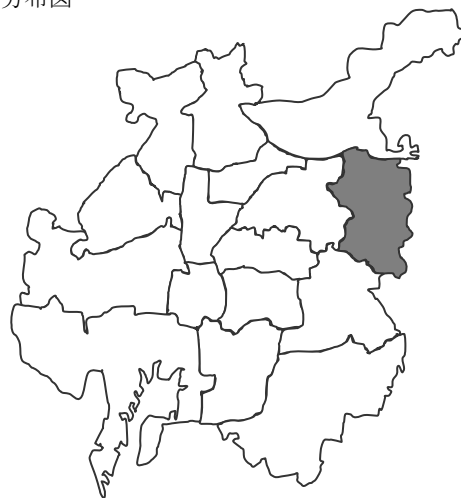
井上 寛・杉 繁郎ほか，1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社，東京.
岸田泰則ほか（編），2011-2013. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ～Ⅳ. 学習研究社，東京



ホソバオビキリガ

日進市御嶽山、2012年11月、田中多喜彦 採集

市内分布図



（執筆者 田中多喜彦）

【国リスト・県リストの新規掲載種について】

今回の見直しによって新たに「国リスト」「県リスト」に掲載された種について、対象種が名古屋市では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. ノシメトンボ *Sympetrum infuscatum* (Selys)

トンボ目 トンボ科 (県：準絶滅危惧)

市内では、ある程度の数が観察され、大きな減少傾向が見られない。

2. ウスバカマキリ *Mantis religiosa* (Linnaeus)

カマキリ目 カマキリ科 (国：情報不足)

市内では、ある程度の数が観察され、大きな減少傾向が見られない。